



# イスラームの聖地エルサレムの形成

岡本, 恵

---

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2013-09-25

(Date of Publication)

2014-09-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第5989号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1005989>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



# 博士論文：イスラームの聖地エルサレムの形成

神戸大学大学院文化科学研究科 博士課程後期

岡本 恵 065D722H

目次 … i

## 序章

1. はじめに … 1
2. 用語の定義 … 1
  - (1) バイト・アルマクディスとアクサー・モスク … 2
  - (2) ファダーイル・バイト・アルマクディス … 4
3. 先行研究とその問題点
  - (1) FBM に関する研究の始まり … 5
  - (2) FBM 起源論 … 6
  - (3) 写本研究 … 11

## 第1章：FBM の定義と内容の概観

1. 本論が考察の対象とする FBM の決定とその一覧 … 15
2. FBM に含まれる伝承のカテゴリー
  - A. エルサレムの歴史（イスラーム以前） … 22
  - B. エルサレムの歴史（イスラーム時代） … 24
  - C. エルサレムの神聖さ、偉大さを伝える伝承 … 26
  - D. エルサレムと終末思想を関連付けた伝承 … 27
  - E. エルサレムでムスリムたちが体験した奇跡譚 … 28
  - F. エルサレムにあるモニュメントとそこへの参詣に関する伝承 … 29
  - G. エルサレムに縁のムスリムたちの伝記 … 32
  - H. クルアーン解釈 … 33
  - I. FBM 以外のファダーイルに由来する要素 … 34

## 第2章：ハディース集型 FBM

1. ハディース集型 FBM の著者と作品の構成
  - (1) FBM-W … 37

- (2) FBM-IM …… 40
  - (3) FQ …… 43
  - (4) MM …… 47
  - (5) FBM-D …… 48
  - (6) FBM-M …… 50
  - (7) FBM-K …… 51
2. ハディース集型 FBM に見られる傾向
- (1) 著者の出身地と法学派 …… 52
  - (2) 各作品の構成と、カテゴリーごとの割合の異同 …… 53
  - (3) 作品の編纂時期とその契機 …… 55

### 第 3 章：マムルーク朝期の FBM

1. エルサレム参詣と FBM 編纂との結びつき（参詣記型 FBM）
- (1) BN …… 57
  - (2) TU …… 60
2. MG-M における新要素の追加（地誌型 FBM）
- (1) MG-M の編纂方針 …… 64
  - (2) MG-M に見られる新しい要素 …… 66
3. 2 つの方向性の融合
- (1) RM …… 68
  - (2) IA …… 71
4. 地誌としての FBM の発展
- (1) UJ における歴史的記述 …… 75
  - (2) UJ における地理記述とウラマー伝 …… 79
5. マムルーク朝期 FBM に見られる傾向
- (1) 著者の出身地と法学派 …… 82
  - (2) アブラハムとモーセの重要視 …… 83

### 第 4 章：オスマン朝時代の FBM

1. 各作品の構成
- (1) Mustaqṣā …… 85
  - (2) Risāla …… 89
  - (3) LUJ …… 95
  - (4) ḤI …… 103

2. オスマン朝期 FBM に見られる傾向
  - (1) 著者の出身地と法学派 …… 106
  - (2) FBM 編纂者とオスマン朝為政者との接近 …… 107
  - (3) スーフイズムの影響 …… 108

## 終章

1. 議論のまとめ …… 111
2. 5/11-12/18 世紀のシリアにおける FBM 編纂者 …… 115
3. FBM 編纂とその変遷からみた「イスラームの聖地」エルサレム
  - (1) 聖地としてのエルサレムの重要性はいつ確立されたか …… 117
  - (2) ユダヤ教・キリスト教的概念の吸収と再構成 …… 119

## 資料編

ムスタファー・ブン・アスアド・ルカイミー *Muṣṭafā b. As'ad al-Luḡaymī al-Dimyāṭī* 著、  
『エルサレムとヘブロンに至宝に関する栄光ある喜びの妙句 *Laṭā'if Uns al-Jalīl fī Taḥā'if al-Quds wa al-Khalīl*』校訂と訳注

- (1) はじめに …… 125
  - (2) ハムシャリーの校訂と参照写本 …… 125
  - (3) ハムシャリーの底本選択の問題点 …… 127
  - (4) ハムシャリーの未参照写本 …… 128
  - (5) 写本間の相互関係 …… 129
  - (6) 本論の校訂における底本選択 …… 129
  - (7) 本論の校訂と訳注における用例 …… 130
- LUJ アラビア語校訂 …… 131
- LUJ 日本語訳注 …… 203

参考文献とその略号 …… 323

## 図表

- 表 1 : FBM 著者・作品一覧 …… 20-21
- 表 2 : ハディース集型 FBM における各伝承の割合 …… 54
- 表 3 : ハディース集型 FBM における各伝承の割合  
(エルサレムに関するファダーイルのみ) …… 55

表 4 : BN と TU における各伝承の割合 …… 63

表 5 : 伝記集人名一覧 …… 99-102

図 1 : FBM 引用・被引用関係 …… 114

## 序章

### 1. はじめに

シリア地域の一都市エルサレムは、古代よりユダヤ教の、そしてキリスト教の聖地として歴史上重要な意義を持つ場所である。一神教の聖地としてのこの概念はイスラームにおいても取り入れられ、イスラームにおいても第3の聖地となっている。エルサレムは17/638年に第2代正統カリフ＝ウマル・ブン・アルハッターブ‘Umar b. al-Khaṭṭāb (r. 13/634-23/644) に征服された後、十字軍による占領という中断を経ながらも、19世紀にユダヤ教徒・キリスト教徒との間でその帰属問題が持ち上がるまで、ムスリムの支配する都市としてあり続けた。

イスラーム世界において、エルサレムに関連して編纂された作品の中に、ファダーイル・バイト・アルマクディス Faḍā’il Bayt al-Maqdis (以下作品ジャンルとしてのファダーイル・バイト・アルマクディスをFBMと略称する。用語の定義については後述) というものがある。これは「ファダーイルの書 kitāb al-faḍā’il」と呼ばれる作品ジャンルの一種である。ファダーイル faḍā’il (s. faḍīla) とはアラビア語で優越性、優秀さ、美点などを意味する言葉であり、転じてある対象の優れた点を列挙し、それを称えることを目的に編纂された作品を表す言葉ともなった。ファダーイルの書が讚美の対象とするものには様々あり、クルアーン、正統カリフをはじめとする個人や、人々の集団、都市や地域、あるいはラマダーン月など特定の月やジハードなどの抽象概念まで多岐にわたっている [Sellheim 1965: EI2 II, “FAḌĪLA”]。

ファダーイルの書について包括的な研究を行ったグルーバー E. A. Gruber はこの分野を、「人物や人物集団についてのファダーイル」、「都市や地域についてのファダーイル」、「クルアーンについてのファダーイル」の大きく3つに分類し、それぞれの成立の起源とその形式・内容について述べた [Gruber 1975]。本稿が考察の対象とするFBMは、このうちの「都市や地域についてのファダーイル」に含まれるものであり、イスラーム第3の聖地エルサレムとその周辺地域を対象としたファダーイルの書である。

本章では、まず本論で用いられるいくつかの用語の定義を明らかにしたうえで、本論における論点の設定を行うとともに、FBMに関する先行研究とそれらの問題点を概観する。

### 2. 用語の定義

本節では、以降の議論のキーワードとなる「バイト・アルマクディス Bayt al-Maqdis」と「アクサー・モスク al-Masjid al-Aqṣā」、また「ファダーイル・バイト・アルマクディス Faḍā’il Bayt al-Maqdis」という用語について、本論における定義を提示する。

## (1) バイト・アルマクディスとアクサー・モスク

「バイト・アルマクディス」とは、字義的には「神聖なる家」という意味であり、「神殿」を意味するアラム語 *bēth maqdesā* を語源としている [Graber 1986: EI2 v, “AL-ḲUDS”]。FBM においてもバイト・アルマクディスとはこの字義通りに、天使や各時代の預言者たちが神に仕えるためにエルサレムに建設した建物を表す言葉である。この「神の家」の設立者としては、天使、アダム、セム、ヤコブと様々な名前が挙げられているが、中でも最も有名なものが、イスラエル時代にダビデ、ソロモンによって建設された神殿である。FBM では、「ソロモンが王位を継いだとき、至高なる神は彼に啓示を下して、『バイト・アルマクディスを建設せよ』と言われた。そこで彼はそれを建設した」 [FQ 76] という一文の中に、イスラエル時代の神殿を「バイト・アルマクディス」と呼び習わす表現を見ることができる。

このダビデとソロモンによる神殿は、ムスリム知識人によって預言者ムハンマドのイスラームの目的地、「遠隔の礼拝堂（アクサー・モスク） *al-Masjid al-Aqṣā*」<sup>1</sup> と同一視されるようになり、言葉の上でも、「バイト・アルマクディス」と「アクサー・モスク」（あるいは「モスク」）の2つがほぼ同じ意味で用いられるようになった。

現在のエルサレムの聖域ハラム・シャリーフ *al-Ḥaram al-Sharif* の南端にはアクサー・モスクと呼ばれる金曜モスクがあるが、FBM における「バイト・アルマクディス／アクサー・モスク」は、必ずしも現代のアクサー・モスクのみを指す用語ではなく、むしろハラム・シャリーフ全体を指すものとして用いられている場合が多い。ここで言うハラム・シャリーフとは、エルサレム旧市街地南東部の隅にある、壁に囲まれた長方形の区画のことである。そこは前述のダビデ・ソロモンの神殿、あるいは王宮が存在した場所であり、「神殿の丘」「モリヤの丘」などと呼ばれて、イスラエル時代より聖域として重要視されていた。その後イスラームもここを聖域と見なす概念を取り入れている。預言者ムハンマドがイスラームしたという「アクサー・モスク」すなわち「バイト・アルマクディス」も、このハラム・シャリーフのことを指していると考えられる。例え LUJ（作品の略号は後述の[表 1] に従う）では、ハラム・シャリーフの西南の壁に開いているガワーニマ門 *Bāb al-Ghawānima* について、「ガワーニマ門は、ガワーニマ地区に通じているため〔その名がつけられたの〕であるが、預言者〔ムハンマド〕の門としても知られている。ミーラージュのハディースにおいて、彼が『太陽と月が傾く門（西の門）からモスクに入った』とされているところである」 [LUJ(C) 25a] と述べており、ムハンマドがイスラームの夜に入った「モスク」のある場所が現在のアクサー・モスクに限定されていないことは明らかである。

ハラム・シャリーフが「バイト・アルマクディス／アクサー・モスク」と呼ばれていたことについては、作品中に次のような記述があることから確認できる。

---

<sup>1</sup> クルアーン 17 章 1 節、「聖なる礼拝堂から、我らがしるしを示すために周囲を祝福した遠隔の礼拝堂まで、夜の間はその僕を連れて旅し給うたお方に栄光あれ」より。

まず初めに知っておくべきは、今人々によく知られているように、アクサー・モスクとはモスクの中央にある金曜モスクのことであるが、実際にはアクサー・モスクというのは、壁で囲まれたところすべての名前なのである、ということである [LUJ(C) 19b]。

ウラマーは、アクサー・モスクとはモスクの壁で囲まれた部分のことを指すということによって一致している。…現在ミンバルのある場所として特に区別されるアクサー・モスクというのは、新しい用法である [HI 115b]。

しかしながら「バイト・アルマクディス／アクサー・モスク」という言葉は、ハラム・シャリーフ内で特に礼拝のための場所とされているところ、すなわち現在のアクサー・モスクを指す言葉としても用いられている。こちらの用法では、FBM 中では特に「バイト・アルマクディスのモスク Masjid Bayt al-Maqdis」という表現、また「アクサー・モスク」という現代と同様の呼称で表現されることが多い。

本論では現代における呼称を参考にし、FBM における「バイト・アルマクディス／アクサー・モスク」という用語が現在のアクサー・モスクの位置にある礼拝所としての建物のみを指す場合には「アクサー・モスク」、壁で囲まれた南東部の区画全体を指す場合には「ハラム・シャリーフ」という言葉を充てる。また伝承がイスラーム以前の出来事を扱ったものであり、「バイト・アルマクディス」をイスラーム的な概念で表すことが不自然な場合、「神殿」等の表現を適宜用いる。

以上のように、「バイト・アルマクディス」という用語は、現在のアクサー・モスクとハラム・シャリーフの両方を表しうるものであるということを確認したが、この用語はもうひとつ、より広い範囲を表す言葉としても用いられる。FBM において「バイト・アルマクディス」とは、ハラム・シャリーフと市街地を合わせた市壁内部の町全体、また市壁外に広がるオリーブ山やシオンの丘を含む地域、さらにはその周辺にある町や村まで含む行政区規模での地域をも表す場合もある。なお、イスラームにおいては「バイト・アルマクディス」と「アクサー・モスク」の2つの言葉はほぼ同じ意味で用いられると前述したが、対象物が町や地域にまで拡大した場合、そのイコール関係は成立しなくなる。「アクサー・モスク」という言葉は、現在のアクサー・モスクやハラム・シャリーフを指すことはあっても、町や地域を表すものとしては用いられず、この意味では「バイト・アルマクディス」という言葉の方だけが使われる。

元来は「神の家」を意味する言葉であった「バイト・アルマクディス」が、それを越えて町や地域といったより広い範囲を表すものとしても用いられるというこの現象は、ラザルス＝ヤフェ Lazarus-Yafeh が指摘する「聖性の拡大」と捉えることができよう。ラザルス＝ヤフェはこれを、「神が住まう」ゆえに聖なる場所であった神殿と、その他の場所との境界が次第に曖



味になり、後には町そのものが聖なる場所となった結果であるとしている [Lazarus-Yafeh 1999: 288]。

本論では、この町や地域を表すものとしての「バイト・アルマクディス」には「エルサレム」という言葉を充てて議論を進める。

## (2) ファダーイル・バイト・アルマクディス

本論の議論のテーマとなる「ファダーイル・バイト・アルマクディス」という用語も、FBM 作品の中では異なるレベルで用いられている。まずこの用語は、「アクサー・モスク／ハラム・シャリーフ／エルサレムの持つ美点」という字義通りの用法の他に、それらを伝える伝承、すなわち FBM の各作品を構成しているひとつひとつの伝承を表すものである。

FBM に取り上げられている伝承は、広い意味ではいずれもこの「ファダーイル・バイト・アルマクディス」であると言えるが、より厳密には、エルサレムとそこにあるものの神聖性・偉大性に関する伝承のことを指している。具体的には、「神はバイト・アルマクディスに対して何々なされた」のような、エルサレムに与えられる神の恩寵、「預言者某はバイト・アルマクディスにおいて何々を行った」のようなイスラーム以前の預言者たちの言行、預言者ムハンマドのエルサレムに関する発言、クルアーンの章句をエルサレムに結び付ける解釈などである。FBM は、とりわけ時代が下るにつれ、エルサレムの歴史や地理的情報、エルサレム在住の著名人の伝記など多様な内容を含むようになるが、ここに挙げた狭義の「ファダーイル・バイト・アルマクディス」が、FBM の核となる部分である。

次に「ファダーイル・バイト・アルマクディス」という用語は、個々の伝承が集められ、1冊の著作として編纂された際に、その書名を表すものとしても用いられる。本稿で取り上げる FBM 作品群の中にも、「ファダーイル・バイト・アルマクディス」、あるいは「バイト・アルマクディス」とほぼ同義の「クドス al-Quds」という単語を用いた「ファダーイル・アルクドス Faḍā'il al-Quds」という書名を持つものがある<sup>2</sup>。

さらにこの用語は、現代の研究者たちがこれらの作品を総括して、ひとつの作品ジャンルを表現する際にも使用されている。管見の限り、「ファダーイル・バイト・アルマクディス」という言葉がそれぞれの作品の中で、ジャンル全体を指すものとして用いられている例は存在せ

---

<sup>2</sup> FBM ではアクサー・モスク／エルサレムのまちを表す言葉として、「バイト・アルマクディス Bayt al-Maqdis」の他に、「バイト・アルムカッダス al-Bayt al-Muqaddas」や「クドス al-Quds」という言葉が挙げられており、これらの言葉の語源はいずれも「清められたところ、多神教や偶像崇拝の罪から逃れている場所」の意味であるとされる [MG-M 190; IA i, 94; LUJ(C) 3b]。「バイト・アルムカッダス」の語は、FBM 作品の中では「バイト・アルマクディス」と同義で用いられている。「クドス」の語については使用に一定の傾向があり、こちらはイスラーム時代以降、とりわけサラーフ・アッディーンによるエルサレム征服以降の歴史を扱った記事において、エルサレムのまちとその周辺地域を表す言葉として用いられる場合がほとんどである。例えば「彼（サラーフ・アッディーン）は（583/1187年）ラジャブ月 15 日日曜日にクドスの西に駐屯し、不信仰をそうあるべきように転覆させた。その日クドスには、ファランジュ全軍の中に 6 万人を越える槍や弓を持った戦士たちがいた」 [LUJ(C) 18a] のような用例であり、「クドス」の語がイスラーム以前の記述の中で用いられたり、アクサー・モスクやハラム・シャリーフを指すものとして用いられたりすることはまれである。

ず、これはあくまで現代的な用法である。本論では、この作品ジャンルとしての「ファダーイル・バイト・アルマクデイス」を、便宜上 FBM と略称する。

### 3. 先行研究とその問題点

#### (1) FBM に関する研究の始まり

ルストレンジ G. Le Strange は、FBM 作品をエルサレムに関する文献の一種として注目し、8/14 世紀から 9/15 世紀にかけて編纂された MG-M、IA、UJ の 3 作品の部分英訳を行った [Le Strange 1887; 1890; 1893]。続いてマシューズ C. Matthews が、8/14 世紀の作品である BN をはじめとする、当時の欧米の大学図書館に所蔵されていた FBM 作品やそれに関連する作品の写本を部分翻刻・英訳して発表した [Matthews 1935; 1936; 1937]。

ルストレンジ、マシューズの研究においては、マムルーク朝時代に編纂された FBM 作品のみが注目されていたが、アーリフ A. al-‘Ārif はそれらに加え、イブン・アルムラჯジャー Musharraf Ibn al-Murajjā (d. c. 450/1058) による FBM-IM 等のより早い時代に編纂された作品の写本をも参照して、エルサレムに関する通時代的な歴史研究を行っている [al-‘Ārif 1961]<sup>3</sup>。こうしたより早い時代の作品に注目する動きは、1970 年にアッカー（アクレ）のアフマド・アルジャッザール・モスク Masjid Aḥmad al-Jazzār の図書室から、現存する最古の FBM 作品である、ワースィティー Abū Bakr b. Aḥmad al-Wāsiṭī (d. 5/11C) による FBM-W の写本が発見されたことで明確なものとなった。FBM-W の写本は 1979 年にハッソン I. Hasson によって校訂され、また 1985 年にはリヴネ＝カフリ O. Livne-Kafri が FBM-IM の校訂を含む研究を行うに至って、5/11 世紀に編纂された FBM 作品にも研究者の注目が集まるようになり、そうした作品をも含めた FBM というジャンルそれ自体を扱った研究が始まった。

FBM に関する以降の研究は大きく 2 つの流れに分けることができ、そのひとつが FBM 起源論、もうひとつは FBM 写本研究である。以下の 2 節では、これら 2 つの流れについて概観する。

---

<sup>3</sup> 1950 年代から 60 年代にかけての欧米の研究者による FBM のアプローチは、FBM 作品そのものを研究対象としたものではなく、FBM をエルサレムの聖性を伝える歴史史料のひとつとして用い、初期イスラーム、とりわけウマイヤ朝時代に、イスラームの聖地としてのエルサレムがどのように確立したのかを論じるというものであった。グラバール O. Grabar、ゴイテイン S. Goitein、ブッセ H. Busse、ティバウィー A. Tibawi らが、岩のドームを中心とするハラム・シャリーフ建設の過程とその背景を論じる研究の中で、FBM について言及している [Grabar 1959; Goitein 1966; Busse 1968; Tibawi 1968]。以降も FBM を史料として用いてハラム・シャリーフの形成を論じる研究は続き、そうしたものの中にはラバト N. Rabbat やエルアド A. Elad による研究がある [Rabbat 1993; Elad 1999b]。

## (2) FBM 起源論

前述のグルーバーのファダーイル研究に拠れば、都市や地域についてのファダーイルの起源はアラブの征服活動の中に求められる。アラブは預言者ムハンマドの死後極めて短期間のうちに、北アフリカから中央アジアに至る広大な地域を征服するに至った。そうした征服活動の中で、バスラ、クーファ、フスタートといった軍営都市が次々と建設され、アラブは家族あるいは自らが所属する部族ごとそれらの軍営都市に入植していった。その結果そこでは様々な出自の人々が混在して住むようになったが、その住民の要素が異なっていればいるほど、共通の住まいであるところのその都市を、最も近い共通点として認識する必要性はより強いものとなっていった。すなわちこうした新しい都市が、従来の部族というつながりを越える新しい連帯感を提供する基盤となったのである。グルーバーはこの一例として、タバリー **Muḥammad b. Jarīr al-Ṭabarī** (d. 310/923) の『歴史』に見られる「何々（都市名）の民」という用法を挙げている。グルーバーは、「クーファの民 **ahl Kūfa**」という表現はクーファ創設年の 17/638 年から早くも使われ、また『歴史』の中でも頻繁に使用されている一方で、クライシュ族の町であるメッカの場合は「メッカの民 **ahl Makka**」という表現はほとんど見られず、「メッカの民」という言葉が「メッカの町の住人」という意味で用いられるようになるのは 36/656 年のことであると述べている [Gruber 1975: 49]。

さらにグルーバーは、こうした都市や地域のファダーイルはその後、第 3 代正統カリフ・ウスマーン・ブン・アッファーン **‘Uthmān b. ‘Affān** (r. 23/644-35/656) の殺害に始まるアラブの内乱の時期に、大きく発展を遂げたとしている。すなわちこの時期にはムスリムのウンマが、クーファを拠点とするアリー・ブン・アビー・ターリブ **‘Alī b. Abī Ṭālib** (r. 35/656-40/661)、ダマスカスを中心としたシリア地域を拠点としたムアウウィヤ・ブン・アビー・スフヤーン **Mu‘āwīya b. Abī Sufyān** (r. 40/661-60/680) とウマイヤ家、メッカ・メディナを拠点としたアブド・アッラー・ブン・ズバイル **‘Abd Allāh b. Zubayr** (d. 73/692) などの勢力に分裂したが、それぞれの勢力基盤となった都市や地域が自らの勢力を支持し、他勢力と対立する中で、こうしたファダーイルの要素を持つ伝承が生み出されていった。しかしながらグルーバーは、このようなファダーイルの発展は、アッバース朝の成立をもって一旦終結したとする。彼は、アッバース朝の首都バグダードに関するファダーイル伝承がほとんど存在していないことから、もはやアッバース朝は政治的手段としてのファダーイルを必要としておらず、この時期からファダーイルはむしろ、ある場所を巡礼地や対外的なジハードのための起点として捉える方向、あるいは文学的な都市讃美の方向に進んでいったとしている [Gruber 1975: 50-51, 80]。

グルーバーが指摘した内乱期の都市・地域間の競争意識は、実際にファダーイル作品の中に散見できる。例えばファダーイル・アッシャーム **Faḍā’il al-Shām** 作品群<sup>4</sup>の中には、預言者ム

<sup>4</sup> ここでの「シャーム **al-Shām**」とは、ダマスカスのまちを表す言葉ではなく、より広い地域を表すものである。イスラームにおいてシャームとは、伝統的に「ユーフラテスからエジプト地方に通じるアリ

ハンマドはシリア（シャーム）とイエメンのためには祝福を請うた一方で、イラクに対しては「そこには地震や反乱があり、そこには悪魔の角が現れる」と言って祝福しなかった、という伝承が取り上げられている [FS-M 21; FBM-M 34b; MG-M 87-88; IA ii, 138-139]。また「終末のときは、イラクの民のうち良き人々がシリアに移され、シリアの民のうち悪しき人々がイラクに移されるまでは始まらない」 [FS-M 23; MG-M 101] という伝承や、「悪魔はイラクに入り、そこで彼の望みを叶える。それから彼はシリアに入るが、そこでは追い出される。それから彼はエジプトに入り、そこで卵を温め、雛を孵し、自身の敷物を広げる」 [FS-M 27; FBM-M 42b; TU 3a; MG-M 98; IA ii, 140] という伝承もあり、ここではシャームとその他の地域、とりわけイラクとの対比が行われ、シリアがイラクとは異なり、神の恩寵を受けた優れた地であるということが強調されている。

エルサレムはウマイヤ朝の支配領域であったシリア地域における主要都市のひとつであり、FBM もファダーイル・アッシャームと深い関連性を持っている。これらの文献群の間の関連性は、それぞれにほぼ同一の形式・主題を持つ伝承が散見されることから指摘できる。例えば FBM には、預言者ムハンマドによるものとされる「我がウンマの中の一団は、終末のときに至るまで正義のもとに勝利者であり続ける。彼らはエルサレムとその周辺にいる」という伝承がある [FBM-W 26; FBM-M 214, 216; FQ 94; FBM-K 84a; TU 3a]。一方ファダーイル・アッシャームの中には、上記の伝承の「彼らはエルサレムとその周辺にいる」の部分で、「彼らはシリアの民である」という言葉に変えただけのものが見受けられる [FS-R 58; FS-M 24-25; FBM-M 45a-45b; IA ii, 140]。このような両者の関連性は、エルサレムあるいはシリアが神の恩寵篤き地であるという伝承、また終末や最後の審判に関係した伝承においてとりわけ見られるものである。

以上のことから FBM は、内乱期以降のイスラーム地域に見られるようになった都市・地方単位での連帯・競争意識の中で、ファダーイル・アッシャームと関連しながら生み出されたファダーイルの 1 ジャンルであると言える<sup>5</sup>。

では FBM は、実際にはいつ頃から編纂が始まったのか。まず、最も狭義の意味でのファダ

---

ーシュ al-'Arīsh まで」 [MB iii, 312] に及ぶ地域であるとされている。FBM の一部の作品ではシャームの範囲が明示されており、それに拠れば、南の境界線はアリーシュからアイラ（エイラット） Ayla を通り、タブーク Tabūk、ドゥーマト・アルジャンダル Dūmat al-Jandal を通ってサマーワ砂漠 Barriyat al-Samāwa へと伸びる線である。東側から北側にかけての境界線はユーフラテス川であり、これらの線と、西側の境界線である地中海とに囲まれた地域がシャームであるとされる [MG-M 84; LUJ(C) 2b-3a]。以上の地域は、現在のシリア、レバノン、ヨルダン、イスラエルに、シナイ半島東部とサウジアラビア北部、イラク西部までを含んだ部分となる。本論ではこのシャームのことを「シリア／シリア地域」という語で表すものとする。

<sup>5</sup> ファダーイル・アッシャームの起源と、そこに取り上げられる伝承の内容に関しては、コブ P. Cobb、アナブスイ G. Anabsi の論考を参照 [Cobb 2002; Anabsi 2008]。この他、エルサレム以外の場所に関するファダーイル文献を扱った専論には、ムント H. Munt によるファダーイル・アルマディーナ Faḍā'il al-Madīna（メディナに関するファダーイル）研究、吉村による「ナイル地理書」（ナイル川とその流域に関するファダーイル）研究がある [Munt 2012; 吉村 2008]。

ール・バイト・アルマクデイス、すなわちエルサレムの聖性を讃美する伝承の発生については、イスラームのかなり早い時期に求めることができる。イスラームの教義におけるエルサレムの聖性は、エルサレムがメッカ以前のキブラ（礼拝の方角）であったことと、預言者ムハンマドがエルサレムに向けてイスラー（夜の旅）を行い、そこからミーラージュ（昇天）したことに由来している。ムスリムの最初のキブラとムハンマドのイスラーについてはクルアーンに言及されており<sup>6</sup>、クルアーンではそれらの舞台がエルサレムであるということは明言されていないものの、そこをエルサレムと同定する解釈は、ウマイヤ朝初期（ヒジュラ暦1世紀末）までには定着していたであろうと考えられている [Hasson 1996: 353; Elad 1999b: 28-29; Bloom 1996: 208]。言うまでもなくこうしたエルサレムの聖性はユダヤ教・キリスト教から取り入れたものであり、イスラームにおいてもその概念の発展には、イスラーイーリーヤート *isrā'īliyyāt* と呼ばれるユダヤ教・キリスト教伝承が大きな影響を与えている<sup>7</sup>。これらのイスラーイーリーヤートは、カアブ・アルアフバル *Ka'b al-Aḥbār* (d. c. 31/652-63)<sup>8</sup>、アブド・アッラー・ブン・サラーム *'Abd Allāh b. Salām* (d. 43/663-64)<sup>9</sup>、ワフブ・ブン・ムナッピフ *Wahb b. Munabbih* (d. c. 110/728)<sup>10</sup> などのユダヤ教からの改宗者<sup>11</sup>を通じてイスラームに伝えられ、彼らの名は FBM においても、エルサレムの神聖さに関する伝承の伝承者として多くの箇所で見ることができる。

このようなエルサレム讃美に関する伝承がムスリム伝承家たちによって収集され、広く流通するようになったのは、ウマイヤ朝時代のことであると見なされている。キスター *M. J. Kister*

<sup>6</sup> クルアーン 17章1節（本論2ページ脚注1）、第2章142節「人々のうち愚かな者どもは言うであろう、『なぜ彼らは、以前に向いていたキブラから向きを変えたのか』。答えるがよい、『東も西も神のもの。神はみ心にかなうものを正しい道に導きたもう』」

<sup>7</sup> ユダヤ教・キリスト教がイスラームにおけるエルサレムの聖性確立に与えた影響については、ハッソン、シャロン *M. Sharon*、リヴネ＝カフリの論考がある [Hasson 1981; Sharon 1992; Livne-Kafri 1991; 1998; 1999; 2004; 2005; 2007]。

<sup>8</sup> イエメン在住のユダヤ教徒で、第2代正統カリフ＝ウマルの治世中の17/638年にイスラームに改宗、メディナに移住する。改宗後はウマルと親密な関係を保ち、17/638年のエルサレム征服の際にはウマルに同行してエルサレムに赴く。その際ユダヤ教の伝承に関する造詣を生かして、当時所在が不明になっていた聖なる岩 *al-Ṣakhra* の位置をウマルに教えた、という伝承が FBM 作品中に伝えられている [Schmitz 1978: EI2 iv, “KA' B AL-AḤBĀR”; FBM-IM 64-65; FBM-M 11b; MG-M 166; IA i, 236-237; UJ i, 380; LUJ(C) 11a]。

<sup>9</sup> メディナのカイヌカー族 *Banū al-Qaynuqā'* に属するユダヤ教徒。預言者ムハンマドのメディナ到来直後の8/629-30年にイスラームに改宗したとされる。「ムハンマドはトーラーに預言された預言者である」として、ユダヤ教的背景からムハンマドを擁護した。ウマルによるエルサレム征服にも同行、ウマルの死後はウスマーン、ムアーウィヤともつながりを持った [Horovitz 1960: EI2 i, “ABD ALLĀH B. SALĀM”]。

<sup>10</sup> サナア近郊の町ズィマル *Dhimar* に生まれる。父親であるムナッピフがユダヤ教からの改宗者で、ワフブ自身はムスリムとして生まれていると考えられている [Khoury 2002: EI2 xi, “WAHB B. MUNABBIH”]。聖書やタルムードに含まれていた、古くからのユダヤ教の伝承に詳しく、彼が伝えた伝承がタバリーやイブン・イスハーク *Muḥammad b. Ishāq* (d. 151/761)、イブン・クタイバ *'Abd Allāh b. Muslim b. Qutayba* (d. 270/883) らの著作の中に引用されている。「天地創造からイスラーム到来に至るまでの預言者たちの歴史」という歴史的枠組みを最初に作り出した [Duri, 1983: 122-135]。

<sup>11</sup> リヴネ＝カフリは、イスラーイーリーヤートがイスラームに取り入れられていく過程において重要な役割を果たしたのは専らユダヤ教からの改宗者であり、キリスト教からの改宗者の果たした役割は小さいものであったとしている [Livne=Kafri 1999: 85]。

やジュインボル G. H. A. Juynboll は、FBM を含むファダーイル文献は、それぞれの地域にまつわる伝承を収集したハディース集から発展してきたものであるとし、FBM に含まれる伝承も 1/7 世紀後半から 2/8 世紀前半のウマイヤ朝時代にはすでに流通していたとしている [Kister 1981: 185-186; Juynboll 1983: 162-163]。エルアド A. Elad も彼らの意見を支持し、FBM の起源を同時期に求めている。エルアドはこの時代を FBM の起源として確定する根拠として、ワースィティイーとイブン・アルムラッジャーの著作に出てくる伝承のイスナード（伝承経路）に注目している。彼はそれらの伝承の大部分が、ラムリー al-Walīd b. Ḥammād al-Ramlī (d. c. 300/912) に代表されるある特定の人物を経由していることを指摘し、一人の人物にイスナードが集中しているということは、その人物はエルサレムに関する伝承をすでにまとめた量で保存していたのだろうとの見解を提示している [Elad 1991: 41-70; 1999b: 1-22]。

またスレイマン・ムラード Suleiman A. Mourad もワースィティイーとイブン・アルムラッジャーのイスナード検証を通じてラムリーに着目している。ラムリーの著作は現在では失われているのだが、ムラードは、FBM-W や FBM-IM のイスナード部分に残るラムリーの名前より彼の著作の内容を復元しようと試みている。それに従えば、ラムリーは 37 人の伝承者よりエルサレムに関する伝承を伝えており、彼らの大部分がシリア・パレスチナ在住の人物であった。また 37 人の伝承者の中でも、ラムリーが主要な情報源とした人物はいずれも 3/9 世紀後半に没している。ムラードはこのことから、ラムリーは 3/9 世紀後半にはエルサレムに関するファダーイルの収集を終えていた、またラムリーが 37 人に及ぶ伝承者を情報源としていたことから、3/9 世紀、あるいはそれに先立つ 2/8 世紀には、エルサレムの周辺地域でエルサレムのファダーイルが広まっていた、と結論付けている。またそうであれば、この地域で FBM に対する関心が芽生えたのはそれよりさらに早い時代のことであろうとし、2/8 世紀のハディース伝承家ムカーティル・ブン・スライマーン Muqātil b. Sulaymān al-Balkhī (d. 150/767) が、自身のクルアーン解釈に関する著作の中でエルサレムに関するファダーイルを扱っていることを挙げ、FBM の起源を 2/8 世紀に定めている [Mourad 1996: 34-39; 2008: 86-90]。

エルサレムに関するファダーイル諸伝承が 1 冊の FBM 作品として、書物の形で編纂されるようになった時期については、ムラードは、現存する最古の FBM であるワースィティイーの FBM-W (410/1019 年編纂)<sup>12</sup> に先立って、前述のラムリーも、自身の有していた伝承を書物の形にまとめていたとしており、その根拠として、ワースィティイーとイブン・アルムラッジャーがラムリーより引用したイスナード<sup>13</sup>の中に、その著作の存在が示されていることを挙げて

<sup>12</sup> FBM-W の編纂年代については、作品の冒頭にある伝承のイスナード中に、「ワースィティイーとして知られる、イマームにしてハティーブたるアブー・ムハンマド・アブド・アルアズィーズ・ブン・アフマド・ブン・ムハンマド・マクディスィー Abū Muḥammad 'Abd al-'Azīz b. Aḥmad b. Muḥammad al-Maqdisī が我々に、エルサレムにある彼の住まいにて 410 年に伝えた」とある [FBM-W 4]。

<sup>13</sup> 「ワリード（・ブン・ハンマード・ラムリー）が我々に、次のように伝えた。『私は私の書の中に (fi kitābī)、イブラーヒーム・ブン・ムハンマドその他の者から次のように伝えられているのを見つけた』 [FBM-W 51; FBM-IM 123]。

いる[Mourad 1996: 34-35; 2008: 89]。また、FBMの写本研究を行ったアサリーKāmil Jamil al-'Asalīは、現存しないながら記録に残る最古のFBMとして、イスハーク・ブハーリーIshāq b. Bishr al-Bukhārī (d. 206/821)の*Kitāb Futūḥ Bayt ak-Maqdis*という作品を挙げており[al-'Asalī 1984: 25]、これに従えば、書物としてのFBM編纂は2/8世紀末から3/9世紀初頭の時期に始まったと言える<sup>14</sup>。

先行研究では、エルサレムに関するファダーイル諸伝承が発生し広まっていった時代をウマイヤ朝に求め、ウマイヤ朝がそうした伝承の発展に与えた影響を強調している。この時代にエルサレムに関する伝承が流通するようになった理由についてエルアドは、シリアに権力基盤を持っていたウマイヤ朝カリフたちが、それらの伝承を政治的プロパガンダの手段と見なし、その流通を推奨することでエルサレムの政治的・宗教的地位を高めようとしていたことにあるとしている。エルアドは、FBMという文献ジャンルの発展はシリアにおける政治的状况に強く影響されたものであると見なし、それゆえアッバース朝の台頭とともに政治の中心地がシリアからイラクに移った後は、カリフや知識人たちはFBMに無関心になったとしている[Elad 1999a: 300-301; 1999b: 12-15]。

キスター以降の研究者は総じて、FBMは地方色の強いハディース集として出発したものであり、その起源を遅くとも2/8世紀にあるとした上で、FBMはウマイヤ朝時代に大きな発展を経験したとしている。先行研究はさらに、FBMが2度目に大きな発展を迎えた時期として、十字軍時代を挙げている。例えばシヴァンE. Sivanは、ウマイヤ朝とFBMとの関連性に着目しておらず、ワースィティイーやイブン・アルムラッジャー、ルマイリーMakkī b. 'Abd al-Sallām al-Rumaylī (d. 492/1099)の著作が編纂された5/11世紀を、FBMが成立した時代であると見なしているのだが、その後のFBMの展開について、十字軍によるエルサレム占領による影響を示唆している。すなわちシヴァンは、十字軍侵攻の混乱により6/12世紀前半にはFBMの編纂は一時中断されたものの、エルサレム再征服プロパガンダが激化するザンギー朝のヌール・アッディーンNūr al-Dīn Maḥmūd b. Zankī (r. 541/1146-569/1174)の時代に再びこのジャンルに対する興味が見られるようになり、ジハードの気運の高まりと共に中東全域で隆盛を見ることになったと述べ、FBM編纂の動機に十字軍に対するジハードを挙げる[Sivan 1971: 100-110]。FBMの起源をウマイヤ朝に求めるキスター以降の研究者についても、シヴァンと同様に十字軍がシリア地域に与えたインパクトを重視しており、エルサレムに関するファダーイル諸伝承が、シリアにおけるムスリム支配者たちの対十字軍プロパガンダの手段として利用

---

<sup>14</sup> 書物としてのFBM作品の編纂時期については、ムントの研究により、ファダーイル・アルマディーナの成立時期との比較が可能である。ムントは記録に残る最古のファダーイル・アルマディーナを、イブン・ザバーラMuḥammad b. al-Ḥasan b. Zabāla al-Maḥzūmī (d. c. 200/815-16)が199/814年に編纂した*Akhbār al-Madīna*という作品であるとし、現存するもののうち最古のものを、ウマル・ブン・シャッバ'Umar b. Shabba (d. 262/876)による*Tārīkh al-Madīnat al-Munawwara*という作品であるとしている。ムントはこの2作品を含め、ヒジュラ暦2世紀末(9世紀初頭)から3/9世紀にかけてに成立したファダーイル・アルマディーナを4つ取り上げ、それらをこのジャンルにおける嚆矢であるとしている[Munt 2021: 2-3, 11-13]。

されたことで、FBM というジャンルが再度隆盛したと捉えている [Hasson 1981: 172; Ashtor 1981: 187; Frenkel 1996: 70; Mourad 1996: 40-41; Elad 1999b: 15]。

しかしながら、FBM の成立あるいは隆盛の要因として、ウマイヤ朝や、十字軍時代のシリアのイスラーム勢力による政治的プロパガンダを挙げる先行研究の見解には、その根拠とすべき事例をそれぞれの時代の社会状況の中に明確に提示できていないという問題点がある。まずウマイヤ朝時代については、書物の形で成立した FBM を考えるのであれば、現存する最古の作品である FBM-W が 5/11 世紀初頭、記録に残る最古の FBM とされるブハーリーの作品も 3/9 世紀初頭のものであり、ウマイヤ朝時代に編纂された作品はまったく知られていない。またこの時代を、FBM が文字で記録されるようになる以前の、口伝による伝承集積の時代であると捉えるにせよ、それらの伝承をウマイヤ朝カリフたちが実際どのように利用していたのかについては示されていない。FBM が十字軍時代に隆盛をみたとする見解についても、やはり先行研究は、ヌール・アッディーンや、アイユーブ朝スルタン＝サラーフ・アッディーン *Ṣalāḥ al-Dīn Yūsuf b. Ayyūb* (r. 569/1174-591/1193) が、それらをどのように利用していたのかの具体例を提示していない。また FBM 編纂状況に照らし合わせても、エルサレムが十字軍に占領された 492/1099 年から、サラーフ・アッディーンによる 583/1187 年の回復までの期間に編纂された作品は存在せず、この期間はむしろ FBM 編纂の空白期となっているため、先行研究がなにをもってこの時代を「FBM の隆盛期」と捉えているのかには疑問が残る。

## (2) 写本研究

FBM 先行研究のもうひとつの流れとしては、アサリーやマフムード・イブラーヒーム *Maḥmūd Ibrāhīm* に代表される研究者たちによる写本研究がある [al-'Asalī 1984; Ibrāhīm 1985]。これは、記録に残る FBM についてその書名と著者名を一覧にした上で、その著作の写本が現存するかしないか、現存するものについてはその所蔵先とその請求番号を調べた研究である。例えばアサリーは、3/9 世紀から 14/20 世紀の間に書かれた FBM 作品を、写本が現存しないものや著者不明のものも含めて年代順に 49 作品を数え上げている。この研究により FBM というジャンルにどのような著作があるのかがおおかたのところ明らかになっており、以降の研究者はこのリストを元にして FBM 研究を進めることができる。その点でアサリーによる成果は FBM 研究の基礎資料として重要なものである<sup>15</sup>。

しかしながらアサリーは、FBM についての明確な定義づけを行っておらず、明らかにその範疇には入らない作品までリストに含めてしまっている。例えばアサリーは、5/11 世紀ダマス

---

<sup>15</sup> アサリーは FBM 写本研究の他にも、5/11 世紀から 14/20 世紀にかけてエルサレムを訪問した旅行者たちによって著された旅行記についても同様の研究を行っている。研究書は 2 部構成になっており、第 1 部では旅行者たちのビブリオグラフィーと、彼らのエルサレム滞在時の状況について概観、第 2 部では彼らが著した旅行記のうち、エルサレムに関する部分のみを抜き出して、部分翻刻を行っている。こちらもエルサレム研究の基礎資料として有用である [al-'Asalī 1991]。



カスの法学者ラバイー‘Alī b. Muḥammad al-Rabā‘ī (d. 444/1052) による *Faḍā’il al-Shām wa Faḍl Dimashq* (以下 FS-R と略称) をリストに含めているが、これはその書名の示す通り、シリア地域とダマスカスに関するファダーイル集であり、エルサレムを対象としたものではない [al-‘Asali 1984: 30-34]。また定義の曖昧さに加え、写本情報についても一部誤りを含んでおり、FBM 研究を進めるにあたってはこの点にも留意して、アサリーのリストを修正する必要がある。

イブラーヒームによる研究は、FBM 概論に加え、アサリーのものと同様 FBM の写本に着目し、FBM 作品群の写本情報や校訂本についての情報を加えたものである。イブラーヒームの研究は第 1 部の研究編と第 2 部の資料編に分かれており、研究編の方はアサリー以上の情報を持つものではない。しかし資料編においては、校訂本が出版されていない FBM 写本の中から 11 の写本を選び出し、その部分翻刻が行われており、こちらの部分に利用価値がある。イブラーヒームの翻刻は各作品の一部分に過ぎずその点は惜しまれるが、各作品の序文と結びを取り上げているため、作品の構成や編纂の動機などを推測する点での助けとなる。またこれらの 11 の写本の中には参照の難しい孤本も含まれており、その点でも有用である。

以上 FBM 先行研究の 2 つの大きな方向性とそれぞれの問題点を概観してきたが、これらの先行研究全体に共通する問題は、FBM 研究が依然として極めて限定的なテーマに関する議論のみに終始しているという点にある。またアサリーらの写本研究によって FBM 写本の現存状況が明らかになっているにもかかわらず、以降の研究者たちはワースィティーとイブン・アルムラჯジャーに代表される初期の作品にのみ依拠しており、実際に編纂が盛んになっているアイユーブ朝・マムルーク朝時代の作品、あるいはそれ以降の作品をほとんど参照しておらず、参照史料に偏りが見られる。起源論研究においては、こうした史料状況が考慮されていないままであることから、研究の視点がウマイヤ朝、あるいは十字軍との関連性に固定されてしまっているという問題点がある。

筆者はこうした問題点に鑑み、なによりもまず研究対象を初期の作品のみに限定せず、このジャンル全体に拡大することが、今後の FBM 研究において新しい研究テーマを展開していく上での第一歩となると考える。よって本論では、より新しい時代に編纂された作品までを含めた FBM 作品群全体を考察の対象とし、各作品の持つ特徴、時代を通じての内容、編纂方式の変化、作品間の関連性に注目することで FBM 作品群の全体像を捉え、FBM 史料研究を行うことを目的とする。FBM を実際に分析すると、その中にはエルサレムに関する多様な情報が含まれており、歴史研究においても有効な史料である。それらは各時代のエルサレム周辺の社会状況や、ムスリムたちがエルサレムに対して向けていた意識を反映したものとなっているために、一連の作品群を検討することは、イスラームにおいてエルサレムの聖性がどのように認識されてきたのかという問題、すなわちイスラームにおけるエルサレム論を語る上での根本的な

史料となり得るものである。

以下に本論における章構成を挙げる。第 1 章では前述のアサリーによる **FBM** 作品リストを参考に、これに修正を加えて本稿で考察の対象とする **FBM** 作品の範囲を決定する。また第 2 章以降の議論に入る前に、**FBM** において扱われる代表的な伝承を、**A.** エルサレムの歴史（イスラーム以前）、**B.** エルサレムの歴史（イスラーム時代）、**C.** エルサレムの神聖さ・偉大さに関する伝承、**D.** エルサレムと終末思想を関連付けた伝承、**E.** エルサレムでムスリムたちが体験した奇跡譚、**F.** エルサレムにあるモニュメントとそこへの参詣に関する伝承、**G.** エルサレムに縁のムスリムたちの伝記、**H.** クルアーン解釈、**I.** その他（エルサレム以外に関するファダーイル）の 9 つのカテゴリーに分類し概観する。第 2 章では、アイユーブ朝末期からマムルーク朝初期に至るまでの、比較的初期に編纂された **FBM** 作品を検討する。この時期の作品は、先行研究が指摘しているようにハディース集としての形式を備えており、本稿ではこの時代の作品を「ハディース集型 **FBM**」と呼ぶ。第 3 章では、**FBM** の編纂が盛んになるマムルーク朝時代に、従来のハディース集型 **FBM** が「参詣記型 **FBM**」と「地誌型 **FBM**」という 2 つの方向へと変化していく過程について考察する。第 4 章ではオスマン朝期に編纂された作品を取り上げ、マムルーク朝期に大きく変化した **FBM** 編纂が、それ以降の時代にどのように展開していくかを見る。終章では第 2 章から第 4 章にかけて検討した **FBM** 編纂の歴史を総括し、**FBM** 編纂を通じてシリアのムスリム社会の中で聖地としてのエルサレムの重要性が確立していく過程を考察する。また本稿の巻末には資料編として、オスマン朝時代に成立した **FBM** 作品のひとつである **LUJ** を取り上げ、アラビア語写本の校訂と日本語訳注を付した。



## 第 1 章：FBM の定義と内容の概観

### 1. 本論が考察の対象とする FBM 作品の決定とその一覧

序章において述べたように、FBM に関する先行研究の中にはアサリーによる写本研究があり、彼の研究成果により記録に残る多くの FBM 作品の書名や著者名、その写本に関する情報を得ることができる。FBM 研究の基礎となる史料情報を明らかにしたという点でアサリーの研究は非常に有用であるが、そこには様々な問題点も見られる。本節ではこのアサリーの先行研究をもとに、そこに修正を加えながら、本論が考察の対象とする FBM 作品を決定し、その一覧を提示する。

アサリーは、2/8 世紀から 14/20 世紀初頭にまでの期間にアラビア語とオスマン語で書かれた FBM 作品として、現存しないものや著者不明のものも含め 49 作品を挙げている（アラビア語 48 作品、オスマン語 1 作品）。このうち、現時点で筆者が写本の現存を確認できたものは、アラビア語による 32 作品である<sup>16</sup>。本論では、執筆年代や著者の編纂方法・スタンスを主要な観点のひとつとする関係上、著者が不明である 4 作品は考察の対象から外す。またアサリーは、14/20 世紀以降に印刷本の形で出版されたとされる作品を 4 つ挙げているが、これらの作品については書誌情報や著者に関する情報が曖昧で作品自体の参照も困難であるため、今回の考察の対象からは除外する。以上の操作を行うと FBM 作品は 24 に絞られるが、ここからさらに吟味を加えていく必要がある。

アサリーの FBM リストの最大の問題点は、彼が FBM に属すると見なす作品の定義が非常に曖昧であり、そのため FBM に分類できない作品までもリストに加えてしまっているというところにある。まずこの 24 作品の中には、序章でも述べたようにラバイーによる FS-R が含まれている。アサリーは、「この著作は直接的な意味でのファダーイル・バイト・アルマクデイスではない」と言いながらも、その中にエルサレムに関する記述があるとして、これを自身の FBM リストに含めている [al-'Asalī 1984: 30]。しかしながら本書はあくまで地域としてのシリアとダマスカスを讃美することに焦点を当てた著作であり、アサリーの言うエルサレムに関する記述もわずかなものに過ぎないため、これを FBM の範疇に入れるべきではない。

アサリーのリストには、この他にもエルサレム以外を対象としたファダーイルの書が含まれ

---

<sup>16</sup> アサリーがオスマン語による FBM 作品として挙げているのは、ムハンマド・ヤフヤー・エフェンディー *Muḥammad Yaḥyā Afandī* (d. 1010/1601) による、*Faḍā'il Quds Sharif* という作品である。アサリーは本作品の情報をクラチコフスキー I. Kratchkovski の研究書（アサリーはアラビア語訳版を参照）から得ている。クラチコフスキーは、このムハンマド・エフェンディーという人物は、*Faḍā'il Makka Mukarrama*、*Faḍā'il Madīna Munawwara*、*Faḍā'il Quds Sharif* の、3 聖地に関する 3 つのファダーイル作品を編纂したとし、これらの 3 作品には多くの写本が存在していると述べている [al-'Asalī 1984: 115; Kratchkovski 1963-65: II, 612-13]。しかしながら、筆者は現時点においてこの *Faḍā'il Quds Sharif* の写本の現存を確認できなかったため、本論では本写本は止むを得ず考察対象より外した。

ている。そのひとつには、8/15 世紀ヘブロン<sup>1</sup>の法学者であったタドムリー **Ishāq b. Ibrāhīm al-Tadmurī** (d. 833/1439) による *Muthir al-Gharām ilā Ziyārat al-Khalīl* (以下 MG-T と略称) がある。ヘブロンとはエルサレムの南西方向に位置する町で、「神の友 **al-Khalīl**」と呼ばれる預言者アブラハムが住んだ場所であるとされているところから、その名を取ってアラビア語では「ハリール」と呼ばれている。確かにヘブロンはエルサレム近隣にある、預言者に縁の聖所として、FBM においても言及されることが多く、FBM とも緊密な関連性を持っている。しかしながら MG-T は、ほぼ全編が預言者アブラハムと彼の子孫たちの伝記、そして彼らの墓があるヘブロン<sup>2</sup>の地に関する伝承に費やされており、エルサレムに関する伝承は含まれていないため [MG-T 2a-2b; Matthews 1937: 114-116]、本書を FBM に含めることはできない。

またアサリーは、モスクに関するファダーイルの書 3 作品をもリストに含めている。それが、カイロのシャーフイー派法学者ザルカシー **Muḥammad b. Bahādir al-Zarkashī** (d. 794/1392) による *I'lām al-Sājid bi-Aḥkām al-Masājid* (以下 IS と略称)、エジプトのシャーフイー派法学者アクファフスィー **Aḥmad b. al-'Imād al-Aqfahsī** (d. 808/1405) による *Tashīl al-Maqāsīd li-Zuwwār al-Masājid*、メッカのハナフィー派イマームであったフワーリズミー **Muḥammad b. Ishāq al-Khwārizmī** (d. 827/1424) による *Athārat al-Targhib wa al-Tashwīq ilā al-Masājid al-Thalātha wa ilā al-Bayt al-'Atīq* である。これらの作品は、メッカのハラーム・モスク、メディナの預言者のモスク、エルサレムのアクサー・モスクという 3 つの主要なモスクを中心としたイスラーム世界の様々なモスクが持つ美德を讃美する伝承や、また一般にモスクという場所で、信徒はどういった振舞いをすべきか、あるいはすべきではないのかという規範と、それに伴う利益や懲罰に関することを扱ったものである。これらの作品の中には確かにアクサー・モスクに関する伝承が含まれているが、そこではアクサー・モスクはあくまで「モスク」の範疇の中で捉えられており、FBM とは作品の構成や主眼の置き方が異なっている。そのため一部に共通する伝承を持つからといって、これらを FBM の範疇に含めることはできない。

さらにアサリーのリストには、サラーフ・アッディーン<sup>3</sup>のワズィールであったイマード・アッディーン・イスファハーニー **'Imād al-Dīn Muḥammad b. Muḥammad al-Iṣfahānī** (d. 597/1201) による *al-Faḥ al-Qussī fī al-Faḥ al-Qudsī* (以下 *Faḥ* と略称) が含まれている。アサリーはこれについても、「この書は厳密にはファダーイル・バイト・アルマクディスではなく歴史書、とりわけ 583/1187 年の [サラーフ・アッディーンによる] クドス征服の歴史書である」とした上で、なおそこにバイト・アルマクディスを称賛する詩や伝承などが含まれているとして、これを FBM に数えている [al-'Asalī 1984: 41]。しかしこの著作の主眼は、サラーフ・アッディーンが十字軍との戦いを通じてバイト・アルマクディスを含むシリア地域を征服していく過程を年代記形式で記述することであり、エルサレム讃美そのものが目的の著作ではない。エルサレムに関する伝承を含む歴史書や年代記ならばこれ以外にも数多く存在するのであるから、それらを考慮せず本書のみをリストに加えるアサリーの判断には問題がある。

アサリーがこれらの作品を自身のリストに取り上げているのは、これらの作品が一部の FBM の中に、その典拠として挙げられているためであると考えられる。確かにこれらの 6 作品は FBM の内容や構成に影響を与えており、FBM 研究においてその関連性は無視できるものではない。しかしながらこれらはあくまで FBM の周辺にある作品群と見なし、FBM それ自身の範疇に含めるべきではない。なおこれらの周辺作品と FBM との引用・被引用関係については、第 2 章以降 FBM の各作品を個別に取り上げていく中で改めて考察する。

この他アサリーの FBM リストには、現存する写本の情報に疑問の余地があるものが 2 点含まれている。1 つ目は、カーシム・ブン・アリー・イブン・アサーキル Qāsim b. 'Alī b. 'Asākir (d. 600/1203) による *al-Jāmi' al-Mustaḡṣā fī Faḍā'il al-Masjid al-Aḡṣā* (以下 JM と略称)、2 つ目は、アフマド・ブン・ムハンマド・イブン・アサーキル Aḥmad b. Muḥammad b. 'Asākir (d. 610/1213) による *Uns fī Faḍā'il al-Quds* (以下 UFQ と略称) である。

カーシム・イブン・アサーキルは、『ダマスカス史 *Tārīkh Madīnat Dimashq*』の著者として有名なダマスカスの知識人、アリー・イブン・アサーキル 'Alī b. al-Ḥasan b. 'Asākir (d. 571/1176) の長男であり、彼の著作は後代の多くの FBM 編纂者によって参照されている重要な作品である。本書の写本についてアサリーは、完全な写本は現存していないと述べる一方で、カイロのアズハル図書館 *Maktabat al-Azhar al-Sharīf* に所蔵されている "*al-Mustaḡṣā fī Ziyārat al-Masjid al-Aḡṣā*" (MS. tāriḡh 3971)<sup>17</sup> という題の写本の断片を、このカーシムの著作と断定している [al-'Asālī 1984: 49-50]。

筆者がこの写本のマイクロフィルムを確認したところ、葉数にして 10 葉のごく短い写本であり、そのうち第 1 葉から第 7 葉までがファダーイル・バイト・アルマクデイス、第 8 葉から第 10 葉まではアッカーとアスカラーンに関するファダーイルに充てられていた。第 7 葉 b の下部欄外に、本文の筆跡とは異なる筆跡で「イブン・アサーキルによる、"*al-Mustaḡṣā fī Ziyārat al-Masjid al-Aḡṣā*" と名付けられたこの書は以上。至高なる神が彼を憐れみ給わんことを」と書かれており、このためアサリーはこの写本を、カーシム・イブン・アサーキルの著作であると見なしたのであろう。アズハル図書館が添付した写本表紙にも、著者の欄に "*Bahā' al-Dīn (al-Qāsim) Ibn 'Asākir*" と記入されている。

しかしながらこのアズハル写本は、必ずしもカーシム・イブン・アサーキルの JM であるとは断定できない。彼の著作は後代の多くの FBM の典拠としてその名が挙げられているところから、多くの伝承を含み、ある程度まとまった分量を持つ作品であったと考えられる。例えばマムルーク朝後期に編纂された *al-Rawḍ al-Muḡharras fī Faḍā'il Bayt al-Maḡdis* や *Ithāf al-Akhiṣṣā' bi-Faḍā'il al-Masjid al-Aḡṣā* の序文には、「イマームにしてハーフィズ、イスラームのシャイフたるアブー・アルカーシム・アリー・ブン・アルフサイン・ブン・ハッバト・ア

<sup>17</sup> アズハル写本のマイクロフィルムの写しが、カイロのアラブ連盟写本研究所 *Ma'had al-Makḥṭūṭāt al-'Arabiya* の第 2018 番写本として登録されている。筆者はこちらを利用した。

ッラー・ブン・アサーキルの息子である、イマームにしてハーフィズたるバハー・アッディーン・アブー・ムハンマド・カースィムの *al-Jāmi' al-Mustaṣṣā fī Faḍā'il al-Masjid al-Aqṣā* を読んだ。これはより標準的な巻である。またこれを写したいくつかの書物も読んだ。それらには 16 あるいは 17 の部分 *juz'* があつた」とあり [RM(B) 123b-124a; IA i, 84]、JM が 16 あるいは 17 の部分から構成されていたことが述べられている。これに対しアズハル写本は、葉と葉との間に記述内容の脱落が見られないにも関わらずわずか 10 葉という分量であり、それほどの章構成は見られない。

また JM を参照していることが明らかなファザーリー Ibrāhīm b. 'Abd al-Raḥmān al-Fazārī (d. 729/1329) の *Bā'ith al-Nufūs ilā Ziyārat al-Quds al-Maḥrūs* (以下 BN と略称) では、「ハーフィズ・バハー・アッディーン (カースィム・イブン・アサーキル) が彼の *al-Mustaṣṣā* の書の中で、[教友の] アブー・ザッル Abū Dharr に遡るイスナードによって伝えているところでは」とあり [BN 5]、JM のそれぞれの伝承にはイスナードの記載もあつたものと思われる。しかしアズハル写本にはイスナードの記載は見られない。詳細は本論第 3 章にて述べるが、BN は JM と、イブン・アルムラჯジャーによる FBM-IM を典拠として編纂されている。FBM-IM と BN の内容を比較すると、BN には FBM-IM と共通しない伝承が 30 含まれており、そうであればこれらの 30 の伝承は JM より引用されたものであるということになる。しかしながらこれらの伝承のうち、問題のアズハル写本に確認できるもの 4 つに過ぎない。この点からも、アズハル写本は少なくとも JM の全内容を表したものではないということになる。

以上の点よりこの写本は、JM の一部分を抜き書きしたものであるか、あるいは何らかの別の FBM 作品に、誤ってカースィム・イブン・アサーキルの名前が書き込まれたものとも考えられる。いずれにせよこのアズハル写本を JM の完全な写本と見なし、一個の作品として考察を進めることは難しく、さしあたって本論ではこれを考察の対象から外すこととする。

もう一方の UFQ の著者であるアフマド・イブン・アサーキルは、アリー・イブン・アサーキルの弟の長男、すなわちカースィム・イブン・アサーキルの従弟に当たる人物である。彼はカースィムの JM を典拠として自らの著作を著しており、そのことは彼らの作品を参照した後代の作品の中に引用されている [RM(M) 124a; IA i, 85-86]。これについてもアサーリーは、写本は現存していないとしながらも、フェズのカラウィーイーン図書館 Khizānat al-Qarawiyīn の第 1250 番写本に、アブー・ムハンマド・アブド・アッラフマーン Abū Muḥammad 'Abd al-Raḥmān という人物による *"al-Uns bi-Tārikh al-Quds"* という題のものがあると聞いたと述べている。アサーリーは、アフマド・イブン・アサーキルのクンヤ (尊称) もアブー・ムハンマドであることから、これがおそらく彼の著作の写本であろうとしている [al-'Asalī 1984: 52]。

筆者がカラウィーイーン図書館の写本カタログを確認したところ、第 1250 番にはそうした題の写本は存在しなかった。同カタログの 2 番後の第 1252 番には、「ウライミー、アブー・アルヤマン、ムジール・アッディーン、アブド・アッラフマーン・ブン・ムハンマド 'Ulaymi,

Abū al-Yaman, Mujīr al-Dīn, ‘Abd al-Raḥmān b. Muḥammad…860 年生、927 年没、… *Uns al-Jalīl bi-Tārikh al-Quds wa al-Khalīl*] [al-Fāsī iii, 215]との記載があり、アサリーはこの写本について言及していると考えられるのだが、これは明らかにアサリーがリストの別項に挙げているウライミーとその著作の写本である<sup>18</sup>。またこの部分以外にも、同カタログ内に UFQ と思しき写本の記載は見られなかった。この写本については、アサリーは十分な調査をしないまま、別の写本と混同しているものと考えられる。筆者は現時点ではアサリーが主張しているものの他に UFQ の写本に関する情報を得ていないため、本稿ではこれは現存しない FBM であると見なして考察の対象から外す。

一方、アサリーのリストに挙げられていないものでその存在が確認できた FBM としては、ダマスカスのハンバル派法学者であるディヤー・アッディーン・マクディスィー *Ḍiyā’ al-Dīn Muḥammad b. ‘Abd al-Wāḥid al-Maqdisī* (d. 643/1245) による *Faḍā’il Bayt al-Maqdis* がある。これについては 1988 年にダマスカスで翻刻本が出版されている。翻刻者のムハンマド・ムテイーウ *Muḥammad Muṭī’* によれば、本書はマクディスィーによる *Faḍā’il al-Shām* 3 部作の、第 2 部にあたるものであるという。第 1 部と第 3 部については現存せずその内容は不明とあるが、書名よりおそらくシャーム地域に関するファダーイルの書であろう。底本となった写本はダマスカスのザーヒリーヤ図書館 *al-Maktaba al-Zāhiriya* にのみ所蔵される (MS. majmū’ 48)、著者本人の手になる貴重な写本であるという。校訂者はこの写本がアサリーのリストに入っていない理由について、この写本がザーヒリーヤ図書館のカタログでは *Faḍā’il al-Shām* の書名にて掲載されており、その中にエルサレムに関するファダーイルを含む一部があることが添えられていなかったためであろうとしている [FBM-D 27]。

以上より、アサリーの挙げた現存し著者名の明らかな 24 作品のうち、FBM には含めることができない、あるいは書誌情報の不明瞭な 8 作品を除き、また新たに 1 作品を追加すると 17 作品となる。本稿ではこれらの FBM を直接の考察対象とする。[表 1] は、これらの作品を著者の没年を基準に年代順に並べ、確認できる限りにおいてそれぞれの著者の生没地、法学派、略歴を添えたものである。写本が現存しない作品についても、著者に関する情報が明らかなものについては、FBM 作品群全体の傾向をより明確にするための成立年代や著者の立場のサンプルとして、一覧に含めた。以降本稿では、各作品の略称と番号はこの表に従うものとする。なお[表 1]において、グレーの欄は現存しない作品であり、また「法学派」の欄については、S がシャーフイー派、HB がハンバル派、HF がハナフィー派、M がマーリク派を表しており、矢印→は法学派の変更を表すものとする。

<sup>18</sup> なおカラウィーン図書館には、第 1252 番写本の他に 3 つのウライミーの FBM の写本が所蔵されているが (第 556-558 番) [al-Fāsī ii, 70-72]、アサリーはウライミーの項ではこれらの写本情報には触れていない [al-‘Asali 1984: 109-112]。この点からも、アサリーは同図書館のカタログを十分に調査していないものと思われる。



[表1] FBM著者・作品一覧

番号	著者名	書名	生没年 (場所)	法学派	著者の経歴
1	Ishāq b. Bishr al-Bukhārī	<i>Kitāb Futūḥ Bayt al-Maqdis</i>	生? (パルプ) 没206/821 (ブハラ)		
2	Mūsā b. Sahl al-Ramlī	<i>Kitāb Man Nazala Filasṭīn min al-Ṣaḥāba</i>	生? 没261/874-5		
3	Aḥmad b. Khalf al-Subḥī	<i>Akḥbār Bayt al-Maqdis</i>	H3C-H4C		
4	al-Walīd b. Ḥammād al-Ramlī	<i>Faḍā'il Bayt al-Maqdis</i>	生? 没c. 300/912		
5	Muḥammad b. Aḥmad al-Wāsiṭī	<i>Faḍā'il Bayt al-Maqdis</i>	生? 没 p. 410/1019 (エルサレム)	S	アクサー・モスクのハテイエーブ
6	Musharrāf b. al-Murajjā al-Maqdisī	<i>Faḍā'il Bayt al-Maqdis wa al-Khalīl wa Faḍā'il al-Shām</i>	生? 没 c. 450/1058 (エルサレム)		エルサレムのムフタイー
7	Makkī b. 'Abd al-Sallām al-Rumaylī	<i>Faḍā'il Bayt al-Maqdis</i>	生432/1040 (エルサレム) 没492/1099 (エルサレム)	S	Ibn al-Murajjā (6) の弟子
8	'Abd al-Raḥmān b. 'Alī b. al-Jawzī	<i>Faḍā'il al-Quds</i>	生510/1116 (バグダード) 没597/1201 (バグダード)	HB	バグダードのハテイエーブ
9	Qāsīm b. 'Alī Ibn 'Asākīr	<i>al-Jāmi' al-Mustaqṣā fi Faḍā'il al-Masjid al-Aqṣā</i>	生527/1133 (ダマスカス) 没600/1203 (ダマスカス)	S	スーリーヤ学院(ダマスカス)のシヤイフ
10	Ḥasan b. Habbat Allāh b. Ṣaṣrā al-Dimashqī	<i>Faḍā'il Bayt al-Maqdis</i>	生537/1142 (ダマスカス) 没586/1190	S	Qāsīm Ibn 'Asākīr (9) の弟子
11	Aḥmad b. Muḥammad Ibn 'Asākīr	<i>al-Uns fi Faḍā'il al-Quds</i>	生542/1148 (ダマスカス) 没610/1213 (ダマスカス)	S	Qāsīm Ibn 'Asākīr (9) の従弟
12	'Abd al-Raḥīm b. 'Alī al-Qurashī al-Isnā'ī	<i>Miftāḥ al-Maqdis wa Miṣbāḥ al-Marāṣid fi Ziyārat Bayt al-Maqdis</i>	生550/1155 (イスナー) 没625/1228 (ダマスカス)		アイユーブ朝 al-Malik al-Mur'azzam のワズイール
13	Diyā' al-Dīn Muḥammad b. 'Abd al-Wāḥid al-Maqdisī	<i>Faḍā'il Bayt al-Maqdis</i>	生569/1174 (ダマスカス) 没643/1245 (ダマスカス)	HB	Ibn al-Jawzī (8), Aḥmad Ibn 'Asākīr (11) の弟子
14	Muḥammad b. Maḥmūd Ibn al-Najjār al-Baghdādī	<i>Rawḍat al-Awliyā' fi Masjid Iliyā'</i>	生578/1188 (バグダード) 没643/1245 (バグダード)	S	Ibn al-Jawzī (8), Diyā' al-Dīn al-Maqdisī (13) の弟子
15	'Abd Allāh b. al-Ḥasan Ibn 'Asākīr	<i>Faḍā'il Bayt al-Maqdis</i>	生600/1203 (ダマスカス) 没645/1248	S	
16	Ibrāhīm b. Yahyā al-Miknāsī al-Tilimsānī	<i>Faḍā'il Bayt al-Maqdis wa Faḍā'il al-Shām</i>	生600/1204 (ミクナース) 没666/1268 (アイユーム)	S	
17	Muḥammad b. Muḥammad al-Karjī	<i>Faḍā'il Bayt al-Maqdis wa Faḍā'il al-Shām</i>	生? 没682/1283 (エルサレム)		
18	Ibrāhīm b. 'Abd al-Raḥmān al-Fazārī	<i>Bā'ith al-Nuḥūs ilā Ziyārat al-Quds al-Maḥrūs</i>	生660/1264 (ダマスカス) 没729/1329 (ダマスカス)	S	バーダラーイーヤ学院(ダマスカス)のシヤイフ

19		Aḥmad b. ‘Abd Allāh	<i>Silsilat al-‘Asjad fi Şifāt al-Aqṣā wa al-Masjid</i>	生? 没755/1354	HIF	
20	MU	Khalīl b. Kaykaldī al-‘Alā’ī	<i>Masā’il al-Uns fi Tahdhīb al-Wārid fi Faḍā’il al-Quds</i>	生694/1295 (ダマスカス) 没761/1359 (エルサレム)	S	サラヒーヤー学院(エルサレム)の シャイフ、al-Fazārī (18) の弟子
21	TU	‘Abd Allāh b. Yūsuf al-Anṣārī	<i>Talṣīl al-Uns li-Zā’ir al-Quds</i>	生708/1309 (エジプト) 没761/1360 (エジプト)	S→ HB	カイロのハンバル派マドラサのシャイフ
22	MG-M	Shihāb al-Dīn Aḥmad b. Muḥammad al-Maḥdīsī	<i>Muṭṭir al-Gharām ilā Ziyārat al-Quds wa al-Shām</i>	生714/1314 (エルサレム) 没765/1364 (エルサレム?)	S	タンキズイーヤー学院(エルサレム)の シャイフ、al-‘Alā’ī (20) の弟子
23		Muḥammad b. Maḥmūd b. Ishāq al-Maḥdīsī	<i>Tārīkh al-Quds</i>	生? (アレppo) 没776/1374-75		al-‘Alā’ī (20) と交友関係
24		Muḥammad b. Muḥibb al-Dīn ‘Abd Allāh	<i>Tajrīd Man Nazala Bayt al-Maḥdīs</i>	生712/1312 没789/1387 (ダマスカス)	HB	
25		Ḥamza b. Aḥmad al-Ḥusaynī	<i>Faḍā’il Bayt al-Maḥdīs</i>	生818/1415 (ダマスカス) 没874/1469 (エルサレム)	S	
26	RM	‘Abd al-Wahhāb b. ‘Umar al-Ḥusaynī al-Dimashqī	<i>al-Rawḍ al-Mugharras fi Faḍā’il Bayt al-Maḥdīs</i>	生800/1397-98 (ダマスカス) 没875/1470 (メッカ)	S	ダマスカス、アレppoのカーデーイー
27	IA	Muḥammad b. Aḥmad al-Mīnhājī al-Suyūṭī	<i>Ithāf al-Akhiṣṣā’ bi-Faḍā’il al-Masjid al-Aqṣā</i>	生813/1410 (アスエート) 没880/1475 (カイロ)	S	アレppo総督 Amir Jānim Bek に仕える
28	UJ	Mujir al-Dīn ‘Abd al-Rahmān b. Muḥammad al-‘Ulaymī al-Maḥdīsī	<i>al-Uns al-Jalīl bi-Tārīkh al-Quds wa al-Khalīl</i>	生860/1456 (エルサレム) 没928/1522 (エルサレム)	HB (S)	エルサレムの大カーデーイー
29		Naṣr al-Dīn al-Ḥalabī al-Rūmī	<i>al-Mustaḥṣā fi Faḍā’il al-Ziyāra li-al-Masjid al-Aqṣā</i>	生? (エルサレム) 没948/1541		
30		Shams al-Dīn Muḥammad b. ‘Alī b. Ṭūlūn al-Şālīḥī	<i>Faḍā’il Bayt al-Maḥdīs</i>	生880/1475 (ダマスカス) 没953/1546	HIF	
31	Mustaqṣā	Naṣr al-Dīn Muḥammad b. Muḥammad al-‘Alamī al-Maḥdīsī	<i>al-Mustaḥṣā fi Faḍā’il al-Masjid al-Aqṣā</i>	生? (エルサレム) 没 a. 952/1545-46	HIF	
32	Risāla	Muḥammad b. Muḥammad al-Khalīlī	<i>Risāla fi Ta’mīr ‘Ayn Bayt al-Maḥdīs (Tārīkh Binā’ al-Bayt al-Maḥdīs)</i>	生? (ヘブロン) 没1148/1743 (エルサレム)	S	バラデーイーヤー学院(エルサレム) のシャイフ
33	LJJ	Muṣṭafā b. Aṣ‘ad al-Luqaymī al-Dimyāṭī	<i>Laqā’if Uns al-Jalīl fi Tahā’if al-Quds wa al-Khalīl</i>	生1105/1693 (ダミエッタ) 没1178/1765 (ダマスカス)	S	al-Khalīlī (32) の弟子
34	HI	Muḥammad b. Muḥammad al-Tāfiṭī al-Azharī al-Khalwatī	<i>Ḥusn al-Isṭiqṣā’ li-mā Ṣaḥḥa wa Ṭhabata fi al-Masjid al-Aqṣā</i>	生? (モロッコ) 没1191/1777 (エルサレム)	Ma→ HIF	エルサレムのムフタイー

(al-‘Asalī, *Makḥṭūṭāt Faḍā’il al-Bayt al-Maḥdīs* をもとに筆者が作成)

RM と *Mustaqṣā* については、どちらも完全な写本はメディナのアーリフ・ヒクメト・アッシャリーフ図書館 *Maktabat ‘Ārif Ḥikmet al-Sharīf* (現マリク・アブド・アルアズィーズ図書館 *Maktabat al-Malik ‘Abd al-‘Azīz al-‘Āmma*) に所蔵されているのみである [al-‘Asalī 1984: 92, 115-116]。筆者はマリク・アブド・アルアズィーズ図書館に写本の複写について問い合わせたが返答がもらえず、残念ながらこれらの写本を参照することができなかった。

RM はベルリン州立図書館 *Staatsbibliothek zu Berlin* にも写本が 1 点所蔵されているが、こちらは RM の全 37 章のうち、序文と第 1 章から第 14 章までの前半部分のみを含む不完全な写本である。また RM と *Mustaqṣā* のメディナ写本については、イブラーヒームが内容の一部を翻刻し出版している [Ibrāhīm 1985: 433-460, 489-521]。よって RM と *Mustaqṣā* に関してはベルリン写本とイブラーヒームによる翻刻を利用する。

## 2. FBM に含まれる伝承のカテゴリー

本節では、次章以降でそれぞれの作品について個別に検討する前に、FBM においてどのような内容の伝承が取り上げられるのかを概観したい。ここでは FBM に含まれる伝承を、第 2 章以降での分析に資するべく、その内容の性格によって、以下の 9 つのカテゴリーに分類する。すなわち、A. エルサレムの歴史 (イスラーム以前)、B. エルサレムの歴史 (イスラーム時代)、C. エルサレムの神聖さ・偉大さに関する伝承、D. エルサレムと終末思想を関連付けた伝承、E. エルサレムでムスリムたちが体験した奇跡譚、F. エルサレムにあるモニュメントとそこへの参詣に関する伝承、G. エルサレムに縁のムスリムたちの伝記、H. クルアーン解釈、I. その他 (エルサレム以外に関するファダーイル) の 9 つである。

### A. エルサレムの歴史 (イスラーム以前)

FBM を構成する伝承のうち、数の上で大きな割合を占めているのが、エルサレムの歴史に関する伝承である。イスラーム以前の歴史については、序章で述べたようにユダヤ教・キリスト教の伝承、すなわちイスラーム以前から一神教の歴史が取り入れられており、カアブ・アルアフバルやワフブ・ブン・ムナッビフ、アブド・アッラー・ブン・サラームといった、ユダヤ教からの改宗者、あるいはその家系に繋がる人物が多く伝承を伝えている。それらは神による天地創造に始まり、アダムを祖とする預言者たちの事績を中心とした歴史であり、基本的には聖書の記述に一致している。

FBM における歴史記述には、連続性に乏しいという大きな特徴がある。FBM の歴史記述は神殿やハラム・シャリーフの存在を核としたもので、その建設や整備、あるいは崩壊にまつわるエピソードが大部分を占めている。このカテゴリーの中心となる伝承は、イスラエル王ダビ

デとソロモンによる神殿建設であり、伝承の数やヴァリエーションの豊富さ、それを取り上げる作品の数は、このカテゴリーに属する伝承の中でも最多である。一例として、以下にワフブより伝えられている伝承を挙げる。

〔ワフブ・ブン・ムナツピフは以下のように伝えた〕ダビデ<sup>19</sup> はイスラエルの民の人口を知りたいと思い。軍団長たちを派遣して、彼らに人々の数がいかほどかを報告するように命じた。このゆえに、強大にして栄光ある神は彼を叱責なさって言われた。「私がアブラハムと交わした約束を汝は知っていよう。私は彼と彼の子孫たちに祝福を与え、彼らを砂粒のように多くし、その数を数え切れないようにすると約束した。それなのに汝は人々の数を知りたがっている。彼らの数は数え切れぬものを。ゆえに汝らは汝らの試練を選ばなければならない。3年間の飢餓か、汝らの上に3か月間敵が襲いかかることか、あるいは3日間の死〔の病〕か」ダビデはこのことをイスラエルの民に繰り返した。すると彼らは言った。「我々には3年間の飢饉には耐えられません。3か月間敵に襲われることもそうです」そうすると彼らには、他に残っているものはなかった。死の病ならば神の御手によるものであって、他の何者の手によるものでもなかったからである。ワフブが語ったところでは、1年間のうちに彼らのうちの数千人、数を把握することもできない人数が死んだ。ダビデがそれを見たとき、その死者の多さに彼は苦しんだ。彼は強大にして栄光ある神に求め、祈りを捧げて言った。「我が主よ、今私は酸いものを口にし、イスラエルの民は〔その酸いもののゆえに〕口が痺れております。確かに私はこのことを求め、イスラエルの民にも〔このことを〕命じましたが、これではどうしようもありません。どうか私に免じてイスラエルの民をお救いください」強大にして栄光ある神は彼の願いを聞き届けられ、人々の上から死の病を取り除けられた。さてダビデは、剣を引き抜いて持っている天使たちが、その剣を鞘に戻し、黄金の階段を、かの岩から天へと昇っていくのを見た。ダビデは言った。「これこそ神のための礼拝所、栄光の台座が建てられるべきところだ。礼拝所の建設のためにここを取り上げたいものだ」しかし強大にして栄光ある神は彼に啓示を下して言われた。「ここは神聖なる家である。汝はその手を血で染めたがゆえに、それを建てる者となることはできない。しかし汝の息子は、私は汝の後に彼を王とし、彼をソロモンと名付けて彼を血より守る」ソロモンは王になると、それを建て聖別した[FBM-W 9-10]<sup>20</sup>。

FBMの歴史記述における連続性の欠如、すなわちある特定の出来事のみ偏った記述法は、歴史書としての性格の強いUJにおいてもなお見られるものである。UJはその他の作品に比べて多くの歴史的な伝承を扱っており、それらを天地創造以降古い時代から新しい時代へと時間の流れに沿って配列してはいるが、その記述方法がそれぞれの預言者の事績という「点」の集合であることに変わりはない。他の作品との相違点は、それらの「点」と「点」との間隔が

<sup>19</sup> 本論の引用部分においては、預言者や教友たちの名前に付せられる「彼に平安あれ」等の頌徳文は省略した。

<sup>20</sup> ダビデの人口調査とそれに対する神の懲罰については、『サムエル記下』24章を参照。

狭くなっていることのみであり、基本的な記述方法は同じである。イスラームにおけるエルサレムの歴史記述に連続性が欠如していることについて、グラバーは、エルサレムという場所が宗教的な聖地ではあるが政治的、あるいは文化的に重要な場所ではなかったためであると見なしている [Grabar 1986: EI2 v, “AL-ḲUDS”]。

また FBM 全般に言えることだが、エルサレムがイスラエルの手を離れローマ帝国の支配下に入って以降、ウマル・ブン・アルハッターブによるエルサレム征服に至る、紀元 1 世紀後半から 6 世紀半ばまでの期間のエルサレムにおける歴史的事象については、わずかな記述しか見られない。FBM は、聖書時代以降エルサレムがローマ・ビザンツ帝国の支配下にあった時代の出来事については、わずかにコンスタンティヌス帝と母后ヘレナによる聖墳墓教会建設に触れているのみで、ほとんど無視しているのである。FBM の編纂者たちはイスラームイヤーートに由来する伝承に注目する一方で、ローマ・ビザンツ時代の歴史書は参照していないことがわかる。

## B. エルサレムの歴史（イスラーム時代）

イスラームの歴史に関する記述においても、その記述方法がハラム・シャリーフを核とした断片的なものである点は同様である。このカテゴリーの中で特に重要視される伝承は 2 つあり、1 つ目は預言者ムハンマドのイスラームとミーラーージュに関する伝承、2 つ目はエルサレムがムスリムの第 1 のキブラであったことに関する伝承である。この 2 つは、イスラームにおけるエルサレムの聖性を最終的に決定づけた出来事であり、FBM においても多数の伝承が取り上げられている。

ムスリムが直接的にエルサレムに関わった出来事としては、まずウマルによるエルサレム征服が挙げられる。これはムスリムによるエルサレム統治の始まりとして、ほとんどの FBM において大きく取り上げられるものである。この他イスラーム時代の歴史に関して注目されるのは、ウマイヤ朝カリフ、アブド・アルマリク・ブン・マルワーン ‘Abd al-Malik b. Marwān (r. 65/685-86/705) による岩のドーム建設、十字軍によるエルサレム占領とアイユーブ朝スルタン、サラーフ・アッディーンによるエルサレム征服である。イスラーム時代についても記述はこれら 3 つの「点」に集中しており、この 3 点を述べるのが FBM における歴史記述の典型となっている。UJ ではこれらの点の間を埋める試みがある程度見られ、また *Mustaqṣā* では十字軍侵攻以降のシリアのムスリム地方政権の反応が述べられているが、そうした記述が作品全体に占める分量は小さなものに留まっている。FBM 編纂史後期の UJ とオスマン朝期の作品の一部には、当時の為政者のエルサレム統治政策に関する記述が見られるようになるが、それ以前の作品では、前述の 3 つの「点」を除く各王朝のエルサレムの状況は一切示されない。ここではこのカテゴリーに属する伝承の一例として、ウマルによる征服に関するものを挙げる。

ウマルはバイト・アルマクディスの民との間に和平条約を締結し終わると、その地の大司教 **buṭriq** に向かい「我々をダビデのモスクに案内せよ」といった。大司教は「はい」と言った。ウマルは剣を帯び、4000人の同行者を連れて出かけた。彼らも剣を帯びて彼に随行した。当時その地にいた我々の中の一団は、剣以外の武器を持っていなかった。大司教はウマルや彼の同行者の前にいた。我々はウマルの後ろについた。我々はバイト・アルマクディスの町に入り、人々が「ごみ山の教会 **Kanīsat Qumāma**」と呼ぶ教会<sup>21</sup>に入った。大司教は、「ここがダビデのモスクです」と言ったが、ウマルはそこを見渡し、注意深く観察すると言った。「あなたは嘘をついている。かつて神の使徒は私にダビデのモスクの様子を教えてくださいましたことがあるが、それはこのようではなかった」次に大司教は「シオン **Ṣahyūn**」という教会<sup>22</sup>に行き、「ここがダビデのモスクです」と言った。しかしウマルは、「あなたは嘘をついている」と言った。次に大司教はウマルを連れてバイト・アルマクディスのモスクに向かい、ムハンマド門と呼ばれるその門にまで連れてきた。我々はその門の階段の上にあったごみの山からそのモスクの方に下りていき、その門の中にある狭い通路に出た。その階段の上には多くのごみの山が積もっていて、モスクの天井に届かんばかりになっていた。大司教がウマルに言った。「這ってでなければ中に入ることはできないでしょう」ウマルは言った。「むしろ這って入りたいのだ」そこで大司教はウマルの前を這って入り、我々はウマルの後ろを這っていった。ついに我々はバイト・アルマクディスの岩のもとに辿り着き、そこで立ち上がった。ウマルはあたりを見渡し、長い間注意深く観察していたが、やがて言った。「これぞ、我が身がその手のうちにある方にかけて、神の使徒が我々に言われたところのものだ」[FBM-IM 63; MG-M 165-166; IA i, 236; UJ i, 379-380; LUJ(C) 10b-11a]

イスラーム以前、イスラーム時代を通じて、FBMにおける歴史記述のスタイルは非常に限定的・定型的である。FBM編纂者は、エルサレム讃美の一環としてスペクタクルとなりうる出来事にのみ注目していたのであり、総合的・通史的な歴史記述を志向してはいなかったのであろう。

しかしながらここで興味深いのは、FBMではファーティマ朝、セルジューク朝、ザンギー朝といった4/10世紀から6/12世紀前半にかけてのシリアの地方政権に関する記述はごく限られたものに過ぎず、従ってサラフ・アッディーン以前のムスリム勢力と、当時エルサレムとその周辺地域を支配していた十字軍との争いについてもほとんど触れられていないという事実である。17/638年のウマルによる征服以来、約460年間ムスリムの支配下にあった聖地エルサレムが異教徒に侵略されるという歴史的事象のインパクトの大きさを考えたとき、以後約

<sup>21</sup> 現在のエルサレム旧市街キリスト教徒地区にある、聖墳墓教会を指す。イエス磔刑の場所とされ、336年にローマ帝国皇帝コンスタンティヌスの母后ヘレナによって建設された。聖墳墓教会は、アラビア語では元来はカニーサト・キヤーマ（復活の教会 **Kanīsat Qiyāma**）というが、UJを含むFBMにおいてはそれをもじって、カニーサト・クマーマ（ごみ山の教会 **Kanīsat Qumāma**）と呼ばれている [Ishārāt 28; Meri 2004: 76-77]。

<sup>22</sup> シオンの丘にあるダビデの墓のある教会を指す。

90年間の歴史についてFBMが沈黙していることは特筆すべきである。序章において、この90年間にFBMがまったく編纂されなかったことから、FBM編纂の動機を十字軍に対するプロパガンダと捉える先行研究の見解には疑問が残ると述べたが、歴史記述の内容も先行研究の見解を裏付けていないということになる。従来FBM編纂を考える上では、当然のように十字軍が大きな影響を与えたものとされてきたが、この論題については先入観に囚われず改めて議論していく必要がある。本稿では、第2章でハディース集型FBMについて考察する中で、改めてこの問題を取り上げる。

### C. エルサレムの神聖さ、偉大さを伝える伝承

FBMには、エルサレムやエルサレムにある岩 *al-Ṣaḥra* が、神の恩寵を受けた樂園に近い場所であるといった、エルサレムの神聖さや偉大さを伝える伝承が数多く収められている。このカテゴリーの伝承が、最も直接的な意味での「ファダーイル・バイト・アルマクディス」、すなわちエルサレムの美德を讃える伝承であると言える。この中には、例えば以下のような伝承が含まれる。

カアブ曰く、神の使徒は言った。「至高なる神はバイト・アルマクディスに向かって言われた。『汝は我が樂園、我が聖地、我が国々のうち私が選び出したところ。汝に住まう者には我が恩寵を、汝から出ていく者には我が怒りを』」 [FBM-W 23; FBM-IM 206; BN 89; UJ I, 348-349; LUJ(C) 6a]

かの岩、すなわちバイト・アルマクディスの岩は、1本のナツメヤシの側にある。そのナツメヤシは、樂園の川のうちのひとつの側にある。そのナツメヤシの下にはファラオの妻アースィヤとイムラーンの娘マリアがおり、彼女たちは復活の日に至るまで、樂園の民の真珠の首飾りを繋いでいる [FBM-W 67; FBM-IM 132; FBM-M 14a; BN 47; MG-M 251; IA i, 130; UJ i, 357; *Risāla* 16b; LUJ(C) 21b]。

またこのカテゴリーには、信徒たちがそうしたエルサレムの美德にあやかるための手段として、エルサレムへの参詣を推奨する伝承も含まれている。そこでは、エルサレムに参詣し、礼拝や祈願、サダカ、断食などに努めた者には、他の場所では得られない功德が与えられるとされている。この種類の伝承には、例えば次のようなものがある。

バイト・アルマクディスを訪れてかの岩の左右で礼拝し、鎖のあった場所で祈願を捧げ、多少なりともサダカを差し出した者は、その祈願は聞き届けられる。神はその者の悲しみを取り除いて下さり、彼は母親から生まれた日のごとくにその罪から抜け出すことができる。例え彼が神から証を求めようとも、神は彼にそれをお与えになる [FBM-W 23; FBM-IM 117, 164; FQ 142; FBM-M 6b;

FBM-K 67b; BN 53; IA i , 138; UJ i , 350; Risāla 8b]。

さらにエルサレムで死にそこに埋葬されることや、エルサレムからイフラーム<sup>23</sup>を始めることも推奨されている。代表的な伝承は次のようなものである。

バイト・アルマクディスでの1日は1000日のごとく、そこでのひと月は1000月のごとく、そこでの1年は1000年のごとくである。そこで死んだ者は最下天で死んだのと同様であり、その周囲で死んだ者も、そこで死んだのと同様である[FBM-W 46; FBM-IM 272; FQ 129; MG-M 248]。

バイト・アルマクディスからイフラームを始めた者は、それ以前に犯した罪、またそれ以降の罪も赦され、楽園に入ることができる[FBM-W 59; FBM-D 88; FBM-K 75b-76a; BN 39; TU 5b; MG-M 211-212; IA i , 151; UJ i , 351-352]。

#### D. エルサレムと終末思想を関連付けた伝承

FBMにおいて、エルサレムは終末の日に、最後の審判と人々の復活が行われる場所であるとされている。このカテゴリーに属する伝承には、例えば次のようなものがある。

復活の日、カアバはバイト・アルマクディスのもとに集められる。カアバはそこにハッジした人々を引き連れて、花嫁の行列のように急ぎ来る。するとかの岩は、「参詣するものと参詣されるものよ、ようこそ」と言う。[FBM-M 16a; UJ i , 357-358]

トラーに曰く、神はバイト・アルマクディスの岩に言われた。…「昼と夜は、汝のもとに天から炎が送られて、汝の中からアダムの子らの手や足の跡が舐め尽されるまでは、終わりを迎えることはない。また私は汝の上に玉座の下から水を送り、汝が水晶のかけらのようになるまで汝を洗い清め、汝の上に厚さ12ミールの雲でできた壁と、炎の囲いをうち立てる。また私は汝の上に、我が手で形作ったドームを置き、汝の中に、汝を讃美する我が聖霊と天使たちを下らせる。復活の日までは、アダムの子らのうち誰一人として、汝の中に入ることはできない。遠くよりそのドームの光を見た者は、『汝の中で跪拝して神にひれ伏す顔に祝福あれ』と言うであろう。また私は汝の上に、炎の壁と雲の囲い、またサファイア、真珠、エメラルドでできた5つの壁をうち立てる。汝は脱穀場である。汝のもとに人々は集められ、汝の中から復活していく」[FBM-W 71; FBM-IM 138-139; IA i , 131]

---

<sup>23</sup> メッカ巡礼に際し、メッカに入る前にイフラーム *iḥrām* と呼ばれる巡礼用の衣装に着替えて身を清め、自らを巡礼にふさわしい聖なる状態に整えること。イフラームを開始する場所 *mīqāt/muḥall* については、巡礼者がどの地域からメッカに向かってくるかに応じて伝統的に規定があり、例えばシリアやエジプトなどメッカの西側からやってくる人々に対しては、メッカ北北西 200km にあるジャフファ *al-Jahfa* がその場所とされていた[Wensinck 1971: EI2 iii, “IḤRĀM”]。すなわちエルサレムよりイフラームを始めることは、伝統的な規定に則ったものではないということになる。



神の使徒は我々にフトバを行ったが、彼のフトバで最も多かったのは、ダッジャーलについて我々に話したものの、その者のことを我々に警告したものであった。彼の言葉の一つはこのようなものであった。「人々よ、この大地にダッジャールによる反乱ほど大きな反乱はない。いかなる預言者も、その民に彼のことを警告するために遣わされたのである。私は最後の預言者であり、お前たちは最後のウンマである。必ずやかの者はお前たちの中から現れる。・・・[そのとき人々は] バイト・アルマクデイスにいる。かの者は現れて人々を追い詰めるが、そのときの人々のイマームは義しき人であり、彼が礼拝するために進み出てくる。彼が『神は偉大なり』と唱え礼拝に入ると、マリアの子イエスが下りてくる。その人はイエスを見ると彼を認め、マリアの子イエスが前に出てくることができるように後ろに退く。イエスは片手をその人の両肩に置いて『礼拝しなさい。私はあなたのために礼拝を行ったのだから』と言うであろう。そしてイエスは彼の後ろについて礼拝し、続いて『門を開けなさい』と言う。すると門は開くが、そのときダッジャールの側には7万人のユダヤ人がいる」[FBM-W 63; FBM-IM 299]

このカテゴリーの伝承には、とりわけユダヤ教・キリスト教からの影響が強く表れている。FBM とユダヤ教・キリスト教文学との関係性を研究したリヴネ＝カフリによれば、ユダヤ教・キリスト教の終末思想、黙示文学は、1/7 世紀のアラブによる大征服やイスラーム帝国の拡大の反動として大きく発展したが、それがイスラームにおける終末思想にも取り込まれ、FBM にも反映されたという。上記の伝承に見られるように、FBM の中で表現されている典型的な終末のイメージには、終末の日にダッジャール（反キリスト）が出現し、エルサレムにおいてマフディー（救世主）たるイエスと戦うというものや、エルサレムに宝玉の壁が現れるというもの、カアバが「夫のもとに急ぐ花嫁のように」エルサレムに導かれ、両者がともに天へと上げられるといったものなどがあり、これらは例えば『ヨハネによる黙示録』21 章の中に見ることのできるイメージである[Livne-Kafri 2004; 2006; 2007]。また後に挙げるクルアーン解釈と関連するものであるが、クルアーン 50 章 41 節「召還役が近い場所から呼びかける日には、よく耳を傾けよ」について、FBM にはこれを、復活の日に天使イスラフィールがエルサレムの岩の上からラッパを吹くことだとする解釈が見られる。「終末に天使がラッパを吹く」というこのイメージも、キリスト教の黙示文学に見られるものである。

#### E. エルサレムでムスリムたちが体験した奇跡譚

FBM にしばしば見られるのが、エルサレムを訪れたムスリムがそこで何らかの奇跡的な体験をする、という伝承である。ここではそうした伝承の中から、多くの FBM で取り上げられているアブー・アッザーヒリーヤ Abū al-Zāhriya Jubayr b. Kurayb という人物の奇跡譚を、一例として取り上げる。これは、彼がある夜アクサー・モスクで礼拝していたときに、そこで天

使たちに会ったというものである。

私は礼拝するためにバイト・アルマクディスに行き、モスクに入った。モスクの門番たちは私に気づかず、ランプを消してしまった。人はいなくなり、門は閉められた。私ができるようにしているとき、突然私は、一対の翼のある人が呟いているのを聞いた。彼はこう言いながら近づいてきた。「永遠者、存在者に讃えあれ、永遠者、存在者に讃えあれ。生命ある方、永遠にある方に讃えあれ、王たる方、聖なる方に讃えあれ、天使と魂の主に讃えあれ。その称賛によって神に讃えあれ。高き方、いと高き方に讃えあれ、至高なるかの方に讃えあれ」そして別の声が、先の声が続いて、それと同じように言いながら近づいてきた。さらにまた別の声、また別の声、それがそれに唱和し、それらの声がモスクに満ちた。彼らのひとりが私の近くにいて、「人間か」と言った。私が「はい」と言うと、彼は言った。「恐れることはない。ここにいるのは天使たちである」私は言った。「私が見ている通りにあなた方を強くなし給うた方にかけて、私はあなたにお尋ねしますが、最初の方はどなたですか」彼は「ガブリエルである」と言った。また私は言った。「それでは彼に続いた方は？」彼は「ミカエルである」と言った。また私は言った。「その後彼ら 2 人に続いた方々は？」彼は「天使たちである」と言った。「私が見ている通りにあなた方を強くなし給うた方にかけて、私はあなたにお尋ねしますが、この言葉を唱えた者にはどんな報いがあるのですか」彼は言った。「この言葉を 1 年間、毎日 1 回ずつ唱えた者は、楽園に自分の席を見るか、神が彼にそれを見せてくださるかするまでは死なない」 [FBM-W 41-42; FBM-IM 191-193; FQ 132-133; FBM-M 10a-10b; FBM-K 68b-69a; MG-M 222; IA i, 140]

上記のアブー・アッザーヒリーヤによる体験のように、この奇跡譚には、ムスリムがエルサレムのいずれかの場所で礼拝している間、あるいは眠っている間に、天使や預言者たちに出会い言葉を交わす、というパターンを取っているものが多い。これらはエルサレムの聖性を裏付けるエピソードとして、多くの FBM の中で取り上げられている。

#### **F. エルサレムにあるモニュメントとそこへの参詣に関する伝承**

FBM を構成する重要な要素のひとつには、エルサレムの各所にあるモニュメントの名前やその建築上の構造や外観、そのモニュメントが設立されるにいたった背景や、そこにまつわる預言者や聖人たちのエピソード、さらにはそこに参詣する際に守るべき作法や手順について説明した伝承がある。こうした伝承はまず FBM-IM において確認でき、そこではアクサー・モスクと岩のドームを中心とした、ハラム・シャリーフに点在するドームやミフラーブ(礼拝所)、門などの各モニュメントと、エルサレム市街地の東側に位置するオリーブ山に関する伝承が挙げられている。例えば FBM-IM においては、岩のドームの参詣作法が次のように述べられている。

岩〔のドーム〕に入る者に望ましいこと：バイト・ハラームの周りをタワフするのとは逆になるように、自分の右側にそれ（岩）がくるようにして（右回りに）、人々が祈願する場所まで来る。それから手を岩の上に置く。岩に口づけしてはならない。それから次のような祈願を唱える・・・「おお神よ、隠されたものを見通すあなたの知識によって、被造物の上に及ぼすあなたの力によって、あなたが良いと思われる限り私を生かし、あなたが良いと思われるときに私の命を召し上げ給え。私はあなたに、隠されたものと証のことであなたを畏れる気持ちを、怒りと満足について理の言葉を、貧しさと豊かさについて目的を求めます。私はあなたに、途切れぬ安らぎ、途絶えることのない冷たき泉、死後の涼やかな生活を求めます。私は、傷つけられた苦しみも、信仰の道から外れて背くこともなく、あなたのお顔を見てあなたに会いたいと熱望します。おお神よ、信仰という飾りで我々を飾り、我々を導かれし者たちの導き手となし給え」[FBM-IM 81]

上記のような参詣作法に関する記述は FBM-W には見受けられず、FBM-IM の中で最初に取り上げられている。FBM-IM ではこの記述に続き、岩のドーム（ドーム内部：岩→黒いタイル al-Balāṭā al-Sawdā'<sup>24</sup> → 岩の下に開いた洞窟<sup>25</sup>→預言者のマカーム Maqām al-Nabi<sup>26</sup>）→イスラフィール門 Bāb Isrāfil（岩のドーム東門）→鎖のドーム Qubbat al-Silsila<sup>27</sup> →ミーラージュのドーム Qubbat al-Mi'rāj<sup>28</sup> →預言者のドーム Qubbat al-Nabi<sup>29</sup> →ラフマ門 Bāb al-Rahma<sup>30</sup> →ザカリヤのミフラブ Mihrāb Zakariyā'<sup>31</sup> →ソロモンの玉座 Kursī Sulaymān<sup>32</sup>

<sup>24</sup> 岩のドームの北門近くにある大理石で、実際には緑色をしているが、黒という色の概念が緑よりも先に生まれたものであったために「黒いタイル」と呼ばれていると言われる。この大理石は樂園の門の上にあったものであると伝えられ、参詣すべき場所とされた[IA i, 163]。

<sup>25</sup> 岩の下部は洞窟状になっており、階段でそこに下って行くことができる。洞窟内部には「岩の舌 Lisān al-Ṣakhra」と呼ばれる場所があり、参詣の場所となっている[LUJ(C) 21a-21b]。

<sup>26</sup> ある伝承では、預言者ムハンマドは岩の上からミーラージュを行ったとされており、「預言者のマカーム」とは、ミーラージュに際してムハンマドの足跡がついた場所であるとされている[LUJ(C) 21a]。

<sup>27</sup> 岩のドームの東側にあるドーム。FBM には、かつてダビデがイスラエルの民の間で裁判を行うにあたって、天から善悪を判断することができる光の鎖を下された、という伝承がある。鎖のドームはその鎖があった場所であると言われている。またこの場所は、預言者ムハンマドがイスラエルの夜天女たち al-Hūr al-'Ayn に会った場所であるとも言われている[IA i, 170; UJ ii, 56-58; LUJ(C) 22b-23a]。

<sup>28</sup> 岩のドームの北西に位置するドーム。預言者ムハンマドがミーラージュの前に、他の預言者たちや天使たちを先導して礼拝した場所であるとされる。一部の伝承では、ムハンマドはその礼拝の直後にこの場所から昇天したとも言われており、これは「ミーラージュは岩の上から行われた」という伝承と矛盾するものであるが、FBM においては両方の伝承が取り上げられている[IA i, 174; UJ ii, 58]。

<sup>29</sup> 「預言者のドーム」と呼ばれる場所については、詳しくは明らかになっていない。FBM-IM においてはミーラージュのドームの近くにある場所であるように書かれているが、IA の著者シャムス・アッディーン・スユーティー Shams al-Dīn Muḥammad b. Aḥmad al-Suyūṭī は、自身が 874/1470 年にエルサレム参詣を行った際には、そうした名前前のドームは存在しなかったと述べている。スユーティーはこの「預言者のドーム」を、預言者ムハンマドがイスラエルの際礼拝を行った場所であるとして、実際にはミーラージュのドームのことを指しているのであり、FBM-IM の著者イブン・アルムラッジャーも、1 つの場所を 2 つの名前で呼んでいるのだろう、としている[IA i, 173-174]。UJ ではこのドームのことを「預言者のマカーム」と呼んでおり、岩のドーム内部の預言者のマカームとの混同が見られる[UJ ii, 58-59]。

<sup>30</sup> ハラム・シャリーフ東壁に開いている門で、この門の外に、ムスリムたちに「ワーディー・ジャハナム」(地獄の谷) と呼ばれるキドロンの谷が伸びている。ラフマ門は聖域と地獄とを隔てる門とし

→サキーナ門 **Bāb al-Sakīna**<sup>33</sup> →ヒッタ門 **Bāb Ḥiṭṭa**<sup>34</sup> →アクサー・モスク（モスク内部：ウマルのミフラブ→ムアーウィヤのミフラブ）→預言者の門 **Bāb al-Nabī**（モスク南門）→マリアのミフラブ **Miḥrāb Maryam**<sup>35</sup> →ガブリエルの輪のあった場所<sup>36</sup>→オリーブ山にあるサーヒラ **al-Sāhira**<sup>37</sup> →ダビデのミフラブ **Miḥrāb Dāwūd**<sup>38</sup> という一連の参詣ルートが示されている[FBM-IM 81-101]。

エルアドは、FBM-IM において参詣作法に関する部分にはイスナードが付随していないことから、その他の伝承とは異なりこの部分は著者イブン・アルムラჯジャー自身が編集したのであろうとの見解を示している。FBM-IM が示す参詣作法の中に見られる、参詣場所で唱えるべきとされる祈願文について、リヴネ=カフリは、それらの祈願文がイブン・クタイバ **Ibn Qutayba** (d. 276/889) による *‘Uyūn al-Akhbār* 等の 3/9 世紀のアダブ文学作品（教養・作法の書）に見られるものであるとし、イブン・アルムラჯジャーはそこから祈願文を引用し、自身の作品に組み込んだとする [Elad 1999a: 309-310; Livne-Kafri 2001: 67-69]。

エルアドはさらに、FBM-IM の中に、ヒジュラ暦 335 年ムハラム月 10 日アーシューラーの日（946 年 8 月 12 日）に、アブド・アッラー・ブン・ムハンマド・アルフーリー **‘Abd Allāh b. Muḥammad al-Khūlī** という人物が、夢の中でハラム・シャリーフ参詣を行った、という伝承が取り上げられており、アブド・アッラーがハラム内で回った場所が FBM-IM の参詣ルートに一致することから、FBM-IM において提示されているルートは、4/10 世紀半ばまでには

---

て、クルアーン 57 章 13 節に〈彼らの間には壁が建てられ、その内側には慈悲 **al-rahma** が、その外側には懲罰が待っている〉とされているところの門であるとされる [IA i, 197-198]。

<sup>31</sup> 位置不詳。ハラム・シャリーフの南東の隅には「ソロモンの馬小屋 **Iṣṭablāt Sulaymān**」の跡とされる区画があり、その西側の部分に「ザカリヤのミフラブ」と呼ばれている場所があるが、参詣ルートを見る限りそれとは異なるものを指すと考えられる。IA では、ハラム・シャリーフの東壁にはミフラブがあり、そこは「ダビデのミフラブ」であるとも言われている、という記述があり、FBM-IM における「ザカリヤのミフラブ」はこれを指すか [IA i, 195-196]。

<sup>32</sup> ハラム・シャリーフの北東の隅に開いているアスパート門 **Bāb al-Asbāṭ** の近くにあったとされる。

<sup>33</sup> 位置不詳。アスパート門とヒッタ門の間にあるか。

<sup>34</sup> ハラム・シャリーフの北壁中央部に開いている門。名前の由来は、クルアーン 2 章 58 節〈この町に入り、好きなところで存分に食べよ。伏し拝みつつ門に入り、「お赦しを **ḥiṭṭa**」と言え。そうすれば、我らはお前たちの罪を赦してやろう〉より。神はイスラエルの民に「お赦しを」と言いながらエルサレムに入るよう命じたが、彼らはそれに従わなかったとされる [IA i, 203-205; UJ ii, 70-71]。ルビン **U. Rubin** はクルアーンのこの章句について、「ヒッタ」という言葉はヘブライ語で「小麦」を表すものであったが、アラビア語の「(罪を) 取り除く **ḥaṭṭa**」という単語に置き換えられたものである、としている [Rubin 1999: 83-91]。

<sup>35</sup> マリアがエルサレムの聖所で神に仕えたという場所を指す（クルアーン 3 章 35-43 節参照）。

<sup>36</sup> 預言者ムハンマドが天馬ブラークに乗り、ガブリエルに伴われてイスラーした際、ガブリエルがブラークの手綱を結わえつけたとされる場所。ハラム・シャリーフの西壁に開いているマガーリバ門 **Bāb al-Maghārība**（預言者の門とも呼ばれ、ムハンマドがイスラーの際にそこからハラムに入ったとされる門）のそばにある。

<sup>37</sup> クルアーン 79 章 14 節〈見よ、彼らはよみがえって地上 **al-sāhira** に現れたではないか〉に由来し、終末の日に人々が復活させられる場所であるとされる [IA i, 221-222]。

<sup>38</sup> 位置不詳。ダビデのミフラブの所在地については FBM 中にも諸説あり、ハラム・シャリーフの東壁、アクサー・モスクの内部、エルサレムの西側の城壁（ダビデの塔）などの説が挙げられている [IA i, 195; LUJ(C) 19b, 26b]。

エルサレム参詣者の間で広まっていた可能性があることを指摘している。[Elad 1999a: 309-310; FBM-IM 364-365]。シリアにおける墓地・聖者廟参詣 *ziyāra* についての研究を行ったメリ J. Meri は、エジプトではファティマ朝時代から参詣ガイドが編纂されていたのに対し、シリアではそうした作品の登場が遅く、10/16 世紀初頭になって初めて見られるようになるとしているが [Meri 2002: 144-153]、FBM-IM におけるエルサレム・ヘブロン参詣に関する記述は、シリアにおいてもより早い時代から、聖所参詣のための案内書が編まれていたことを示すものである<sup>39</sup>。

ハラム・シャリーフにあるモニュメントの紹介とその参詣作法に関する伝承は、FBM-IM 以降 BN をはじめとするマムルーク朝以降の作品において重点的に取り上げられるようになる。さらにこのカテゴリーに属する伝承は、マムルーク朝末期からオスマン朝時代に編纂された作品において、対象の範囲や記述の量が拡大する。UJ では直接参詣の対象となる場所ばかりでなく、著者の同時代のエルサレム市内にあるマドラサやザーウィヤ、リバートなどの宗教施設、市内の各街区や城塞に関する情報、さらには市外にあるモニュメントや、エルサレム近郊にあるベツレヘムやヘブロンといった町々の情報などが加わり、エルサレムの町とその周辺地域に関する総合的な地理情報へと発展している。FBM におけるエルサレム参詣に関わる要素については、第 3 章にて改めて検討する。

### G. エルサレムに縁のムスリムたちの伝記

FBM には、エルサレムに深い関係を持つムスリム著名人たちの名前を列挙し、さらには彼らの生没年や家系、エルサレムにおける業績などをまとめた、伝記集としての要素も含まれている。この要素は、初期の作品において見られる次の伝承が原形となっていると考えられる。

神の使徒の、パレスチナの地に住んでいた教友たちの名前。彼らの中には子孫を残した者も、残さなかった者もあった。ウバーダ・ブン・アッサーミト 'Ubāda b. al-Ṣāmit、シャッダード・ブン・アウス Shaddād b. Aws、アブー・ウバイイ・ブン・ウンム・ハラーム Abū Ubayy b. Umm Ḥarām—彼の名はサムウン Samwūn といい、ハドラマウトに縁の人であった—、[同じく] ハドラマウトのアブー・ライハーナ Abū Rayḥāna、サラーマ・ブン・カイサル・ハドラミー Sallāma b. Qayṣar al-Ḥaḍramī、ファイルーズ・ダイラミー Fayrūz al-Daylamī、ズー・アルアサービウ Dhū al-Aṣābi'、アブー・ムハンマド・ナッジャーリー Abū Muḥammad al-Najjārī。これらの人々はバイト・アルマクディスの民で、同地で死んだ。彼らのうち子孫を残した者は、ウバーダ・ブン・アッサーミト、シャッダード・ブン・アウス、サラーマ・ブン・カイサル、ファイルーズ・ダイラミーである。これらの人々の子孫はバイト・アルマクディスにおり、彼らの墓もそこにある。彼らのうち子孫を残さ

<sup>39</sup> エジプトにおける参詣については、大稔やタイラー C. Taylor による死者の街参詣を論じた研究に詳しい [大稔 1993; 1994; 1999; 2001; Taylor 1998]。

なかった者は、アブー・ライハーナ、ズー・アルアサービウ、アブー・ムハンマド・ナッジャーリーである [FBM-W 64-65; FBM-IM 285-286; FQ 130-131; FBM-D 90-92; FBM-M 8b-9a]。

これは、預言者ムハンマドの教友のうちエルサレムに住んでいた者の名前を列挙しただけの、ごく簡単な記述であった。7/13 世紀半ばまでに編纂された作品の多くに、この伝承が取り上げられている。

このカテゴリーに大きな変化が生じるのは、8/14 世紀半ば成立の MG-M においてのことである。MG-M では作品の最後の部分に、人類の祖アダムに始まるイスラーム以前の預言者たちの伝記と、イスラーム以降はウマル・ブン・アルハッターブに始まる教友、タービウーン（教友の後継世代）、さらにそれ以降アイユーブ朝中期に至るまでのムスリムたちの伝記が付けられており [MG-M 269-377]、ここに至って FBM の中にエルサレムに縁の著名人の伝記集を含めるというスタイルが確立し、MG-M 以降これを典拠とした FBM 作品の中に受け継がれていく。この要素はさらに UJ において発展し、UJ では MG-M が取り上げた人物に加え、著者と同世代（マムルーク朝末期、900/1495 年まで）のエルサレムと、さらにヘブロンで活動したウラマーやスーフィーたちにまで範囲が拡大していく [UJ i, 385-394; ii, 150-407]。

## H. クルアーン解釈

クルアーンの中では、エルサレム Bayt al-Maqdis/al-Quds という言葉は直接には見られない。しかしながら FBM には、クルアーン 17 章 1 節「遠隔の礼拝堂」や、50 章 41 節「召還役が近い場所から呼びかける日」のようなクルアーンの文言を、エルサレムのことを指し示すものであると解釈する伝承が数多く登場する。このクルアーン解釈は基本的には、「至高なる神のお言葉何々とはすなわち、エルサレムのことである」、「至高なる神のお言葉何々について、某（クルアーン解釈者）は『それはエルサレムのことである』と述べている」という形で記述される。

この要素は FBM 作品全体を通じて見られるものであるが、マムルーク朝以降の作品になると、取り上げられるクルアーンの章句の数が増加する傾向にある。このカテゴリーに属する伝承の種類が最も豊富であるのが MG-M であり、22 の句に関する解釈が取り上げられている。その中にはそれ以前の作品では見られなかった解釈もいくつか含まれている。例えば、24 章 36 節「高々と建てられ、御名が唱えられることを神がお許しになった家々」や、34 章 18 節「我らは、彼らと我らが祝福した町々の間に、見つけやすい町々を造った」を、エルサレムのことを表すものとする解釈である。このように後期の作品では、以前のものには取り上げられてこなかった句がエルサレムやその周辺の場所、あるいはエルサレムで起きた出来事に同定されるようになり、そのために伝承の数が増えている。FBM におけるクルアーン解釈は、エルサレムの聖性の根拠を聖典に求めることで、そこにイスラーム的な価値観を付加しようとする

編纂者の姿勢を表すものであり、その姿勢は後期の作品により顕著に見られるようになっていく。

また後期の作品では、この要素は作品の冒頭部分にまとめて取り上げられる場合が多く、FBM-K、TU、MG-M、IA、UJ、LUJ がこのスタイルを取っている。作品の冒頭部でエルサレムと関連するクルアーンの章句を並べることが、後期の FBM における定型となっていくと言える<sup>40</sup>。

## I. FBM 以外のファダーイルに由来する要素

本章第 1 節において、本稿で扱う FBM 作品の範囲を決定した際に、筆者は FBM にはエルサレムと関連するその他の場所のファダーイルの書の要素が含まれる場合があることを述べた。それらには主として、シリア地域を扱ったファダーイル・アッシャーム、預言者アブラハムの町ヘブロンを扱ったファダーイル・アルハリール、イスラーム世界のモスクの美德について述べたファダーイル・アルマサージドの 3 つがある。

ファダーイル・アッシャームは、エジプトやイラクと対になる、地域としてのシリアの他、ダマスカスを始めとするシリアの諸都市の美德を讃美する伝承が集めたものである。一部の FBM には、ファダーイル・アッシャームの典拠として前述の FS-R が登場するが、これは 5/11 世紀半ばに編纂された作品で、現存する最古のファダーイル・アッシャームであるとされている。ファダーイル・アッシャームの形式は FBM とよく似ており、シリアに与えられる神の恩寵、シリアにいた預言者たちのエピソード、シリアに関する預言者ムハンマドの発言、クルアーンの章句をシリアに関連付けて解釈したもの、シリア各所の情報などを含んでいる。ひとつひとつの伝承をとっても、「至高なる神はシリアに対し言われた。『汝はこの上なく貴重なもの。汝のもとから人々は復活し、汝のもとに人々は集められる。汝の中には我が地獄と我が光がある…』」[FS-R 55] のように、FBM に見られるものと同じのモチーフを取るものも多く、FBM との近縁性を指摘できる。FBM の中でもファダーイル・アッシャームの要素が見られるものは少なくない。FBM-IM や FBM-M、IA のように、作品の巻末部分にファダーイル・アッシャームを加えた作品や、FBM-D や MG-M のように、作品の第 1 部をファダーイル・アッシャームに充て、第 2 部を FBM に充てたものなどがある。

次にファダーイル・アルハリールであるが、これはヘブロンに縁の預言者アブラハムと彼の子孫イサク、イシュマエル、ヤコブ、ヨセフの事績、あるいは同地にあるとされる彼らの墓にある美德とそこへの参詣作法などについて扱ったものである。独立した作品としてのファダーイル・アルハリールの例としては、管見の限り 9/15 世紀初期にタドムリーによって編纂された MG-T があるのみである。しかしヘブロン讃美の要素は、すでに 5/11 世紀半ばの FBM-IM

---

<sup>40</sup> クルアーンの中のどの章句がエルサレムを表すものと解釈されてきたかについては、ハティーブ Abdallah al-Khatib の研究を参照 [al-Khatib 2001]。

の中に見ることができる[FBM-IM 468-493]。エルアドによれば、ファダーイル・アルハリールに含まれる伝承の大部分は FBM と同じ 1/7 世紀末から 2/8 世紀初頭にかけての時期には成立していたという。その後 4/10 世紀以降、ムカッダスィー **Muḥammad b. Aḥmad al-Muqaddasī** (d. p. 380/990) の地理書に代表されるように、ムスリムによる地理書の中にヘブロンに関する記述が見られるようになり、同時期よりヘブロン参詣が盛んになったとされる[Elad 1996, 27-41; AT 172]。

ムスリムによるヘブロン参詣は、エルサレムとの距離的な近さと相まって、エルサレム参詣に連続して行われるのが一般的であった。例えばナーシル・フスラウ **Nāṣir-i Khusraw** (d. p. 465/1072) とハラウィー **‘Alī b. Abī Bakr al-Harawī** (d. 611/1215) は、それぞれ 438/1047 年と 569/1173 年にエルサレムを訪問しているが、両者ともその直後にヘブロンに向かい、アブラハムの墓に参詣している[SN 57-60; *Ishārāt* 25; 森本 2003: 29; Meri 2004: 70-71]。FBM-IM の巻末にファダーイル・アルハリールに関する伝承が付されているのは、当時のこうした参詣の状況を反映したものであろう。そしてこのようなファダーイル・アルハリールの要素は、FBM にエルサレム参詣に関する記述の占める割合が多くなる BN 以降の作品で目立つようになっていく。このことは、マムルーク朝以降もエルサレム参詣とヘブロン参詣がセットで捉えられていたことを示している。

モスク一般に関するファダーイル、すなわち、モスクを建設したり清掃したりすることを推奨する伝承や、反対にモスクの中で唾を吐いてはいけないといったモスクにおける禁止事項に関しては、本稿で扱う FBM の中では FBM-IM にしか見ることができない[FBM-IM 366-429]。このような伝承は、第 1 節で述べた、アサリーのリストに含まれていたファダーイル・アルマサージドの書の中でも取り上げられているものである。

前述の通り、作品としてのファダーイル・アルマサージドは、メッカ、メディナ、エルサレムの 3 モスクを中心とした伝承で構成されるものであり、バイト・アルマクディス(アクサー・モスク)という共通項を持つ点で FBM とは深い関係がある。例えばザルカシーによる著作には、ダビデとソロモンによるバイト・アルマクディス建設の伝承や、バイト・アルマクディスで礼拝することを推奨する伝承など、FBM にあるものと同様の伝承が述べられている[IS 280-283, 287-288]。

作品としてのファダーイル・アルマサージドは、独立して存在していたメッカ、メディナ、エルサレムに関するファダーイルの中から、それぞれのモスクの成り立ちや美德に関する伝承を抜き出し、そこにモスク一般に関する伝承を加えて再編集された、比較的新しい形のファダーイルの書であると考えられる。現存するファダーイル・アルマサージドの書 3 作品も、いずれも 8/14 世紀から 9/15 世紀にかけて成立したものである。これらは既存の FBM を典拠のひとつとしており<sup>41</sup>、そしてそうしたファダーイル・アルマサージドは、今度は RM や IA のよ

<sup>41</sup> 例えばザルカシーの著作では、ワースィティイーの FBM-W とイブン・アルムラッジャーの FBM-IM



うな後期に編纂された FBM の中で典拠として引用されている [IA i, 86; Ibrāhīm 1985: 445]。

以上本節では FBM に見られる 9 つの 카테고리について概観してきた。FBM の全体的な傾向としては、後代に編纂された作品のほうが、より多様な要素を内包するようになる。すなわち初期の作品においては、カテゴリ A (イスラーム以前の歴史)、B (イスラーム以降の歴史)、C (エルサレムの神聖さに関するもの)、D (終末に関するもの) が主な要素として取り上げられるのに対し、マムルーク朝以降に成立した作品においてはそれらの 4 要素に、カテゴリ F (エルサレム参詣作法、地理的情報) や G (伝記) といった要素が追加されてくる。またカテゴリ E (奇跡譚)、H (クルアーン解釈) についても、後代の作品にはより多数の伝承が取り上げられるようになる。さらに、イスラームの強い影響を受けて成立した FBM が、時代が下るにつれ様々な新しい要素を付け加えられていく中で、当初のユダヤ教・キリスト教的色彩が弱まり、イスラーム独自の性格が強くなっていくという傾向も見られる。次章以降ではこうした FBM の時代を通じた変遷について、個別の作品を取り上げて詳しく検討する。

---

から伝承が引用されている [IS 286, 288, 296]。

## 第 2 章：ハディース集型 FBM

本章では、5/11 世紀から、8/14 世紀（アイユーブ朝末期からマムルーク朝初期）にかけての時期に編纂された FBM7 作品を、著者の出身や経歴、作品の構成、作品を構成する伝承の内容の観点から考察する。この時期に成立した FBM 作品は、ウマイヤ朝時代に収集されていたエルサレムに関する様々なハディースが、書物の形で書き表されるようになった結果生み出されたものであり、ハディース集の特徴を強く残している。これらの作品にはエルサレムに関するファダーイルの中核となる伝承が含まれており、マムルーク朝以降の作品の直接の典拠ともなっている。ここではこの時代に編纂された作品を「ハディース集型 FBM」と呼び、FBM 文献ジャンルの原形がどのようなものであったのかを提示したい。

### 1. ハディース集型 FBM の著者と作品の構成

#### (1) FBM-W

ムハンマド・ブン・アフマド・ワースィティー *Muḥammad b. Aḥmad al-Wāsiṭī* による FBM-W は現存する最古の FBM であり、また後代の多くの作品の典拠となっているという点で、FBM 研究の出発点となる重要な著作である。著者については、4/10 世紀から 5/11 世紀にかけてのエルサレムに住んでいたシャーフィイー派知識人であること、アクサー・モスクのハティーブ（説教師）を務めていた人物であること以外には、ほとんど明らかになっていない。作品冒頭の伝承に付されたイスナードの中に、ワースィティーがこの作品に収められた伝承を、410/1019 年にエルサレムにある彼の自宅において、アブー・ムハンマド・アブド・アルアズィーズ・ブン・アフマド・ナスィービー *Abū Muḥammad ‘Abd al-‘Azīz b. Aḥmad al-Naṣībī* という人物<sup>42</sup> に口述したということが書かれており [FBM-W 4]、本書の成立はこの年に求めることができる。

FBM-W は典型的なハディース集の記述様式に則って記述されており、作品内で扱われている伝承のすべてに、最初の伝承者から、著者ワースィティーの直前の伝承者に至るまでの完全なイスナードが付されている。本書の校訂者のひとりであるハッソンは、本書に登場する伝承の数を 165 と数えている。以下は FBM-W の冒頭に挙げられた伝承と、そのイスナードである。

慈愛深く慈悲あまねき神の御名において。

シャイフにして信仰深きイマームたるタキー・アッディーン・アブー・アルフサイン・アフマド・

<sup>42</sup> なおルカイミー ([表 1], 7) はエルサレムにて、このナスィービーより伝承を学んだとされる [TS v, 332-333]。

ブン・ハムザ・ブン・アリー・シャーフィイー *Taqī al-Dīn Abū al-Ḥusayn Aḥmad b. Ḥamza b. 'Alī b. al-Shāfi'i* がダマスカスの町の金曜モスクにて、583 年ラジャブ月に我々に伝えた。曰く、神聖にして指導者たるアブー・アルアッバース・アフマド・ブン・ムハンマド・ブン・アブド・アルアズィーズ・アッバースィー・マッキー *Abū al-'Abbās Aḥmad b. Muḥammad b. 'Abd al-'Azīz al-'Abbāsī al-Makkī* が、547 年ラビーウ・アルアッワル月 12 日に、バグダードにあるカリフの館の奥の間にある彼の部屋にて我々に伝えた。曰く、カーディーたるアブー・アルフサイン・ムハンマド・ブン・ムハンマド・ブン・アルフサイン・ブン・アルファッラー *Abū al-Ḥusayn Muḥammad b. Muḥammad b. al-Ḥusayn b. al-Farrā'* が我々に伝えた。曰く、イブン・アルナスィービーとして知られる、イマームたるアブー・ムハンマド・アブド・アルアズィーズ・ブン・アフマド・ブン・ウマルが我々に伝えた。曰く、ワースィティイーとして知られる、イマームにしてハティイーブたるアブー・ムハンマド・アブド・アルアズィーズ・ブン・アフマド・ブン・ムハンマド・マクディスィーが、エルサレムにある彼の住まいにて、410 年に我々に伝えた。曰く、アブー・ハフス・ウマル・ブン・アルファドル・ブン・アルムハーヅル・ラフミー *Abū Ḥafṣ 'Umar b. al-Faḍl b. al-Muhājir al-Lakhmī* がアクサー・モスクにて、彼の監督のもとで読み上げられたものを我々に伝えた。曰く、我が父アブー・アルアッバース・アルファドル・ブン・ムハーヅルが我々に伝えた。曰く、ワリード・ブン・ハンマード・ラムリー *Walid b. Ḥammād al-Ramlī* が我々に伝えた。曰く、イブン・アビー・アッサリー *Ibn Abī al-Sarī* が我々に伝えた。曰く、アブド・アッラッザーク *'Abd al-Razzāq* が我々に伝えた。曰く、マアマル *Ma'mar* がズフリー *al-Zuhrī*、サイード・ブン・アルムサイヤブ *Sa'id b. al-Masayyab*、アブー・フライラ *Abū Huraira* より〔順に〕我々に伝えた：神の使徒は言った。「ハラーム・モスク、この私のモスク、アクサー・モスクの 3 つのモスク以外に向けて、鞍を据えてはならない」[FBM-W 3-4]

ハッソンとムラードが FBM-W のイスナードについて行った考察によれば、165 の伝承のうち約 7 割にあたる 118 が、上の伝承の中にも名前が挙がっているアブー・ハフス・ウマル・ブン・アルファドル・ラフミーという人物を経由して、ワースィティイーに伝えられたものであるという。さらにこのウマル・ブン・アルファドルを経由した伝承のイスナードを検証すると、ウマルは父親であるアルファドル・ブン・ムハーヅル・ラフミーから、さらにファドルはワリード・ブン・ハンマード・ラムリー（[表 1], 4）から伝承を伝えていることがわかる。このラムリーとは、3/9 世紀半ばに一個の著作としての FBM を編纂したとされる人物である [FBM-W [1]-[3]; Hasson 1996; Mourad 1996]。

FBM-W の記述方法は至って単純なものである。まず作品には序文が付されておらず、バスマラ（「慈愛深く慈悲あまねき神の御名において」という定型句）のすぐ後に第 1 の伝承のイスナードが始まっている。また作品の結びとなる部分も、「このファダーイルは、神とそのお力、神がお与えくださった幸運とご助力をもって〔ここに〕完成した」[FBM-W 102] とあるのみである。FBM-W においては、著者本人の言葉や編纂方針はほとんど見る事ができない。

作品内で取り上げられた伝承についても、それに対するワースィティーン自身の見解や真正性の判断などは一切記述されていない。

またハディース集としての形式に従い、FBM-Wにおいてはほとんど同様の内容を持つ伝承であっても、イスナードやマトンの中の言葉や表現が異なっている場合は別の伝承と見なされている。このため作品内では、同内容の伝承が複数挙げられている箇所も少なくない。例えば冒頭部分には、預言者ムハンマドの「ハラーム・モスク、この私のモスク（預言者のモスク）、アクサー・モスクの3つのモスク以外に向けて、〔乗馬の〕鞍を据えてはならない」というハディースが述べられているのだが、そこではアブー・フライラ(d. 59/678-79)から伝わるもの、ウマル・ブン・アルハッターブから伝わるもの、アブー・サイド・フドリーAbū Sa'id Sa'd b. Mālik al-Khudrī (d. 74/693-94)から伝わるものでイスナードとマトンが異なるものが2つ、計4つのハディースが取り上げられている[FBM-W 3-6]。

この他FBM-Wにおける記述方法の特徴としては、作品の構成や伝承の配列に規則性が見られないことが挙げられる。まずFBM-Wでは、後代のFBMとは異なり明確な章立てが行われていない。作品全体を見れば、同内容の伝承は同じ個所でまとめて叙述されるという傾向が見られるが、それは厳密なものではなく、同じテーマの伝承が別々の箇所で書かれていることも多い。例えば上で述べたように作品の冒頭部分、すなわち作品に含まれる全165の伝承のうちの1番から4番の伝承は、「3つのモスク以外に出向いてはならない」という預言者ムハンマドのハディースに関するものであるが、これに関してはこの1か所でまとめて記述されている。次の5番目の伝承はダビデとソロモンによる神殿建設を扱ったものであり、続く6番も同じテーマのものである。しかし7番の伝承は、「天地創造の際、神は大地の上に現れたクリーム状の塊を4つに分け、その1つ目からメッカを、2つ目からメディナを、3つ目からバイト・アルクディスを、4つ目からクーファを創造した」というもので、5、6番とは異なるテーマの伝承である。この7番の伝承を間に挟んで、8番から10番では再びダビデとソロモンによる神殿建設の伝承が取り上げられ、さらに19番から23番、46番、47番の離れた場所でも扱われている。

ハディース集型FBMにおいては各伝承の前にイスナードが付されているため、作品内の伝承の個数を数えることが容易である。FBM-Wの場合、校訂者ハッソンはイスナードの数に従い、165の伝承を計数している。筆者はここで、これらの伝承が第1章第2節に挙げたA~Iのいずれのカテゴリーに属するものであるかを調べ、作品全体に対する各カテゴリーの割合を表した（以下章末に挙げる[表2]を参照）。なおその際、イスナードの数ではなくマトンの内容という点からそれぞれの伝承を見た場合に、1本のイスナードによって伝えられた伝承の中に複数の異なるモチーフが含まれている場合があった。本稿ではそれらは別の伝承として数え<sup>43</sup>、FBM-Wの伝承の総数を185個と計数している。

<sup>43</sup> 例えば第44番には、①ズー・アルカルナイン（アレクサンダー大王）がエルサレムで見た6つの奇

FBM-W では、エルサレムで起こった歴史的な出来事に関する伝承 (A および B) がそれぞれ 22.16%と 22.70%で、全体のおよそ半分を占めている。これにエルサレムの神聖さや偉大さに関する伝承(C)が 31.35%と続き、これらの 3 つが作品を構成する主要な要素となっている。以下エルサレムと終末思想に関する伝承(D)が 5.94%、エルサレムでムスリムたちが体験した奇跡譚(E)が 4.86%、エルサレムにあるモニュメントやそこへの参詣に関する伝承(F)が 5.40%、エルサレムに縁のムスリムの伝記(G)が 0.54%、クルアーン解釈(H)が 5.92%、エルサレム以外に関するファダーイル(I)については、ファダーイル・アッシャームが 2 つ含まれており 1.08%と続いている。

## (2) FBM-IM

FBM-IM の著者ムシャッラフ・イブン・アルムラッジャー・マクディスイー Abū al-Ma'ālī al-Musharraf b. al-Murajjā al-Maqdisī の経歴については、ワースィティイー同様ほとんどのことが明らかになっておらず、450/1058 年前後に没したエルサレム在住の人物であったことが知られているのみである [‘Alām vii, 227; Livne-Kafri 2001: 62]。

本書は FBM-W 同様、各伝承に完全なイスナードが付されている。このイスナードの数に従って伝承数を計数すれば、本書には 625 の伝承が含まれていることになる。FBM-IM と FBM-W の中で取り上げられている伝承のイスナードを比較すると、両者に共通するイスナードを持つ伝承は 99 である。そのうちの 72 が前述のラムリーを経由するイスナード (Walīd b. Ḥammād al-Ramlī→Faḍl b. al-Muḥājir al-Lakhmī→‘Umar b. al-Faḍl al-Lakhmī) であり、残りの 27 がそれ以外のイスナードによるものである。

FBM-IM は、作品全体のおよそ 16%にあたる伝承を FBM-W と共有しているが、FBM-W との間に直接の引用・被引用関係があるかについては、明確には指摘できない。イブン・アルムラッジャーは上記 72 のラムリーによる伝承を、ムハンマド・ブン・ウマル・イスファハーニー Abū Muslim Muḥammad b. ‘Umar al-Iṣfahānī という人物から伝えており、このイスナードの中に、またそれ以外の 27 個のイスナードの中にも、ワースィティイーの名前は見られないからである。作品中に FBM-W あるいはその他の書物を典拠とした、という記述もない。

FBM-IM には短い序文がついており、そこに著者の編纂方針を垣間見ることができる。

ある人が私に、私にまで伝わっている限りのファダーイル・パイト・アルマクディスをすべて語ってくれと頼んできた。…私は彼の求めに応え、そうしたもののの中から、私にまで伝わっている神の使徒や教友の方々、美質において彼らに続く人々 (タービウーン) の伝承、神が下された書 (クル

---

跡、②ソロモンに与えられた善悪を判断できる光の鎖が、イスラエルの民の不正によって消えてしまったこと、③ソロモンが池の上に絨毯を敷き、そこに高位の人々の席としたが、正しい人はその絨毯の上に座っても沈むことがなかったという伝承、④ズー・アルカルナインの死と彼の墓のある場所、という 4 つの伝承が含まれている。

アーン)の中にあるものを語った。また私はそれに続けてモスクのファダーイル(ファダーイル・アルマサージド)やファダーイル・アッシャームの一部も語った。というのもこのモスク(アクサー・モスクに関するファダーイル)は、そうしたもののすべての中に含まれるからである。私はそれを、求める者が楽に〔探せる〕ように、熱望する者が簡単に〔探せる〕ようにと、至高なる神が〔私を〕助け楽にしてくださるようにとお頼り申し上げ、ご助力を請いつつ、章立てて並べた[FBM-IM 4]。

この序文よりイブン・アルムラჯジャーは、エルサレムのファダーイルに関する様々な伝承を幅広く含んだ著作を志していたことがわかる。前述したように FBM-IM には 625 に及ぶ伝承が含まれており、これは FBM-W の伝承数 165 の 3 倍以上に相当する。総数からエルサレム以外に対するファダーイルを除いたとしても、425 の伝承を数えることができ、この数はハディース集型 FBM の中では最大のものである。

イブン・アルムラჯジャーは、読者に対する便宜として、作品を章立てて構成するという編集手法を取っている。FBM-IM では作品が 115 の章に分けられ、同一のモチーフごとに伝承がまとめられて叙述されている。

また著者は同内容の伝承を同一の箇所でもとめて記述しているだけでなく、一部の章と章とのつながりにも工夫を見せている。例えば作品の第 1 章から第 12 章にかけては、天地創造の際、神は最初にハラーム・モスクとアクサー・モスクを大地の上に据えた、という伝承から、ダビデとソロモンによる神殿建設とネブカドネツアルによる破壊、イスラームの預言者ムハンマドの登場、ウマル・ブン・アルハッターブによるエルサレム征服、ウマイヤ朝カリフ＝アブド・アルマリク・ブン・マルワーンによる岩のドーム建設に至るまでの、エルサレムで起こった歴史的出来事に関する記述が時代ごとに配列されている。続く第 13 章から第 18 章までは、ハラム・シャリーフとオリーブ山にある各モニュメントとそこへの参詣作法に関する章であり、この部分も一連の内容となっている。この後の部分にも、聖なる岩の美德や岩のドームを始めとしたハラム・シャリーフの各モニュメントにまつわる預言者たちの伝承、エルサレムの神聖さや偉大さに関する伝承、終末思想などが、大まかにではあるがまとめて並べられている。

この一方で FBM-IM においても FBM-W と同じく、それぞれの伝承の真正性の検証や、著者本人による伝承の解釈などは行われていない。

FBM-IM のもうひとつの特色は、序文にも書かれていたように、作品の終わりにファダーイル・アルマサージド、ファダーイル・アッシャーム、ファダーイル・アルハリールが加えられているところにある。これらのエルサレム以外に関するファダーイルは作品全体のおよそ 3 割に及ぶ部分を占めている。イブン・アルムラჯジャーはファダーイル・アルマサージドとファダーイル・アッシャームの書き出しを、次のような言葉で始めている。

私はこの私の書の中で、神がそれをしてバイト・アルマクディスを特別なものとなさったところ

のもの、すなわち栄光あるファダーイルや偉大なる偉業の数々、その中でそれ以外のものが肩を並べるなどできないような〔すばらしい〕ものを語ってきた。さて私は、もし神がお望みになるならば、この後ファダーイル・アルマサージドを少し語ろう。それぞれの美德 *faḍila* は諸モスクについて述べられたものであるが、このモスク（バイト・アルマクディス）こそはその中でも多くの部分を占めるものであり、そしてそれは、神がそこにお与えになり、神聖で特別なものとなさったものによって、それらとは別個のものでもある。そここそが一番であり、そこに関する美德はもっとも偉大である [FBM-IM 366]。

ファダーイル・アルマサージドと、至高なる神がそれをしてモスクを特別なものとなさったところのもの、バイト・アルマクディスのモスクもその中に含まれるところのものを述べた後で、私は〔次は〕ファダーイル・アッシャームと、至高なる神がそれをしてそこを特別なものとなさったところのものについて述べよう。というのもこの聖なる地は、同じくそれ（シリア）全体の下に含まれているからである。もちろんそこ（バイト・アルマクディス）は、美点 *faḍl* にかけては最も価値のあるところであるが。というのもそこがシリアの軸であり、それゆえにシリアの大部分の美德があるのだから。ゆえにそれぞれの美德はシリアについて述べたものであるが、クドスがその中で最も多くの部分を占め、最も多く割り当てを受けるものなのである [FBM-IM 429]。

以上より、イブン・アルムラჯジャーがそれぞれのファダーイルをエルサレムやアクサー・モスクと深い関連を持つものであると見なしていること、それらの中にエルサレムやアクサー・モスクが要素として含まれているがゆえに、それらを本書の中で取り上げる意味がある、と考えていることがわかる。

またファダーイル・アッシャームに続く作品の末尾の部分にはファダーイル・アルハリールが取り上げられており、そこでは預言者アブラハムとその一族の墓に参詣することで得られる功德と、そこへの参詣作法に関する伝承が述べられている。本論第1章第2節において、ムスリムによるヘブロン参詣は4/10世紀以降盛んになり始めたとするエルアドの仮説を挙げたが、FBM-IMにおけるファダーイル・アルハリールの記述はこの仮説を裏付けているといえる。すなわち、少なくとも本書が編纂された5/11世紀半ばには、ヘブロンをエルサレム近隣にあるもうひとつの聖所としてひとまとめに捉え、エルサレム参詣とヘブロン参詣を連続して行うという習慣が確立していたことが伺える。

FBM-IMに含まれる625の伝承をカテゴリーごとに分類した場合、歴史的な伝承(AおよびB)がそれぞれ13.76%と15.36%、エルサレムの神聖さや偉大さに関する伝承(C)が21.28%、終末思想に関する伝承(D)が7.20%、奇跡譚(E)が1.92%、エルサレムにあるモニュメントやそこへの参詣に関する伝承(F)が4.32%、伝記(G)が0.16%、クルアーン解釈(H)が4.00%、エルサレム以外に関するファダーイル(I)については、ファダーイル・アルマサージドが15.36%、

ファダーイル・アッシャームが 8.96%、ファダーイル・アルハリールが 7.68%で、計 32.0%となっている。

FBM-IM は数多くの伝承を伝える作品であり、後代の多くの FBM がこれを直接の典拠としている。後代の作品に与えた影響の大きさという点において、本書は FBM 編纂の歴史の中で極めて重要な位置づけを持つ作品であると言える。

### (3) FQ

FQ の著者アブド・アッラフマーン・ブン・アリー・イブン・アルジャウズィー‘Abd al-Raḥmān b. ‘Alī b. al-Jawzī (d. 597/1201) は、バグダードで活躍した著名なハンバル派法学者である。時のカリフやワズィールたちの庇護を受けて彼らのマジュリス（評議や討論を行うサロン）に連なり、説教師あるいは著作家として高い名声を得ていた。541/1146-47 年と 553/1158-59 年にメッカ巡礼を行ったときを除いてイラクを離れたことはなく、生涯のほとんどをバグダードで過ごしたとされている [FQ 17-30; A’lām iii, 316]。FBM の著者としては、シリア地域の出身者であるか、あるいはエルサレム参詣経験を持つ人物が大部分である中で、シリアとほとんど地縁を持たないイブン・アルジャウズィーの存在は目立つものである。

FQ の編纂動機について、イブン・アルジャウズィーは作品の序文で、「ある敬虔な人が私に、ファダーイル・バイト・アルマクディスを語ってくれと頼んできた。そこで私は彼に、分類し章立てして〔ファダーイルを〕語ってやったのだが、彼はそのことによって、来世での報酬や褒美を求めていたのである」 [FQ 63] と述べているが、著者がこの時期に FQ を編纂したことの第一の契機は、やはり 583/1187 年のサラーフ・アッディーンによる十字軍からのエルサレム奪還であるだろう。FQ では、第 18 章「後〔の時代〕にバイト・アルマクディスで起こったこと」という章において、十字軍の侵攻とサラーフ・アッディーンによるエルサレム征服に関する事柄が次のように述べられている。

492 年シャアバーン月 23 日金曜日、ファランジュ（十字軍）がバイト・アルマクディスを占領した。彼らは 7 万人を越えるムスリムを殺し、岩〔のドーム〕から 40 数個の銀のランプを奪った。ランプのそれぞれは 3600 ディルハムに相当するものであった。また彼らはラトル・シャーミーにして *raṭlan bi-al-Shāmī*<sup>44</sup> 40 ラトルの銀の香炉や、10 数個の金のランプ、衣服など、数え切れないものを奪っていった。シャームの地より恐れ怯える人々がやってきて、ムスリムたちの上に起った事を我々に話してくれた。ダマスカスのカーディーであったカーディー・アブー・サード・ハラウィー Qāḍī Abū Sa’d al-Harawī がバグダードのディーワーンに立ち発言したが、それはそこにいた人々を嘆かせるものであった。彼はディーワーンの中で、軍隊に行った人のために嘆き悲しみ、人々にそ

<sup>44</sup> ラトルはイスラーム地域における重量の単位。シリアにおいては、1 ラトルは 1853 グラムに相当する [Ashtor 1991: EI2 vi, “MAKĀYIL”]。



の災いの様子を知らせた。イブン・アキール Ibn 'Aqīl その他の人を始めとする偉大なウラマーはそのことを嘆き悲しんだが、しかし彼らは言い訳したり自己弁護したりで尻込みしていた。バイト・アルマクディスは 583 年まで不信仰者どもの側にあったが、その後信徒の長ナーシル・リディーン・アッラー-Nāṣir li-Dīn Allāh のその地における代理人サラーフ・アッディーンが、その周辺の地域を支配した後、そこ〔の奪還〕に向かった。583 年ラジャブ月 27 日、サラーフ・アッディーンのリカブを持つユースフ・ブン・アイユーブがバイト・アルマクディスを征服し、その地にて自身の名においてフトバを行い礼拝したという知らせが我々のもとに届いた [FQ 125-128]。

この記述の存在より、FQ の編纂年代は 583/1187 年から、著者が没した 597/1201 年までの期間内のことであるとわかる。バグダード在住でありエルサレムと地縁を持たなかった著者が FBM を編纂した理由は、583/1187 年のエルサレム奪還のインパクトによるものと考えられるため、本書の編纂はこの年からさほど隔たっていない時期であろう。当時の著名なウラマーのひとりであり、カリフにも近い位置にいたイブン・アルジャウズィーは、ザンギー朝スルタン＝ヌール・アッディーンとも親交を持っていた。ヌール・アッディーンは 556/1161 年にアンティオキア侯に勝利した際、イブン・アルジャウズィーにそのことを伝える書簡を書き送っている [FQ 35]。このような立場にあったことで、彼はバグダードにいながらにしてある程度十字軍とシリアのムスリム勢力との事情に通じており、また関心も持っていたであろう。以上よりイブン・アルジャウズィーはサラーフ・アッディーンからのエルサレム回復の知らせを受けたことをきっかけに、キリスト教勢力に対するイスラームの勝利を記念するために、エルサレムに関するファダーイルを編纂したと考えられる。

FQ の校訂者ジブラーイー・ジャッブール Jibrā'il Jabbūr は、イブン・アルジャウズィーによるサラーフ・アッディーンのエエルサレム回復の記述が、著者の同年代の出来事であるにも関わらず非常に簡潔なものに過ぎないことから、著者は当時のエルサレムに関する情報を多く持っていなかったのではと述べている [FQ 14]。しかしながら FQ における記述の簡潔さが、必ずしも著者の情報や興味の欠如を意味するものであるとは言えないだろう。そもそもルマイリー ([表 1], 7) が 493/1099 年の十字軍によるエルサレム侵攻の際に、FBM の執筆途中にして殺害されて以降、イブン・アルジャウズィーに至るまでのおよそ 1 世紀の間、事件の渦中にあったシリア地域では FBM の編纂はまったく記録に残っていない。またこの出来事は、アイユーブ朝からマムルーク朝にかけて編纂されたハディース集型 FBM の中ではむしろほとんど取り上げられていない要素である<sup>45</sup>。このような状況においてこの記述が FQ に存在することは、むしろ著者の関心の高さを示すものだと言える。

---

<sup>45</sup> FBM においてサラーフ・アッディーンによるエルサレム征服の過程が詳細に述べられるようになるのはマムルーク朝末期成立の IA 以降のことであり、その典拠としてはイマード・アッディーン・イスファハーニーによる Fath が用いられている。またエルサレムが十字軍に占領されていた 100 年間については、UJ を除き FQ と同様の記述しかない。

イブン・アルジャウズィーがエルサレムという場所における、十字軍勢力を始めとする異教徒たちに対するイスラームの戦いと勝利というテーマに関心を持っていたことは、FQの第12章「バイト・アルマクデイスで起きた破壊や略奪」の章からも確認できる。この章は、クルアーン17章4-8節<sup>46</sup>の解釈に託してイスラエル王国やビザンツ帝国の墮落と、彼らによるエルサレム支配の崩壊、そこが最終的にムスリムによって支配されるという一連の歴史の流れを述べたもので、FBMの中でもFQにのみ登場するものである。イブン・アルジャウズィーはイスラエルの民が犯した「2つの害悪」について、1つ目を預言者イザヤ、あるいは預言者ザカリヤの殺害、2つ目を預言者ヨハネとイエスの殺害であるとする解釈を引用し、彼らの上にはその罰としてそれぞれバビロンと、ペルシアやビザンツによる侵攻が下されたとしている。しかしイスラエルの民に変わりエルサレムを支配していたビザンツの民も、ハラム・シャリーフを汚すという悪徳を行い、最終的にはウマル・ブン・アルハッターブ率いるムスリム軍に征服されたと述べる[FQ 99-109]。

預言者の殺害などの罪を犯したイスラエルの民が神の罰を受け、新しい神の民に侵略されるというモチーフは、FQ以外のFBMでも各所に見られる。リヴネ＝カフリはFBMにおけるこのモチーフについて、かつてキリスト教徒がユダヤ教徒に対して抱いていた意識が、ムスリムにも取り込まれたことの反映であるとしている。すなわち、かつてはキリスト教徒が自身を「墮落したユダヤ教徒に変わって現れた」新しい神の民と認識していたものが、今度はムスリムたちが、自分たちこそがさらにキリスト教徒に代わってその位置に就くべき存在であると見なすようになったということである[Livne-Kafri 1998; 2004]。このユダヤ教徒・キリスト教徒に代わる新しい神の民としてのムスリムというモチーフは、とりわけFQの第12章において端的に表現されている。FQにおけるこのモチーフの強調は、イブン・アルジャウズィーがサラーフ・アッディーンによる十字軍勢力からのエルサレム征服を意識して本書を編纂したことの結果であろう。

FQは著者本人が序文で述べている通り、27の章から構成されている。FBM-IM同様、同内容の伝承はひとつの章にまとめて叙述され、また各章の配列も、関連のある章同士は続けて並べるといった配慮が行われている。

FQもFBM-WやFBM-IMと同じくイスナードを備えた伝承記述を行っている。しかし先の2作品がすべての伝承に完全なイスナードを付していたのに対し、FQでは一部の伝承でイス

---

<sup>46</sup> クルアーン17章4-8節：「我らは啓典の中でイスラエルの子らに告げた、『お前たちは必ずや地上において2度も害悪を及ぼし、甚だしい思い上がりになるであろう』第1の約束が事実となったとき、我らはお前たちに、激しい力を備えた僕たちを遣わした。彼らは戸別に侵入して家探しした。こうしてこの約束は果たされたのである。その後我らは、再びお前たちをして反撃に転ぜしめ、お前たちに財産と子孫を補充して、兵力を強化してやった。『もしお前たちが善を行うならば、お前たち自身のために善を行ったことになる。もし悪を行うならば、それもお前たち自身のためである』第2の約束が事実となったとき、我らは彼らをしてお前たちの顔を悲しみで覆わせ、最初のときと同様、神殿に侵入させ、手当たり次第に破壊させた。おそらく主はお前たちを憐れみ給うであろう。もしお前たちが繰り返すならば、我らも繰り返すだろう。我らは不信者どもの牢獄としてゲヘナを造ったのである」

ナードの省略が起こっている。例えば伝承の書き出しを「伝承に詳しいウラマー曰く」[FQ 78, 110]等の言葉で始めたり、また「イブン・アッバース<sup>47</sup>曰く」[FQ 115]のようにイスナードの根元に来る著名な伝承家の名前のみを取り上げて、途中のイスナードは省略したりといった手法である。FQに登場する伝承の数をイスナードに従って数えると<sup>48</sup>、全部で111の伝承が含まれているが、そのうちの50にはイスナードの省略が見られる。

イブン・アルジャウズィーはイスナードが省略されていない残り61の伝承のうちの20を、ムバーラク・ブン・アフマド・アンサーリーAbū al-Mu‘ammār al-Mubārak b. Aḥmad al-Anṣārī (d. 549/1154) というバグダードのハディース伝承者 [FQ 72; A‘lām v, 269] から聞き伝えている。また7つを、彼の母方のおじに当たるバグダードのシャーフィイー派法学者ムハンマド・ブン・ナーシル・サッラーミーMuḥammad b. Nāṣir al-Sallāmī al-Dārī (d. 550/1155) [FQ 73; A‘lām vii, 121] より聞き伝えており、この2名がFQにおけるイブン・アルジャウズィーの主要な情報源となっている。

FQのイスナードの中には、FBM-Wの著者ワースィティイーを経由したものが26見られる。そのうちの17はFBM-Wの項で示したラムリーによるイスナードであり、FQではこれがワースィティイーを経由してムバーラク・アンサーリーに伝えられている (Walīd b. Ḥammād al-Ramlī→Faḍl b. al-Muhājir al-Lakhmī→‘Umar b. al-Faḍl al-Lakhmī→Muḥammad b. Aḥmad al-Wāsiṭī→‘Abd al-‘Azīz b. Aḥmad al-Naṣībī→Muḥammad b. Muḥammad al-Farrā’→Mubārak b. Aḥmad al-Anṣārī)。このことから、ワースィティイーが収集した伝承の一部が6/12世紀のバグダードでも知られていたことが確認できる。またFQには、イスナードの頭にワースィティイーの名前が付されている伝承もあり [FQ 77, 98]、イブン・アルジャウズィーが直接FBM-Wを参照している可能性も考えられる。

またFQの章構成についてFBM-WやFBM-IMに見られなかった新しい点としては、冒頭に「聖なる地 al-Arḍ al-Muqaddasa の美德」という章が置かれていることが挙げられる。これは、クルアーン5章20節にある「皆の者よ、神がお前たちのために定め給うた聖なる地に入れ」という預言者モーセの言葉と関連して、「聖なる地」とはシリアのどの地域を指すものであるのかという解釈と、「聖なる quds/maqdis/muqaddas」という言葉を踏まえた「バイト・アルマクディス」という地名の語源や意味について述べた部分である。クルアーン解釈と名称に関する伝承を作品の冒頭部に置くという形式は、後代のFBMにおいて踏襲されひとつの定型となっていくものである。

FQに含まれる伝承の数は、イスナードや伝承者名に従って数えた場合111となるが、FBM-W同様1つの伝承の中に複数の内容を含んでいるものもあるため、それを考慮した場合伝承の総数は117となる。これら117個の伝承をカテゴリーごとに分類すると、歴史的な伝承

<sup>47</sup> ‘Abd Allāh b. ‘Abbās (d. 68/687-88). 預言者ムハンマドの従弟であり、ハディース伝承者、クルアーン解釈家として著名な人物。

<sup>48</sup> イスナードの途中が省略されている場合、根元にある伝承者の発言ごとに1つの伝承と数える。

(A および B) がそれぞれ 29.91%と 11.97%、エルサレムの神聖さや偉大さに関する伝承(C) が 20.51%、終末思想に関する伝承(D)が 5.13%、奇跡譚(E)が 3.42%、エルサレムにあるモニュメントやそこへの参詣に関する伝承(F)が 1.70%、伝記(G)が 0.86%、クルアーン解釈(H)が 26.50%となる。なお FQ にはエルサレム以外に関するファダーイル(I)は含まれていない。

#### (4) MM

著者のアブド・アッラヒーム・ブン・アリー・イスナーイー‘Abd al-Raḥīm b. ‘Alī al-Qurashī al-Isnā’ī は、アイユーブ朝のエジプト、シリアで書記として活動した人物である。エジプトのイスナーで生まれ、クースで学問を修め、同地のインシャー庁に勤めた後にアレクサンドリアやエルサレムのインシャー庁に勤めた。その後アイユーブ朝のダマスカス君主マリク・ムアッザム・イーサー al-Malik al-Mu‘azzam ‘Īsā b. al-Malik al-‘Ādil Muḥammad b. Ayyūb (d. 624/1227) のもとでワズィールを務め、彼と親しい関係にあった。625/1228 年にダマスカスにて没している[A‘lām iii, 347; Mu‘jam ii, 133; KW x viii, 379-383]。FBM 著者の中には、法学者やマドラサの教授としての立場にいた人物が多い中で、イスナーイーは書記やワズィールを務めたという珍しい経歴を持っている。

MM の校訂本は出版されておらず、本稿ではダール・アルクトゥブ Dār al-Kutub al-Miṣriya 所蔵の写本 (MS. majāmi‘ 514) を参照している。本書はダール・アルクトゥブ写本の葉数にして 13 葉の小編である。序文には神と預言者ムハンマドへの賛辞が書かれているのみで、編纂の動機については触れられていない。作品の編纂時期についても限定できないが、「マリク・ナーシル・サラーフ・アッディーン・ユースフ・ブン・アイユーブが 583 年のある金曜日にそこを征服した」という、サラーフ・アッディーンのエルサレム征服に関する短い記述があり [MM 48b]、583/1187 年以降の編纂であることは明らかである。

MM の分量の小ささは、作品に含まれる伝承数が少ないことに加え、前述の 3 つの FBM にあったいくつかの要素を省略していることで成り立っている。まず MM では、すべての伝承でイスナードの省略が行われている。FQ と同様にイスナードの根元となる人物、あるいはそのイスナードを採用した権威あるハディース伝承者の名前のみを挙げてイスナードに代えている場合もあれば、イスナードを完全に省略して直接マトンの叙述を始めている部分もある。なお MM では、FBM-IM や FQ のような章立てはなされていない。またこれまでの 3 つの FBM と異なる部分は、それらの作品ではイスナードやマトンの文句が異なっているが同様の内容を持つ伝承を複数個並列していたのに対し、MM ではひとつの内容の伝承はひとつしか取り上げられないというところにある。またそのひとつひとつの伝承の分量についても、従来の作品で扱われていたものの一部を省略して短く切り取った形になっているものが多い。これらの省略の他、MM にはそれ以前の FBM にはない新しい要素も特には見られない。

MM で扱われる伝承のカテゴリーごとの割合については、エルサレムの歴史に関する伝承(A

および B) がそれぞれ 38.46%と 15.38%となっている。イスラーム以前の歴史(A)に比べるとイスラーム時代の歴史(B)の割合が少なくなっており、先の 3 つの FBM にはなんらかの形で取り上げられていた預言者ムハンマドのイスラーに関する伝承と、ウマルのエルサレム征服に関する伝承が、MM にはまったく含まれていない。これにエルサレムの神聖さ・偉大さに関する伝承(C) 35.38%が加わり、これらの要素の合計が全体の 9 割以上を占める主要素となっている。残りの 1 割ほどは、終末思想に関する伝承(D) 4.61%と奇跡譚(E) 1.54%、クルアーン解釈(H) 4.61%によって占められており、その他の要素は扱われていない。MM はその分量の小さいことと、現存する写本の数が少ないことから<sup>49</sup>、読者を想定し広く読まれることを目的として書かれた作品ではなく、イスナーイーが既存の FBM やハディース集から抜粋した、彼個人の覚書としての性格のものであったとも考えられる。

### (5) FBM-D

FBM-D の著者ディヤー・アッディーン・ムハンマド・ブン・アブド・アルワーヒド・マクデイスィー *Ḍiyā' al-Dīn Muḥammad b. 'Abd al-Wāḥid al-Maqdisī al-Dimashqī* (d. 643/ 1245) は、アイユーブ朝ダマスカスのハディース伝承者で、高名なハンバル派ウラマーの家系であるクダーマ家の一員である。クダーマ家は、もとはナーブルスの西に位置するジャンマーイール *Jammā'il* という村に居住していたが、551/1156 年、一族の長であったディヤー・アッディーンの祖父アフマドが十字軍の攻勢を逃れるため、当時ヌール・アッディーンのもとで政治的安定を保っていたダマスカスに一族を連れて移住した [Miura 1995: 132-133]。ディヤー・アッディーンはこのウラマーの一族の一員としてハディース学を学び、シリア、エジプト、イラク、中央アジアに至る様々な都市に旅をして、多くのハディースを収集した。595/1198-99 年以降から 601/1204-05 年にかけての時期にバグダードに滞留しており、その際晩年のイブン・アルジャウズィーからも伝承を伝え聞いたという。エルサレムには、サラーフ・アッディーンによるエルサレム征服後の 583/1187 年から 584/1188-89 年にかけての時期と、625/1227-28 年に訪問している。また彼の師のひとりには、ダマスカスのアサーキル家のアフマド・イブン・アサーキル([表 1], 11) もいる。ダマスカスに帰還後は、カシオン山のふもとのサーリヒーヤ地区 *Ḥāra al-Ṣāliḥiyya* に自らの名前を冠した学院 (*Dār al-Ḥadīth al-Ḍiyā'iyya/ al-Madrasa al-Ḍiyā'iyya*) を創設し、ハディースの教授や著作活動に従事した [FBM-D 9-19; A'lām vi, 255; Mu'jam iii, 468-69; SA x x ii, 26-27; x x iii, 126-130; KW iv, 65-66]。

本稿第 1 章第 1 節でも述べたように、本書は『ファダーイル・アッシャーム』と題された 3 部から成る作品の第 2 部にあたるものである。第 1 部と第 3 部については現存していないが、校訂者は第 1 部がファダーイル・アッシャーム、すなわちダマスカスに関するファダーイルで

<sup>49</sup> アサリーによれば、MM の写本はダール・アルクトゥップ写本の他には、アレppo大学所蔵のものがあのみである [al-'Asali 1984: 53]。

あり、第3部はガザやその他のシリアの諸都市に関するファダーイルであったと考えている [FBM-D 25-28]。

FBM-D は FBM-W や FBM-IM 同様、すべての伝承に完全なイスナードを付けたハディース集型 FBM である。イスナードの多くには著者ディヤー・アッディーンが伝承を聞いた場所が書き添えられており、彼はダマスカスやシリアの諸都市だけではなく、エジプト、バグダード、イスファハーン、ニーシャープール等の広い地域で、多数の伝承家から伝承を収集している。FBM-D にはワースィティイーを経由したイスナードが6か所見られ、そのいずれもマトンは FBM-W の記述内容に一致している<sup>50</sup>。しかしディヤー・アッディーンは、それらの伝承のうち5つはバグダードで、1つはエジプトで聴講しており、直接に FBM-W を参照していたわけではないようである。

また校訂者が底本としているザーヒリーヤ図書館 al-Maktaba al-Zāhiriya 所蔵の写本 (MS. 48) の余白部分には、それぞれの伝承をいつ誰がどこで読み上げ、誰が聞いたのかというサマーアート *samā'āt* が書き込まれている。これらのサマーアートによれば、本書に含まれている伝承の一部は、ディヤー・アッディーン本人が 632/1235 年から 642/1244 年にかけてディヤーニーヤ学院で講義したものであることがわかる。またディヤー・アッディーンの死後も、彼の弟子にあたる人物が 650/1252 年から 708/1308 年にかけて講義を行っている。サマーアートの記載に拠れば、650/1252 年から 686/1287 年にかけての時期には著者の兄の息子であるムハンマド・ブン・アブド・アッラヒーム *Muḥammad b. 'Abd al-Raḥīm b. 'Abd al-Wāḥid al-Maqdisi* (d. 688/1289) が、695/1296 年から 708/1308 年にかけてはスライマーン・ブン・ハムザ *Sulaymān b. Ḥamza b. Aḥmad al-Maqdisi* (d. 715/1315-16) という同じくクダーマ家出身の人物が、本書に含まれる伝承を講義している [FBM-D 122-125]。

すなわち本書はディヤー・アッディーン・マクディスィーの収集したファダーイル・バイト・アルマクディスを書き留めたものであり、さらにここに収められている伝承は、7/13 世紀ダマスカスのマドラサで実際に伝達されていたものである。真正な、権威ある伝承を収集あるいは伝達するという目的意識からか、FBM-D では一部の伝承についてその真正性の証明、あるいは批判が行われている。例えば、ある伝承はブハーリーやムスリムの『サヒーフ』においても同様のイスナードによって伝えられているため信頼できるとされており [FBM-D 40]、またある伝承は、イスナード中の伝承者たちのある者がよく知られていない人物であるため信頼できないとする意見もある、と加えられている [FBM-D 47]。

校訂者は、本書で扱われる伝承を 66 と数えている。本書は 20 の章に分けられており、FBM-IM や FQ のように、章ごとに同一のモチーフを持つがイスナードやマトンの表現は異なる

---

<sup>50</sup> 6つの伝承のうち4つはワースィティイーからイブン・アンナスィービーを経由したもの [FBM-D 56, 68, 90, 97]、2つはワースィティイーからムハンマド・ブン・ハムード・サッワーフ *Muḥammad b. Ḥamūd al-Ṣawwāf* という人物を経由したものである [FBM-D 46, 48]。

伝承が数個ずつまとめられている。FBM-D で扱われる伝承の内容には独自のものはなく、すべて従来の FBM の中に確認されるものであるが、伝承の選択には一定の傾向が見られ、その大部分が預言者ムハンマドから伝わるものとなっている。そのため従来の FBM の主要な要素であった、イスラーム以前のエルサレムの歴史に関する伝承(A)は、全体の 4.54%と少ない。預言者ムハンマドのイスラームをはじめとする、イスラーム以降のエルサレムの歴史に関する伝承(B)が 40.90%と、エルサレムの神聖さや偉大さを伝える伝承(C)が 39.39%と作品の大部分を占めており、この 2 つが FBM-D の主要な要素となっている。その他は終末思想に関する伝承(D)が 9.09%、奇跡譚(E)が 3.03%、伝記(G)が 1.51%、クルアーン解釈(H)が 1.51%である。

## (6) FBM-M

著者のイブラーヒーム・ブン・ヤフヤー・ミクナーシー Ibrāhīm b. Yaḥyā al-Miknāsī (d. 666/1267-68) は、7/13 世紀エジプトのシャーフイー派法学者である。ファルド *farḍ* (イスラーム法における宗教的義務) に詳しい人物であったこと、マグリブ、シリア、イラクに滞在経験があること以外には、彼の詳しい経歴は不明である [A'lām i , 79; Mu'jam i , 81; KW vi , 162]。

FBM-M は 2 部に分かれており、第 1 部がファダーイル・バイト・アルマクディス、第 2 部がダマスカスやその他のシリア諸都市に関するファダーイル・アッシャームとなっている。第 2 部のファダーイル・アッシャームが作品全体のおよそ半分に相当する 44.86%を占めており、作品の構成としては FBM-IM や FBM-D と同様、ファダーイル・バイト・アルマクディスとファダーイル・アッシャームを併記する形になっている。各伝承の記述方法に関しては、作品の序文で著者が「私はこの中で、見る者の助けとなるように、ばらばらになっていたものを集め、見えなくなっていたものを明らかにした。また私はこれを世に出すにあたり、大部分のイスナードを短縮し、そのほとんどを省略した」 [FBM-M 1b] と述べている通り、すべての伝承においてイスナードの省略が行われている。各伝承の前には、伝承の発信者となる人物 1 人の名前か、あるいはその人物から数えて 2~4 人分の伝承者の名前が挙げられているのみである。ただし、各伝承には必ず少なくとも 1 人の伝承者の名前が付されていることから、イスナードとマトンという 1 組の伝承のまとまりを判別することは容易であり、この点では FBM-M は従来のハディース集型 FBM の形式に従っていると言える。

FBM-M は 32 の章に分けられている。第 1 章がバイト・アルマクディスの名前の由来に関する章で、これが冒頭に置かれるのは FQ と同様の形式である。それ以外の章で扱われる伝承については従来の FBM と同様のもので、特に新しい要素は見られない。伝承の真正性の検証も行われていない。作品全体に占める各カテゴリーの割合については、全 370 の伝承のうち第 2 部の 166 のファダーイル・アッシャームを除き、ファダーイル・バイト・アルマクディス

204 のみに注目した場合（章末の[表 3] 参照）、そのうち歴史に関する伝承（A および B）がそれぞれ 13.78%と 16.17%であり、その他のハディース集型 FBM と比較するとやや割合が小さくなっている。エルサレムの神聖さ・偉大さに関する伝承(C)が 36.76%と作品の主要素となっていることは、これまでの FBM に同様である。終末思想に関する伝承(D)の占める割合は 17.16%と相対的に大きく、この他奇跡譚(E)が 3.92%、モニュメントに関する伝承(F)が 0.49%、伝記(G)が 0.49%、クルアーン解釈(H)が 11.27%となっている。

### (7) FBM-K

著者のムハンマド・ブン・カンジー *Muḥammad b. Muḥammad b. al-Ḥusayn al-Kanjī* (d. 682/1283) については、7/13 世紀エルサレム在住のウラマーであること以外は知られていない。サファディー *Khalīl b. Aybak al-Ṣafadī* (d. 764/1363) は彼のニスバを「アズィルバイジャーニー *al-Adhirbayjānī*」であるとしており、エルサレムの居留者 *nazil* であったと述べている [A'lām vii, 31; KW i, 230]。

作品の構成については、序文に「私は至高なる神に、私のシャイフたちから伝わるイスナードを付して、ファダーイル・バイト・アルマクディスについての 40 の章を編纂することを、至高なる神のお力でもって成功にお導き下さるようにと求めた」 [FBM-K 63b] とある通り、イスナードを伴った伝承が 40 の章に分けて叙述されている。イスナードに従って伝承を計数すれば、本書には 101 の伝承が含まれている。ただしこれらの伝承のうちイスナードが省略されず完全な形で書き上げられているのは、半数以下の 45 に過ぎない。残りの伝承については、FBM-M と同様最初の伝承者の名前か、あるいは最初から 2~4 人の伝承者の名前が挙げられているのみである。このような一部におけるイスナードの省略に関して、カンジーは作品の末尾に次のように記している。

これで私が収集したファダーイル・アッシャームは終わりであるが、それらはけっしてそうあるべき完璧な手法に則ったものではない。ハディースを伝えるイマームたち曰く、「我々が預言者〔ムハンマド〕から規則やスンナ、儀礼に関するハディースを語り伝える際には、正しく行わねばならず、『記憶力に優れ、誠実で信頼が置け、完璧であることで知られているところの人である某と某から〔伝えられた〕』〔という言葉をつげずして、そのハディースを得ることはできない。しかしながら我々が義務とされる以上の行いや任意の礼拝、ファダーイルに関することを語り伝える際には、我々はそれを免除される」。この選集もそうしたものである [FBM-K 97b]。

ここでカンジーは、ファダーイルを伝える際には、預言者ムハンマドのスンナに関する伝承を伝えるときほどには厳密な手続きを取らなくてもよいとする見解に従っている。

FBM-K の中で省略されていない 45 のイスナードを検証すると、カンジーはダマスカス、ア



レッコ、エルサレム、バグダードにおいて伝承を聞き伝えている。これらの地域は **FBM-D** の著者ディヤー・アッディーンほどには広いものではなく、バグダードを除けばシリアの都市である。伝承を聞いた場所が明らかになっているものでは、ダマスカスが最も多い。カンジーはこれらの伝承を、主に 3 人の人物から伝えている。すなわちイスマーイル・ブン・イブラーヒーム・タヌーヒー **Ismā'il b. Ibrāhīm al-Dimashqī al-Tanūkhī** というダマスカス在住の伝承家より 11 の伝承を、ファラジュ・ブン・アブド・アッラー・ハバシー **Faraj b. 'Abd Allāh al-Ḥabashī** という人物より 10 を、アレッコ在住のハンバル派法学者ユースフ・ブン・ハリール・ハラビー **Yūsuf b. Khalīl al-Dimashqī al-Ḥalabī** (d. 648/1250) より 4 つを伝えている。

また上記の 45 のイスナードの中には、ワースィティイーを経由しているものが 15 含まれており、そのすべてがワースィティイーから、**FBM-W** の聞き手であったイブン・アルナスィービーに伝えられたものである。またこれら 15 の伝承の内容は、いずれも **FBM-W** における記述に一致している [FBM-K 67b, 71a, 72b, 74b-75a, 76b-82a, 84b-87a]。このことから、**FBM-K** は直接 **FBM-W** を典拠としているわけではないにせよ、間接的には **FBM-W** の影響を受けていると言える。

伝承の内容や叙述方法については、従来の **FBM** に比べて特に新しい要素は見られない。作品内における各カテゴリーの占める割合については、イスラーム以前の歴史(A)が 26.73%、イスラーム時代の歴史(B)が 20.79%、エルサレムの神聖さ・偉大さに関する伝承(C)が 31.68%、終末思想に関する伝承(D)が 4.95%、奇跡譚(E)が 2.97%、モニュメントに関する伝承(F)が 1.98%、クルアーン解釈(H)が 10.98%と、**FBM-W** の構成に近いものになっている。

## 2. ハディース集型 **FBM** に見られる傾向

### (1) 著者の出身地と法学派

ハディース集型 **FBM** の著者たち、すなわちアッバース朝からマムルーク朝初期にかけて **FBM** を編纂した人物は、その大半がシリア出身である。シリア以外の地域で活動した人物には、バルフに生まれ、ブハラやバグダードで活動したブハーリー([表 1] 1)、バグダードのイブン・アルジャウズィーとムハンマド・バグダーディー **Muḥammad b. Muḥammad al-Baghdādī** (d. 643/1245) ([表 1], 14)、エジプトのミクナーシーの 4 名がいる。その他の編纂者はエルサレムやラムラ、ダマスカス出身、あるいはそれらの都市で活動した人物である。これよりこの時期の **FBM** 編纂は、基本的にはシリア地域で行われたものであると言える。

著者の所属する法学派に着目した場合、法学派が明らかになっている者のうちでは、シャーフィイー派に所属する人物 8 名と最も多く、2 名がハンバル派に属している。ただし、**FBM** 編纂とシャーフィイー派法学者との間に特別な関連性があると言いきることはできない。UJ

には、6/11世紀から9/15世紀にかけてのエルサレムとヘブロンで活動したスンナ派4法学派のウラマー357名の伝記を記した部分があるが、それに従えば、その63%にあたる224名がシャーフイー派、22%にあたる79名がハナフィー派、11%にあたる38名がマーリク派、4%にあたる16名がハンバル派に属している[UJ ii, 117-392]。FBM編纂者にシャーフイー派知識人の多いことは、シャーフイー派の優勢なシリア地域の状況を反映した結果に過ぎないとも見ることができ、現時点ではFBM編纂と特定の法学派との間に因果関係を指摘できない。

## (2) 各作品の構成と、カテゴリーごとの割合の異同

ハディース集型FBMに属する作品は、ハディース伝達的手法に則り、ある伝承の発言者にまで遡ることができるイスナードにマトンを合わせた形で記述されている。しかし一方ではイスナードの一部、あるいは全部の省略も始まっており、このような省略は6/12世紀末に成立したFQにはすでに見られるものである。

作品中の省略されていないイスナードを検討すると、3/9-10世紀のラムリーが収集した伝承の一部が、4/10-5/11世紀のワースィティイーとイブン・アルムラჯジャーに伝えられ、ワースィティイーからさらに後代のFBM編纂者に伝えられているという流れが見られた。この時期におけるFBM編纂では、ある編纂者が自作品の典拠として既存のFBMを書物の形で参照したかどうかについては、明確に示すことはできない。FQ、FBM-D、FBM-Kには、一部の伝承のイスナード中にワースィティイーの名が見られ、FBM-Wとマトンも一致する伝承が含まれていることから、作品の編纂者たちに伝承を伝えた人物が、書物の形でFBM-Wを参照している可能性はある。しかしながらこれらの作品の編纂者は、あくまで口伝の形で伝承を収集しており、ハディース集型FBMの編纂においては書物からの情報収集は間接的なものであったと言えよう。

イスラームにおける文字文化の発展について研究をおこなったヒルシュラーK. Hirschlerは、イスラームの最初の3世紀間は文字文化と口伝文化が相互に作用しながら混在しており、明確な文字文化が現れるようになったのは3/9世紀以降のことであるとしている。またヒルシュラーは、それ以降もハディース伝達の場面においては、依然として記憶に拠った口伝が重要視されていたが、4/10世紀以降紙の発明や簡略化された書体の使用により、書物の作成が容易になったことを経て、5/11世紀には口伝と書物を併用する風潮が生まれてきたと述べる[Hirschler 2012: 12-22]。ハディース集型FBMの編纂者が主に口伝による伝承収集を行っていることは、このような社会状況を反映するものである。

各作品に含まれる伝承の種類については、FBM-IMにおいてほぼ網羅されており、それ以降の作品の中にも目立って新しい要素は見当たらない。ハディース集型FBMで扱われる伝承は、5/11世紀のFBM-IMの時点でそのほとんどが収集されていたということである。本章第1節では、これらの伝承をA~Iの9つのカテゴリーに分類し、各作品における伝承数のパーセン

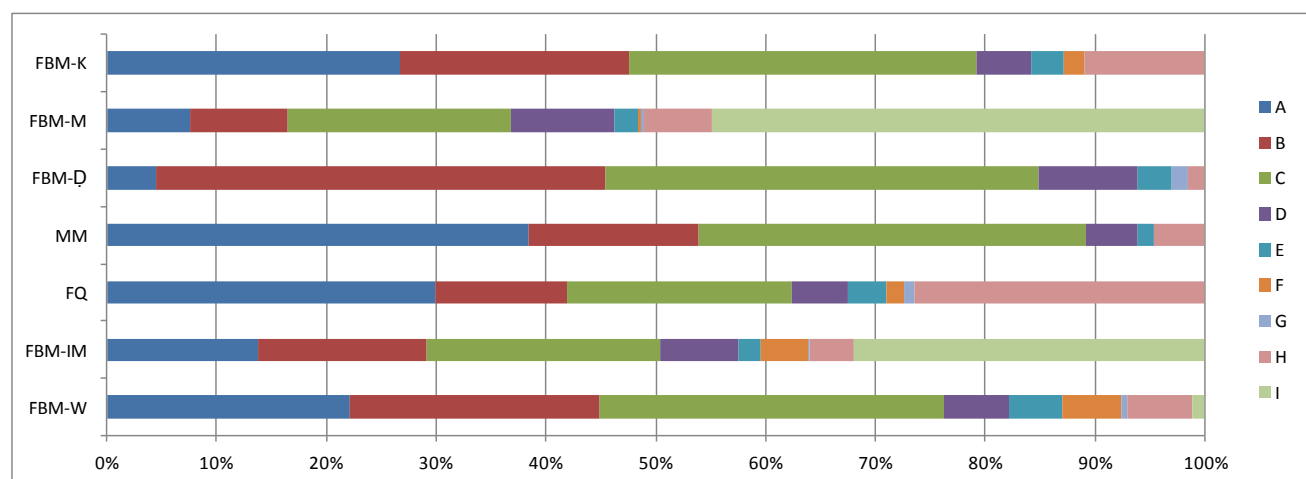
テージを算出したが、それを表にまとめたのが以下の[表 2]である。これを見る限りハディース集型 FBM においては、各作品の伝承の取捨選択に特定の傾向があるようには見えない。また FBM-W から FBM-K に至る作品の中で、時代による変化が見られるわけでもない。ここで対象とする伝承をエルサレムに関するもののみ(A-H)に限定し、その他のファダーイル(I)を除いて計算し直したものが[表 3]である。対象をエルサレムに関する伝承のみとした場合には、作品間でのばらつきがあるにせよ、エルサレムの歴史に関する伝承 (A および B) と、エルサレムの神聖さ・偉大さを伝える伝承(C)が作品を構成する主要素となっているという共通性が指摘できる。

[表 2]ハディース集型FBMにおける各伝承の割合

		A	B	C	D	E	F	G	H	I	合計
1	FBM-W	41 (22.16%)	42 (22.70%)	58 (31.35%)	11 (5.94%)	9 (4.86%)	10 (5.40%)	1 (0.54%)	11 (5.94%)	シャーム 2 (1.08%)	185
2	FBM-IM	86 (13.76%)	96 (15.36%)	133 (21.28%)	45 (7.20%)	12 (1.92%)	27 (4.32%)	1 (0.16%)	25 (4.00%)	シャーム 56 (8.96%) ヘブロン 48 (7.68%) モスク 96 (15.36%)	625
3	FQ	35 (29.91%)	14 (11.97%)	24 (20.51%)	6 (5.13%)	4(3.42%)	2 (1.70%)	1 (0.86%)	31 (26.50%)	—	117
4	MM	25 (38.46%)	10 (15.38%)	23 (35.38%)	3 (4.61%)	1 (1.54%)	—	—	3 (4.61%)	—	65
5	FBM-D*	3 (4.54%)	27 (40.90%)	26 (39.39%)	6 (9.09%)	2 (3.03%)	—	1 (1.51%)	1 (1.51%)	—	66
6	FBM-M	28 (7.57%)	33 (8.92%)	75 (20.27%)	35 (9.46%)	8 (2.16%)	1 (0.27%)	1 (0.27%)	23 (6.22%)	シャーム 166 (44.86%)	370
7	FBM-K	27(26.73%)	21 (20.79%)	32 (31.68%)	4 (4.95%)	3 (2.97%)	12(1.98%)	—	11 (10.89%)	—	101

\* 現存する第2部のみ統計とする

- A. エルサレムの歴史(イスラム以前)
- B. エルサレムの歴史(イスラム時代)
- C. エルサレムの神聖さ・偉大さを伝える伝承
- D. エルサレムと終末思想を関連付けた伝承
- E. エルサレムでムスリムたちが体験した奇跡譚
- F. エルサレムにあるモニュメントやそこへの参詣に関する伝承
- G. エルサレムに縁のムスリムたちの伝記
- H. クルアーン解釈
- I. エルサレム以外に関するファダーイル

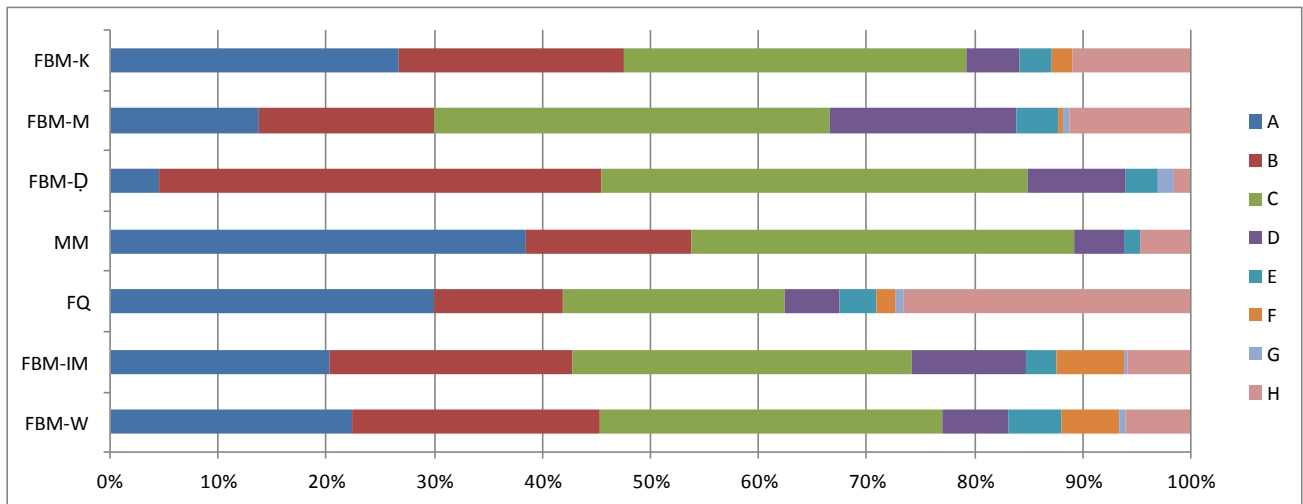


[表 3] ハディース集型FBMにおける各伝承の割合（エルサレムに関するファダーイルのみ）

		A	B	C	D	E	F	G	H	合計
1	FBM-W	41 (22.40%)	42 (22.95%)	58 (31.69%)	11 (6.01%)	9 (4.91%)	10 (5.46%)	1 (0.55%)	11 (6.01%)	183
2	FBM-IM	86 (20.24%)	96 (22.59%)	133 (31.29%)	45 (10.59%)	12 (2.82%)	27 (6.35%)	1 (0.24%)	25 (5.88%)	425
3	FQ	35 (29.91%)	14 (11.97%)	24 (20.51%)	6 (5.13%)	4(3.42%)	2 (1.70%)	1 (0.86%)	31 (26.50%)	117
4	MM	25 (38.46%)	10 (15.38%)	23 (35.38%)	3 (4.61%)	1 (1.54%)	—	—	3 (4.61%)	65
5	FBM-D*	3 (4.54%)	27 (40.90%)	26 (39.39%)	6 (9.09%)	2 (3.03%)	—	1 (1.51%)	1 (1.51%)	66
6	FBM-M	28 (13.73%)	33 (16.17%)	75 (36.76%)	35 (17.16%)	8 (3.92%)	1 (0.49%)	1 (0.49%)	23 (11.27%)	204
7	FBM-K	27(26.73%)	21 (20.79%)	32 (31.68%)	4 (4.95%)	3 (2.97%)	2(1.98%)	—	11 (10.89%)	101

\* 現存する第2部のみでの統計とする

- A. エルサレムの歴史(イスラーム以前)
- B. エルサレムの歴史(イスラーム時代)
- C. エルサレムの神聖さ・偉大さを伝える伝承
- D. エルサレムと終末思想を関連付けた伝承
- E. エルサレムでムスリムたちが体験した奇跡譚
- F. エルサレムにあるモニュメントとそこへの参詣に関する伝承
- G. エルサレムに縁のムスリムたちの伝記
- H. クルアーン解釈



### (3) 作品の編纂時期とその契機

本章の最後に、先行研究の論点のひとつとなっているハディース集型 FBM の編纂時期とその契機について考察を加えたい。

先行研究は、FBM 編纂の起源としてウマイヤ朝時代を、FBM 編纂が盛んになった時期として十字軍時代を設定しており、それぞれ、シリア・パレスチナに勢力基盤を置いたウマイヤ朝が、主要都市のひとつであったエルサレムの地位を高めるために FBM を推奨したこと、ヌール・アッディーンやサラーフ・アッディーンらが、対十字軍ジハードのためのプロパガンダとして FBM を利用したことを、その理由として提示していた [Sivan 1971: 100-110; Elad 1999a: 300-301; 1999b: 12-15; Hasson 1981: 172; Frenkel 1996: 70; Mourad 1996: 40-41; Duri 1981: 26, 29]。

まずウマイヤ朝時代に FBM 編纂が始められたことについて言えば、序において述べたよう

に、先行研究ではラムリーの存在をひとつの根拠として、FBM の起こりは遅くとも彼以前の 2/8 世紀にあるだろうと考えている [Elad 1991: 41-70; 1999b: 1-22; Mourad 1996: 34-39; 2008: 86-90]。しかしながらこの年代設定は、「ラムリーという特定の人物にイスナードが集中している」という理由のみから導かれるにしてはやや早すぎるきらいがある。ラムリーの情報源となった伝承者が 3/9 世紀後半あるいはその前後の時期に没しているとして、彼らが伝承を収集したと考えられる時期とは、早く見積もっても 2/8 世紀末から 3/9 世紀初頭にかけてであろう。記録に残る最古の FBM とされるブハーリーの著作([表 1], 1) が著された時期もおそらくはこの頃である。よってラムリーに繋がるイスナード検証から判断できる限りにおいては、既存の伝承がエルサレムに関するファダーイルとして認識・収集され、さらに書物の形での FBM 編纂が始まったのがこの時期であると言うべきである。

次に、FBM が十字軍時代に再び隆盛を見たとする議論は、FBM 作品の実際の編纂状況に照らし合わせれば、すぐに否定されるべきものである。記録に残る限りにおいて、十字軍によるエルサレム占領期間に編纂された FBM は存在しておらず、FBM 編纂の再開は、サラーフ・アッディーンのエルサレム征服を契機とした FQ 以降のことだからである。

FBM 編纂がサラーフ・アッディーン以降のアイユーブ朝時代に集中していることについては、当時のアイユーブ朝スルタンと十字軍君主たちの間でエルサレムが政治的な駆け引きの材料として用いられており、その帰属が不安定であった期間とも重なることから、そうした不安定な状況に対するムスリム側の防衛反応であったと捉えることは不可能ではない。しかしながら、この期間に編纂された FBM のうち現存する作品 (MM、FBM-D、FMB-M) の内容を見る限り、それらの中で扱われる伝承の種類や作品の形式がそれ以前の FBM-W や FBM-IM と大きく異なるということはなく、そもそもこれらの作品の中では十字軍に関する話題はほとんど出ていない。この時代に FBM の編纂が盛んになったのはむしろ、エルサレムがムスリム勢力の手に戻り、そこが再びムスリムの支配する都市として整備されることで、ムスリム知識人がエルサレムにアクセスすることが容易になった結果であると考えられるべきであろう。

以上のような状況から判断して、アイユーブ朝までのエルサレムと FBM 編纂を巡る状況については、以下の 2 つの仮説を導くことができる。1 つ目には、十字軍以前と十字軍占領期間のシリアにおいて、聖地としてのエルサレムの重要性は未だ十分には確立されていなかったのではないかということである。2 つ目には、FBM 編纂に対して十字軍が与えたインパクトは間接的なものであり、FBM は十字軍の存在そのものやその支配にではなく、ムスリムが十字軍からエルサレムを再征服した結果、そこがあらためてムスリムの町であると再認識されたことに影響を受けたのではないかということである。これらの点より、FBM 編纂や聖地としてのエルサレムの意義を考慮する上では、十字軍によるエルサレム侵略とムスリム勢力による奪還にのみ注目する従来の研究の視点を脱し、それ以降の状況の展開に注目することが必要になってくるのである。

### 第3章：マムルーク朝期のFBM

第3章では、8/14世紀初頭から9/15世紀末にかけてのマムルーク朝時代に成立したFBM6作品を検討する。FBM編纂の歴史において、アイユーブ朝からマムルーク朝にかけての時期は、FBM編纂が最も盛んになされた時期となっている。[表1]に従えば、583/1187年以降に編纂されたFQを区切りとすると、アッバース朝から十字軍時代にかけての約300年間に編纂されたFBMは、現存しないものを含めて7作品、900/1495年までの記述を含むUJを区切りとして、アイユーブ朝からマムルーク朝にかけての約300年間に21作品、以降オスマン朝時代の約300年間に6作品が編纂されている。

アイユーブ朝以降作品数の増加したFBMは、さらにマムルーク朝に入り、作品の内容や構成、編纂方針の点においても大きな変化を体験し、それまでのハディース集型FBMにはなかった新しい要素を持つようになる。そうした変化の1つ目の例が、FBMの編纂を参詣 *ziyāra* と結び付け、FBMにエルサレム参詣のためのガイドブックとしての意味合いを持たせたもの、2つ目が、従来のハディース集型FBMの内容に、エルサレムに関する地理的情報や同地で活動した著名人たちの伝記、あるいはより広範な歴史などを追加して、FBMをエルサレムの総合的な情報を提供する地誌へと発展させたものである。

以下ではマムルーク朝時代のFBMに見られるこれら2方向への変化に注意し、その変化の契機となる作品と、そこでの新要素が後代の作品においてどのように引き継がれていくかを検討する。

#### 1. エルサレム参詣とFBM編纂との結びつき（参詣記型FBM）

##### (1) BN

BNの著者イブラーヒーム・ブン・アブド・アッラフマーン・ファザーリー *Ibrāhīm b. 'Abd al-Raḥmān al-Fazārī* は、660/1262年ダマスカス生まれのシャーフイー派知識人である。ダマスカスの著名な学者の家系の出身であり、父親の後を継いでバーダラーイーヤ学院 *al-Madrasa al-Bādarā'īya* の教師を務めた。生涯の大部分をダマスカスで活動した人物で、729/1329年に同学院内で没し、市内の墓地に埋葬されている。本書以外の著作としては、*I'lām bi-Faḍā'il al-Shām* というファダーイル・アッシャームがあることが知られている [BN 19-23; *A'lām* i, 45-46; *Mu'jam* i, 34; *KW* vi, 43-44; *TS* ix, 312-313]。

ファザーリーは作品の序文において、イブン・アルムラッジャーによるFBM-IMと、カースィム・イブン・アサーキルによるJMの2作品を利用してBNを編纂したことを記しており、自著をこれら2作品からの「選集 *muntakhab*」であるとしている [BN 1-2]。ハディース集型

FBM では口伝による伝承の収集が行われていたのに対し、BN は書物を典拠とした編纂が行われている。

BN はこれら 2 作品の選集であるという言葉の通り、2 つのうち現存する方の FBM-IM に比べると分量の小さい作品となっている。このことは、BN の中で扱われる伝承数自体が FBM-IM より少ないということと、イスナードの省略によるものである。ファザーリーは同じく序文の中で、「私は利便性のために、それらのすべてのイスナードを省略した」[BN 2] と述べており、作品内では伝承を最初に伝えた人物や、ブハーリーなど権威あるハディース集の著者の名前を記すことでイスナードに代えている。このスタイルは第 2 章で取り上げた FBM-M と同様のものであり、BN においても大部分の各伝承の始めには最初の伝承者 1 名の名前が付されていることから、伝承の個数を数えることは比較的容易である。筆者はここで BN の伝承数を 152 と計数した。これは FBM-IM の伝承数 625 のおよそ 4 分の 1 に相当するものである。

第 1 章第 1 節でも述べたように、BN に含まれる 152 の伝承のうち 30 は FBM-IM とは共通しないものであり、この 30 の伝承は JM より引用されたものであると考えられるが、JM の完全な写本が見つかっていないため、この点を確認することはできない。本稿ではファザーリーの主張通り、本書を FBM-IM あるいは JM からの要約であり、著者がある編纂方針のもとに取捨選択したものであると考える。それではファザーリーは BN を編纂するにあたり、何に意識を置いていたのだろうか。

BN の序文には、本書が 13 の章から構成されることと、各章の題が書き上げられており、それらは次のようなものである。

第 1 章：バイト・アルマクディス、すなわちアクサー・モスクの建設の起こり

第 2 章：そこに向けて鞍を置くこと。そこを訪れることと、そこでランプを灯すことの美德。どこからそこに入るべきか。ベツレヘムに行きそこで礼拝することの美德

第 3 章：そこで礼拝することの美德。1 年のうちにハッジを行い、かつメディナとアクサー・モスクで礼拝を行うことの美德

第 4 章：バイト・アルマクディスよりイフラームすることの美德。そこでのアザーンの美德

第 5 章：そこでのサダカと断食の美德

第 6 章：岩の美德、それは樂園からきたものである

第 7 章：黒いタイルの美德。どこから岩〔のドーム〕に入るべきか

第 8 章：ミーラージュのドーム、預言者のドーム、ラフマ門、ザカリヤのミフラブ、モスク後方にある岩々、サキーナ門、ヒッタ門、ウマルのミフラブ、その他のミフラブ、預言者の門、オリブ山、鎖のドーム、タウバ門

第 9 章：バイト・アルマクディスの水、シロアムの泉、葉の井戸

第 10 章：サーヒラ、バイト・アルマクディスにて死んだ者の美德

第 11 章：それらの場所を回ろうと考える者、回らなかった者

第 12 章：ファダーイル・バイト・アルマクディス集

第 13 章：神の友〔アブラハム〕の墓の美德〔BN 2-4〕

以上の章題からは、本作品がエルサレム参詣を推奨し、その助けとなるようなものとして編纂されていることがわかる。例えば第 2 章から第 5 章にかけては、エルサレムで様々な宗教的に行いを行った者は罪を赦されて楽園に入ることができる、ということが述べられ、続く第 6 章から第 8 章にかけては、ハラム・シャリーフにある岩のドームやミーラージュのドーム、ハラムの壁や門など参詣すべきとされる場所を挙げ、それらの場所の由来や美德にまつわる伝承とともに、具体的な参詣作法について述べられている。BN で取り上げられている参詣作法は、すべて FBM-IM の該当部分を要約して引用したものである〔FBM-IM 78-101; BN 54, 61-63〕。

BN がエルサレム参詣を前提に編纂された作品であるということは、本書の第 13 章がヘブロン参詣に充てられていることから読み取ることができる。第 13 章「偉大なる神の友〔アブラハム〕の墓に巡礼することの美德」に出てくる伝承は、エルサレムの参詣作法に関する部分と同様に、FBM-IM から引用されている〔FBM-IM 459-493; BN 105-119〕。この章では預言者アブラハムと彼の子孫の伝記や、彼らの墓があるとされるヘブロンにまつわる美德とともに、ヘブロン参詣を推奨する伝承とそこでの参詣作法について述べられている。

神の友〔アブラハム〕、イサク、ヤコブのもとに参詣しようとする者には、次のようなことが望ましい。その意図を純粹なものとし、至高なる神に幸運とお助けを求める。2 度のラクア（直立、おじぎ、跪拝の 3 つの動作を 1 セットとした礼拝の基本単位）を行い、その後で至高なる神に保護を求める。慈悲深き方の友がその者から反逆を感じることがないようにし、その参詣にはいかなる非礼もあってはならない。というのも、預言者たちはその墓の中で生きているからである。それから自らを低め、心静かに赦しを求めながらその場所に向かう。そしてモスクに右足から入って、次のように言う。「神の御名において。神の使徒に平安あれ。おお神よ、ムハンマドとムハンマドの一族に祝福を与えたまえ。私をお赦しになり、私とすべてのムスリムに憐れみを垂れたまえ。まことにあなたは、あらゆる物事において力ある方であられます」。その後 2 度ラクアをし、モスクの永続を願う。それから神の友の墓に入り、どの方向からでもいいので彼の方に向かって立つ。そして彼に挨拶をして言う。「あなたの上に平安のあらんことを、預言者よ。神の恩寵と祝福のあらんことを。神の友に平安のあらんことを。神の恩寵と祝福のあらんことを」〔BN 112-113〕

4/10 世紀以降ムスリムによるヘブロン参詣が盛んになり、エルサレム参詣に連続してヘブロン参詣を行うという参詣ルートが確立されていたということは、第 1 章第 2 節 I において述べた通りである。BN の第 13 章でも、こうしたエルサレム・ヘブロン参詣ルートの存在を確認



できる。

BN では逆に、エルサレムの歴史に関係する伝承、例えばイスラエル王ダビデ、ソロモンによる神殿建設やバビロン王ネブカドネツアルによるその破壊、ローマ・ビザンツ帝国によるエルサレム支配、ウマルの征服、アブド・アルマリクによる岩のドーム建設などの伝承は、ほとんど取り入れられていない。これらは FBM-IM において、あるいはその他 BN 以前に編纂された FBM においては、1 つの内容につき異なるイスナードを経由した複数の伝承が挙げられるなど多くの紙面が割かれ、重要視されている要素である。こうした要素が BN において省かれているのは、それが参詣に直接結びつかないからであろう。

BN の 152 個の伝承を、ハディース集型 FBM の項で行ったようにカテゴリーごとに分類すると、[表 4] のようになる。歴史に関する伝承 (A および B) の割合がそれぞれ 18.42%、9.21% と比較的低いことは前述の通りである。エルサレムの神聖性・偉大性に関する伝承 (C) は 51.32% と全体の約半分を占めており、エルサレム参詣者に与えられる功德に関する話もここに含まれている。終末思想に関する伝承 (D) が 2.63%、奇跡譚 (E) が 3.29% と続き、モニュメントやそこへの参詣作法に関する伝承 (F) が 7.24% である。この 7.24% という割合は、ハディース集型 FBM における同項目の割合と比べるとやや大きく、またここに含まれる伝承 1 つの長さが長いこと、BN の中では伝承数以上の存在感を示す部分となっている。最後に BN では、ファダーイル・アルハリール (I) が 4.61% 含まれている。

BN におけるエルサレム・ヘブロン参詣作法に関する記述は、いずれも FBM-IM からの引用である。しかしながらこの部分は、現存する限りにおいて BN 以前の、4/11 世紀半ばから 8/14 世紀初頭に編纂された作品には引用されておらず、その時期の FBM 編纂者にとって FBM に必須の要素と見なされていたわけではないものである。それゆえファザーリーが FBM-IM からこうした要素を選び出していることは、彼が実際の参詣を意識して自身の作品の編纂を行ったことを示していると言える。

BN で再び取り上げられた参詣作法についての伝承は、以降複数の作品の中に引用されるようになっていく。BN は FBM に初めてエルサレム参詣記としての形式を与えたという意味で、FBM 編纂の歴史の中で重要な位置づけにある作品である。

## (2) TU

著者のアブド・アッラフマーン・ブン・ユースフ・アンサーリー 'Abd al-Raḥmān b. Yūsuf al-Anṣārī al-Miṣrī (d. 761/1360) はカイロ在住の知識人である。最初はシャーフイー派法学を学んでいたが後にハンバル派に転向し、カイロのハンバル派マドラサで教師を務めた [A'lām iv, 147; AA ii, 66-67; Ibrāhīm 318-320]。

TU には校訂本はなく、本論ではアラブ連盟写本研究所 Ma'had al-Makḥṭūṭāt al-'Arabiya 所蔵の写本を利用した (MS. tāriḫ 514)。TU も MM と同様に、わずか 8 葉の非常に小さな作品

である。作品の分量が小さいことは、MMと同じくイスナードの省略と、同一の内容の伝承は作品内に1つしか取り上げないという叙述方法によって成り立っている。

TUでは、スンナ派の主要ハディース集である六書の他、ハーキム・ニーサーブリー *Muḥammad b. 'Abd Allāh al-Ḥākim al-Nisābūrī* (d. 405/1014) による *Mustadrak 'alā al-Ṣaḥīḥayn fī al-Ḥadīth* や、バイハキー *Aḥmad b. al-Ḥusayn al-Bayhaqī* (d. 458/1065) による *Dalā'il al-Nubūwa* などの有名なハディース集からの伝承の引用が行われている。アンサーリーもファザーリーと同じく、口伝ではなく書物を典拠として作品を編纂していると考えられるが、ファザーリーとは異なる典拠を用いている。TUは短い作品ではあるが章立てはなされており、作品内には16の章が存在する。伝承者や典拠とされた書物の題を利用して、作品内に収められている伝承の数を数えると、73の伝承が計数できる。

TUの叙述方法について特筆すべき点は2つある。まず1点目は、作品の第1章において、エルサレムという場所や、そこで起きた出来事と結び付けて解釈されるクルアーンの章句に関する伝承が、まとめて並べられていることである。クルアーン解釈は従来のFBMでも扱われている要素であるが、そこでは「クルアーン解釈に関する伝承」として一か所に固めて記述されるということではなかった。TUのようにクルアーン解釈を作品の冒頭部にまとめて記述するという形式は、TU以降のFBMでも多く行われているものである。FQやFBM-Mで見られた「バイト・アルマクデイス」という地名の由来や意味に関する伝承とともに、この要素を作品の冒頭部に配置することは、後代のFBMの定型のひとつとなっている。TUではこの章の存在のために、作品全体に占めるクルアーン解釈に関する伝承(H)の割合が27.39%と、他の作品に比べてかなり高いものとなっている。

2点目は、作品の序文に「これらの紙片には聖なる地のファダーイルの一部が、そのモスクへの参詣を志す者にとって必要な知識という形で要約されている」[TU 1b] とあることから、TUもBN同様、作品の編纂がエルサレム参詣を前提として行われているという点である。このことはTUの最後の章からも推測することができる。TUの最後の章で著者のアンサーリーは、エルサレムにある一部のモニュメントについて現地の人間が誤って認識していると彼が見なした伝承と、それに対する批判を行っている。

我々はアクサー・モスクについて、土地の人々が述べていること、民衆や低級な人々が間違っ  
て思い込んでおり、何の価値もないようなことを見つけている。その中には、人間の行いが  
鐘となる例の天秤が置かれる場所であると彼らが言い張っている場所がある。またその  
近くにある別の場所については、彼らは、そこは樂園にかかる細い道 *al-ṣirāt* である  
と言い張っている……こうしたことは彼らの間では貴賤に関わらず有名な認識である  
が、これらはすべて真実ではなく、宗教的根拠のない作り話であり、むなしく人々の  
財を食いつくすことを意図して作られたものである [TU 8a]。

この部分の記述から、アンサーリーは実際にエルサレム参詣を行っており、その際に現地の人々の言動を見聞していたと推察できる。

このようなアンサーリーの「宗教的根拠のない作り話」に対する批判的態度は、彼と同時代のハンバル派法学者イブン・タイミーヤ **Taqī al-Dīn Aḥmad b. Taymiya** (d. 728/1326) による ***Qā'ida fī Ziyārat Bayt al-Maqdis*** という書物に見られる、彼のエルサレム参詣に関する態度に影響されたものである。

イブン・タイミーヤによる **Qā'ida** は、エルサレム参詣やエルサレムに関するフアダーイルについて述べた短い作品であるが、その編纂スタンスは **FBM** 作品群とは大きく異なるものである。イブン・タイミーヤはその著作の中で、ムスリムがエルサレム参詣を行うこと自体は推奨されるとしながらも、それにまつわる様々な伝承がクルアーンや預言者ムハンマドのハディースに基づき、シャリーアの規定に反さないものであるかどうかを吟味し、そうではないものに対しては厳しい批判を行った。例えば **FBM** 作品群には、メッカ巡礼に際してエルサレムよりイフラムを始めることを奨励し、預言者ムハンマドの教友たちもエルサレムからのイフラムを行っていたとする伝承があるが [**FBM-W 59; FBM-IM 211-213; FBM-D 88-89; BN 39-42; MG 211-214; IA i, 151-153**]、それについてイブン・タイミーヤは、「ハッジに合わせてそこへの旅を行うことは、神の意に適う行為ではない。[そうした行いが]『あなたのハッジを神聖なものとしてくれるのです』などと言う者の言葉は、根拠のない、意味のないものである」 [**Qā'ida 14**] と述べている。上記の箇所においてアンサーリーが最後の審判の天秤や細い道を否定しているのも、イブン・タイミーヤの「そこには細き道や天秤、あるいは楽園と地獄とを分ける壁—この壁というのはモスクの東に建てられたもののことである—があると主張している者もいる。同様に〔ダビデの〕鎖やその鎖があった場所を偉大視することも、シャリーアに適ったことではない」 [**Qā'ida 12**] という考えを受けたものである。イブン・タイミーヤは **Qā'ida** においてエルサレムに対し非イスラーム的な観念を持つことを厳しく批判しており、イスラーイーリーヤートより多くの伝承を取り入れてきた **FBM** とは全く異なっている。

アンサーリーはその他の個所でも信頼性のない伝承について、イブン・タイミーヤの言葉を引用して批判を加えている。例えば次の箇所は、預言者ムハンマドがイスラーの際に、エルサレム以外の場所で礼拝したという伝承についてのものである。

〔預言者ムハンマド曰く、ガブリエルは言った〕「ここはベツレヘム、汝の兄イエスの生まれた場所である。下りてここで礼拝せよ。そしてここは、汝の父アブラハムの墓である。下りてここで礼拝せよ」博学のイマーム、タキー・アッディーン・イブン・タイミーヤはこのハディースについて、「これは嘘であり、これに益などない」と言っている。これはつまり、彼が言っているように、このハディースはアブー・アルカースィム・マッキー・ブン・アブド・アッサラーム<sup>51</sup> が、神の友

<sup>51</sup> 5/11 世紀エルサレムの **FBM** 編纂者ルマイリーのこと ([表 1], 7)。

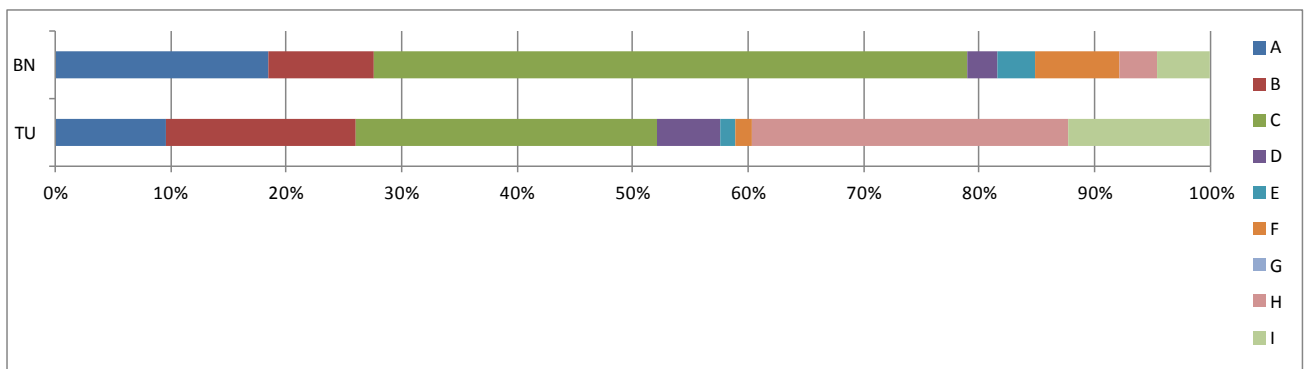
〔の町へブロン〕への参詣について著した書の中で述べていることであるが、彼はそれをよく知られていない人物たちを含むイスナードによって伝えているということである。すなわちこのハディースには、棄却された文言が含まれているのである [TU 7. b]。

アンサーリーが示したような一部の伝承や慣習に対する批判的態度は、TU 以外の FBM には確認されず、FBM 編纂者の態度としては一般的なものではないが、エルサレムはユダヤ教・キリスト教起源の聖地であるがゆえに、そこにまつわる伝承は常に、イスラームの純粋性を求める一部のウラマーの批判の対象となっていたことが伺える。アンサーリーはエジプトの出身であり、エルサレムやシリア在住の、彼が言うところの「土地の人々」ではないが、彼が既存の FBM を典拠とせず、権威があるとされるハディース集を利用しているのは、FBM に含まれる不正確な伝承を排除したいという意識の表れとも考えられる。

[表 4] BNとTUにおける各伝承の割合

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	合計
BN	28 (18.42%)	14 (9.21%)	78 (51.32%)	4 (2.63%)	5 (3.29%)	11 (7.24%)	—	5 (3.29%)	ヘブロン 7 (4.61%)	152
TU	7 (9.58%)	12 (16.43%)	19 (26.02%)	4 (5.47%)	1 (1.37%)	1 (1.37%)	—	20 (27.39%)	シャーム 9 (12.33%)	73

- A. エルサレムの歴史 (イスラーム以前)
- B. エルサレムの歴史 (イスラーム時代)
- C. エルサレムの神聖さ・偉大さを伝える伝承
- D. エルサレムと終末思想を関連付けた伝承
- E. エルサレムでムスリムたちが体験した奇跡譚
- F. エルサレムにあるモニュメントやそこへの参詣に関する伝承
- G. エルサレムに縁のムスリムたちの伝記
- H. クルアーン解釈
- I. エルサレム以外に関するファダーイル



## 2. MG-M における新要素の追加（地誌型 FBM）

### (1) MG-M の編纂方針

第 1 節では FBM がエルサレム参詣と関連して編纂された例を確認したが、第 2 節では FBM のもうひとつの方向性を与えた作品として、シハーブ・アッディーン・アフマド・ブン・ムハンマド・マクディスィー *Shihāb al-Dīn Aḥmad b. Muḥammad al-Maqdisī* による MG-M を取り上げる。

著者シハーブ・アッディーンは、714/1314 年エルサレム生まれのシャーフィイー派法学者である。エルサレムの著名なマドラサのひとつであるタンキズィーヤ学院にて *al-Madrasa al-Tankziya* にて学び、師であったアラーイー *Khalīl b. Kaykaldī al-‘Alā’ī* (d. 761/1359) ([表 1], 20)<sup>52</sup> の死後は同学院の教授職を務めた。生涯においてダマスカスとカイロに遊学の経験がある。765/1364 年に没したが、その場所としてはエルサレムであるという説とエジプトであるという説の 2 つがある。著書としては本書の他に、アブー・ダーウード *Abū Dāwūd Sulaymān b. al-Ash‘ath* (d. 275/889) による『スナン』の注釈書や、預言者ムハンマドのミーラージュや、シリアにおける教友のひとりであるタミーム・ダーリー *Tamīm b. Aws al-Dārī* (d. 40/600) にまつわる伝承に関する書物を残している [MG-M 23-39; A‘lām i, 224; Mu‘jam i, 239]。

MG-M の序文には、本書の編纂方針と構成について、次のように書かれている。

私はこの書をきちんと整理し、改正を行い、完全なものに仕上げ、明確なものとして著した。私はこの書を、あらゆるファダーイルの書の中で人々に注目される作品とした。私はこの書に出てくるハディースや伝承の状態を、大方のところ明らかにしておいた。〔すなわち〕真正なものか、脆弱なものか、預言者ではなく後世の人によって捏造されたものか、良好なものか〔ということを〕。〔私以前に〕ファダーイルに関する著述を行った人々はそうではなく、その著作に出てくるハディースを、〔その状態を〕明確にすることなくひとまとめに引用しているにすぎないからである。私はこの書を 2 つの部分で構成した。

第 1 部：シリアの美德、その〔地理的〕境界と〔語源的〕由来、その区分について言われていること、高貴なるクルアーンの中でその美德について述べられている章句について。それらはいくつかの章や節により構成される。

第 2 部：アクサー・モスクの美德、それが据えられたことの始まりとその構造の特別なことに関すること、最初の頃そこで起きた奇跡や伝承の数々について。の美德について述べられている章句について。それらはいくつかの章や節により構成される。

また私はこの書を、貴顕たちのうちかの地を訪れたことがある人々、彼らのうちそこに移住した

<sup>52</sup> ダマスカス出身のシャーフィイー派法学者。717/1317-18 年以降エルサレムに移住し、市内の多くのマドラサの教授職を務めた。724/1324 年以降はエルサレムの大カーディーも務める [KW x iii, 410-416; TS x, 35-38]。

人々の話、583年に〔サラーフ・アッディーンによって〕そこが征服されたときにそこで読まれたフトバでもって終えることにした。このフトバにはこの地の明らかなる美德が含まれているからである[MG-M 64]。

ここでシハーブ・アッディーンは、従来のFBMでは伝承が真正性の検証なしに収集されていたことに対し、正しい伝承学の手法に従っていないとして批判を加えている。この発言の通り、MG-Mでは作品内の多くの伝承に対し、イスナードの中に出てくる伝承者が信頼に足る人物であるか、またマトンそのものに十分な合理性があるかなどの検討を行っている。例えば、預言者のマウラトであったマイムーナ・ビント・サアド **Maymūna bint Sa'd** より伝えられた、エルサレムでの礼拝の功德を伝える伝承に対しては、次のような検証を加えている。

ズィヤード **Ziyād b. Abī Sa'da** と彼の兄弟ウスマーン **'Uthmān** については、イブン・ハッバーン **Ibn Ḥabbān** とマルワーン・ブン・ムハンマド **Marwān b. Muḥammad** が、彼ら2人は信頼できる人物であるとしている。我々のシャイフ、ザハビー **al-Dhahabī**<sup>53</sup> は、彼の **Mizān** の書の中で「このハディースは否定されるものである」と言っているが、それには強い根拠はない。このハディースのイスナードは我々が見てきたとおりであるが、ザハビーは、油をヒジャーズからシャームに贈るという内容が含まれていることから、このマトンを正当と見るべき根拠〔の不足〕について指摘している<sup>54</sup>。しかしながらこれは、このハディースを否定されるべきものであるとするには至らない[MG-M 193]。

伝承の真正性批判を重視する姿勢からか、シハーブ・アッディーンもアンサーリー同様、作品を編纂するにあたってはFBM以外の伝承集に依拠している。MG-Mの典拠として作品中に書名が挙げられている代表的な著作は、スンナ派の主要ハディース集である六書の他、ニーサーブリーの **al-Mustaḥṣā** や、バイハキーの **Dalā'il al-Nubūwa**、**Jāmi' al-Muṣannaf fī Shi'b al-Īmān** などである。既存のFBMについては、ワースィティエーのFBM-Wとイブン・アルムラッジャーのFBM-IM、カーシム・イブン・アサーキルのJMからの引用があり[MG-M 143, 149-151, 175]、この3作品については直接参照しているものと考えられる。また作品の結びの部分には、本書以前にFBMを著した人物として、上記の3名の他、FQの著者イブン・アルジャウズィーとFBM-Mの著者ミクナーシー、BNの著者ファザーリーの名前が記されており、シハーブ・アッディーンがこれらの作品の存在を知っており、内容を把握していたことがわかる。

なおシハーブ・アッディーンは、脆弱なイスナードによる伝承であってもいったん作品中に

<sup>53</sup> **Muḥammad b. Aḥmad al-Dhahabī al-Dimashqī** (d. 748/1348). ダマスカスのシャーフィイー派知識人で、シハーブ・アッディーン・マクディスィエーの師のひとり[MG-M 25]。

<sup>54</sup> シャームはオリーブが多く産出される地であり、反対にヒジャーズ地方にはオリーブの木が少ないのに、なぜそのヒジャーズからオリーブ油の豊富にあるシャームにわざわざオリーブ油を送らねばならないのかが理解できない、という意味か。

取り上げ、その上で批判を加えて「これは信用できない伝承である」と結論づけるというスタイルを取っている。このことから著者は、ただエルサレムに関する真正な伝承を集めることだけではなく、従来の FBM に含まれていた「弱い」伝承をも振り返って、そこに正しい判断を加えることを目的としていたと言える。

MG-M、あるいはそれ以降の FBM 作品に関しては、ハディース集型 FBM のように単純に伝承を引用しているだけではなく、著者による再構成や著者自身の見解などが入ってきて構成が複雑になるため、作品内の伝承数を数えることが難しくなる。よってここでは MG-M の伝承数を提示できないが、上記のように多数の伝承を取り上げてそこに検証を加えていることにより、MG-G の作品全体の分量は FBM-IM に次ぐ大きなものとなっている<sup>55</sup>。

## (2) MG-M に見られる新しい要素

シハーブ・アッディーンが MG-M を編纂するにあたって、既存の FBM だけではなくその他多くの著作を参照していることは、本書の内容面での新しさにも繋がっている。序文で述べられていたように、MG-M は大きく分けて 2 つの部分から構成されている。第 1 部がファダーイル・アッシャーム、第 2 部がファダーイル・バイト・アルマクディスに関する部分である。ファダーイル・バイト・アルマクディスとファダーイル・アッシャームの 2 部構成というスタイル自体は、FBM-D や FBM-M にも見られたものである。

MG-M の 2 部は、さらにいくつかのまとまりに分けることができる。第 1 部は、①クルアーンの中でエルサレムやシリアのことを述べている箇所について（クルアーン解釈）、②「シャーム」という地名の由来、③シリアの地理的な境界、④シリア地域、ダマスカスやその他の都市に関するファダーイルの 4 つの部分に大別できる。次に第 2 部は、①アクサー・モスクやハラム・シャリーフの成立の歴史（ダビデとソロモンによる神殿建設、ウマルによるエルサレム征服、アブド・アルマリクによる岩のドーム建設含む）②エルサレムに関するファダーイル（冒頭にエルサレムの名称についての情報含む）、③エルサレムに縁の預言者や著名なムスリムの伝記の 3 つの部分に大別できる。

第 1 部の初めの 2 つの要素、すなわちクルアーン解釈と、その土地の名称の由来やヴァリエーションに関する伝承の 2 つをこの部分の冒頭に置く記述スタイルは、すでに FQ や TU において確認されており、MG-M 以降も FBM 記述の定型となっているものである。しかしここで注目したいのは、「シリアの地理的な境界」[MG-M 84-87] という部分である。

この部分は、シリア地域の東西南北の境界線がどこにあり、それらの間が何日行程の距離であるかということと、シリア地域をパレスチナ行政区、ハウラーン行政区、グータ行政区、ヒムス行政区、キンナスリーン行政区の 5 つの行政区に分けて示し、それぞれの行政区にどのよ

---

<sup>55</sup> MG-M の校訂本の底本となっているパリ写本(Bibliothèque Nationale de France, MS. 1667) では 1 ページ 17 行×119 葉、FBM-IM の校訂で使用されているダール・アルクトゥップ写本 (MS. tārikh 3194) が 1 ページ 20 行×123 葉である。

うな中心都市と周辺都市があるかということ述べている。シハーブ・アッディーンはこの部分を、主にイブン・フルダズビフ 'Ubayd Allāh b. Aḥmad Ibn Khurdādhbih (d. c. 280/893) による *Masālik wa al-Mamālik* より引用している。このようなシリアに関する地理的な情報が **FBM** に組み込まれるのは、**MG-M** が初めてである。

第 2 部についても、構成と記述内容の両面において新しい要素を見ることができる。第 2 部では、エルサレムに関する伝承の中から、まずハラム・シャリーフの起こりと、その後のイスラエル時代とイスラーム時代における建設・整備事業といった、ハラム・シャリーフの形成と発展に関する伝承がひとまとめにして最初に置かれ、その他の、主にエルサレムの偉大性・神聖性に関する伝承が続いている。そしてこれに続く作品の終わりの部分には、従来の **FBM** には見られなかった「伝記集」という形式での記述がある。

この伝記集部分の冒頭では、「預言者がイスラーの夜、アクサー・モスクにて他の預言者たちの先頭に立って礼拝したこと」という項があり、ここで預言者ムハンマドがエルサレムにイスラーした際、そこでアダムをはじめとするその他の預言者たちに出会い、彼らのイマーム(導師)となって礼拝を行ったということに関連づけて、ムハンマドのイスラーに関する一連の伝承が取り上げられている [**MG-M 265-268**]。以降彼ら預言者たちひとりひとりの名前を時代順に挙げ、彼らの生涯の事績やエルサレムとの関わりなどが述べられる。なおダビデとソロモンによる神殿建設のエピソードについては、第 2 部の最初にあるハラム・シャリーフの形成と発展に関する伝承ですでに扱われているため、ここでは除かれる。**MG-M** では 18 名の預言者たち(ズー・アルカルナインとマフディーを含む)の名前が挙げられている(第 4 章第 1 節に挙げる[表 5]を参照)。この部分で述べられる記述内容は従来の **FBM** にも見られるものであるが、**MG-M** の新しい点は、それらを人物ごとにまとめて再編成しているところにある。

続いて伝記はムスリムのもに入り、ここではウマル・ブン・ハッターブをはじめとするムハンマドの教友たちや、タービウーン第 1 世代、そして第 2 世代以降の、1/7 世紀から 6/12 世紀のムスリム 96 名の名前が挙げられている。これらの人物はいずれもエルサレムを訪れた経験を持つか、あるいはエルサレムに生まれ同地で活動した人物であり、それぞれの項では彼らの生没年やエルサレムでの行いが記されている。なおダビデとソロモンの神殿建設同様、ハラム・シャリーフ整備に関わりのあるウマルの征服とアブド・アルマリクの岩のドーム建設のエピソードについては、すでに述べられているためここでは取り上げられない。従来の **FBM** にも出てきた教友たちや、ウマイヤ朝・アッバース朝カリフたちのエルサレムにまつわる言動は、この部分でそれぞれの人物ごとにまとめられている。

ムスリムたちの伝記の最後から 2 番目の項目が、アイユーブ朝スルタン=サラーフ・アッディーンのものとなっている。**MG-M** の序文において「583 年に〔サラーフ・アッディーンによって〕そこが征服されたときにそこで読まれたフトバでもって終えることにした。このフトバにはこの地の明らかなる美德が含まれているからである」 [**MG-M 64**] とあった通り、ここで



はサラーフ・アッディーンの名のもとに、彼のダマスカスにおけるカーディーであった、ムフイー・アッディーン・ブン・ザキー・アッディーン *Muḥyi al-Dīn Muḥammad b. Zakīy al-Dīn ‘Alī al-Dimashqī* (d. 598/1202) が行ったフトバの文言が引用されている。サラーフ・アッディーンの項は、ほとんどがこのフトバの引用で占められており、エルサレム征服を含む彼の生涯の事績については短い記述しかない。ここでのシハーブ・アッディーンの目的は、彼の発言にある通り、このフトバの中で述べられているエルサレムのファダーイルを示すことにあったのであろう。このサラーフ・アッディーンのフトバは MG-M 以前の FBM には見られなかった要素であり、シハーブ・アッディーンはこのフトバを、イブン・ハッリカーン *Aḥmad b. Muḥammad Ibn Khallikān al-Barmakī* (d. 681/1282) による伝記集、*Wafayāt al-A’yān wa Anbā’ Abnā’ al-Zamān* の「ムフイー・アッディーン・ブン・ザキー・アッディーン」の項より引用している [WA iv, 229-237]。

以上のように MG-M では FBM 以外の豊富な典拠を用いた編纂が行われており、従来の FBM にはなかった、地理的情報や伝記集といった新要素が盛り込まれた内容となっている。シハーブ・アッディーンは MG-M の編纂にあたり、従来の FBM の枠にはまらない、より幅広い内容を含む作品を意識していたと言える。

### 3. 2つの方向性の融合

マムルーク朝時代に入り、FBM の編纂は BN と MG-M という 2 つの革新的な作品によって、エルサレム参詣と結び付いた編纂スタイルと、エルサレムに関するより広範な情報を取り入れる編纂スタイルという、新しい方向性を獲得した。これら 2 つのスタイルはともに、9/15 世紀後半に連続して編纂された RM と IA の中に受け継がれていく。

#### (1) RM

著者のアブド・アルワッハーブ・ブン・ウマル・フサイニー *‘Abd al-Wahhāb b. ‘Umar al-Ḥusaynī al-Dimashqī* は、9/15 世紀シリアのシャーフィイー派法学者であった人物である。彼のフサイニーという名は、預言者ムハンマドの孫であるフサイン・ブン・アリー *Ḥusayn b. ‘Alī* (d. 61/680) に由来している。彼は 800/1397-98 年以降の年にダマスカスで生まれ、同地で教育を受けた。カーミル・ブン・バーリズィー *Kāmil b. al-Bārizī* という人物に同行してカイロに赴き、そこでも様々な知識人について学んでいる。帰郷後はこのカーミルの代理人としてダマスカスのカーディーや教授の職を務め、カーミルの死後にはアレッポのカーディーを務めた。後にアレッポでの職を辞して故郷に戻り、ダマスカスの自邸にて勤行に励む生活を送ったという。フサイニーは生涯何度もメッカ巡礼を行ったとされ、875/1470 年メッカ巡

札中に没し、メッカ近郊のマアラート *Ma'lāt* に埋葬されている [DL v, 106; *Ibrāhīm* 1985: 437-440]。

フサイニーは 871/1466-67 年にエルサレムに参詣しており、そのときのことを RM の序文で次のように記している。

私は 871 年にアクサー・モスクを訪れた。私のそこでの滞在は 4 か月弱であった。私はそれらの神聖なる土地、高貴にして栄光ある参詣場所を見て、それらのファダーイルについて知りたいと思うようになった。というのも、そこへの参詣者としての用意ができていなかったからである。そこで私はその学識ある人に、その地にまつわる知識について尋ねた…しかし私は、何ひとつ答えてもらえなかった。そこで私はそうしたことに関する書物を求めたのだが、見つけれなかった。ゆえに私は寛大なる与え手たる讃えられし至高なる神に、そうしたことを容易にしてくれるものを編纂することについて、導きを求めることにした [RM(B) 123b-124a]。

この部分より、フサイニーはエルサレム参詣を契機として FBM の編纂に興味を持ったと考えられる。RM の結びには、本書が 872 年ラビーウ・アルアッワル月 19 日 (1467 年 10 月 27 日) に完成したことが記されており [Ibrāhīm 1985: 458-459]<sup>56</sup>、彼は本書をエルサレム滞在中か、あるいはその直後の時期に執筆したということになる。

フサイニーは「エルサレムに関するファダーイルの書を見つけることができなかった」としつつも、実際にはファザーリー同様既存の作品を典拠として自著の編纂を行っており、続く序文でそうした書物の名前を挙げている。この記述の矛盾は、フサイニーの要求を十分に満たす内容を備えた FBM が存在しなかったために、自著をものしたのであると理解できよう。いずれにせよ、彼は主たる引用元として 11 冊のファダーイルの書を挙げており、それらは順に FBM6 作品、3 聖地のモスクとそこへの参詣に関するファダーイルの書 2 作品<sup>57</sup>、ファダーイル・アッシャーム 2 作品<sup>58</sup>、ファダーイル・アルハリール 1 作品<sup>59</sup>である。

フサイニーが典拠とした FBM を成立年代順に挙げれば、イブン・アルジャウズィーの FQ、カーシム・イブン・アサーキルの JM、アフマド・イブン・アサーキルの UFQ、ファザーリー

---

<sup>56</sup> イブラーヒームによるメディナ写本 (MS. 900/114) からの部分翻刻を利用。

<sup>57</sup> Muḥammad b. Bahādir al-Zarkashī (d. 794/1392), *I'lām al-Sājid bi-Akhkām al-Masājid*; Aḥmad b. al-'Imād al-Aqfahsī (d. 808/1405), *Tashīl al-Maqāsīd li-Zuwwār al-Masājid*.

<sup>58</sup> 'Alī b. Muḥammad al-Rabā'i (d. 444/1052), *Faḍā'il al-Shām wa Faḍl Dimashq*; al-Fazārī, *I'lām bi-Faḍā'il al-Shām*. なおこのファザーリーは BN の著者と同一人物である ([表 1], 18)。

<sup>59</sup> Ishāq b. Ibrāhīm al-Tadmurī (d. 833/1430), *Muthīr al-Gharām fi Ziyārat al-Khalīl*. 著者であるタドムリーはフサイニーとミンハージーの同時代人で、ヘブロン・モスクのイマームを務めた人物である [A'lām i, 293; Mu'jam i, 338; SA ii, 276-277]。

一の BN、アライーの MU、シハーブ・アッディーン・マクディスィーの MG-M となる。フサイニーはさらにアフマド・イブン・アサーキルとファザーリー、シハーブ・アッディーン・マクディスィーの作品の序文を引用し、アフマド・イブン・アサーキルが彼の父方の従兄にあたるカースィムの作品を直接の典拠としていること、ファザーリーがカースィム・イブン・アサーキルの JM とイブン・アルムラჯジャーの FBM-M を直接の典拠とし、また「利便性のために、それらのすべてからイスナードを省略した」上で編纂を行っていること<sup>60</sup>、シハーブ・アッディーンが彼以前の FBM 編纂者とは異なり、作品内の各ハディースの真正性を明示するという編纂方針を取っていること<sup>61</sup>を述べている。なおフサイニーは、シハーブ・アッディーンが批判する「彼以前の FBM 編纂者」とはカースィム・イブン・アサーキルを指すものであるとしている。

フサイニーは典拠情報に続けて、序文の中で本書を 37 の章に分けて構成したと述べ、それぞれの章題を挙げている。それによれば RM の章構成は、第 1 章がエルサレムの名称についての章、第 2～6 章がアクサー・モスク設立の由来とその美德についての章、第 7～12 章がエルサレムで宗教的行いをした者に与えられる功德についての章、第 13～28 章がエルサレム市内外のモニュメントにまつわる伝承と、それらの場所に参詣する際の作法についての章、第 29～30 章がウマルによる征服と、アブド・アルマリクによる岩のドーム建設についての章、第 31 章がエルサレムのその他のファダーイル集、第 32～34 章がエルサレムに縁のある預言者、教友、タービウーンの中で著名な人々の伝記集、第 35 章が預言者アブラハムと彼の一族の伝記とヘブロン参詣についての章、第 36 章が預言者モーセの墓についての章、第 37 章がファダーイル・アッシャーム集となっている [RM(B) 125b-127a]。

RM の章構成はファザーリーの BN のそれによく似ており、これに倣ったものであると考えられる。BN にない要素としては、第 1 章のエルサレムの名称についての章と、第 32～34 章の伝記集、第 36 章のモーセの墓についての章、第 37 章のファダーイル・アッシャーム集がある。第 1 章については、すでに TU や MG-M においても述べられている要素であるが、フサイニーはこの章を、MG-M の第 2 部と、MG-M の後にザルカシーによって編纂されたファダーイル・アルマサージド集である IS より引用している [MG-M 190; IS 277-279; RM(B) 128a-129a]。第 32～34 章と第 37 章は、イブラーヒームが MG-M からの引用であることを指摘している [Ibrāhīm 1985: 453]。第 36 章については、筆者が確認できたベルリン写本にはない部分であり、かつイブラーヒームも部分校訂を提示していないため、その内容を直接把握することはできない。しかしながら RM の記述内容は、後述するように IA から推測が可能であり、IA から判断するにこの章には、従来の FBM やその他のハディース集、預言者伝などに見られたモーセの生涯と、彼の墓とそこへの参詣にまつわる伝承がまとめられていると考えられる。同様に第 35 章のアブラハムの章においても、BN や FBM-IM で扱われていなかった内容について

<sup>60</sup> RM(B) 124a. この部分の引用は BN の序文の内容に一致する。

<sup>61</sup> RM(B) 124b. この部分の引用は MG-M の序文の内容に一致する。

ては、タドムリーによるファダーイル・アルハリールを参照して補っているものと考えられる。

以上のようにフサイニーは、BNからはエルサレム・ヘブロン参詣に関する一連の内容、MG-Mからは伝記集とシリアの地理的要素を含むファダーイル・アッシャームという、2つの新しい要素を共に RM の中に取り入れている。さらにフサイニーはモスクやヘブロンに関するファダーイルの書も主要な典拠としており、その結果 RM の情報量は FBM 作品群の中でも最大のものとなっている<sup>62</sup>。

RM はマムルーク朝時代の FBM 編纂の流れを見る上で重要な作品であるが、本論第 1 章でも述べたように完全な写本がメディナ写本しか残っていないため、研究者が利用しにくい作品となっている。しかしながら RM の内容は、本書と同時代に編纂された IA の中にほぼ同じ形で取り入れられており、IA を参照することでこのような RM のベルリン写本の欠落を補うことが可能である。次項では RM を主要な典拠として編纂された IA を取り上げ、RM と合わせて 2 作品の形式や内容について考察する。

## (2) IA

IA の著者ムハンマド・ブン・アフマド・ミンハージー **Muḥammad b. Aḥmad al-Minhājī al-Suyūṭī** は 813/1410 年エジプトのアスユートに生まれたシャーフィイー派法学者であるが、彼の前半生については、アスユートにて育ちその後カイロに移住したこと以外は知られていない。848/1444 年よりメッカ巡礼に出発するが、そのことは IA の序文でも述べられている。

それによれば、ミンハージーは 848 年ラビーウ・アルアッワル月（1444 年 6 月）にメッカに到着しウムラ（巡礼月であるズー・アルヒッジャ月以外の期間に行うメッカ巡礼）を行った後、そのままズー・アルヒッジャ月までメッカに滞在し、続けてハッジを行った。翌 849 年の初め（1445 年 4 月）にメディナに向かい、預言者ムハンマドの墓に参詣し、その年のズー・アルヒッジャ月には再びメッカに戻って 2 回目のハッジを行っている。そして 857 年の初め（1453 年 1 月）まで 7 年間メッカに滞在した後、およそ 9 年間に渡るヒジャーズ滞在を終えてカイロに帰還した。彼はこのヒジャーズからの帰途にエルサレム参詣を行いたいと考えていたが、この時点ではエルサレムに向かうことはできなかった。カイロ帰還後、ミンハージーはマムルーク朝スルタン＝アシュラフ・バルスバーイ **Ashraf Barsbāy** (r. 827/1422-842/1438) の近臣であったアミール・ジャーニム・ベク **Amīr Jānim Bek**<sup>63</sup> に仕えることとなり、彼に重用された。その後ジャーニム・ベクがアレppo 総督に任命されると、ミンハージーも彼に同行してシリアに向かい、アレppo やダマスカスに滞在した。この時期に彼のエルサレム参詣の願望

<sup>62</sup> メディナ写本の分量が、1 ページ 17 行×174 葉である [Ibrāhīm 1985: 441]。

<sup>63</sup> サハーウィーが "Jānim nā'ib qal'at Ḥalab" として名前を挙げている人物であろう。サハーウィーは、この人物は当時のスルタンの近臣にして娘婿であり、この妻と同年の 897/1491-92 年に没したとしている [DL iii, 65]。

はますます強まり、また FBM の執筆も決意したようである。序文には次のようにこの決意が記されている。

私は至高なる神の御為に、自分自身にあることを課した。すなわち、もし私がバイト・アルマクデイスに入り、そこを参詣するという願いを果たし、他の参詣者とともに望みの限りを尽くし、導きの道を通してそこにある様々な遺跡を辿ることができたなら、必ずや私はバイト・アルマクデイスの美德やその奇跡、その古き特質、良きハディースが地の果てまでも届いており、今に至るまでその契約の上に続いているところの姿を書き記そうと。私はその中に、受け継がれてきた並々ならぬことの間から麗しい作品を集め、それによってこの家（バイト・アルマクデイス）に仕えるという願いを果たそう。その家はラクダの鞍〔のハディース〕の中に含まれており、かの 3 つのモスクの中のひとつであるのだから [IA i, 80]。

しかしミンハージーはしばらく参詣の機会を得ることができず、彼が念願のエルサレム参詣を果たしたのは 874 年ラマダーン月（1470 年 3 月）になってのことであった。IA は彼のエルサレム滞在中に執筆されたものであり、本書の結びには、875 年サファル月 23 日（1470 年 8 月 23 日）同地にて本書の執筆が完了したという旨が記されている [IA ii, 173]。彼がいつまでエルサレムに滞在したかは明らかではないが、おそらく数年以内のことであっただろう。後にカイロに帰還し、880/1475 年同地にて没している [IA i, 24, 77-82; A'lām v, 334; Mu'jam iii, 85; SA vii, 13]。

ミンハージーは IA を編纂するにあたり、シハーブ・アッディーン・マクディスィーの MG-M とフサイニーの RM の 2 作品を直接の典拠としたことを述べているのだが [IA i, 83]、IA の序文の記述や章構成から判断して、ミンハージーはとりわけ後者に依拠していることがわかる。彼は IA の序文でフサイニーの名前を挙げた後に、「彼はその高貴にして独創的な著書の中で、〔彼が典拠とした〕それぞれの書物の序文の一部を伝えている」 [IA i, 83] と述べて、フサイニーが RM の序文で列挙していた典拠情報をそのままの形で引用している<sup>64</sup>。ミンハージーはこれらの典拠情報の最後で以下のように述べて、自身が RM を主たる典拠としていることを明記している。

これが、前述のサイド（フサイニー）が参照し、*al-Rawḍ al-Mugharras* と名付けられたその著作においておおもとの引用を頼ったものである。これ以上はいかなるファダーイルの書からも参照を増やす必要はない。神はこの書とそこからの知識による利益を、ハディースにおける支えとして、また私が決意したこの著作の典拠として、永遠なるものとなさった [IA i, 88]。

<sup>64</sup> IA i, 84-87. この部分の内容は、フサイニーの序文の記述と一致している [RM(B) 123b-124a]。

ミンハージーは典拠情報に続き、IA を全 17 の章で構成したことを述べている。それによれば、第 1 章がアクサー・モスクやバイト・アルマクデイスという名前の由来と、エルサレムに関する全般的なファダーイルについての章、第 2 章がアクサー・モスク設立の由来とその美德についての章、第 3 章が聖なる岩についての章、第 4 章がエルサレムで宗教的行いをした者に与えられる功德についての章、第 5～8 章がエルサレム市内外のモニュメントにまつわる伝承と、それらの場所に参詣する際の作法についての章、第 9 章がイスラーム以降にエルサレムで起こった出来事についての章、第 10 章がエルサレムに縁のある預言者や教友たちの伝記集、第 11～15 章が預言者アブラハムと彼の一族の伝記とヘブロン参詣についての章、第 16 章が預言者モーセの墓についての章、第 17 章がファダーイル・アッシャーム集という構成となっている[IA i, 88-92]。以上の章構成は RM とほぼ同一のものであり、ミンハージーはこの点において RM を全面的に踏襲している。

ここで IA を用いて、RM と IA の各章の内容を改めて考察する。まず IA の第 1 章は、IS から引用したエルサレムの 17 の名称と、クルアーンの中でエルサレムを表すものと解釈できる章句の一覧である。この要素を FBM の冒頭に置くことは、従来の FBM にもしばしば見られた形式である。第 2 章から第 8 章にかけては、ダビデ・ソロモンによる神殿建設と、ハラム・シャリーフや岩の偉大性・神聖性に関する伝承、FBM-IM や BN から引用された参詣に関する伝承が挙げられている。この部分ではハラム・シャリーフ内外の参詣の対象となるモニュメントを軸にして、それぞれのモニュメントにまつわる伝承とそれらへの参詣作法がひとつにまとめられており、例えば鎖のドーム Qubbat al-Silsila の箇所でダビデと黄金の鎖のエピソード、ミーラージュのドーム Qubbat al-Mi'rāj の箇所で預言者ムハンマドのイスラーとミーラージュのエピソードが述べられるといった形である。

第 9 章はウマルの征服とアブド・アルマリクの岩のドーム建設、サラーフ・アッディーンの軍事活動とエルサレム征服を扱った章である。ウマルの征服とアブド・アルマリクの岩のドーム建設については多くの FBM で扱われているエピソードであるが、IA はこの部分を主に MG-M から引用している。サラーフ・アッディーン的活動については、イマード・アッディーンの *Fath* より引用されたものである。サラーフ・アッディーンのプロバについては MG-M でも取り上げられていたが、その前後の彼の十字軍との戦いの過程や、サラーフ・アッディーン死後のアイユーブ朝スルタンたちの対エルサレム・十字軍政策が FBM で述べられるのは、この IA が最初である。なおサラーフ・アッディーンに関する内容は RM の章題から判断する限り RM には見られないものであり、ミンハージーが独自に *Fath* から追加した部分であると思われる。FBM において、サラーフ・アッディーンによるエルサレムの奪回に関する詳細な記事がこの時点まで見られないことは注目に値する。

第 10 章の伝記集は明らかに MG-M を利用した部分である。ここではアダム以下 18 名の預言者と、ウマル・ブン・アルハッターブ以下 82 名のムスリムの名前が挙げられている。MG-M

と比較すると、人物の選択には多少の欠落や追加が見られるものの、ほぼ MG-M に従っている ([表 5] 参照)。伝記の内容についてもほぼ MG-M を踏襲しており、一部に JM や UFQ からの引用が確認できる。

第 11 章から 15 章にかけては、預言者アブラハムと彼の一族、すなわちサラ、イサク、ヤコブ、イシュマエルとハガル、ロトの生涯の事績と、ヘブロンにある彼らの墓への参詣の作法に関する章である。ここでは FBM-IM や BN で扱われていたヘブロン参詣に加え、アブラハム一族の伝記が述べられている。ムスリムの伝記集の後にアブラハムの物語を置く形式は RM と同様であるが、RM が全 37 章のうち第 35 章のみをこれに充てているのに対し、IA では全 17 章のうち 5 章と相当の分量が費やされている。RM においても典拠としてタドムリーの MG-T が挙げられていることから、FBM-IM や BN 以上の内容が含まれていたと考えられるが、ミンハージーは RM の内容に加えて、独自に MG-T やその他の預言者伝から情報を追加していることが考えられる。また第 16 章はモーセにまつわる伝承と彼の墓がある場所に関する章で、この部分については RM の項でも述べたように、従来の FBM やその他のハディース集や預言者伝の内容をまとめたものである。

第 17 章はファダーイル・アッシャームに充てられている。ここは MG-M の第 1 部を典拠としており、シリア地域や各都市のファダーイルに加え、「シャーム」という名前の由来、シリアの地理的な境界や行政区についての情報が含まれている。ダマスカスについては MG-M にはなかった情報も追加されており、この部分はおそらく、フサイニーが RM の典拠のひとつとしていたラバイーのファダーイル・アッシャームからのものであり、IA にもそれが引用されていると考えられる。

以上のことから、ミンハージーは RM を元に、そこに一部内容を追加して自身の作品を著していると言える。ミンハージーがエルサレムを訪れた 874/1470 年という時期は、フサイニーがエルサレム参詣と RM の編纂を行った 871-72/1466-67 年の直後に当たっている。おそらくミンハージーはエルサレム滞在中に RM を入手し、これに感銘を受けて IA の執筆に至ったのであろうが、わずか数年前に著されたものとほぼ同じ形の著作を編纂しているところから、彼の目的は既存の書物からただ単に FBM に関する知識を得ることではなく、あくまで自分自身の手で FBM を著すことであったと言える。

RM と IA はほぼ同時期に編纂され、また両作品とも著者が晩年に行ったエルサレム参詣に際して編纂されていること、著者が編纂の数年後に没していることなど、作品成立の環境にも共通点が多い。このような共通点にも関わらず両作品の写本の残存状況には大きな差があり、RM の写本には完全なものが 1 つしか現存していないのに対し、IA には多数の写本が残っており [al-'Asalī 1984: 98-104; Brockelmann 1943-1949: G2, 132-133]、校訂本も出版されている<sup>65</sup>。IA は 12/18 世紀オスマン朝時代に編纂された *Risāla* や LUJ において典拠として参照さ

<sup>65</sup> 本書の校訂本は 2 種類出版されている。1 つ目は アフマド Aḥmad Ramaḍān Aḥmad による 1982 年

れており、これらの FBM が RM ではなく IA を参照していることから、12/18 世紀の時点でも RM よりも IA の方が利用しやすい書物となっていたと考えられる。IA は形式面では RM の模倣であり、サラーフ・アッディーンのエルサレム征服に関する記事を除けば内容面でも新しい要素を持つものではないが、RM の内容を保存し後世に伝えるという意味において重要な役割を果たした作品であると言える<sup>66</sup>。

#### 4. 地誌としての FBM の発展

ここまで、マムルーク朝時代の FBM に参詣記型と地誌型の 2 つの方向性が示されるようになり、その 2 つともが後代の作品に取り込まれていく過程を確認した。本節ではマムルーク朝末期に編纂された、もうひとつの地誌型 FBM である UJ を取り上げ、FBM がエルサレム地誌として発展する例を見る。

##### (1) UJ における歴史的記述

UJ の著者であるアブド・アッラフマーン・ブン・ムハンマド・ウライミー‘Abd al-Raḥmān b. Muḥammad al-‘Ulaymī al-Maqdisī は、860/1456 年エルサレムにて、有名な学者の家系であるウライミー家に生まれた。ウライミー家はシャーフィイー派の家系であるが、父親がハンバル派に転向したため、その下で学んだウライミーもハンバル派に属している。880/1475 年から 889/1484 年にかけてカイロで学んだ後エルサレムに戻り、エルサレム、ラムラ、ヘブロン、ナーブルス 4 都市のカーディー職を歴任し、エルサレムの大カーディーも務めた。928/1522 年エルサレムにて没し、同地に埋葬されている[UJ i, 11-20; A‘lām iii, 331; Mu‘jam ii, 112]。なおウライミーが UJ を編纂したのは、本書の結びに記載されている日付より、900/1495 年であることが明らかである。

ウライミーは本書の編纂の動機について、序文にて次のように述べている。

私は知識に乏しいという我が現状から、著述家のひとりであるとも言われておらず、私の知識の量などは微々たるものなのである。しかし [バイト・アルマクディスやヘブロン以外の] イスラー

---

の版で、メッカのハラム図書館 Maktabat al-Ḥaram al-Makkī al-Sharīf 所蔵の写本 (MS. tāriḫ 192, MS. tāriḫ 327) と、ダール・アルクトップ所蔵の写本 (MS. tāriḫ 407, MS. tāriḫ 1879) の、計 4 本の写本を用いたもの、2 つ目はマズィーディー Aḥmad Farīd al-Mazīdī による 2010 年の版である。後者については、用いた写本が前者とまったく同じで追加もなく、さらに各写本間の相違を注釈していないなど基本的な校訂の手法に則っていないため、参照の価値はない。よって本稿では前者の校訂本に従っている。

<sup>66</sup> 本論における参詣記型 FBM (BN、RM、IA) の内容と編纂の流れについては、[岡本 2013] をもとにしている。



ム諸国の大部分については、ハーフィズたちがそこに興味を示し、先の時代に存在した様々な情報を伝えるその歴史に関することを書いているがゆえに、私がそれ（本書の執筆）を行うことにしたのである。

バイト・アルマクディスについては、私は何か特別なことを知っているわけではなかった。しかし人々は歴史書の中で、ばらばらの箇所で色々なことを言っているに過ぎない。そして私は、私が志したこの方法を求めている人々がいるのを知った。というのも、あるウラマーはファダーイルに関することのみを書いており、またある者はウマルによる征服とウマイヤ家による整備を述べること〔だけ〕に気を配り、またある者はサラーフ・アッディーンによる征服のみを述べ、それ以降に起こったことについては述べていない。またある者は、そこに関する歴史については述べているが、バイト・アルマクディスの著名人たちについてはたいしたことは述べていない。そこで私は本書を完全な歴史書とするために、〔バイト・アルマクディスの〕建設やファダーイル、征服、著名人の伝記の話や、有名なハディースの一部を集めてみたかったのである[UJ i, 67-68]。

ウライミーはここで、それまでエルサレムの歴史を総合して扱った歴史書が存在しなかったことを挙げ、自らの手でそれを編纂することを考えた、と述べている。ウライミーが「歴史 *tārīkh/tawārīkh*」という言葉を用いていることから、彼の第一の目的はエルサレムの歴史を記すことにある。UJ は大きく 2 つの部分に分けることができるが、第 1 部がこの歴史に充てられており、第 2 部がエルサレムと周辺都市の地理的情報と、そこで活動したスンナ派 4 法学派のウラマーたちの伝記に充てられている。本項ではまず歴史部分について考察する。

UJ の歴史的記述の最大の特徴は、天地創造からアイユーブ朝末期の 659/1261 年までの期間の出来事を、時代の流れに沿って著すことを試みている点にある。これは、従来の FBM における歴史記述が、ハラム・シャリーフの形成を中心とした出来事のみを切り取り「点」として著していたのとは異なる部分である。

UJ の冒頭には、クルアーン解釈とエルサレムの名称に関する伝承が挙げられており、この点は従来の FBM の形式に従っている[UJ i, 68-73]。その後天地創造、アダムアダムの創造と墮天、ノア、フードとサーリフ、アブラハムとその一族、モーセと、イスラーム以前の預言者たちを核とした歴史が続く。この部分の記述は旧約聖書の『創世記』や『出エジプト記』の内容と共通しており、核となる人物の抜き出し方、とりわけアブラハムの一族とモーセを重要視する記述、アダムとノアの間やノアとアブラハムの間を系図で繋いでいく試み<sup>67</sup>などの共通点が見ら

---

<sup>67</sup> 例えば UJ には、アダムからノアを繋ぐ人類の系図として次のようにある。「アベルの殺害の後、アダムにはセトセトが生まれた。彼がアダムの後継者である。神の息吹たるセトのタフスィールについては、彼は 912 年生き、アダムアダムの墮天より 1142 年後に死んだ。アダムの子らは皆、その血筋はセトに辿り着くのである。セトにはエノシュエノシュが生まれた。エノシュは 905 年生きた。そしてエノシュにはケナンケナンが生まれた。ケナンは 910 年生きた。そしてケナンにはマハラルエルマハラルエルが生まれた。マハラルエルは 895

れる。その後歴史はイスラエル王国の建国へと続き、ダビデ、ソロモン、ソロモンの死後の王家の系図、バビロンのネブカドネツアルによる第 1 神殿の破壊とバビロン捕囚、イスラエルの民の帰還と第 2 神殿の建設、ペルシアやギリシャの勢力によるエルサレムの支配、ザカリヤ、ヨハネ、イエスの登場、ローマ帝国皇帝ティトゥスによる第 2 神殿の破壊、ビザンツ帝国皇帝コンスタンティヌスと母后ヘレナによるエルサレムの整備と、以降ビザンツによるエルサレムの支配が描かれる [UJ i, 73-284]。イスラエル王国以降の歴史についても、『列王記』、『歴代誌』、『マカバイ記』、あるいは 4 福音書との共通性が見られる。UJ の校訂者であるムハンマド・アリー **Muhammad 'Alī** は、ウライミーはこれらの情報を直接トーラー（旧約聖書）から引用しているのではなく、カアブ・アルアフバルやワフブ・ブン・ムナッビフらユダヤ教徒からの改宗者を通じて伝わった伝承を利用しているのであろう、と推測している [UJ i, 37]。ウライミーはこうしたユダヤ教の伝承に、ムスリムによる預言者伝や FBM-IM などの FBM からの引用を加えて、この部分の歴史を記している。

ここから UJ の歴史記述はイスラーム時代に移り、預言者ムハンマドの生涯の事績が述べられる。この部分では、ムハンマドのヒジュラやメディナのモスク建設などの、エルサレムに関わりのない出来事も取り上げられている。イスラーとミーラージュの伝承も、この部分で扱われている [UJ i, 284-346]。

ムハンマドの伝記が終わったところで、UJ の記述はいったん歴史的な内容から離れる。ここに「神聖なるアクサー・モスクのファダーイル」と題された項が入り、従来の FBM で取り上げられてきた、エルサレムの偉大性・神聖性に関する伝承、エルサレムで宗教的行いを行った者に与えられる功德が述べられる。またアクサー・モスクと岩のドームに参詣する際の作法についても、FBM-IM と同じ内容のものが引用されている [UJ i, 346-366]。

この後再び UJ の記述は歴史的な内容に戻る。ムハンマドの死後、アブー・バクルとウマル・ブン・アルハッターブの正統カリフ就任に続き、ウマルによるエルサレム征服に関する一連のエピソードが語られる [UJ i, 366-385]。

UJ ではここで、ウマル以外の教友たち 37 名の伝記が挿入されている。これは MG-M の巻末にあった伝記集の教友の項目とほぼ同様のものであるが、UJ では時代の前後関係が重視され、教友の項目は正統カリフ時代とウマイヤ朝時代の間にかけている [UJ i, 385-397]。

教友の伝記が述べられた後、ウマルの死後ウスマーンとアリーのカリフ就任と、ウマイヤ朝初代カリフ＝ムアーウィヤ・ブン・アビー・スフヤーンの政権樹立、ムアーウィヤからアブド・アルマリク・ブン・マルワーンまでの各カリフの系図と続き、さらにアブド・アルマリクの岩のドーム建設に関する一連のエピソードが述べられる。これ以降のウマイヤ朝とアッバース朝

---

年生きた。…そしてエノクにはメトシェラが生まれた。メトシェラは 969 年生きた。そしてメトシェラにはレメクが生まれた。レメクが 188 歳になったとき、彼にノアが生まれた」 [UJ i, 87-88]。この記述は、『創世記』5 に一致するものである。

に関する歴史は簡潔に書かれており、ウマル・ブン・アブド・アルアズィーズ‘Umar b. ‘Abd al-‘Azīz (r. 99/717-101/720) とマンスール Abū Ja‘far ‘Abd Allāh al-Manṣūr (r. 136/754-158/775)、マフディー al-Maḥdī b. al-Manṣūr (r. 158/775-169/785) が挙げられているのみである [UJ i, 397-417]。

UJ ではここで再び、タービウーン 67 名の伝記が挿入されている。UJ のこの部分では、5/11 世紀末から 6/12 世紀初頭にかけての主にエルサレム出身のウラマーの名前が、MG-M のリストに追加されている ([表 5] 参照) [UJ i, 417-441]。

さらにファーティマ朝やセルジューク朝の支配下で起こった出来事が簡潔に述べられた後、十字軍がシリア地域を侵略し、エルサレムを征服したことが書かれる。この次に、アイユーブ朝スルタン＝サラーフ・アッディーンの事績が来る。このアイユーブ朝時代の歴史記述が UJ 第 1 部において最も密度の濃い部分であり、564/1169 年から、583/1187 のエルサレム征服に至るまでの軍事行動、エルサレムでのフトバ、エルサレム征服以降 589/1193 年にサラーフ・アッディーンが没するまでの間の彼の事績、さらに彼の死後のアイユーブ朝君主たちの事績が、年代順に書き上げられている。この部分は、659/1260 年にアイユーブ朝のダマスカス・アレップ君主であったマリク・ナーシル・ユースフ・ブン・アルマリク・アルアズィーズ・ムハンマド Malik al-Nāṣir Yūsuf b. al-Malik al-‘Azīz Muḥammad が殺害されたことをもって終わっている [UJ i, 441-557; ii, 31-45]。

ウライミーが序文において述べている通り、彼は UJ をエルサレムに関する歴史書として完成させることを目指しており、それはそれぞれの歴史的事件が古い時代から新しい時代へと、一貫した流れに従って記されていることに読みとることができる。ここではエルサレムの美德を直接的に伝える伝承 (カテゴリー C) の存在感は、UJ 全体の分量に比すれば小さいものであり、これが例えばハディース集型 FBM において相当の部分を占めていたこととは対照的である。またウライミーは MG-M で初めて用いられた伝記集という記述スタイルを取り入れているのだが、それも時代の流れを妨げない形に分割されて挿入されている。

UJ における歴史記述のもうひとつの特徴は、従来の FBM における歴史記述に比べ、記述の形がより「線」に近くなっているという部分にある。従来の FBM では、重要とされる特定の人物や出来事に関するエピソードが「点」の形で書き抜かれていたのに対し、UJ ではその「点」と「点」の隙間を埋めようとする試みが見受けられる。それが前述したアダムーノア間の系図や、ソロモンの死後のイスラエル王家の系図、預言者ムハンマドから正統カリフ時代、ウマイヤ朝カリフへのカリフ位の推移を述べた部分などに現れている。

ただし、歴史を連続したものとして表そうとするこの試みは、決して徹底したものであるとは言えない。UJ においても記述のメインとなるエピソードは従来の FBM で強調されてきたものと同じであり、それ以外の要素に関しては記述量も少なく、非常に内容が薄いことに変わりはない。アッバース朝やファーティマ朝、セルジューク朝時代のエルサレムに関する記述が

ほとんどないことがこの例となる。UJ ではアイユーブ朝時代と、作品の巻末に付された著者の同時代(873/1468-900/1495年)の出来事を除いて、年代記の形で記されている部分はない。また873/1468年までのマムルーク朝時代の歴史記述はここでは書かれておらず、後半の人物伝の部分に回されている。UJは歴史書としての色彩をより強めながらも、FBM特有の歴史記述のスタイルの枠から外れたものではない。

## (2) UJにおける地理記述とウラマー伝

UJの第2部は、その中をさらに大きく2つの部分に分けることができる。その1つ目は、著者ウライミーの時代にエルサレム市内外にあったモニュメントや建築物、さらにエルサレム周辺の都市に関する情報を集めた部分である。

ここではまず、ハラム・シャリーフの内部にある、アクサー・モスクや岩のドーム、ミラージュのドーム、預言者ムハンマドのマカーム(イスラーの際に預言者ムハンマドが礼拝を行ったとされている場所)などの場所が取り上げられている。ハラム・シャリーフの各モニュメントについては従来のFBMにおいても参詣に関連づけて述べられており、そこではそれらのモニュメントの起こりや預言者たちとの関わりなどが取り上げられていた。UJではこうした情報に加え、建築上の構造に関する情報が詳細に述べられている。すなわちそれぞれのモニュメントの縦横の長さや高さ、それがハラム・シャリーフのどの部分に位置しているか、建物内部の構造、建物に付随する門や柱、回廊、ミナレットなどの位置や数や材質、またそれらのモニュメントが、建築物としてはイスラーム時代のどの年代に建設されあるいは修繕されたか、というような情報である。この部分の最後には、ハラム・シャリーフの周囲を囲む壁についての門が挙げられている[UJ ii, 45-75]。

次にUJの記述は、ハラム・アッシャリーフ以外のエルサレム市内にある建物へと移る。ウライミーはまず、市内にあるマドラサやザーウィヤの一覧を挙げている。彼はここで、ハラム・シャリーフに近いところにあるかどうかでマドラサを区分しており、ハラム・シャリーフの中にあるものとして3件、ハラムの西壁付近にあるものとして10件、北壁付近にあるものとして22件を挙げている。さらに、ハラムの西壁の側にあるのではないが、そこから近いところにあるものとして19件、ハラムから離れた所に位置しているものとして15件を挙げている。ウライミーはこれらのそれぞれについて、ハラムに近いものについてはどの門の側に建っているか、またハラムから遠いものについては市内のどの地区に建っているか、そこが何年に誰によって設立されたものであるのかを記している<sup>68</sup>。またウライミーはイスラームの宗教施設の他にもキリスト教の教会や修道院にも注目しており、聖墳墓教会をはじめとする市内の教会の名前も挙げている[UJ ii, 76-105]。この他エルサレム市内に関しては、街区 *ḥāra* と通り *khaff*、

<sup>68</sup> UJを主要史料としたマムルーク朝時代のエルサレムにおける宗教施設については、三浦の研究に詳しい[三浦 2004]。

市内を取り巻く城壁 *qal'a* が取り上げられている[UJ ii, 105-111]。ハラム・シャリーフ以外の市内の建物についての情報が扱われるのは FBM の中で UJ が最初であり、著者の情報源が従来の文献ではなく、著者自身、あるいは著者に近い時代の人々の経験によっていることをしめしている。また著者の関心が従来の参詣の対象となる場所に限定されず、より広い範囲に及んでいることも分かる。

ここから UJ の記述はエルサレム市外に移る。シロアムの泉やオリーブ山をはじめとするエルサレムの町の周囲にある場所から、エルサレム郊外の村としてベツレヘム、さらにシリアにあるその他の都市としてラムラ、ルッド、アスカラーン、ガザ、アリーハー（イエリコ）、ナーブルス、ヘブロンと挙げられ、著者の視点はハラム・シャリーフを中心に、だんだんと外に広がっている。シャームの各都市に関する記述でウライミーは、FBM-IM や MG-M などに出てきたファダーイル・アッシャームを参照しているが、ここでもハラム・シャリーフの部分同様、従来のファダーイルに加え、それらの場所にあるモスクやマドラサ等の建築物、そこにいる著名なイマームやウラマーなど、著者の時代の情報が数多く入っている。これらの都市に関する記述の中ではヘブロンが最も詳しく、エルサレムと同様に市壁や街区、マドラサ等の名前が取り上げられている。なおここでは、参詣記としての要素を持つ FBM とは異なり、アブラハムとその一族の墓への参詣に関することは取り上げられていない[UJ ii, 112-150]。

UJ 第 2 部の 2 つ目の部分は人物伝である。ウライミーはこの部分の最初に、「バイト・アルマクディスと我々の主人神の友〔アブラハム〕の町を治め、そこで慈善活動や町の整備などの様々な善行を行ったイスラームの諸王」と題した章を設け、第 1 部の歴史を扱った部分では取り上げていなかったマムルーク朝スルタンたちの名前を時代順に書き上げている。ここでは各スルタンの氏名、生没年、スルタンに即位した年、先代のスルタンとの血縁・主従関係、また生涯の事績、特にそのスルタンのエルサレムにおける活動を中心としたことが簡潔に書かれている[UJ ii, 150-176]。

ウライミーがこの部分を第 1 部の歴史部分に含めず、第 2 部の人物伝の部分に含めるという構成を取っているのには、2 つの理由が考えられよう。1 つ目は、マムルーク朝におけるエルサレムは政治・行政上の重要性が低く、とりたてて重要な歴史的事件が起こらなかったことである。この時代の為政者がエルサレムで行ったことは、モスクの修繕やマドラサの建設などの市内の整備に留まっており、そのためウライミーはこれらの活動を一連の歴史の流れとして見るのではなく、各スルタンの個々の業績として編纂することを選んだのであろう。2 つ目の理由としては、UJ の第 2 部自体が著者の同時代を含む、より新しい時代のエルサレムの姿を某社することに充てられていることがある。ウライミーは第 1 部をアイユーブ朝の終焉でいったん終わらせた後、同時代のエルサレムの市内外の様子、地理的情報に移行している。またマムルーク朝スルタンの伝記の後には、6/12 世紀から著者の同時代にかけてのエルサレムとヘブロンの上ラマー伝が続いており、第 2 部は全体として、マムルーク朝を中心としたより著者に

近い時代の事柄を集めた構成になっているのである。

第 2 部の最も多くの部分を占めているのがウラマー伝である。ここではシャーフィイー派ウラマー 22 名、エルサレムやヘブロン<sup>1</sup>のシャーフィイー派カーディー職を務めた人物 64 名、アクサー・モスクやアブラハムのモスクのハティーブ職を務めた人物 26 名、シャーフィイー派スーフィー 18 名、エルサレムに居留し同地に埋葬された著名なウラマー 94 名、ハナフィー派のウラマーやカーディー 79 名、マーリク派のウラマーやカーディー 38 名、ハンバル派のウラマーやカーディー 16 名の、計 357 名の名前や生没年、職歴、埋葬地が、法学派ごと、年代順に挙げられている[UJ ii, 176-392]。本稿第 2 章でも述べた通り、ここに登場する 357 名の人物を法学派ごとに計数した場合、62.74%にあたる 224 名がシャーフィイー派となり、当時のエルサレムにおける主流法学派がシャーフィイー派であったことが確認できる。このウラマー伝の次に、6/12 世紀末以降エルサレムとヘブロン<sup>2</sup>のナーイブ（県知事）とナーズイル（ワクフ監督官）を務めたマムルーク軍人 50 名の伝記が挙げられて、伝記集部分は終了している[UJ ii, 393-407]。

第 2 部の最後の部分は「当代の王、我らがマウラーたる神聖なる陛下の伝記」と題された、ウライミーの同時代のスルタン、カーイトバーイ Qāyṭbāy (r. 873/1468-903/1496) の時代の、873/1468 年から 900/1495 年にかけての年代記になっている。この部分もそれ以前のスルタンたちの伝記部分同様、カーイトバーイの主にエルサレムとその周辺地域(エルサレム県 Niyābat al-Quds)における業績を中心に書かれているのだが、著者の同時代の出来事であるだけに非常に詳細な記述となっており、カーイトバーイの建設・修繕活動だけではなく、ナーイブやカーディーの任命・罷免、ユダヤ教徒やクルド人 Akrād の反乱、あるいはナーイブ間の勢力争いに対する対応などが、1 年ごとに述べられている[UJ ii, 407-508]。FBM の中に著者の同時代の為政者の事績が記されるのは、UJ が初めてのことである。マムルーク朝末期のシリア地域においては、アミール位を持つマムルーク層が弱体化したことで、規制の地方政府機構がうまく機能しなくなっていた。そのためエジプトの中央政府は、シリア地域をコントロールするために、現地に強い影響を持っていた有力ウラマー層とより直接的に結び付く必要性が出てきた[五十嵐 1999: 45-47]。ウライミーが UJ においてカーイトバーイの治世を記述していることは、この時代にエジプトのスルタンとシリアのウラマーとの繋がりがより強いものとなったことを示唆している。

以上 UJ の第 2 部ではマムルーク朝時代のエルサレムの地理的・人的情報が扱われており、従来の FBM には見られなかった新しい要素となっている。従来の FBM がハラム・シャリーフを中心とした参詣の目的地となる場所にのみ注目していたのに対し、ウライミーはここで、市内にあるマドラサやザーウィヤ、ハーンカーなどの、直接参詣の対象となるわけではない宗教施設に大きな関心を寄せている。また伝記集部分についても、MG-M に始まった教友とタービウーンの伝記を取り入れるだけではなく、マムルーク朝時代のウラマー伝を追加し、それに

多くの紙面を充てている。これらはともに、アイユーブ朝・マムルーク朝時代のエルサレムのあり方を反映しているものである。サラーフ・アッディーンによる征服以降、ムスリム支配者層はムスリムの都市としてのエルサレムのイメージを復活させるため、多くの宗教施設をワクフ物件として建設し、また広い地域からウラマーをエルサレムに誘致した。その結果この時代のエルサレムは、政治的な重要性を失っていく一方で、宗教・学術センターとしての地位を高めていった。リトル D. P. Little は、ウライミーが UJ において宗教施設やウラマーの存在を重要視していることを、彼がこれらの存在によってもたらされた宗教的・精神的達成こそ、エルサレムの真の栄光であると考えたことによる、と述べている [Little 1995: 247]。UJ においては、従来の FBM の主要な要素のひとつであったエルサレムの偉大性・神聖性に関する伝承が、作品全体に占める割合は小さいが、ウライミーはアイユーブ朝・マムルーク朝時代にムスリムたちがエルサレムにもたらしたこの成果を、ひとつの新しいファダーイルとして捉えているのであろう。

RM や IA が、BN の参詣記としての要素と MG-M の地誌としての要素の両方を取り入れていたのに対し、UJ では参詣作法に関する記述はアクサー・モスクと岩のドームに対するものに留まっており、参詣記としての性格は薄い。ウライミーはエルサレムの由緒ある家系に生まれ育ち、エルサレムのみならず、ヘブロン、ラムラ、ナーブルスといったエルサレム県内の都市のカーディーをも務めた経歴を持っていたため、県内の地勢や人物については詳しい知識を持っていたであろう。UJ は、エルサレム出身のウラマーが、その地理的な近さを用いることで著した郷土誌のような性格を持つものであると言える。

## 5. マムルーク朝期 FBM に見られる傾向

### (1) 著者の出身地と法学派

マムルーク朝時代の FBM 編纂もハディース集型 FBM 同様、シリア地域のウラマーを中心に行われている。本章では、マムルーク朝時代の FBM に参詣記型と地誌型の 2 つの方向性が見られることを確認したが、現存する作品を見る限りでは、参詣記としての要素の見られる FBM (BN、TU、RM、IA) はダマスカスやエジプトといった、エルサレム以外の地域の出身者によって書かれているのに対し、地誌型の FBM (MG-M、UJ) はエルサレム出身者によって書かれている。このことから、外の世界から参詣者としてエルサレムを訪れた人物が、その参詣を契機に FBM 編纂に着手し、自身を含め参詣者の便宜に応えるような作品を著しているのに対し、エルサレム内部に生活の場を持っていた者は、そうした外部からの参詣者としての視点を持ち合わせない一方で、故郷に関する詳細な情報を包括するような作品編纂を目指していたことが分かる。

それぞれの著者の所属する法学派については、この時代の著者 11 名のうち 6 名がシャーフイイー派に属しており、シャーフイイー派からハンバル派へと転向したアンサーリーとシャーフイイー派の家系を持つウライミーを加えると、この法学派に連なる人物は 8 名に及ぶ。こちらにもハディース集型 FBM 同様、その大部分がシャーフイイー派知識人となっている。マムルーク朝時代におけるシャーフイイー派法学の優勢は UJ の節で述べた通りであり、FBM 編纂者の法学派の偏りが、当時のシリア地域における傾向を反映した以上のものであるかは、現時点では不明である。

## (2) アブラハムとモーセの重要視

マムルーク朝期に編纂された FBM には、ハディース集型 FBM には見られなかった様々な新しい要素が見られたが、そうしたもののひとつに預言者アブラハムとモーセに関する伝承の重要視がある。アブラハムとモーセは、イスラームにおいても 5 人の大預言者に数えられる、とりわけ高貴な預言者であるとされている。この 2 人の預言者に関する伝承は、FBM-IM などを中心にハディース集型 FBM 中にも見られたが、ハディース集型 FBM ではイスラーム以前の預言者に関する伝承と言えばダビデとソロモンによる神殿建設であり、アブラハムやモーセの比重は大きいものではなかった。

それが、まず BN において FBM-IM よりヘブロン参詣に関する伝承が引用されたことを契機として、アブラハムと彼の一族に対する尊崇が見られるようになった。BN ではほぼ FBM-IM と同様、ヘブロン参詣者に与えられる功德とそこでの作法が述べられていたのが、RM や IA になるとアブラハムと彼の一族の事績までが含まれるようになり、IA では全 17 章中 5 章というかなりの分量がこれに費やされている。ここには、アブラハムが一族の墓地としてヘブロンを購入したというエピソード以外の、ヘブロンにもエルサレムにも関連しないもの、例えばイシュマエルの伝記やメッカのハラーム・モスク建設にまつわるエピソードなども豊富に含まれている。なお、ヘブロン単独に捧げられたファダーイル集であるタドムリーの MG-T が編纂されたのも、814/1411-12 年のことである。

またモーセに関しては、RM においてはじめて、アブラハムと並列されてモーセに関する章が 1 章立てられるようになり、IA でも同様に 1 章分がモーセに充てられている。旧約聖書においては、モーセは出エジプト後、イスラエルの民の不敬に対する罰として、「約束の地」であるカナンに入ることなく荒野で死んだとされている。イスラームの伝承でも、聖なる地に入ることなく荒野で死んだとされており [FQ 112]、エルサレムには直接関わりのない預言者であったはずが、別の伝承では「モーセは、聖なる地から石を投げれば届くほどの距離のところで死ぬことができるように、神に求めた」[FQ 97] とされており、ここからモーセの墓はエルサレムの周辺に存在しているという伝承に繋がっていく。これら 2 人の預言者を重要視する姿勢は UJ にも現れており、UJ 第 1 部において、アブラハムとモーセに充てられた紙面は、その



他の預言者に比べて格段に多い。

FBM におけるアブラハムの重要視については、この時期にヘブロンがエルサレムと同一の行政単位に含まれるようになり、エルサレムとの結びつきが強まってきたことが理由であろう。ヘブロンとエルサレムの一体化は、UJ の第 2 部の様々な場所で「エルサレムとヘブロン of al-Quds wa al-Khalil」という並列表記が見られることからわかる。またモーセについては、モーセの墓とそこへの参詣に関する人々の興味が生まれてきたことが理由ではないかと考えられる。時代は下るが、12/18 世紀前半のオスマン朝時代に編纂された *Risāla* の中には、エルサレム近郊にあるというモーセの墓に参詣し、そこで様々な奇跡を体験する人々の話が出ている。こうしたモーセ参詣に関する関心は、マムルーク朝時代にすでに芽生えていたのではないだろうか。

FBM においてアブラハムとモーセを重要視することには、もちろん高名な預言者をエルサレムと関連づけることにより、FBM の権威づけを図る意図もあっただろう。これに加え、当時のエルサレム周辺都市間の結びつきや、エルサレム以外の場所への参詣が盛んになってきたことが、こうした重要視に繋がっているものと思われる。

## 第 4 章：オスマン朝時代の FBM

マムルーク朝時代に多数編纂され、また内容の面でも大きな変遷を遂げた FBM であるが、オスマン朝時代に入ると再び編纂数が減少する。[表 1] に示した通り、9/15 世紀から 12/18 世紀のオスマン朝時代に編纂された FRB の数は 6 作品であり、そのうちの 4 作品が現存している。これらの作品は、基本的には前時代の FBM の内容や形式を踏襲している一方で、従来の作品には見られなかった独自の内容を追加されている。第 4 章ではオスマン朝時代の 4 つの FBM が持つ、従来の作品との共通点と相違点に着目し、5/11 世紀以来の FBM 編纂の変遷を見通す。

### 1. 各作品の構成

#### (1) *Mustaqṣā*

著者のナスル・アッディーン・ムハンマド・ブン・ムハンマド・アラミー *Naṣr al-Dīn Muḥammad b. Muḥammad al-'Alamī* は、10/16 世紀エルサレムの知識人である。オスマン朝エルサレムの有力な家系のひとつであったアラミー家の出身であり、法学派はハナフィー派に属している。没年については、イスマーイール・バグダーディーの伝記集に従えば 952/1545-46 年頃となるが<sup>69</sup>、*Mustaqṣā* の部分翻刻を行ったイブラーヒームは、この年代に疑問を呈している。彼が参照した写本の末尾に、アブー・アルアッバース・アフマド・ブン・アリー・ダッジャーニー *Abū al-'Abbās Aḥmad b. 'Alī al-Dajjānī* という人物の名前で、「彼（著者アラミー）は、969 年ジュマダー・アルアヒラ月 16 日（1562 年 2 月 21 日）、祝福されし木曜日の夜明けに亡くなった」と記されていることから、イブラーヒームは著者の没年が 969/1562 年である可能性を示唆している [Ibrāhīm 1985: 494-495]。また *Mustaqṣā* の編纂完了は 948/1541-42 年のことである [Ibrāhīm 1985: 494-495]。本書の内容については、筆者が本作品の写本マイクロフィルムを参照することができなかつたため、イブラーヒームによる部分校訂を参考に考察を進める<sup>70</sup>。

本書は序文と 10 の章、結びから構成されており、序文は以下のようなものである。

---

<sup>69</sup> *Īdāḥ al-Maknūn fī al-Dhayl 'alā Kashf al-Ẓunūn 'an Asāmi al-Kutub wa al-Funūn*, ed. Dār al-Muthannā, Baghdad, ii, 478 [Ibrāhīm 1985: 492].

<sup>70</sup> アーリフ・ヒクメト図書館（メディナ）所蔵、カタログ番号 3951 番、分類番号 900/205 番写本。全 46 葉（1 ページ 23 行）。1242/1826-27 年に、ハーッジー・ダーウード・バルヒー *Ḥajjī Dāwūd Balkhī* という人物によって筆写されたもの [Ibrāhīm 1985: 495-496]。

これは小編ではあるが、私はこれを急ぎ、様々な場所と、アクサー・モスクとその周辺への参詣に関するものとして要約した。知識の秩序の焦点、アダムの子らの凝結、良き行いをもって諸王国を運営する人、ビザンツとアラブとペルシアのスルタンの長老にしてその助言者、人民がその命に服し、定められた運命がその欲するところにおいて彼を助けるところの人、その時代に公正と善行が現れ広がるところの人、最も偉大なるワズィール閣下にして強き獅子、我らがマウラーたるアリー・パシヤ‘Alī Bāshā の御為に。神が彼のために、密かに高貴さの頂を永続させ給い、その御稜威をもって彼に力と助けを与え給わんことを。

私はこれを序文と 10 の章によって構成した。私はこの中に、他所から取り込まれたものや因習的なものを入れないように留意した。よって、ここにあるのは限られた量に過ぎない。さて我々はそれらについて、連続する章を述べよう。

第 1 章：神聖なるカアバの建設の起こりと、それを建設した人

第 2 章：神聖にして聖なるアクサー・モスクの建設の話。それは敬虔さの上に土台を据えられている。

第 3 章：神聖なる岩〔のドーム〕の建設の話とその美德、参詣が課されている場所

第 4 章：アブラハムの墓、彼の子孫たち、妻女たちの墓の話、ヨセフの墓の話

第 5 章：我らが主人モーセと、彼の墓がある場所の話

第 6 章：祈願が聞き届けられる場所の話

第 7 章：ウマル・ブン・アルハッターブがバイト・アルマクデイスを征服した話

第 8 章：スルタン＝マリク・ナースィル・サラーフ・アッディーン・ユースフ・ブン・アイユーブが、バイト・アルマクデイスとその周辺を征服した話

第 9 章：ファダーイル・バイト・アルマクデイスの話

第 10 章：バイト・アルマクデイスの周辺に埋葬された聖者たちの話 [Ibrāhīm 1985: 497-498]

この序文のうちまず注目したいのは、この作品がオスマン朝スルタン＝スレイマン 1 世(r. 928/ 1520-965/1566) の治世後期のワズィールのひとりであった、アリー・パシヤに捧げられていることである。従来の FBM では、著者と同時代の為政者に対して作品が献呈されたり、作品中でそうした人物に対する讚美や祈願がなされたりすることはなかった。Mustaqṣā において初めて、ある特定の為政者の名前を挙げて作品を著すということが行われている。アラミーのこの行いは、944/1537 年から 948/1541 年にかけてスレイマン 1 世が行った、エルサレムでの大規模な建設事業に関係しているものと思われる。スレイマン 1 世はこの時期に、エルサレムの城壁の建設や岩のドームの修繕、水利施設の設置、さらに多数のワクフ物件の建設を行っている [Grabar 1986: EI2 v, “AL-ḲUDS”]。Mustaqṣā の編纂はこれらの事業が完了した 948 年のことであり [Ibrāhīm 1985: 494-495]、アラミーもこの公共事業に刺激を受けて本書を編

纂するに至ったのであろう。アラミーが本書の序文に名前を挙げていることから、ワズィールであるアリー・パシャも何らかの形でエルサレムにおける事業に関わっていたと考えられる。

*Mustaqṣā* の各章の内容については、大部分は従来の FBM と同様の内容を持つものと考えられる。例えばイブラーヒームは、第 3 章の岩のドーム建設に関する章については、イブン・アルムラッジャーの FBM-IM とほぼ同じ内容であったと述べている [Ibrāhīm 1985: 498]。また第 7 章のウマル・ブン・ハッターブによるエルサレム征服に関する伝承も、FBM-IM と、イスナーイーによる MM の記述に等しいとしている。第 7 章には続けて、「ウマルの征服の後、ファランジュがバイト・アルマクデイスを占領した話」という節があり、この部分ではファティマ朝によるシリア・エジプト地域の支配と、490/1097 年からの十字軍によるシリア侵攻とエルサレムの征服に関することが述べられているが、この部分は UJ の「十字軍がバイト・アルマクデイスを征服し、占領した話」にほぼ一致しており、UJ を参照しているものと思われる [Ibrāhīm 1985: 500-503; UJ i, 445-450]。

第 8 章のサラーフ・アッディーンによるエルサレム征服に関する一連の記述は、バハー・アッディーン・イブン・シャッダード Bahā' al-Dīn Yūsuf b. Rāfi' Ibn Shaddād (d. 632/1234) による *al-Nawādir al-Sulṭāniya wa al-Maḥāsin al-Yūsufiyya* や、イマード・アッディーン・イスファハーニーの *Fath*、アブー・シャーマ Abū Shāma 'Abd al-Raḥmān b. Ismā'il al-Maqdisī (d. 665/1268) による *Kitāb al-Rawḍatayn fī Akhbār al-Dawlatayn al-Ṣalāhiyya wa al-Nūriyya* といった、サラーフ・アッディーンと同時代の著述家による年代記、またウライミーの UJ の内容に等しいとする。この他イブラーヒームは第 9 章の一部を取り上げているが、そこから判断すると、この章はエルサレムの偉大性・神聖性に関する伝承（カテゴリー C）が、イスナードをすべて省略した形で、箇条書きで列挙されているようである [Ibrāhīm 1985: 511]。

第 1 章、第 2 章、第 4 章、第 5 章、第 6 章については、イブラーヒームの研究の中では紹介されていないため実際の内容は確認できないが、各章題から判断するに、これらの部分は従来の FBM でも見られた伝承を扱っているものと思われる。すなわち第 1 章は、おそらくアブラハムとその息子イシュマエルによるカアバ建設にまつわることが扱われており、これはマムルーク朝後期に成立した RM や IA において重要視されるようになった、預言者アブラハムと彼の一族の事績の中に含まれていた要素である。第 2 章については、従来の FBM でも主要な要素のひとつであったハラム・シャリーフの建設に関する章であり、ここではハラム・シャリーフが天使たち、あるいはセムやヤコブによって創建され、続いてダビデとソロモンの手によって完成されたことが述べられていると推察できる。第 4 章と第 5 章については、これも RM と IA にあった要素であり、ヘブロンにあるアブラハムとその一族の墓所の様子とそこへの参詣作法、またシリアの各地に伝承が残っているモーセの墓所に関する伝承が取り上げられているものと思われる。第 6 章の「祈願が聞き届けられる場所の話」については、章題から内容を特定することが難しいが、エルサレムやヘブロン周辺にある、預言者や聖者に縁の場所と、そこ

にまつわるエピソードが扱われているのではないかと考えられる。

以上のように、**Mustaqṣā** の第 1 章から第 9 章にかけては特に新しい要素は見られず、従来の **FBM** やその他の歴史書を参照して書かれている。アラミーは本書の結びにおいて、「これが、バイト・アルマクデイスと、我々が主人神の友〔アブラハム〕と神の代弁者〔モーセ〕の諸伝承を簡略化したものである。私は自分が伝え聞いたものを記録することに努め、可能な限り〔これまでに編纂された書物を〕参照してきた」と述べており、本書の基本的な編纂スタンスは、従来の **FBM** を要約することにあつたと言える。

しかしながら、本書の第 10 章「バイト・アルマクデイスの周辺に埋葬された聖者たちの話」に関しては、従来の **FBM** には見られない内容を持つ章となっている。本書の第 10 章では、6/13 世紀から 10/16 世紀にエルサレムとその周辺で没し、そこに埋葬された 15 名の聖者 **walī (pl. awliyā')** の簡単な伝記が、次のような形式で挙げられている。

「ワジャドナー」というラカブを持つサイド・アフマド **al-Sayyid Aḥmad al-Mulaqqab bi-Wajadnā** : 我がサイドにして至高なる神の友、「ワジャドナー（我々は見出した）」というラカブを持つサイド・アフマド。この〔ラカブの〕理由は以下のようなものである。ある人〔すなわちサイド・アフマド〕が金曜日に、クルアーンの「洞穴」の章を読みながら歩いてきた。彼がかの方のお言葉〈彼らは自分の行ったことを目の当たり見出すであろう〉(Q18:49) に差し掛かったとき、その墓の方から声高に、「我々は見出した、我々は見出した、我々は見出した」という返事があり、それはその人の耳にも届いた。

彼は神聖なるクドスにて 710 年に没し、マーマラー **Māmalā** に埋葬された。彼の墓は有名であり、その上には大きな石がある。ある人々が彼の墓の上にある石を取って、別の場所に持って行ったことがあったが、次の日になると、その石は元通りにその墓の上にあった。彼の奇跡の中にそうしたことは数多くある [Ibrāhīm 1985: 517-518]。

**FBM** にエルサレムに縁の偉人たちの伝記を組み入れるという編纂方式は、**MG-M** で初めて見られ、以後 **RM** や **IA**、**UJ** にも取り入れられてきた。これらの作品に見られる伝記集は、預言者、教友、タービウン以降の偉人伝で構成されており（[表 5] 参照）、さらに **UJ** では 6/13 世紀から 9/15 世紀にかけてのウラマーや為政者の伝記が追加された。**Mustaqṣā** においても、この伝記集という形式そのものは従来の **FBM** を踏襲しているのであるが、その伝記集の人選は他の作品とは大きく異なっている。アラミーが挙げている 15 名は全員がスーフィーであり、彼らの項目の大部分は「我がサイドにして至高なる神の友 **sayyidī, walīy Allāh ta'ālā**」という書き出しで始まっている。上記のサイド・アフマドの伝記にあるように、各人の項では、その人物のスーフィーとしての徳や彼が行った奇跡、彼の没年と埋葬地、そしてその墓地が人々の参詣地となっているということが述べられている。

アラミーが本書の第 10 章においてスーフィーに限定された伝記を挙げていることは、この時代のエルサレムにおけるスーフィズムの隆盛を示すものである。エルサレムが十字軍勢力より取り戻され、再びムスリムの支配する都市となって以降、エルサレムの政治経済的重要性は低下したが、その一方で学問的・宗教的重要性を確立していた [Grabar 1986: EI2 v, “AL-ḲUDS”; Busse 1968: 461-462; Bloom 1996: 216]。UJ に見られたように、マムルーク朝末期までにはハラム・シャリーフを中心として多数のマドラサやザーウィヤが設立され、エルサレムはウラマーやスーフィーたちの集まる町となっていた。Mustaqṣā に見られるスーフィズム的要素も、こうした当時の状況を反映したものであろう。FBM とスーフィズムとの間の同様の関連性は、次項に上げる Risāla にも見られるものである。オスマン朝時代の FBM とスーフィズムとの関連性については、本章の終わりにて改めて考察する。

## (2) Risāla

著者のムハンマド・ブン・ムハンマド・ハリリー **Muḥammad b. Muḥammad al-Khalilī** は、11/17 世紀末から 12/18 世紀のシャーフィイー派法学者である。ヘブロンに生まれ育ち、後にはカイロのアズハルに遊学した。エジプト滞在中には、スーフィー教団のひとつであるカーディリー教団に所属した。エジプトからシリアに戻った後、1104/1694 年にはエルサレムを来訪し、ハラム・シャリーフの西壁の側にあったマドラサ・バラディーヤ **al-Madrasa al-Baladiya** に居留し、同マドラサの教授職を務めた。アクサー・モスクのムアズズィン長やシャーフィイー派のムフティー職も兼任し、ワーイズ（説教師）としても有名であった。ハリリーはまた若い頃より商人としても活動しており、豊かな経済基盤を有し、ワクフも多数所有していたと言われている。1147/1734 年にエルサレムで没し、マドラサ・バラディーヤの敷地内に埋葬された<sup>71</sup>。

ハリリーは、著述家としてはさほど多くの著作を持っていないが、Risāla の他にもエルサレムに関する歴史書である *Tāriḫ al-Quds wa al-Khalil* や、いくつかのファトワー集や書簡を残している。Tāriḫ は、当時のスルタン、アフメト 3 世 (r. 1083/1703-1149/1730) のワズィールのひとりであったラジャブ・パシャ **Rajab Bāshā** (d. 1139/1726)<sup>72</sup> がエルサレムとヘブロンで行ったワクフ建設事業について記録した著作である。

Risāla については校訂本が出版されていないため、本論ではベルリン図書館所蔵の写本

<sup>71</sup> *Tāriḫ al-Quds wa al-Khalil* の校訂本序文より [Tāriḫ 3-48]。

<sup>72</sup> スルタンの侍従、スルタンの宝物庫の管理人 **katkhudā al-khizāna al-sultāniya** を経てワズィールとなる。ワズィール就任中にはディヤール・バクル、トラブゾン、エルサレム、アレppo、ダマスカス、エジプト等様々な地域の行政官に任じられており、1126 年ズー・アルヒッジャ月（1715 年 1 月）から 1128 年ラビーウ・アルアッワル月（1716 年 3 月）にかけての期間に、エルサレムの行政官として同地に滞在していた。この間にハリリーとも親交を結び、ハリリーは彼の相談役となっていた。エルサレムでの任期を終えた後も、ハリリーとの親交は続いたという [Tāriḫ 49-56]。ラジャブ・パシャの任期より、Tāriḫ の編纂は 1128/1716 年直後のことと考えられる。

(Petermann I, 344) を参照した。

**Risāla** においても、前述の **Mustaqṣā** 同様、作品内の各所でオスマン朝の為政者に対する祈願や讃美が行われている。まず本書の冒頭には次のように、当時のスルタンであるアフメト 3 世と彼のワズィールに対する讃美が行われている。

我らが主人ソロモンの時代から、時代の諸王の王にして信仰と善行の旗を打ち立てし方、不信仰と圧政の民に轡をつける方たるオスマン家のスルタン、アフマド・ブン・ムハンマド・ハーンに至るまでの時代を注意深く見よ。そして彼の確かな徳と彼の国へのあまねき善行、あらゆる信仰の魂に向けての深慮、預言者性とその高き書の泉の最初の部分によって、この証の結末を学ぶがよい。とりわけ彼のワズィール閣下にして彼の顧問官、彼の大小のことを差配する方によって。彼はすべての裁きを、完璧なることダイヤモンドのごときその思慮によって裁き、クルアーンの章句と預言者のハディース、インドの剣、太陽と月の輝き、神の直感、確固とした高貴なる行いによって臣民や調停者たちを裁定する。彼は知性あるウラマーやイスラームのシャイフたちの第一人者にして、明白な証と重みあるハディース、力ある秘密、神秘的な知識によってハッジからゆっくりと歩んでくる人である [Risāla 3a]。

**Tāriḫ** がワズィール＝ラジャブ・パシヤに捧げられた著作であったのに対し、**Risāla** の方は、同じくスルタンによってエルサレムに派遣されてきた、メフメト・エフェンディー **Muḥammad Afandī** という人物に対して捧げられている。

さてこれは、栄光を授けられし高貴なるマワーリー閣下にして知識あるウラマーの飾りたるムハンマド・エフェンディー閣下、神聖なるクドスのカーディー殿のために捧げられた手記である。彼は時代の諸王たちの王たるオスマン家のスルタン、アフマド・ブン・スルタン・ムハンマド・ハーンによって、その生命の泉とそのモスクの魂、その秩序の完成、そのしるしの公示を整えるという任務を与えられた人であった [Risāla 3b]。

後に本書の第 2 章で詳しく述べられるのだが、メフメト・エフェンディーは水利に難のあるエルサレムの状況を改善するため、同地の水利施設の設立・修繕という任務を与えられて派遣された人物である。彼がその事業を行ったのは 1120/1708 年から 1122/1710 年にかけてのことであり、**Risāla** の編纂時期もこの年から大きく遅れてはいないだろう [Risāla 20b; Tāriḫ 28; al-‘Asalī 1984: 118]。**Risāla** の編纂は **Tāriḫ** の数年前に当たっており、**Risāla** の中で言及されている「ワズィール閣下」がラジャブ・パシヤを指しているかについては不明である。

**Risāla** は序と 3 つの章、結びより構成されており、それぞれの内容については本書の冒頭にて次のように述べている。

序は、知識ある預言者たちのうち、バイト・アルマクディスとその周辺のことには配慮した人物について明らかにしたものである。…

第 1 章は、バイト・アルマクディスとそこで整備を行うこと、そことその民のために良いことを行うことの美德について明らかにしたものである。

第 2 章は、バイト・アルマクディスの泉で整備を行うこと、泉の流域、そこに付随する水車やその他のもの、そこに集まっている泉や池、その縦横の範囲、その泉の端に立っているカルアト・アルマリージュウ Qal'at al-Mariji' という名前の城塞について。

第 3 章は、[バイト・アルマクディスで] 整備を行った人物とその日付、ウラマーや正しき人々、優れた人々が彼を讃えて詠んだカスィーダ、その中にある喜ばしき知らせや、彼らについての良き言葉について明らかにしたものである。…

結びは、前述のモスクを我々の建物に変えた、高貴なる預言者たちや、知識ある聖者たちについてである [Risāla 4a-4b]。

Risāla の序はエルサレムの歴史に充てられている。ただしこの部分は非常に大まかなもので、ソロモンによる神殿建設、ネブカドネツアルとビザンツによるハラム・シャリーフの破壊、ファランジュによる侵略、サラーフ・アッディーンによる奪還と整備が、短く述べられているに過ぎない。ハリリーはこの後、序の最後の部分において、「この王国の時代においては… 前述のメフメト・エフェンディー閣下がそれ（エルサレムにおける水利事業）について任を受け」 [Risāla 6b] とメフメト・エフェンディーの名前を挙げており、彼のエルサレムにおける事業が、サラーフ・アッディーン以降ムスリムによって行われてきた、不信仰者の手からエルサレムを清め守る行為の延長にあることを示している。ハリリーは本書においてエルサレムの歴史を語ることを重要視してはおらず、この部分は単にメフメト・エフェンディーの名前を導くための導入部である。なおこの部分では、典拠のひとつとしてミンハージーによる IA が挙げられており、ハリリーは従来の FBM のうち少なくとも IA は参照していると考えられる。

第 1 章は、大きく分けて 3 つの部分から構成されている。最初の部分は、クルアーンの章句の解釈、エルサレムに関する預言者ムハンマドのスナ、エルサレムの偉大性・神聖性に関する伝承（カテゴリー C）が、イスナードを省略した形で列挙されている。2 つ目の部分は、クルアーン 17 章 1 節等而言及される、エルサレムを含む「聖なる地」の東西南北の境界線と、その境界からエルサレムまでの距離について述べた部分である。この部分は、MG-M や IA において「シリアの境界」と題されている項の内容と共通しているが [MG-M 84; IA ii, 132-133]、それらの著作を直接引用したものではなく、エルサレムをその地域の中心的都市として、そこから各境界線への距離を測っているところがそれらとは異なっている。



第 1 章の 3 つ目の部分は、エルサレムの「靈性 rawḥāniya」についての議論となっている。ハリリーはここで、「バイト・アルマクデイスは、大地のすべての靈性にとっての瞳である。まさしく万物にとってその姿の中には内なる靈性があり、大地のあらゆる部分、あらゆる点に存在している。…バイト・アルマクデイスの地は、大地の他の場所の靈性よりも高く高貴で、靈性という点において勝っており、伝承や箴言という点において明白なのである」[Risāla 11a]と述べ、メッカの靈性と合わせてこの 2 つの聖地が他に優れて神聖な場所であるとしている。この部分には明らかにスーフィズム的観念が示されている。以上第 1 章は、従来の FBM より引用したエルサレムに関するファダーイルと、スーフィズム的観点から見たエルサレムの靈的な位階の高さを述べることで、神聖なる土地の整備を行うメフメト・エフェンディーの功績を強調するための章となっている。

Risāla の第 2 章は、章題の示す通りエルサレムの水利に関する内容となっている。まず冒頭ではエルサレムが古来より水の便の悪い土地であったこと、歴代の王たちもその水利に腐心してきたが解決には至らなかったことが述べられた後に、この問題に取り組むためにメフメト・エフェンディーがスルタンの命により派遣されてきたことが述べられている。彼はエルサレム到着直後より意欲的にこの任務に取り組み、工人や現地の知識人たちを伴って、エルサレム周辺の水源や水利施設の調査を行い、それらの整備に着手した、とされている。続いてエルサレムの水源となっている 4 つの泉と、そこから伸びる水路、水路に付属する水車、水源の側にイスラエル時代に作られたという 3 つの溜め池とその大きさ、それらの池の近くにあり、水利を管理するための城塞のことが言及されている。この他第 2 章では、例えばカアブ・アルアフバルより伝わる「甘き泉から出る水はいずれも、バイト・アルマクデイスの岩の下から出たものである」という伝承のような、水や川に関するファダーイルが抜き書かれている。

第 2 章の最後の部分には次のようにある。

私は、あらゆる生命の源は水それそのものであり、生命はその元たる根源を求めためだと言う。人々が集められるとき、自然はその中にある、自然がそこから作り出された根源であるところの水を求める。そしてそれは岩の下から流れ出た水なのである。ゆえにすべての魂が、集められる際には自然とその水に向かう。このことは信徒であれ不信仰者であれ、あらゆる人間に今も起こっていることである。まことに人間は、その元たる根源と生まれ持った性質のゆえに、バイト・アルマクデイスへと向かおうとするのである [Risāla 17a]。

第 2 章においてハリリーは、メフメト・エフェンディーの水利事業と関連付けて水というテーマに関する伝承を取り上げ、現世のあらゆる水はエルサレムの岩の下から流れ出るという伝承と、水があらゆる生命によって必要不可欠なものであるということを組み合わせることで、水という観点からエルサレム讃美を行っている。

続く第3章では、オスマン朝のエルサレム統治がテーマとなっている。ハリーリーはここで、922/1516年にエルサレムを初めて支配下に置いたスルタン＝セリム1世(r. 918/1512-926/1520)のエルサレム政策について言及している。セリム1世が訪れた当時のエルサレムとその周辺地域は無秩序状態に陥っており、正式な統治者がおらず遊牧アラブたちに蹂躪されていた。そこでセリム1世はその地に統治者とイエニチェリ軍団を置いて遊牧アラブたちを制定し、シリアからヒジャーズに伸びるハッジ道を管理させた。続くスレイマン1世もエルサレムの整備に貢献した[Risāla 18b]。ハリーリーは、これと同様にエルサレム整備に尽力しているスルタンとしてアフメト3世の名前を挙げ、この章においてもメフメト・エフェンディーによって行われた水利事業と、さらに同じく彼が行ったハラム・シャリーフの修繕について述べている。第3章の記述によればメフメト・エフェンディーは、エルサレム郊外の水源の水を市内に通し、またその水をハラム・シャリーフ内の水場まで通すことによって水利状況を整えることで、人々がそこで神に奉仕することが容易になるような環境を整えた[Risāla 19a, 20b-21a]。

ハリーリーは、以上のような為政者によるエルサレムの整備をイスラームの信仰に対する偉大な貢献であると見なし、これらの行いを讃美・奨励している。彼はクルアーン9章18節「神の礼拝堂を管理するのは、神と終末の日とを信じ、礼拝を守り、喜捨を行う者に限る」について、「神の礼拝堂を管理する」ことには、建物そのものの管理だけではなく、礼拝前の清めに用いる水の手配をすることや、「絨毯を敷いてそこを飾ったり、ランプを用いてそこに明かりを灯したり、勤行やズィクルを長続きさせたり、そこで知識の伝授を行ったり、現世の伝承のようなそこに関係のない物事からそこを遠ざけたりすること」[Risāla 21a]も含まれているとする。ハリーリーは第3章において、こうした行いとそれを行った者を讃えるカスィーダを詠んでいる。ここではハリーリーのものだけではなく、ヘブロンのアブラハムのモスクのハティーフであったシャイフ・アブド・アッラフマーン・タミーミー al-Shaykh 'Abd al-Raḥmān al-Tamīmī、エルサレムのシャリーフ法官であったサイイド・カーシム・タルジュマーン al-Sayyid Qāsim Tarjumān、シャイフ・ムスタファー・ハトブーフ al-Shaykh Muṣṭafā Haṭbūb という人物のカスィーダも取り上げている。これら4編のカスィーダは、Risālaの写本全40葉のうちの7葉あまりに相当しており、作品全体の中でも相当の分量となっている。

Risālaの終章は、エルサレムの周辺にある預言者や聖者の墓廟や聖所についてのものである。預言者の墓廟については順に、アブラハムと彼の妻サラ、イサク、ヤコブ、ヨセフ、マリアの夫である大工ヨセフ、エサウ、ロト、ヨナと彼の父親であるアミタイ、ノア、アダム、ダビデ、モーセ、アロン、イシュマエル、マリア、サーリフ、アブラハムの子孫であるというアスタヤー Aṣṭayā やスィーリー Sirī、ルクマーンといった人々の墓が挙げられている。また預言者たちの他にも、エルサレムの有名な女聖者であったラービヤ・アダウィーヤ Rābi'a al-'Adawiya (d. 135/752) などのムスリムの聖者の墓についてもいくつか述べられている<sup>73</sup>。

<sup>73</sup> ペテルセン A. Petersen は、エルサレム・ヘブロン周辺に点在する預言者たちの墓廟について、建

この部分には、従来の **FBM** とは異なる特徴が 3 点見られる。まずここに挙げられている情報は預言者や聖者の墓のある場所に関することに限定されており、それらの人々の伝記などは書かれていない。また例えばヘブロンにあるアブラハムの墓所についても、**FBM-IM** 以降いくつかの **FBM** に見られたような参詣の際の作法に関することは書かれていない。その代わりにハリリーは、それらの場所実際に参詣した、自身を含むムスリムたちの上で起こった奇跡や、その参詣によって得られた功德の話を列挙している。こうした編纂方式についてハリリーは、「歴史書や様々な解釈書、物語は、彼らの様々な状況をすべてアラビア語にして書いているから、我々は汝にただ、彼らのことで我々が知っていることのうち述べられなかったこと、我々に関わる物事のうち我々の兄弟の上で起こったことのみを述べよう」[**Risāla 29a**] と述べ、すでに既存の書物に取り上げられている伝承を再び取り上げることはせず、これまでに知られていない、著者に近い時代に起きた奇跡譚を重点的に取り上げるという姿勢を明らかにしている。

ここに挙げられている奇跡譚の一例を挙げれば、例えばアブラハムの項には、ハリリー自身の体験として次のようなことが書かれている。

ある盗賊が我々の荷物を奪った。その後私はかの神聖なるお方（アブラハム）のもとに向かった。すると私は町に入る前に私の親戚の者に会った。彼は私に、[強盗に会うというひどい目にあっているだろうから] 自分と一緒に外にある庭園に戻ろうと言った。しかし私は彼に、「どうして私に、高貴なる預言者たち一神よ我々が預言者と彼らとに祝福と平安を与え給え—への参詣を行う前に〔外に〕向かうことができようか」と言った。私は彼と共に〔外に〕向かうことなく、彼らの参詣へと向かった。その夜、私はある人が「我らの愛を求める者よ、我らの門に急ぎ来たれ。我らのもとに来たりし者は打ち負かされし者であり、彼が我々のもとに来たならば、我らは彼をもてなそう」と言っているのを見た。すると 3 日目に、その荷物はそっくり戻ってきた [**Risāla 29b**]。

2 つ目はモーセの重要視である。預言者モーセはイスラエルの民を率いて聖なる地に入った人物として、ハディース集型 **FBM** の中でもいくつかの箇所に取り上げられてきた。そして **RM** と **IA** においては、モーセが埋葬されている場所をめぐる伝承を中心に、彼に関するひとつの独立した章が設けられており、**UJ** の歴史部分ではアブラハムに次ぐ分量の伝記が費やされている。これに対して **Risāla** においては、結びの部分のおよそ半分のページがモーセに対して充てられており、これは伝統的に **FBM** での記載の多かったアブラハムを越えるものである。**Risāla** の結びでは、アブラハムにまつわる奇跡譚は 5 つ挙げられているのに対し、モーセにまつわるものは 17 もの数が挙げられている。以上の点より、マムルーク朝後期からオスマン朝にかけて、シリアにおいてモーセを重要視する新しい傾向が生まれていたのではないかと推

---

築学的観点から実地調査を行っており、一部の墓廟の所在地を特定している [**Petersen 2001: 359-381**]。

測できるが、これは大預言者のひとりであるモーセをエルサレムに関連づけようとする、シリアのウラマーの試みであろう。

イスラームの伝承では、モーセはイスラエルの民の背信の罪のために、聖なる地に入ることを許されず、荒野で死んだとされていた[FQ 110-112]。しかし一方でイスラームの伝承においては、モーセは「聖なる地から石を投げれば届くほどの距離」のところ[FQ 97]、すなわち聖なる地にきわめて近いところで死んだとも言われてきた。ここからモーセはヨルダン川以西の町イエリコで死んだとする伝承が一般的になったのだが、**Risāla** ではモーセの墓のある位置は「バイト・アルマクディスから東に 4 時間半のところ」[**Risāla 32a**] と表現され、結果としてモーセもエルサレムの領域内に埋葬されているという書き方がなされている。**Risāla** ではモーセの墓にまつわる奇跡譚を数多く取り上げることで、偉大な預言者の美德がこの地域に今なお及んでいることを述べ、この地域の神聖性を強調している。

**Risāla** の結びにおいて着目すべき 3 つ目の点は、ここでは預言者や聖者の墓廟のみが参詣の場所として取り上げられているということである。預言者の墓についての伝承は従来の **FBM** においても散見されるが、**Risāla** ではそうした伝承のみが抜き出されてひとつの章にまとめられており、この編纂スタンスは本書に独特のものである。翻って従来の **FBM** の一部で重要な要素であった、ハラム・シャリーフを中心としたモニュメントにまつわる伝承は、一切取り上げられていない。ここに挙げられている墓廟もエルサレム市内や市外近くにあるものは少なく、大部分はエルサレム地区内の別の町や村にあるとされており、著者の視点はエルサレムに固定されてはいない。これはおそらく、この当時のシリアで預言者廟・聖者廟への参詣が盛んになり、ハラム・シャリーフ外のより小規模な聖所が参詣地として新たに注目されるようになったことの反映であろう。この点にもハリリーのスーフィズム的傾向を見ることができる。

**Risāla** においてハリリーは、従来のエルサレムに関するファダーイルを引用しつつ、同時代に行われたメフメト・エフェンディーによる水利事業を讃美し、また自身の同時代かそれに近い時代にシリア各地で体験された奇跡譚を取り上げるなど、著者の生きている「現在」の状況に視点が置かれている。これは、これまでの **FBM** のほとんどが、それらが編纂された時代よりもはるか昔に作られた伝承を繰り返し引用しているのとは大きく異なっており、**Risāla** に特有の編纂スタンスであると言える。

### (3) LUJ

著者のムスタファー・アスアド・ルカイミー **Muṣṭafā b. Aḥmad As'ad al-Luqaymī al-Dimyāṭī** は、1105/1693 年ダミエッタに生まれたシャーフイー派法学者である。ダミエッタに生まれ育った人物であるが、父祖にはエルサレムの有力な一族であるガーニム家を興した、ガーニム・ブン・アリー・マクディスイー **Ghānim b. 'Alī al-Maqdisī** を持っている。ガーニムの血統

はさらに、預言者ムハンマドの教友のひとりであり、当時のメディナのアンサールたちの長老であったサアド・ブン・ウバーダハズラジ Sa'd b. 'Ubāda al-Anṣārī al-Khazrajī に遡ることができる。

ルカイミーは 1133/1720 年にハッジのためにヒジャーズ地方に旅をしており、その際メッカ・メディナの知識人たちより学んでいる。その後エジプトで暮らしたが、1143/1730 年に故郷のダミエッタからシリアに旅し、シリアの各都市を訪問した後に、最終的にはダマスカスに移住している。1178/1764 年に同地で没し埋葬された [A'lām iii, 857; Mu'jam vii, 230; Tārīkh 19-20; LUJ(H) 6-21]。

ルカイミーはシリア訪問の様子を、旅行記 *Mawāniḥ al-Uns bi-Riḥlati li-Wādi al-Quds* に記録している。彼はシリア滞在中に様々な都市を訪れ、それらの場所にある遺跡や聖所に参詣している。エルサレムにも 1144/1732 年に訪問している。ルカイミーはスーフィーとしてはハルワティー教団 al-Ṭarīqa al-Khalwaṭīya に属していたが、エルサレムでは同教団のシャイフであったムスタファー・バクリー Muṣṭafā al-Bakrī al-Ṣiddīqī をはじめとする、多くのスーフィー知識人のもとで教えを受けている。こうした知識人の中には前述のハリリーも含まれており、ルカイミーは岩のドームで行われていた彼のマジュリスに出席して、講義を受けている [LUJ(H) 12]。ルカイミーが LUJ を編纂したのは、このエルサレム滞在中の 1144/1731-32 年のことである [LUJ(C) 19b]。

LUJ には 2000 年に、ハーリド・アブド・アルカリーム・ハムシャリー Khālid 'Abd al-Karīm b. al-Hamsharī による校訂本が出版されている。本書の写本については、現時点でヘブライ大学所蔵写本、ダール・アルクトゥブ所蔵写本、ケンブリッジ大学所蔵写本、ベルリン州立図書館所蔵写本の 4 本が知られているが、本論ではケンブリッジ写本に従っている。LUJ の写本の詳細や、本論における写本選択の理由については、資料編を参照されたい。

ルカイミーは LUJ の冒頭部分で、本書がミンハージーの IA とウライミーの UJ からの要約であることを述べている。彼はこの 2 つの作品を、「[これまでに] 編纂されたもののうちで最も優れ最も偉大なものであり、この方式で作られたもののうちで最も優れたもの」であるとし、それらを注意深く読み込んで「2 つ [の書] から、旅人の楽しみとなり、滞在者や参詣者の糧となるようなものを要約」することを目指した、とする [LUJ(C) 2a]。LUJ は序章と 8 つの本章、結章の、計 10 章より構成されている。各章の章題については以下の通りである。

序章：聖なる地の境界と、敬神の土台となるその礎

第 1 章：バイト・アルマクディスの名称と神聖性、参詣者に贈られる高貴なる贈り物

第 2 章：神聖なるクドスの町を整えた者とそこに住んだ者、そこが 2 度征服されたことについて簡潔に

第 3 章：アクサー・モスクと岩 [のドーム] の様子、詳しく述べられることのない偉業

第 4 章：クドスの町の様子と、そこにあるマシュハド

第 5 章：ヘブロンの町とそのモスク、神の友〔アブラハム〕の物語と、彼のマシュハドに参詣することの美德

第 6 章：バイト・アルマクディスの周囲にある高貴な偉業のある村々

第 7 章：預言者たち、教友たち、著名な人々のうち、バイト・アルマクディスに入った人、または知識人のうちでそこで死に埋葬された人

第 8 章：ヒドルの物語と、バイト・アルマクディスにある彼の位高き住まい

終章：シャームの物語、その美德と偉大さ、その場所の神聖さ [LUJ(C) 2a]

なおルカイミーは、前述の通り本書をエルサレム参詣者のための書としており、この点で本書は BN 以降の参詣記型 FBM としての性格を引き継いでいる。

以下 LUJ の各章の内容を概観すると、序章はシリア地域の境界線と、エルサレム行政区とヘブロン行政区の境界線についての章である。シリア地域については、その東西南北の境界線と、その境界からエルサレムまでの距離について述べており、この部分の内容は前出の *Risāla* の第 1 章における内容にほぼ一致するものである。LUJ ではこれに、エルサレム行政区とヘブロン行政区の範囲に関する記述があり、周辺にあるどの村までがそれらの行政区に属し、どの村からは他の行政区に属するののかという情報が追加されており、この部分は LUJ に初出である。

第 1 章ではまず、エルサレムの名称、エルサレムについて述べたクルアーンの章句とその解釈、預言者ムハンマドのスナがまとめられている。この部分は IA の第 1 章の一部を要約したものであるが、これらの要素を作品の冒頭に置くという形式は、その他の FBM にも見られたものである。LUJ 第 1 章後半には、エルサレムの偉大性・神聖性に関する伝承（カテゴリー C）も含まれており、エルサレムにおける礼拝の功德など参詣にまつわるファダーイルもここで取り上げられている。

第 2 章はエルサレムの歴史に関する章であり、最初のアクサー・モスクの建設からダビデとソロモンによる建設、ネブカドネツアルとローマ帝国による破壊、ウマル・ブン・アルハッターブの征服、アブド・アルマリク・ブン・マルワーンによる岩のドーム建設、アッバース朝カリフによる再建、ファランジュの侵攻、サラーフ・アッディーンによる征服と彼の名前で行われたフトバ、サラーフ・アッディーン死後のアイユブ朝スルタンのエルサレム政策という一連の流れを扱っている部分である（カテゴリー A および B）。この章は IA の第 2 章と第 9 章、そして UJ の歴史部分を要約したものである。本章が扱っている時代の下限は、IA と UJ が共通して扱っているアイユブ朝末までであり、それ以降のマムルーク朝、オスマン朝時代の出来事はここには述べられていない。

第 3 章と第 4 章にかけては、エルサレムの地理に関する章となっている（カテゴリー F）。

まず第 3 章がハラム・シャリーフの様子について述べた部分であり、アクサー・モスクや岩のドーム、その他鎖のドームやミーラージュのドームなどのモニュメント、ハラム・シャリーフの壁についている門などの構造と、そこにまつわる伝承が取り上げられている。また第 3 章の終わりには、ハラム・シャリーフの西壁と北壁に隣接するマドラサやザーウィヤの名称が列挙されている。第 4 章がエルサレムの町とその郊外についての章で、その中では市内にあるスークと街路、マドラサやザーウィヤ、町の城壁の門、市外にあるオリーブ山やシロアムの泉などのモニュメントが挙げられている。これらの部分は IA の第 5 章から第 8 章と、UJ 第 2 部の地理部分[UJ ii, 45-123] を要約したものである。ここでルカイミーは、IA と UJ からそれぞれの要素を取り入れ、それらを補う形で組み合わせている。すなわち、IA からはハラム・シャリーフを中心としたモニュメントに参詣した者に与えられる功德と参詣作法に関する記述を、UJ からは市内にあるマドラサやザーウィヤ、スーク、街路、門、また市内外にある墓地や泉などの名称をそれぞれ引用しており、IA の参詣ガイドとしての特徴と、UJ の地誌としての特徴の両方を合わせた形となっている。

LUJ の第 5 章はヘブロン地理についての章であり、この部分も第 4 章と同様、IA と UJ のそれぞれの要素を取り入れて再編纂したものとなっている。ルカイミーは、IA 第 11 章よりアブラハム一族の墓廟の様子とそこに参詣する際の作法に関する伝承を引用し、UJ からは LUJ 第 3、第 4 章と同じく、IA で扱われていなかったヘブロン町の地理、すなわち市内外にあるマドラサやザーウィヤ、泉、墓地等の説明を引用している[UJ ii, 139-150]。第 6 章は、ヘブロンを含むエルサレムの周辺にある町と、それらに付随する村々に関する章であり、ここではヘブロン周辺の村、ラムラ、リッド、アスカラン、ガザ、イエリコ、ナーブルスという地域について、それらの場所がエルサレムから何日行程の距離にあるかということや、そこにある名所に関することが述べられている。この章の内容は UJ からの引用である[UJ ii, 123-139]。

第 7 章はエルサレムに縁の偉人たちの伝記集である。ルカイミーはこの章の形式と内容の大部分を、IA 第 10 章より取り入れている。すなわち、人類の祖アダムに始まる預言者たち、イスラーム以降では教友たちと彼らに続くタービウーン第 1 世代の人々、さらにそれ以降の著名人の順で、それぞれの人物の略伝を取り上げている。IA の第 10 章は MG・M の伝記集を典拠としたものであるため、LUJ の第 7 章も MG・M より始まった伝記集の形式を受け継いでいると言える。ただ LUJ では、著者はタービウーン以下の人物に関する伝記部分のうち、IA では扱われていない人物のものを UJ より補っており、人物の選択という点では UJ により近いものとなっている（[表 5] 参照）。第 7 章で挙げられているのはヒジュラ暦 6 世紀までの人物であり、これは MG・M や IA における下限と同様である。UJ では作品の後半部分で、さらにそれ以降の時代のエルサレムとヘブロンの上ラマール伝が挙げられていたが、LUJ ではその部分を取り入れられていない。

[表 5] 伝記集人名一覧

名前	没年	MG・M	IA	UJ	LUJ	備考
アダム	—	○	○	別項	○	
ノア	—	○	○	別項	○	
アブラハム	—	○	○	別項	○	
ヤコブ	—	○	○	別項	○	
ヨセフ	—	○	○	別項	○	
モーセ	—	○	○	別項	○	
ヌンの子ヨシュア	—	○	○	別項	○	
ダビデ	—	○	○	別項	○	
ソロモン	—	○	○	別項	○	
イザヤ	—	○				
シュアイブ	—		○	別項	○	
エレミヤ	—	○	○	別項	○	
エズラ	—		○	別項	○	
ザカリヤ	—	○	○	別項	○	
ヨハネ	—	○	○	別項	○	
イエス	—	○	○	別項	○	
ヒドル	—	○	○		別項	
マリア	—	○	○	別項	○	
アレクサンドロス(ズー・アルカルナイン)	—	○		別項		
マフディー(救世主)	—	○	○	別項	○	
‘Umar b. al-Khaṭṭāb	d. 24/644	○	○	別項	○	第2代正統カリフ ※以下教友
Abū ‘Ubayda ‘Amir b. al-Jarrāḥ	d. 18/639	○	○	○	○	
Abū al-Dardā ‘Uwaymir b. Mālīk	d. 32/652	○	○	○	○	
Sa‘d b. Abī Waqqāṣ	d. 1/7C	○		○	○	
Sa‘id b. Zayd b. ‘Amr	d. 51/671	○	○	○	○	
‘Abd Allāh b. ‘Umar al-Khaṭṭāb	d. 73/692	○	○	○		
‘Abd Allāh b. ‘Abbās b. ‘Abd al-Muṭṭalib	d. 68/687	○		○	○	
‘Amr al-‘Āṣ al-Sahmī	d. 43/663			○	○	
‘Abd Allāh b. ‘Amr al-‘Āṣ	d. 65/684	○	○	○	○	
Mu‘ādh b. Jabal al-Anṣārī	d. 18/639	○	○	○	○	
Abū Dharr Jundab al-Ghifārī	d. 32/652	○	○	○	○	
Abū ‘Abd Allāh Salmān al-Fārisī	d. 36/656	○	○		○	
Khālid b. al-Walīd al-Makhzūmī	d. 21/642	○	○	○	○	
Bilāl b. Rabbāḥ al-Ḥabashī	d. 20/641			○	○	
‘Ayyāḍ b. Ghanam al-Fahri	d. 20/641	○	○	○	○	
‘Abd Allāh b. Salām b. al-Islā‘īlī	d. 43/663		○	○	○	
Yazīd b. Abī Sufyān al-‘Umawī	d. 18/639	○	○	○	○	
Mu‘āwiya b. Abī Sufyān al-‘Umawī	d. 60/680	○		○	○	ウマイヤ朝カリフ
Abū Hurayra ‘Abd al-Raḥmān b. Ṣakhr	d. 59/679	○	○	○	○	
Abū Umāma Ṣaddī al-Bāhili	d. 71/700	○		○	○	
Abū Mas‘ūd ‘Uqba b. ‘Amr al-Badrī al-Anṣārī	d. 40/660	○	○	○	○	



名前	没年	MG-M	IA	UJ	LUJ	備考
'Awf b. Mālik al-Ashjā'i	d. 73/692	○		○	○	
Abū Jum' al-Anṣārī	d. 1/7C	○	○	○	○	
Murra b. Ka'b al-Bahzī	d. 57/677	○	○	○		
'Ubāda b. al-Ṣāmit al-Anṣārī	d. 34/654	○	○	○	○	
Shaddād b. Aws al-Anṣārī	d. 58/677	○	○	○	○	
Abū Rayḥāna Sham'un al-Azdi	d. 1/7C	○	○	○	○	
Tamīm b. Aws al-Dārī	d. 40/660	○		○	○	
al-Shurayd b. al-Suwayd	d. 1/7C	○	○	○	○	
'Abd Allāh b. Abī al-Jad'ā' al-Tamīmī	d. 1/7C	○	○	○	○	
Fayrūz al-Daylamī	d. 53/673	○		○	○	
Dhū al-Aṣābī' al-Tamīmī	d. 1/7C	○	○	○	○	
Mas'ūd b. Aws al-Najjārī	d. 1/7C前半	○	○	○	○	
'Abd Allāh b. Ubayy b. Umm Ḥarām	d. 1/7C	○		○	○	
Wāthila b. al-Asqa'	d. 83/702	○		○	○	
Muḥammad b. al-Rabī'	d. 99/717-18	○	○	○	○	
Sālim b. Qayṣar	?	○	○	○		
'Abd al-Raḥmān b. Abī 'Umayra al-Adzī	?	○				
Ṣafiya bint Ḥayy	d. 50/670	○		○	○	預言者ムハンマドの妻
Ghaḍīf b. al-Ḥārth	?	○	○	○	○	
Ka'b b. Māti' al-Aḥbār	d. 32/652	○	○	○	○	※以下タービウーン 第1世代
Uways b. 'Āmir al-Qarani	d. 37/657			○	○	
'Ubayd 'Āmil	d. 1/7C	○		○	○	カリフ＝ウマルの工人
'Umayr b. Sa'd al-Anṣārī	d. 45/665	○		○	○	
Ya'lā b. Shaddād	?	○		○	○	
Jubayr b. Nufayr al-Ḥaḍramī	d. 75/694-95	○		○	○	
Abū Nu'aym al-Mu'adhhdhin	?	○	○	○	○	
Abū al-Zubayr al-Mu'adhhdhin al-Dāraqṭanī	?	○		○	○	
Abū Sallām Mamṭūr al-Ḥabashī	?	○	○	○	○	
Abū Ja'far al-Jarshī	?	○	○	○	○	
Khālīd b. Ma'dān al-Kalā'i	d. 104/722			○	○	
'Abd al-Raḥmān b. Ganam al-Ash'arī	d. 77/696-97	○	○	○	○	
Umm al-Dardā' Hujayma	d. p. 81/700	○		○	○	
Abū al-'Awwām al-Mu'adhhdhin	?	○	○	○	○	
'Abd al-Malik b. Marwān	d. 86/705	○	○	別項	○	※以下タービウーン 第2世代以降
Qubayṣ b. Dhū'ayb al-Khazā'i	d. 86/705			○	○	
Khālīd b. Yazīd b. Mu'āwiya	d. 90/709			○	○	
'Umar b. 'Abd al-'Azīz	d. 101/720	○	○	別項	○	ウマイヤ朝カリフ
Muḥārib b. Dithār al-Sudūdī	d. 116/734	○	○	○	○	
Ibrāhīm b. Abī 'Abla al-'Uqaylī	d. 152/769	○	○	○	○	
'Abd Allāh b. Fayrūz al-Daylamī	d. 2/8C	○	○	○	○	
Rajā' b. Ḥaywa al-Kīndī	d. 112/730	○		○		
Muḥammad b. Wāsi' al-Azdi	d. 123/741	○	○	○	○	

名前	没年	MG-M	IA	UJ	LUJ	備考
Walid b. 'Abd al-Malik b. Marwān	d. 96/715	○	○		○	ウマイヤ朝カリフ
Sulaymān b. 'Abd al-Malik b. Marwān	d. 99/717	○	○		○	ウマイヤ朝カリフ
Ziyād b. Abi Sawda	?	○	○	○	○	
Mālik b. Dinār al-Baṣrī	d. 131/748		○	○	○	
Sulaymān b. Ṭarkhān al-Tamīmī	d. 143/760	○		○	○	
Rābi'a bint Ismā'il al-'Adawiya	d. 135/752	○	○	○	○	
Abū al-Ḥasan al-Nahrānī al-Andalsī	?	○			○	
Muqātil b. Sulaymān	d. 150/767	○		○	○	
Ibrāhīm b. Muḥammad al-Gharyābī	?	○		○	○	
Abū 'Utba 'Abbād al-Khawwāṣ	?	○		○	○	
Sufyān b. Sa'id al-Thawrī	d. 161/778	○	○	○	○	
Ibrāhīm b. Adham al-Tamīmī	d. 161/778	○	○	○	○	
'Abd al-Raḥmān b. 'Amr al-Awzā'i	d. 157/774	○		○	○	
Baqīya b. al-Walib al-Ḥumayrī	d. 197/812		○			
Layth b. Sa'd al-Fahmī	d. 175/791	○	○	○	○	
Abū Ja'far 'Abd Allāh al-Manṣūr	d. 158/775	○	○	別項	○	アッバース朝カリフ
al-Mahdī b. al-Manṣūr	d. 169/785	○	○	別項	○	アッバース朝カリフ
Wakī' b. al-Jarrāh al-Ru'āsī	d. 197/812	○		○	○	
Muḥammad b. Idris al-Shāfi'i	d. 204/820	○	○		○	
Mu'ammal b. Ismā'il al-Baṣrī	d. 206/822	○	○	○	○	
Sarī b. al-Mughallas al-Saqāṭī	d. 253/867	○		○	○	
Dhū al-Nūn al-Miṣrī	d. 245/859	○	○	○	○	
Muḥammad b. Karrām	d. 255/869			○	○	
Ṣāliḥ b. Yūsuf al-Wāsiṭī	d. 282/895-96	○	○	○	○	
Bakr b. Sahl al-Dimyāṭī	d. 289/901			○	○	
Aḥmad b. Yahyā al-Baghdādī	d. 341/952			○	○	
Bishr b. al-Ḥārith al-Ḥāfi	?	○	○	○	○	
'Abd Allāh b. 'Āmir al-'Āmirī	?	○	○	○	○	
Abū 'Abd Allāh Muḥammad b. Khafif	d. 371/982	○	○	○	○	
Abū Muḥammad 'Abd Allāhb. al-Walid	d. 386/996				○	
Qutham al-Zāhid	?	○	○	○	○	
Abū al-Ḥasan 'Alī b. Muḥammad al-Baghdādī	d. 341/952-53	○	○			
Ja'far b. Muḥammad al-Nisābūrī	?	○		○	○	
'Abd al-Wāḥid b. Muḥammad al-Shirāzī	d. 486/1093			○	○	
Ibn al-Qazwīnī	?				○	
Abū al-Ma'ālī al-Musharrāf b. al-Murajjā	d. c. 450/1058			○	○	FBM-IMの著者
Sallāma b. Ismā'il al-Maqdisī	d. 480/1087			○	○	
Abū al-Faṭḥ Naṣr b. Ibrāhīm al-Maqdisī	d. 490/1097			○	○	
Abū al-Faḍl 'Aṭā'	?			○	○	エルサレムの シャーフィイー派法学者
Makkī b. 'Abd al-Sallām al-Rumaylī	d. 492/1099			○	○	FBM(散逸)の著者
Abū al-Qāsim 'Abd al-Jabbār al-Rāzī	d. 492/1098			○	○	

名前	没年	MG-M	IA	UJ	LUJ	備考
Muḥammad b. Ḥasan al-Lāshā'ūnī	d. 506/1112			○		
Abū al-Faḍl Muḥammad b. Ṭāhir al-Maqdisī	d. 507/1113	○		○	○	
Abū al-Faḍl 'Alī b. Aḥmad	?		○			
Muḥammad b. al-Walīd al-Ṭartūshī	d. 520/1126	○	○	○	○	
Muḥammad b. Muḥammad al-Ghazālī	d. 505/1111	○	○	○	○	
Abū al-Ghanā'im Muḥammad b. 'Alī	d. 510/1116-17	○	○	○	○	
Muḥammad b. Aḥmad al-'Umawī al-Maqdisī	d. 527/1132-33			○		
'Alī b. Aḥmad al-Raba'ī al-Maqdisī	d. 531/1117			○	○	
Ḥasan b. Faraj al-Maqdisī	d. 535/1141			○		
Abū al-Faḥḥ Sulṭān b. Ibrāhīm al-Maqdisī	d. 535/1140			○		
Abū Bakr Muḥammad al-'Arabī	d. 543/1148	○			○	
Muḥammad b. Aḥmad al-Daybādī	d. 529/1134-35	○	○	○	○	
Muḥammad b. Ḥātim al-Ṭūsī	?	○	○	○	○	
Abū al-Rūḥ Yāsīn b. Sahl	d. p. 512/1118-19	○		○		
'Abd Allāh b. Walīd al-Anṣārī	?	○	○	○	○	
Abū Bakr b. al-'Arabī Muḥammad al-Mu'āfirī	d. 543/1149		○	○		
Abū Bakr Muḥammad al-Jurjānī	d. 544/1149-50	○	○	○	○	
Abū Sa'd 'Abd al-Karīm b. al-Sam'ānī	d. 561/1166	○	○	○	○	
Ṣalāh al-Dīn Yūsuf b. Ayyūb	d. 589/1193	○	○	別項		アイユーブ朝スルタン
Abū 'Abd Allāh Muḥammad al-Qurashī	d. 599/1202-03	○	○		○	
合計		114	89	105	126	※別項を除く

続く第 8 章は、預言者ヒドルに関する伝承のみを集めた短い章である。ヒドルはエルサレムに関わりの深い預言者として、これまでの FBM でも各所でその伝承が取り上げられてきたが、ヒドルのためにひとつの章を設けるのは LUJ に独自のスタイルである。これについては、本章の終わりに、著者自身が夢の中でヒドルに会い、彼の祈願を受けたということが書かれており [LUJ(C) 52a]、このために著者がヒドルに対し特別の好意を示しているのだとも考えられる。

LUJ の終章はファダーイル・アッシャームに充てられている。この部分は IA の第 17 章と終章を典拠としており、シリア地域の 5 つの行政区の範囲、シリアに関して述べられたクルアーンの章句とその解釈、シリア地域と、ダマスカスをはじめとする各都市の美德が取り上げられている。

ルカイミーはファダーイル・アッシャームを書き終えたところで、「*Ithāf al-Akhiṣṣā'* と *al-Uns al-Jalīl* からの要約は以上である。万世の主たる神に称賛あれ」と述べて一旦筆を置いた後に、「シリアに埋葬されている人々の中には、我らがいと高き父祖たるサアド・ブン・ウバーダ・アンサーリー・ハズラジーがいる。我々はこの要約〔の書〕を、彼と彼の徳の話、アンサールの美德の一部の話で終えよう」 [LUJ(C) 55a] と言って、自身の祖先に当たるメディナの教友、サアド・ブン・ウバーダ(d. ca. 15/636) にまつわる伝承を取り上げている。そこで

はサアド・ブン・ウバーダが、アンサールとして預言者ムハンマドに忠誠を誓い、彼に信頼された人物であったことや、彼の寛大な振る舞い、預言者ムハンマドが「おお神よ、あなたの祝福と恩寵を、サアド・ブン・ウバーダの一族に与え給え」という祈願を彼のために行ったという伝承などが述べられている [LUJ(C) 55a-57b]。本書の記述に従えば、ルカイミーこのサアド・ブン・ウバーダの 21 代目の子孫であるという [LUJ(C) 37b]。著者はこのアンサールの父祖の美德を述べた後に、預言者ムハンマドによる「アンサールの子孫たちに祝福を与え給え」という祈願についての解釈を取り上げ、この祈願は終末の日に至るまでのあらゆるアンサールの子孫たちに及ぶものであるとする解釈を引用し、祖先を通じて自身にも与えられている祝福を強調している。

サアド・ブン・ウバーダはエルサレムを訪れたことはないため、従来の FBM の伝記では挙げられてこなかった教友であるが、著者はここで、サアドは預言者ムハンマドの死後シリアに移住しそこで没したという伝承を引いて、LUJ 終章のファダーイル・アッシャームに関連づけている。著者はまた LUJ の別の箇所、自身の 14 代前の祖先であるガーニム・マクディスイーの名を挙げ、この人物の血統がエルサレム市内のガワーニマ地区に住んでいた一族に由来していると述べ、自分自身とエルサレムとの間の繋がりや深さを強調している [LUJ(C) 37b]。ルカイミー自身はエジプトのダミエッタ出身であるが、エルサレムでの滞在経験を持ち、またダマスカスに移住して同地で没しているところからも、シリア地域と深い地縁を持っており、自身もそれを意識していたと言える。

LUJ 全体の構成を振り返れば、本書はほぼ全編に渡って IA と UJ に依拠しており、参詣記型 FBM に伝記集やファダーイル・アッシャームの要素を組み入れた IA と、エルサレムの総合的な地誌としての性格を持つ UJ の 2 作品から、それぞれの要素を要約した形で抜き出して編集し直したものとなっている。この点で本書は、本稿第 3 章で考察したマムルーク朝時代の FBM の流れをそのまま受け継いだ作品となっている。ルカイミーがこの 2 作品以外の FBM を参照しているかどうかは LUJ の記述から判断できないが、IA と UJ は共にそれ以前の時代に編纂された FBM 作品群の多くを典拠として作られたものであるため、結果として LUJ は間接的に多くの FBM 作品群の要素を取り入れていることになる。この点より LUJ は、FBM 作品群の変遷のひとつの帰結として、また FBM のそれぞれの要素を凝縮した作品として、重要な意味を持っていると言える。

#### (4) HI

著者のムハンマド・ブン・ムハンマド・ハルワティー **Muḥammad b. Muḥammad al-Tāflāṭī al-Khalwātī** はモロッコ生まれの知識人である。幼少時にトリポリに移住し、10 代の頃にカイロのアズハル大学で学問を修めた。その後 19 歳になったハルワティーは、母親に会いに故郷のモロッコに海路で戻る途中、ファランジュの海賊に捕えられ、2 年間に捕虜としてマルタ島

で過ごすことになった。後に海賊の手を逃れてエジプトに戻り、そこからヒジャーズやイエメン、イラク、シリア、イスタンブール等の様々な地域を旅し、最終的にエルサレムに移住した。もとはマーリク派に属していたが、後にはハナフィー派に転向しており、エルサレムではハナフィー派のムフティーとして活動していた。1191/1777年にエルサレムで没している[A'lām vii, 69; Mu'jam iii, 648-9; Rafiq 2000: 50-51]。

HIにも校訂本がなく、本論ではプリンストン大学図書館 Princeton University Library 所蔵写本(Collection on Islamic Manuscripts, Garrett, No. 515Y) を利用している。

HI はプリンストン写本にして 6 葉の小さな作品であるが、本論でこれまでに取り上げてきた FBM 作品群とは全く異なる形式で編纂されている。本書は、ハラム・シャリーフと岩についての 30 の質問とそれに対する回答という、一問一答形式で構成されている。ハルワティーは本書を編纂した動機を、「親愛なる友人、この高き王国の地方の知事であるハーッジー・ムハンマド・アーガー Ḥājjī Muḥammad Āghā が、そうしたことについて私に尋ねた」ことに対する返答であるとしている[HI 150b]。なお本書の末尾には、その編纂が 1191/1777 年である旨が記されており、本書の完成はハルワティーの死の直前であったことが分かる[HI 156a]。

本書において挙げられている 30 の質問とは以下の通りである。

第 1 の質問：それ（アクサー・モスク）を最初に建てた者は誰か、それはいつ建てられたのか[HI 150b]。

第 2 の質問：その後そこを建てた者は誰か[HI 151a]。

第 3 の質問：その長さと幅[HI 152a]。

第 4 の質問：そこはあらゆる預言者たちにとってのキブラであったか。

第 5 の質問：岩やそのドームの周りを、カアバのようにタワーフすることは認められているか。

第 6 の質問：選ばれし方（預言者ムハンマド）はミーラージュの夜、どの門からそこに入ったか[HI 152b]。

第 7 の質問：ブランクが繋がれた輪はどの場所にあるか。

第 8 の質問：ミーラージュは岩の上からであったのか、それとも「ミーラージュのドーム」として知られているドームのある場所からであったのか。

第 9 の質問：彼はミーラージュの夜、預言者たちを率いてどこに立っていたのか。

第 10 の質問：その礼拝は今あるこの〔モスクの〕上で行われたのか、あるいは一部の者が主張しているように古いアクサー・モスクで行われたのか[HI 153a]。

第 11 の質問：彼は岩の下に入ってそこで礼拝したか。

第 12 の質問：ミーラージュは何を通過して行われたのか。

第 13 の質問：バイト・アルマクデイスの岩は現世の岩であるか、それとも樂園の岩であるか。

第 14 の質問：バイト・アルマクデイスの岩は〔地面と〕繋がっているか否か。

第 15 の質問：ミーラージュは真っ直ぐであったか、曲がっていたか。また彼の昇天はどういうものであったか[HI 154a]。

第 16 の質問：彼はブラークに乗って昇天したのか、あるいは戻って来るまでそれをモスクに繋いで置いていったのか。

第 17 の質問：バイト・アルマクデイスの岩は現世で最も高い場所であるか、それとも大地に最も近い場所であるか。

第 18 の質問：モスクのどの場所が最もすぐれているか[HI 154b]。

第 19 の質問：この吊り下がっている岩は、ドームの下に露出しているのか、あるいはその中には何か大地の下に隠れているものがあるのか。

第 20 の質問：岩の美点は残っているか、あるいは神聖なるカアバの美点に置き換えられてしまったのか。

第 21 の質問：岩には、参詣案内人たちが言い認めている通り、舌があるか。

第 22 の質問：神聖なる岩はクルアーンの中で言及されているか否か[HI 155a]。

第 23 の質問：アクサー・モスクの美点について、ハディースの中に何か真正なものがあるか否か。

第 24 の質問：バイト・アルマクデイスにおける礼拝の報いはいかほどか。

第 25 の質問：「アクサー」とはモスク全体のことか、あるいは今日ミンバルのある場所として知られている箇所のことか[HI 155b]。

第 26 の質問：彼はイスラーの夜、アクサー・モスクへの挨拶として礼拝したか否か、また彼がその礼拝を行ったのはどの場所であったか。

第 27 の質問：礼拝〔の価値〕が倍になるというのはモスクに特別なことであるのか、あるいはその町に特別なことであるのか、あるいはそうではないのか。

第 28 の質問：ヒドルは、毎年ラマダーンにバイト・アルマクデイスにて断食したか否か。

第 29 の質問：我らが主人ソロモンは、彼の父と共にアクサー・モスクに埋葬されたか[HI 155a]。

第 30 の質問：アクサー・モスクを修繕したのは誰か。

以上 30 の質問のうち、第 1～第 5 問、第 23～第 25 問、第 27～第 30 問はハラム・シャリーフの成立とその美德について、第 6～第 12 問、第 15～第 16 問は預言者ムハンマドのミーラージュについて、第 13～第 14 問、第 17～第 22 問は岩の美德についてのものである。ハルワティーはそれぞれの質問に対して、伝承家たちがどのような見解を述べてきたか、それらの見解が真正なものかどうか、またある問題に対して複数の見解がある場合は、どちらの方がより正しいか、と言ったことを述べて回答としている。例えば第 16 の質問については、「答え：彼はブラークに乗って昇天したとは言われているが、ハディース伝承者たちがより重要視しているのは、彼らが真正であるとしている通り、ブラークは繋がれたまま置いておかれ、彼は彼自身で昇天したということである」[HI 154a] としている。

これらの質問は内容がハラム・シャリーフと岩、ミーラージュに限定されており、その大部分は既存の FBM ですでに議論されているものである。しかし第 15 問や第 16 問のように、従来の作品では触れられていなかった詳細についての問いかけもある。またこれらの質問の大半は、「～であるのか、それとも～であるのか」といった二択形式か、「～であるか否か」といったイエスノー形式をとっている。ここから、上記のテーマについての曖昧な部分を明らかにし、正しい知識を伝えようとする著者の姿勢を伺うことができる。HI は、ハルワティーが実際にムハンマド・アーガーとの間にこのような問答を行い、ウラマーとしてそれに応えたものを書き留めた作品であると見ることができる。

HI の第 30 の質問ではハラム・シャリーフの整備について、「答え：諸王は、そこや岩のドームの中の悪くなった部分を修繕し続けてきた。オスマン家の諸王も、それについては細心の注意を払っている」[HI 156a] とあり、Mustaqṣā や Risāla と同様、オスマン朝政府によるエルサレム政策を意識する記述が見られる。

## 2. オスマン朝期 FBM の傾向

### (1) 著者の出身地と法学派

オスマン朝時代の FBM 編纂者（[表 1] 29-34）の出身地を見ると、ここでもハディース集型 FBM 編纂者やマムルーク朝時代の編纂者たちと同様に、シリア出身者が大半を占めている。ルカイミーがダミエッタ出身、ハルワティーがモロッコ出身であるが、この両名ともが後半生をそれぞれダマスカスとエルサレムに移住して送っており、ともに移住先で没しているため、彼らについてもシリア地域に深い地縁を持つ人物であったとすることができる。

著者たちの法学派については、所属法学派が明らかになっている 5 名のうち、シャーフイー派が 2 名、ハナフィー派が 3 名となっており、マムルーク朝期までの FBM 編纂者の間ではシャーフイー派が優勢であったのに対し、ここではハナフィー派ウラマーの優勢が見られる。しかしながらこうしたハナフィー派の優勢は、オスマン朝においては公式法学派がハナフィー派となり、オスマン朝政権がハナフィー派優遇政策を取ったことに由来する当然の結果であると言える。

アブドゥルカリーム・ラーフェク Abdul-Kalim Rafeq は、10/16 世紀から 11/17 世紀にかけての時期に、それまでシリアにおける主要法学派であったシャーフイー派の割合が減り、代わってハナフィー派の割合が増加したとし、これをシャーフイー派ウラマーがオスマン朝の支配下で自身の立場を維持するために、ハナフィー派への法学派の変更を行ったためであるとしている。ラーフェクは、ダマスカスの伝記集著者であったムハンマド・ハリール・ムラーディー Muḥammad Khalil al-Murādī (d. 1206/1791) のウラマー伝 *Silk al-Durar fī A'yān al-Qarn*

*al-Thānī 'Ashara* より、12/18 世紀シリアにおいて、法学派の明らかになっている 360 名のウラマーのうち、約 51%にあたる 187 名がハナフィー派、約 41%にあたる 147 名がシャーフイー派であったと計数している [Rafeq 1999: 67-69, 73]。またラーフェクは、同時代エルサレム在住のウラマーに限定した場合の割合についても計数しているが、そこでは全 27 名のうち約 52%にあたる 14 名がハナフィー派、約 19%にあたる 5 名がシャーフイー派となっており、やはりハナフィー派の優勢が見られる [Rafeq 2000: 47-48]。オスマン朝時代の FBM 編纂者の法学派の割合も、こうした傾向に一致している。モロッコ出身のハルワティーは、もとはマグリブで優勢であったマーリク派に所属していたが、カイロやエルサレムで過ごす中でハナフィー派に転向しており、これは現地のウラマーが当時の情勢に従って法学派を変更する例のひとつであると言えよう。従ってこれまでの時代と同様、その当時のシリアにおける法学派の状況と FBM 編纂者の所属法学派との間に大きな違いはなく、これについて何らかの特殊な傾向を指摘することはできない。

## (2) FBM 編纂者とオスマン朝為政者との接近

マムルーク朝時代に編纂された IA と UJ にほぼ全面的に依拠している LUJ を別にして、オスマン朝時代に編纂された FBM には、従来の作品には見られなかった特徴を見出すことができた。その 1 つが、作品中にオスマン朝為政者の名前が言及され、その人物に対する讚美や、場合によっては作品そのものがその人物に対して捧げられるというものである。ここでは *Mustaqṣā* がスルタン＝スレイマン 1 世のワズィール、アリー・パシヤに、*Risāla* がスルタン＝アフメト 3 世のワズィール、メフメト・エフェンディーに対して捧げられており、また HI もその時代のエルサレムの知事であったハーッジー・ムハンマド・アーガーの名前を出している。

従来の FBM では、このジャンルの作品の性質上、それぞれの作品が編纂された当時のエルサレムの政治状況、エルサレムに対するその時代の為政者の政策が言及されることは少なかった。FBM 著者は同時代のそうした状況にはほとんど興味を示しておらず、著者と為政者の間には一定の距離があった。例えば為政者側が自身の政策の正当性をアピールするために、シリアのウラマーに FBM の編纂を依頼したり、逆に著者の側が自著を為政者に献呈することで政権のプロパガンディストとしての役割を務めたりというような事実は、現存する FBM の記述からは読みとれなかった。FBM 作品群において著者が同時代の為政者のエルサレム政策について言及するのは、マムルーク朝末期成立の UJ が初めてのこととなり、ここで著者のウライミーは、当時のスルタン＝カーイトバーイの治世中の出来事について述べている。

UJ 以降の FBM において当時のエルサレムの為政者の名前が言及され、FBM 著者と政権側に接近が見られるようになったことの一因には、当時のエルサレムを取り巻く環境の不安定さがあったと考えられる。UJ が編纂されたマムルーク朝末期には、エルサレム周辺は遊牧アラ



ブ・クルドの襲撃や現地の知事たちの反乱が頻発していた[UJ ii, 414-502]。またオスマン朝以降も、スルタンたちはエルサレムの政治・軍事的安定を重要視せず、その治安は常に不安定なものであった。**Risāla** には、スルタン＝セリム 1 世がエルサレムを征服したとき、それらの地域が遊牧アラブに荒らされ無政府状態に陥っていたことや、その後も周辺の村の農民たち **al-fallāḥūn** が反乱を起こし、街道に陣取って人々を略奪するといった出来事があったことが述べられていた[Risāla 17b-18a, 37a]。その一方でこの時代には、UJ や LUJ において述べられているように、エルサレムには多くの宗教施設が整い、エルサレムはアラブ・イスラームの文化・宗教的中心地のひとつとしての立場を確立していた。そうした状況において、エルサレムのウラマーはそれらの宗教施設を維持するためには中央政権に依存せざるを得ず、政権側がエルサレムに対してどのような対応を行うのかに注目し、中央から派遣されてくる行政官と接近していったのであろう。**Risāla** に見られた、メフメト・エフェンディーの治水事業に対する讚美からは、こうした行いを称揚し、為政者側からエルサレムに対する貢献を引き出そうとする意図が感じられる。

### (3) スーフィズムの影響

オスマン朝時代に編纂された FBM のうち、**Mustaqṣā** と **Risāla** にはスーフィズムの強い影響が見られた。まず **Mustaqṣā** では、従来の伝記集の形式を踏襲しつつ、6/13 世紀から 10/16 世紀にエルサレムとその周辺で没しそこに埋葬されたスーフィーの聖者のみを扱った聖者伝が挙げられていた。また **Risāla** では、預言者たちや聖者たちの墓廟のある場所と、それらに参詣した者に起こった奇跡に関する逸話が述べられていた。これらの記述より、当時のエルサレム周辺で聖者廟への参詣が盛んに行われていたことが明らかとなる。

エルサレムは、古くからスーフィズムとのつながりの強い場所であった。スーフィズムは、2/8 世紀半ばのアッバース朝成立ごろからイスラーム思想界において見られるようになっていた禁欲主義（ズフド **zuhd**）から発展したものである。東長は、禁欲主義はイラクからアラビア半島、シリアに及ぶアッバース朝の幅広い地域に広がったが、特に隆盛を見せたのはホラーサーン地方であるとし、こうした隆盛の背景には、かつてホラーサーンで栄えていた仏教の禁欲主義思想からの影響が考えられると述べている[東長 2013: 52]。エルサレムにおいてもホラーサーンと同様に、他宗教の禁欲主義の影響を受けた形で、ムスリムの間で禁欲主義が広まっていた。すなわち、当時のエルサレム郊外には多くのキリスト教修道院があり、キリスト教修道士たちが隠遁生活を送っていたのだが、彼らの存在がズフドを求めるザーヒド **zāhid** (pl. **zuhhād**) に強い影響を与えた[Hasson 1981: 171-172; Livne=Kafri 2004: 367-369]。

このようなキリスト教修道士のイメージは、FBM では洗礼者ヨハネにまつわる以下の伝承の中に端的に表れている。

ザカリヤの子ヨハネは 8 歳のときバイト・アルマクデイスに入った。彼は、バイト・アルマクデイスで神に仕える者たちが、毛織の荒布と羊毛の被り物を着て熱心に勤行しているところや、物語師が彼らの周りで話をしているところを見た。彼は両親のもとに行き、自分にも毛織の荒布を着せてくれるように頼んだ。両親がそうしてやると、彼はバイト・アルマクデイスに戻っていき、昼はそこで神に仕えて神を讃え、夜は礼拝をし、そのようにして 25 年を過ごした [FBM-IM 182-183; MG-M 286; UJ i, LUJ(C) 39b]。

また、ヨハネは性的な接触を絶った人間であったがゆえに「思慮ある者 *al-ḥaṣūr*」<sup>74</sup>と呼ばれ、復活の日に罪を持たない唯一の人物となるとも言われており [MG-M 285; IA ii, 14; UJ i, 269; LUJ(C) 39b]、禁欲主義者としてのヨハネ像が伺える。

このようなキリスト教からの影響のもとで、エルサレムはザーヒドたちを引きつける場所となり、イブラーヒーム・ブン・アドハム *Ibrāhīm b. Adham al-Balkhī* (d. 162/799)<sup>75</sup> やスフヤーン・サウリー *Sufyān b. Sa'īd al-Thawrī* (d. 161/777)<sup>76</sup>、また *Risāla* にもその墓廟が挙げられていたラービア・アダウィーヤ *Rābi'a bint Ismā'il al-'Adawiya* (d. c. 185/801)<sup>77</sup> 等の著名なザーヒドたちがエルサレムに訪問、あるいは移住している。イスラームにおけるスーフイズムの理念が確立した後も、スーフイーたちによるエルサレム訪問は続き、アブー・ハーミド・ガザリー *Abū Ḥāmid Muḥammad b. Muḥammad al-Ghazālī* (d. 505/1111) も 488/1095 年にエルサレムを訪問している<sup>78</sup>。

もちろん預言者や聖者の墓廟への参詣はオスマン朝以前より行われていた。とりわけヘブロンにあるアブラハム一族の墓廟への参詣に関する記述はすでに 5/11 世紀の FBM-IM に見られるもので、当時のムスリムの間でエルサレムのハラム・シャリーフ参詣とヘブロン参詣を連続して行う参詣ルートが確立していたことは前述の通りである。また教友やタービウーンの伝記を初めて取り入れた MG-M においても、一部の伝記ではその人物の墓に関する情報を書き入

<sup>74</sup> クルアーン 3 章 39 節「彼こそ神のみ言葉の確証者となり、指導者、思慮ある者、預言者にして正しい人のひとりとなろう」より。

<sup>75</sup> ホラーサーンのバルフの王族として生まれたが、現世での生活を棄て禁欲主義者となったと言われる。メッカ訪問後シリアに向かい、エルサレムで生涯を終えた [al-Kilānī 2001: 610-611; 東長 2013: 52]。

<sup>76</sup> クーファに生まれる。アッバース朝第 2 代カリフ＝マンスール (r. 136/754-158/775) の招喚を拒んでクーファを離れ、メッカ・メディナに居住した。エルサレム参詣を行い、岩のドームでクルアーンを読み通したと伝えられる [UJ i, 328; A'lām iii, 104-105; al-Kilānī 2001: 610-611]。

<sup>77</sup> バスラに生まれる。若くして父親に死に別れ、苦しい生活の中で神秘的思想に目覚め、神への無償の愛を唱えた。以後の生活をエルサレムにて過ごし、同地で没した。墓廟はオリーブ山頂にある [A'lām iii, 11; al-Kilānī 609-610; 東長 2013: 55-56]。

<sup>78</sup> ガザリーのエルサレム訪問と、彼がその際に著した著作のひとつである *al-Risāla al-Qudsiya fī Qawā'id al-'Aqā'id* については、ティバウィーによる研究がある [Tibawi 1965]。またその他 2/8 世紀から 6/12 世紀にかけてエルサレムを訪れたスーフイーたちについては、al-Kilānī の研究を参照 [al-Kilānī 2001: 609-619]。

れており、この時点ですでにそうした教友たちの墓が参詣の対象になっていることがわかる<sup>79</sup>。しかし **Mustaqṣā** と **Risāla** においては、こうした傾向が一層強められている。**Risāla** では預言者や聖者の墓廟に関する情報のみが抜き出され、またそこでは従来**FBM**では触れられることのなかった、マリアの夫である大工ヨセフや預言者サーリフの墓について述べていたり、メッカで没したとされるイシュマエルについてもエルサレムの周辺にマカームがあるとしていたり、より多くの預言者の墓廟について言及しようとする著者の意図を感じることができる [**Risāla** 31a, 38a, 39a-39b]。

マムルーク朝時代の参詣記型 **FBM** の要素を引き継いだ **LUJ** や、**Risāla** におけるエルサレムのモスク整備の記述に見られるように、オスマン朝においてもハラム・シャリーフを中心としたより伝統的な参詣は依然として重視されている。しかしオスマン朝時代の **FBM** からは、ハラム・シャリーフだけではなくシリア各地により小規模かつ身近な聖所を作り、そこに参詣することで預言者や聖者たちの功德を得ようとする当時の聖者崇拝の流行を見ることができる。

---

<sup>79</sup> **MG-M** では、例えば教友のひとりであったシャッダード・ブン・アウス **Shaddād b. Aws** (d. 58/667) の墓について、「彼は 58 年に 75 歳で没した。41 年に亡くなったとも言われている。彼の墓のある場所は明らかになっており、参詣の場所となっている。それはバイト・アルマクデイスの、アクサー・モスクの壁に面するラフマ門の近くにある」と述べている [**MG-M** 317]。

## 終章

### 1. 議論のまとめ

本論において筆者は、エルサレム史研究史料としてのファダーイル・バイト・アルマクディス FBM という文献ジャンルについて考察を行ってきた。まず序章では、従来の FBM 先行研究の流れを明らかにし、それが主に起源論研究に終始しており、FBM 写本の現存状況が明らかになっているにも関わらず、研究者たちは比較的初期に成立した作品にしか注目してこなかったという問題を指摘した。このため実際に FBM 編纂が盛んになったアイユブ朝末期以降の作品については議論が進んでおらず、FBM の起源やその編纂目的を、シリアに権力基盤をおいたウマイヤ朝と、十字軍勢力からのエルサレム奪還というジハードを掲げていたシリアのイスラーム政権による、政治的プロパガンダと結び付けるという固定された視点から脱却できずにいた。よって本論ではこの問題点に立脚し、より新しい時代に編纂された作品までを含めた FBM 作品群全体を考察の対象とし、各作品の持つ特徴や時代を通じての内容や編纂方式の変化、作品間の関連性に注目することで FBM 作品群の全体像を把握することを目指した。さらにそうした考察を通じて、従来とは異なる視点から FBM 編纂の動機・目的やその背後にあった社会状況を明らかにし、ムスリム知識人たちが聖地エルサレムという場所をどのように認識していたのかを示した。

第 1 章第 1 節では、まずアサリーによる FBM 写本研究を参考に、本論で考察の対象とする FBM 作品を定めた。本稿では、2/8 世紀から 14/20 世紀初頭にまでの期間に編纂された作品のうち、写本が現存しその著者が明らかになっている作品のみを考察の対象とした。また 14/20 世紀以降に印刷本の形で出版されたとされる作品については、書誌情報が不確かであるため今回は対象から外し、扱う時代の下限については 12/18 世紀までとした。内容の面からは、FBM を「エルサレムという都市やその周辺地域を直接の対象とし、その美点を讃美することに主題を置いた作品」と定義し、エルサレムに関する記述を含むものの主題がこの定義より外れる作品についても対象外とした。この操作の結果、本稿で考察の対象とする FBM は 17 作品となった。また第 2 節では、個別の作品の考察に入る前に、FBM 作品群で扱われる伝承・記述の内容を確認し、A. エルサレムの歴史（イスラーム以前）、B. エルサレムの歴史（イスラーム時代）、C. エルサレムの神聖さ・偉大さに関する伝承、D. エルサレムと終末思想を関連付けた伝承、E. エルサレムでムスリムたちが体験した奇跡譚、F. エルサレムにあるモニュメントとそこへの参詣に関する伝承、G. エルサレムに縁のムスリムたちの伝記、H. クルアーン解釈、I. その他（エルサレム以外に関するファダーイル）の 9 つのカテゴリーに分類した。

第 2 章では、5/11 世紀ファーティマ朝時代から 7/13 世紀マムルーク朝初頭にかけての時期に編纂された 7 つの FBM を取り上げた。FBM は元来エルサレムに関するハディース集から

派生してきたジャンルであり、この時代に編纂された作品にはイスナードの明記や口伝による伝承収集などの、ハディース集としての性格が強く残っていた。本論ではこの時期に編纂された作品を「ハディース集型 FBM」と呼んだ。これらの 7 作品に含まれる伝承を先の 9 つのカテゴリーに分類して、作品ごとにそのパーセンテージを確認したところ、エルサレムを扱った伝承に関しては各作品とも概して A、B、C の割合が多く、これらの要素がハディース集型 FBM の主要素になっていた。しかしファダーイル・アッシャーム等のその他の場所に関する伝承まで含め作品全体の構成を見た場合には、伝承の取捨選択に特定の傾向を見出すことはできず、この時代の FBM 編纂に明確な定型はなかったことがわかる。この中にウマイヤ朝時代や、十字軍がエルサレムを占領していた時代に編纂された作品は知られていないことから、FBM 編纂がこれらの時代に盛んであったとする先行研究の主張は、史料状況からは否定できる。十字軍時代の前後で作品の編纂スタイルが大きく変化しているということもなく、この時期の FBM 編纂には当時のエルサレム周辺の政治・社会状況はあまり反映されていないと言える。

第 3 章では、8/14-9/15 世紀のマムルーク朝時代の 6 作品を取り上げた。この時代には FBM 編纂は大きな変化を見せ、従来のハディース集型 FBM から、あるテーマのもとに伝承を取捨選択・再構成したり、また新しい要素を追加したりといったことが起こった。第 1 節では、エルサレム参詣と結び付けられ、エルサレム参詣の案内書としての意味を持つ「参詣記型 FBM」である BN と TU について考察した。これらの 2 作品では、従来の FBM に取り上げられた伝承の中から、エルサレム参詣やヘブロン参詣に関係する部分のみが抜き出されて、参詣者への便としてイスナードをすべて省略した形で再構成されていた。第 2 節では、FBM が辿ったもうひとつの方向性として、MG-M という「地誌型 FBM」を取り上げた。MG-M では従来の FBM には見られなかった新しい要素として、シリア地域の地理的情報とエルサレムに縁の偉人たちの伝記という 2 つが追加された。これらの新要素は、既存の FBM だけではなく様々なハディース集、伝記集、地理書から取り入れられたものであり、エルサレムに関するより広範な知識をまとめようとする著者の姿勢を見ることができる。

第 3 節では、第 1 節と第 2 節で確認した 2 つの FBM 編纂の方向性を両方とも取り入れようとした作品として RM を挙げた。RM は著者フサイニーのエルサレム参詣に際して編纂されており、基本的には BN に倣い参詣に関する内容を中心に各章を構成しつつ、MG-M よりシリアの地理的情報と伝記集の要素も取り入れている。RM は現存する写本が少なく参照しづらい作品となっているが、この作品の内容は、これとほぼ同時期に編纂された IA の内容によって補うことが可能である。IA の著者ミンハージーは、フサイニーのエルサレム直後の時期にやはりエルサレム参詣を行っており、その際に入手したのであろう RM に全面的に依拠した作品を編纂した。IA は内容的には RM の模倣であるが、オスマン朝時代の作品の典拠となっており、RM の内容を後世に伝える働きをした点で重要性がある。第 4 節では地誌型 FBM である MG-M のスタイルをさらに発展させた作品として、ウライミーによる UJ を考察した。ウライミーは

本書を、歴史的記述を行った第1部と、当時のエルサレムとその周辺地域の地理や建造物についての情報と、同地で活躍した4法学派のウラマーを中心とした伝記集から成る第2部の、2部構成で編纂した。この結果UJは、エルサレムに関する広範な内容を備えた、エルサレムの総合的な地誌としての体裁を持つ作品となっている。

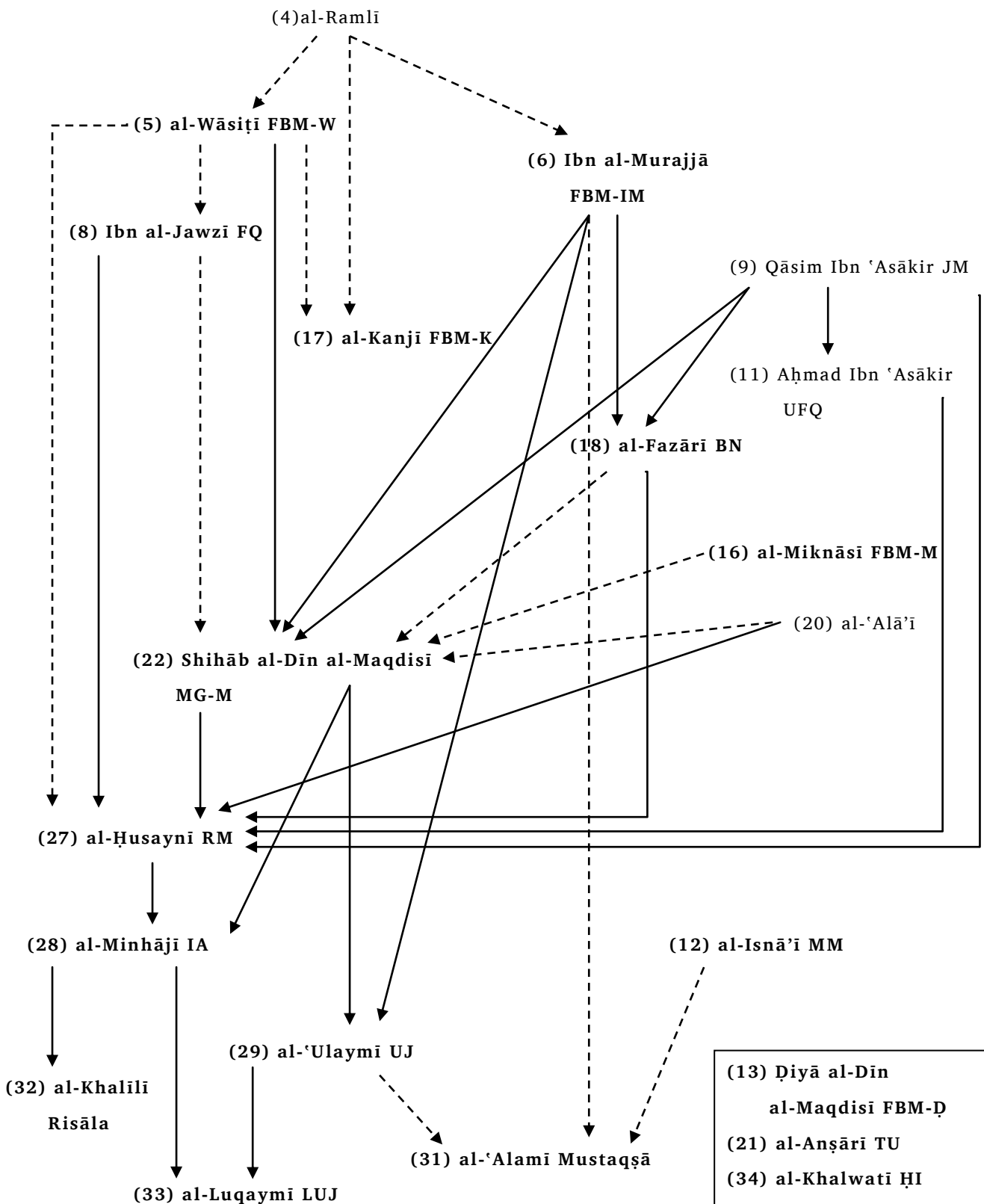
第5節では、マムルーク朝時代に編纂された作品の中でみられるようになるもうひとつの傾向として、預言者アブラハムとモーセの重要視について検討した。

第4章では、10/16-12/18世紀のオスマン朝時代に編纂された4つのFBMを取り上げた。この時代に編纂されたFBMには、作品中で当時のオスマン朝スルタンや、エルサレム県知事といった為政者たちの名前が言及され、彼らに対して作品が捧げられるといった新しい傾向が見られた。そうした為政者がエルサレムで行った公共事業が、作品編纂の直接の動機となっている場合もあり、エルサレム在住のFBM著者と為政者の間の接近が確認できた。これは、当時のエルサレムを取り巻く政治・社会情勢が不安定であり、同時に経済基盤も脆弱であったことから、現地の知識人が宗教施設をはじめとするインフラを管理し自身の立場を守るためには、中央政府の意向に依存せざるを得なかったことに基づくものと考えられる。FBM著者たちは、オスマン朝為政者がエルサレムで行った事業を宗教的善行として作品中で讃美することにより、彼らがエルサレムにより多くの貢献をもたらすことを期待していたのである。

またこの時代のFBMに見られるもうひとつの特徴としてはスーフィズムの強い影響を挙げることができ、それはとりわけ聖者廟参詣という形で表されていた。作品中では、伝統的な参詣場所であるエルサレムのハラム・シャリーフやヘブロンのアブラハムのモスク以外にも、数々の預言者や聖者たちの墓廟についての記述があり、それらの当時の様子や人々がそこで体験した奇跡に関する逸話が豊富に挙げられていた。このことから、当時のエルサレム周辺地域においてより小規模で身近な聖所が作り出されて、そうした場所への人々の参詣が一般化していたこと、さらにFBMがそれらの参詣を推奨していたことが指摘できる。

なお次ページに挙げた[図1]は、本論において4/10世紀のFBM編纂者ラムリー以降、12/18世紀に至るまでのFBM作品群を考察した結果明らかになった、作品間の引用・被引用関係である。

[図 1] FBM 引用・被引用関係



※実線は書物からの直接の引用関係を、破線は口伝での引用関係、あるいは引用関係を推測できるものを表す。

## 2. 5/11-12/18 世紀のシリアにおける FBM 編纂者

本節では、第 2 章から第 4 章にかけて時代ごとに考察してきた FBM 編纂者の経歴・立場について、あらためてまとめたい。

FBM 編纂者たちの出身地、活動した地域については、時代を通じてエルサレム、ダマスカスの 2 都市に代表されるシリア地域に集中していることが確認された。彼らの大部分はエルサレムかダマスカスに生まれ育った知識人であり、またシリア生まれではない人物の場合でも、なんらかの形でシリアに滞在経験を持っている場合がほとんどである。この点において唯一の例外がイブン・アルジャウズィー（[表 1], 8. 以下本節と次節においては、括弧内の数字は[表 1] の番号を表すものとする）であり、彼のみが生涯においてまったくシリアに足を踏み入れたことがないと考えられている。第 2 章第 1 節において述べたように、イブン・アルジャウズィーが FBM 編纂を志した動機は、サラーフ・アッディーンによるエルサレム征服の知らせがバグダードのアッバース朝カリフのもとに届けられたことにある。イブン・アルジャウズィーは、ヌール・アッディーンやサラーフ・アッディーンと交流を持っており、そうしたことからムスリム勢力によるエルサレム回復という記念すべき出来事に際し、FBM 編纂を考えたのであろう。この例外を除けば FBM の編纂はシリア地域に限定されており、FBM 編纂はあくまで地域的な行いに過ぎなかったと言える。

また第 2 章から第 4 章において、FBM 編纂者の所属する法学派についても考察した。まず FBM を著したことが知られている作家たちのうち、シーア派である人物はひとりもおらず、スンナ派 4 法学派のうちでは、シャーフイー派に属する人物が最も多かった。[表 1] に挙げられる 34 名の人物のうち、およそ 4 割にあたる 16 名がシャーフイー派知識人であり、所属法学派が明らかになっている人物に限定すれば、その 7 割以上が同派に属している。しかしながらこのシャーフイー派の明らかな優勢は、シリア地域における主要法学派がシャーフイー派であったという地域的な特性によるものであると考えられる。事実ハナフィー派が公式法学派と定められ、シリアにおいても同派が優勢となっていたオスマン朝時代には、ハナフィー派に属する編纂者が多くなっている。このため現時点では FBM 編纂とシャーフイー派法学の間に特定の関係は見出すことはできず、この偏りは FBM 編纂の地域性を表すものであると捉えられる。

ここで FBM 編纂者の属する立場について、より詳しく考察してみたい。何らかの形でシリア地域と地縁を持つ FBM 編纂者であるが、彼らはさらに、①シリアに生まれ、エルサレムかダマスカスで学問に携わった在地の知識人、②シリア地域外からエルサレムやダマスカスに移住し、同地で活動した人物、③シリア地域外から参詣、あるいは遊学に際しエルサレムやダマスカスを一時的に訪問した人物、に大別できる。

①の集団については、最も多くの編纂者がこの集団に属しており、FBM 編纂の主体となっ



ている。この集団の中で注目したいのは、エルサレムやダマスカスの高名な学者の家系に連なる人々と彼らが運営する知識人サークルが、エルサレムに関する伝承を収集し後世に伝える役割を果たしていることである。こうした家系の代表が、ダマスカスのアサーキル家である。フレンケル Y. Frenkel は、『ダマスカス史』の著者アリー・イブン・アサーキルのサマーアート研究を通じて、彼が収集した伝承がアサーキル家の中で世代から世代へと伝えられていたことを明らかにしている。例えば『ダマスカス史』がウマイヤ・モスクにおいて、著者本人の臨席のもとに講義された際には、長男であるカースィム・イブン・アサーキル(9)が講師を務め、その他の息子や孫、親族を含む人々が聴衆となっていた。またこうした講義の聴衆には、アサーキル家の人物だけではなく、ダマスカスのその他の有力家系の人物も加わっており、その中にはサスラー家のハサン・イブン・サスラー Ḥasan Ibn Ṣaṣrā (10) も含まれていたという [Frenkel 2005: 170-172]。

アサーキル家をひとつの軸とする伝承の継承は、FBM 編纂の流れにも表れている。カースィムは父アリーや父方の伯父たちより伝承を聞き伝え [‘Ibar v, 33]、エルサレムに関する伝承を収集して JM を編纂した。本書は現存しないが、後代の多くの FBM 作品の典拠とされた重要な作品である。前述のイブン・サスラーもアリー、そしてカースィムに師事し、FBM を著している。またカースィムの従弟（アリーの弟ムハンマドの息子）にあたるアフマド・イブン・アサーキル(11)もまた父方伯父たちのもとで伝承を聞き伝え [SA x x ii, 26-27]、カースィムの JM に依拠して FBM を編纂している。カースィムとアフマドが編纂した FBM は、後代に伝えられた写本から、実際に著者本人の臨席のもとモスクなどで講義されていたことが明らかになっている [RM(B) 123b; IA i, 84-85]。同時代のダマスカスのもうひとつの高名な学者の家系クダーマ家の出身であるディヤー・アッディーン・マクディスィー(13)は、このアフマドを師のひとりとしている [SA x x ii, 26-27]。ディヤー・アッディーン著した FBM-D に残るサマーアートにより、彼の収集した伝承はさらに彼の親族を含む弟子たちに教授されていたことがわかる [FBM-D 28-31, 122-125]。また 7/13 世紀半ばのアブド・アッラー・イブン・アサーキル(15)も、アサーキル家出身の FBM 編纂者である。

この他①の集団に属する FBM 編纂者としては、ファザーリー(18)、アラーイー(20)、シハーブ・アッディーン・マクディスィー(22)、フサイニー(26)、ウライミー(28)、アラミー(31)、ハリーリー(32)がいる。彼らはダマスカスやエルサレムの知識人の家系に属し、自らもマドラサのシャイフやカーディーといった役職を務め、両都市の知の世界に深い関わりを持っていた。こうしたシリア在地の知識人たちが主体となり、エルサレムに関する伝承が収集・継承され、FBM という書物の形にまとめられていったのだと言える。

②の集団に属する人物としては、エジプト出身のイスナーイー(12)やルカイミー(33)、モロッコ出身のハルワティイー(34)がいる。彼らは人生のある段階でシリア以外の地域からエルサレムやダマスカスに移住し職を得て、残りの生涯を同地で過ごした人物であり、長い期間をシ

リアで生活していることから、①の集団と同様の社会的立場に立っていたと言えるであろう。③の集団に含まれるのはミクナーシー(16) やアンサーリー(21)、ミンハージー(27) である。ミンハージーに関しては、当時のアレクサンドリア総督に仕えてある程度の年月をシリアの諸都市で過ごしているため、②の集団に含まれるとも見なすことができる。彼らはエルサレム参詣に際して FBM 編纂を行ったものと考えられ、比較的シリア地域との関わりが薄い外部からの人間による FBM 編纂の一例となっている。

②、③の集団に属する人物の出身地は、ハルワティーを除く全員がエジプトとなっている。これはアイユーブ朝、マムルーク朝がエジプト・シリア両地域を支配領域としており、両地域間において人間の移動が盛んに行われていたことからくるものであろう。オスマン朝時代に入りモロッコ出身のハルワティーという例が見られるが、全体として FBM 編纂者は、各時代においてエルサレムを支配下に収めていた王朝の版図内部の人間であったとすることができる。また版図内部であっても、ヒジャーズやイラク以東の地域、アナトリア出身の人物による FBM 編纂例は確認されていない。それぞれの時代や地域における FBM 編纂とその数の多さは、その環境下でのエルサレムに対する関心の高さを反映するものと見なせるため、シリアとエジプトを除くイスラーム地域では、聖地としてのエルサレムの価値やそこへの参詣はさほど重要視されていなかったのではないかと考えられる。エルサレムの重要性が地域的なものであったかどうかという点は、イスラーム第 1 の聖地メッカについての事例と比較して今後検討すべき課題である。

### 3. FBM 編纂とその変遷からみた「イスラームの聖地」エルサレム

#### (1) 聖地としてのエルサレムの重要性はいつ確立されたか

本節では、第 2 章から第 4 章にかけて辿った FBM 編纂の歴史を通じて、5/11-12/18 世紀のシリアを中心とした地域において、ムスリム知識人たちの抱いていたエルサレムに対するイメージがどのように形作られ、またそれが変化していったのかを考察したい。

イスラーム第 3 の聖地としてのエルサレムの聖性それ自体は、イスラームの極めて初期の時代には認識されていたとされている [Hasson 1996: 353; Elad 1999b: 28-29; Bloom 1996: 208]。イスラームにおいてエルサレムが聖地であると見なされた根拠は、そこが預言者ムハンマドのイスラーの終着地点である「遠隔の礼拝堂 al-Masjid al-Aqṣā」と同定されていることと、ムハンマドがメディナにヒジュラした当初、エルサレムに向かって礼拝を行っていたこと、すなわちエルサレムはムスリムにとっての第 1 のキブラであったことにあった。先行研究は、その後シリアに政権を置いたウマイヤ朝によってこのエルサレムの聖性は強調され、エルサレムに関するファダーイルの流通が推奨されるようになったと見なしているが [Sivan 1971: 100-110;

Elad 1999a: 300-301; 1999b: 12-15]、本論第 2 章で述べたように、FBM の編纂が実際に始まったのは 2/8 世紀末から 3/9 世紀初頭にかけてのアッバース朝時代になってからのことである。またアッバース朝以降の FBM 編纂を見ると、492/1099 年にルマイリー(7) が編纂途中で没してから、583/1187 年のサラーフ・アッディーンによるエルサレム征服以降にイブン・アルジャウズィー(8) が作品を著すまでの約 90 年間、FBM 編纂は中断しており、以後アイユーブ朝時代に編纂数が急増している。

イスラーム初期にはエルサレムの聖性がムスリムの間で認識されており、FBM-IM が示していたように、5/11 世紀にはエルサレム参詣も行われるようになっていたにせよ、FBM 編纂という観点より見れば、583/1187 年以前のシリアにおいて FBM 編纂は盛んではなかった。このことは、イスラームの聖地としてのエルサレムの重要性がまだ強固に確立しておらず、ムスリムたちの間でもそのイメージが不安定であったことを意味していよう。確かにウマル・ブン・ハッターブによる征服以降、エルサレムはムスリムによって支配される都市となり、ウマイヤ朝時代には王国内の重要な都市のひとつとしてハラム・シャリーフの整備も進められた。しかしながらアイユーブ朝以前のエルサレムは、いまだユダヤ教・キリスト教色の強い町であり、ムスリムたちは政治的にはそこを支配していながらも、社会的・文化的にはユダヤ王国以来続いてきた「ユダヤ教・キリスト教の聖地としてのエルサレム」のイメージを払拭できていなかった。エルサレム在住の地理書編纂者ムカッダスィーは自身の町であるエルサレムについて、気候もよく豊かな産物にも恵まれ、預言者たちのマシュハドを数多く有する楽園のごとき町であると讃える一方で、「[そこには] ウラマーは少なく、キリスト教徒は多い。彼らはモスクの中庭や宿場で無作法を行っている。…ファキーフはおらず、文人 *adīb* も見受けられない。マジュリス(学問の集い)も見られず、知の教授もない。キリスト教徒やユダヤ人たちがこの町では優位に立っており、モスクには人々の集まりやマジュリスに乏しい」[AT 167] と、当時のエルサレムにおいてユダヤ教・キリスト教の影響力が依然強く、イスラームの学問を学ぶ体制が整っていなかったことを書いている。

492/1099 年に十字軍がエルサレムに侵攻した際、弱体化していたファーティマ朝がそれを阻止することができず、以降も分裂したシリアの地方勢力が長い間十字軍からエルサレムを取り戻そうとする姿勢を見せなかったことは、FBM にも表されている。またダマスカスから助けを求める使節団がアッバース朝下のバグダードに到着した際にも、当時のカリフ＝ムスタズヒル *al-Mustazhir bi-Allah* (r. 487/1094-512/1118) と彼の周囲のウラマーはその知らせを悲しみながらも、なんの具体的な対策も取らずに放置している[FQ 125-126; UJ i, 447-448; *Ibrāhīm* 1985: 501-503]。

エルサレムがムスリムの手から離れていた期間は FBM 編纂の中断期間と完全に一致しており、この期間は為政者たちばかりではなくウラマーもエルサレムに対して積極的な反応を向けていない。すなわち FBM 作品の現存状況に従えば、イスラームの聖地を異教徒に奪われたこ

とへの危機感からウラマーがムスリムたちに向けてエルサレム奪還のジハードを説き、そのため的手段として FBM を編纂し続けたという事実は読みとれない。十字軍の征服以降エルサレムはキリスト教徒の支配する都市となり、モスクも教会へと改修された。十字軍時代のエルサレムにムスリムの入城が完全に認められていなかったわけではないが<sup>80</sup>、そこはウラマーが恒常的に滞在してイスラームに関する学問を行えるような環境ではなく、ウラマーの人口も激減していた。492/1099 年以前は、主としてエルサレムやその近隣の村であるラムラで FBM 編纂が行われていたのに対し、583/1187 年以降復活した FBM 編纂は、カンジー(17) までの約 100 年間はダマスカスを中心に行われている。これはいったんムスリムの都市としての立場を失ったエルサレムが再びその立場を取り戻し、さらにシリアの学術センターのひとつとして発展していくまでの期間であると言えるだろう。

サラーフ・アッディーン以降のアイユーブ朝・マムルーク朝君主は、十字軍によってキリスト教化されたエルサレムの再イスラーム化に腐心し、マドラサをはじめとする多くのワクフ物件を設立した[Frenkel 1996: 73-76; 1999: 2-13; Korn 2004: 76-87]。その結果マムルーク朝末期までの時期には、UJ において述べられていたように、市内には多くの宗教施設が並び立ち、多数のウラマーを擁する宗教・学問の中心地となった。FBM 編纂数の増加は、エルサレムにおけるこうした動きに同調するものであり、このことはとりもなおさず、この時期のシリアを中心としたムスリム知識人たちの間にエルサレムに対する関心が高まっていったことを意味している。エルサレムは十字軍勢力から回復された後、そこにあったキリスト教的要素が排除され町が再イスラーム化されていく過程において、以前には存在しなかった「イスラームの聖地」としての強固なアイデンティティーを確立していったのである。

## (2) ユダヤ教・キリスト教的概念の吸収と再構成

アイユーブ朝以降の FBM 編纂数の増加は、イスラームの聖地としてのエルサレムの重要性の高まりと軌を一にするものであった。次にこの点を、FBM の内容の変遷から考察する。

アイユーブ朝時代に FBM 編纂が再開されてから 1 世紀余りの間に著された作品は、十字軍時代以前の形式をそのまま受け継いだハディース集型 FBM であった。この編纂形式に大きな変化が見られるようになるのは、ファザーリー(18) の BN 以降のマムルーク朝時代のこととなる。FBM がこの時期に辿った変遷のひとつの方向が、BN やアンサーリー(21) の TU に代表される参詣記型 FBM である。このスタイルの FBM の登場は、まさしくエルサレムの聖地としての重要性がこの時期に確立され、マムルーク朝においてエルサレム参詣が盛んになったことを受けている。また FBM の変化のもうひとつの方向性としては、シハーブ・アッディーン

---

<sup>80</sup> ハラウィーは 569/1173 年にエルサレムを訪れ、ハラム・シャリーフを参詣している。またウサーマ・ブン・ムンキズ Usāma Ibn Munqidh al-Kinānī (d. 585/1188) も、十字軍支配下のエルサレムを度々訪れて、当時 Templar 騎士団の小礼拝堂となっていたアクサー・モスクで礼拝している [Ishārāt 25; Rosen-Ayalon 1999: 335-339; Meri 2004: 70-71; Richter-Bernburg 2010: 120-112; 藤本 1987: 178]。

ン・マクディスイー(22) の MG-M やウライミー(28) の UJ に代表される地誌型 FBM があり、その中では伝記集や地理的情報といったハディース集型 FBM には見られなかった新しい要素が組み込まれるようになった。

マムルーク朝からオスマン朝にかけての FBM には概して、十字軍以降の歴史的記述やムスリム著名人たちの伝記、それぞれの作品が編纂された時代のエルサレムとその周辺地域の様子の描写等が追加されることにより、作品がイスラーム的性格の強いものとなり、それと反比例する形で、ユダヤ教・キリスト教的色彩の強い伝承、すなわちイスラエーリーヤートが作品内において占める割合が減少してくるという傾向が見られる。ユダヤ教・キリスト教的色彩の強い伝承とは具体的には、イスラーム以前の預言者たちの言行を中心としたエルサレムの歴史を扱った伝承（カテゴリーA）と、一神教の聖地としてのエルサレムの神聖性を強調する伝承（カテゴリーC の一部）、エルサレムにおける審判と復活、反キリストに関する伝承（カテゴリーD）のことである。

MG-M においては、5/11 世紀成立の FBM-IM と比較して、作品中で扱われるイスラエーリーヤートの種類や数量は大きく変わらないが、そこにサラーフ・アッディーンのエルサレム征服時のフトバと、ウマル・ブン・アルハッターブ以降のムスリムの偉人伝という新しい要素が加わっており、そうした伝承群の作品中に占める割合は低下している。RM と IA においては、扱われるイスラエーリーヤートの種類と数量が MG-M に比べ減少しており、例えば IA では、イスラエーリーヤートを元とするエルサレムの美点を讃える伝承は、全 17 章中の第 1 章の一部分に凝縮されている。また RM と IA においては、第 3 章第 5 節で述べたように預言者アブラハムとモーセに関する章が立てられ、それらが作品の大きな割合を占める要素となっている。

アブラハムとモーセはエルサレムにイスラエルの王国が建てられる以前の預言者たちであり、元来はエルサレムという土地に直接的な関わりのない存在であった。ハディース集型 FBM においては、アブラハムは主としてヘブロンに一族の墓を造ったという伝承、モーセは出エジプトの後エルサレムに近いところで死んだという伝承が、単独のエピソードとして一部の作品に取り上げられていたに過ぎなかった。それが RM と IA では、彼らの生涯の事績が専用の章を立てて述べられるようになるのである。IA では第 11 章から第 15 章にかけてアブラハムとその一族について、第 16 章でモーセについてと、実に 6 章分を費やして彼らの事績を語っている。そしてその中には、例えばアブラハムがバビロンの地に生まれシリアにヒジュラしたことや、彼が人類で初めて割礼を行いズボン *sirwāl* を着用した人間であったこと、彼が復活の日に、人々が裸で復活させられる中最初に衣を着せかけられる人である、というような、エルサレム讃美とはまったく関係のない預言者の業績や讃美が含まれている [IA ii, 77-84]。こうしたアブラハム一族の事績の中には、アブラハムとその息子のイシュマエルのメッカ移住とカアバ建設も含まれており、イスラームに独特の預言者観も強く表れている [IA ii,

109-114]。IA はこうした伝承を踏まえた上で、アブラハムとモーセがエルサレム近隣の地域に滞在していたことを述べ、エルサレムを含む「聖なる地」の讚美に繋げている。

マムルーク朝時代以前のハディース集型 FBM においてはむしろ、エルサレムの神殿、すなわちバイト・アルマクデイスの建設者であるダビデとソロモン、復活の日に救世主としてエルサレムに降臨するとされたイエスの存在が重要視されてきた。しかしここで RM や IA は、エルサレムがイスラエルによって本格的に建設される以前の預言者であるアブラハムとモーセを取り上げ、さらに彼らを、ユダヤ教・キリスト教以前の理想的な一神教徒、またイスラームの預言者として扱うことにより、ムスリムが一神教の正統な後継者であることと、ムスリムがエルサレムを管理することの妥当性を主張している。アブラハムとモーセは、預言者ムハンマドがミーラージュの際に天で彼に会い、ともにムハンマドのウンマに対して挨拶を送り心遣いを示したとされている [IA ii, 77, 127]。FBM 著者は作品内で、エルサレムと直接の関連を持たないが、ユダヤ教・キリスト教にとってもイスラームにとっても重要な預言者たちを描き、彼らにイスラーム的な意味合いを持たせることにより、イスラームから取り入れたものとは異なるイスラーム独自のエルサレム讚美を試みているのである。

ハディース集型 FBM の主要素のひとつであった、エルサレムの偉大性・神聖性に関する伝承 (カテゴリーC) の作品に占める割合の低下は、UJ に至り一層顕著なものとなる。UJ においてこうした伝承は、第 1 部歴史部分の中の、預言者ムハンマドの死とウマル・ブン・アルハッターブのエルサレム征服との間に挿入される一要素に過ぎず、FBM の中でも最大の分量を持つ UJ の中であって極めて小さなものとなっている。UJ におけるエルサレム讚美はむしろ、著者ウライミーの時代のエルサレムの姿を描き出した第 2 部に表現されている。ウライミーはここで、サラーフ・アッディーン以降再びムスリムの支配する都市となったエルサレムが、多くの宗教施設を備えたシリアにおける学術・宗教センターとなったことを、地理的な側面とウラマー伝という人文的な側面から描き、イスラエル時代の栄光ではなくムスリムによってもたらされた現在のエルサレムの栄光を讚美している。

FBM においてイスラームの要素の重要性が相対的に低下し、代わってイスラーム独自の要素が現れてくるというこの傾向は、オスマン朝時代に成立した作品にも引き継がれている。この時代に編纂された作品では、イスラーム以前の歴史 (カテゴリーA) の占める割合も大幅に縮小されており、以前の作品で重要なトピックであったダビデとソロモンによる神殿建設もはや重要視されていない。IA と UJ を典拠としている LUJ においても、ウマル・ブン・アルハッターブ以前のエルサレムの歴史は簡潔にまとめられており、作品の重心はイスラーム以降のエルサレムの姿を描くことに移っている [LUJ(C) 7b-9a]。また FBM にメッカとカアバに対するファダーイルを加えたり、アブラハムとモーセを重要視したりしている点も、マムルーク朝時代の作品と同様である [Ibrāhīm 1985: 497-498; Risāla 11a, 29a-40b]。

オスマン朝時代の作品では、イスラームの要素を排除しようとするだけではな

く、それらをイスラーム的意味合いを持つもの書き換えて取り込んでいこうとする動きも見られ、それは **Risāla** の結章に端的に表れている。そこではアブラハムの一族とモーセを中心に、ノアやイエスの母マリアといった預言者や聖者たちの墓がある場所と、それらの預言者たちがムスリムの上に及ぼした奇跡について述べられており、オスマン朝時代のシリアに住むムスリムたちの間でイスラーム以前の預言者たちの墓廟が数多く知られ参詣されている情景を描くことで、そうした預言者たちをイスラーム的存在としている。ここに挙げられているモーセにまつわるエピソードのひとつには、著者であるハリリー自身、モーセの墓廟のある場所についてあるユダヤ人と交わした問答がある。ハリリーは、モーセの墓廟はユダヤ人たちの不徳のために彼らの目からは隠されており、ムスリムたちにのみ明らかにされていると主張し、「これこそ、モーセ様があなた方に対して怒っておられることの証です。それゆえに、神は彼の墓廟をあなた方からお隠しになったのです」と言い、そのユダヤ人自身もそのことを認めたとしている [**Risāla 33b**]。このエピソードが示すように、ここでは預言者たちはすでにイスラエルの民の側に立つ存在ではなくムスリムの守護者となっており、ムスリムの方こそがユダヤ人よりも彼らを深く理解し、彼らに関するより多くの知識を持っているのだということが強調されている。

以上のようにアイユーブ朝以降には、エルサレムがキリスト教の都市から再びムスリムの都市へと造りかえられていくのに同調する形で **FBM** の編纂数が増加し、それに続く時代には **FBM** の内容面においても、イスラーム以前のユダヤ教・キリスト教的概念がイスラーム的な形に変形されている。エルサレムはメッカやメディナとは異なり、元は外来の聖地であったため、初期のムスリムはエルサレムに関する伝承をイスラエリーヤートから取り入れてきた。ハディース集型 **FBM** に挙げられている伝承の発信者にも、カアブ・アルアフバルやワフブ・ブン・ムナッビフ、アブド・アッラー・ブン・サラームといったユダヤ教からの改宗者たちの名前が頻繁に見えていた。初期の **FBM** がそうした伝承をそのままの形で取り込んでいたのに対し、後代の作品ではそうした伝承への依存の度合いが減少し、エルサレムのイメージにイスラーム独自の解釈を加え、ムスリムの都市としてのエルサレムの現状を描こうとする試みがなされている。この点は、後代の作品ではエルサレムとクルアーンの文言を結び付けて説明しようとする伝承（カテゴリーH）の数と種類が増加していることから指摘できる。**FBM** 編纂の歴史は、前近代シリアのムスリム知識人たちがイスラームの聖地としてのエルサレムの姿を作り上げていくための、ひとつの学術的な努力であったと言えよう。

**FBM** はハディース集から発展したジャンルであるため、そこには先の時代に成立した作品からの引用に基づいて編纂されるという性格がある。これはオスマン朝時代に至るまで **FBM** の基本的性格として保たれ、一面では内容の固定化やオリジナリティーの欠如をもたらしている。しかしその一方、とりわけマムルーク朝時代以降の作品には、それぞれの時代のエルサレム周辺の社会状況が反映された部分が見られ、エルサレム研究を行う上で重要な情報を提供す

るものとなっている。従来注目されることの少なかったこれら後代の作品を史料として活用することで、エルサレム史研究に新しい発展をもたらすことができるであろう。





## 資料編

ムスタファー・ブン・アスアド・ルカイミー *Muṣṭafā b. As'ad al-Luḡaymī al-Dimyāṭī* 著、  
『エルサレムとヘブロンに至宝に関する栄光ある喜びの妙句 *Laṭā'if Uns al-Jalil fī Tahā'if al-Quds wa al-Khalīl*』校訂と訳注

### (1) はじめに

序章において述べたように、従来の FBM 研究では比較的早い時代に成立した作品のみが注目されているという問題があった。とりわけ、FBM が盛んに編纂されるようになったマムルーク朝を過ぎ、再び編纂数が減少してくるオスマン朝時代の作品について、先行研究はほとんど言及してこなかった。そこで本論資料編では、そうしたオスマン朝時代に編纂された FBM の一例として、ルカイミー(d. 1178/1764) の LUJ をを取り上げ、その校訂と日本語訳注を行う。なお著者の経歴については、本論第 4 章第 1 節を参照されたい。

LUJ はオスマン朝時代の作品の中では、その典拠が最もはっきりと示されており、マムルーク朝後期の作品である IA と UJ に拠って編纂されている。IA、UJ もまた、それに先立つ時代に成立した様々な FBM 作品を典拠として書かれた作品であるため、LUJ の中には、5/11 世紀の FBM-W や FBM-IM 以降オスマン朝に至るまでの FBM 編纂の流れ、すなわち時代を通じた伝承の取捨選択や新しい要素の追加といった FBM の変遷が、明確に表れている。この点で LUJ は、今後の FBM 研究において着目すべき重要な作品のひとつである。

LUJ には 2000 年に、ハムシャリー *Khālid 'Abd al-Karīm al-Hamsharī* による校訂が出版されている。本論では、ハムシャリーによる校訂を LUJ(H) と略称する。以下ではまずハムシャリーの研究を概観し、その問題点を示す。

### (2) ハムシャリーの校訂と参照写本

ハムシャリーは LUJ を校訂するにあたり、3 つの写本を参照している。以下にその 3 写本と、それらに対するハムシャリーの所見を述べる。

#### ①ヘブライ大学写本 *al-Jāmi'a al-'Ibriya*, No. 807

エルサレムのヘブライ大学に所蔵されている写本で、ハムシャリーの校訂においてはアイン写本(ε)と呼ばれる。明確なナスヒー体で筆記されており、写本の葉数は 48 葉である。1 ページにつき 25 行、1 行当たり 13 語から 17 語が含まれている。以下本論資料編においては、本写本を H 写本とする。

ハムシャリーは、第 1 葉 a の記載より、H 写本は 1150/1737 年に、アフマド・ブン・フサイン・キーワーニー *Aḥmad b. Ḥusayn al-Kiwānī* という人物によって筆写されたものであると

している。同じく第 1 葉 a には、サイイド・ムハンマド・アッサイード **al-Sayyd Muḥammad al-Sa'īd** という人物による、本書に対する頌詩が書かれているが、ハムシャリーはこの人物を、LUJ の著者ルカイミーの兄弟のひとりで、詩人であったムハンマド・アッサイードに同定している。

ハムシャリーは、H 写本が 1150/1737 年という著者の存命中に筆写されているということと、注釈が多く付されており、人名・地名等の固有名詞に母音点が多く付けられているということから、H 写本が現存する LUJ の写本の中で最も古いものであると判断し、これを校訂の底本としている [LUJ(H) 7, 30, 34-37]。

### ② ダール・アルクトゥブ写本 **Dār al-Kutub al-Miṣriya, No. 793/1935**

カイロのダール・アルクトゥブに所蔵されている写本で、ハムシャリーの校訂においてはミーム写本(م)と呼ばれる。明確なナスヒー体で筆記されており、写本の葉数は 73 葉である。1 ページにつき 21 行、1 行当たり 9 語から 13 語が含まれている。以下本写本を D 写本とする。

D 写本の第 73 葉 b の奥書には、「この書の筆写は、1151 年 (1738 年) シャアバーン月 7 日水曜日に完了した」とあるが、写字生は不明である。また第 1 葉の記載から、本写本は 1251/1836 年に、サイイド・ムハンマド・ナージー・サリーム **al-Sayyd Muḥammad Nāji Salīm** という人物の所有になっていたことがわかる。

ハムシャリーは、D 写本は H 写本に比べ、注釈や母音点の付記が乏しいとするが、1151/1738 年という H 写本に次ぐ筆写年代の古さから、本写本を H 写本に続く重要な写本であると位置づけている [LUJ(H) 37-38, 315]。

### ③ ベルリン写本 **Staatsbibliothek zu Berlin, Wetzstein II 1104.**

ベルリン州立図書館に所蔵されている写本であるが、ハムシャリーはこの写本については写本番号を挙げていない。ハムシャリーの校訂においてはラーム写本(ل)と呼ばれる。写本の葉数は 67 葉で、1 ページにつき 21 行、1 行当たり 10 語から 15 語が含まれている。以下本写本を B 写本とする。

ハムシャリーは B 写本の筆写年を、奥書の記載より 1182/1768 年であるとしている。なお写字生の名前についても、同じく奥書に明らかであるとしている (実際の名前には言及していない)。本写本の中に見える固有名詞の一部が誤っていたり、母音点が付けられていなかったりすることから、ハムシャリーは、この写字生は歴史や人物伝に関する知識に乏しい人物であったのだろうと述べている [LUJ(H) 38-39]。

B 写本についての情報を追加すると、本写本の写字生はリドワーン・ブン・サッラーマ・ブン・ムハンマド・サカル **Riḍwān b. Sallāma b. Muḥammad b. Ṣaḡar** という人物である。また筆写年については、ハムシャリーは 1182/1768 年としているが、ベルリン州立図書館のアラビ

ア語写本カタログを編纂したアールヴァルト W. Ahlwardt は、本写本の筆写年を 1151/1738 年であるとしている [Ahlwardt v 1893: 412-413]。これらの判断の違いは、この年代が数字で書かれているのみであり、アラビア文字による併記がないことによっている [LUJ(B) 67a]。しかしながら本論において、筆者はこの部分を「1181 年」と判読すべきではないかと考える。筆写された月と日については、「ジュマーダー・アルウーラー月 22 日日曜日」 [LUJ(B) 67a] とあるため、B 写本は 1181/1767 年に筆写されたものであるとする。

### (3) ハムシャリーの底本選択の問題点

ハムシャリーは LUJ を校訂するにあたり参照した 3 写本のうち、H 写本を底本としている。彼がこの写本を底本とすべき重要な写本であると判断した根拠は、H 写本第 1 葉 a の 1150/1737 年という年代の記載であり、彼はこの年を、本写本がキーワーニーという人物によって筆写された年だと判断しているが [LUJ(H) 36]、ハムシャリーによるこの所見は疑問が残るものである。

まずハムシャリーは、H 写本を底本として校訂するに際し、第 1 葉 a の内容については触れていないため、1150/1737 年にキーワーニーによって本写本が筆写されたということが、実際にどのような表現で書かれていたのかは明らかになっていない。ハムシャリーは、校訂本の中に、H 写本第 1 葉 a の写真版を掲載している [LUJ(H) 40]。そこから判断する限りでは、ハムシャリーが H 写本の筆写年代の根拠としているのは、「僕にして常に誠実なる者、アフマド・ブン・フサイン・キーワーニーがこれを書いた。神が彼ら兩名の罪を赦し給わんことを。1150 年末 Wa kataba-hu al-'abdu al-mustadīmu al-khulūṣu Aḥmad b. Ḥusayn al-Kiwānī. Ghafara Allāhu dhunūba-humā. Fī awākhir 1150」という記述であろう。しかし、この「キーワーニーがこれを書いた」という一文を、必ずしも「キーワーニーがこの写本を筆写した」という意味に取ることはできない。

H 写本第 1 葉 a は 3 つの部分より構成されており、それぞれ① LUJ のタイトルと著者ルカイミーの名前、② 著者の兄弟ムハンマド・アッサイードによる頌詩、③ 「神ただおひとりにこそ称賛あれ。これは魂の聖性の閃きにして、神聖なるスナナの輝き、創造主のご意志の聖性である・・・」から始まる文章である。この③の終わりの部分に、前述の「キーワーニーがこれを書いた」という一文が付されている。③の部分はキーワーニーが LUJ と著者ルカイミーに寄せた賛辞であると考えられ、前文の中に見える「彼ら兩名」とは、ルカイミーとキーワーニーのことを指しているだろう。「キーワーニーがこれを書いた」という表現についても、「キーワーニーがこの賛辞を書いた」という意味で捉えるほうが自然である。なおこのキーワーニーとは、ルカイミーと同時代のダマスカスの詩人である (1173/1759 年にダマスカスにて没) [A'lām i , 118]。

キーワーニーを H 写本の筆記者と見なすことのもうひとつの問題は、H 写本には最終葉が

欠けており、奥書を確認することができない点にある。写本の筆写年と写字生についての情報は、普通写本の奥書に書かれる。ハムシャリーが参照している3つの写本のうち、D写本とB写本については、それぞれ奥書にこれらの情報が記されている。H写本は47葉から構成されているが、第47葉bは明らかに文の途中で中断されている[LUJ(H) 42]。他の2写本から判断するに、H写本には48葉目が存在したはずであるが、この最終葉は現在失われてしまっている。よって、本写本が正しく1150/1737年にキーワーニーによって筆写されたものであるとは、判断することができないのである。H写本の正確な筆写年が確認できないものであれば、1150/1737年という年代を根拠に本写本を現存する最も古い写本であると思われ、これを校訂の底本とすべきであるとしたハムシャリーの前提も崩れることになる。

#### (4) ハムシャリーが参照していない写本

LUJには、ハムシャリーが参照していない写本がもう1つ存在する。それがケンブリッジ大学図書館 Cambridge University Library 所蔵の写本(Qq. 127)である。以下本写本をC写本とする。

ケンブリッジ大学写本は明確なナスヒー体で筆記されており、葉数は58葉、1ページにつき23行が含まれている。1葉の大きさは21.2×16.2cmである。

C写本の第1葉aはH写本と同様、①タイトルと著者名、②ムハンマド・アッサイドによる頌詩、③キーワーニーによる賛辞の3つの部分で構成されており、本文は第1葉bより始まっている。C写本の第1葉aには、H写本の記述とは異なる点がいくつか含まれている。

まずムハンマド・アッサイドによる頌詩について、C写本には「サイド・ムハンマド・アッサイド・ルカイミー al-Sayyid Muḥammad al-Sa'īd al-Luqaymī により、本書が讃えられている」とある。ハムシャリーの所見通り、頌詩の作者ムハンマド・アッサイドは、LUJの著者ルカイミーの兄弟と見て間違いないだろう。またC写本ではこの頌詩の終わりに、「神が彼ら両名を赦し給わんことを。1143年」という一文が付け加えられている。1143/1730-31年という年はLUJが編纂された1144/1732年の前年に当たっており、この詩はLUJの編纂完了以前に詠まれたものであると考えられる。

次にキーワーニーによる賛辞についてであるが、賛辞の終わりの部分が、「僕にして常に誠実なる者、アフマド・ブン・フサイン・キーワーニーがこう言った。神が彼ら両名の罪を赦し給わんことを。1150年末」となっており、H写本において「書いた *kataba*」とされていたところが、ここでは「言った *qāla*」とされている。

またC写本には、ムハンマド・アッサイドによる頌詩の上、第1葉aの左上部にあたる箇所、「恩寵の泉におけるささやかなる美德の術に乏しき者、アフマド・ナーシル・アッディーン・マシュリキー Aḥmad Nāṣir al-Dīn al-Mashriqī の知事在任中に。神が彼を赦し給わんことを」という一文が記されている。なおこれらの第1葉a面はすべて、第1葉b面以降の

本文と同一の筆跡で記されている。

C写本の筆記された年と写字生については、第57葉bの奥書に「本書の筆写は、1161年の神聖なるムハッラム月13日の祝福されし月曜日に、卑しき者フサイン・イラーキーHusayn al-'Irāqī<sup>81</sup>の手によって完了した」と記されている。すなわち本写本は1161/1748年という、著者ルカイミーの存命中に作られた写本のひとつである。この奥書からも、少なくともC写本においては、第1葉aに名前が見られるキーワーニーは写字生ではないことが明らかである。このことは、ハムシャリーが底本としたH写本についても、1150/1737年にキーワーニーが記したのは賛辞の部分のみであり、写本の写字生は別に存在したのではないかという仮説を裏付けるものである。

### (5) 写本間の相互関係

ハムシャリーが参照したH、D、B写本にC写本を加えた4つが、現在存在が明らかになっているLUJの写本である。これら4つの写本のうち、H写本とC写本には、タイトルの書かれた最初のページに、ムハンマド・アッサイードによる頌詩とキーワーニーによる賛辞が加えられているが、D写本とB写本にはこれらが存在しない。このことから、H写本とC写本は同系統の写本であると考えられる。

次にH写本とC写本の間相互関係について検討する。C写本には第31葉b第22行において、大きな脱落が見られる。ハムシャリーの校訂に従えば、C写本の脱落部分は、H写本の第25葉a第1行からの2葉あまりに渡る部分となる。C写本にこうした大きな脱落があることから、H写本がC写本を親写本として写された写本(C写本→H写本)であるとは考えにくい。逆にC写本がH写本より写された可能性(H写本→C写本)についても、確実な根拠を挙げることはできない。よって現時点では、H写本とC写本は同系統の写本群であり、共通の親写本を持っている可能性があるとするに留める。

H-C写本とD写本、B写本との相互関係についてであるが、これらの間にも直接の関係性を断定できるほどの根拠は見出せない。B写本については、C写本より後に筆記されたものであるが、C写本より写された可能性(C写本→B写本)は低いと言える。B写本には、前述のC写本における脱落部分を始め、C写本には存在しない箇所や、逆にC写本には存在する箇所が脱落していたりするからである。

### (6) 本論の校訂における底本選択

以上LUJには4つの写本があり、このうちB写本とC写本の2つは、ブロッケルマンC. Brockelmannやアサリーによる写本研究で存在が確認されていたものである[Brockelmann

<sup>81</sup> ケンブリッジ大学図書館のアラビア語写本カタログを編纂したブラウン E. Browne は、本写本の写字生を”Husayn العرافي“としている[Browne 1900: 187-188 (No. 978)]。C写本においては、この部分の単語に弁別点が付けられていない[LUJ(C) 57b]。本論ではこれを al-'Irāqī العرافي と判読した。

G2: 476; S2: 490; al-'Asalī 1984: 119-120]。H 写本と D 写本については、ハムシャリーの校訂において初めて用いられた写本であり、新しい写本の存在を示したという点で彼の研究は意味を持つものである。

しかしながらここで指摘してきたように、ハムシャリーが底本とした H 写本には、筆写年代の設定に疑問が残るため、これを校訂の底本として選択すべきかどうかは、改めて検討する必要があるだろう。またハムシャリーは、ブロッケルマンやアサリーを参照しているにもかかわらず [LUJ(H) 333, 335-336]、校訂に C 写本を用いていない。さらに B 写本の参照の仕方についても、多くの不備が見られる<sup>82</sup>。

本論の資料編において筆者は、ハムシャリーの校訂を補完するものとして、C 写本を底本とし、さらに B 写本を用いて校訂を行うこととする。なお筆者は現時点において、ハムシャリーの指摘した H 写本と D 写本を参照することができていない。これら 4 つの写本、また更なる新しい写本を用いてより精緻な校訂を行うことは、今後の筆者の課題として置く。

#### (7) 本論の校訂と訳注における用例

アラビア語校訂中、日本語訳注中に [i. 1]あるいは [1. a] とあるのは、本論における底本とした C 写本の葉番号とその表(i/a)、裏(ب/b)を表している。

校訂に際しては、C 写本と B 写本との間で語句に違いがある箇所を ( ) (小カッコ) で指摘し、脚注にて解説する。校訂脚注では、B 写本をアラビア文字 ب で表すものとする。また日本語訳を作成するにあたっては、底本内に存在しない語句を日本語で補う場合には [ ] (亀甲カッコ) で、代名詞等を具体的に説明する場合には、「彼 (預言者ムハンマド)」というように ( ) (小カッコ) を用いる。クルアーンからの引用については、アラビア語校訂においては { } (中カッコ) を用いて区別し、脚注において章と節の番号を示し、日本語訳注においては < > (山カッコ) を用いて区別し、(Q : ) の記号によって章・節番号を示すものとする。なおクルアーンの日本語訳については、藤本・伴・池田訳を参考としている [池田 2002]。

<sup>82</sup> 一例を挙げれば、ハムシャリーは校訂本 49 ページ註(5)にて、وعز という 1 単語が B 写本には欠落しているとしているが、B 写本第 1 葉 b の該当部分には挿入を表す記号が付けられており、本文欄外右側に本文と同一の筆跡で、وعز の語が書き込まれている。ハムシャリーによる B 写本の参照には、このような誤りが多く見られる。





الحمد لله الذي من علينا بآلاء لا تستقصى، من أجلها اتحافنا بزيارة المسجد الأقصى، وأولانا من وافر برّه الجزيل، وهدانا لتلخيص إتحاف الأخصاء وأنس الجليل. والصلاة والسلام على باب رحمته الذي خصّه بالإسراء. فهي من أعظم كريمته، فسبحان الذي أسرى بعبده، وأتحفه بجلال نعمه ووفده. فهو سيد الأولين والآخرين وخاتم الأنبياء والمرسلين صلى الله عليه وعلى عترته ذوي الأعراف الأقدسة، وصحابته ذوي الأخلاق القدسية، صلاةً وسلاماً شذاهما من المسك أعطر دائمين إلى يوم المحشر والمنشر.

أما بعد، فلما أتحفني الله بالسعي إلى الوادي الأقدس، وشرّفني بزيارة (المسجد)<sup>3</sup> الشريف المقدس، وحللت بوسيع تلك الرحاب، وقبلت بأجفاني ثراً<sup>4</sup> (تلك)<sup>4</sup> الأعتاب، واقتبست من مشكاته مصباح الأنوار، وكشفت لي محاسنه عن مخدرات الأسرار، وترنحت لرؤيا تلك الآثار، وتروّحت لريا نسيمها المعطار.

بلاد بها نيظت لجدي ابن غانم. تمانم في جيد الزمان هي العقد. فالتمست كتاباً يكون أمامي لاحتاط بهاتيكم المآثر، وأمامي للقيام (بواجب حقوق)<sup>5</sup> تلك المشاعر. فوجدت إتحاف الأخصاء وأنس الجليل كتابين جُمعاً بين صناعتني الإجمال والتحصيل، وهما من أبرع ما أُلّف وأبهج وأبرع ما صُنِع في هذا المنهج، غير أن محلّ المقصد من ذكر المآثر، يعسر ويعزّ استخلاصه واستلخاوصه على الزائر. (ونزلت بمعاهدها نزول ضيف)<sup>6</sup> وأقمت (بسوحها كمزنة صيف)<sup>7</sup>، وما بلغت من مرامها الأدياء ولم أقض عن حقها الذي وجبا. ثم لما شدت عنان العزم إلى الرجوع ونهيت إنسان عيني من سفة الهجوع، وألقت عصاها واستقرّ بها النوى، كما قرّ عيناً بالإياب المُسافر. سرحت ثانياً في رياضهما ناظري، فلاح في (جوهر)<sup>8</sup> مرآة خاطري مع ما أنافيه [2. أ] من تغير الوارد، وما أعانيه من تكدر الموارد، إنّ ألّخص منهما ما يكون نزهة للسائر، وبلغة للمقيم والزائر فاجتنيبت من رياضهما تمرات الأوراق الأنيقة، واقتطفت من غصونهما يانع زهراتهما العبيقة. فجاء بحمد من له الفضل والمنة روضة أبوابها عدد أبواب الجنة مبتدأً بمقدمة ومختتماً بخاتمة، تغاولا بحسن الختام والوصول إلى دار الإسلام بسلام. وسميته لطائف أنس الجليل في تحائف القدس والخليل.

فالمقدمة: في حدود الأرض المقدسة وقواعدها التي هي على التقوى مؤسسة.

الباب الأول: في أسماء البيت المقدس وشرفه وما يتحف به الزائر من جلائل تحفة.

الباب الثاني: في من احتظّ مدينة القدس الشريف، وفيمن سكنها وفتوحاها على أوجز وجه لطيف.

الباب الثالث: في صفة المسجد الأقصى والصخرة وما به من المآثر التي لا تستقصى.

الباب الرابع: في صفة مدينة القدس وما بها من المشاهد ونبذة مما حول سرادقاتها من المعاهد.

الباب الخامس: في مدينة الخليل ومسجده وذكر الخليل وفضل زيارة مشهده.

الباب السادس: في بعض ما حول بيت المقدس من القرى التي بها المآثر الرفيعة الزري.

2 ب: (رب يسرنا كريم).

3 ب: (الكرم).

4 ب: (هاتيك).

5 ب: (بحقيق).

6 ب: (فولجت تلك المعاهد ولوجاً مستعجزاً).

7 ب: (هناك إقامة مستفزة).

8 ب: (جوهر).

الباب السابع: في بعض من دخل بيت المقدس من الأنبياء والصحابة والأعيان ومن توفي ودفن فيها من أهل العرفان.

الباب الثامن: في ذكر الخضر عليه السلام ومحلّه من المسجد الأقصى الرفيع المقام.

الخاتم: في ذكر الشام وفضلها وبهجتها وشرف محلها.

وجعلت ذلك دليلاً للسائرين وتحفة مهداة للزائرين. ومن أغرب العجائب وأعجب الغرائب أن لما أن من الكتاب التمام، (ورمت)<sup>9</sup> أن أطبعه بمسك الختام، تيسّر لي العودُ إلى القدس مرة أخرى، وكان (بي ذلك)<sup>10</sup> أولى وأخرى. فجلست ثانياً في ذلك الأثر، فوافق بحمد الله الخُبْرَ الخَبْرَ، غير أن هناك مآثر أهملوها ومعاهد لم يذكروها، أرشدني بعض الثقات إليها. فנית عنان العزم ووقفت عليها. [2. ب] فسنح لي أن أذكر كلاً في محلّه الأقرب، معنوناً له بقلت كما هو اللائق والأنسب. والله يهدي من يشاء إلى سواء السبيل وحسبنا الله ونعم الوكيل.

### المقدمة: في حدود الأرض المقدسة وقواعدها التي هي على التقوى مؤسسة.

فمن القبلة أرض الحجاز يفصل بينهما جبال السودان وهي جبال منيعة. بينها وبين أيلة نحو (مرحلتين)<sup>11</sup>. وسطح أيلة أول الحجاز وهي من تيه بني إسرائيل. وبينها وبين القدس نحو ثمانية أيام سير الأثقال. ومن الشرق من بعد دومة الجندل برية السماوة وهي كبيرة وممتدة إلى العراق ينزل بها عرب الشام، ومسافتها عن بيت المقدس (نحو مسافة أيلة. ومن الشمال مما يلي الشرق نهر الفراء، مسافته عن بيت المقدس)<sup>12</sup> عشرين يوماً سير الأثقال. فيدخل في هذا الحد المملكة الشامية بكمالها. ومن الغرب بحر الروم وهو البحر الملح، ومسافته من بيت المقدس من جهة رملة فلسطين يومين. ومن الجنوب رملة مصر والعريش، ومسافته من بيت المقدس خمس أيام سير الأثقال، ثم يليه تيه بني إسرائيل و(هو)<sup>13</sup> طور سينا ويمتد من تلك الجهة إلى تبوك، ثم دومة الجندل المتصلة بالحد الشرقي.

وأما حدود القدس عرفاً مما يطلق عليه عمل القدس الشريف وداخلاً في حكم قاضيه. فمن القبلة عمل سيدنا الخليل عليه الصلاة والسلام يفصل بينهما قرية سعير وما حاذاها وهي من عمل القدس. ومن الشرق نهر الأردن وهو المسمى بالشرعية. ومن الشرق عمل مدينة نابلس يفصل بينهما قرية سنجل وغرون وهما من أعمال القدس. وتتمة (الحد)<sup>14</sup> رأس بني زيد و(هو)<sup>15</sup> من أعمال الرملة. ومن الغرب مما يلي رملة فلسطين قرية بيت نوبة وهي من أعمال القدس، ومما يلي مدينة غزة قرية عجوز وهي من أعمال غزة.

وأما حدود بلد سيدنا الخليل عليه السلام، فمن القبلة منزلة السلاح على ضرب الحجاز وقياب الشاورية وهي قرية منسوبة لبني شاور امرأ عرب جرم. ومن الشرق قريرته عين جدّي من عمل بلد الخليل عليه [3. أ]

9 ب: (برمت).

10 ب: (ذلك بي).

11 ب: (مرحلة).

12 ناقصة في ب.

13 ناقصة في ب.

14 ب: (الحدود).

15 ب: (هي).

السلام، وبحيرة لوط، وهذا الحد الفاصل بينها وبين عمل الكرك. ومن الشمال عمل القدس الشريف يفصل بينهما قرية سعير وما حاذها كما تقدم. ومن الغرب من الجهة المحاذية لرملة فلسطين قرية زكريا وهي من أعمال الخليل. من الجهة المحاذية لغزة قرية سمسج المجارة لقرية سكرية وبلاد بني عبد وهي من أعمال بلد الخليل عليه السلام. (وأما المسافة من بيت المقدس إلى بلد سيدنا الخليل عليه السلام)<sup>16</sup>، فهي (تقرب)<sup>17</sup> من نحو ثلاثة عشر ميلاً أو ثمانية عشر ميلاً. والله أعلم.

### الباب الأول: في الأسماء البيت المقدس وشرفه وما يتحف به الزائر من جلائل تحفة

وأما أسماؤه فكثيرة دالة على مآثره العزيزة. منها: **مسجد الأقصى**، لأنه أبعد المساجد التي تزار ويبتغي به الأجر من المسجد الحرام، أو لبعده عن الأقدار الحسنة والمعنوية، أو لأنه وسط الدنيا لا يزيد شيئاً ولا ينقص شيئاً كما وراه عبد الله بن سلام مرفوعاً. و**مسجد إيلياء**، ككبرياء أي بيت الله المقدس. و**بيت المقدس**، كمعبد أي المطهر للذنوب، مشتق من القدس وهي الطهارة. و**البيت المقدس**، بضم الميم وتشديد الدال، أي المطهر من الأصنام والصلبان. و**القدس**، بسكون الدال وبضمها، اسم مصدر. و**بيت المقدس**، بضم الدال وسكونها. و**سلم** بالمهملة معناً بيت السلام لكثرة سلام الملائكة فيه. و**كورة إيلياء وإلياء**، وإلياء معناه بيت الله المقدسة. و**أوشلم**، (بفتح)<sup>18</sup> الهمزة وفتح الشين وكسر اللام، و(أوسليم)<sup>19</sup> وأورشليم و**سلم** بالمعجمة مشدداً، و**شلم**. و**بيت آيل**، أي بيت الرب، و**صهيون** و**قصور** و**بابوش** و**كور سلاة** و**أزير** و**صلون** ويقال البيت المقدس **الزيتون**، ولا يقال له الحرم.

وأما (شرفه وفضله)<sup>20</sup> فقد تظاهرت به الآيات الشريفة والسنة العالية المنيفة، وطفحت به الآثار الواضحة والأخبار الصحيحة الراجحة.

فأما الآيات فمن أجلها قوله تعالى: {سبحان الله الذي إسري بعبده ليلاً من المسجد الحرام إلى المسجد الأقصى الذين باركنا حوله}<sup>21</sup>. فإنها [3. ب] بفضلة كافية ولجميع البركات وافية، لأنه إذا بورك حوله فالبركة فيه مضافة، وجعل منه المعراج تنويهاً بشرفه الأنيل وتنبيهاً على حصول الكمال والتكميل. ومعنى {باركنا حوله} إجراء الأنهار وإنبات الثمار. و{باركنا حوله} فلسطين والأردن وهو نهر الشريعة، أو {باركنا حوله} معنى الشام، أو {باركنا حوله} بمقابر الأنبياء وسمي مباركاً لأنه مقرّ الأنبياء وقبلهم ومهبط الملائكة والوحي وفيه المحشر.

وقدم الزهري بيت المقدس فرأى شخصاً يحدث عن الكمية في فضل بيت المقدس ويكثر. فقال له الزهري: إنك لن تنتهي إلى ما انتهى إليه قوله: {سبحان الله الذي إسري بعبده ليلاً من المسجد الحرام إلى المسجد الأقصى الذين باركنا حوله}.

ومنه قوله تعالى لبني إسرائيل: {ادخلوا هذه القرية فكلوا منها حيث شئتم رغداً وادخلوا الباب سجداً

16 ناقصة في ب.

17 ناقصة في ب.

18 ب: (بضم).

19 ناقصة في ب.

20 ب: (فضله وشرفه).

21 من القرآن 17:1.

وقولوا حطة نغفر لكم خطاياكم وسنزيد المحسنين} <sup>22</sup> ، فلم يخصّ الله مسجداً سوى بيت المقدس بغفران خطاياهم بسجدة فيه إلا لخصوصية.

ومنه قوله تعالى: {ونجيناه ولو طأ إلى الأرض التي باركنا فيها للعالمين} <sup>23</sup> ، وقوله تعالى: {وآويناها إلى ربوة ذات قرار ومعين} <sup>24</sup> ، وقوله تعالى: {ادخلوا الأرض المقدسة التي كتب الله لكم} <sup>25</sup> ، وقوله تعالى: {يخرجون من الأجداث سراعاً} <sup>26</sup> ، قيل إلى صخرة بيت المقدس. وقوله تعالى: {ولقد بوأنا بني إسرائيل ميوأ صدق} <sup>27</sup> ، وهو الشام وبيت المقدس أو هو خاصّة. وقوله تعالى: {يوم ينادي المنادي من مكان قريب} <sup>28</sup> ، أي من الصخرة.

وقوله (تعالى) <sup>29</sup> : {والتين والزيتون} <sup>30</sup> ، قال عقبه بن عامر: الذين دمشق الزيتون بيت المقدس. وروى أبو هريرة قال: أقسم ربنا جلّ جلاله بأربعة جبال فقال: {والتين والزيتون وطور سنين وهذا البلد الأمين} ، قال: التين (صور) <sup>31</sup> سينا مسجد دمشق، والزيتون طور زيتا مسجد بيت المقدس، وطور سنين حيث كأم الله موسى عليه السلام، وهذا البلد الأمين جبل مكة.

ومنها قوله تعالى: {فضرب بينهم بسور} <sup>32</sup> ، أي هو سور بيت المقدس، [4. أ] باطنه أبواب الرحمة وظاهره وادي جهنم. وقوله تعالى: {ولقد كتبنا في الزبور من بعد الذكر أن الأرض يرثها عبادي الصالحين} <sup>33</sup> ، قال بعض المفسرين: الأرض المقدسة يرثها أمة محمد صلى الله عليه وسلم. وقوله تعالى: {ومن أظلم ممن منع مسجد الله أن يذكر فيها اسمه وسعى في خرابها أولئك ما كان لهم أن يدخلوها إلا خائفين لهم في الدنيا خزي ولهم في الآخرة عذاب عظيم} <sup>34</sup> ، نزلت في منع الروم المسلمين من بيت المقدس، فإذ لهم الله وأخرجهم فلا يدخله أحد منهم أبداً إلا وهو خائف متلفع ثوب الخزي والهوان والضعاف.

وأما السنة فروى أبو هريرة مرفوعاً: تشدّ الرحال إلى ثلاثة مساجد، المسجد الحرام والمسجد الأقصى ومسجدي هذا. وعن أبي سعيد الخدري مرفوعاً: لا تشدّ الرحال إلا إلى ثلاثة مساجد، المسجد الحرام وإلى مسجدي وإلى مسجد بيت المقدس.

وعن أبي ذرّ: قلت: يا رسول الله، أي مسجد وضع في الأرض أول؟ قال: المسجد الحرام. قلت: ثم أي؟ قال: المسجد الأقصى. قال: قلت: كم بينهما؟ قال: أربعون سنة، فأيهما أدركت الصلاة فصلّ فهو مسجد. وقوله بينهما أربعين سنة محمول كما يأتي التصريح به على ما بين بناء الملائكة الكعبة وبيت المقدس أو على ما بين بناء إبراهيم الكعبة ويعقوب البيت المقدس.

وعن عمران بن حصين قال: قلت: يا رسول الله، ما أحسن المدينة! قال: كيف لو رأيت بيت المقدس.

22 من القرآن 2:58.

23 من القرآن 21:71.

24 من القرآن 23:50.

25 من القرآن 5:21.

26 من القرآن 70:43.

27 من القلان 10:93.

28 من القرآن 50:41.

29 ناقصة في ب.

30 من القرآن 95:1.

31 ب: (طور).

32 من القرآن 57:13.

33 من القرآن 21:105.

34 من القرآن 2:114.

قلت: وهو أحسن؟ قال النبي صلى الله عليه وسلم: وكيف لا تكون؟ هي وكل من بها يزار ولا يزور وتهدى إليه الأرواح ولا تهدى روح بيت المقدس. إلا أن الله أكرم المدينة وطيبها بي وأنا حي وأنا فيها ميت. ولو لا ذلك ما هاجرت من مكة، فإنني ما رأيتُ القمر في بلد قط إلا وهو بمكة أحسن.

وقال كعب: لا تقوم الساعة حتى يزور البيت الحرام البيت المقدس. فيقادان إلى الجنة جميعاً وفيهما أهلها. والعرض الحساب ببيت المقدس.

وقال ابن عمران: الحرم لمحرم في السموات السبع بمقداره من الأرض، وإن بيت المقدس لمقدس في السموات السبع بمقداره من الأرض.

وقال كعب: إن الله ينظر إلى بيت المقدس كل يوم مرتين. وقال: باب مفتوح من السماء من أبواب الجنة، ينزل منه الحنان والرحمة على بيت المقدس كل صباح حتى تقوم الساعة. وما مثل بيت [4. ب] المقدس عند الله وسائر الأرضين، والله المثل الأعلى إلا كمثل ملك له مال كثير وفيه كنز وهو أحب ماله إليه، إذا أصبح لم يطلع على شيء من ماله قبل كنزه ذلك، كذلك رب العالمين في كل صباح لا يطلع على شيء من الأرض قبلها يدر عليها حنانه ورحمته ثم يدرها بعد على سائر الأرضين.

وعن ابن عباس مرفوعاً: من أراد أن ينظر إلى بقعة من بقاع الجنة فليُنظر إلى بيت المقدس. وقال أنس بن مالك: إن الجنة لتحنّ شوقاً إلى بيت المقدس وهو من جنة الفردوس، والفردوس بالسريانية البستان. وقال: من أتى البيت الحرام غفر له ورفع له ثمان درجات، ومن أتى مسجد الرسول غفر له ورفع له أربع درجات، ومن استغفر للمؤمنين والمؤمنات ببيت المقدس في كل يوم خمسة وعشرين مرة وقاه الله المتآلف وأدخله في البلاء.

وأما الآثار والأخبار فمن خالد بن معدان أن حذو بيت المقدس بابٌ من السماء، يهبط الله كل يوم سبعين ألف ملك يستغفرون لمن يجدونه يصلي فيه. وفي رواية: يستغفرون الله لمن أتى بيت المقدس فصلى فيه. وقال وهب بن منبه: أهل بيت المقدس جيران الله تعالى، وحق على الله تعالى أن لا يعذب جيرانه. وعن عطاء: لا تقوم الساعة حتى يسوق الله خيار عباده إلى بيت المقدس فيسكنهم (إياها)<sup>35</sup>.

وقال عبد الله بن عمر: (بيت)<sup>36</sup> بنته الأنبياء وعمرته وما فيه موضع شبر إلا وقد سجد عليه ملك أو قام عليه. وقيل لنعمان بن عطاء: ما تقول في بيت المقدس؟ قال: ما فيه موضع شبر إلا وقد سجد عليه ملك أو نبي. ففعل جبهتك أن توفي جبهة ملك أو نبي. وقال مقاتل بن سليمان: ما فيه موضع شبر إلا وقد صلى عليه نبي مرسل أو ملك مقرب.

وذكر أن في كل ليلة ينزل سبعون ألف ملك إلى مسجد بيت المقدس يهللون الله تعالى ويكبرونه ويسبحونه ويحمدونه ويقدمونه ويمجدونه ويعظمونه، ولا يعودون إلى أن تقوم الساعة.

وقد اختص بغرائب كثيرة بأدلة واضحة شهيرة، منها إنه أول أرض بارك الله فيها ويجعلها (الربّ جلّ جلاله مقامه يوم القيامة على أرض بيت المقدس. وقد جعلها)<sup>37</sup> صفوته من الأرض كلها، وهي الأرض التي ذكرها [5. أ] الله بقوله: {إلى الأرض التي باركنا فيها للعالمين}.

وقال تعالى لموسى: انطلق إلى بيت المقدس، فإن فيها ناري ونوري وتنويري، يعني وفار التنور. وكلّم الله بها موسى وبها رأى نور ربّه جلّ وعلا وتجلّى الله جلّ جلاله للجبل فيها. وبها تاب على آدم وداوود وسليمان.

35 ب: (إياها).

36 ناقصة في ب.

37 ناقصة في ب.

وردّ على سليمان ملكه وفهمه منطق الطير. وسأله ملكاً لا ينبغي لأحد من بعده فأعطاه إياه بها. وبشّر الله زكريا بيحيى وأوتى الحكم صبياً. واستوثرت الملائكة على داود المحراب وسخر له الجبال والطير وألان له الحديد. وكانت تقرب الأنبياء القرابين وتهبط الملائكة عليهم السلام كل ليلة. (تقبل)<sup>38</sup> امرأة عمران نذرها. وأتيت مريم عليها السلام فاكهة الشتاء في الصيف وفاكهة الصيف في الشتاء وكفرها زكريا، وأنبت النخلة لها وأثمرت رطباً جنياً، وبشّر الله مريم بعيسى عليه السلام ببيت المقدس، وتكلّم في المهد صبياً وأنزلت عليه المائدة، وأحيا الموتى وضع العجائب، وأيد بروح المقدس ورفع إلى السماء. وماتت مريم عليها السلام وفضلت على نساء العالمين.

وهاجر إبراهيم عليه السلام من كوئا إلى بيت المقدس وتكون الهجرة إليه آخر الزمان كما روي مرفوعاً: أن خيام أمتي يهاجر هجرة بعد هجرتي إلى بيت المقدس. وأوصى إبراهيم وإسحاق أن يدفنا ببيت المقدس، وأوصى آدم لما مات بالهند أن يدفن به.

وبه هبطت السلسلة ومنه رفعت وكذا التابوت والسكينة. وإليه الإسراء بالبراق ومنه المعراج. وإليه هبط وبه صلى (وهو محمد صلى الله عليه وسلم)<sup>39</sup> بالأنبياء والملائكة إماماً، وبه رأى مالكاً خازن النيران وحوور الجنان. وإليه كانت قبلة الأنبياء قبله.

وتكون الأرض المحشر والمنشر. وبها ينصب الصراط يعطف الملائكة. ومنها تطوى الأرض والناس على الصراط وإليها يأتي الله في ظلل من الغمام والملائكة. وبها يصير ما عدا الثقلين تراباً. ومنها يتفرق الناس إلى الجنة والنار. وإن بيت المقدس وسط ظهر الحوت ورأسه بمطلع الشمس وذبيه بمغربها. (ومن سرّه)<sup>40</sup> إن يمشي في روضة من رياض [5. ب] الجنة فليمش في صخرة بيت المقدس. ومن صلى به فكأنما صلى بالسماء. ومنها بسطت الأرضون ومنها تطوى. وأول ما انحسر ما الطوفان عن صخرة بيت المقدس وطافت السفينة بالصخرة أسبوعاً بعد أن طافت بالكعبة كذلك. روي أن السفينة سارت حتى بلغت بيت المقدس فوقفت ونطقت بأذن الله تعالى وقالت: يا نوح، هذا موضع بيت المقدس الذي تسكنه الأنبياء. وعاش نوح بعد خروجه من السفينة ثلاثمائة وخمسين سنة ودفن بكرك نوح.

ومنها إن الله يمنع عدوه الدجال من الدخول فيها كالحرمين وهي آخر الأرض خراباً ويغلب ياجوج وماجوج على الأرض ما عدا الحرمين وبيت المقدس. وبها هلاكهم وبها ينفخ إسرافيل في الصور النفخة الثانية وتطير أرواح المؤمنين إلى أجسادها، ويقول الله تعالى لصخرة بيت المقدس: وعزّتي (وجلالتي)<sup>41</sup>، لأضعنّ عليك عرشي ولأحشرنّ إليك خلقي ولأجرينّ أنهارك نهراً من لبن ونهراً من عسل ونهراً من خمر، أنا يومئذ ربهم وداود ملكهم.

وأما ما يتحف الزائر من جلائل تحفة فقد روى النسائي بسنده إلى ابن عمر مرفوعاً: أن سليمان بن داود عليهما السلام لما بنا مسجد بيت المقدس سأل الله تعالى خلافاً ثلاثاً. سأل الله حكماً يصادف حكمه وأوتيه، سأل الله ملكاً لا ينبغي لأحد من بعده فأوتيه، وسأل الله حين فراغه من بناء المسجد أن لا يأتيه أحد إلا للصلاة فيه أن يخرج من خطبته كيوم ولدته أمه. وزاد ابن ماجه في هذه الرواية: فقال النبي صلى الله عليه وسلم: أما اثنتان فقد أعطيهما، وأرجو أن يكون قد أعطي الثالث. وأخرج الحاكم في مستدرکه على شرط الشيخين.

38 ب: (تقبل من).

39 ناقصة في ب.

40 ناقصة في ب.

41 ناقصة في ب.

وعن كعب الأحبار قال: شكى بيت المقدس إلى ربّه الخراب، فأوحى الله إليه: لأملأ ذلك خدوداً سجداً يدفون إليك دفوف النسور إلى أوكارها ويحنون إليك حنين الحمام إلى بيضها. فقال رجل لكعب: اتق الله، يا كعب. وإن له لساناً؟ قال: نعم، وقلباً كقلب أحدكم.

وعن أنس مرفوعاً: من زار بيت المقدس محتسباً أعطاه الله أجر ألف شهيد. وعنه مرفوعاً: من زار عالماً وكانما زار بيت المقدس. ومن زار بيت المقدس حرم الله لحمه وجسده [6. أ] على النار. وعنه مرفوعاً: من صلى في بيت المقدس غفرت له ذنوبه كلها.

وعن مكحول بن كعب: من خرج إلى بيت المقدس بغير حاجة إلا الصلاة فصلى فيه خمسة صلوات صباحاً وظهرأ وعصرأ ومغربأ وعشأ خرج من ذموبه كيوم ولدته أمه.

وعن أبي أمامة الباهلي مرفوعاً: من حجّ البيت واعتمر وصلى بيت المقدس وجاهد ورابط فقد استكمل جميع سنّتي.

وروى الإمام أحمد في مسنده من حديث أبي أمامة مرفوعاً: لا تزال طائفة من أمّتي على الحق ظاهرين لعدوهم قاهرين، لا يضرّهم من خالفهم ولا ما أصابهم من الأعداء حتى يأتي أمر الله وهم كذلك. قالوا: يا رسول الله، وأين هم؟ قال: ببيت المقدس وأكناف بيت المقدس.

وعن معاذ مرفوعاً: قال الله: يا شام، أنت صفوتي من بلادي وأنا سائق إليك صفوتي من عبادي. من كان مولده فيك فاخترت عليك غيرك بذنب وصيبه، ومن كان مولده في غيرك فاخترتك فبرحمة مني. يا شام، اتسعي لأهلك بالرزق كما يتسع الرحم للولد، وعيني عليك بالطلّ والمطر منذ خلقت السنين والأيام. من يعدم فيك المال لا يعدم فيك الخير. يا روم، أنت مقدس بنوري وفيك المحشر والمنشر. أزقك يوم القيامة كما تزف العروس إلى بعلها. ومن دخلك أستغني من الزيت والقمح.

وعن كعب قال: قال الله لبيت المقدس: أنت جنّتي وقديسي وصفوتي من بلادي. من يسكنك فبرحمة مني، ومن يخرج منك فبسخط مني عليه.

وعن عبد الله بن مسعود: يدخل الدجّال الأرض كلها إلا أربعة مساجد وأربع قرى: مكة والمدينة وبيت المقدس وطور سينا.

وكان كعب إذا خرج من حمص يريد الصلاة في مسجد إيلياء ببيت المقدس. إذا انتهى إلى الميل من إيلياء أمسك عن الكلام فلم يتكلم إلا بتلاوة القرآن والذكر، ثم دخل من باب الأسباط واستقبل القدس، ثم يجمع خمس صلوات. فإذا انصرف إلى الميل تكلم وكلم الصحابة. فقالوا إليه: يا أبا إسحاق، ما حملك على ذلك؟ فقال: إنّي أجد في بعض الكتب [6. ب] أن الحسنات تضاعف في هذا المسجد وأن السيئات يفعل بها كذلك، أو قال: مثل ذلك، وأنا أحبّ أن لا يكون مني إلا الحسنات حتى أنصرف.

وورد عن جرير بن عثمان وصفوان بن عمر قالوا: الحسنات في بيت المقدس بألف والسيئات بألف.

وعن أبي ذرّ قال: قلت: يا رسول الله، الصلاة في مسجدك هذا أفضل من الصلاة في بيت المقدس؟ فقال: صلاة في مسجدي هذا أفضل من أربع صلوات في بيت المقدس، ولنعم المصلى هو أرض المحشر والمنشر وليأتين على الناس زمان، وبسطة قوس الرجل من حيث يرى أمانة ببيت المقدس خير له وأحبّ إليه من الدنيا جميعاً.

وعن أنس مرفوعاً: صلاة الرجل في بيته بصلاة، وصلاته في مسجد القبائل بخمس وعشرين صلاة، وصلاته في المسجد الذي يجمع فيه بخمسائة صلاة، وصلاته في المسجد الأقصى بخمسين ألف صلاة، وصلاته

في مسجد الكعبة بمائة ألف صلاة، وصلاته في مسجدي هذا بخمسين ألف صلاة. أخرجه البخاري والطبراني وابن ماجة.

وعن أبي الدرداء مرفوعاً: فضل الصلاة في المسجد الحرام على غيره مائة ألف صلاة، وفي مسجدي ألف صلاة، وفي بيت المقدس خمسمائة صلاة. رواه الإمام أحمد.

وعن ميمونة بنت سعد مولاة رسول الله صلى الله عليه وسلم: أنها قالت: يا رسول الله، أفتنا في بيت المقدس. قال: أرض المحشر والمنشر، أتوه فصلوا فيه. فإن كل صلاة فيه كألف صلاة. قلنا: يا رسول الله، ممن لم يستطع أن يأتيه؟ فليهد إليه زيتاً يسرج في قناديله. فإن من أهدى إليه زيتاً كان كمن أتاه.

وروي عن كعب الأحبار أنه قال: من صام يوماً ببيت المقدس أعطاه الله برأة من النار، ومن استغفر للمؤمنين والمؤمنات في بيت المقدس ثلاث مرّات كتب الله له مثل حسنات المؤمنين والمؤمنات ودخل على كل مؤمن ومؤمنة من دعائه في كل يوم وليلة سبعون مغفرة.

وروى (جابر)<sup>42</sup> رجلاً قال: يا رسول الله، أي الخلق أول دخول الجنة؟ قال: الأنبياء. قال: ثم من؟ قال: الشهداء. قال: ثم من؟ قال: مؤذنوا بيت المقدس. قال: ثم من؟ قال: مؤذنوا البيت الحرام. قال: ثم من؟ قال: مؤذنوا مسجدي. [7. أ] قال: ثم من؟ قال: سائر المؤذنين.

ومنها: أن صخرة بيت المقدس وسط الدنيا. وإذا قال العبد لصاحبه: انطلق بنا إلى بيت المقدس يقول الله: يا ملائكتي، اشهدوا على أني قد غفرت لهما قبل أن يخرجنا إذا كانا لا يصران على الذنوب. وإن الله تكفل لمن سكن بيت المقدس بالرزق إن فاتته المال. ومن مات مقيماً محتسباً في بيت المقدس كأنما مات في السماء، ومن مات حوله كأنما مات فيه.

روي أن معاذاً رضي الله عنه أتى بيت المقدس فأقام به ثلاثة أيام وليالها يصوم ويصلي. فلما خرج منه وكان على الشرف ثم أقبل على أصحابه، فقال: ما مضى من ذنوبكم فقد غفر الله لكم. فانظروا ما أنتم صانعون فيما بقي من أعماركم، وقد أجمعت الطوائف كلها على تعظيم بيت المقدس ما عدا السامرة. فأنهم يقولون القدس جبل نابلس وخالفوا جميع الأمم في ذلك.

وقد كان في زمن بني إسرائيل إذ أنزل بهم خوف من عدو أو أجذبوا. صوروا القدس وجعلوه هيكلًا وصوروا أبوابه ومحاربه واستقبلوا به العدو فيهزمه الله. ويستقبلوا به السماء في الجذب فلا تزال تمطرهم حتى يرفعوا الهيكل، فكانوا يفعلون ذلك في كل مهم يدهمهم وأماماً. يقال إن بيت المقدس طشت من ذهب مملؤ عقاريب، وإنه كأجمة الأسد فداخله أما أن يسلم أو يدركه العطب. محمول ذلك على زمن بني إسرائيل.

وأما اليوم لله الحمد فإنما به وبأفئته الطائفة الإسلامية المنصورة ويكفي دليلاً قوله عليه الصلاة والسلام إن خيار أمتي سيهاجر بعد هجرة إلى بيت المقدس. وكيف وقد قال صلى الله عليه وسلم لأبي عبيدة بن الجراح رضي الله عنه: النجاء النجاء إلى بيت المقدس إذا ظهرت الفتن. (قالوا)<sup>43</sup>: يا رسول الله، فإن لم أدرك بيت المقدس؟ قال: فابدل مالك واحرز دينك. وكذا قال علي رضي الله عنه لصعصعة: نعم المسكن عند ظهور الفتن بيت المقدس، القائم فيه كالمجاهد في سبيل الله. وليأتين على الناس زمان يقول أحدهم: ليتني تبنة في لبنة في بيت المقدس. وأحب الشام إلى الله، بيت المقدس وأحب حبابها إليه. الصخرة وهي آخر الأرض خراباً بأربعين عاماً وهي روضة من رياض الجنة.

42 ب: (أحمد بن جابر).

43 ب: (قال).



[7. ب] الباب الثاني: فيمن احتظ مدينة القدس الشريف وفيمن سكنها وفتوحاتها على وجه (أوجز)<sup>44</sup>

لطيف (ولكن)<sup>45</sup>.

فأول من احتظها ملك صادق وهو سام بن نوح. فإنه نزل بأرض بيت المقدس بكهف من جبالها يتعبد فيه واشتهر أمره حتى بلغ ملوك الأرض الذين بالقرب منه بالشام وسدوم وغيرهما. وكانوا اثني عشر ملكاً فحضروا إليه. فلما رأوه وسمعوا كلامه اعتقدوه و(حبّوه)<sup>46</sup> حباً شديداً، ودفعوا إليه مالاً ليعمر به مدينة القدس. فاحتظها وعمّرها (بروشلم)<sup>47</sup>، ومعناه بالعبرانية: دار السلام. فلما انتهت عمارتها اتفقت الملوك أن يكون ملكاً عليهم، فكانوا بأجمعهم تحت طاعته إلى أن مات بها. وكان محل المسجد في وسطها وهو صعيد واحد والصخرة الشريفة في وسطه حتى بني.

واختلف في أول من بناه، فقيل الملائكة بعد بنائها البيت الحرام بأذن الله وهو ظاهر حديث أبي ذرّ الآتي. وقيل إن الباني إسرافيل. وقيل أول من بناه آدم. وقيل سام. وقيل يعقوب. وقيل داوود. ولا مانع أن يكون الملائكة هم الذين ابتنوه أولاً، وما بعده يحمل على التجديد. فإن بين كل بني والآخر مدة يحتمل فيها التجديد. ويحمل حديث أبي ذرّ حين سأل النبي صلى الله عليه وسلم بقوله: أي المساجد وضع في الأرض أول؟ قال: المسجد الحرام. قال: قلت: ثم أي؟ قال: المسجد الأقصى. قلت: كم بينهما؟ قال: أربعون سنة. الحديث على بناء إبراهيم المسجد الحرام ويعقوب المسجد الأقصى.

وسمي الأقصى لبعده المسافة بينه وبين المسجد الحرام وغير ذلك كما تقدم في المقدمة. ولذلك ورد في تفسير قوله تعالى {واستمع يوم ينادي المنادي من مكان قريب}، المنادي هو إسرافيل ينادي من صخرة بيت المقدس بالمحشر، وهي وسط الدنيا وكون بيت المقدس وسط الدنيا ظاهر. فإن سائر الملائكة محيطة به من كل جانب. فإنه يقابله من جهة القبلة إقليم الحجاز وبلاد اليمن ومملكة الهند وما والاها، ومن جهة الشمال البلاد الشامية ومملكة الروم وما والاها، [8. أ] ومن جهة الغرب الديار المصرية ومملكة الغرب وما والاها. وأول من استوطنه من الأنبياء عليهم السلام يعقوب عليه السلام، وسبب استوطنه أن (أباه)<sup>48</sup> صلوات الله وسلامه عليه أمره أن لا ينكح امرأة من الكنعانيين وأمره أن ينكح من بنات خاله. فلما توجه إلى خاله لينكح ابنته أدركه الليل في بعض الطريق، فبات متوسداً حجراً. فرأى فيما يرى النائم أن سلماً منصوباً إلى باب من أبواب السماء والملائكة تعرج فيه. فأوحى الله إليه: أني أنا الله لا اله إلا أنا، وقد ورثتك هذه الأرض المقدسة وذريتك من بعدك، ثم أنا معك أحفظك حتى أدرك إلى هذا المكان، (فاجعله)<sup>49</sup> بيتاً تعبد بي فيه. فهو بيت المقدس. فاستوطنه ثم من بعده داوود بن إليشا من ذرية (يهود)<sup>50</sup> بن يعقوب عليهم السلام واحتظ المسجد وجعل ينقل الحجر على عاتقه ويضعه بيده.

44 ناقصة في ب.

45 ناقصة في ب.

46 ب: (أحبوه).

47 ب: (وسميت بروشلم).

48 ب: (أباه إسحاق).

49 ب: (اجعله).

50 ب: (يهودا).

واختلف في سبب بنائه. فقيل أصاب بني إسرائيل طاعون في زمن داود عليه السلام، فخرج بهم إلى موضع بيت المقدس يدعون الله ويسألون كشف البلاء عنهم. فاستجاب لهم، فاتخذوا ذلك الموضع مسجداً.

وقيل: لما تاب الله على داود عليه السلام وكان قد بنا مدائن كثيرة وصلحت حال بني إسرائيل أحب أن يبني بيت المقدس وعلى الصخرة قبة على الموضع الذي قدّسه الله في إيلياء، فبناها.  
قيل: أمره الله ببنائه وأراه موضعه حيث يرى الملك شاهراً سيفه.

ويمكن الجمع بين الأقوال وروي أنه لما ابتدأه ورفعته قدر قامة رجل أوحى الله إليه: أني لم أقض ذلك على يدك ولكن ابن لك أملكه بعدك اسمه سليمان، أفضي إتمامه على يده.

وروي أن داود بناه وأراد عليه سوراً. فلما تمّ السور سقط ثلاثاً. فشكى ذلك إلى الله عز وجل، فأوحى الله إليه: أنك لا تصلح أن تبني لي بيتاً. قال: يا ربّ، (ولما)<sup>51</sup>؟ قال: لما جرى على يدك من الدماء. قال: يا ربّ، أو لم يكن ذلك في هواك ومحبتك؟ قال: بلى، ولكنهم عبادي وأنا أرحم بهم منك. فشق ذلك على داود، فأوحى الله إليه: لا تحزن، فإنني سأقض بنائه على يد ابنك سليمان. فأوصى قبل موته بالملك لولده سليمان عليه السلام وأوصاه [8. ب] بعمارة بيت المقدس وعين لذلك عدة بيوت أموال تحتوي على جمل كثيرة من الذهب.

فلما مات داود ملك ابنه سليمان وعمره اثني عشر سنة وابتدأ في عمارة بيت المقدس بعد مضي أربع سنين من ملكه. فجمع حكماء (الجن والإنس)<sup>52</sup> و عفاريت الأرض وعظماء الشياطين، وجعل فريقاً يبنون وفريقاً يقطعون الصخور والعمد من معادن الرخام وفريقاً يغوصون في البحر يخرجون منه الدرّ والمرجان وفرقة يقطعون معادن الياقوت والزمرد ويأتون (بمعادن)<sup>53</sup> الجواهر. وجعل الشياطين صفاً مرصوفاً من معادن الرخام إلى حائط المسجد، يتلقي الأول القطعة الرخام فيدفعها للذي يليه وهكذا إلى ينتهي إلى المسجد. وكان عدد من عمل معه في بناء بيت المقدس ثلاثون ألف رجل، وعشرة آلاف رجل منهم يتراوحن عليهم قطع الخشب والذين يعملون في الحجارة سبعون ألف رجل، وعدد الأمناء عليهم ثلاثمائة غير المسخرين من الجن والشياطين.

وأنبت الله له شجرتين عند باب الرحمة، أحدهما تنبت الذهب والأخرى تنبت الفضة. فكان كل يوم ينزع عن كل واحدة مائتي رطل ذهباً وفضة. وأتمّ عمارته على أحسن وصف لأحدى عشرة سنة مضت من ملكه وزينته بالذهب والفضة والدرّ والياقوت والمرجان وأنواع الجواهر في سمانه وأرضه وأبوابه وأركانه مما لم ير مثله حتى أنه فرش أرضه بلاطة من ذهب وبلاطة من فضة، وأسقفه بالعود اليلنجوج. ووضع له مائتي قفل من الذهب زنة كل قفل عشرة أرتال وأولج فيه تابوت موسى وهارون.

وكان الصخرة ارتفاعها إذ ذاك اثني عشر ذراعاً وارتفاع القبة التي عليها ثمانية عشر ميلاً.  
ولما فرغ من بنائه ذبح ثلاثة آلاف بقرة وسبعة آلاف شاة، ثم أتى المكان الذي في مؤخر المسجد مما يلي باب الأسباط وهو الموضع المسمي بكرسي سليمان. فقال: اللهم، من أتاه من ذي ذنب [9. أ] فاغفر له، أو ذي ضرراً فاكشف ضرره. فلا يأتيه أحد إلا أصاب من دعوة سيدنا سليمان.

وتوفي سليمان وعمره اثنان وخمسون سنة سنة 575 لوفاة موسى عليه السلام، وكان وفاة موسى بعد الطوفان بألف وستمائة وست وعشرين سنة، وبين وفاته والهجرة الشريفة ألفان وثلاثمائة وثمان وأربعون سنة. ثم ملك ولده وولد ولده إلى أن أخربه بخت نصر في سنة 959 لوفاة موسى عليه السلام، وأحرق القدس

51 ب: (ولم).

52 ب: (الأنس والجن).

53 ب: (بأنواع).

وخرّب المسجد واحتمل منه ثمانين عجلة ذهباً وفضة وطرحه برومية. وأباد بني إسرائيل قتلاً وتشتيتاً، ثم بقي خراباً سبعين سنة. ثم عمره كورش بوحي من الله إلى أشعيا عليه السلام، فسكنه من بقي من بني إسرائيل وكان رئيسهم عزيز عليه السلام. ثم توفي بعده شمعون الصديق من نسل هارون عليه السلام. ثم كان به عيسى عليه السلام ومنه رفع، واستمرّ بعد أربعين سنة عامراً إلى أن خربه طيطوس الرومي. ثم تراجع إلى العمارة قليلاً قليلاً وترحم شعبه واستمرّ عامراً إلى أن صارت هيلانة أم قسطنطين إلى القدس وعمرت القمامة وخربت الهيكل الذي بالمسجد وصيرت الصخرة مزبلة. وبقي هذا الحال إلى أن فتح الله القدس على يد أمير المؤمنين عمر بن الخطاب رضي الله عنه صلحاً سنة خمسة عشر.

وهو أن أبا عبيدة بن الجراح أتى إلى الأردن فعسكر بها وأرسل رسله إلى أهل إيلياء وكتبهم، فأبوا أن يأتوه وأن يصلحوه فأقبل حتى نزل بهم وحاصرهم حاصراً شديداً، وضيق عليهم. فطلبوا الصلح وأن أمير المؤمنين عمر بن الخطاب يكون هو الذي يعطيهم العهد ويكتب لهم الأمان. فأخذ عليهم أبو عبيدة العهود والمواثيق بذلك وكتب إلى عمر بن الخطاب كتاباً بذلك، وهو: بسم الله الرحمن الرحيم. لعبد الله عمر أمير المؤمنين من أبي عبيدة (عامر)<sup>54</sup> بن الجراح. سلام عليك. فإني أحمد الله إليك الذي لا اله إلا هو. أما بعد، فإننا أقمنا على أهل إيلياء وظنوا أن في مطاولتهم فرجاً، فلم يزد هم إلا ضيقاً ونقماً وهزلاً وذلاً. فلما رأوا ذلك سألوا أن يقدم عليهم أمير المؤمنين، فيكون هو الموثق لهم والكااتب، فخشينا أن يقدم أمير المؤمنين فيقدر القوم ويرجعوا. [9. ب] فيكون مسيرك أصلحك الله عناً وفضلاً، فأخذنا عليهم المواثيق المغلظة بإيمانهم ليقبلن وليودن الجزية وليدخلن فيما دخل فيه أهل الذمة. ففعلوا فإن رأيت أن تقدم، فافعل وإن في مسيرك أجراً وصلاًحاً. (أطال)<sup>55</sup> الله رشذك ويسر أمرك. والسلام عليك رحمة الله وبركاته.

فلما قدم الكتاب على عمر رضي الله عنه دعا رؤساء المسلمين وقرأ عليهم الكتاب واستشارهم. واختلفت الآراء، فبعضهم أشار بعدم السير نظراً إلى أنهم لا يزدادون إلا ضعفاً وذلاً، فيسلموا من غير حضور أمير المؤمنين. وبعضهم أشار بالسير اغتناماً للفرصة وخوفاً من أن يأتيهم المدد. فسار ومن معه من العساكر.

فلما دنى من الشام تلقىه المسلمون وأقبل أبو عبيدة على قلوب يكتنفها بعباءة خطامها من شعر، لابساً سلاحه منتكباً قوسه. فلما نظر إلى عمر أناخ قلوب وأناخ عمر بعيره، فنزل أبو عبيدة إليه وأقبل عمر إليه. فلما دنى من أبي عبيدة مدّ أبو عبيدة يده إلى عمر ليصافحه فمدّ عمر يده، فأخذها أبو عبيدة وأهوى ليقبلها يريد أن يعظمه في العامة فأهوى عمر إلى رجل أبي عبيدة ليقبلها. فقال أبو عبيدة: مه، يا أمير المؤمنين. وتنحى. فقال عمر: مه، يا أبا عبيدة. فتعانق الشيخان ثم ركبا يتسايران وسار الناس أمامهما.

قيل: وتلقى عمر ببرذون وثياب بيض وكلموه أن يركب البرذون ليراه العدو، فهو أهيب له عندهم، وأنه يلبس الثياب وي طرح الفروة عنه فأبى، ثم ألحوا (عليه)<sup>56</sup> فركب البرذون بفروته وثيابه. فهملج البرذون وخطام ناقته بعد في يده، فنزل وركب راحلته وقال: لقد غيّرنى هذا حتى خفت أن أتكبر وأنكر نفسي، فعليكم يا معشر المسلمين، بالقصد وبما أعزكم الله عز وجل به.

وعرضت له مخاضة، فنزل عن بعيره ونزع جرموقيه، فأمسكها بيده وخاض الماء ومعه بعيره. فقال له أبو عبيدة: لقد صنعت اليوم صنعاً عظيماً عند أهل الأرض. فصك عمر في صدره وقال: لو غيرك يقولها يا أبا عبيدة، إنكم كنتم أدلّ الناس وأحقر الناس وأقلّ الناس، فأعزكم الله بالإسلام ومهما تطلبوا العزة [10. أ] بغيره

54 ناقصة في ب.

55 ب: (أتاك).

56 ناقصة في ب.

يذّلكم الله.

ونزل عمر شرقي بيت المقدس على جبل طور زيتا وأتى رسول بطريقها إليه بالترحيب وقال: إنّنا سنعطى (بحضرتك)<sup>57</sup> ما لم نكن نعطيه لأحد دونك. وسأله أن يقبل منه الصلح والجزية ويعطيه الأمان على دمايتهم وأموالهم وكنائسهم، فأنعّم له عمر بذلك. فسأله الرسول الأمان لصاحبه ليقول مصالحته ومكاتبتة، فأنعّم وخرج إليه بطريقها أي أميرها بجماعته، فصالحهم وأشهدهم على ذلك.

(فعن)<sup>58</sup> عبد الرحمن بن غنم قال: كتب لعمر بن الخطاب رضي الله عنه حين صالح نصارى أهل إيلياء: بسم الله الرحمن الرحيم. هذا كتاب لعبد الله عمر بن الخطاب أمير المؤمنين من نصارى مدينة كذا وكذا. إنكم لما قدمتم علينا سألناكم الأمان لأنفسنا وذراريها وأموالنا وأهل مدينتنا، وشرطنا لكم على أنفسنا أن لا نحدث في مدينتنا ولا فيما حولها ديراً ولا كنيسة ولا قلاية ولا صومعة راحب، ولا نحیی منها ما كان في خطط المسلمين ولا نمنع كنائسنا أن ينزلها أحد من المسلمين في ليل ولا نهار، وأن نوسع أبوابها للمارة وابن السبيل، وأن ننزل من مرّ بنا من المسلمين ثلاث ليل نطعمهم، ولا نؤاوي في منازلنا ولا كنائسنا جاسوساً، ولا نكتم غشاء للمسلمين، ولا نعلم أولادنا القرآن ولا نظهر شركاً، ولا ندعوا إليه أحداً (ولا نمنع أحداً)<sup>59</sup> من ذي رحم قرابتنا الدخول في الإسلام أن أرادته، وأن نوقر المسلمين ونقوم لهم من مجالسنا إذا أرادوا الجلوس، ولا نتشبه بهم في شيء من لباسهم في قلنسوة ولا عمامة، ولا نعلين ولا فرق شعر، ولا نتكلم بكلامهم ولا نتكني بكناهم، ولا نركب السروج ولا نتقلد السيوف، ولا نتخذ شيئاً من السلاح ولا نحمله معنا، ولا ننقش على خواتمنا بالعربية، ولا نبيع الخمر وأن نجزّ مقادير رؤوسنا، وأن نلزم زيناً حيث ما كذا، وأن نشدّ زنايرنا على أوسطنا، ولا نظهر الصليب على كنائسنا ولا نظهر صلباننا ولا كتبنا في شيء من طرق المسلمين ولا في أسواقهم، ولا نضرب نواقيسنا في كنائسنا إلا ضرباً خفيفاً ولا نرفع أصواتنا مع موتنا، ولا نظهر النيران معهم في شيء [10. ب] من طرق المسلمين، ولا نطلع عليهم في منازلهم.

قال: فلما أتيت عمر بن الخطاب رضي الله عنه بالكتاب زاد فيه: ولا نضرب أحداً من المسلمين، شرطنا لكم ذلك على أنفسنا وأهل مدينتنا وقبلنا عليه الأمان، وإن نحن خالفنا شيئاً مما ذكرناه شرطناه على أنفسنا، فلا ذمة لنا وقد حلّ لكم منا ما حلّ من أهل المعاندة والشقاق. رواه البيهقي وغيره.

وكتب لهم عمر بن الخطاب كتاباً صورته: بسم الله الرحمن الرحيم. هذا ما أعطى عبد الله أمير المؤمنين عمر أهل إيلياء من الأمان. أعطاهم أماناً لأنفسهم وأموالهم وكنائسهم وصلبانهم مقيمها وبريها وسائر مدينتها. إنها لا تسكن كنائسهم ولا تهدم، ولا ينقص منها ولا من خيرها ولا من صليبهم ولا شيء من أموالهم، ولا يكرهون على دينهم ولا يضار أحد منهم، ولا يسكن (أحد بإيلياء)<sup>60</sup>، وعلى أهل إيلياء أن يعطوا الجوية كما يعطي أهل المدائن، وعليهم أن يخرجوا منها الروم والصوص. فمن خرج منهم فإنه آمن على نفسه وماله حتى يبلغوا مأمنهم، ومن أقام منهم فهو آمن وعليه مثل ما على أهل إيلياء من الجزية، ومن أحبّ من أهل إيلياء أن يسير بنفسه وماله مع الروم ويخلي بيعتهم وصليبهم حتى يبلغوا مأمنهم، ومن كان فيها من أهل الأرض فمن شاء منهم قعد وعليه مثل ما على أهل إيلياء من الجزية، ومن شاء سار مع الروم ومن شاء رجع إلى أرضه وأن لا يؤخذ منهم شيء حتى يحصد حصادهم. وعلى ما في هذا الكتاب عهد الله وذمته وذمة رسوله صلى الله عليه وسلم

57 ب: (حضرتكم).

58 ناقصة في ب.

59 ناقصة في ب.

60 ب: (بإيلياء أحد من اليهود).

وذمة الخلفاء وذمة المؤمنين إذا أعطوا الذي عليهم من الجزية. شهد على ذلك خالد بن الوليد وعمرو بن العاص وعبد الرحمن بن عوف ومعاوية بن أبي سفيان.

ولما فرغ عمر من كتاب الصلح قال لبطريقها: دلّني على مسجد داود. وقال: نعم. وخرج عمر متقلداً سيفه في أربعة آلاف من أصحابه الذين قدموا معه متقلدين سيوفهم وطائفة ممن كان عليها والبطريق بين يدي عمر حتى دخل مدينة بيت المقدس. فأدخله الكنيسة التي يقال له القمامة وقال: هذا مسجد [11. أ] داود. فنظر عمر وتأمل وقال له: كذبت، ولقد وصف رسول الله صلى الله عليه وسلم مسجد داود بصفة ما هي هذه. قال: فمضى بهم إلى كنيسة صهيون وقال له: هذا مسجد داود. فقال له: كذبت. قال: فانطلق به إلى مسجد بيت المقدس حتى انتهى به إلى بابيه الذي يقال له باب محمد. وقد انحدر ما في المسجد الزبالة على درج الباب والسوق وكثر حتى كاد أن يلصق بسقف الرواق. فقال له: لا نقدر أن ندخله إلا حبواً. قال عمر: ولو حبواً، فحبي بين يدي عمر وحبي عمر خلفه ومن معه حتى أفضوا إلى صحن المسجد واستوتوا قياماً. فنظر عمر وتأمل يميناً وشمالاً، فقال: الله أكبر! هذا والذي (نفس عمر)<sup>61</sup> بيده الذي وصفه لنا رسول الله صلى الله عليه وسلم وقال إنه أسري به إليه.

ثم قال عمر لكعب: يا أبا إسحاق، أتعرف موضع الصخرة؟ فقال: اذرع من الحائط الذي يلي وادي جهنم كذا وكذا ذراعاً ثم احفر، فإنك تجدها. قال: وهي يومئذ مزبلة مما كانت الروم تطرح غيضاً لبني إسرائيل. فحفروا فظهروا، وبسط عمر رداءه وجعل يكنس ذلك الزبل وجعل المسلمون يكنسون معه، واتخذ مقدمها مسجداً. ثم قال عمر: لا تصلوا فيها حتى يصيبها ثلاث مطرات. ثم مضى نحو محراب داود هو الذي على باب البلد في القلعة والمسلمون معه، فصلى فيه ولم يلبث أن طلع الفجر، فأمر المؤذن بالإقامة وتقدم، فصلى بالناس وقرأ بهم ص وسجد فيها. ثم قام فقرأ بهم في الثانية صدرأ من بني إسرائيل، ثم ركع ثم انصرف، ثم صلى عند كنيسة مريم وعليه قميصان. فبصق في أحدهما. فقليل ابصق فيها، فإنه موضع يشرك فيه بالله تعالى. فقال إن كما يشرك فيها، ففيها يذكر اسم الله، ثم قال: لقد كان عمر غنياً عن أن يصلي عند وادي جهنم.

روي أن أمير المؤمنين عمر لما فتح بيت المقدس وكتب كتاب الأمان والصلح وقبضوا كتابهم وأمنوا، دخل الناس بعضهم في بعض وأقام عمر أياماً، ثم قال لأبي عبيدة: لم يبق أمير من أمراء الأجناد إلا استزارني غيرك. فقال أبو عبيدة: يا أمير المؤمنين، إنني أخاف أن أستزيرك فتعصب عينيك في بيتي. قال: فاستزرنني. قال: [11. ب] فزرنني. فأتاه عمر في بيته. فإذا هو ليس فيه شيء إلا لبد فرسه وإذ هو فرشاه وسرجه وإذ هو وسادته وإذا كسرة يابسة في كورة بيته، فجاءها فوضع بها على الأرض بين يديه وأتى بملح جريش وظرف وفيه ماء. فلما نظر عمر إلى ذلك بكى ثم التزمه وقال: أنت أخي، وما من أحد من أصحابي إلا وقد نال من الدنيا ونالت منه غيرك؟ فقال له أبو عبيدة: ألم أخبرك أنك ستعصب عينيك.

ثم إن عمر قام في الناس فحمد الله وأثنى عليه بما هو أهله وصلى على النبي صلى الله عليه وسلم. ثم قال: يا أهل الإسلام، إن الله قد صدقكم الوعد ونصركم على الأعداء وأورثكم البلاد ومكن لكم في الأرض، فلا يكونن جزاؤه منكم إلا الشكر. وإياكم والعمل بالمعاصي، فإن العمل بالمعاصي كفر النعم وقل ما كفر قوم بما أنعم الله عليهم، ثم لم يفزعوا إلى التوبة إلا يسلبوا عزهم وسلط عليهم عدوهم. ثم نزل، وحضرته الصلاة. فقال: (ألا يا بلال)<sup>62</sup>، فأذن لنا يرحمك الله. قال بلال: يا أمير المؤمنين، والله ما أردت أن أؤذن لأحد بعد رسول الله صلى الله

61 ب: (نفسى).

62 ب: (يا بلال، ألا).

عليه وسلم، ولكن سأطيعك إذا أمرتني في هذه الصلاة وحدها. فلما أذن بلال وسمعت الصحابة صوته. ذكروا نبيهم صلى الله عليه وسلم، فبكوا بكاءً شديداً، ولم يكن من المسلمين يومئذ أطول بكاءً من أبي عبيدة ومعاذ بن جبل حتى قال لهما عمر: حسبكما رحمكما الله.

فلما قضى عمر صلاته انصرف أمير المؤمنين راجعاً إلى المدينة واجتهد فيما هو بصدد من إقامة شعائر الإسلام والنظر في مصالح المسلمين والجهاد في سبيل الله، ولم يزل كذلك حتى توفي شهيداً رضي الله تعالى عنه ونفعنا به وجمع بيننا وبينه في دار كرامته، إنه ولي الحسنات و غافر السيئات بمنه وكرمه<sup>63</sup>. (من بنا)<sup>64</sup> قبة على الصخرة عبد الملك بن مروان، وهو أنه جمع الصناع من عمله وأرصد للعمارة خراج مصر سبع سنين ووضعها في قبة شرقي المسجد جهة الزيتون، وكل على العمارة والصراف رجاء بن حياة الذي أحد العلم الأعلام من جلساء عمر بن عبد العزيز ورجلاً من موالي عبد الملك يدعى أبا سلام المقدسي، هو ولديه ووصف لهم صفة القبة وتكوينها. فبنوا له [12. أ] قبة السلسلة شرقي الصخرة وأعجبه تكوينها وأمرهما بالنفقة والقيام عليها وأن يفرغا المال إفراغاً دون أن ينفقا إنفاقاً.

فأخذوا في البناء والعمارة حتى أحكموه. فكتبنا إلى عبد الملك بدمشق: قد أتم الله ما أمر به أمير المؤمنين من بناء صخرة بيت المقدس والمسجد الأقصى، ولم يبق لمتكلم فيه كلام. وقد بقي مما أمر به أمير المؤمنين من النفقة بعد أن فرغ البناء وأحكم مئة ألف دينار، فيصرفها أمير المؤمنين فيما أحب. فكتب إليهما أمير المؤمنين: أمرتُ بها لكما جائزة لما وليتما من عمارة بيت المقدس. فكتبنا إليه: نحن أولى أن نزيد من حلي نساننا فضلاً عن أموالنا، فاصرفها في أحب الأشياء إليك. فكتب إليهما: تبسك وتفرغ على القبة، فبسكت وأفرغت على القبة. فما كان أحد يقدر أن يتأملها مما عليه يكن الذهب. وجعلوا إليها ليوذاً يكسونها إياها أيام الشتاء تكنها من الأمطار والرياح والثلوج.

وكان رجاء بن حياة ويزيد بن سلام قد حقا الصخرة بدرارزين ومن خلفه ستور ديباج مرجاة بين العمدات. وكانت لا تفتح إلا في يوم الاثنين والخميس يلطخون الصخرة بالخلوق، ويطلقون مجامر الند والعود،

<sup>63</sup> مضافة في ب: ووجد على بعض التصاوير التي كانت في المسجد بعدما استنقذه المسلمون شعراً:

أيدي الحوادث أو تغير حال	ادمي الكنائس إن تكن عبثت بكم
شم الأنوف ضراغم أبطال	فلطال ما سجدت لكن شمامس
يوم بيوم والحراب سجال	بعد أعلى هذا المصاب لأنه

قلت: وقد طلبت من الأخ المجيز السيد محمد السعيد تشطير هذه الأبيات، فتوحها وشرها، فطهرها بهذا التسبيح وأخرها. التمسست عن حيز التشجيع فقال:

في فتحه العمري فصار يقال	وبيوم فتح القدس نكست الدماء
سطوات صحب المصطفى مذ جالوا	أدم الكنائس إن تكن عبثت بكم
أيدي الحوادث أو تغير حال	أو إن تكن نسخت لكن موثراً
سود الفلانس شعث أو عال	فلطال ما سجدت لكن شمامس
شم الأنوف ضراغم أبطال	واليوم نكس رأسكن فوارس
خرئ لكن وذلة ووبال	بعد أعلى هذا المصاب فإنه
يوم بيوم والحراب سجال	فأغرة كنتن ثم أذلة

<sup>64</sup> ب: (أول من بنا).

ثم ترفع الستور فيفوح البخور إلى السوق، ثم ينادي منادي: الآن الصخرة قد فتحت. فيقبل الناس مبادرين إلى الصلاة في الصخرة، فأكثر الناس من يدرك ركعتين وأقلهم أربعاً. فمن شموا رايحته قالوا: هذا ممن دخل الصخرة. وتغلق الأبواب وعلى كل باب عشرة من الحجة ولا يدخلها في غير الاثنين والخميس إلا الخدم. وكانت تسرج بدهن البان المدني والزنبق الرصاصي.

وكان معلقاً بوسط القبة درة يتيمة وقرنا كبش إبراهيم وتاج كسرى إلى أن صارت الخلافة لبني هاشم حولت إلى الكعبة حرسها الله تعالى.

وكان الفراغ من العمارة سنة ثلاث وسبعين. وكانت صفته إذ ذاك كما رواه ابن عساكر قال رحمه الله بسنده إلى أبي المعالي المقدسي قال عقبه: وكان في ذلك الوقت من الخشب السقف سوى أعمدة خشب ستة آلاف خشبية. وفيه من الأبواب خمسون باباً والعمد ستمئة عمود رخام، وفيه من المحاريب سبعة ومن [12. ب] السلاسل للقناديل أربعمئة سلسلة إلا خمسة عشر منها منسلا سلسلة وثلاثون سلسلة في المسجد والباقي في قبة الصخرة، وذرع السلاسل أربعة آلاف ذراع ووزنها ثلاثة وأربعون ألف رطل بالشامي، ومن القناديل خمسة آلاف قنديل وكان يسرج فيه مع القناديل ألفا شمعة في ليالي الجمع وفي (ليالي) <sup>65</sup> نصف (شعبان ورجب) <sup>66</sup> ورمضان وفي ليالي العيدين. وفيه من القباب خمسة عشر قبة سوى قبة الصخرة، وعلى سطح المسجد من شقف الرصاص سبعة آلاف شقفة وسبعمئة شقفة، وزن الشقفة سبعون رطلاً غير الذي على قبة الصخرة. كل ذلك عمل في أيام عبد الملك بن مروان. ورتب له من الخدام القوام ثلثمئة خادم اشترت له من خمس بيت المال، كلما مات منهم ميت قام مكانه ولده وولد ولده أو من يكون من أهليهم يجري (ذلك) <sup>67</sup> ما تناسلوا. وفيه من الصهاريج أربعة وعشرون صهريجاً كبيراً. وفيه من المنائر أربع، منها ثلاثة صف واحد غربي المسجد وواحد على باب الأسباط. وكان له من الخدم اليهود الذين لا تؤخذ منهم جزية عشر رجال وتوالدوا، فصاروا عشرين تكنس أوساخ الناس في المواسم والشتاء والصيف وتكنس المطاهر التي حول الجامع، وله من الخدم النصاري عشرة أهل بيت يتوارثون خدمته لعمل الحصر وكنس حصر المسجد وكنس القنى التي تجري إلى صهاريج الماء وكنس الصهاريج أيضاً وغير ذلك. وله من الخدم اليهود جامعة يعملون الزجاج للقناديل والأقداح والبراقات وغير ذلك مما تدعوا إليه الحاجة. لا يؤخذ منهم جزية ولا من الذين يحملون القش لفتائل القناديل، جارياً عليهم وعلى أولادهم أبداً ما تناسلوا من عهد عبد الملك بن مروان وهلم جرأً. ولما انتقلت الخلافة للوليد بن عبد الملك انهدم شرقي المسجد، فأمر بضرب ما على القبة وصرفه على العمارة.

(عبد الرحمن بن ثابت) <sup>68</sup> عن أبيه عن جده أن الأبواب كلها كانت ملبسة [13. أ] بصفائح الذهب والفضة في أيام خلافة ابن عبد الملك بن مروان. فلما قدم أبو جعفر المنصور العباسي وكان شرقي المسجد وغريبه قد وقع زمن الرجة في سنة ثلاثين ومئة. فقيل له: لو أمرتنا ببناء هذا المسجد وعمارته. فقال: ما عندي شيء من المال. ثم أمر بقلع صفائح الذهب والفضة التي كانت على الأبواب وضربت دنانير ودرهم وأنفقت عليه حتى فرغ منه. ثم كانت الرجعة الثانية فوق البناء الذي كان قد أمر أبو جعفر به. ثم قدم المهدي من بعده وهو جراب فرغ ذلك إليه وأمر ببنائه. فقال: دق هذا المسجد وطال وخلا من الرجال انقصوا من طولهم وزيدوا في عرضه.

65 ب: (ليلة).

66 ب: (رجب وشعبان).

67 ب: (ذلك أبداً).

68 ب: (روى عبد الرحمن بن ثابت).

فتَمَّ البناء في خلافته. (سنة)<sup>69</sup> اثنين وخمسين وأربعمئة سقط تنور قبة بيت المقدس، وفيه خمسمئة قنديل. فتطير المقيمون من المسلمين وقالوا: ليكون في الإسلام حادث عظيم وقد كان.

فإنه لم يزل بيت المقدس بأيدي المسلمين من لدن عمر بن الخطاب رضي الله عنه إلى سنة إحدى وتسعين وأربعمئة. في تلك السنة قصدوه الإفرنج في ألف ألف مقاتل وأقاموا عليه نيفاً وأربعين يوماً وملكوا ضحي نهار الجمعة لسبع بقين من شعبان من تلك السنة، وقتل فيه من المسلمين خلق كثير في مدة أسبوع وقتل في المسجد الأقصى ما يزيد على سبعين ألفاً من ساداتهم وعبادهم وزهادهم وأخذوا من عند الصخرة من أواني الذهب والفضة ما لا يصبطه الحصر. وانزعج بسببه المسلمون في سائر البلاد غاية الانزعاج واجتمع أهل بغداد في الجوامع واستغاثوا وبكوا حتى أنهم أفطروا من عظيم ما جرى عليهم. وندب الخليفة ببغداد الفقهاء إلى الخروج إلى البلاد وليحرضوا الملوك على الجهاد، فخرج الإمام أبو الوفاء بن عقيل الحنبلي وأخذ من أعيانة الفقهاء وساروا في الناس، فلم يقد شيئاً ف {إنّا لله وإنّا إليه راجعون}<sup>70</sup>. واستولت الإفرنج على بلاد السواحل وما فيها من القلاع والحصون وعاثوا فيها وفيما والاها [13. ب] من النواحي والأعمال والضياع عيث زعل وذكوان في سرح المدينة. {وزين لهم الشيطان ما كانوا يعملون}<sup>71</sup>، ودلّاهم بغرور فظلوا في طغيانهم يعمهون.

ولما أخذ بيت المقدس وغيره من المسلمين قال في ذلك (مظفر)<sup>72</sup> الأبيوردي أبياتاً، منها:

مزجنا دماء بالدموع السواجم	فلم يبق فيها عرضة للمراجم
وشر سلاح المرء دمع يفيضه	إذ الحرب شبت نارها بالصوارم
فأيها بني الإسلام أن وراءكم	وقائع يلحقن الذري بالمناسم
وكيف تنام العين منك جفونها	على هفوات يقظت كل نائم
فإخوتكم بالشام يضحى قتلهم	ظهور المذاكي أو بطون القشاعم
تسومهم الروم الهوان وأنتم	تجرون ذيل الخفض فعل المسالم
وكم من دماء قد أبيحت ومن دمي	توارى حياء حسننها بالمعاصم
وبين اختلاس الضرب والطعن وقعة	يظل لها الولدان شيب القوادم
وتلك حروب من يغب عن غمارها	ليسلم يقرع بعدها سنّ نادم
سلن بأيدي المشركين قواضباً	ستعمل منهم في الطلى والجماجم
يكاد لها المستجن بطيبة	ينادي بأعلى الصوت يا آل هاشم
أرى أمة لا يشرعون إلى العدى	رماحهم والدين واهي الدعائم
ويجتنبون النار خوفاً من الأذى	ولا يحسبون العار ضربة لازم
أترضي صنديد الأعراب بالأذى	وتغضي على ذل حماة الأعاجم
فليتهم أن لم يذودوا حمية	على الدين ضنوا غيرة للمحارم
فإن زهدوا للأجر أو زهدوا الوغى	فهلا أتوه رغبة في المغانم

69 ب: (وفي سنة).

70 من القرآن 2:46.

71 من القرآن 6:43.

72 ب: (المظفر).



ولم يزل بيت المقدس وما والاها من بلاد السواحل وغيرها في أيدي الإفرنج المخذولين، نيفاً وتسعين من السنين إلى أن جاءت الساعة التي جلاها الله لوقتها وأظهر الآية التي لا أخت لها. فنقول هي أكبر من أختها. [14. أ] وأفضت الليلة (المعتمة)<sup>73</sup> إلى فجرها، ووصلت الدنيا الحامل بجنين الجنائيات إلى تمام شهرها، وجاءت بواحدتها التي تضاف إليه الأعداد، ومالكها الذي له السماء خيمة والحبك أطناب والأرض بساط والجبال أوتاد والشمس دينار والقمر دراهم والأفلاك خدم والنجوم أولاد، هو السلطان الملك المعظم مالك ذمام الفضل المعتمم بالرأي (الشديد)<sup>74</sup> المتوكل على الله فيما يبدي ويعبد، السلطان الملك الناصر صلاح الدين والدين أبو المظفر يوسف بن أيوب. سقى الله عهده بالرحمة والرضوان وأسكنه فسيح الجنان، وقد يسر الله على يديه ما تيسر من الفتوح وأنزل به الملائكة والروح في أيام مولانا الإمام الناصر لدين الله أمير المؤمنين أبي أحمد العباسي ببغداد، وكان السلطان الملك الناصر صلاح الدين ناصر دعوته وداعي نصرته. فندبه لهذا الفتح المبين، وكان هجرة للإسلام ثانية وبيعة رضوان لأيدي أهل التثليث بالكفر ثانية.

فجمع العدد وفرق العدد، ووهب الجياد وأجاد المواهب، ورغب في العطايا وأعطى الرغائب. وخرج في مستهل محرم (الحرام)<sup>75</sup> سنة ثلاث وثمانين وخمسة وقد أيقن بالظفر بما رام، وبأيع الله ورسوله على نصره الإسلام. وكتب إلى الأقطار والبلاد يستدعي جموع الجهاد، وسار والغرام يستنهضه والعز يحرضه وقدم بمحافله الحافلة وجيوشه الصابلة، وقصد بيت المقدس بعد أن يستولي على جميع ما كان في أيدي الكافر من الحصون والقلاع والضياع بتلك الأقطار، ومحي منها بالسعود رسم النحوس وأقام جاه الأذان، والله عز وجل ناصره حتى انتهى به الفتح إلى عسقلان.

فدخل السلطان من عسقلان للقدس الشريف طالباً وللنصر العزيز مصاحباً، يخطب من القدس عروساً ويبدل لها من المهر نفوساً، وجاء الخبر إلى القدس الشريف بوصول السلطان ذي القدر المنيف، فطارت قلوب من به وطاشت. وتمنت الإفرنج لما شاعت الأخبار أنها ما عاشت وأيس الإفرنج من الفرج وأجمعوا على بدل المهج [14. ب] وقالوا: هذه قمامتنا ومنها تقوم قيامتنا وبها صلب المسيح وقرب الذبيح وبها نزل النور وزال الديجور. وأضافوا إلى متعبدهم من هذه الضلالات، ما ضلوا به عن نهج (الدلالات)<sup>76</sup> وحضهم قسوسهم وحررتهم رؤوسهم، فما شعروا إلا وقد أقبلت العساكر الناصرية منصوراً الجنود مشهورة القواضب منشورة البنود. قد سألت الوهاد بأكامها وجالت الأعلام في أعلامها.

وأقبل السلطان بإقبال سلطانه وأبطال شجاعانه وأفيال أولاده وإخوانه وأشبال مماليكه وغلمانه. وأصبح يسأل عن الأقصى وطريقه الأدنى وفريقه الأسنى، وقال: إن أسعدنا (بفريقه)<sup>77</sup> فما أسعدنا وأي أيد له عندنا إذ أيدنا. ووصف السلطان من خصائص بيت المقدس والأقصى مزاياً لا تعدّ لا تحصى تستقصى، وأقسم لا يبرح عنه حتى يخطو إلى زيارة موضع القدم النبوي بقدمه وصمم على ذلك رجاء من الله أبرار قسمه.

ونزل غربي القدس يوم الأحد خامس عشر رجب وقلب الكفر قد وجب، وكان بالقدس حينئذ ما بين رامج ونابل من جموع الإفرنج ما يزيد على سبعين ألف مقاتل. فوقفوا دون البلاد يبارزون ويفتحمون المنايا

73 ب: (الظلماء المقيمة).

74 ب: (الرشيد).

75 ناقصة في ب.

76 ب: (الضلالات).

77 ب: (الله يفتحه).

ويحاجزون، وقاتلوا أشد القتال ونازلوا أشد النزال وصافوا بصحاف الصفاح لإرواء الظياء الظماً من ماء الأرواح. ودامت الحرب واستمر الطعن والضرب.

وانتقل السلطان يوم العشرين من رجب إلى الشمالي وخيم هنالك وضيّق على الإفرنج المسالك ونصب المجانيق وفوق من أفاقها الأفويق حتى نزلت الصور سوراً وجعلت الذات عنه محشوراً، وعاد عقد العداة بعد النظم منثوراً وظهر من أفق الفتح نوراً. وتسلمّ البلد بالأمان يوم الجمعة السابع والعشرين من رجب على شروط شرطوها (وأمر)<sup>78</sup> التزموها، فأدّوا ذلك للسلطان على ما اختار، وقد حصل لبيت (المال)<sup>79</sup> ما يقارب مئة ألف دينار.

وكتبت من البشائر بهذا الفتح ما يفرح أرج نشره ويحيي بحياة [15. أ] هذا السلطان آثار بره. وبشرت المسجد الحرام بخلص المسجد الأقصى وقلت على الملة المحمدية شرع لكم من الدين ما وصى (هنّ)<sup>80</sup> الحجر الأسود بالصخرة البيضاء ومنزل الوحي بمحلّ الإسراء ومقرّ سيد المرسلين وخاتم النبيين بمقر الرسل والأنبياء المقربين ومقام إبراهيم الذي وفي بموضع قدم محمد المصطفى. وتسامع الناس بهذا النصر الكريم والفتح العظيم. فوفدوا للزيارة من كل فج عميق وسلّكوا إليه من كل طريق وأحرموا من البيت المقدس إلى البيت العتيق وتنزهوا من أزهار (الكرامت)<sup>81</sup> في الروض الأنيق.

ولما تسلمه السلطان أمر بكشف النقاب عن عروس المحراب وهدم ما كان أمامه من الأبنية، وأمر بتنظيف ما حوله من الأقبية، وبسطوا تلك البسيطة بالبسط الرفيعة، وعلقت القناديل وتليت آيات التنزيل، وصدّقت السجادات وصدّقت العبادات وأقيمت الصلوات وأدعيت الدعوات وتجلت البركات وأنجلت الكريات، ونصب المنبر وتحلى المحراب المطهر.

فلما دخل يوم الجمعة رابع شعبان أصبح الناس يسألون في تعيين السلطان وامتلاً الجامع واختلفت المجامع وتوحشت الأبصار والمسامع وأفاضت لركة القلوب المدامع وتوسمت العيون وتقسمت الظنون. وتكلموا فيمن يخطب ولمن يكون المنصب وتفاوضوا في ذلك وأطالوا التفويض وتحدثوا بالصريح والتعريض، وأعلام تعلّى والمنبر يكسى ويجلي، والأصوات ترفع والجماعات تجتمع والأفواج تزدهم والأمواج تلتطم، وللعارفين من الضجيج ما في عرفات للحجيج حتى حان الزوال وزال الاعتدال وجعل الداعي وأعجل الساعي. نصب السلطان الخطيب بنصّه وأبان عن اختياره بعد فحصه، وأشار إلى القاضي محيي الدين أبي المعالي محمد بن (الحسن)<sup>82</sup> علي بن محمد بن يحيى بن علي بن عبد العزيز بن علي بن الحسين بن محمد بن عبد الرحمن بن القاسم بن الوليد بن محمد بن عبد الرحمن بن عثمان بن عفان رضي الله عنه، ويعرف بابن الزكي العثماني القرشي. ورسم له السلطان أن [15. ب] يرقى ذلك المرقى بتقدّمه عرقي. فرقى ذلك العود ولقي السعود واهتزت أعطاف المنبر واعتزت أطراف المعشر. فخطب وأنصتوا، ونطق وسلّتوا، وأفصح وأعرب وأبدع وأغرب، وأبان عن فضل بيت المقدس وتقديسه وتطهيره بعد تنجيسه وإخراص ناقوسه وإخراج قسيسه.

وكان أول ما بدأ به في خطبته بعد أن استوى قائماً من جلسته أن افتتح بقراءة سورة الفاتحة إلى آخرها، ثم قال: { فقطع دابر القوم الذين ظلموا والحمد لله رب العالمين }<sup>83</sup>. ثم قرأ أول سورة الأنعام إلى قوله { ثم الذين

78 ب: (وأموأ وأموال).

79 ناقصة في ب.

80 ب: (هنئ).

81 ب: (كريمته).

82 ب: (أبي الحسن).

83 من القرآن 6:45.

كفروا برّبهم يعدلون} <sup>84</sup> ، ثم قرأ من سورة سبحان {وقل الحمد لله الذي لم يتخذ ولداً ولم يكن له} <sup>85</sup> إلى قوله {وكبره تكبيراً} ، ثم قرأ أول سورة الكهف {الحمد لله الذي على عبده الكتاب} <sup>86</sup> الآيات الثلاث، ثم قرأ من أول النمل {قل الحمد لله الذي له ما في السموات وما في الأرض} <sup>87</sup> الآية. وكان في قصده أن يذكر جميع تحميدات القرآن فخشي من الإطالة.

وقال: الحمد لله معزّ الإسلام بنصره ومذلّ الشرك بقهره ومصرف الأمور بأمره ومديم النعم بشكره ومستدرج الكفار بمكره، الذي قدر (الأيام) <sup>88</sup> يعدله وجعل العاقبة للمتقين بفضلته وأفاء على عباده من فضله وأظهر دينه على الدين كله، والقاهر فوق عباده فلا يمانع، والظاهر على خليقته فلا ينازع، والأمر بما يشاء فلا يراجع، والحاكم بما يريد فلا يدافع. أحمدته على أظفاره وأظهاره وأعزازه وأوليائه ونصره لأنصاره وتطهره لبيته المقدس من أدناس الشرك وأفاته، حمد من استشعر الحمد باطر سره وظاهر أظهاره.

أشهد أن لا إله إلا الله وحده، لا شريك له، الأحد الصمد الذي لم يلد ولم يولد ولم يكن له كفواً أحد، شهادة من ظهر بالتوحيد قلبه وأرضى به ربه. وأشهد أن محمداً عبده ورسوله رافع الشك وداحض الشرك وقامع الأفك، الذي أسري به ليلاً من المسجد الحرام إلى هذا المسجد الأقصى وعرج به منه إلى السموات العلى {إلى سدرة المنتهى، عندها جنة المأوي ما زاغ البصر وما طغى} <sup>89</sup> ، صلى الله [16. أ] عليه، وعلى خليفته أبي بكر الصديق السابق إلى الإيمان، وعلى أمير المؤمنين عمر بن الخطاب أول من رفع عن هذا البيت المقدس شعار الصليبان، وعلى أمير المؤمنين عثمان بن عفان ذي النورين جامع القرآن، وعلى أمير المؤمنين علي بن أبي طالب مبيد الكفر ومزلزل الشرك ومكسر الأوثان، وعلى آله وأصحابه والتابعين لهم بإحسان.

أيها الناس، ابشروا برضوان الله الذي هو الغاية القصوى والدرجة العليا، واشكروه على ما يسر على أيديكم من استرداد هذه الضالة وردّها إلى مقرّها من الإسلام بعد ابتذالها في أيدي المشركين قريباً من مئة عام وتطهير هذا البيت الذي أذن الله أن يرفع وذكر فيها اسمه وإماطة الشرك عن طرقة بعد أن امتدّ عليها (روقه) <sup>90</sup> واستمرّ فيها رسمه ورفع قواعده بالتحמיד. فإنه بني عليه وشيد بنيانه بالتمجيد، فإنه أسدّ على التقوى من خلفه ومن بين يديه. فهو موطن أبيكم إبراهيم ومعراج نبيكم محمد صلى الله عليه وسلم أفضل الصلاة والتسليم، وقلبتكم التي كنتم إليها في ابتداء الإسلام، وهو مقرّ الأنبياء ومقصود الأولياء ومدفن الرسل ومهبط الوحي ومنزل به الأمر والنهي، وهو في أرض المحشر وصعيد المنشر، وهو في الأرض المقدسة التي ذكرها الله تعالى في كتابه المبين، وهو المسجد الذي صلى فيه رسول رب العالمين بالنبیین والملسلين والملائكة المقربين، وهو البلد الذي بعث الله إليه عبده ورسوله وكلمته الذي ألقاها إلى مريم (وروح منه) <sup>91</sup> عيسى الذي كرّمه الله برسالته وشرفه بنبوته و(لا) <sup>92</sup> يزحزحه عن رتبة عبوديته.

فقال: {لن يستنكف المسيح أن يكون عبد الله ولا الملائكة المقربين} <sup>93</sup> ، كذب العادلون بالله وضلوا ضلالاً

84 من القرآن 6:1.

85 من القرآن 17:111.

86 من القرآن 18:1.

87 من القرآن 34:1.

88 ب: (الأيام دولاً).

89 من القرآن 35:14-35:15.

90 ب: (رواقه).

91 ب: (روحه).

92 ب: (لم).

93 من القرآن 4:172.

بعيداً، { ما اتخذ الله من ولد وما كان معه من آله إذا ذهب كل إله بما خلق ولعلى بعضهم على بعض سبحانه الله عما يصفون عالم الغيب والشهادة، فتعالى عما يشركون }<sup>94</sup> ، { لقد كفر [16. ب] الذين قالوا إن الله هو المسيح عيسى بن مريم }<sup>95</sup> إلى آخر الآيات من المائدة.

وهو أول القبلتين وثاني المسجدين وثالث الحرمين. لا تشد الرحال بعد المسجدين إلا إليه، ولا (تعقد)<sup>96</sup> الخناصر بعد المواطنين إلا عليه. فلو لا أنكم ممن اختاره الله من عباده واصطفاه من سكان بلاده لما خصكم بهذه الفضيلة الذي لا يجاريكم فيها مجار ولا يباريكم فيها مبار. فطوبى لكم من جيش ظهرت على أيديكم المعجزات النبوية والوقعات البدرية والعزمات الصديقية والفتحات العمرية والجيوش العثمانية والفتكات العلوية، جددتم الإسلام أيام القادسية والملاحم اليرموكية والمنازلات الخيبرية والحملات الخالدية. فجزاكم الله عن نبيكم محمد أفضل الجزاء وشكر لكم ما بذلتموه من مهجكم في مقارعة العداء، وتقبل منكم ما تقرّبتم إليه من إهراق الدماء وأتابكم الجنة. فهي دار السعداء، فاقدروا رحمكم الله هذه النعمة حق قدرها وقوموا لله بواجب شكرها. فله تعالى المنة عليكم بتخصيصكم بهذه النعمة وترشيحكم لهذه الخدمة. فهذا هو الفتح الذي فتحت له أبواب السماء وتبلجت بأنواره وجوه الظلماء (وابتهج)<sup>97</sup> الملائكة المقربين وقربه أعين الأنبياء والمرسلين. فإذا عليكم من النعمة بأن جعلكم الجيش الذي تقوم بسببهم بعد فترة من النبوة أعلام الإيمان، فيوشك أن (يفتح)<sup>98</sup> على يديكم أمثاله وأن يكون التهاني لأهل الخضراء، أكثر من التهاني لأهل الغبراء.

فهو البيت الذي ذكره الله تعالى في كتابه ونصّ عليه في معظم خطابه ومنحك به متنه وطوله. فقال تعالى: { سبحانه الذي أسرى بعبده ليلاً من المسجد الحرام إلى المسجد الأقصى الذي باركنا حوله }<sup>99</sup> . وهو البيت الذي عظمته الملك وأثنت عليه الرسل وتليت فيه الكتب الأربعة المنزلة (على)<sup>100</sup> الله عز وجل، لأجله الشمس على يوشع بن نوف بن يعرب، باعد بين جوانبها ليتسر فتحه ويقرب. أليس هو البيت الذي أمر الله عز وجل موسى أن يأمر قومه باستيطانه، فلم يحببه إلا رجلاً وغضب عليهم لأجله، فألقاهم في التيه [17. أ] عقوبة للعصيان. فاحمدوا الله الذي أمضى غرائمكم لما نكلت عنه بني إسرائيل، فقد فضلت على العالمين ووفقكم لما خذل فيه أمماً كانت قبلكم من الأمم الماضين، وجمع لأجلكم كلمتكم وكانت شتى وأغناكم بما أمضته كان وعن (سوف)<sup>101</sup> وحتى. وليهنكم أن الله قد ذكركم به فيمن عنده وجعلكم بعد أن كنتم جنود الأهوية جنده وشركم الملائكة (المنزلون)<sup>102</sup> بهذا البيت من طيب التوحيد ونشر التقديس والتمجيد. وما أمطتم عن طريقه من أذى الشرك والتثليث والاعتقاد الفاجر الخبيث، والآن تستغفر لكم أملاك السموات وتصلى عليكم الصلوات المباركات.

فاحفظوا رحمكم الله هذه الموهبة فيكم، وأحرسوا هذه النعمة عندكم بتقوى الله الذي من تمسك به وسلم ومن اعتصم بعروتها نجا وعصم. وأحذروا من اتباع الهوى وموافقة الردا ورجوع القهقري والتولي عن العداء، وجدّوا في انتهاز الفرصة وإزالة ما بقي من الغصّة، وجاهدوا في الله حق جهاده وبيعوا رحمكم الله أنفسكم في

94 من القرآن 23:91-23:92.

95 من القرآن 5:17.

96 ب: (تعود).

97 ب: (وابتهج به).

98 ب: (يفتح الله).

99 من القرآن 17:1.

100 ب: (من).

101 ب: (وسوف).

102 ب: (المنزلون على ما أهديتهم).

رضاه إذ جعلكم من خير عبادِه. وإياكم أن تستزلكم الشيطان وأن يداخلكم الطغيان، فيخيّل لكم أن هذا النصر بسيوّفكم الحداد (وخيالكم)<sup>103</sup> الجياد وبجلادكم في موطن الجلال. لا والله العظيم وما النصر إلا من عند الله العزيز الحكيم. واحذروا عباد الله بعد أن شرفكم بهذا الفتح الجليل والمنح الجزيل وخصّكم بنصره المنير. أن تقترفوا كثيراً من نواهيه وأن تأتوا عظيماً من معاصيه. فتكونوا {كالتّي نقضت غزلها من بعد قوة إنكاثاً}<sup>104</sup> ، {وكالذي آتينا آياتنا فانسلخ منها واتبعه الشيطان، فكان من الغاوين}<sup>105</sup> .

والجهد الجهاد فهو أفضل عبادتكم وأشرف عاداتكم. أنصروا الله ينصركم، اذكروا الله يذكركم، اشكروا الله يردكم ويشكركم. جدّوا في حسم الداء وقلع شأفة الأعداء وطهروا بقية الأرض من هذه الأنجاس التي أغضبت الله ورسوله، واقطعوا [17. ب] فروع الكفر واجتثوا أصوله. فقد نادى الأيام بالثاوات الإسلامية والملة المحمدية. الله أكبر، فتح الله نصر، غلب الله وقهر، وأخذل من كفر. واعلموا رحمكم الله أن هذه فرصة فانتهزوها، وفرصة فناجزوها، وغنيمة فحوزوها، ومهمة فأخرجوا بها هممكم وأبرزوها وسيروا إليها سرايا عزماتكم وجهزوها. فالسعادة بأماثرها والمكاسب بدخائلها. وقد ظفركم الله بهؤلاء الأعداء المخذولين وهم مثلكم أو يزيدون، فكيف وقد أضحى قبالة الواحد منكم عشرين. وقد قال الله تعالى: {أن يكن منكم عشرون صابرون يغلبوا مئتين}<sup>106</sup> ، {وإن يكن منكم ألف يغلبوا ألفين بأذن الله والله مع الصابرين}<sup>107</sup> . أعاننا الله، وإياكم على اتباع أوامره والانزجار بزواجره، وأيدنا معاشر المسلمين بنصر من عنده، {إن ينصركم الله فلا غالب لكم وأن يخذلكم. فهذا الذي ينصركم من بعده}<sup>108</sup> . إن أشرف مقال يقام في مقام وأنفذ سهام تمرير عن قسي الكلام وأمضى قول تحلي به الأفهام، كلام الواحد الفرد العزيز العلام.

ثم استعاذ وبسمل وقرأ أول سورة الحشر، ثم دعا للخليفة أمير المؤمنين ناصر لدين الله وللسلطان، فقال: اللهم، وأدم سلطان عبدك، الخاضع لهيبتك، الشاكر لنعمتك، المعترف بموهبتك سيفك القاطع وشهابك اللامع، والمحامي عن دينك، والمدافع الذاب عن حرمك الممانع، السيد الملك الأجل الناصر، جامع كلمة الإيمان، قانع عبدة الصليبان، صلاح الدنيا والدين، سلطان الإسلام والمسلمين، مطهر بيت المقدس من أيدي المشركين، أبي المظفر يوسف بن أيوب، محيي دولة أمير المؤمنين.

اللهم، عمر بدولته البسيطة، واجعل ملائكتك براياته محيطة، وأحسن عن الدين الحقيقي جزاءه، واشكر عن الملة المحمدية عرضه ومضاه. اللهم، أبق للإسلام مهجته ودف للأنام حوزته، وانشر في المشارق والمغرب دعوته. اللهم، [18. أ] وكما فتحت على يديه البيت المقدس بعد أن ظنت الظنون، فافتح على يديه داني الأرض وقاصيها، وملّكه صياصي الأرض ونواصيها، فلا يلقي منهم كتيبة إلا مزقها ولا جماعة إلا فرقها ولا طائفة إلا ألحقها بمن سبقها. اللهم، اشكر عن سيدنا (محمد)<sup>109</sup> سعيه، وانفذ في المشارق والمغرب أمره ونهيه. اللهم، واصلح به أوساط البلاد وأطرافها وأرجاء الملل وأكنافها. اللهم، زل به معاطس الكفار، وارغم به أنوف الفجار والنشر، وأيد ملكه على الأمصار. اللهم، (ثبت)<sup>110</sup> فيه وفي عقبه واحفظه في بنيه الغرّ الميامين، وشد عضده ببقائهم، أمين.

103 ب: (وخيولكم).

104 من القرآن 16:92.

105 من القرآن 7:175.

106 من القرآن 8:65.

107 من القرآن 8:66.

108 من القرآن 3:160.

109 ب: (محمد صلى الله عليه وسلم).

110 ب: (لبث).

وختم بقوله تعالى: {إن الله بأمر بالعدل والإحسان} <sup>111</sup> ، ونزل وصلى في المحراب وافتتح بسم الله وقرأه أم الكتاب وأمّ بتلك الأمة وتمّ نزول الرحمة. ولما قضيت الصلاة انتشر الناس واشتهدوا الإيناس وانعقد الإجماع واطرد القياس وجرت حالات وتولت مسرات. وصلى السلطان في قبة الصخرة والصفوف بها على سعة الصحن متصلة والأمة إلى الله تعالى بدوام نصر السلطان الملك الناصر مبتهلة، والأيدي إليه مرفوعة والدعوات لديه مسموعة.

ومن الاتفاقات العجيبة أن الملك الناصر صلاح الدين يوسف لما فتح حلب في صفر مدحه محيي الدين بن الزكي قاضي (بدمشق) <sup>112</sup> بقضيدة. منها:

وفتحكم حلباً بالسيف في صفر  
مبشراً بفتوح القدس في رجب

فكان الأمر في ذلك العام كما بشّر به.

ويحكى أن السلطان لما كثرت فتوحاته في السواحل كان لا يتجاسر على فتح بيت المقدس لكثرة ما فيه من العدد والأبطال لكونه كرسي دين النصرانية، وكان فيه مأسوراً رجلاً من أهل دمشق، فأرسل إلى السلطان أبياتاً على لسان البيت المقدس:

يا أيها الملك الذي  
جاءت إليك بطاقة  
كل (المساجد) <sup>113</sup> ظهرت  
لمعالم الصليبان نكس  
تسعى من البيت المقدس  
وأنا على شرفي منجّس

[18. ب] وكانت هي الداعية إلى الفتح. ويقال إن السلطان وجد في ذلك الشاب أهلية، فولاه خطابة المسجد الأقصى.

ثم أن السلطان رتب أرباب الخدم والوظائف وحمل إلى المسجد الربعات والمصاحف، وأمر بالعمارة وترخيم محراب الأقصى، وأن يبالغ في ذلك ويستقضي. وأقام السلطان بالقدس مدة ورحل عنه يوم الجمعة الخامس والعشرين من شعبان (سنة 584) <sup>114</sup> ، وأخذ بفتح ما بقي من البلاد بأرض الشام ويقابل الإفرنج الكفرة الليام، ووقع (بينهم وبينه) <sup>115</sup> وقعات مشهورة بأصلي هذا الكتاب مرقومة ومسطورة إلى أن دعاه داعي الحمام قلبي للسابع والعشرين من صفر (سنة 589) <sup>116</sup> وما تأبى. وكثر عليه الأسف، وما وجد له بدل ولا خلف، وبكاه الأمراء ورثاه الشعراء. ممن أحسن المرثية مرثية العماد الكاتب، رثاه بقصيدة وهي مثنان واثنان وثلاثون بيتاً. فمنها:

شمل الهدى والملك عم سناته  
والدهر ساء وأقلعت حسناته

<sup>111</sup> من القرآن 16:90.

<sup>112</sup> ب: (دمشق الخطيب المذكور).

<sup>113</sup> ب: (السواحل).

<sup>114</sup> ب: (سنة 584 أربعة وثمانين وخمسمئة).

<sup>115</sup> ب: (بينه وبينهم).

<sup>116</sup> ب: (سنة 589 تسعة وثمانين وخمسمئة).

الله خالصة صفة نياته	بالله أين الناصر الملك الذي
أطواق أجياد الورى منّاته	أغلال أعناق العداء أسيافه
خلت من سلّها وركوبها غزواته	بكت الصوارم والصواهل إذ
أروى إلى يوم النشور وفاته	دفن السماح فليس ينشر بعدما

وتنافس ملوك بني أيوب فيما يجمع لهم ود القلوب في إبداء الأثار بالبيت المقدس من كل حسن ونفيس وأنفس. ثم لما أفضى الملك للملك (المعظم) <sup>117</sup> عيسى بن الملك العادل أبي بكر بن أيوب وتمكن الإفرنج من البلاد وضعفت قوة المسلمين أمر بتخريب صور بيت المقدس في (سنة 616) <sup>118</sup> خشية أن يقصد بيت المقدس، فلا يقدر على منع العداء. فانتقل منه خلق كثير وتفرقوا أيدي سباء.

وفي (سنة 626) <sup>119</sup> اختلفت ملوك بني أيوب وضعفوا وقويت الإفرنج وابتلغوا، فلم يجد السلطان الكامل يداً من المهاترة وسلمّ القدس إلى الإفرنج على بقاء المسلمين فيه وأن يقيم [19. أ] كل منهما (شعاره فيه) <sup>120</sup> الذي يرتضيه بشرط أن لا تعمر الإفرنج الصور وأن لا يتعرضوا للصخرة ولا للمسجد الأقصى ويكون الرجوع في الرستاق إلى والي المسلمين. وعظم ذلك على المؤمنين وحصل به وهن شديد في الدين. وقد عقد سبط بن الجوزي مجلس وعظ بدمشق وذكر فيه فضل القدس الشريف وما حل بالمسلمين من هذا الهول المخيف وأنشد قصيدة يائسة. فمنها بيتاً:

مدارس آيات خلّت من تلاوة      ومنزل وحي مقفر العرصات

فأبكى القلوب والعيون وتمنت الناس المنون بسبب هذا الخطب الجسيم. فلا حول ولا قوة إلا بالله العلي العظيم.

ثم مات الملك الكامل وتولّى بعده الملك الناصر داوود بن الملك العادل. وفي (سنة 637) <sup>121</sup> اقتضى رأيه السعيد وعزمه الشديد استنقاذ بيت المقدس من الطائفة الفاجرة وتطهيره من أرجاسهم رجاء ثواب الآخرة. فجمع الأبطال جمع كثرة لا قلة وهجم على الإفرنج على حين غفلة في يوم عيدهم الأكبر يوم رفع الصليب وشرب المنكر، فوافاهم قبيل الصباح وأعمل فيهم السيوف والرماح، وصار المسلمون بالتكبير ويجتهدون ويقتلون ويأسرون وينهبون. فما ارتفع النهار وظهرت الشمس إلا وآثار الكفرة كان لم تغن بالأمس وقويت شوكة المسلمين وأتمّ الله نعمته على المؤمنين، وكتبت بذلك إلى الأقطار البشائر واعتبتي بإقامة ما كان رتبة عمه صلاح الدين يوسف من الشعائر.

وقد كان هذا الفتح سطر للملك الناصر داوود في صحائف الحسنات وتواردت الألسن بالأدعية الصالحة في سائر الأوقات إلى أن دخلت (سنة 641) <sup>122</sup> بذل الملك الناصر داوود حسنته بالسيات وسلمّ القدس للإفرنج بما فيه من المزارات. فانتقم الله منه وسلبه ملكه والأموال والقصور وابتلى بمحن يضيق عنها هذا المسطور.

117 ناقصة في ب.

118 ب: (سنة 616 ستة عشر وستة عشر).

119 ب: (سنة 626 ستة عشر وستة عشر).

120 ب: (شعار دينه).

121 ب: (سنة 637 سبعة وثلاثين وستمئة).

122 ب: (سنة 641 واحد وأربعين وستمئة).

ثم لما توفي الملك الصالح الناصر نجم الدين بن الملك الكامل استولى على غزة وملك السواحل وفتح القدس الشريف وحصل له به [19. ب] غاية التشريف وهو آخر فتوحاته. فإنه مستمرّ بأيدي المسلمين إلى عصرنا هذا والمرجور من كرم الله استمراره كذلك إلى يوم القيامة بجاه صفيه محمد وجميع الأنبياء والمسلمين. إنه مجيب دعوة المضطرين.

### الباب الثالث: في صفة المسجد الأقصى وما به كم الصخرة والمآثر التي لا تستقصى

اعلم أولاً أن المتعارف الآن عند الناس أن المسجد الأقصى، هو الجامع المبين في صدر المسجد، وحقيقة الحال أن المسجد الأقصى اسم لجميع ما دار عليه السور. فإن البناء (التي)<sup>123</sup> في صدر المسجد وفيه الصخرة والأروقة فحادثة. واعلم أنه ليس له نظير تحت أديم السماء ولا بني في المساجد سعته ولا صفته، كان في الزمان الأول على الصفات العجيبة والسمات الغريبة.

وأما صفته في عصرنا وهو (سنة 1144)<sup>124</sup>، فالجامع الذي هو في صدره عند القبلة التي تقام فيها الجمعة، فهو المعروف الآن بالمسجد الأقصى. فيشتمل على بناء عظيم به قبة مرتفعة على العمدة الرخام والسواري. فعمده خمسة وأربعون، منها ثلاثة وثلاثون رخاماً واثنى عشر مبنى بالحجارة، وسواريه أربعون سارية. والمحراب الكبير الذي في صدره بجانب المنبر من الشرق، يقال إنه محراب داوود عليه السلام. وذرع هذا المسجد في الطول قبلة بشام مئة ذراع محرراً وعرضه من الباب الشرقي إلى الباب الغربي سبعة وسبعون ذراعاً وبداخله بجامع عمر.

وبه محرابه والأكثر أن محراب عمر هو محراب داوود لصلاته فيه يوم الفتح. وبجانب جامع عمر من جهة الشمال إيوان<sup>125</sup> لطيف، به محراب زكريا عليه السلام. بجوار الباب الشرقي وبجانب المنبر الشريف محراب لطيف يقال إنه محراب معاوية رضي الله عنه. وبداخل المسجد من جهة الغرب مجمع كبير معقود بالأحجار الكبار، وهو كوران ممتدان شرقاً وغرباً وهو عشر قناطير على تسع سواري يسمى جامع النساء. وبصدر المسجد من وراء القبلة الزاوية الخنثنية. وبداخله المقصورة الحديدية الملاصقة للمنبر. وبجوار الزاوية الخنثنية دار الخطابة [20. أ] والمنبر في صدره مقابلة دكة المؤذنين على عمد الرخام في غاية الحسن.

وبهذا المسجد عشرة أبواب يدخل منها من صحن المسجد إليه، وسبعة أبواب منها في جهة الشمال بظاهرها رواق على سبعة قناطر قبالة، كل باب قنطرة بها أربعة عشر عموداً من الرخام. وباب من جهة الشرق جهة مهد عيسى وباب من جهة الغرب والعاشر يدخل منه إلى جامع النساء.

وبداخل هذا المسجد بئر الورقة على يسار الداخل، وحديثه كما روي عن عطية بن قيس: أن رسول الله صلى الله عليه وسلم قال: ليدخلن الجنة رجل من أمّتي يمشي على رجليه وهو حيّ. فقدمت رفقة بيت المقدس يصلون فيه في خلافة عمر بن الخطاب رضي الله عنه. فانطلق رجل من بني تميم يقال له شريك بن حباشة يستسقي لأصحابه. فوقع دلوه في الجب (فنزل ليأخذه. فوجد باباً في الجب)<sup>126</sup> ينفتح إلي جنان. فدخل من الباب

123 ب: (الذي).

124 ب: (سنة 1144 أربع وأربعين ومئة وألف).

125 مضافة في ب: (مقصود يسمى مقام عزيز. وبجوار هذا الإيوان من جهة الشمال إيوان).

126 ناقصة في ب.



إلى الجنان يمشي فيها، وأخذ ورقة من شجرها، فجعلها خلف أذنه ثم خرج من الجب. فأتى صاحب بيت المقدس وأخبره بما رأى من الجنان ودخوله فيها. فأرسل معه إلى الجب فنزل ومعه أناس، فلم يجدوا باباً ولم يصلوا إلى الجنان. فكتب بذلك إلى عمر، فكتب عمر يصدق حديثه في دخول رجل من هذه الأمة الجنة يمشي على قدميه وهو حي، وكتب عمر أن انظروا الورقة، فإن يبست وتغيرت فليس هي من الجنة، فإن الجنة لا يتغير فيها شيء. وذكر في حديثه أن الورقة لم يتغير. وفي رواية أنها كانت شبيهة بورقة الدارقن بمنزلة الكف محددة الرأس، وأنها وضعت بين كفته وصدره. فكان آخر العهد بها.

وبجوار هذا المسجد وبه من جهة الشرق قبر كبير معقود بالحجارة (يقال له)<sup>127</sup> النجارة، يوضع فيه آلة المسجد وبه فم ثاني لبئر الورقة. وبظاهر المسجد في صحن الحرم من جهة الشرق في الصور القبلي بالقرب من مهد عيسى محراب كبير يسمى محراب داوود عليه السلام، والدعاء عنده مستجاب، وقد جرب ذلك. وفي آخر المسجد من جهة الشرق مما يلي محراب داوود مكان معقود به محراب يسمى بسوق المعرفة. يقال [ب] 20. إنه كان به باب التوبة لبني إسرائيل لأنه كان إذا أذنب أحدهم ذنباً أصبح مكتوباً على باب داره، فيأتي هذا المكان ويتضرع ويتوب ولا يبرح حتى تظهر له. أما رأت الغفران بمحو الكتابة عن باب داره. وكان هذا المكان قديماً مصلى للحنابلة، أفرده لهم الملك المعظم عيسى صاحب دمشق.

وبسفل سوق المعرفة مهد عيسى عليه السلام. به محراب مريم عليها السلام وهو موضع مستعبدتها وهو موضع مأنوس الدعاء فيه مستجاب. فينبغي لمن يصلي هناك أن يقرأ سورة مريم ويسجد كما فعل عمر بن الخطاب في صلاته في محراب داوود عليه السلام وإنه صلى وقرأ ص، ويدعو في المهد بدعاء عيسى (عليه السلام)<sup>128</sup> حين رفعه الله من طور زيتا وهو: اللهم، أنت القريب في علوك المتعالي في دنوك الرفيع على كل شيء من خلقك، أنت الذي نفذ بصرك في خلقك وحسرت الأبصار دون النظر إليك وغشيت دونك وسبح لك الفلك في النور، أنت الذي جليت الظلم بنورك فتباركت. اللهم، أنت خالق الخلق بقدرتك مقدر الأمور بحكمتك، مبدع الخلق بعظمتك، القاضي في كل شيء بعلمك، الذي خلقت سبعاً في الهوى بكلماتك محتويات الطبقات مذعنات لطاعتك، سما بهن العلو بسلطانك، فأجبن وهن وخان من خوفك، فأتين طائعين لأمرك، فيهن الملائكة يستحونك ويقدمونك وجعلت فيهن نوراً يجلي الظلام وضيء أضواء من الشمس وجعلت فيهن مصائح يهتدي بهن في ظلمات البر والبحر ورجوماً للشياطين. فتباركت اللهم، في مفطور سمواتك وفيما دحوت من الأرض ودحوتها على الماء فأدلت (بها الماء الظاهر)<sup>129</sup> فدل لطاعتك وأذعن لأمرك وخضع لقولك أمواج البحار. ففجرت فيها بعد البحار الأنهار وبعد الأنهار العيون الغزار والينابيع ثم أخرجت منها الأشجار والأثمار ثم جعلت على ظهرها الجبال أوتاداً فأطاعتك أطواها فتباركت. اللهم، صفاتك ومن يبلغ صفة قدرتك ومن ينعت نعتك، تنزل العيث وتنشئ السحاب الثقيل وتك الرقاب وتقض الحق. [أ] 21. وأنت خير الفاصلين لا اله إلا أنت، إنما يخشاك من عبادك العلماء، (ونعلم)<sup>130</sup> أنك لست باله استحدثناك ولا رب لنا سواك. نذكره ولا كان لك شركاء يقضون معك فندعوهم وندعوك ولا أعانك أحد على خلقك، فنشهد فيه أشهد أنك أحد صمد لم يلد ولم يولد ولم يكن له كفراً أحد ولم يتخذ صاحبة ولا ولداً. اجعل (لي)<sup>131</sup> فرجاً ومخرجاً.

127 ب: (يسمى).

128 ناقصة في ب.

129 ب: (لها الظاهر).

130 ب: (نشهد).

131 ب: (لي من أمري).

ويظاھر المسجد في صحن الحرم من جهة الغرب مكان معقود يعرف بجامع المغاربة وهو مكان مأنوس مهيب وفيه صلاة المالكية.

أما الصخرة الشريفة، فهي في وسط المسجد على الصحن الكبير المرتفع في أرض المسجد، وعليها قبة في غاية الحسن والإتقان مرتفعة علوها من فوق الصحن أحد وخمسين ذراعاً. وعلو الصخرة من جهة القبلة سبعة أذرع وارتفاع القبة من صحن المسجد حينئذ ثمانية وخمسين ذراعاً وارتفاعها على اثني عشر عموداً من الرخام وأربعة سواربي في غاية الإحكام. والصخرة الشريفة تحت هذه القبة يحيطها درابزين من خشب ويحيط بالعمد والسواربي الحاملين للقبة درابزين من حديد. وخارج القبة سقف مستدير من الخشب المدهون المذهب على ستة عشر عموداً من الرخام وثمانية سواربي، وأرض القبة وحيطانها مبنية بالرخام باطناً وظاهراً ومنوذية بالفصوص الملونة. والبناء الذي حول القبة على التثمين وذرع دائرها من داخل مثلاً ذراع وأربعة وعشرون ذراعاً (ومن الخارج مثلاً ذراع وأربعون ذراعاً)<sup>132</sup>.

(والقدم)<sup>133</sup> الشريف في حجر منفصل عن الصخرة، محاذي لها آخر جهة الغرب من جهة القبلة على عمد من رخام.

وتحت الصخرة مغارة، من جهة القبلة يتوصل إليها بسلم حجر وعند وسط السلم صفة مسطبة متصلة به من جهة الشرق، يقف عليها الزائر لزيارة لسان الصخرة. وهناك عمود من رخام ملقى طرفه الأسفل على طرف الصفة من جهة القبلة مسنداً إلى جدار المغارة القبلي وطرفه الأعلى مسند إلى طرف الصخرة فإنه مانع لها من الميل إلى جهة القبلة. [21. ب] (وهي)<sup>134</sup> من الأماكن المأنوسة وعليه الهيبة والوقار.

والصخرة من عجائب الله في الأرض، فإنها صخرة في وسط المسجد قد انقطعت من كل جهة لا يمسكها إلا الذي يمسك السماء. إن تقع على الأرض إلا بأذنه وهي مائلة من جهة الجنوب وفي الجهة الثانية أثر أصابع الملائكة التي أمسكتها حين مالت حين ركب النبي عليه الصلاة والسلام البراق من عليها. وقد ورد في فضلها أحاديث منها عن علي بن أبي طالب مرفوعاً: سيد البقاع بيت المقدس وسيد الصخور صخرة بيت المقدس.

وعن ابن عباس مرفوعاً: صخرة بيت المقدس من الصخور الجنة.

وعن كعب: الجنة في السماء بإزاء الصخرة، ولو وقع منها حجر لوقع على الصخرة.

وعن عبادة بن الصامت ورافع بن خديج قال: إن الله عز وجل لما استوى إلى السماء قال لصخرة بيت المقدس: هذا مقامي وموضع عرشي يوم القيامة ومحشر عبادي، وهذا موضع جنتي عن يمينها وموضع نارتي عن يسارها، وفيه أنصب ميزاني أمامها، وأنا الله ديان يوم الدين. ثم استوى إلى عليين.

عن الزهري عن وهب مرفوعاً: قال الله تعالى لصخرة بيت المقدس: فيك جنتي وناري فيك جزاي وعقابي، فطوبى لمن زارك. (أو قال: طوبى لمن رآك)<sup>135</sup>.

عن أبي هريرة مرفوعاً: المياہ العذبة والرياح اللفوافح من تحت صخرة بيت المقدس على نخلة، والنخلة على نهر من أنهار الجنة وتحت النخلة أسية امرأة فرعون ومريم ابنت عمران ينظمان سموط أهل الجنة إلى يوم القيامة.

132 ناقصة في ب.

133 ب: (القدس).

134 ب: (وهو).

135 ناقصة في ب.

وعن ابن عباس مرفوعاً: الأنهار أربعة سيحان وجيحان والفرارة والذليل، وأما سيحان فنهر بلخ وأما جيحان فدجلة وأما النيل فنيل مصر وأما الفرارة ففرارة الكوفة. وكلما يشرب ابن آدم من هذه الأربعة يخرج من تحت الصخرة.

وعن كعب أنه قال: ما من نقطة من عين عذبة إلا ويخرجها من تحت صخرة بيت المقدس. وعن مكحول قال: من أتى بيت المقدس فصلى عن يمين الصخرة وعن شمالها ودعى عند موضع السلسلة وتصدق بما قل أو كثر استجيب له دعاؤه وكشف الله حزنه [22]. أ] خرج من ذنوبه كيوم ولدته أمه. وللقبلة أربعة أبواب من الجهات الأربع. فالباب القبلي مواجه للجامع المتقدم المعروف بالمسجد الأقصى. وعن يمين الداخل المحراب مقابله دكة المؤذنين على عمد من الرخام. والباب الشرقي تجاه درج البراق قبالة قبة السلسلة ويسمى باب إسرافيل. والباب الشمالي المعروف بباب الجنة عند البلاطة السوداء. والباب الغربي قبالة باب القطانين. وعلى ظاهر كل باب من الأربعة عضائد وعمد من رخام وسقف يعاوه.

فسيتحب لمن أراد الدخول إلى الصخرة أن يبدأ بالرجل اليمين قائلاً: اللهم، اغفر لي ذنوبي وافتح لي أبواب رحمتك. وإذا خرج صلى النبي صلى الله عليه وسلم ويقول: اللهم، اغفر لي ذنوبي وافتح لي أبواب فضلك. ويجعل الصخرة عن يمينه ويعقد التوبة مع الإخلاص وليضع يده عليها ولا يقبلها ويكره الصلاة على ظهرها. وإذا نزل تحتها فليكن بأدب وخشوع ويصلي ما بدأ له ويدعو بدعاء سليمان عليه السلام: اللهم، من أتاه من ذي ذنب فاغفر ذنبه، وأذي ضرراً فاكشف ضرره. اللهم، بنورك اهتديت وبفضلك استغنيت وبك أصبحت وأمسيت ذنوبي بين يديك أستغفرك وأتوب إليك. يا حنان يا منان. ويدعو بدعوات.

وردت في السنة: اللهم، إني أسألك بأن لك الحمد، لا إله إلا أنت المنان بديع السموات والأرض، يا ذا الجلال والإكرام. اللهم، إني أسألك بأنك أنت الله الأحد الصمد الذي لم يلد ويولد ولم يكن له كفراً أحد. اللهم، بعلمك الغيب وبقدرتك على الخلق أحييني ما علمت الحياة خير إليّ وتوفني ما علمت الوفاة خير إليّ، وأسألك خشيتك في الغيب والشهادة وكلمة الحق في الرضي والغضب والقصد في الفقر والغناء، وأسألك نعيماً لا ينفذ وقرة عين لا تنقطع ويرد العيش بعد الموت، وأسألك النظر إلى وجهك الكريم والشرف إلى لقيائك من غير ضراء مضرة ولا فتنة مضلة. اللهم، زينا بزينة الإيمان واجعلنا هداة مهتدين.

وينبغي أن تحت الصخرة بأدب [22. ب] وخشوع عاقداً للتوبة وليصلي ما بدأ له ويجتهد في الدعاء، فإنه موضع مقطوع بالإجابة فيه إن شاء الله تعالى.

والبلاطة السوداء عند باب الجنة وهي خضراء وأطلق عليها سوداء لأن الأخضر مظهر من بعيد أسود. فقد روي عن وهب أنها على باب من أبواب الجنة ويقال إنها على قبر سليمان. وقد روي الخضر وهو يصلي عليها. فينبغي أن يصلي عليها ويدعو بما رواه أنس، قال: كان النبي صلى الله عليه وسلم إذا صلى بأصحابه أقبل على القوم، فقال: اللهم، إني أعوذ بك من عمل يحزنني. اللهم، أني أعوذ بك من غناء يطفئني. اللهم، أني أعوذ بك من فقر ينسيني.

وقبة السلسلة قبة في غاية الظرف على صفة قبة الصخرة على سبعة عشر عموداً من الرخام خلا عمودي المحراب. يروى أنه عليه الصلاة والسلام رأى ليلة الإسراء الحور العين في مكانها. قيل كانت السلسلة آية من آيات داود عليه السلام، وكان سأل الله تعالى أن يؤتیه برهاناً يعرف به الصادق من الكاذب إذ أحكم بين اثنين من بني إسرائيل بحكم، فأنزل الله عليه سلسلة من نور معلقة في الموضع، مكان قبة السلسلة الموجودة الآن. فكان إذا حكم بحكم بعث بالخصمين إليها، فمن كان صادقاً نالها ومن كان كاذباً لم ينلها حتى وقع المكر بين الناس

مضي العدل زمان (الهدى)<sup>136</sup> وارتفع الوحي (زمان السلسلة)<sup>137</sup>

وملخص سبب ارتفاعها أن رجلاً يهودياً استودعه رجل مئة ديتار. فلما طلب الرجل وديعته جدها اليهودي وترافعا إلى السلسلة. فكان اليهودي بمكره، قد سبك الدنانير وحفر لها عصي وجعلها فيها. فلما أتى السلسلة دفع العصي إلى صاحب الدنانير وقبص على السلسلة وحلف بالله: لقد أعطاه دنانير، ثم أخذ العصي، وأقبل صاحب الدنانير وحلف أنه لم يأخذها منه، ومسّ كل منهما السلسلة فتعجب الناس من ذلك. فارتفعت السلسلة من ذلك اليوم<sup>138</sup>.

والصحن يحيط بقبة الصخرة على حكم [23. أ] التربيعة، فطوله قبلة بشام منتان وخمسة وثلاثون ذراعاً وعرضه شرقاً بغرب وتسعة وثمانون ذراعاً ويتوصل إلى هذا الصحن من صحن المسجد من عدة أماكن بكل سلم (أدرج)<sup>139</sup> من حجر على رأس السلم قناطر مرتفعة على عمد. فمن ذلك سلمان من جهة القبلة أحدهما تجاه باب المسجد الأقصى، وعلى رأسه منبر من رخام، بجانب المنبر محراب يصلي فيه في العيد والاستسقاء. والسلم الثاني يليه من جهة قبة طومار و(هي)<sup>140</sup> طرف صحن الصخرة من جهة الزيتون. من جهة الشرق سلم يعرف بدرج البراق. ومن جهة الشمال سلمان، أحدهما مقابل باب حطة والثاني مقابل باب الداوية. ومن جهة الغرب ثلاثة سلالم، أحدها مقابل الناظر والثاني مقابل باب القطانين والثالث مقابل باب السلسلة<sup>141</sup>.

وعن يمين الصخرة الشريفة من جهة الغرب، قبة المعراج مشهورة مقصودة للزيارة. إلى جانب قبة المعراج محراب لطيف محطوط في الأرض بالرخام الأحمر في دائرة على سمته بلاط الصخرة، هو مقام النبي صلى الله عليه وسلم بالأنبياء والملائكة ليلة أسري به. روي أن كعباً قال لصفية زوج النبي صلى الله عليه وسلم: يا أم المؤمنين، صلي هاهنا، فإن النبي صلى الله عليه وسلم صلى بالذبييين حين أسري به إلى السماء. ويروى من أتى القبة قاصداً وله حاجة من حوائج الدنيا والآخرة وصلى ركعتين أو أربعاً تبينت له سرعة الإجابة.

فيستحب أن يصلي عند قبة المعراج ومقام النبي صلى الله عليه وسلم ويجتهد في الدعاء، فإنهما من المواطن المجمع على إجابة الدعاء فيهم ولا باس أن يدعو بهذا الدعاء وهو: اللهم، اقم لنا من خشيتك ما تحول به بيننا وبين معاصدك ومن طاعتك ما تبلغنا به جنتك ومن اليقين ما يهون علينا مصيبات الدنيا والآخرة. اللهم، متّعنا بأسماعنا وأبصارنا وفوتنا ما أحبيبتنا واجعله الوارث منا واجعل ثارنا على من ظلمنا وانصرنا على من عادانا ولا تجعل مصيبتنا في ديننا ولا تجعل الدنيا أكبر همّنا ولا تبلغ علمنا [23. ب] ولا تسلط علينا بذنوبنا من لا يرحمنا.

وبسفل صحن الصخرة تجاه باب الحديد بجانب السلم حاصل كان قديماً يعرف بمقام الخضر. به صخرة تسمى بخ بخ سمع الخضر يصلي عليها ويدعو وهو مكان مأنوس وعلو هذا المكان في صحن الصخرة محراب يعرف بمغارة الأرواح بقصد للزيارة.

136 ب: (العلاء).

137 ب: (مع السلسلة).

138 مضافة في ب: (انتهى).

139 ب: (درج).

140 ب: (هو).

141 أضيف في ب: (فجملها ثمانية).

وفي مؤخر المسجد من جهة الشمال صخور كثيرة ظاهرة يقال إنها من زمن داود عليه السلام لأنها ثابتة في الأرض ولم يطرأ عليها ما يغيرها.

وفي تلك الجهة بالغرب من باب الدوادية قبة سليمان عليه السلام محكماً بها صخرة ثابتة، وهي التي وقف عليها بعد انتهاء بناء المسجد ودعا. فقال: اللهم، من أتاه من ذي ذنب فاغفر له، أو ذي ضرر فاكشف ضرره. فلا يأتيه أحد إلا أصاب من دعوة سليمان عليه السلام.

وتجاه باب السلسلة قبة يعرف بقبة مومي، وكانت قديماً تعرف بقية الشجرة. وفي المسجد من جهة الغرب الأروقة مبنية محكمة ممتدة من جهة القبلة إلى جهة الشمال، وأولها عند باب المغاربة (وأولها)<sup>142</sup> عند باب الناظر وفوقه إلى قرب باب الغوانمة. وفي صحن المسجد من جهة الغرب بين الأروقة و صحن الصخرة عدة محاريب على مساطب مبنية للصلاة وأشجار كثيرة. وأما الأروقة من جهة الشمال، فهي ممتدة من باب الأسباط إلى المدرسة الجاولية المعروفة بدار النيابة.

وفي المسجد من جهة الشرق بين صحن الصخرة والسور الشرقي أشجار زيتون كثيرة من عهد الروم. وعلى طرف صحن الصخرة من جهة القبلة مما يلي الشرق قبة الطومار وبجانبها خلوة تعرف بالقاشانية. وبسفل صحن الصخرة من جهة الشرق عند الزيتون زاوية البسطامية، مكان مأنوس. كان يجتمع فيه الفقراء البسطامية، وقد سد بابها. وبجانبها من جهة الشمال زاوية العمادية، وقد سد بابها كالبسطامية.

وفي المسجد أربعة وثلاثون بئراً لجمع ماء الشتاء. منها في صحن الصخرة سبعة والباقي حول صحن الصخرة من الجهات الأربع. فمنها ما له فمان ومنها ما له ثلاثة، فعدة الأفواه نيف وأربعون، ومن [24. أ] الآبار ما خرب وسد فمه<sup>143</sup>.

وذرع المسجد فطوله قبة بشام من السور القبلي عند محراب داود إلى صدر الرواق الشمالي عند باب الأسباط ستمئة وستون ذراعاً وعوضه شرقاً بغرب من السور الشرقي المطل على مقابر باب الرحمة إلى صدر الرواق الغربي الذي سفل المدرسة التنكزية أربعمئة ذراع وستة أذرع.

وفي المسجد أماكن كثيرة من محاريب وغيرها يطول وصفها وبالجملة، فإن هذا المسجد أوصافه عظيمة لا يتصورها إلا من (شاهدها)<sup>144</sup>. وهذا الذي ذكر إنما هو على سبيل التقريب ومن أعظم محاسنه. إنه إذا جلس إنسان في أي موضع منه يري أن ذلك الموضع هو أحسن المواضع وأبهجها، ولهذا قيل إن الله تعالى نظر إليه بعين الجمال ونظر إلى المسجد الحرام بعين الجلال كما نظر إلى المسجد النبوي بعين الكمال. فترى هذا المسجد في غاية البهجة والسعة والمنظر الحسن، والمسجد الحرام في غاية الأبهة والوقار والهيبة.

فصل: وبسفل المسجد من جهة القبلة مكان كبير معقود به سوارى حاملة للسقف يسمى الأقصى القديم، ولعل من أثر البناء السليمانى. وإلى جانب هذا المكان سفل المسجد تحت أشجار الزيتون مكان عظيم معقود يقال له إصطبل سليمان.

فأما المنابر فأربعة. فالأولى على مقدم المسجد من جهة القبلة على المدرسة الفخرية، والثانية على باب السلسلة على الجانب الغربي، والثالثة على مؤخر المسجد من جهة الشمال مما يلي الغرب يسمى بمأذنة

142 ب: (وأخرها).

143 مضافة في ب: (قلت: وقريباً من باب الأقصى تجاه بسلم الصخرة بركة ماء كبيرة تسمى بالكأس يأتيها الماء من جهة بيت لحم، وحولها الأشجار وهو مكان مأنوس تنشرح برويته النفوس).

144 ب: (شاهدها عياناً).

الغوانمة، (والرابعة)<sup>145</sup> على الجهة الشمالية من المسجد بين باب الأسباط وباب حطة وهي أظرفها شكلاً. وأما أبواب فأولها بابان متحدان في السور الشرقي الذي قال الله تعالى: {فضرب بينهم بسور له باب باطنه فيه الرحمة [24. ب] وظاهره من قبلة العذاب}<sup>146</sup>. فإن الوادي الذي وراءه وادي جهنم، وهما داخل الحائط مما يلي المسجد، أحدهما باب الرحمة وثانيها باب التوبة. وعن زياد بن أبي سودة قال: روى عبادة بن الصامت رضي الله (تعالى)<sup>147</sup> عنه وهو على سور بيت المقدس يبكي. فقيل له: ما يبكيك يا أبا الوليد؟ قال: هنا أخبرنا رسول الله صلى الله عليه وسلم أنه رأى جهنم. وفي رواية: أنه رأى مالكاً يقلب حجراً كالقطف. وعن ابن عباس رضي الله (عنهما)<sup>148</sup> أنه وقف على سور بيت المقدس الشرقي فقال: من هناك ينصب الصراط.

وهما من داخل الحائط مما يلي المسجد أحدهما باب الرحمة وثانيها باب التوبة، وهما الآن غير مشروعين. وعليهما من داخل السور مكان معقود بالبناء السلیماني ولم يبق بداخل المسجد من البناء السلیماني سوى هذا المكان وهو مقصود للزيارة وعليه الأبهة والوقار. ويقال إن (عمر بن الخطاب)<sup>149</sup> رضي الله عنه أغلقهما وإنهما لا يفتحان حتى ينزل عيسى بن مريم عليه السلام والذي يظهر أن سبب غلقهما خشية على المسجد والمدينة من العدو المحذول، فإنهما ينتهيان إلى البرية وليس في فتحهما كبير فائدة. وبالسور الشرقي بقرب البابين المذكورين من جهة القبلة باب لطيف سدود بالبناء مقبال درج البراق يقال إنه الباب الذئب، دخل منه النبي صلى الله عليه وسلم ليلة الإسراء ويسمى بباب الجنائز لخروجها منه قديماً.

والأبواب المشروعة للدخول أحد عشر باباً ما عدا الأبواب التي يتوصل منها إلى المسجد من المدارس (والربط)<sup>150</sup> والمنازل ثلاثة. في جهة الشمال بالأسباط نسبة لأسباط بني إسرائيل وهو في مؤخر المسجد. من جهة الشرق قريب باب الرحمة وباب حطة وهو الذي قيل لنبي إسرائيل {ادخلوا الباب سجداً وقولوا حطة نغفر لكم خطاياكم}<sup>151</sup>، فبدلوا ودخلوا [25. أ] على أستاذهم وقالوا: حبة في شعرة. باب شرف الأنبياء ولعله الذي دخل منه عمر يوم الفتح والآن يعرف بباب الدويدار. وفي الجهة الغربية ثمانية أبواب، باب الغوانمة بالغرب من منارة الغوانمة لاتصاله بحارة بني غانم ويعرف قديماً بباب الخليل. وباب الناظر يعرف قديماً بباب ميكائيل، يقال إنه الذي ربط بجبرائيل البراق ليلة الإسراء. باب الحديد وهو باب لطيف محكم. وباب القطانين لأنه ينتهي إلى سوقهم وهو باب عظيم بناؤه في غاية الإتقان. وبالقرب منه باب المتوضى، يخرج منه إلى متوضى المسجد. وباب السلسلة وباب السكينة وهما متحدان، يخرج منهما إلى الشارع الأعظم المعروف بخط سيدنا داود عليه السلام، وباب المغاربة لأنه ينتهي إلى حارة المغاربة ويسمى بباب النبي صلى الله عليه وسلم لحديث المعراج ودخل المسجد من باب تميل فيه الشمس والقمر. وليس باب بهذه الصفة ثم إلا هذا.

وأما المسجد فمن جهة القبلة والشرق ينتهي إلى البرية، فالجهة القبلية مشرفة على عين سلوان وغيرها. والجهة الشرقية مشرفة على طور زيتا ووادي جهنم وغيرها، والمنازل محيطة به من الغرب والشمال فقط. وأما في الزمن السابق فكانت المدينة محيطة به من الجهات الأربع.

وأما الأئمة المرتبون فأولهم إمام المالكية يصلي في جامع المغاربة، ثم إمام الشافعية بالجامع الأقصى، ثم

145 ناقصة في ب.

146 من القرآن 57:13.

147 ناقصة في ب.

148 ب: (عنه).

149 ب: (سيدنا عمر بن الخطاب).

150 ناقصة في ب.

151 من القرآن 2:58.

إمام الحنفية بقبة الصخرة الشريفة، ثم إمام الحنابلة بمدرسة السلطان الملك الأشرف.  
وقبله أهل بيت المقدس وما جاوره من الرملة وغزة وما والي ذلك من السواحل جهة منزاب الكعبة وحجر  
إسمائيل.

وأما ما فيه من المدارس فمنها المدارس الفارسية بداخل المسجد الأقصى بقرب بئر الورقة. [25. ب]  
والمدرسة النحوية على طرف صحن الصخرة من جهة القبلة إلى الغرب. والمدرسة الناصرية كانت على برج  
باب الرحمة ودثرت.

وأما ما حول المسجد من المدارس والزوايا، فأما المدارس والربط المجاورة للسور من جهة الغرب،  
فثلاثة عشر. أولها الخنقاة الفخرية مجاورة بجامع المغاربة من جهة الغرب وهي بداخل السور. والمدرسة  
التنكزية مدرسة عظيمة ليس في المدارس أتقن منها وهي بخط باب السلسلة. المدرسة الأشرفية الذي هي محل  
مصلي الخنايلة. والمدرسة العثمانية بباب المتوضى، والرباط الزمني بباب المتوضى تجاه المدرسة العثمانية.  
والمدرسة الخاتونية والمدرسة الأرغونية والمدرسة الجوهريّة الثلاثة بباب الحديد. ورباط كرد بباب الحديد  
بجوار السور تجاه المدرسة الأرغونية والمدرسة الجوهريّة بباب الحديد. والزوايا الوفائية بباب الناظر تجاه  
المدرسة المنجكية بباب الناظر.

وما هو من جهة الشمال فأربعة عشر، الأولى المدرسة الجاولية وفيها مدفن الشيخ درباس الكردي وكان  
رجلاً صالحاً. والمدرسة الصليبية والمدرسة الأسعردية والمدرسة الملكية فوق الرواق الشمالي بالمسجد  
الأقصى. والمدرسة الفارسية والزوايا الأمينية بباب شرف الأنبياء، (والدويدارية)<sup>152</sup> الذي سمي بها باب شرف  
الأنبياء وتعرف قديماً بدار الصالحين وهي مكان مأنوس. والمدرسة الباسطية بعضها على المدرسة الدودارية  
والتربة الأوحديّة بباب حطة. والمدرسة الكريمة بباب حطة، والمدرسة القادرية بداخل المسجد، والمدرسة  
الطولونية بداخل المسجد من الرواق الشمالي، والمدرسة العتريّة مقابلة الطولوية من جهة الشرق، والمدرسة  
الحسينية على باب الأسباط وهي آخر المدارس.

وأما الأماكن التي يتوصل منها إلى المسجد ولها أبواب خارج [26. أ] المسجد، فمنها الزوايا الخنثنية  
ودار الخطابة والفخرية والتنكزية والبلدية والرباط الزمني والخاتونية والأرغونية والوفائية والمنجكية ودار  
الشيخ جمال الدين بن غانم شيخ الحرم أحد جدودنا، وقد تولي منهم جماعة يزيدون على عشرين مشيخة  
(الحرام)<sup>153</sup>، ودار بني جماعة المجاورة لمنارة الغرائمة والمدرسة الجاولية والصليبية والأسعردية والملكية  
والأمينية والباسكية والكريمة والعتريّة.

وأما ما في المدينة من المدارس خلاف ذلك فسيأتي في الباب الذي يليه. والله الهادي للصواب.

#### الباب الرابع: في صفة مدينة القدس وما بها من المشاهد ونبذة مما حول سرادقاتها من المعاهد.

أما صفتها في عصرنا هذا، فهي مدينة عظيمة محكمة البناء بين جبال وأودية. عليها سور من جهة الغرب  
والشمال يسمى السور السليمانى من بناء السلطان أحد ملوك بني عثمان. (له أبواب المدينة مرتفع على علو

<sup>152</sup> ب: (والمدرسة الفارسية والدويدارية).

<sup>153</sup> ب: (الحرم).

وبعضه منخفض في واد<sup>154</sup> ، وغالب الأبنية التي بالأماكن المرتفعة العالية تشرف على ما هو دونها من الأماكن المنخفضة. وشوارع المدينة بعضها سهل وبعضها وعر، وهي كثيرة الآبار (لجمع الماء)<sup>155</sup> لأن ماءها يجمع من الأمطار.

أما أسواقها، فمن ذلك سوق القطانين المجاور لباب المسجد من جهة الغرب وهو سوق في غاية الارتفاع لم يوجد مثله في كثير من البلاد. وأيضاً الأسواق الثلاثة المتجاورة بالقرب من باب المحراب المعروف بباب الخليل، وهي من بناء الروم ممتدة قبلة بشام ومن بعضها إلى بعض منافذ. فالأول سوق العطارين والذي يليه وهو الأوسط لببيع الخضراوات والذي لجهة الشرق لببيع القماس. وذكر المسافرون أنهم لم يروا مثل هذه الأسواق الثلاثة في الترتيب والبناء في بلد من البلاد، وذلك من محاسن بيت المقدس.

وأما [ب. 26] شوارعها، فمنها خط داوود وهو الشارع الأعظم وابتدأه من باب السلسلة إلى باب المحراب المعروف بباب الخليل، وهذا الخط على أقسام. والسبب في تسميته بخط داوود أن سيدنا داوود عليه السلام كان له سرداب تحت الأرض من باب السلسلة إلى القلعة المعروفة بمحراب داوود وكان منزله بها. وهذا السرداب موجود وفي بعض الأوقات يكشف بعضه ويشاهد وهو أقبية معقودة بالحجارة. وخط مرزبان وفيه سوق العطارين وخلافه. وخط وادي الطواحين وفيه عدة شوارع معلومة لا حاجة لذكرها.

وأما ما في المدينة من المدارس مما هو حول المسجد غير ملاصق للصور ولكن بالقرب منه، فمن جهة الشمال المدرسة الصلاحية بباب الأسباط تعرف قديماً بصند حذّة يقال إن (فيها قبر أم مريم)<sup>156</sup> ، أنشأها الملك صلاح الدين يوسف حين فتح القدس ووقفها على السادة الشافعية. وبجوارها الحمام الذي بنته الجن لسليمان، وهو أول حمام بني. والزاوية الشيوخونية عند سويقة باب حطة، والمدرسة الكاملية بباب حطة، بجوار (التربة الأوحديّة)<sup>157</sup> والمدرسة المعظمية والزاوية المهمازية بالقرب من المعظمية من جهة الغرب، والمدرسة الوجوهية بخط درج المولى، والمدرسة المحدثية بالقرب من الوجوهية من باب الغوانمة وما هو بالقرب من المسجد من جهة الغرب، والرباط المنصوري بباب الناظر، ورباط علائ الدين البصير تجاه رباط المنصوري، والمدرسة الحسينية بباب الناظر علو رباط علائ الدين. ومقابل هذه المدرسة تربة بها ضريح يقال إنه قبر السيدة فاطمة بنت معاوية رضي الله عنهما. والمدرسة القشتمرية بباب الناظر بالقرب من الحسينية، والمدرسة السفرية بباب الناظر أوقفها الست سفري بنت شرف الدين البادردي، بالبادرديّة [أ. 27] أيضاً بالقرب من القشتمرية. والزاوية المحمدية بجوار البادرية.

من جهة الغرب الزاوية اليونسية، مقابلة للبادرية نسبة للفقراء اليونسية الجهاركسية بجوار اليونسية، أصلهما كنيسة من بناء الروم قسمت نصفين. والمدرسة الحنبلية بباب الحديد، والتربة السعدية بباب السلسلة تجاه المدرسة التنكزية وباب المدرسة. التربة الجالقية برأس درج العين بباب السلسلة، دار الحديث بجوار التربة الجالقية.

من جهة الغرب دار القرآن السلامية تجاه دار الحديث. المدرسة الطازية بخط داوود بالقرب من باب السلسلة، تربة الملك حسام الدين بركة خان مقابل المدرسة الطازية، التربة الكيلانية بجوار الطازية.

154 ب: (له أبواب وبعض بناء المدينة مرتفع على علو وبعضه منخفض في واد).

155 ناقصة في ب.

156 ب: (قبر حنة أم مريم).

157 ب: (الكريمية). ومضافة في ب: (من جهة الشمال ورباط المارديني بباب حطة مقابل الكاملية بجوار التربة الأوحديّة، والمدرسة العظيمة مقابل شرف الأنبياء، والمدرسة السلامية بباب شرف الأنبياء تجاه المعظمية).



من جهة الغرب المدرسة القشتمرية بالقرب من الكيلانية. زاوية الطواشية بحارة الشرق وتعرف قديماً بحارة الأكراد. زاوية المغاربة بأعلا حارتهم. المدرسة الأفضلية تعرف قديماً بالقبة بحارة المغاربة. وما هو من المدارس والزوايا بالقدس الشريف غير قريب من المسجد، فمنها زاوية البلاسي بظاهر القدس الشريف من جهة القبلة، نسبتها للشيخ أحمد البلاسي المدفون بها وكان من الصالحين، وقبره مشهور يقصده الزوار. زاوية الأزرق بظاهر القدس الشريف من جهة القبلة، وهي شرقي زاوية البلاسي، بها قبور جماعة، منهم الشيخ إسحاق بن الشيخ إبراهيم الأزرق. المدرسة اللؤلؤية بخط مرزبان بجوار حمام علائ الدين البصير. من جهة الشمال (المدرسة)<sup>158</sup> بخط مرزبان بالقرب من اللؤلؤية. زاوية الدركاة بجوار البيمارستان الصلاحي. زاوية الشيخ يعقوب العجمي بالقرب من القلعة وهي كنيسة من بناء الروم [27. ب] وقد اشتهرت بزواية ابن الشيخ عبد الله البغدادي لسكنه بها. مسجد الحيات وهو الذي كان فيه طلسم الحيات وهو أنه كان من لسعته حية في بيت المقدس يمكث ثلاثمئة وستين يوماً لا يخرج من البلد، فإن خرج منها قبل تمام العدة مات، وهو من القرب من القمامة وهو من المساجد العمرية. الخنقاء الصلاحية علو كنيسة قمامة. الزاوية الحمراء بالقرب من الصلاحية وتعرف قديماً بالرغلية. الزاوية اللؤلؤية بباب العمود أحد أبواب المدينة. الزاوية البسطامية بحارة المشارفة. المدرسة الميمونية عند باب الساهرة أصلها كنيسة والآن صارت من المهملات. زاوية الهنود بظاهر باب الأسباط، وهي قديمة وكانت للفقراء الرفاعية. فنزل بها طائفة من الهنود فعرفت بهم. الجراحية زاوية بظاهر القدس من جهة الشمال وبظاهرها من جهة القبلة قبور جماعة من الجاهدين القيصرية قبة محكمة. بظاهر القدس من جهة الشمال مما يلي الغرب بها قبور جماعة من الشهداء المجاهدين في سبيل الله. بظاهرها قبور جماعة أيضاً من المجاهدين.

وأما ما بالقدس من المنائر، فبالمسجد أربعة كما تقدم. وبظاهر المسجد منارة على المدرسة المعظمية، وعلى الحنقاء الصالحية منارة، وعلى المسجد الذي عند قمامة علو سجن الشرطة منارة، وعلى زاوية الدركاة منارة، وعلى مسجد ملاصق لكنيسة اليهود من جهة القبلة منارة.

وفي القدس الشريف عدة من الكنائس والديارات من زمن الروم نحو عشرين مكاناً وعمدة النصارى. منها كنيسة قمامة وإليها يحجون بزعمهم ويلبها (كنيسة)<sup>159</sup> صهيون [28. أ] المختصة بالإفرنج، ثم كنيسة المصلبة المختصة بطائفة الكوج وهي بظاهر القدس.

وأما الأبواب التي للمدينة، فعشرة. فمن جهة القبلة باب حارة المغاربة وباب صهيون المعروف الآن باب حارة اليهود. ومن جهة الغرب باب صغير يلصق دار الأرمن وباب المحراب المسمى الآن بباب الخليل وهو الذي عيسى عليه السلام يقتل عنده الدجال لأنه يسمى باب دُد أيضاً، وباب الرحمة. ومن جهة الشمال باب دير السرب، وباب العمود وباب الداعية يتوصل منه إلى حارة بني زيد، وباب الساهرة. ومن جهة الشرق باب الأسباط. وقد كان للمدينة أيضاً بابان، أحدهما عند زاوية الشيخ يعقوب العجمي وباب بحارة الطورية وقد سدا. ومن جهة الغرب القلعة وهو حصن عظيم البناء بظاهر المدينة كان قديماً سكن داود عليه السلام. وبالحصن برج داود من البناء السلیماني وبالجملة.

فبيت المقدس بناؤه في غاية الإتقان والإحكام ورؤيته من بعيد في غاية النورانية وحسن المنظر، خصوصاً إذا كان الإنسان على جبل طور زيتا وكذلك من جهة القبلة. وأما من جهة الغرب والشمال، فلا يرى

158 ب: (المدرسة البدرية).

159 ناقصة في ب.

منها من بعد إلا القليل لمواراة الجبال لها، فإن بيت المقدس وبلد سيدنا الخليل علسه السلام في جبال كثيرة الأوعار والأحجار والسير فيها يشق والمسافة بعيدة. فإن الجبال المحيطة بالبلد قرب مسافتها تقريباً ثلاثة أيام طولاً ومثلها عرضاً. فمن وصل إلى تلك البلدتين وشاهد الأنوار وحصل له الأناص والبهجة والسرور نسي ما حصل له من المشقة وإذا أنشد الحافظ ابن حجر العسقلاني حين قدومه القدس للزيارة [28. ب] في معنى ذلك:

إلى البيت المقدس قد أتينا      رجاء العفو من رب كريم  
قطعنا في محبتكم عقابا      وما بعد العقاب إلا النعيم

وأما ما حول سردقاتها من المعاهد، فمنها عين سلوان بالوادي من جهة القبلة. فعن أم عبيدة بنت خالد بن معدان عن أبيها أنه قال: زمزم وعين سلوان التي ببيت المقدس من عيون الجنة. وعنه: من أتى بيت المقدس فليأت محراب داود المشرف وليصل فيه ويسبح في عين سلوان، فإنها من الجنة. ولا يدخل الكنائس ولا يشتري فيها بيعاً، فإن الخطية فيها مثل ألف (خطية والحسنة فيها مثل ألف)<sup>160</sup> حسنة.

وبئر أيوب بالقرب من عين سلوان نسبة إلى أيوب عليه السلام التي (قال)<sup>161</sup> لنبيه أيوب: { أركض برجلك هذا مفتسل بارد وشراب }<sup>162</sup>. وهذا البئر في كل سنة عند قرّة الشتاء وكثرة الأمطار يفور منه الماء حتى يصير كالنهر الجاري ويسبح إلى مسافة بعيدة ويستمرّ على هذه الحالة عدة أيام وهذه عجيبة.

وقد كان في بيت المقدس برك من عمل حزقيل أحد ملوك بني إسرائيل ثلاثة في المدينة وثلاثة خارجها. أما التي في المدينة فبركة بني إسرائيل، فهي موجودة شمالي المسجد الأقصى يلصق السور بين باب الأسباط وباب حطة منظرها مهول من العجائب. ولعل بركة سليمان وبركة عياض هما اللتان بخط مرزبان وحرارة النصارى لحمام البصير.

وأما الذي خارجها فبركة ماملا وهي وسط مقبرة ماملا، وبركة المرجيع وهما بالقرب من قرية أرطاس، يذتفع بهما لخزن الماء الواصل من قناة السبيل إلى القدس الشريف ومسافتها عن القدس نصف برير. وبظاهر القدس الشريف [29. أ] من كل جهة كروم بها أنواع الفواكه من العنب والتين والتفاح والمشمش وغير ذلك، وأحسن الأماكن أرض البقعة.

ظاهر القدس من جهة الغرب إلى القبلة وبها قصور وأبنية محكمة البناء للنزهة والانبساط<sup>163</sup>. وشرق في بيت المقدس جبل طور زيتا وهو جبل عظيم مشرف على المسجد الأقصى. وعن أبي هريرة رضي الله تعالى عنه قال: قسم ربك بالتين والزيتون، التين مسجد دمشق والزيتون وطور زيتا. وعنه أيضاً: أقسم ربنا بأربعة أجبل. فقال: والطور والزيتون وطور سنيين وهذا البلد الأمين، والتين مسجد دمشق والزيتون طور زيتا مسجد بيت المقدس وطور سنيين حيث كلم الله موسى وهذا البلد الأمين مكة.

وقد قدمت صفة زوج النبي صلى الله عليه وسلم بيت المقدس فصلت فيه وصعدت طور زيتا فصلت وقامت على طرف الجبل وقالت: من هاهنا يتفرق الناس يوم القيامة إلى الجنة وإلى النار. وهذا الجبل على طرف الجبل الذي صعد منه عيسى عليه السلام. (هناك قبة يقال لها مصعد عيسى صلى

160 ناقصة في ب.

161 ب: (قال الله).

162 من القرآن 38:42.

163 مضافة في ب: (قلت: قد خربت تلك القصور وطوي من البسطة بساط السرور).

الله عليه وسلم<sup>164</sup> . وبطور زيتا شجرة خروب عندها مسجد لطيف تحت مغارة مأنوسة مقصودة بالزيارة تسمى خروبة (العشرة)<sup>165</sup> . وفي جبل طور زيتا كنيسة تسمى بالجسمانية خارج باب الأسباط. وبها قبر مريم عليها السلام مقصودة بالزيارة من المسلمين والنصارى. وقد دخلها عمر بن الخطاب فصلى بها ركعتين ثم ندم لقوله صلى الله عليه وسلم: هذا واد من أودية جهنم. ثم قال عمر: ما كان أغنى عمر أن يصلي في أودية جهنم. وعن كعب الأحبار: لا تأتوا كنيسة مريم وعمودين اللذين في كنيسة الطور، فإنهما طواغيت، ومن أتاهما حبط عمله. وبالقرب من قبر مريم قبة من [29. ب] بناء الروم يسمونها طرطور فرعون. وبالقرب منه بذيل الجبل أيضاً قبة أخرى من الصحن يقال لها كوفية زوجة فرعون. وقد قيل إن الأول قبر زكريا والثاني قبي يحيى عليهما السلام. ويعضد هذا القول قول بعض العلماء إن زكرياء ويحيى مدفونان ببيت المقدس بذيل جبل الطور بمقابر الأنبياء. وقيل إن قبرهما بقرية سبسطة من أرض نابلس وقيل بجامع دمشق.

وبجانب الطور من جهة الغرب بقيع يقال له الساهرة. وفي حديث ابن عمران أرض المحشر تسمى الطاهرة وهي ظاهر المدينة. من جهة الشمال فيها مقبرة يدفن فيها المسلمون وفيها جماعة من الصالحين والمقبرة مرتفعة على جبل عال. وبسفل هذا الجبل كهف من العجائب وهو زاوية داخل تحت الجبل في صخرة عظيمة تسمى بالأدهمية وتسمى مغارة الكتان. مقبرة الساهرة علو هذا الكهف بحيث لو ثقب أسفلها لظهرت الموتى فليغزو، يقال: أحياء تحت أموات. وبالزاوية قبور جماعة من الصالحين وعليها الأنس والوقار. ومقابل الساهرة من جهة القبلة تحت سور المدينة الشمالي مغارة كبيرة مستطيلة تسمى مغارة الكتان أيضاً يقال إنها تصل تحت الصخرة، ودخلها جماعة وحكوا عنها أموراً مهولة. وبكنيسة صهيون بظاهر بيت المقدس قبر داود عليه السلام، وهو مكان مأنوس مقصود للزيارة، ويقال أن قبر سليمان عليه السلام عنده. وقيل إن قبر سليمان تحت البلاطة السمراء التي بداخل باب الصخرة الشمالي.

وأما ما بظاهر المدينة من المقابر لدفن المسلمين فأولها مقبرة باب الرحمة بجوار سور المسجد الشرقي فوق وادي جهنم، وهي مأنوسة وأقرب التراب إلى المدينة. ومقبرة الساهرة وتقدم ذكرها. ومقبرة الشهداء بالقرب من مقبرة [30. أ] الساهرة إلى جهة الشرق. ومقبرة ماملا وهي بظاهر القدس من جهة الغرب وهي أكبر مقابر البلد وفيها خلق من الأعيان والعلماء والصلحاء والشهداء، يأتي ذكر بعضهم في الباب السابع، وأصلها مأمن الله وقيل باب الله وقيل زيتونة الملة. وعن الحسن قال: من دفن في بيت المقدس في زيتونة الملة فكأنما دفن في سماء الدنيا. وبوسط هذه المقبرة زاوية تسمى القندرية، بها بنية عظيمة وأصلها كنيسة تعرف بالدير الأحمر. وبالمقبرة المذكورة قبة محكمة البناء تسمى الكبكية نسبة إلى الأمير علائ الدين الكبكي المدفون في (سنة 688)<sup>166</sup> .

وبظاهر بيت المقدس عدة أماكن ومشاهد مقصودة بالزيارة يطول ذكرها. فقد روى كعب الأحبار أنه قال: في بيت المقدس من قبور الأنبياء ألف قبر. قال صاحب مثير الغرام يعني هي وما حولها. فإن ثم قبور ومعالم يرى أثرها ولا تعلم وكثير منها. قد درس وعفا لاستبلاء الإفرنج على البلاد مدة طويلة وفيما ذكر كفاية وحسبنا الله ونعم الوكيل.

164 ناقصة في ب.

165 ب: (العزة).

166 ب: (سنة 688 ثمانية وثمانين وستمئة).

## الباب الخامس: في مدينة الخليل ومسجده وذكر الخليل وفضل زيارة مشهده.

أما المدينة فاسمها حبرون وهي تجاه بيت المقدس من جهة القبلة ومنظرها في غاية الحسن والنورانية وهي مسديرة حول المسجد من الجهات الأربع وبنائها حادث بعد السور السلیماني بزمن طويل. فإنه أول من بناء حولها رجل من بني إسرائيل أدرك المسيح عيسى عليه السلام اسمه يوسف الراي، ثم تتابع البناء قليلاً قليلاً، فصار مدينة.

المسجد وسطها وصورة المسجد تشتمل على بناء مقصود من داخل السور على نحو النصف من جهة القبلة إلى جهة الشمال، وهو ثلاثة أكوار الأوسط منها مرتفع عن الآخرين. والسقف مرتفع على أربعة سواري محكمة البناء. وبالصدر تحت الكور الأعلى المحراب وبجانبه المنبر، ويقابل [30. ب] ذلك سدرة المؤذنين على عمد من رخام في غاية الحسن والرخام مستدير على حيطان المسجد من الجهات الأربع.

والقبور الشريفة بداخل السور منها تحت البناء المذكور في المغارة التي اشتراها إبراهيم الخليل عليه السلام من عفرون الملك، وذلك لما ماتت سارة طلب إبراهيم من عفرون أن يبيعه موضعاً يقبر فيه من مات من أهله. فقال له: قد أبحث لك حيث شئت من أرضي. قال: إني لا أحب إلا بالثمن. وطلب منه المغارة لأنه لما أراد إبراهيم أن يذبح العجل أنفلت منه حتى دخل مغارة حبرون، فنودي: يا إبراهيم، سلم على عظام أبيك آدم. فوقع ذلك في نفسه ثم ذبح العجل وقرّب به إلى الضيوف، وكان من شأنه ما قصد الله في كتابه. ولما أبى إبراهيم أن لا يأخذها إلا بالثمن قال له عفرون: أبيعكها بأربعمئة درهم، كل درهم وزن خمس درهم وكل درهم ضرب ملك. وأراد بذلك التشديد عليه. فأتاه جبريل بها ودفعها إلى عفرون. (فقال) <sup>167</sup>: من أين لك هذه الدراهم؟ فقال: من عند خالقي ورازقي. فأخذها منه.

وأول من دفن بها سارة عليها السلام، ثم توفي إبراهيم عليه السلام فُدفن بحداثها. ثم توفيت ربقة زوجة إسحاق فدفنت فيها، ثم توفي إسحاق عليه السلام فدفن بحيال زوجته. ثم توفي يعقوب عليه السلام فدفن عند باب المغارة، ثم توفيت ليقا زوجته فدفنت بحداثه. واجتمع أولاد يعقوب والعيص وأخوته وقالوا: ندع باب المغارة مفتوحاً وكل ماتنا دفناه فيها. فتشاجروا فرفع أحد أخوة العيص وقيل أحد أولاد يعقوب يده ولطم العيص لطمه سقط رأسه في المغارة، فحملوا جثته ودفن بغير رأس وبقي الرأس في المغارة وحوطوا عليها حائطاً وعملوا عليها علامة القبور كل في موضعه. فقبر سيدنا إسحاق إلى جانب [31. أ] السارية التي عند المنبر، ويقابله زوجته ربقة إلى جانب السارية الشرقية.

وله ثلاثة أبواب تنتهي إلى (صحن المسجد. أحدها وهو الأوسط ينتهي إلى الحضرة الشريفة الخليلية) <sup>168</sup> وهي مكان معقود والرخام مستدير على حيطانه الأربع به. إلى جهة الغرب الحجر الشريفة ويقابله من جهة الشرق قبر زوجته سارة. والباب الثاني من جهة الشرق عند باب السور السلیماني خلف قبر سارة. والباب الثالث من جهة الغرب خلف قبر إبراهيم عليه السلام.

وبآخر الساحة التي بداخل المسجد التي بداخل السور السلیماني من جهة الشمال ضريح سيدنا يعقوب عليه السلام. ويقابله من جهة الشرق قبر زوجته ليقا. وقد حدث محمد بن الخطيب بمسجد إبراهيم عليه السلام قال: قال محمد بن إسحاق النحوي: نقلت النقش المقابل بقبر ربقة زوجة إسحاق عليه السلام بحضور القاضي بن

167 ب: (فقال له).

168 ب: (الصخرة الشريفة الخليلية).

عمر وعثمان بن شاذان النحوي وعرب لأنه كان بلسان اليوناني القديم. فإذ هو: باسم إلهي واله العرش القاهر الشديد البطش. العلم الذي بحذاء هذا قبر ربة زوجة إسحاق، والذي وزانه قبر إسحاق، والعلم الأعظم الذي يوازيه قبر إبراهيم الخليل صلى الله عليه وسلم، والعلم الذي بحذاءه من الشرق (قبر)<sup>169</sup> زوجته سارة، والعلم الأقصى الموازي لقبر إبراهيم الخليل قبر يعقوب، والعلم الذي يليه من الشرق قبر ليلى زوجة يعقوب، صلوات الله وسلامه عليهم. وكتبه العيص بخطه.

وقال الحافظ ابن عساكر: قرأت في بعض كتب أصحاب الحديث ونقلتها منها. قال: محمد بن أبي بكر بن محمد الخطيب خطيب مسجد إبراهيم عليه السلام وكان قاضياً بالرملة في أيام الرازي بالله في سنة نيف وعشرين وثلاثمائة وما بعدها وله رواية في الحديث وسمع من جماعة وحدث عنه جماعة من أهل العلم، قال: سمعت محمد بن أحمد بن علي بن جعفر الأنباري [31. ب] يقول: سمعت أبا بكر الأسكافي يقول: صح عندي أن قبر إبراهيم (عليه السلام)<sup>170</sup> في الموضع الذي هو الآن فيه. لما رأيت وعانيت ذلك إني وقفت على السدنة وعلى الموضع وقوفاً كثيرة بنحو من أربعة آلاف دينار رجاء ثواب الله عز وجل، وطلبت أن أعلم صحة ذلك حتى ملكت قلوبهم بما كنت أعمل معهم من الجميل والكرامة والملاطفة والإحسان إليهم، وطلبت بذلك أن أصل إلى ما صحّ وحاك في صدري. فقلت لهم يوماً من الأيام وقد جمعتهم عندي بأجمعهم: أما لكم إن توصلوني إلى باب المغارة كي أنزل إلى الأنبياء صلوات الله وسلامه عليهم. قالوا: قد أجبتك إلى ذلك لأن لك علينا حقاً واجباً، ولكن ما يمكن في هذا الوقت لأن الطارق لنا كثير فاصبر حتى يدخل الشتاء. فلما دخل كانون الثاني خرجت إليهم. فقالوا: أقم عندنا حتى يقع الثلج. فأقام عندهم حتى وقع الثلج وانقطع الطارق عنهم. فجاؤوا إلى موضع ما بين قبر إبراهيم الخليل (وإسحاق)<sup>171</sup> عليهما السلام. فقلعوا البلاطة التي هناك، ونزل رجل منهم يقال له صعلوك وكان رجلاً صالحاً فيه خير ودين، ونزلت معه ومشى وأنا من ورأته، فنزلنا في اثنين وسبعين درجة. فإذا عن يميني دكان عظيم من حجر أسود، وإذا عليه شيخ خفيف العارضين طويل اللحية ملقى على ظهره وعليه ثوب أخضر. فقال لي صعلوك: هذا إسحاق عليه السلام. ثم سرنا غير بعيد، فإذا دكان أكبر من الأول وعليه شيخ ملقى على ظهره له شبيبة. قد أخذت ما بين منكبيه أبيض الرأس واللحية والحاجبين واشفار العينين، وتحت شبيبته ثوب أخضر قد جُلّ بدنه والرياح<sup>172</sup>. (يقال إن بها أربعون شهيداً وهو موضع مأنوس يقصد للزيارة)<sup>173</sup>.

وأما عين الماء، فعين الطواشي على باب [32. أ] مسجد الشمالي وهو أحسن المياه، وعين المسجد عند باب الطبلخانة، وعين سارة بظاهر البلد بين الكروم، وعين السمعية، وعين الحمام ومنبعها من وادي التفاح، وعين جرى عند المقبرة السفلي.

وبظاهر البلد مقابر المسلمين، فالمقبرة السفلي غربي البلد، ومقبرة تربة الرأس جهة الشرق، ومقبرة البقيع بحارة الشيخ علي البكاء، بها زاوية المدفون بها، كان مشهوراً بالصلاح والعبادة وإطعام من يجتاز به من المارة والزوار وله مكاشفات عجيبة.

وأما الكروم، فهي بظاهر البلد محيطة بها من كل جانب. وفيها أنواع الفواكه، ومعظمها العنب على صفة كروم بيت المقدس. في غالبها قصور مبنية محكمة وأهلها يقيمون بها في زمن الصيف مدة أشهر. وهي من

169 ب: (وقيل).

170 ب: (صلى الله عليه وسلم).

171 ب: (وقبر إسحاق).

172 مضافة في ب بعد هنا.

173 ناقصة في ب.

إقطاع تميم الداري الذي أقطعه له النبي صلى الله عليه وسلم حين قدم تميم وإخوته على النبي صلى الله عليه وسلم سنة 9 وأسلموا وسألوه أن يقطعهم أرضاً من الشام، فأقطعهم حبرون وما حولها وكتب لهم ذلك في قطعة أديم من حق أمير المؤمنين علي بن أبي طالب رضي الله تعالى عنه (وصورته)<sup>174</sup> : باسم الله الرحمن الرحيم، هذا ما أنطى محمد رسول الله لتميم الداري وإخوته حبرون والمرطوم وبيت عينون وبيت إبراهيم وما فيهن نطية بتّ يد منهم، ونقيت وسلّمت ذلك لهم ولأعقابهم. فمن آذاهم آذاه الله، فمن آذاهم عليه لعنه الله. شهد بذلك عتيق بن أبي قحافة وعمر بن الخطاب وعثمان بن عفان وكتب علي بن أبي طالب رضي الله عنه وشهد. [32. ب] وهذا الإقطاع مستمرّ بيد ذرية تميم يأكلونه إلى يومنا هذا، وهم مقيمون ببلد سيدنا الخليل عليه السلام، وهم طائفة كثيرة يقال لهم الدارية، وهذا ببركة النبي صلى الله عليه وسلم وقد كان تميم أميراً على بيت المقدس.

وأما ذكر الخليل وفضل زيارة مشهده، اعلم أن الله جل جلاله بفضله ومنه قدّم كرم بني آدم على سائر الخلق. فقال جل ثناؤه: {ولقد كرّمنا بني آدم}<sup>175</sup>. ثم قسمهم أقساماً ورفع بعضهم فوق بعض درجات، ففضل الأنبياء على جمع خلقه ثم زاد بعض الأنبياء تشريفاً بالرسالة، فتميزوا بها على الأنبياء ثم خص بالأفضلية من المرسلين أولى العزم وجعلهم أهل الشرائع والكتب (وجعل لهم)<sup>176</sup> بهذه المزية أخص الخصوص ورقاهم بسابق عنايته الربانية (إلى مراتب عليه. أولها)<sup>177</sup> التكريم العام، والمرتبة الثانية النبوة وناهيك بها شرفاً، والمرتبة الثالثة الرسالة، والمرتبة الرابعة أن جعلهم من أولى العزم. وأصحاب هذه المرتبة من المرسلين نالوا الكمال من ربهم بسابق علم فيهم ولقبول محله لذلك. فجملة أصحاب الشرائع، وهم أولوا العزم خمسة نوح وإبراهيم وموسى وعيسى ومحمد عليه وعليهم أفضل الصلاة والتسليم. ثم أودع سبحانه وتعالى في كل واحد من هؤلاء خصائص أكرمه الله تعالى بها، فمنهم من أكرمه بالخلّة ومنهم من أكرمه بالكلام إلي غير ذلك من الكرامات الباهرة والخصائص الظاهرة وجمع في حبيبه محمد صلى الله عليه وسلم حقيق الجميع وسرائر أهل التبليغ والتشريع، فهو الفرد الجامع البديع الرفيع.

ثم شرف بعده السيد الجليل أبا الأنبياء إبراهيم الخليل وجعله السيد الكامل والأب الفاضل ونبه سبحانه وتعالى في كتابه [33. أ] المبين على فضله وشرفه في آيات متعددة ناطقة بتعظيم رسول الله صلى الله عليه وسلم وتوقيره. فكل ما جاء من نوع (الإجلال والتعظيم)<sup>178</sup> وهو شائع في حق جميع الأنبياء. فهو من مزايا خصوصية سيدنا الخليل إبراهيم. على نبينا وعليه وعلى جميع الأنبياء والمرسلين أفضل الصلاة وأزكى التسليم. وهو من أجلهم رتبة وأعظمهم منزلة وقريبة.

وعلى ذكر فضله صلى الله عليه وسلم، أقول: نصّ الله سبحانه وتعالى في كتابه العزيز في حق رسله واجتباؤهم واصطفائهم وعظم قدرهم وشرف محلهم ما يجل عن الوصف. فربّما جمع فضلهم وشرفهم وربّما ذكر كل واحد منهم بخصوصية كما شرف السيد الخليل عليه السلام بقوله تعالى: {وأخذ الله إبراهيم خليلاً}<sup>179</sup> إلى غير ذلك مما أنزل في حقه من الآيات المخصوصة مما يزيد على ثلاثين آية. فعلى هذا التقرير يجب تعظيم الجميع وتوقيرهم سيما والدهم وإمامهم صلى الله عليه وسلم. فيتأكد تعظيمه لأن تعظيمه مزيد الإيمان به، ومزيد الإيمان به مفتاح لمزيد الإيمان بالله تعالى، ويترتّب على من اعتقد تعظيمه به ثلاث أمور منها ما هو فرض

174 ب: (وكرّم وجهه وصورته).

175 من القرآن 17:70.

176 ب: (جعلهم).

177 ب: (المرتبة الأولى).

178 ب: (الإكرام والإجلال والتعظيم).

179 ب: من القرآن 4:125.

ومنها هو ندب ومنها ما هو مستحب. فالفرض هو الإيمان به واعتقاد فضله وشرفه وتعظيمه وتوقيره وإنزال قدره الشريف من القلب من المنازل وإسناؤها.

وأما الندب فهو التأدب معه غيبةً وحضوراً، والخضوع عند سماع اسمه ونقل حديثه والتذلل عند زيارته وخفض الصوت بقبره والإمساك عن كل ما لا يجوز الشرع لأنه صلى الله عليه وسلم شاهداً له في حركاته وذلك لوجود حياته في قبره. فإن الأنبياء أحياء في قبورهم ولا ينكر حياة الأنبياء إلا الجاهل يخاف عليه سوء الخاتمة والعياذ (بالله)<sup>180</sup>.

[33. ب] وأما الاستحباب فيستحب لمن هو شاهد حضرته الشريفة أن يقصد كل يوم (مرة)<sup>181</sup> زيارته والتمثيل بحضرته والتشفع به معتقداً من فضائل هذا النبي الكريم والأب الرحيم ما جعله الله تعالى له وجعله خاصاً به عاماً بغيره، وهو النبوة والرسالة والملء والهداية والقبلة والدعوة والإمامة والإنابة والأبوة والخلة والفتوة والصلاح والرأفة والحلم والعلم والرشد والوفاء والصفاء والحياء والسخاء والاجتباء والاصطفاء (وصفاء القلب)<sup>182</sup> وكرم الخلق واستقامة الدين والرضاء والتسليم والتتميم للكلمات والخيلة واستناده البيت المعمور وارتقائه إلى السموات السبع (والذرية الكرام البررة)<sup>183</sup> وابتناء البيت الحرام والصحف والكبش في الجنة والثناء للعطر في الأولين ولسان صدق في الآخرين والسماط والسرداب والقنديل والشيبة النيرة إلى غير ذلك من فضائله التي أكرمها الله بها وجعلها إكراماً وإرشاداً لغيره وشرائع وأداباً لمن بعده. فكان أول من أظهرها وسنّها، ونفع الله تعالى بها بركة إرشاده. فله في ذلك فضيلتان، فضيلة التلبس بهن والعمل واثواب إرشاد الخلق إلى سلوك منهاجها القويم.

اعلم أن الله سبحانه وتعالى أكرم (خليله)<sup>184</sup> صلى الله عليه وسلم بكرامات معجزات دالات على جلالة قدره وعظيم فضله وعلو رتبته. منها أنه زرع نمرود عن قصره وهو في صلب أبيه، ومنها أنه نكس الأصنام وهو في بطن أمّه، ومنها طلوع نجم سعدة قبل مولده، ومنها خفة مولده، ومنها سهولة وضعه، ومنها شربه لبناً وعسلاً من أصابعه، ومنها خضوع الوحش والسباع عند رؤيته، ومنها إقرار البقرة للمحارث [34. أ] برسالته (قبل مولده)<sup>185</sup>، ومنها إقرار الوحش بنبوته، ومنها إشارة الحجل ببعثته، ومنها شهادة المرضع بصحة حجته، ومنها قلب الأعيان من الرمل بالبر الخالص بهمته، ومنها إسماع صوت نداءه بحج البيت الحرام لمن شاء الله من خليفته وهو في عالم الأرواح تحت علم الله ومشيبته، ومنها وفود الحجج كل عام من أقصى المشرق ومنتهى المغرب إلى البيت العتيق لنفود استجابة دعوته، ومنها ندب الصلاة عليه وعلى آله على كل مصل في تحيته، فلا تتم صلاة عبدٍ إلا بعد ذكر شريف اسمه واستجلاء شرف طلعتة. فهذا من أعظم خصوصيته وأجل بركته. صلى الله عليه وعلى آله وصحبه وذريته صلاة نتشرف بها في الدارين بزيارته ونحشر بها في الآخرة إن شاء الله تعالى في زمرة.

وعن أنس بن مالك رضي الله تعالى عنه قال: قال رجل للنبي صلى الله عليه وسلم: يا خير الناس. قال: ذاك أبي إبراهيم عليه السلام. وفي لفظ مسلم: أن رجلاً قال له: يا خير البرية. قال: ذاك أبي إبراهيم عليه السلام. وقد ورد في فضل زيارته آثار مما صلاته صلى الله عليه وسلم ركعتين عند قبر إبراهيم عليه السلام ليلة

180 ب: (بالله تعالى).

181 ناقصة في ب.

182 ب: (وسلامة القلب).

183 ب: (والندبة الكرام البررة).

184 ب: (خليقه).

185 ناقصة في ب.

الإسرى حين قال له جبريل: انزل فصل ركعتين فإن هاهنا قبر إبراهيم عليه السلام. وعنه عليه الصلاة والسلام إنه قال: من لم يمكنه زيارتي فليزر قبر أبي إبراهيم الخليل عليه السلام.

وعن كعب قال: من زار بيت المقدس وقصد قبر إبراهيم عليه السلام للصلاة فصلى فيه خمس صلوات ثم سأل الله عز وجل شيئاً أعطاه إياه وغفر ذنوبه كلها.

وعنه من جملة أثر: فمن حيل بينه وبين الزيارة إلى قبر رسول الله صلى الله عليه وسلم لفيجعل رحلته وإتياته إلى قبر إبراهيم عليه والسلام وليظهر الصلاة [34. ب] عليه وليكثر الدعاء عنده فإنه مستجاب ولن يتوسل به أحد إلى الله جل ثناؤه إلا لم يبرح حتى يرى الإجابة عاجلاً.

قال صاحب أنس الجليل: قلت: وهذا مما لا شك فيه، فإني جرّيته بأمر وقع لي من أمور الدنيا. فكنت أتوقع الهلاك منه فتوجهت من بيت المقدس إلى بلد سيدنا الخليل عليه السلام في ضرورة اقتضت سفري. فلما دخلت مسجده صلى الله عليه وسلم دخلت إلى الضريح المشهور أنه قبر إبراهيم، وتعلقت بأستاره ودعوت الله تعالى. فما كان بأسرع من أن فرّج الله عني كربتي ولطف بي وأزال عني كلما أزعجني فله الفضل سبحانه.

فينبغي لمن قصد زيارة سيدنا إبراهيم الخليل عليه السلام أن يظهر قلبه (من الإقلاع)<sup>186</sup> من الذنوب ويظهر قلبه بالغسل والوضوء ثم ينوي زيارته ويتوجه نحوه بعزم ورغبة ويكثر في طريقه من الصلاة على النبي صلى الله عليه وسلم وعلى سائر النبيين والمرسلين. فإذا أتى المسجد وقف يسيراً ثم يقدم رجله اليميني ويدعو بما أحبّ. فإذا دخل المسجد فليقل: بسم الله الرحمن الرحيم، اللهم، صل على محمد وافتح لي أبواب رحمتك. ثم يصلي ركعتين تحية المسجد. ثم يقصد قبر الخليل عليه السلام فيقف على باب حجرته مطرفاً رأسه. ثم يستغفر الله ويصلي على النبي (محمد)<sup>187</sup> صلى الله عليه وسلم. ثم يقول: السلام عليك أيها النبي ورحمة الله وبركاته، أشهد أن لا إله إلا الله وحده لا شريك له وأن محمداً عبده ورسوله. (وإنك عبد الله ورسوله وخليله)<sup>188</sup> جزاك الله عنا خيراً كما هو أهله. ثم يقول: صلوا الله البر الحريم والملائكة المقربين والأنبياء والمرسلين والصديقين والشهداء والصالحين من أهل السموات والأرضين عليك، يا أبا الأنبياء، يا خليل الله، وعلى ولدك [35. أ] السيد الكامل الفاتح الخاتم سيد الأولين والآخرين محمد حبيب (الله)<sup>189</sup> رب العالمين، وعلى آلكما وصحبكما كلما ذكركما الذاكرون وغفل عن ذكركما الغافلون. وأكمل العدد سبعون مرة، فإن له أثراً مجرباً وأقله ثلاث مرات ويدعو بما شاء من خير الدنيا والآخرة.

ثم يتوجه السيدة سارة ويقول: السلام عليكم أهل بيت النبوة ومعدن الرسالة، ورحمة الله وبركاته. إنما يريد الله ليذهب عنكم الرجس، أهل البيت، تطهركم تطهيراً. ثم يتوجه إلى قبر السيد إسحاق عليه السلام ويقول: السلام عليك أيها (النبي)<sup>190</sup> ورحمة الله وبركاته، يا نبي الله إنني متوجه بك إلى ربك في حوائجي لتقضي. ويدعو عنده. ثم يلتفت عن شماله (ويدعو أو)<sup>191</sup> يسلم على زوجته الجليلة ربقة ويقول: السلام عليكم يا أهل بيت النبوة والرسالة ورحمة الله وبركاته. ثم يمضي بأدب وسكون ويقصد السيد الجليل نبي الله يعقوب عليه السلام ويفعل عنده كما فعل عند أبيه إسحاق، وكذلك عند زوجته السيدة ليقا. ثم يقصد نبي الله السيد يوسف الصديق ويفعل كما فعل عند أبيه يعقوب عليهما السلام. ثم يقصد شباك الخليل إبراهيم عليه السلام التي تجاه يعقوب ويقف بالقرب

186 ب: (بالإقلاع).

187 ناقصة في ب.

188 ب: (خليله).

189 ناقصة في ب.

190 ب: (النبي الكريم).

191 ناقصة في ب.



منه ثم يسلم ويدعو الله بما شاء، فإن الدعاء هناك مستجاب. ثم يتوجه إلى الله تعالى بجميع أنبيائه خصوصاً بسيد الأولين والآخرين، ثم يمسح وجهه ويمضي مسروراً مقبولاً إن شاء الله تعالى، أمين.

وبالقرب من بلد الخليل على نحو فرسخ على جبل صغير مشرف على بحيرة زعر موضع قرابات لوط مسجد اليقين الذي كان به إبراهيم حين هلاك قوم لوط. فسمع صياح الديكة في السماء. فقال: أشهد أن هذا لهو الحق اليقين. فسمي به، وبه مرقد. قد [35. ب] غاص في الحجر نحو من ذراع. وبظاهر المسجد مغارة، بها قبر فاطمة بنت الحسين بن علي بن أبي طالب رضي الله عنهم. وبقرية كفر بريك عن مسجد الخليل نحو فرسخ قبر لوط عليه السلام. قلت: الآن تسمى قرية بني نعيم. ونقل أن في المغارة الغربية تحت حائط المسجد الغربي ستين نبياً منهم عشرون رسولاً. وبقرية سعير بالقرب من بلد الخليل قبر العيص عليه السلام بداخل مسجدها، وبه مرقد إبراهيم، قد غاص في الصخرة نحو ذراع. وبقرية جرجول على مسافة قريبة من بلد الخليل عليه السلام على طريق القدس قبر يونس عليه السلام بمسجد عليه. وبالقرب منه بقية بيت أمر قبر متى وكان رجلاً صالحاً من أهل بيت النبوة.

#### الباب السادس: في بعض ما حول بيت المقدس من القرى التي بها المآثر الرفيعة.

الذري منها بلد الخليل عليه السلام وتقدم الكلام عليها.

بالقرب من القدس بنحو ربع بريد قرية بيت لحم، حيث ولد عيسى كما في حديث الإسرى، وغالب سكانها نصارى. وبها كنيسة محكمة البناء. بها ثلاث محاريب، أحدها مرتفع إلى جهة القبلة الشريفة، والثاني إلى جهة الشرق، والثالث إلى جهة الصخرة الشريفة. وسقفها خشب مرتفع على خمسين عموداً من الرخام الأصفر الصلب، غير السواري المبنية بالأحجار. وأرضها مفروشة بالرخام. وعلى ظهر سقفها رصاص في غاية الإحكام وهي من بناء هيلانة. وفيها مكان مولد عيسى عليه السلام في مغارة في غاية الإحكام بين المحاريب الثلاث.

وبجانب الطريق بين بيت لحم وبيت جالا قبر راحيل أم يوسف عليه السلام في قبة موجهة إلى الصخرة، وهو مشهور يزار. وبقرية رامة شرقي بيت المقدس نحو ربع بريد قبر النبي شمويل عليه السلام. وبقرية العاذرية قبر [36. أ] السيد عاذر ولعله العذار بن هارون عليهما السلام وهو ظاهر في مشهد يقصد بالزيارة، ويقال إنه عاذر الذي أحياه المسيح.

وأما الأول فهو بقية عورتا من أعمال نابلس.

وبالقرب من أريحا بالغور شرقي بيت المقدس على مرحلة منه قبر سيد موسى الكليم عليه السلام بقبة معقودة بالحجارة بداخل مسجد به منارة لطيفة. وقد ظهر في هذا المكان أشياء من المعجرات، منها أن عند الضريح الذي بداخل القبة لا يزال يرى فيه (أشباح)<sup>192</sup> الوانهم مختلفة منهم صفة الراكب ومنهم صفة الماشي ومنهم من على كتفه رمح ومنهم لابس أبيض ومنهم لابس أخضر ويصافح بعضهم بعضاً وغير ذلك وللناس في ذلك أقوال مختلفة. فيقال إنهم الملائكة ويقال إنهم الصالحون وينظرهم كل الناس ولا يخفون على أحد. وإذا دخل المسجد أحد من النساء عليها حيض أو خبابة أو فعل أحد حول المسجد شيئاً من المعاصي يثور هؤلاء في تلك البرية حتى لا يرى الرجل من بجانبه وتقلع الخيام. وبه أمر غير ذلك من الخوارق الباهرات التي يشهد بها. إنه

192 ب: (خيال أشباح).

مدفون في هذا المكان صلى الله عليه وسلم.

ومنها قرية أبي ثور بالقرب من القدس عند باب الخليل وهو الشيخ الزاهد العابد المجاهد شهاب الدين أحمد القدسي اشتهر بأبي ثور لأنه حضر فتح بيت المقدس وكان يركب ثوراً ويقا تل عليه في الغزاة، فسمي بذلك. وقف عليه الملك العزيز عثمان بن صلاح الدين يوسف هذه القرية ودفن بها، وقبره ظاهر يزاره من كرامانه. كان إذا احتاج شياء من القدس كتب ورقة وعلقها في عنق ثوره ويثيره. فيأتي إلى القدس إلى حانوت رجل كان يتعاطي مصالح الشيخ فيقف عنده، فيأخذ الورقة ويقضي حاجة الشيخ ويحملها على الثور، فيرجع الثور إلى الشيخ بحاجته. [36. ب] وهذه من كرامات.

وبظاهر القدس الشريف من جهة الغرب وادي الشنور على نحو ثلاث بريد زاوية سيدي بدر (الدين)<sup>193</sup> بن محمد الحسيني، كان قطباً عارفاً متمكناً، خضعت له أولياء زمانه وهرع إليه الخاص والعام وقصد بالزيارة وزارته الوحوش والسباع ومرغت وجوهها عند باب ضريحها بالزاوية المذكورة وترددت إلى زيارة أولاده المدفونين بضريح قرية شرفات بظاهر القدس الشريف. وقد حوى هذا الضريح منهم عدة كثيرة لا تكاد تحصى مناقبهم نفعنا الله بهم.

ومنها مدينة الرملة وبينها وبين (المقدس)<sup>194</sup> ثمانية عشر ميلاً صحارى ووهاد، وهي في أرض سهلة كثيرة الأشجار والنخيل والفواكه ظاهرها حسن المنظر، قريبة من البحر الملح من جهة يافا نحو نصف بريد. وبها الجامع الأبيض وهو جامع متسع مأنوس في صحنه السماوي. مغارة تحت الأرض مهيبها، بها قبر النبي صالح عليه السلام. وبها مشهد يقصد للزيارة به قبر الفضل بن العباس بن عم رسول الله صلى الله عليه وسلم. ويقال إن بها قبر عبادة بن الصامت ولكنه درس لاستيلاء الإفرنج على تلك البلاد. وبها قبر الإمام المحدث إبي سعيد المعروف برحيم أحد أصحاب الإمام أحمد. وبها حوش بظاهر الجامع الأبيض يلصق حائطه الشرقي يقال إن به قبر الإمام الحافظ النسائي. وبحارة الياسقر قبر الشيخ أبي محمد البطاعي عليه الأناس والهيبة، والدعاء عنده مستجاب كما جرب. بحارة العناية قبر الشيخ محمد العدوي وله كرامات ظاهره. وبسوق الفاكية بمشهد قبر الشيخ أحمد الأشموني القبّي.

وفي الرملة عدة من الأولياء والعلماء والصالحين يطول ذكرهم. وبظاهر الرملة من جهة الغرب بالقرب من البحر الملح مشهد يقال إنه ضريح روبيل بن يعقوب عليهما السلام وله كان يقصد للزيارة وله في كل سنة [37. أ] موسم يجتمع به أهل تلك النواحي وغيرها. وبقرية (حرفند)<sup>195</sup> من أعمال الرملة قبر لقمان الحكيم رضي الله عنه.

ومنها مدينة أد وفي ظاهر الرملة من جهة الشرق على مسافة قريبة، منها حسنة المنظر بهجة الظاهر. بها جامع مأنوس، وبظاهرها من جهة الشرق محل به مشهد يقال إنه قبر عبد الرحمن بن عوف رضي الله عنه، مشهور عند تلك الناحية بذلك. وبشاطي البحر الملح بساحل أرسوق تجاه يافا ضريح سيدي علي بن عليل، ذو الكرامات الظاهر ينتهي نسبه إلى أمير المؤمنين عمر بن الخطاب رضي الله عنه. وأهل تلك الناحية بأمرها في خفره وبركة سره، ومن مناقبه أن الإفرنج يعتقدونه ويعترفون بصلاحه ويكشفون رؤوسهم إذا أقبلوا عليه ضريحه. وله في كل سنة موسم في الصيف يجتمع به خلق كثيرة من البلاد البعيدة والقريبة.

ومنها مدينة عسقلان، وقد كانت من أحسن المدن وقد خربها الملك صلاح الدين يوسف لأنه رأى المصلحة

193 ناقصة في ب.

194 ب: (بيت المقدس).

195 ب: (صرفند).

للمسلمين في ذلك. وبها الآن مشهد زعم الفاطميون أن به رأس الحسين بن علي. وبها أماكن على شاطئ البحر تقصد للزيارة.

ومنها مدينة غزة وهي من أحسن المدن المجاورة لبيت المقدس. وبها أكثر من الأشجار والنخيل وحولها كثر من الغراس. وبه الصالحون وفيها ولد سليمان عليه السلام. وبها موضع مقصود للزيارة يعرف بمحل مولد الإمام الشافعي. ولو لم يكن بها من الفخر إلا مولد سيدنا سليمان والإمام الشافعي بها كفاها. وبقرية بربر أقرب غزة قبر الشيخ العارف (أبو المحاسن)<sup>196</sup> يوسف البربراي أحد تلامذة السيد أحمد الملقب بالكبريت الأحمر. ومنها أريحا شرقي بيت المقدس بالقرب من نهر الأردن، وهي مدينة الجبارين المشار إليها بقوله تعالى: {ادخلوا الأرض المقدس} <sup>197</sup> وقد فتحها يوشع بن نون عليه السلام وبها جست له الشمس حتى فتحها. [37. ب] ومن عجيب الاتفاق أنها في زمن بني إسرائيل سكن الجبارين وفي زمان الإسلام مختصة بحكام الشرطة.

ومنها مدينة نابلس، وهي مقابلة بيت المقدس من جهة الشمال مسافتها عنها نحو يومين سير الأتقال. خرج منها كثير من العلماء والأعيان. وهي كثيرة الأعين والأشجار والفواكه، ومعظم الأشجار بضواحيها الزيتون. وقد قيل إن قبر سيدنا يوسف عليه السلام بالقرب من نابلس. وبمدينة نابلس مشهد يقال إنه مشهد أولاد يعقوب عليه السلام. وبضواحيها مشاهد كثيرة تنسب إلى جامعة من الأنبياء والصحابة. منها سيدنا بنيامين عليه السلام بقريّة سابية، والعاذر بقريّة عورتا، وبقرية كفر حارث قبر ذي الكفل وقبر يوشع عليهما السلام. وقيل إن محلهاما بالقبتين القريبتين من سدّطارة، وقيل قبر يوشع بالمعرة. وبقرية حطين من أعمال صفد قبر شعيب عليه السلام. وغالب قرى بيت المقدس مشحونة بقبور الأنبياء إلا أنها درست لقدم الزمان.

ويقابل مدينة نابلس من جهة القبلة جبل باعلاة، مكان مأنوس. به قبر جدنا الأعلى الشيخ غانم المقدسي التي تنسب إليه بنيه حارة الغوانمة ببيت المقدس<sup>198</sup> واتصال نسبي إليه، مصطفى أسعد اللقيمي الدميّاطي سبط العلامة محمد العنبوسي سبط العلامة عبد الرحمن بن العلامة مفتي الديار المصرية في آخر القرن العاشر المولى أبي الحسن نور الدين علي بن محمد بن محمد بن علي بن خليل بن محمد بن محمد بن إبراهيم بن موسى ابن غانم المقدسي بن علي بن الحسن بن إبراهيم بن عبد العزيز بن سعيد بن سعد بن عبادة الخزرجي الأنصاري رضي (الله) <sup>199</sup> عنه المدفون بقريّة المنيحة من أعمال دمشق كما يأتي ترجمته في الخاتمة آخر الكتاب.

**الباب السابع: [38. أ] في من دخل بيت المقدس من الأنبياء والصحابة والأعيان ومن توفي ودفن فيها من أهل العرفان.**

فأما الأنبياء فأولهم آدم عليه السلام. فعن ابن عباس قال: لما أهبط آدم إلى الأرض كان رأسه إلى السماء. قيل: وأهبط إلى الهند فخر ساجداً على صخرة بيت المقدس وإن قبره بمغار بين بيت المقدس ومسجد إبراهيم، رجلاه عند الصخرة ورأسه عند مسجد إبراهيم عليهما السلام، وبينهما عشرون ميلاً.

196 ب: (أبو الحسن).

197 من القرآن 5:21.

198 مضافة في ب: (كما تقدم).

199 ب: (الله تعالى).

نوح عليه السلام، قيل إن السفينة بالبيت الحرام أسبوعاً ثم طافت ببيت المقدس أسبوعاً ثم استوت على الجودي.

إبراهيم خليل الرحمن عليه السلام، قال أهل التاريخ: لما قدم إبراهيم عليه السلام من مصر نزل بين الرملة وإيلياء وقيل: كان بفلسطين. ولم يمت إبراهيم عليه السلام حتى بعث إسحاق إلى أرض الشام ويعقوب إلى أرض كنعان وإسماعيل إلى جرهم ولوط إلى سدوم، فكانوا أنبياء على عهد إبراهيم عليه السلام. وذهب كعب وغيره إلى أن قصة الذبيح كانت بالشام على صخرة بيت المقدس.

يعقوب عليه السلام، وهو إسرائيل الله. وعن ابن عباس: الأنبياء كلهم من بني إسرائيل إلا عشرة: نوح وهود وصالح ولوط وشعيب وإبراهيم وإسماعيل وإسحاق ويعقوب ومحمد صلوات الله وسلامه عليهم أجمعين. قيل: هو أول من بنا بيت المقدس وأورى موضعه كما تقدم.

قال وهب بن منبه: لما حضرت يعقوب الوفاة جمع ولده وولد ولده وأوصاهم وعهد إليهم وأوصى يوسف عليه السلام أن يحمل جسده حتى يقبره مع أبويه إبراهيم وإسحاق في الأرض المقدسة. فحمله يوسف على عجلة من أرض مصر حتى أورده الأرض المقدسة ووضع في موضعه الذي أمره به، ثم رجع إلى أرض مصر. وقال: والله إنه مات هو وأخوه عيص في يوم [38. ب] واحد، وكان عمر يعقوب وعيص مئة سنة وسبع وأربعين سنة.

يوسف المصديق عليه السلام، عن قتادة في قوله تعالى: {وألقوه في غيابة الجب} <sup>200</sup>، بئر في بيت المقدس في بعض نواحيها.

موسى بن عمران عليهما السلام، من ذرية يعقوب عليه السلام، كانت الصخرة قبلته. وروى الزهري أنه لم يبعث الله نبياً منذ أهبط عليه السلام إلى الأرض إلا جعله قبلته صخرة بيت المقدس، ومرّ به النبي صلى الله عليه وسلم وهو في قبره يصلي على الكتيب الأحمر. وفي لفظ الصحيحين أن موسى عليه السلام سأل الله عز وجل أن يدنيه من الأرض المقدسة رمية بحجر، وإنما سأل موسى ذلك تبركاً بالكون في تلك البقعة وليدفن مع من فيها من الأنبياء والأولياء. وعاش موسى مئة وعشرين سنة أو سبع سنة.

يوشع بن نون عليه السلام، عن أبي هريرة مرفوعاً: لم تحبس الشمس على بشر إلا ليوشع ليالي سار إلى بيت المقدس.

داود عليه السلام، كان ببيت المقدس وكان فيها دار ملكه. وقد تقدم أنه شرع في بنائه ولم يتمه. وكان له فيه من الأعمال الصالحة والمواعظ النافعة عند قراءة الزبور ما هو في الكتب المطولات مسطور. وقبره في كنيسة صهيون.

وعن أبي الدرداء مرفوعاً قال: قال داود عليه السلام: ربّ، أسألك حبك وحب من يحبك والعمل الذي

<sup>200</sup> من القرآن 12:10.

يبلغني حبك. ربّ، اجعل حبك أحب إليّ من نفسي ومن أهلي ومن مالي ومن الماء البارد.  
وعن عبد الله بن الحارث قال: أوحى الله تعالى إلى داود عليه السلام أن أذكرني وأحبني وأحب أحبائي  
وحببني إلى عبادي. قال: يا ربّ، كيف أحببك إلى عبادك؟ قال: أذكرني عندهم. فإنهم لا يذكرون مني إلا الحسن.  
وعن ابن عباس رضي الله عنه قال: أوحى الله تعالى [39. أ] إلى داود عليه السلام أن قل للظلمة لا  
يذكروني، فإن أذكر من ذكرني وإن ذكرني إياهم أن ألعنهم. فأقول إلا لعنة الله على الظالمين.

**سليمان** عليه السلام، تقدم أنه لما فرغ من بناء المسجد سأل الله خلافاً ثلاثاً. قيل إنه دعا على الصخور  
التي في مؤخر المسجد مما يلي باب الأسباط وكان عليه السلام إذا دخل بيت المقدس وهو ملك الأرض يقلب  
بصرة إلى أين يجلس وكان يولى المساكين والحرص والمجذومين فيدع الناس ويجلس معهم تواضعاً لا يرفع  
رأسه إلى السماء ويقول: مسكيم مع المساكين.

**شعيب** عليه السلام، وهو الذي بشر بعيسى ومحمد صلى الله عليه وسلم ولما قتله بني إسرائيل سلط الله  
عليهم عدوهم فشرّدهم وأفناهم.

وأقام الشام خراباً سبعين سنة ليس فيها غير السامرة والملك لأهل بابل. إرميا عليه السلام بعثه الله إلى  
بني إسرائيل، انقضوا التوبة فضرّبوه وقيدوه. فبعث الله عليهم بخت نصر فقتل منهم وخرق وسبى الذراري  
وخرّب بيت المقدس. وخرج إرميا إلى مصر، فأقام بها، ثم أمره الله بالعود إلى إيلياء. فلما أشرف على خراب  
بيت المقدس {قال أني يحيي هذه الله بعد موتها} <sup>201</sup>، فأماته الله مئة عام ثم أحياه بعد أن عمر بيت المقدس.  
قيل إن الذي {مرّ على القرية}، هو عزير ولم يكن نبياً وكان ممن سباهم بخت نصر. فلما عاد عزير إلى  
بيت المقدس أقام لنبي إسرائيل التوراة من حفظه بعد أن أحرقت وكان من علمائهم.

**زكريا** عليه السلام، لما مات عمران كفل زكريا مريم وكان متزوجاً بخالتها وولد له يحيي عليه السلام،  
وولدت مريم عيسى بعد يحيي بثلاث سنين، وقيل ستة أشهر. فاتهم بنوا إسرائيل زكريا بمريم فهرب منهم ودخل  
[39. ب] في جوف شجرة. فوضع على الشجرة المنشار فقطع نصفين. فلما وضع المنشار على ظهره أن فأوحى  
الله سبحانه وتعالى إليه: أما أن تكف أنيتك وأما أن أقلب الأرض ومن عليها. مسكت حتى قطع نصفين.

يحيي بن زكريا عليه السلام وابن خالة عيسى. قال الله تعالى في حقه {مصدقاً بكلمة من الله وسيداً  
وحصوراً} <sup>202</sup>، وهو أول من صدق بعيسى وهو ابن ثلاث سنين والحصور من لا يأتي النساء مع القدرة. قيل:  
العنين. وعن عمرو بن العاص مورفوعاً: كل ابن آدم يأتي يوم القيامة وله ذنب إلا يحيي بن زكريا. ثم أخذ  
رسول الله صلى الله عليه وسلم نت الأرض عوداً صغيراً فقال: وذلك إنه لم يكن له ما للرجل إلا مثل هذا العود  
ولذلك سماه سيّداً حصوراً.

وعن عبد الله بن عمر قال: دخل يحيي بن زكريا بيت المقدس وهو ابن ثمان حجج. نظر أهل بيت المقدس

<sup>201</sup> من القرآن 2:259.

<sup>202</sup> من القرآن 3:39.

وقد لبسوا مدارع الشعر وبرانس الصوف ونظر إلى مجتهديهـم. فأتى إليه أبويه فسألهما أن يدرعاـه الشعر ففعلا، ثم رجع إلى بيت المقدس وكان يخدم فيها نهـاراً ويسبح ويصلي ليلاً حتى أتت إلى خمس وعشرين سنة. فذكر سياحته وجلوسه على بحيرة الأردن، وقد نقع عليه قدماه في الماء من العطش وكاد أن يذبحه وقال الله تعالى: وعزتـك لا أذوق بارد الشراب حتى أعلم أين مصيري إلى الجنة أم إلى النار. فبكى أبواه وسألاه أن يأكل قرصاً من شعير كان معهما ويشرب من ذلك الماء. فرق لهما وفعل وكفر عن يمينه. فذكره الله بالبر، فقال: وبراً بوالديه. فردّه أبواه إلى بيت المقدس. فكان إذا كان في صلاته يبكي زكريا لبكائه حتى يغمي عليه، ويبكي أهل المنازل ومن كان من العباد حولهما لبكائهما. فلم يزل كذلك حتى خرقت دموعه خديه، فاتخذت [40. أ] أمه قطعتين من لبد وألصقتهما على خديه تستنقع دموعه. إذا بكى في القطعتين فتقوم أمه فتعصرهما وكان يحيي إذا نظر إلى دموعه تجري على ذراعي أمه قال: هذه دموعي وهذه أمي وأنا عبدك وأنت أرحم الراحمين.

قيل إنه أفتي في امرأة أب لا تحل لابن، فضربت رقبتـه لذلك وكان رأسه بعد أن انقطع يقول: لا تحل لها ولا تحل لك.

وروي أنه ما بكت السماء على أحد إلا على يحيي بن زكريا والحسين بن علي عليهما السلام وحمـرتها بكأوها. وعن ابن عباس قال: أوحى الله عز وجل إلى محمد صلى الله عليه وسلم إنـي قتلت يحيي بن زكريا سبعين ألفاً وإنـي قاتل بابن بنتك سبعين ألفاً.

**عيسى عليه السلام**، جاء في حديث المعراج أن النبي صلى الله عليه وسلم صلى تلك الليلة حيث ولد عيسى. وعن مجاهد: قالت مريم عليها السلام: إذا خلوت حدثني عيسى وحدثته. وإذا كان عندي إنسان سمعت تسبيحه في بطني.

وكان عبد الله بن عمرو بن العاص يبعث بزيت يسرج في بيت لحم حيث ولد عيسى عليه السلام. وقد ختن عيسى ثامن يوم ولادته على سنة موسى عليه السلام وهربت به أمه إلى مصر. فأقام بها اثني عشر سنة إلى أن رحبت به إلى الشام. فلما بلغ ثلاثين سنة جاءه الوحي. ورفع من جبل بيت المقدس ليلة القدر. وعن معروف الكرخي قال: اجتمع اليهود على قتل عيسى بن مريم عليه السلام فأهبط الله جبريل في باطن جناحه مكتوب: اللهم، إنـي أدعوك باسمك الأحد عز وأدعوك. اللهم، باسمك الأحد الصمد وأدعوك. اللهم، باسمك العظيم الوتر وأدعوك. اللهم، باسمك الكبير المتعال ملك الأكوان كلها أن تكشف (عني)<sup>203</sup> ضر ما أصيبت وأمسيت فيه. وأوحى الله إلى جبريل أن أرفع عبدي إليّ. وقال النبي صلى الله عليه وسلم لأصحابه: [40. ب] عليكم بهذا الدعاء ولا تستبظوا الإجابة، فإنما عند الله خير وأبقي للدين أمنوا وعلى ربهم يتوكلون.

(مواعظه)<sup>204</sup> : كان يقول: لا تمنع العلم من أهله فتندم ولا تنشره عند (غير أهله)<sup>205</sup> فتجهل وكن طبيبياً رفيعاً يضع دواوه حيث يعلم أنه ينفع. وقال من سره أن يكون موقناً فلا يجمعن لغده. فإن من جمع شيئاً بالأمل حال دونه الأجل ويحاسب بالفضل ويأكل كسرة غيره هنياً. وعنه: لا تكثروا الكلام بغير ذكر الله، فتقسي قلوبكم وإن كانت لينة. فإن كان القلب قاسي بعيد من الله ولكن لا تعلمون. ولا تنظروا في ذنوب الناس كهيبة الأرباب وانظروا في ذنوب أنفسكم كهيبة العبيد، فإنما الناس مبتلى ومعافاً فاحمدوه على العافية وارجنوا المبتلى. وعنه قال لأصحابه: اتخذوا المساجد مساكن والبيوت منازل وكلوا من بقل البرية وأنجوا من الدنيا بسلام وكان يقول:

203 ناقصة في ب.

204 ب: (موعظه).

205 ب: (غيره).

يا بني أسرائيل، اتخذوا مساجد الله بيوتاً واتخذوا بيوتكم منازل للضيغان، ما لكم في المعالم من منازل إلا عابري سبيل. وكان يقول لأصحابه: لحق أقول لكم، حب الدنيا رأس كل خطيئة وبالنظرة ترزع الشهرة في القلب وكفى بها خطيئة.

**الخضر** عليه السلام المختار أنه نبي وأنه حي وسيأتي الكلام عليه.

**مريم الصديقة** عليها السلام، موضع متعبدها المحل المعروف بالمهد بمسجد بيت المقدس، وقبرها بالكنيسة المعروفة بالجسمانية.

**محمد** صلى الله عليه وسلم دخله ليلة الإسراء وصلى فيه بالأنبياء ورأى فيه الحور العين كما تقدم.

**المهدي الذي يكون في آخر الزمان.** عن ابن سعيد الخدري مرفوعاً قال: ينزل بأمتي آخر الزمان بلاء شديد من سلطانهم لم يسمع الناس بلاء أشد منه حتى تضيق عليهم الأرض الرحبة وحتى [41. أ] (يعلوا الأرض)<sup>206</sup> جوراً وظلماً، (ثم إن الله يبعث رجلاً يملأ الأرض قسطاً وعدلاً كما ملئت جوراً وظلماً)<sup>207</sup>، يرضى ساكن السماء (والأرض)<sup>208</sup> لا تدخر الأرض من بذرها شيئاً إلا أخرجته ولا السماء من قطرها شيئاً إلا صبه الله عليهم مدراراً يعيش فيهم سبع سنين أو ثمان أو تسع يتمنى الأحياء الأمرات بما صنع الله بأهل الأرض من الخير. وعن محمد بن الحنفية قال: تخرج رأيات سود لبني العباس وتخرج (من أخرى سود)<sup>209</sup> وثيابهم بيض، على مقدمتهم رجل يقال له شعيب بن صالح مولى بني تميم يهزمون أصحاب السفيناني حتى (ينزلون)<sup>210</sup> بيت المقدس. يوطئ للمهدي سلطانه ويفد من الشام ويكون بين خروجه وبين أن يسلم إليه الأمر ثلاثة وسبعون شهراً. وعن سليمان بن عيسى قال: بلغني أنه على يد المهدي يظهر تابوت السكينة من بحيرة طبرية فيحمل فيوضع بين يديه في بيت المقدس. فإذا نظرت إليه اليهود أسلمت إلا قليلاً منهم ثم يموت المهدي.

وأما الصحابة رضي الله عنهم، فمنهم **عمر بن الخطاب** رضي الله عنه. قدم الشام أربع مرات ودخل بيت المقدس حال الصلح كما تقدم.

**أبو عبيدة بن الجراح** رضي الله عنه، تقدم أنه دخل بيت المقدس أميراً على الجيش الذي جهزه عمر بن الخطاب وإنه كتب إلى عمر واستدعاه للصلح فحضر وفتح بيت المقدس صلحاً. مات في طاعون عمواس ودفن بقرية عمّا تحت جبل علجون بين قفارس والعدالية. بزوايه دير علي من الغور الغربي. وقبره ظاهر مقصود بالزيارة.

206 ب: (على الأرض).

207 ناقصة في ب.

208 ب: (وساكن الأرض).

209 ب: (من خراسان أخرى سود).

210 ب: (ينزل).

**معاذ بن جبل** رضي الله عنه، تقدم في الباب الأول أنه أتى بيت المقدس وأقام ثلاث أيام بلياليها يصلي ويصوم. استخلفه أبو عبيدة حين خضرته الوفاة. فمات بعده بالطاعون بناحية الأردن وقبره ظاهر مقصود بالزيارة بالقصر الذي من الغور. قال صاحب [41. ب] اتحاف الأخصاء: وقد زرته مراراً وأنزلت بي أمور مهمة وتوسلت إلى الله تعالى به فيها، فرأيت أثر الإجابة فيها ببركته وبركة صحبته (رضي الله عنه)<sup>211</sup>.

**بلال بن رباح** مؤذن رسول الله صلى الله عليه وسلم رضي الله عنه، شهد فتح بيت المقدس مع عمر بن الخطاب، ولم يؤذن بعد رسول الله صلى الله عليه وسلم سوى مرة واحدة لما أمره عمر بالأذان بعد الفتح كما تقدم. توفي بدمشق وقبره عند الباب الصغير.

**عياض بن غانم بن عم أبي عبيدة** رضي الله عنه، دخل بيت المقدس وبنى بها خياماً<sup>212</sup>. له روايته عن النبي صلى الله عليه وسلم.

**خالد بن الوليد** رضي الله عنه، دخل بيت المقدس وشهد فتح دمشق وتوفي بحمص (وتوفي بها)<sup>213</sup> وقبره بها ظاهر يزار.

**أبو ذرّ الغفاري** رضي الله عنه، دخل بيت المقدس وتوفي بالربيعة. روى الإمام أحمد في مسنده عن الأحنف بن قيس قال: دخلت بيت المقدس فرأيت رجلاً يكثر الركوع والسجود، فوجدت في نفسي من ذلك شيئاً. فلما انصرف قلت: أتدري على شفع انصرفت أم على وتر؟ أما أنا لا أدري. أخبرني حبيبي أبو القاسم صلى الله عليه وسلم ثم بكى ما من عبد سجد لله سجدة إلا رفع الله له بها درجة وحط عنه سيئة وكتب له بها حسنة. قال: قلت: أخبرني من أنت يرحمك الله؟ قال: أبو ذرّ صاحب رسول الله صلى الله عليه وسلم. فتقاصرت إليّ نفسي.

**أبو الدرداء عويز** رضي الله تعالى عنه، قدم بيت المقدس وتوفي بدمشق في خلافة عثمان.

**عبادة بن الصامت** رضي الله تعالى عنه، وجّهه عمر إلى الشام قاضياً ومعلماً. فأقام بحمص ثم انتقل إلى فلسطين وهو أول من ولي قضاءها وسكن بيت المقدس، وتوفي بها. وقيل بالرملة. (والآن قبره لا يعرف [42. أ] لاندراسه باستلاء الفرنج سابقاً على البلاد)<sup>214</sup>.

**سليمان الفارسي** رضي الله عنه، دخل بيت المقدس ومات في خلافة عثمان بالمداين. وما قيل إنه عاش ثلاثمئة وخمسين سنة، ليس بالقوى وما أراد بلغ المئة.

**أبو مسعود البديري** رضي الله عنه، سكن بديراً ولم يشهدها. حكي أنه دخل بيت المقدس فتبعه ناسٌ. فقال:

211 ناقصة في ب.

212 ب: (جياماً).

213 ناقصة في ب.

214 ناقصة في ب.



سمعت رسول الله صلى الله عليه وسلم يقول: ما من عبد يلقى الله لا شريك به شيئاً ولا يتندا بدم حرام إلا دخل من أي أبواب الجنة شاء.

**تميم الداري رضي الله عنه** قدم هو وأخوه نعيم على رسول الله صلى الله عليه وسلم سنة تسع وأسلما وصحابه وغزا معه، ولم يزل بالمدينة حتى تحول إلى الشام بعد أن قتل عثمان وكان أميراً على بيت المقدس وهو الذي أقطعه رسول الله صلى الله عليه وسلم أرض حبرون كما تقدم، وهو أول من أسرج بالمساجد كما رواه ابن ماجه. توفي سنة أربعين وقبره بالقرب من قرية من قرى الشام يقال لها الكسوة.

**عمرو بن العاص رضي الله تعالى عنه**، دخل بيت المقدس. وعن أبي قبيصة بن جابر قال: صحبت عمر بن الخطاب، فما رأيت رجلاً أقرأ لكتاب الله ولا أنقم لدين الله ولا أحسن مداراة منه. وصحبت طلحة بن عبد الله، فما رأيت رجلاً أوسع حلماً منه. وصحبت عمرو بن العاص، فما رأيت رجلاً أغض طرفاً ولا أكرم جليساً ولا أشبه سره بعلانيته منه. وصحبت المغيرة بن شعبه، فلو أنّ مدينة لها ثمانية أبواب لا يخرج منها إلا بالكرم يخرج من أبوابها كلها.

**عبد الله بن سلام رضي الله عنه**، من خواص الصحابة الإمام الحبر الإسرائيلي المشهود له بالجنة. شهد فتح بيت المقدس. وتوفي سنة ثلاث وأربعين.

**سعيد بن زيد رضي الله عنه**، أحد العشرة المشهود [42. ب] لهم بالجنة. قدم بيت المقدس وتوفي بالعقيق، وقيل بالكوفة.

**سعد بن أبي وقاص رضي الله تعالى عنه**، قدم بيت المقدس وأحرم منه بعمره. روي أنه قال: ما بكيت من الدهر إلا ثلاثة أيام، يوم قيض رسول الله صلى الله عليه وسلم، وقتل عثمان بن عفان، واليوم أبكي على الحق فعلى الحق السلام. توفي بالعقيق وحمل إلى المدينة فصرى عليه أزواج النبي صلى الله عليه وسلم في حجرهن، دفن بالبقيع.

**شداد بن أوص بن أخي حسان بن ثابت**، كان ممن أوتي العلم والحلم. روي أنه لما دنت وفاة رسول الله صلى الله عليه وسلم قام ثم جلس ثم قام ثم جلس. فقال رسول الله صلى الله عليه وسلم: يا شداد، ما سبب قلقك؟ فقال: يا رسول الله، ضاقت بي الأرض. فقال رسول الله صلى الله عليه وسلم: ألا إن الشام ستفتح (لك) <sup>215</sup> وبيت المقدس ستفتح إن شاء (الله) <sup>216</sup>، وتكون أنت وولدك من بعدك أئمة بها إن شاء الله تعالى. فكان كما أخبره صلى الله عليه وسلم. وكان ذا عبادة واجتهاد، نزل بالشام ناحية فلسطين. وتوفي ببيت المقدس وقبره ظاهر يزار في مقبرة باب الرحمة تحت سور المسجد الأقصى.

215 ناقصة في ب.  
216 ب: (الله تعالى).

أبو هريرة رضي الله عنه، قدم بيت المقدس وشهد فتحه. توفي بالمدينة وليس هو المدفون بقريّة يبني (في مقابلة غزة)<sup>217</sup> وإنما هو بعض ولده.

معاوية بن أبي سفيان رضي الله عنه، قدم بيت المقدس وقدم (عليه)<sup>218</sup> عمرو بن العاص فبايعه على طلب دم عثمان الشام كله. فكانت ولايته على الشام أميراً عشرين سنة. وتوفي سنة ستين بدمشق ودفن بمقبرتها.

عبد الله بن عمرو بن العاص رضي الله تعالى عنهما، قدم [43. أ] إلى بيت المقدس في مبايعة معاوية مع أبيه، ودخل بيت لحم فصلى فيه وأمر بزيت لإيقادها. كان يقرأ القرآن والتوراة ويصوم يوماً ويفطر يوماً.

عبد الله بن عباس رضي الله عنه، دعا له النبي صلى الله عليه وسلم فقال: اللهم، فقّهه في الدين وعلمه سنن التأويل وكان يسمى الحبر لكثرة علومه. قدم بيت المقدس وأهل منه في الشتاء وتوفي بالطائف بقريّة يقال لها السلامة وقبره ظاهر بها.

عبد الله بن عمر رضي الله تعالى عنهما عام بيت المقدس عام الحكّمين بعد صلاة الصبح فجلس في المسجد حتى إذا طلعت الشمس فقام وصلى ركعات ومن معه ثم قعدوا على رواحلهم ولم يأتوا الصخرة ولم ينتظروا الجماعة وأهل منه ابن عمر بعمره.

عوف بن مالك الأشجعي رضي الله عنه، شهد فتح بيت المقدس ونزل بحمص بايع رسول الله صلى الله عليه وسلم على أن يعبد الله لا يشرك به شيئاً والصلوات الخمس وأن لا يسأل الناس شيئاً.

أبو جمعة الأنصاري رضي الله عنه، قدم بيت المقدس ليصلي فيه. مات بالشام.

واثلة بن الأشفع رضي الله عنه، من أهل الصنعة سكن البصرة ثم الشام، وشهد المغازي بدمشق وحمص ثم تحول إلى بيت المقدس ومات به، وقيل بدمشق.

أبو أمامة الباهلي رضي الله تعالى عنه، شهد حجة الوداع وسكن الشام وبيت المقدس وهو آخر الصحابة موتاً بالشام.

محمود بن الربيع رضي الله عنه، ختن عبادة بن الصامت. زعم أنه أدرك النبي صلى الله عليه وسلم وهو ابن خمس سنين، وأنه عقل مجة مجها رسول الله صلى الله عليه وسلم في وجهه. نزل بيت المقدس وأهل منه بحج وعمره.

217 ب: (الذي في مقابلة غزة).  
218 ناقصة في ب.

مزيد بن سفيان رضي الله تعالى عنه، بعثه أبو بكر رضي الله تعالى عنه إلى الشام وكان على جند من الأجناد [43. ب] (المتقدمة)<sup>219</sup> ولما مات أمر عمر مكانه أخاه معاوية كما تقدم.

أبو ريحانة مولى رسول الله صلى الله عليه وسلم، كانت ريحانة ابنته تحت رسول الله صلى الله عليه وسلم. سكن بيت المقدس ومات بها وكان يعظ بالمسجد الأقصى.

الشريد بن الشريد رضي الله تعالى عنه، قدم بيت المقدس لأنه نذر أن يصلي فيه إن فتح الله مكة على رسول الله صلى الله عليه وسلم واستأذنه في ذلك فأذن له.

عبد الله بن أبي الجدعاء رضي الله تعالى عنه، سكن بها ويقال إن قبره بها. وعن عبد الله بن شقيق قال: كنت مع رهط بإبلياء فقال رجل منهم: سمعت رسول الله صلى الله عليه وسلم يقول: يدخل الجنة بشفاعه رجل من أمتي أكثر من بني تميم. قيل: يا رسول الله، سواك؟ قال: سواي. فلما قدم قلت من هذا قال ابن أبي الجدعاء. رواه الترمذي.

فيروز الديلمي رضي الله عنه، من (الذين)<sup>220</sup> بعثهم كسرى إلى اليمن فقبضوا الحبشة منها وغلبوا عليها. سكن بيت المقدس ويقال إن قبره بها.

ذو الأصابع التميمي، سكن بيت المقدس من المدد الذين نزلوا الشام ببيت المقدس ومات بها.

أبو محمد البجاري بالجيم رضي (الله)<sup>221</sup> عنه، وهو الذي زعم أن الوتر واجب. مات في خلافة عمر. وقيل شهد صفين مع علي رضي الله تعالى عنهم، سكن بيت المقدس ومات بها.

أبو أبي بن أم حرام رضي (الله)<sup>222</sup> عنه، سكن بيت المقدس. كان ربيب عبادة بن الصامت، وهو آخر الصحابة موتاً ببيت المقدس.

عصيف بن الحارث رضي الله تعالى عنه، قدم بيت المقدس هو وأهله فصلى فيه جماعة.

صفية بنت حيي أم المؤمنين رضي الله تعالى عنها، قدمت بيت المقدس فصلت فيه وصعدت طور زيتا وصلت به وقامت على طرف [44. أ] الجبل، فقالت: من هاهنا يتفرق الناس يوم القيامة إلى الجنة والنار. توفيت بالمدينة ودفنت بالبقيع.

219 ب: (المنفذة).

220 ب: (الذي).

221 ب: (الله تعالى).

222 ب: (الله تعالى).

وأما التابعين، فمنهم **أويس القرني** صح أن رسول الله صلى الله عليه وسلم أنه أمر عمر أن يسأله أن يستغفر لهم. وقيل: اجتمع به عمر ببيت المقدس، وقيل: لقيه بالموسم فقال لعمر: حججت واعتمرت وصليت في مسجد رسول الله صلى الله عليه وسلم ووددت لو إني صليت في المسجد الأقصى. فجهّزه عمر فأحسن جهازه وأتى المسجد الأقصى فصلى فيه. ثم أتى الكوفة فخرج غازياً إلى ثغر أرمينية، فأصابه البطن فالتجأ إلى أهل خيمة. فمات عندهم ومعه جراب وقعب. فقالوا لرجلين منهم، اذهبا فافحرا له قبراً، قالوا: فنظرنا في جرابه. فإذا فيه ثوبان ليسا من ثياب الدنيا وجاء الرجلان فقالا: أصبنا قبراً محفوراً في صخرة كما رفعت عنه الأيدي الساعة فكفوناه ثم دفنوه ثم التفتوا. فلم يروا شيئاً ويقال: فقد بصقّين. وقيل: مات بدمشق ودفن بها.

**عبيد**، عامل عمر على بيت المقدس. لما وقع الطاعون في بيت المقدس جعلت الجناز تغسل وهو يصلي عليها ولا يحمل الجناز إلا الشباب.

(يعلى) <sup>223</sup> بن سعد، استعمله عمر بن الخطاب على حمص.

(عمير) <sup>224</sup> بن شداد، حضر بيت المقدس.

**أبو نعيم** (المؤذن) <sup>225</sup> من أذن ببيت المقدس وصلى خلفه عبادة بن الصامت الصبح.

**أبو الزبير المؤذن** ببيت المقدس، قال: جاءنا عمر فقال: إذا أذنت فترسل، إذا أقيمت فاجزم. وفي رواية: فاجدر.

**أبو سلام الحبشي**، كان يقدم بيت المقدس ويقرأ على عبادة بن الصامت ويروي عنه. قال: كنت إذا قدمت بيت المقدس نزلت على عبادة بن الصامت. فأتيته يوماً منزله فلم أجده. فأتيته المسجد فوجدته وكعباً جالساً. فقال كعب إذا كانت سنة [44. ب] ستين: فمن كان له مال فليجمعه، ومن كان له امرأة فليطلقها، ومن كان عزباً فلا يتزوج. فإنه لا خير في مولود يولد بعد ذلك. وانتقل أبو سلام من حمص إلى دمشق وقال: البركة تضاعفت فيها مرتين.

**أبو جعفر الجرشى**، روي عنه قال: دخلت مع عبادة بن الصامت المسجد مسجد بيت المقدس. فرأى رجلاً يصلي واضعاً نعله عن يمينه أو شماله فقال: لو لا أنك تناجي ربك لعلوت رأسك بهذه العصي، تفعل كفعل أهل الكتاب.

**خالد بن معدان الكلاعي**، كان يسبح في اليوم أربعين ألف تسبيحة. أتى بيت المقدس ونزل منه على ستة أميال ولم يصل فيه خمس صلوات.

223 ب: (عمير).

224 ب: (يعلى).

225 ب: (المؤذن أول).

أم الدرداء هجيمة، قالت: طلبت العبادة فما رأيت أشفى من مجالسة العلماء ومذاكرتهم. وكانت معها نساء (يتعبدن) 226. فإذا (تضعفن) 227 عن القيام تعلقن (بالجبال) 228. وكانت تأتي من دمشق إلى بيت المقدس. فإذا مرت بالجبال قال لقائدها: أسمع الجبال ما وعدها ربها، فيقرأ: {ويسألونك عن الجبال فقل ينسفها ربي نسفاً. فيذرهما قاعاً صفصفاً لا ترى فيها عوحباً ولا أمناً} 229، {ويوم نسير الجبال وترى الأرض بارزة وحشرناهم فلم نغادر منهم أحداً} 230. وكانت تجالس المساكين ببيت المقدس وتقيم به نصف سنة وبدمشق نصف سنة.

أبو العوام مؤذن بيت المقدس، روي عن عبد الله بن عمرو بن العاص أن السور المذكور في القرآن هو سور بيت المقدس.

قبيضة بن ذويب، عبد الرحمن بن محيريز، هاني بن كلثوم، كل هؤلاء عبّاد زهّاد. قبيضة كان عالماً ربانياً. وابن محيريز فقرشي نزل بيت المقدس. قال رجاء بن حياة إن فخر علينا أهل المدينة بعابدهم ابن عمر، فإننا نفخر عليهم بعابدنا ابن محيريز إنما كنت [45. أ] أعدّ بقاءه أماناً لأهل الأرض. وأما هاني عرضت عليه إمارة فلسطين فامتنع. قال: وكان الثلاثة يقصدون الصلاة من الرملة إلى بيت المقدس.

محارب بن دثار كان قاضياً وكان من العلماء الزهّاد. وحديثه مخرج في كتب العلماء قال: صحبت القاسم بن عبد الرحمن إلى بيت المقدس، فغلبننا على ثلاث، على قيام الليل، والبسط في النفقة، والكف عن الناس.

عبد الملك بن مروان باني قبة صخرة بيت المقدس. روي عن أبي هريرة إن رسول الله صلى الله عليه وسلم قال: من لم يغزو أو لم يجهز غازياً ولم يخلفه في أهله أصابه الله بقارعة. كان حسن البشر عند اللقاء، حسن الحديث إذا حدث، حسن الاستماع إذا حدّث هيّن المؤنة، إذا خولف لا يمازع من لا يثق بعقله (ولا دينه) 231 ولا يخالف لنيماً ولا يتكلم بما يقتدر منه. كان مرة جالساً عند الصخرة وعنده أم الدرداء فنودي بالمغرب. فقامت تتوكأ عليه حتى أدخلها مسجد النساء ومضى فصلى بالناس.

عبد الله بن فيروز مقدسي ثقة خرج له أبو داود والنسائي وابن ماجه.

زيادة بن أبي سودة، روي عن عبادة بن الصامت وأبو هريرة: وهو من الثقات.

أبو الحسن النهرواني الأندلسي، كان مقيماً ببيت المقدس. سأله رجل فقال: يا أبا بكر، ما تقول في رجل كان له حظ من قيام الليل تركه ثم عاوده فهو مجتهد أن يناله فلا يقدر؟ قال: فأنشأ يقول:

226 ب: (يتعبدون).

227 ب: (ضعفن).

228 ب: (الجبال).

229 من القرآن 20:105-20:107.

230 من القرآن 18:47.

231 ب: (ودينه).

تشاغلتم عذًا بصحبة غيرنا وأظهرتموا الهجران ما هكذا كنا.

إبراهيم بن محمد، نزل بيت المقدس. وحديثه في كتاب ابن ماجة.

أبو عيينة الخواص، قدم بيت المقدس وكان ثقة. قال: رأيت ببيت المقدس شيخاً كأنه محترق بنار عليه مدرعة سوداء طويل الصمت كرية المنظر كثير الشعر شديد الحزن. [45. ب] فقلت له: يرحمك الله لو غيرت لباسك. فقد علمت ما جاء في البياض. فبكى وقال: هذا شبيهه بلباس المصاب وإنما نحن في الدنيا في حداد وكأننا قد دعينا. ثم غشي عليه.

عابد ببعض قرى بيت المقدس، كان يجلس إلى ثور بن يزيد وكان يغدو من قريته مع الفجر فيصلي الصلوات كلها ببيت المقدس وينصرف بعد العشاء الآخرة إلى قريته. وقد سمع خالد بن معدان الكلاعي حدثه بحديث رفعه للنبي صلى الله عليه وسلم قال: من رأى شيئاً يهولُه أو يفزّه فليقل: إن الله هو الذي ليس كمثله شيء وهو الواحد القهار. فما قالها أحد إلا فرّج الله عنه ولو كان بين يديه من سور من حديد. وانصرف ذلك الرجل ليلة من الليالي إلى الطريق. فإذا بأسود بين يديه قد منعه من السير. فذكر حديث خالد، فقال ففرج الله عنه فمضى فلقى حمار وحش فاتحاً فاه، يخرج منه لهيب يريد له يأكله. فذكر الحديث، فقال، فوَلَّى الحمار وهو يقول: لا يرحم الله ثوراً كما علمك.

عبد الله بن عامر العامري قال: سألت راحباً ببيت المقدس فقلت: يا راحب، ما أول الدخول في العبادة؟ قال: الجوع. قلت: وما دليل ذلك؟ قال: لأن الجسد خلق من تراب والروح خلق من ملكوت السماء، شبع الجسد ركن إلى الأرض وإذا لم يشبع اشتاق إلى الملكوت. قلت: ما سبب الجوع؟ قال: فإذا ملازمة الذكر والخضوع.

أبو عبد الله بن خفيف خرج إلى شيراز إلى مكة ثم إلى بيت المقدس ثم دخل الشام.

قثم الزاهد قال: رأيت راهباً على باب بيت المقدس كالواله لا يرق له دمع فهالني أمره. فقلت: يا أيها الراهب، أوصني وصية أحفظها عنك. قال: كن كرجل احتوشته السباع والهوام فهو خائف مذعور يخاف أن [46. أ] يسهو فتفترسه أو يلهو فتنهشه، فليله ليل مخافة إذا آمن فيه المغترون ونهاره نهار حزن إذا فرح البطالون ثم ولى وتركني. فقلت: لو زدني شيئاً عسى الله أن ينفعني به. قال: يا هذا الظمان، يكفيه من الماء أيسره.

محمد حاتم الطائي تفقه على إمام الحرمين كان صدوقاً خيراً ففيها صوفياً، دخل بيت المقدس.

أبو محمد بن الوليد، دخل بيت المقدس قال: أنبأنا (أبو) 232 محمد بن أبي يزيد قال: (جماع) 233 آداب

الخير وأزمته في أربعة أحاديث قول النبي صلى الله عليه وسلم: من كان يؤمن بالله واليوم الآخر فليقل: خيراً أو ليصمت، وقوله: من حسن السلام المرء تركه ما لا يعنيه، وقوله: للذي اختصر في الوصية لا تغضب، وقوله: المؤمن يحب لأخيه ما يحب لنفسه. توفي ابن الوليد ببيت المقدس.

**جعفر بن محمد النسابوري**، قدم بيت المقدس. يروى بسنده إلى بلال بن سعد قال: لا تنظر إلى صغر الخطيئة وانظر إلى من عصيت.

**كعب الأحبار**، سكن الشام. تقدم أنه دخل بيت المقدس واستشاره عمر في موضع القبلة. مات بحمص.

**إبراهيم بن أبي عبلة المقدسي**، روى عن أبي أمامة وأنس وروى عنه مالك وابن المبارك.

**جبير بن نفيل الحضرمي** أتى بيت المقدس للصلاة. قال جبير: خمس خصال قبيحة، الحدة في السلطان والحرص في العلماء والقسوة في الشيوخ والشح في الأغنيا وقلة الحياء في ذوي الأحساب.

**عبد الرحمن بن غنم**، كان مسلماً زمن النبي صلى الله عليه وسلم ولم يفد إليه. لكنه لازم معاذ حين بعثه رسول الله صلى الله عليه وسلم إلى اليمن حتى مات معاذ، سمع عمر بن الخطاب. قدم بيت المقدس وهو الذي فقه عامة التابعين بالشام.

**خالد كان** (بالصخرة التي بيت المقدس)<sup>234</sup> ، فجاء عمر بن عبد العزيز فأخذه بيده وقال: يا خالد، [46]. [ب] ما عليك؟ قال: عليكم من الله أذن سمیعة وعین بصيرة. فارتعد عمر خوفاً من الله تعالى ونزع يده. فقال خالد: يوشك أن يكون هذا إماماً عادلاً. ولزم خالد بيته في آخر أمره وقال: ما بقي من الناس إلا حاسداً وشامت. توفي خالد سنة تسعين.

**الإمام العادل عمر بن عبد العزيز** تقدم أنه اجتمع بخالد المتقدم ذكره. قال ابن سيرين رحمه الله: سليمان بن عبد الملك افتتح خلافته بخير وصلى الصلوات لمواقيتها وختمها بخير فاستخلف عمر بن عبد العزيز.

**مالك بن دينار**، من الأئمة الأعلام، جمعته الطريق هو ومحمد بن واسع وعبد الواحد بن زيد وساروا إلى بيت المقدس.

**محمد بن واسع** المذكور ومما يؤثر عنه أنه كان من دعائه في كل يوم: اللهم، إنك سلطت علينا عدواً بصيراً بعيوبنا مطلعاً على عوراتنا يرانا هو وقبيله من حيث لا نراهم. اللهم، فأيسه منا كما أيسته من رحمتك وقنطه منا كما قنطه من عفوك وأبعد بيننا وبينه كما أبعدت بينه وبين جنتك. قيل: فظهر له إبليس لعنه الله يوماً

233 ب: (جمع).

234 ب: (بصخرة بيت المقدس).

في صورة (شيخ)<sup>235</sup> ، فقال له: يا ابن واسع، ما هذا الدعاء الذي تدعوه في كل يوم؟ أعدّه عليّ. فذكر له ذلك. فلما فرغ قال له: يا ابن واسع، إنني أعهد إليك أن لا تعلم أحداً هذا الدعاء أبداً. فقال له محمد بن واسع: لك على عهد الله أن لا أكتمه عن أحد من خلق الله ما عشت.

**الوليد بن عبد الملك**، بنا مسجد دمشق ومسجد حمص وعمر في بيت المقدس. قال إبراهيم بن أبي عبلة: رحم الله الوليد. وأين مثل الوليد؟ هدم كنيسة دمشق وبنا موضعها مسجداً. كان يعطيني قصاع الفضة فأقسمها على قراء بيت المقدس.

**سليمان بن عبد الملك**، أتى بيت المقدس وأتته الوفود بالبيعة [47. أ] وكان يجلس (في قبة)<sup>236</sup> في صحن بيت المقدس مما يلي الصخرة وتبسط البسط بين (يديه)<sup>237</sup> قبته، عليها النمارق والكراسي. فيجلس ويأذن للناس فيجلسون على الكراسي والوسائد وكان يكون إلى جانبه الأموال وكتاب الدواوين وكان قد أهم بالإقامة ببيت المقدس واتخاذها منزلاً وجمع الأموال والناس بها واجتمع بأبي حازم الصحابي وسأله ووعظه واجتمع بالزهرى.

**أم الخير رابعة العدوية**، كانت من أعيان عصرها أختارها في الصلاح والعبادة مشهورة. كانت تقول في مناجاتها: إلهي تحرق بالنار قلباً يحبك. فهتف بها مرة هاتف: ما كنا نفعل هذا فلا تظني بنا الظن السوء. ومن صاياها اكنموا حسناتكم كما تكتنموا سيئاتكم. أورد لها السهروردي في عوارف المعارف:

إني جعلتك في الفؤاد محدثي  
وأبحت جسمي من أراد جلوسي  
فالجسم مني للجليس مؤانس  
وحبيب قلبي في الفؤاد جليسي

وقبرها على جبل زيتا بجوار مصعد عيسى عليه السلام من جهة القبلة في زاوية ينزل إليها بدرج وهو مكان مأنوس يقصد للزيارة. ومن النساء العابدات ببيت المقدس، طائفة ولبابة وعدة من العابدات مجمولة اسمائهم.

**سليمان بن طرخان** سمع أنساً وكان يقول: إذا دخلت بيت المقدس كانت نفسي لا تدخل معي حتى أخرج.

**مقاتل بن سليمان المفسر**، قدم بيت المقدس وصلى فيه وجلس عند باب الصخرة القبلي واجتمع إليه خلق كثير من الناس يكتبون عنه ويسمعون منه. فأقبل بدوي يظاً بنعليه على البلاط وطأ شديداً. فسمع مقاتل فقال لمن حوله: انفرجوا. فانفرج الناس عنه فأهوى بيده يشير إليه ويزيد بصوته: أيها الواطئ، ارفق بنفسك. فوالذي نفس مقاتل بيده، ما تطأ إلا على أجاجين الجنة. قال الشافعي رضي الله عنه: الناس [47. ب] عيال على ثلاثة: مقاتل بن سليمان في التفسير وذكر الآخرين.

235 ب: (شيخ هرم).

236 ناقصة في ب.

237 ب: (يدي).



إبراهيم القرباني، نزل ببيت المقدس وحديثه في كتاب ابن ماجة.

**الأوزاعي عبد الرحمن بن عمر** فقيه بالشام كان رأساً في العلم والعبادة، قدم بيت المقدس فصلى فيه ثمان ركعات والصخرة وراءه ثم صلى الخمس وقال: هكذا فعل عمر بن عبد العزيز. ولم يأت شيئاً من المزارات. (قلت: ودفن ببيروت، توفي بالحمام)<sup>238</sup>.

**سفيان الثوري** الإمام العادل المجمع على جلالته وزهده وورعه. أتى المسجد فصلى فيه بموضع الجماعة وأتى فيه الصخرة وختم فيها القرآن. وروى أنه اشترى موزاً بدرهم فأكل منه في ظلها. ثم قال: إن الحمار إذا استوفى عليه، أو قال: علقه، يزيد في عمله. ثم قام يصلي حتى رحمه من وراءه. توفي بالبصرة.

**إبراهيم بن أدهم** من أبناء ملوك بلخ وهو من ثقات التابعين أحد الزهاد. قدم بيت المقدس ونام بالصخرة وسكن الشام، ومات بمدينة جبلة من أعمال طرابلس وقبره مشهور بها. وقيل: مات بالروم.

**الليث بن سعد** كان عالم مصر ونظير مالك في العلم. كان دخله في السنة ثمانية ألف دينار فما وجبت عليه زكاة. ولا ينقضي عليه عام إلا وعليه دين من كثرة جوده وبرّه. قدم بيت المقدس. قال الليث: لما ودعت أبا جعفر يعني الخليفة ببيت المقدس قال: أعجبني ما رأيت من شدة عقلك، فالحمد لله الذي جعل في رعيتي مثلك. ومات بمصر وقبره بها ظاهر مشهور.

**وكيع بن الجراح**، قدم بيت المقدس وأحرم منه إلى مكة. ومات بقديد راجعاً من الحج ودفن بها.

**الإمام الأعظم والحبر الأكرم محمد بن إدريس الشافعي**، قدم بيت المقدس فصلى فيه ثم قال: سلوني ما شئتم أخبركم من كتاب الله وسنة رسول الله صلى الله عليه وسلم. فقيل له: ما تقول في محرم قتل زنبوراً؟ فقال: قال الله تعالى: {وما آتاكم الرسول [48. أ] فخذوه}<sup>239</sup>. وحدثنا ابن عيينة عن عبد الملك بن عمر عن حذيفة قال: قال رسول الله صلى الله عليه وسلم: اقتدوا بالذين من بعدي أبي بكر وعمر. وحدثنا ابن عيينة عن مسعر عن قيس بن مسلم عن طارق بن شهاب أن عمر أمر المحرم بقتل الزنبور. مات بمصر سنة مئتين وأربعة وقبره بالقرافة الصغرى يزار، نفعنا الله به. قال صاحب أنس الجليل: وأما الأئمة الثلاثة، فلم أطلع على شيء يدل على قدوم أحد منهم بيت المقدس.

**أبو جعفر المنصور** الخليفة، تقدم في الباب الثاني أنه دخل بيت المقدس بعد الرجعة الأولى.

**المهدي بن المنصور** الخليفة، روى هشام الغساني قال: لما قدم الشام يريد بيت المقدس دخل مسجد دمشق

238 ب: (توفي بالحمام. قلت: ودفن ببيروت).

239 من القرآن 59:7.

ومعه كاتبه أبو عبد الله الأشعري. فقال: يا عبد الله، سبقنا بنو أمية بثلاث، بهذا البيت يعني مسجد دمشق ولا أعلم على ظهر الأرض مثله، وبنبل الموالي فأن لهم موالي ليس لنا مثلهم، وبعمربن عبد العزيز ولا يكون فينا والله مثله أبداً. ثم أتى بيت المقدس ودخل الصخرة فقال: يا عبد الله، وهذه رابعة.

**المؤمل بن إسماعيل البصري**، قدم بيت المقدس فأعطى قوماً شيئاً وداروا به تلك الأماكن وكان شديداً في السنة.

**بشر الحافي** أحد رجال الطريقة. قيل له: لم يفرح الصالحون ببيت المقدس؟ قال: لأنها تذهب إليهم ولا تستعلا النفس بها. وقال: ما بقي عندي من لذات الدنيا إلا أني أستلقي على جنبي تحت السماء بجامع بيت المقدس.

**ذو النون المصري** (الصالح)<sup>240</sup> المشهور، قدم بيت المقدس. قال: وجدت على صخرة بيت المقدس كل عاص مستوحش وكل مطيع مستأنس وكل خائف هارب وكل راج طالب وكل قانع غني وكل محب ذليل. قال: فرأيت هذه الكلمات أصول ما استعبد الله الخلق به.

**سري السقطي**، قدم بيت المقدس. قال: خرجت من الرملة إلى بيت [48. ب] المقدس ومررت بمشرفة وغدير ماء وعشب نابت، فجلست أكل من العشب وأشرب من الماء. وقلت في نفسي إن كنت أكلت أو شربت في الدنيا حلالاً فهو هذا. فسمعت هاتفاً يقول: يا سري، فالنفقة التي بلغتك إلى هنا من أين هي.

**محمد بن كرام المتكلم** وإليه تنسب الفرقة الكرامية. أقام ببيت المقدس وكان يجلس للوعظ عند العمود الذي عند مهد عيسى واجتمع عليه خلق كثير، ثم تبين لهم أنه يقول: الإيمان قول، فتركه أهل بيت المقدس. توفي ليلاً ودفن بباب أريحا الذي كان واندرس.

**صالح بن يوسف**، يقال إنه حج تسعين حجة راجلاً في كل حجة يحرم من صخرة بيت المقدس. وكان يدخل بادية تبوك على التجريد والتوكل. توفي بالرملة. يستشقي بقبره الغمام ويستجاب عنده الدعاء. ولم يعلم الآن قبره لاستيلاء الإفرنج على تلك الأرض مدة طويلة.

**بكر بن سهل الدمياطي** المحدث، قدم بيت المقدس فجعلوا له ألف دينار حتى روى لهم التفسير.

**أحمد بن يحيى البغدادي**، حكى عنه أنه قدم من مكة إلى بيت المقدس وندم على مجيئه وقال: تركت الصلاة بمكة بمئة ألف صلاة وهذا بخمس وعشرين ألف صلاة، وبمكة ينزل عشرين ألف رحمة للطائفين والمصلين والناظرين وأراد الخروج إلى مكة. فرأى النبي صلى الله عليه وسلم وذكر له ما خطر له من الفضل. فقال له النبي صلى الله عليه وسلم: هناك تنزل الرحمة نزولاً وهنا تصب الرحمة صباً ولو لم يكن لهذا الموضع محل

240 ناقصة في ب.

عظيم وأشار بيده إلى موضع الإسرى عند قبة المعراج لما أسري بي إليه. فأقام الرجل بالقدس إلى أن مات وكانت هذه الرواية في رجب سنة إحدى وأربعين وثلاثمئة.

**الشيخ سلامة بن إسماعيل** من جماعة بيت المقدس الضرير المصنف، كان عديم النظير في زمانه [49. أ] لأجل ما خصه الله تعالى به من حضور القلب وصفاء الذهن وكثرة الحفظ.

**شيخ الإسلام عبد الواحد بن محمد الشيرازي ثم المقدسي الحنبلي الأنصاري** شيخ الشام في وقته، قدم الشام فسكن بيت المقدس. اجتمع مع الخضر دفتين، وكان يتكلم على خاطر كما كان يتكلم عليه.

**ابن القزويني الزاهد**، له تصانيف جمّة. مات بدمشق سنة أربعمئة وثمانين ودفن بمقبرة باب الصغير.

**أبو الفتح نصر المقدسي الشافعي**، شيخ المذهب بالشام صاحب التصانيف مع الزهد والعبادة. أقام بالقدس مدة طويلة بالزاوية التي على باب الرحمة المعروفة بالناصرية لنزوله بها، ثم عرفت بالغزالية لنزول الغزالي بها. ثم قدم دمشق فسكنها وعظم شأنه بها، ولما قدم الغزالي الشام اجتمع به واستفاد منه. مات سنة تسعين وأربعمئة بدمشق ودفن بالباب الصغير.

**الفقيه أبو الفضل عطاء شيخ الشافعية بالقدس الشريف** فقهاً وعلماً، وشيخ الصوفية طريقةً.

**الإمام أبو المعالي المشرف بن المرجاء**، كان من علماء بيت المقدس، له كتاب فضائل البيت المقدس والصخرة وما اتصل بذلك من أخبار وآثار وفضائل المساجد والشام، وهو كتاب مفيد.

**مكي بن عبد السلام الأنصاري الرملي الشافعي**، الحافظ، كانت الفناوي تأتي إليه من مصر والشام وغيرها وكان من الجوالين في الآفاق كثير التعب والنصب والسهر وكان ورعاً ولما أخذ الإفرنج بيت المقدس في سنة أربعمئة واثنين وتسعين أخذوه أسيراً وبعثوه إلى البلاد ينادي في فكاكه بألف دينار. لما علموه أنه من علماء المسلمين فلم يستفكه أحد فرموه بالحجارة على باب أنطاكية حتى قتلوه. وقيل إنهم قتلوه ببيت المقدس رحمه الله عليه.

**عبد الجبار أبو القاسم الرازي الشافعي** تفقه على الجنيد [49. ب] بإصبهان ثم استوطن بغداد ثم انتقل إلى بيت المقدس وسلك سبيل الورع والانقطاع إلى الله تعالى إلى أن استشهد على يد الإفرنج لعنهم الله حين أخذ القدس سنة أربعمئة واثنين وتسعين.

**الإمام حجة الإسلام زين الدين أبو حامد الغزالي**، لم يكن للطائفة الشافعية في آخر عصره مثله. مبدأ أمره بطوس ثم قدم نيسابور وصار من أعيانها المشار إليهم. ثم أقام مدة بدمشق ثم انتقل إلى بيت المقدس مجتهداً في العبادة وزيارة المشاهد والمواضع العظام. وأخذ في التصانيف المشهورة ببيت المقدس. فيقال إنه صدّف في

القدس إحياء علوم الدين. وأقام بالزاوية التي على باب الرحمة كما تقدم، وقد دثرت تلك الزاوية ثم عاد إلى طوس. فتوفي بها سنة خمس مئة وخمسة.

**الإمام الحافظ أبو الفضل محمد بن طاهر القيرواني**، الجوال في الآفاق، الجامع بين الذكاء والحفظ وحسن التصنيف وجودة (الخط)<sup>241</sup>. ولد ببیت المقدس وله مصنفات ومجموعات في الحديث وغيره تدلّ على غزارة علمه. رحل إلى بغداد ثم رجع إلى بيت المقدس وأحرم منه إلى مكة ثم رجع إلى بغداد ومات بها ودفن بالمقبرة العتيقة بالجانب الغربي. وكان ولده أبو زرعة طاهر من المشهورين بعلو الإسناد وكثرة السماع.

**أبو الغنائم محمد بن علي بن ميمون القرشي** كان ديناً خيراً ثقة، رحل إلى الشام وجمع الحديث ببیت المقدس. وتوفي بالحلة ودفن بالكوفة.

**والطرسوسي محمد الأندلسي**، قدم بيت المقدس وحج وكان إماماً عالمياً زاهداً سكن الشام.

**أبو عبد الله محمد الديباجي** من ولد الديباجي من ذرية عثمان بن عفان، وأمه فاطمة بنت الحسن بن علي بن أبي طالب. سمي الديباجي لحسنه ولأنه ديباجة [50. أ] وجهه كانت تشبه وجه رسول الله صلى الله عليه وسلم. أصله من مكة قدم بيت المقدس وأقام به ثم سكن بغداد، وهو فقيه فاضل حسن السيرة قوال بالحق يقال: سمي المصطفى وشبيهه.

**أبو الحسن علي الربيعي المقدسي الشافعي**، سمع الحديث من الشيخ نصر الطوسي والحافظ أبو بكر الخطيب، ثم دخل الغرب وسكن البرية.

**الإمام أبو بكر بن العربي الحافظ المشهور**، دخل مع أبيه الشرق، قدم بيت المقدس ولقي خلقاً كثيراً من العلماء.

**أبو بكر الجرجاني**، قصد هو وأبو سعيد السمعياني زيارة بيت المقدس من بلدهما، فذهبا ولم يتفرقا حتى رجعا إلى العراق. وكان شيخاً صالحاً قيماً بكتاب الله دائم الذكر كثير الحزن والبكاء. قال ابن سعيد السمعياني في حقه: كان نعم صاحب جاور بمكة السنين وخدم المشايخ الكبار.

**أبو سعيد السمعياني المتقدم ذكره الشافعي**، صاحب التصانيف الكثيرة، من جملتها: تحفة المسافر، وعن العزلة.

**الشيخ الزاهد أبو عبد الله القرشي** ذو الكرامات الظاهرة والمناقب الجليلة الباهرة وأهل مصر يذكرون عنه أشياء خارقة. قدم بيت المقدس وأقام به إلى أن مات وقبره بمقبرة ماملا ظاهر يزار.

241 ب: (الحفظ).

وبجانبه قبر الشيخ شهاب الدين بن رسلان ومن المجرب أن الدعاء بين قبرهما مستجيب. وبقربه قبر الشيخ الزاهد العلامة أبو إسحاق إبراهيم بن جماعة الشافعي.

وبمقبرة ماملا قبر الإمام عمر بن إبراهيم الواسطي على جانب الطريق قبلي الكبكية، وبقربه قبر واحد ولا نعرف لصاحبه اسم ولا ترجمه. وإنما مرّ عليه (واحد)<sup>242</sup> وهو راكب فقراً {ووجدوا ما عملوا حاضراً ولا يظلم ربك أحداً}<sup>243</sup> ، فأجاب من القبر: وجدنا وجدنا، حتى سمعه ذلك الرجل. وحكى بعض الناس أنه أخذ الأحجار [50. ب] التي على قبره ونقلها إلى مكان فأصبح وجدها على القبر كما كانت، فعذّ ذلك من الكرامات. وبها قبر الشيخ علي البسطامي شيخ الفقير البسطامية بالبسطامية.

(وبمقبرة باب الرحمة)<sup>244</sup> عدة أولياء وصلحاء يطول ذكرهم. نفعنا الله بهم وأمدنا من مددهم وحشرنا معهم. أمين.

### الباب الثامن: في ذكر الخضر عليه السلام ومحلّه من المسجد الأقصى الرفيع المقام.

ذهب كثير من العلماء إلى أنه نبي وهو حي. وهو يصلي كل جمعة في خمس مساجد، المسجد الحرام ومسجد المدينة ومسجد قبا ومسجد بيت المقدس ويصلي في كل جمعة في مسجد الطور، ويأكل في كل جمعة أكلتين من كماء وكرفس ويشرب مرة من ماء زمزم ومرة من جبّ سليمان الذي ببيت المقدس المعروف بجبّ الورقة ويغتسل من عين سلوان.

وعن ابن أبي داود قال: الخضر وإلياس يصومان شهر رمضان ببيت المقدس ويوافقان الموسم كل عام. وعنه بسنده إلى عمه الحافظ أبي القاسم إلى علي بن أبي طالب رضي الله عنه قال: بينما أنا أطاف بالكعبة إذ رجل معلق بأستار الكعبة وهو يقول: يا من لا يشغله سمع عن سمع، يا من لا يغطه المسائل، يا من لا يبرمه إلحاح المسلحين في طلب الحاجات، أرزقني برد عفوك وحلاوة رحمتك. قال علي رضي الله عنه: أعد على هذه الكلمات يا عبد الله. فقال: أسمعتهن؟ قال: نعم. قال: والذي نفس الخضر بيده. وكان هو الخضر عليه السلام. ما من عبد يقولهن دبر كل صلاة مكتوبة إلا غفرت (لهن)<sup>245</sup> ذنوبه وإن كانت مثل رمل عالج ومثل زبد البحر وورق الشجر.

وعن أبي هريرة مرفوعاً: إنما سمي الخضر خضراً لأنه جلس على فروة بيضاء. فإذا هي تهتز من تحته خضراء. رواه البخاري.

[51. أ] وعن أبي حفص الحمصي قال: دخلت بيت المقدس قبيل أو قبل نصف الليل لأصلي فيه، فإذا أنا بصوت يخافت أحياناً وهو يقول: يا رب، إني فقير وأنا أخاف مستجير. يا رب، لا تبدل اسمي ولا تغير جسمي ولا تجهد بلائي. فخرجت مذعوراً فمررت على ناس بباب المسجد. فقالوا: ما لك يا عبد الله؟ فأخبرتهم الخبر، فقالوا: لا تخف، هذا الخضر عليه السلام وهذه ساعة صلاته.

<sup>242</sup> ب: (إنسان).

<sup>243</sup> من القرآن 18:49.

<sup>244</sup> ب: (وبها ويمقيرة باب الرحمة).

<sup>245</sup> ب: (له).

وعن الشيخ الصالح أبي نصر البنديجي قال: سألت الخضر: أين (تصلي الصبح)<sup>246</sup>؟ قال: عند الركن اليماني. قال: وأقضي بعد ذلك شيئاً كلفني الله تعالى قضاءه، ثم أصلي الظهر بالمدينة، ثم أقضي بعد ذلك شيئاً كلفني الله تعالى قضاءه، ثم أصلي العصر ببيت المقدس.

وعن الفقيه الصالح أبي المظفر عبد الله بن محمد الجيام الحربي السمرقندي قال: دخلت يوماً مغارة فصللت الطريق. فإذا أنا بالخضر عليه السلام فقال: مجد أين أمشي. فمشيت معه. ثم قلت: ما اسمك؟ قال: أبو العباس. ورأيت معه صاحباً له. (فقلت له)<sup>247</sup> ما اسم هذا؟ قال: إلياس بن سام. فقلت: رحمك الله، هل رأيتما محمداً صلى الله عليه وسلم؟ قال: نعم. فقلت: بعزة الله وقدرته، إخبارني بشيء أرويه عنكما. قال: سمعنا رسول الله صلى الله عليه وسلم يقول: ما من مؤمن يقول: صلى الله على محمد إلا بصر الله قلبه ونوره.

وذكر أحاديث قال: وسمعتهما يقولان: كان في نبي إسرائيل نبيٌّ يقال له شمويل رزقه الله النصر على أعدائه وإنه خرج في جيشه فقالوا: هذا ساحر يسحو أعيننا ويفسد عسكرنا، فلنجلعه في ناحية البحر. فقال أصحابه: كيف نفعل؟ فقال: احملوا وقولوا: صلى الله على محمد. فحملوا وقالوا: صلى الله على محمد. فصارت أعداؤهم في ناحية البحر فغرقوا أجمعين. قال الخضر وإلياس (عليهما السلام)<sup>248</sup>: كان ذلك بحضرتنا.

قال: وسمعتهما يقولان: [51. ب] سمعنا رسول الله صلى الله عليه وسلم يقول: من قال: صلى الله على محمد (طهر قلبه)<sup>249</sup> كما يطهر الشيء بالماء. وقالوا: سمعنا رسول الله صلى الله عليه وسلم يقول على المنبر: من قال: صلى الله على محمد فقد فتح على نفسه سبعين باباً من الرحمة.

قال: وسمعتهما يقولان: قال النبي صلى الله عليه وسلم: ما من مؤمن يقول: صلى الله على محمد سبع مرات إلا أحبه الله، وإن كانوا أبغضوه والله لا يحبونه حتى يحبه الله سبحانه وتعالى.

قال: وسمعتهما يقولان: (جاء رجل)<sup>250</sup> إلى النبي صلى الله عليه وسلم فقال: يا رسول الله، إن أبي شيخ كبير وهو يحب أن يراك. فقال: إيتني به. قال: إنه ضريح. قال: قل له يقول في سبع أسابيع: صلى الله على سيدنا محمد. فإنه يراني في المنام حتى يروي عني الحديث. ففعل فرأه وكان يروي الحديث.

قال: وسمعتهما يقولان: سمعنا رسول الله صلى الله عليه وسلم يقول: إذ أجلستم مجلساً فقولوا: بسم الله الرحمن الرحيم وصلى الله على محمد يوكل الله بكم ملكاً يمنعكم من الغيبة حتى لا تفتابوا، وإذا أقمتم فقولوا: بسم الله الرحمن الرحيم وصلى الله على محمد، فإن الناس لا يفتابوكم ويمنعهم الملك من ذلك.

وأما محله من المسجد الأقصى الرفيع المقام. فقد ذكر المشرف في باب ما جاء في الصخرة التي تسمى بخ بخ وهي التي تحت المقام الغربي مما يلي قبة النبي صلى الله عليه وسلم وإنها موضع الخضر (عليهما السلام)<sup>251</sup>. قال: وهذا الموضع يستجيب أن يدعا فيه، فإن الدعاء مستجاب فيه وفي سائر المسجد.

قال صاحب أنس الجليل: وهذا المكان قد برك وصار حاصلاً للمسجد وهو سفلى الصخرة تجاه باب الحديد يلصق السلم المتصل منه صحن الصخرة وهو مكان مأنوس. وعلى ظهر هذا المكان محراب مخطوط في صحن الصخرة يعرف بمغارة الأرواح [52. أ] يقصد الزيارة. انتهى.

قلت: وقد رأيت الخضر عليه السلام مناماً ودعى لي بدعوات، أرجو قبولها. ومن عجيب الاتفاق إنني أردت

246 ب: (تصلي الصبح).

247 ناقصة في ب.

248 ناقصة في ب.

249 ب: (طهر قلبه من العقاق).

250 ب: (جاء رجل من الشام).

251 ب: (عليه السلام).

أن نظر تفسيرها في تعبير الرؤيا لابن شاهين فجرّد فتح الكتاب. وقع (النظر)<sup>252</sup> على قوله ومن رأى الخضر عليه السلام فإنه يسافر سفيراً بعيداً بالسعة والأمن، وقيل بحج، ويكون عمره طويلاً. فأرجو من المولى تفسير يلك الرؤيا بزيارة بيت المقدس وبعده الحج والموت بأحد المساجد الثلاث. أمين.

### الخاتمة: في ذكر الشام وفضلها وبهجتها وشرف محلها.

قسم الأوائل الشام خمسة أقسام. الأول فلسطين وأوسط بلدها الرملة، والثاني حوران ومدينتها العظمى طبرية، والثالث الغوطة ومدينتها العظمى دمشق، والرابع حمص ومن أعمالها مدينة سلمية، والخامس قنّسرين ومدينتها العظمى حلب. اتفق العلماء على أن الشام أفضل البقاع بعد مكة والمدسنة.

أما أفضلها من الآيات فقوله تعالى: {وأورثت القوم الذين كانوا يستضعفون مشارق الأرض ومغاربها التي باركنا فيها}<sup>253</sup>. قال: مشارق الشام ومغاربها. وعنه في قوله: {ولقد بوّانا بني إسرائيل مبعوثاً صدقاً}<sup>254</sup>، أي حسن وهو الشام.

ومن السنة فعن ابن عمر مرفوعاً: الخير عشرة أعشار تسعة بالشام وواحد في سائر البلدان، وإذا فسد أهل الشام فلا خير فيكم.

وروى الطبراني في معجمه الكبير عن عبد الله بن مسعود موقوفاً عليه قال: قال: قسم الله الخير عشرة أعشار فجعل تسعة أعشار بالشام وبقية في سائر الأرض، وقسم الشرّ عشرة أعشار فجعل جزءاً منه بالشام وبقية في سائر الأرض.

رسول الله صلى الله عليه وسلم مرفوعاً أنه قال: ستكون مجندة شام ويمن وعراق. والله اعلم بأنها بدا عليكم [52. ب] بالشام ألا وعليكم بالشام. فمن كره فعليه يمنه ولستق من غدره، فإن الله قد تكفل لي بالشام وأهله.

وعن علي مرفوعاً: الأبدال بالشام وهم أربعين رجلاً. كلّمات مات رجل أبدل الله مكانه رجلاً يستسقي بهم الغيث وينتصر بهم على الأعداء ويصرف عن الشام بهم العذاب. رواه أحمد في مسنده.

وعن ابن عباس مرفوعاً: مكة آية الشرف والمدينة معدن الدين والكوفة فسطاط الإسلام والكوفة فجر العابدين والشام موطن الأبرار ومصر عش إبليس وكهفه ومستقره، الحديث.

وعن ابن جواله الأزدي: قلت: يا رسول الله، أختري لي بلد الكون فيها. فلو أعلم تبقي لي لم أختري على قريبي شيئاً. قال: عليك (بالشام)<sup>255</sup>. فلما رأى كراهتي للشام قال: أتهدني ما يقول الله للشام؟ إن الله يقول للشام: يا شام، أنت صفوتي من أرضي وبلادتي، أدخل فيك خيرتي من خلقتي. إن الله قد تكفل لي بالشام وأهله. وهذه شهادة رسول الله صلى الله عليه وسلم باختيار الشام تفضيلها وباصطفائه ساكنيها واختياره لقاطنها. قال صاحب ترغيب أهل الإسلام في سكنى الشام: وقد رأيتنا ذلك بالمشاهدة. وإن من رأى أهل الشام ونسبتهم إلى غيرهم رأى بينهم من التفاوت ما يدل على اصطفائهم واجتباؤهم.

252 ب: (نظري).

253 من القرآن 7:137.

254 من القرآن 10:93.

255 ناقصة في ب.

قال عطاء الخراساني: لما هممت بالنقلة شاورت من بمكة والمدينة والكوفة والبصرة وخراسان من أهل الكتاب. فقلت: أين ترون أنزل بعيالي؟ فكلمهم يقولون عليك بالشام.

وروى كعب الأحبار أنه قال: عن التوراة في السفر الأول: محمد رسول الله عبيد المختار، لا فظ ولا غليظ ولا ضخاب في الأسواق ولا يجزي بالسنة السيئة، ولكن يعفو ويغفو مولده بمكة وهجرته بطيبة وملكه [53]. أ] بالشام. قال ابن عبد السلام: الذي ذكره كعب الأحبار موافق للمشاهدة والعيان. فإن قوة ملك الإسلام ومعظم أجناده من البسالة والساعة بالشام.

وقال كعب الأحبار إن الله سبحانه وتعالى بارك في الشام من الفرات إلى العريش. وقد أشار كعب إلى أن البركة بالشام. وإن قوله تعالى {الذي باركنا حوله} <sup>256</sup> لا يختص بمكان دون مكان وإنما مستوعب لجميع حدود الشام. فإذا كان الشام وأهله عند الله بهذه المثابة وهذه المنزلة وكانوا في خراسة وكفالتة دأت الأدلة على أن دمشق خير بلاد الشام بعد بيت المقدس. وقد ورد أنها كانت دار نوح وبها فار التنور وقيل بالكوفة. واعلم أن في دمشق وضواحيها أماكن فضيلة. فمنها مسجدها الأعظم. وقد ورد عن الله تعالى في قوله لجبل قاسيون: سأبني في حصنك، أي في وسطك، بيتاً يعبد فيه.

وقد ورد عن قتادة في قوله تعالى {التين} <sup>257</sup>، جامع دمشق. قال القرطبي: {التين} مسجد دمشق كان بستاناً ليهود عليه السلام، فيه تين.

وعن عثمان بن أبي عاتكة قال: قبله مسجد دمشق قبر هود النبي عليه السلام، وقد كان أصله كنيسة. فلما فتح المسلمون دمشق اصطلحوا مع النصارى على (أن) <sup>258</sup> يجعله نصفه مسجداً للمسلمين ونصفه كنيسة للنصارى. فلم يزل كذلك إلى أن صارت الخلافة الوليد بن عبد الملك أخذ بقيةتها من النصارى وبناه جميعاً مسجداً على صفة حسنة. لم يسبق إليها. أنفق في عمارته أربعمئة صندوق، كل صندوق ثمانية وعشرون ألف دينار. وقال الخليفة لأهل دمشق: إنكم تفتخرون على الناس بأربع بهوائكم ومائكم وفاكهكم وحمائمكم، فاحببت أن أزيدكم خامسة وهي هذا الجامع. فحمدوا الله أننوا عليه وانصرفوا شاكرين.

وقال [53]. ب] الفرزدق: أهل دمشق في بلدهم قصر من قصور الجنة، يعني به جامع الأموي.

وقال أحمد بن الجوزي: ما ينبغي أن يكون أحد أشد شوقاً إلى الجنة من أهل الشام لما يرونه من حسن مسجدها.

وقد ورد في فضل الصلاة فيه عن سفيان الثوري أن الصلاة في مسجد دمشق بثلاثين ألف صلاة.

وروي أن واثلة بن الأسقع خرج من باب المسجد الذي يلي جيرون، فلقي كعب الأحبار. فقال له: أين تريد؟ قال: أريد بيت المقدس لأصلي فيه. فقال: تعال، أريك موضعه، أو قال موضعاً، في هذه المسجد من صلى فيه كأنما صلى في بيت القدس. قال: فذهب وأراه ما بين الباب الأصغر الذي يخرج منه الحسنه يعني القنطرة الغربية وقال: من صلى فيما بين هاتين فكأنما في بيت المقدس. قال واثلة: والله إنه لمجلسي ومجلس قومي.

ومن الأماكن المقصودة فيه بالزيارة، الموضع الذي فيه رأس يحيى بن زكريا عليهما السلام. روي عن الوليد بن مسلم: وسأل رجل: يا أبا العباس، أين بلغك رأس يحيى بن زكريا من هذا المسجد؟ قال: بلغني أنه ثم وأشار إلى العمود المسقط الرابع من الركن الشرقي.

وأما جبل قاسيون وما فيه من المشاهد وما حوله من الآثار والمعاهد المعروفة بإجابات الدعوات، فيه من

<sup>256</sup> من القرآن 17:1.

<sup>257</sup> من القرآن 95:1.

<sup>258</sup> ناقصة في ب.



الغرب ولد إبراهيم عليه السلام. وفيه أوى الله تعالى عيسى بن مريم وأمه منعهما من اليهود. فمن أتى مقبل روح الله عيسى واغتسل وصلى ودعا لم يردده الله خائباً. وفيه اختبى النبي إلياس من ملك قومه، وفيه صلى إبراهيم ولوط وموسى وعيسى وأيوب عليهم الصلاة والسلام.

وعن حسان بن عطية قال: أغار ملك هذا الجبل على لوط عليه السلام فسياه وأهله، فأقبل إبراهيم عليه السلام في طلبه في عدة أهل بدر. فالتقوا في صخر القعود. فعبي إبراهيم [54]. أ] ميمنة وميسرة وقلباً وكان أول من عني الحرب هكذا. واقتتلوا فهزمه إبراهيم واستنقذ لوطاً وأهله وأتى الموضع الذي في برزة فصلى فيه واتخذ مسجداً.

وعن الزهري أنه قال: مسجد إبراهيم في قرية يقال لها برزة، فمن صلى فيه أربع ركعات خرج من ذنوبه كيوم ولدته أمه، ويسأل الله تعالى ما شاء فإنه لا يرد خائباً. وبه مغارة الدم حيث قتل قابيل هابيل معروفة بإجابة الدعاء. فعن الزهري أنه قال: لو يعلم الناس ما في مغارة الدم من الفضل لما هنى لهم طعام ولا شراب إلا فيها. وعن أحمد بن كثير قال: صعدت إلى موضع ابن آدم في جبل قاسيون فسألت الله عز وجل الحج، فحججت. وسألته الجهاد، فجاهدت. وسألته المرابطة، فرابطت. وسألته الصلاة في بيت المقدس، فصليت فيه. وسألته يغنيني عن البيع والشراء، فرزقت ذلك كله. رأيت في المنام كإني في ذلك الموضع قائماً أصلي. فإذا فيه النبي صلى الله عليه وسلم وأبو بكر وعمر وهابيل، فقلت: أسألك بحق الواحد الصمد وبحق أبك آدم وبحق هذا النبي، هذا دمك؟ فقال: أي رب آدم وأمي حواء ومحمد المصطفى صلوات الله عليهم، وإن يجعل دمي مستغاث كل نبي وصديق، ومن دعي عنده فيجيبه، ومن سأله فيعطيه سؤاله. فاستجاب الله تعالى وجعل هذا الجبل آمناً ومغيثاً، ثم ووكّل الله تعالى به ملكاً وجعل معه من الملائكة بعدد النجوم يحفظونه. ومن أتى موضعه لا يريد إلا الصلاة فيه إن يتقبل منه. فقال لي رسول الله صلى الله عليه وسلم: قد فعل الله ذلك كرمًا وإحساناً وإني آتية كل خميس وصاحباي وهابيل فنصلي فيه.

وبسفح الجبل موضع الكهف. روى بعض [54. ب] الثقة أنهم دخلوا المغارة وقلعوا البلاطة الكبيرة فوجدوا مغارة سعتها خمسة أذرع وأكثر. في شمالها إيوان وعليه سبعة أنفس طوال مسجيين بأكفانهم على هيئة العرب. فتهيئوا أن يدنوا ورجعوا وأعادوا البلاطة.

وبه الربوة. وعن الثقات: من أراد أن يأتي إلى {ربوة ذات قرار ومعين} <sup>259</sup>، فليأت النيرب الأعلى ذات النهرين. وعلى الجملة فدمشق أكثر المدن أبدالاً وأكثرها أهلاً ومالاً ورجلاً وزهاداً وعباداً ومساجداً وهي لأهلها معقل.

وفي أرض الشام موضع ورد الفضل بخصوصها. فمنها فلسطين. ورد في حديث: ما ينقص من الأرض يزداد في الشام، وما نقص من الشام يزداد في فلسطين.

وقد ورد أن كعب الأحبار لقي رجلاً، فقال له كعب من جملة حديث: لعلك من الجند الذي ينظر الله إليهم كل يوم مرتين. قال: ومن هم؟ قال: أهل فلسطين. قال: نعم.

وعن عبد الملك الجزري قال: الشام مباركة وفلسطين مقدسة وبيت المقدس قدس القدس.

وعن لأبي هريرة مرفوعاً: الزموا الرملة، يعني فلسطين، فإنها الربوة التي قال الله تعالى: {وأويناهما إلى ربوة ذات قرار ومعين}. وقد تقدم ذكرها ومآثرها في الباب السابع.

ومنها لد. وقد ورد في صحيح مسلم أن النبي صلى الله عليه وسلم قال: وقد ذكر عنده الدجال يقتله ابن

مریم بیاب لدّ.

ومنها عسقلان وغزة. فعن ابن الزبير يرفعه: طوبى لمن سكن أرض العورسين.  
ومنها بيت لحم. وتقدم الكلام عليها.

ومنها حمص. فعن قتادة أنه نزلها خمسمئة صحابي. وقيل: لا يدخلها حية ولا عقرب. وبها قبر خالد بن  
[55]. أ] الوليد وكعب الأحبار.

ومنها قنسرين. روى البخاري في تاريخه عن جرير بن عبد الله عن النبي صلى الله عليه وسلم أنه قال:  
أوحى إلى أي هذه الثلاثة نزلت، فهي دار هجرتك المدينة أو البحرين أو قنسرين.

ومنها أنطاكية. وبها قبر حبيب النجار. وقال يوسف بن أسباط لامرأته (لما حضرته)<sup>260</sup> الوفاة: إذا أنا مت  
فالحقي بأنطاكية وليكن قبرك بها.

وبالحقيقة فغالب بقاع الشام مشحونة بقبور الأنبياء والصحابة. فأما الأنبياء، فعن كعب الأحبار قال:  
بطرسوس من قبور الأنبياء عشرة وبالمصيصة خمسة وبالثغور من سواحل الشام من قبور الأنبياء ألف قبر  
وبأنطاكية قبر حبيب النجار وبحمص ثلاثون قبراً وبدمشق خمسمئة قبر وببلاد الأردن مثل ذلك وببيت المقدس  
ألف قبر وبالعريش عشرة وقبر موسى بدمشق. قال صاحب إتحاف الأخصاء: الذي عليه الأكثر أن قبر موسى  
عليه السلام بالقرب من أريحا بالثغور.

وأما الصحابة فكثير. منهم بلال بن رباح وأبو الدرداء ووائلة بن الأسقع وفضالة بن عبيد وأسامة بن زيد  
وحفصة بنت عمر وغيرهم كثير لا يعرف اسمائهم ولا قبورهم. فقد ورد عن الأشعث بن سليمان قال: بالشام  
عشرة آلاف عين رأيت النبي صلى الله عليه وسلم.

انتهى المقصود من تلخيص أتحاف الأخصاء وأنس الجليل، والحمد لله رب العالمين.

قلت: وممن هو مدفون بالشام جدنا الأعلى سعد بن عبادة الأنصاري الخزرجي. فناسب أن نختم هذا  
المختصر بذكره وذكر مناقبه وذكر بعض فضائل الأنصار.

فأقول: قال أمير المؤمنين في الحديث الشهاب أحمد بن حجر العسقلاني في كتاب الإصابة في معرفة  
الصحابة: سعد بن عبادة بن دليم [55. ب] بن حارثة بن حرام بن (خزيمة)<sup>261</sup> بن ثعلبة بن طريف بن الخزرج  
بن ساعدة بن كعب بن الخزرج الأنصاري، سيد الخزرج، يكنى أبا ثابت وأبا قيس. أمّه عمرة بنت مسعود لها  
صحبة وماتت في زمن النبي صلى الله عليه وسلم سنة خمس. وشهد سعد العقبة وكان أحد النقباء واختلف في  
شهوده بدراناً. فأثبتته البخاري. وقال ابن سعد: كان متهباً للخروج فهشّ فأقام، وقال النبي صلى الله عليه وسلم:  
لقد كان حريصاً عليها.

قال ابن سعد: كان يكتب بالعربية ويحسن العموم الرمي فكان يقال له الكامل. وكان مشهوراً بالجود هو  
وولده وجده وأبوه وكان لهم أطم ينادى عليه كل يوم: من أحب اللحم والشحم فليأت أطم دليم بن حارثة. وكانت  
جفنة سعد تدور مع النبي صلى الله عليه وسلم في بيوت أزواجه. وقال يقسم عن ابن عباس: كان رؤية رسول الله  
صلى الله عليه وسلم في المواطن كلها، مع علي رؤية المهاجرين ومع سعد بن عبادة رؤية الأنصار.

وقد روى أحمد من طريق محمد بن عبد الرحمن بن أسعد بن زرارة عن قيس بن سعد: زارنا النبي صلى

260 ناقصة في ب.  
261 ب: (أبي خزيمة).

الله عليه وسلم في منزلنا فقال: السلام عليكم ورحمة الله، الحديث. وفيه: ثم رفع يديه فقال: اللهم، اجعل صلواتك ورحمتك على آل سعد بن عباد.

وروى أبو يعلى من حديث جابر قال: قال رسول الله صلى الله عليه وسلم: جزى الله الأنصار عنا خيراً لا سيما عبد الله بن عمرو بن حرام وسعد بن عباد.

وروى ابن أبي الدنيا قال: كان أهل الصفة إذا أمسوا انطلق الرجل بالواحد والرجل بالاثنتين والرجل بالجماعة. فأما سعد فكان ينطلق بالثمانين.

وروى الدارقطني في كتاب الاسخياء من طريق هشام بن عروة (عن أبيه)<sup>262</sup> قال: كان منادي سعد ينادي على أمة: من كان يريد لحماً وشحمًا [56. أ] فليأت سعداً، وكان سعد يقول: اللهم، هب لي مجدًا. اللهم، إني لا يصلح لي القليل ولا أصلح عليه.

وعن محمد بن سيرين: كان سعد بن عباد يعيش كل ليلة ثمانين من أهل الصفة. وقصته في تخلفه عن مبايعة أبي بكر مشهورة. وخرج إلى الشام فمات بحوران سنة خمس عشرة. وقيل سنة ست عشرة.

روي عنه: بنوه قيس وسعيد وإسحاق وحفيده شرحبيل بن سعيد.

وروي عنه: من الصحابة أيضاً ابن عباس وأبو أمامة بن سهل، وأرسل عنه الحسن بن عيسى بن فائد.

وروى أبو داود من حديث قيس بن سعد أن النبي صلى الله عليه وسلم قال: اللهم، اجعل صلواتك ورحمتك على آل سعد بن عباد. أخرجه في أثناء حديث. وقيل إن قبره بالمنيحة قرية بدمشق بالغوطة.

وعن سعيد بن عبد العزيز أنه مات ببصرى وهي أول مدينة فتحت من الشام<sup>263</sup>.

وفي نهاية التقريب بعد أن ذكر نسبة سعد قال: وكان سعد بن عباد والمنذر بن عمرة وأبو دجانة لما أسلموا يسكرون أصنام بني ساعدة وسعد شهد العقبة مع السبعين من الأنصار. في روايتهم جميعاً: وكان أحد النقباء الاثنى عشر وكان يحدث الأنصار على الخروج لبدن فتهش فتخلف. فضرب له رسول الله صلى الله عليه وسلم بسهمه وأجره. ولم يثبت شهد الخندق واحداً والمشاهد كلها مع رسول الله صلى الله عليه وسلم<sup>264</sup> في غزوة دومة الجندل في شهر ربيع الأول سنة خمس من الهجرة. وكان سعد بن عباد في تلك الغزوة. فلما قدم رسول الله صلى الله عليه وسلم أتى قبرها وصلى عليها.

وقال حين قال رسول الله صلى الله عليه وسلم إذا بلغه إقبال أبي سفيان: أشيروا علينا، إيانا تريد يا رسول الله، فلو أمرتنا أن نخيضها البحر لأخضناها ولو أمرتنا أن نضرب أكبادها لبرك الغماد لفلننا ذلك. ومناقبه وفضيلته كثيرة جداً.

وقال [56. ب] ابن أبي عروبة: سمعت محمد بن سيرين يحدث أن سعد بن عباد بال قائماً. فلما رجع قال لأصحابه: إني لأجد ديبباً فمات.

وقال أبو عمر بن عبد البر: وتخلف سعد عن بيعة أبي بكر وخرج من المدينة ولم ينصرف (فيها)<sup>265</sup> إلى أن مات بحوران من أرض الشام لسنتين ونصف مضتاً من خلافة عمر وذلك سنة خمسة عشر.

وقيل سنة رابع عشر. وقيل: مات سعد بن عباد في خلافة أبي بكر سنة أحد عشر. ولم يختلفوا أنهم وجدوا ميتاً وأحضر جسده ولم يشعروا بموته حتى سمعوا قائلاً يقول ولم يروا أحداً: قد قتلنا سيد الخزرج سعد بن

262 ناقصة في ب.

263 مضافة في ب: (انتهى).

264 مضافة في ب: (وكانت أمه عمرة من المبايعات، توفيت بالمدينة في مغيب رسول الله صلى الله عليه وسلم).

265 ب: (إليها).

عبادة، رميناه بسهمين. فلم يخط فواده. ويقال إن الجن قتلتها. له ذلك في غير موضع من الصحيحين. وروي له الأربعة. انتهى باختصار.

وفي الصواعق للعلامة الشهاب أحمد بن حجر الهيتمي قال: أخرج أحمد أن أبا بكر لما خطب يوم السقيفة لم يترك شيئاً نزل في الأنصار ولا ذكره رسول الله صلى الله عليه وسلم في نسايتهم إلا ذكره. وقال: لقد علمتم أن رسول الله صلى الله عليه وسلم قال: لو سلك الناس وادياً وسلكت الأنصار وادياً لسلكت وادي الأنصار ولقد علمت يا سعد، إن رسول الله صلى الله عليه وسلم قال: وأنت قاعد قريش ولا هذا الأمر. فبرّ الناس تبع لبرّهم وفاجرهم تبعاً لفاجرهم. فقال: صدقت نحن الوزراء وأنتم الأمراء. ويؤخذ منه ضعف ما حكاه ابن عبد البرّ أن سعداً أبا أن يبايع أبا بكر حتى لقي الله. انتهى.

وأخرج مسلم في صحيحه عن أبي هريرة: قال سعد بن عبادة: يا رسول الله، لو وجدت مع امرأتي رجلاً لم أمسه حتى أتى بأربعة شهداء؟ قال رسول الله صلى الله عليه وسلم: نعم. قال: كلا، والذي بعث بالحق إن كنت لأعاجله بالسيف قبل ذلك. قال رسول الله صلى الله عليه وسلم: اسمعوا إلى ما يقول سيدكم إنه لغير وأنا أغير منه والله أغير مني.

وأخرج عن المغيرة [57. أ] بن شعبة: قال سعد بن عبادة: لو رأيت رجلاً مع امرأتي لضربته بالسيف غير مصفح عنه. فبلغ ذلك رسول الله صلى الله عليه وسلم فقال: أتعجبون من غيرة سعد؟ فوالله لأنا أغير منه والله أغير مني. من أجلّ غيرة الله حرم الفواحش ما ظهر منها وما بطن. ولا شخص أغير من الله ولا أحد أحب إليه المدح من الله، من أجلّ ذلك بعث المرسلين مبشرين ومنذرين. ولا شخص أحب إليه المدح من الله، من أجلّ ذلك وعد الله الجنة.

وفي الإحياء عن الغزالي عن جابر قال: بعث رسول الله صلى الله عليه وسلم بعثاً وأمّر عليهم قيس بن سعد بن عبادة. فجهدوا فخر لهم قيس تسع ركائب، فحدثوا رسول الله صلى الله عليه وسلم بذلك. فقال لهم رسول الله صلى الله عليه وسلم: إن الجود من شيمة أهل ذلك البيت. انتهى.

قلت: وقال شيخنا العلامة عبد الله بن سالم البصري كان قيس أطلس. فقال قومه: وددنا له لحيّة ولو بنصف أموالنا. وكان سعد لا يتزوج إلا بكراً وإذا طلق زوجة لم يتجاسر أحد يتزوجها بعده لشدة غيرته وشرفه. وفي كتاب الانتصار النفيس لجناب الإمام الشافعي محمد بن إدريس ما نصّه نبذة في فضل الأنصار. أخرج الشيخان وغيرهما: الأنصار لا يحبّهم إلا مؤمن ولا يبغضهم إلا منافق. من أحبّهم أحبّه الله، ومن أبغضهم أبغضه الله.

وصح في الخبر أن هذا الحي من الأنصار حبّهم إيمان وبعضهم نفاق، من أحبّهم أحبّه الله ومن أبغضهم أبغضه الله. الناس دثار والأنصار شعار. ولو سلك شعباً وسلك الأنصار شعباً لسلكت شعب الأنصار. ولا تحصي مناقبهم ولا تستقصى مآثرهم، وليس ذلك مخصوصاً بمن كان في زمن النبي صلى الله عليه وسلم من الأنصار، ولا يشمل من عداهم من ذراريهم فضلاً عن كونه خاصاً بمن كان بأمر القرى.

وقد روى أحمد عن أنس [57. ب] أن الأنصار اجتمعوا فقالوا إلى متى نشرب من هذه الآبار؟ فلو أتينا النبي صلى الله عليه وسلم. فسألناه لعله أن يدعو الله لنا، فيفجر لنا من هذه الجبال عيوناً. فجاؤوا بجماعتهم إليه صلى الله عليه وسلم. قال: (أهلاً ومرحباً)<sup>266</sup>، لقد جاء بكم إلينا حاجة. قالوا: أي والله يا رسول الله. قال: إنكم لو تسألوني شيئاً إلا أوتيتموه ولا أسأل الله شيئاً إلا أعطانيه. فأقبل بعضهم على بعض وقالوا: الدنيا تريدون اطلبوا

266 ب: (مرحباً وأهلاً).

الآخرة. فقالوا بجماعتهم: يا رسول الله، ادع الله أن يغفر لنا. فقال: اللهم، اغفر للأنصار وابتداء الأنصار وابتداء أبناء الأنصار. فقالوا: وأولادنا من غيرنا. فقال صلى الله عليه وسلم: وأولادكم من غيركم. فقالوا: يا رسول الله، وموالينا. فقال: وموالي الأنصار. وهذا شامل لمن بقي من ذراريهم إلى يوم القيامة.

ويؤيد هذا ما رواه الطبراني في الكبير من حديث معاذ بن رفاعة عن أبيه أن النبي صلى الله عليه وسلم قال: اللهم، اغفر للأنصار ولأبناء الأنصار ولذراريهم ولجيرانهم.

وفيه من حديث ابن عباس مرفوعاً: لا يبغض الأنصار رجل يؤمن بالله واليوم الآخر.

وفي ابن جبان: اللهم، اغفر للأنصار ولذراريهم ولذراري ذراريهم ولموالي الأنصار ولجيرانهم. فشمّل الدعاء الذرية ممن كان منها ولو من أولاد البنات إلى يوم القيامة. ويؤيد قوله تعالى: {ومن ذريته داوود} 267 إلى قومه وعيسى وهو من ذريته مع ابن السيدة مريم، فهو من أولاد البنات وابن نوح من زمن عيسى عليهم السلام. ففيه دليل على شمول دعائه صلى الله عليه وسلم لأبناء الأنصار وذراريهم إلى يوم القيامة ودعاؤه مستجاب لا يرد. لما روي مرفوعاً وكل نبي مجاب. انتهى.

فالحمد لله الذي أدخلنا في هذا العقد العظيم [58]. أ] وشرّفنا بدعوة النبي الكريم وأتحفنا بنسبه الطاهر وحسبه الفاخر. جعل الله ذلك لنا ذخيرة في الميعاد، إنه كريم متفضل جواد. وليكن هذا آخر ما أردناه في ذلك المقام وبالحمد والصلاة يحسن المبدأ والختام. وحسبنا الله ونعم الوكيل ولا حول ولا قوة إلا بالله العلي العظيم.

وكان الفراغ من كتابته يوم الاثنين المبارك 13 شهر محرم الحرام سنة 1161 ألف ومئة وأحد وستين، وهو بخط الفقير حسين العراقي غفر الله له.

### حاشية 171: من ب، 38. أ- 39. ب.

[ب: 38. أ] تلعب بشيبتة يميناً وشمالاً. فقال صعلوك: هذا إبراهيم الخليل صلى الله عليه وسلم. فسقطت على وجهي ودعوت الله تعالى بما حضر بي من الدعاء. ثم سرنا، فإذا دكان لطيف وعليها آدم شديد الأدمة لث اللحية، وتحت منكبیه ثوب أخضر قد جلّله. فقال لي صعلوك: هذا يعقوب النبي صلى الله عليه وسلم. ثم إننا عدلنا يسار النظر إلى الحرم.

فحلف أبو بكر أن تمّت الحديث قال: فقامت من عنده في الوقت الذي حدثني فيه وخرجت من وقتي إلى مسجد إبراهيم عليه السلام. فلما وصلت في المسجد سألت عن صعلوك فقيل لي: الساعة يحضر. فلما جاء قامت إليه وجلست عنده وطارحته بعض الحديث، فنظر إلي بعين منكر للحديث الذي سمع مني. [ب: 38. ب] فأوميت إليه بلطف تخلصت منه من الأثم والحرّج، ثم قلت له إن أبا بكر الأسكافي عمي فأنس إليّ عند ذلك. فقلت له: يا صعلوك، بالله لما عدلتم إلى نحو الحرم ماذا كان وما الذي رأيتم؟ فقال لي: ما حدثك أبو بكر؟ فقلت له: أريد أن أسمع منك أيضاً. فقال: سمعنا من نحو الحرم صائحاً يصيح: تجذبوا الحريم رحمكم الله. فوقعنا مغشياً علينا ثم أن بعد وقت أفقنا وقمنا وقد أيسنا من الحياة وأيست الجماعة منا. قال: فقال لي الشيخ فعاش أبو بكر الأسكافي

بعد ما حدثني أياماً يسيرة توفي وكذلك صلوك رحمهما الله تعالى.

وروي عن الحسن بن عبد الواحد بن رزق الرازي قال: قدم أبو زرعة قاضي فلسطين إلى مسجد إبراهيم عليه السلام، فجنّثُ أسلم عليه، وقد قعد عند قبر سارة عليها السلام في وقت الصلاة. فدخل شيخ فدعاه وقال: يا شيخ، أيما هو قبر إبراهيم من هؤلاء؟ فأومئ إليه الشيخ إلى قبر إبراهيم عليه السلام ومضى، فجاء شاب فدعاه وقال له مثل ذلك. فأومئ إله فقال أبو زرعة: أشهد أن هذا قبر إبراهيم لا شكّ فيه. نقل الخلف عن السلف كما قال مالك بن أنس رضي الله تعالى عنه إن نقل الخلف عن السلف أصح من الحديث. انتهى.

وأما قبر إسماعيل عليه السلام، ففي الحجر بمكة عند أمه هاجر. انتهى.

وصحن المسجد مكشوف تحت السماء بين مقامي الخليل ويعقوب عليهما السلام. ومقام السيد الصديق عليه السلام يتوصل إليه من السور السلیماني.

وذرع المسجد طوله في حصنه قبلة بشام من صدر المحراب الذي بجانب المنبر إلى صدر ضريح سيدنا يعقوب عليه السلام ثمانون ذراعاً تقريباً وعرضه شرقاً بغرب من السور الذي به باب الدخول إلى شباك ضريح [ب: 39] أ] السيد يوسف عليه السلام أحد وأربعون ذراعاً ونصف تقريباً وسمك السور ثلاثة أذرع ونصف من كل جانب وارتفاع البناء من الأرض ستة وعشرون ذراعاً، كل ذراع ذراع العمل. وهذا هو البناء السلیماني غير الرومي.

وعلى السور منارتان. إحداهما من جهة الشرق مما يلي القبلة، والثانية من الغرب مما يلي الشمال. وبظاهر السور السلیماني من جهة الشرق مسجد يسمى بالجاولية نسبة إلى أبي سعيد الجاولي سنة 730 ثلاثين وسبعمئة ناظر الحرمين الشريفين، وهو من العجائب قطع من جبل جومة الجاولي. وبني عليه السقف والقبلة، وهو في غاية الحسن. وبين هذا المسجد والسور السلیماني دهليز معقود مستطيل، وهو من العجائب على الهيبة والوقار، مرتفع على اثني عشر سارية مغروش أرضه وحيطانه وسوارية بالرخام. طوله قبلة بشام ثلاثة وأربعون ذراعاً وعرضه شرقاً بغرب خمسة وعشرين ذراعاً.

وأما ما فيها من المدارس والزوايا، فأحسنها زاوية الشيخ عمر المجرّد بحارة الأكراد. والمدرسة اليقورية عند باب المسجد الشمالي، وزاوية المغاربة بجوار عين الطواشي والقلعة حصن من بناء الروم يلصق المسجد من جهة الغرب وقفها الملك الناصر حسن مدرسة، وبها ضريح السيد الصديق والآن صارت مساكن لأهل البلد. وزاوية الشيخ علي البكاء بحارته، وزاوية القواسمة نسبة للشيخ أحمد القاسمي الجندي المدفون بها. ومسجد ابن عثمان وبه منارة ومسجد، ومشهد الشيخ يوسف النجار، والمدرسة الفخرية وقد صارت مهملة والرباط المنصوري تجاه القلعة.

وزاوية الشيخ إبراهيم المزي وزاوية الشيخ عبد الرحمن الأزدي، وزاوية [ب: 39] البسطامية، وزاوية السماقية، ومسجد الشيخ بهاء الدين الوفاي، وزاوية أبي عاقبة، ورباط الطواشي، وزاوية شيخون، ورباط مكّي، وزاوية الراي، وزاوية الشيخ علي الأدهمي، ومسجد مسعود، وزاوية الشيخ البيضة، وزاوية الموقع وزاوية الشيخ إبراهيم الحنفي، وزاوية الحضرمي، وزاوية الأعيض، وزاوية القادرية وبها الزاهد، ومسجد الأربعين هو مسجد غربي البلد على رأس الجبل يقال إن بها أربعين شهيداً، وهو مأنوس بقصد للزيارة.



## LUJ 日本語訳注

[1. a] ヌール・アッディーン・アリー・ブン・ガーニム・マクディスイー *Nūr al-Dīn ‘Alī b. Ghānim al-Maqdisī* の学識深き孫たるアブド・アルフィクフ・ムスタファー・アスアド・ルカイミー・フサイニー *‘Abd al-Fiqh Muṣṭafā As‘ad al-Luqaymī al-Ḥusaynī* 著、『エルサレムとヘブロンの至宝に関する栄光ある喜びの妙句 *Kitāb Laṭā‘if Uns al-Jalīl fī Taḥā‘if al-Quds wa al-Khalīl*』。神が彼ら兩名を赦し給わんことを。アーメン。神ただおひとりにこそ称賛あれ。

恩寵の泉におけるささやかなる美德の術に貧しき者、アフマド・ナーシル・アッディーン・マシュリキー *Aḥmad Nāṣir al-Dīn al-Mashriqī* の知事在任中に。神が彼を赦し給わんことを。

ムハンマド・サイド・ルカイミー *Muḥammad al-Sa‘id al-Luqaymī* が本書を讀んで曰く、

これ〔本書〕は栄光ある喜びとともにこの至宝を示し  
汝のクドスとヘブロンを歴史を集めた  
この両者は書物なり、これらが金泥をもって王冠の上に書きつけられたならば  
その王冠は小さきものとなろう  
アスアドはこの両者のために要約をまとめ上げた  
その美しき顔の上に精錬することによって  
そして甘き水場を贖いとして編み上げた  
灼熱もその水場を涼しく冷やす  
その淵にある伝承の数々は彼のもとで真正であった  
それがいかに病める者の心を癒しているか  
彼はクドスの伝承によって我が耳を喜ばせた  
汝の伝承のうちに我を加え給え、我が友よ  
救済の持ち主に語り伝える者のために  
我が喜びは栄光ある至宝をもってその歴史を綴る  
それは樂園の門と同じ 8 つの堂を持ち  
その結びは美しく、そこに示されたことは信頼に足る

神が両者を赦し給わんことを。1143 年。

神ただおひとりにこそ称賛あれ。これは魂の聖性の閃きにして神聖なるスンナの輝き、創造主のご意志の聖性である。これは美質にかけて並ぶものはなく、その美質はあらゆる美しき連



れ合いがそこから出て行き、健やかなる性質がそれによって良きものとなり、あらゆる高貴なる気質がそこから離れないというものである。幸運がそれを遠隔の地へとイスラーさせた間、確固たるものが雄弁の間を通り過ぎ、それによって最も優れた広場への旅が特別なものとなった。それにつけても、広場ではどれだけ雄弁術が割り当てたものが、高貴なる若駒に乗っていただろうか。そしてそれは雄弁の柱によって拭い去られ、技能が作品の秘密によってそれを許した。最も遠い別れに悲しみへと向かっている別れの時に際し、神は私にその技能を示して下さった。しかし私はただ、「旅路の終わりの日の肉体は、小さきものとして神に従うことによって、それに別れを告げただろうか。公正さをもって馬を追い立てることによって、それに別れを告げただろうか。その体はそれに従って、それに別れを告げただろうか」と言う者の言葉を繰り返すのみである。どうして兄弟との別離が、死者たちにその正義を与えないことがあるのか。それは恋人との別離にもまして辛く苦しいものであり、私がそれを美しく要約しそれに美しく敷石を敷くことに拠っている限り、私にはそれを形容することなどできはしない。くだらないおしゃべりとは無縁の称賛の乙女たちにふさわしいことでもって飾り気をなくせば、立派な装飾に拠って狭くなっている場所もどうなることであろうか。

私は、兄弟が無力さや突然の別れの恐怖から守られるようにと、また神の寛大なる恩寵を請う。まことに神は最も豊かにして栄光ある方である。神は私と彼をひとつに集め給うた。神の愛情を受けしもののように。神のご愛情は、我々が神に望み、また神がそうあれかしと求められる以上のものである。神ならずして魂に力を及ぼすことはなし。朋友にして常に誠実なる者アフマド・ブン・フサイン・キーワーニー **Aḥmad b. Ḥusayn al-Kiwānī** がこれを述べた。神が彼ら兩名の罪を赦し給わんことを。1150年末。

[1. b] 慈愛深く慈悲あまねき神の御名において。神にこそ我が信頼はあり。

神に称賛あれ。神は計り知れぬほどの祝福を我らに定め給い、そのために我々にアクサー・モスク参詣をお与えになった。神は我々に豊かな憐れみを与え給い、[ミンハージーによる]『親しき友の贈り物 *Ithāf al-Akhiṣṣā'*』と [ウライミーによる]『栄光の喜び *al-Uns al-Jalīl*』の2つの書を要約することに我々をお導きになった。神の恩寵の門に祝福と平安のあらんことを。神はそれをイスラーによって特別なものとなさった。その僕（ムハンマド）をイスラーさせ給い、彼にその高貴なる恩寵を与え給うた方に栄光あれ。げに彼は、先の世の人々と後の世の人々の主人であり、預言者たちと使徒たちの封印である。神よ、彼と彼の聖なる一族、彼の聖なる教友方に、麝香よりも芳しく、人々が集められ復活させられる日に至るまで永続する祝福と平安を与え給え。

さて、神は私にかの聖なる谷を目指すことを恵み給い、私にかの神聖にして聖なるものとされたモスクへ参詣するという栄誉を与え給うた。私はその広大な地域に滞在し、溢れんばかりの涙を流してその戸口に口づけし、その壁龕から光のランプを借りた。その美質は私の前に、

奥深く隠されていたものを明らかにした。私はそれらの遺跡を目にして揺れ動き、その馥郁たる風の香りを我が身に浴びた。

〔かつて〕そこのある地域が、私の父祖イブン・ガーニム **Ibn Ghānim** に委ねられた。〔それは〕良き時代の宝玉、首飾りであった。さて私は、そうした偉業を守るため、またそれらの儀式を正しく行うために、私の目の前に何か書物がないか探し求めた。そして私は、『親しき友の贈り物 *Ithāf al-Akhiṣṣā'*』と『栄光の喜び *al-Uns al-Jalīl*』を見つけた。〔様々な知識を〕集めて総合的に扱うという技を組み合わせた 2 つの書である。〔これらは〕編纂されたもののうちで最も優れ最も偉大なものであり、この方式で作られたもののうちで最も優れたものである。しかしながらこの偉業を語る上では、それを要約したり短縮したりすることは、参詣者にとっては辛いことである。私はその場所に客人として留まり、夏の雲のごとくにその広場に滞在した。私は知識人たちが望むものからかけ離れることはせず、〔かの 2 つの書に〕課されている正しい作法から離れることもしなかった。そして私が戻ろうと決意し、私の大切な人をまどろみから目覚めさせたとき、それはその杖を放り投げ、帰途にある旅人が陽気であるように、そこに留まった。そして私は再び、それら 2 つ〔の書〕の庭に目を向けた。すると私の本質の中に、私が除外した伝承の変遷や、私が苦しんだ原典の混乱とともに、私の考えを反映するものが現れた。[2. a] もし私がこれら 2 つ〔の書〕から、旅人の楽しみとなり、滞り者や参詣者の糧となるようなものを要約したならば、私はそれらの庭から、優美な葉をつけたナツメヤシを収穫し、それらの熟れた枝々からその香り高い紅の花々を集めることができよう。そして慈悲と恩寵を持つ方を讃えることによって、楽園の門の数と同じ〔8 つの〕門（章）を持つ庭がもたらされた。〔それらの章は〕序に始まり結びに終わっているが、その結びの美しさと、イスラーム世界との平安による結び付きは桁外れのものである。私はこれを、『エルサレムとヘブロン<sup>1</sup>の至宝に関する栄光ある喜びの妙句 *Laṭā'if Uns al-Jalīl fī Taḥā'if al-Quds wa al-Khalīl*』と名付けた。

序：聖なる地の境界と、敬神の土台となるその礎

第 1 章：バイト・アルマクデイスの名称と神聖性、参詣者に贈られる高貴なる贈り物

第 2 章：神聖なるクドスの町を整えた者とそこに住んだ者、そこが 2 度征服されたことについて簡潔に

第 3 章：アクサー・モスクと岩〔のドーム〕の様子、詳しく述べられることのない偉業

第 4 章：クドスの町の様子とそこにあるマシュハド、その天幕の中にある各所

第 5 章：ヘブロン<sup>1</sup>の町とそのモスク、神の友〔アブラハム〕の物語と、彼のマシュハドに参詣することの美德

第 6 章：バイト・アルマクデイスの周囲にある高貴な偉業のある村々

第 7 章：預言者たち、教友たち、著名な人々のうち、バイト・アルマクデイスに入った人、

または知識人のうちでそこで死に埋葬された人

第 8 章：ヒドルー彼に平安あれ—の物語と、バイト・アルマクデイスにある彼の位高き住まい

結び：シャームの物語、その美德と偉大さ、その場所の神聖さ

私はそれを、旅人たちのための案内書、参詣者たちに贈られた贈り物とした。驚嘆すべき事々のうち最も不可思議なもの、不可思議な事々のうち最も驚嘆すべきものの中で、今ここにあるこの書は完全なものである。私は結びの麝香をもって、それに判を押すことを望んだ。私がもう一度クドスに戻っていくことは容易いことであり、また私は徹頭徹尾そうすべきなのである。そして私は再びかの遺跡に座った。すると神を称賛することによって、経験は物語に行き当たった。しかしながらそこには、人々が忘れ去っていた偉業や、語らなかった場所があり、ある信頼に足る人物が私をそこへ案内してくれた。そこで私は決意を固め、そこに留まった。[2. b] 私はその最も近い場所に関するあらゆることや、私が述べたような題をつけたものを、最もふさわしいように語ろうと思いついたのである。神はお望みにかなう者を、正しき道へと導き給う。神は我々を清算し給う。なんとすばらしき権力者であることか。

#### 序：聖なる地の境界と、敬神の土台となるその礎

その南にはヒジャーズの地があり、その 2 地域の間は峻嶮なサウダー山脈 *Jibāl al-Sawdā'* によって隔てられている。その山脈とアイラ *Ayla* の間はおよそ 2 日行程である。アイラの平地がヒジャーズの先端であり、そこはイスラエルの民の荒野の一部である。そことバイト・アルマクデイスの間は、荷を持った旅にしておよそ 8 日である。ドゥーマト・アルジャンダル *Dūmat al-Jandal* より向こうの東には、サマーワの砂漠 *Barriyat al-Samāwa* がある。そこは広く、イラクへとつながっている。そこにはシリアのアラブたちが住んでいる。バイト・アルマクデイスからそこまでの距離は、アイラへの距離と同等である。北には、東と接するところにユーフラテス川があり、バイト・アルマクデイスからの距離は荷を持った旅にしておよそ 20 日である。この境界より、完全にシリアの王国の版図となるのである。西には地中海があり、これは塩の海である。バイト・アルマクデイスからそこまでの距離は、パレスチナのラムラ *Ramlat Filastīn* の方から見て 2 日間である。南にはエジプトのラムラ *Ramlat Miṣr* とアリーシュ *al-'Arīsh* がある。そことバイト・アルマクデイスの間は、荷を持った旅にして 5 日である。その先そこはイスラエルの民の荒野、すなわちシナイ山に隣り合っており、この方角からタブーク *Tabūk*、そしてドゥーマト・アルジャンダルへと伸びて、東の境界へとつながっている。

クドスの境界については、慣例としては神聖なるクドスの行政が及ぶ範囲であり、内的にはその地のカーディーの判断が及ぶ範囲である。南には、我らが主人たる神の友〔アブラハム〕一神よ彼に祝福と平安を与え給え—の行政区があり、それらの中にはサイール村 **Qaryat Sa'ir** とそれに向かい合うものがある。その村はクドス行政区の中に入っている。東にはヨルダン川があり、この川は「シャリーア **al-Shari'a**」と呼ばれている。東にはナーブルス **Nāblus** の町の行政区があり、それらの中にはサンジャル **Sanjal** とガルーン **Gharūn** の村がある。これら 2 つの村はクドス行政区の中に入っている。境界の最後はラース・バニー・ザイド **Ra's Banī Zayd** で、ここはラムラ行政区の中に入っている。西はパレスチナのラムラに隣り合っており、バイト・ナウバ村 **Qaryat Bayt Nawba** はクドス行政区の中に入っている。またガザの町にも隣り合っており、アジューズ村 **Qaryat 'Ajūz** はガザ行政区の中に入っている。

我らが主人たる神の友—彼に平安あれ—の町については、南にはヒジャーズを攻撃する際の武器庫と、クバーブ・アッシャーワリーヤ **Qubāb al-Shāwariya** がある。そこはアラブ族のバヌー・シャーワルに由来する村である。東にはアイン・ジャッディー村 **Qaryat 'Ayn Jaddī** があり、そこは神の友—彼に平安あれ—の町の行政区の中に入っている。[3. a] またロトの湖（死海）**Buḥayra Lūt** もある。この境界はカラク行政区との間にある。北は、我々が先に述べたように、神聖なるクドス行政区との間に、サイール村とそれに向かい合うものがある。西には、パレスチナのラムラと向かい合う方角にザカリヤ村 **Qaryat al-Zakariyā** がある。そこはヘブロン行政区の中に入っている。またガザと向かい合う方角にはサムサジュ村 **Qaryat Samsaj** があり、そこはバヌー・アブド **Banū 'Abd** の地であるサクリーヤ村 **Qaryat Sakriya** に隣り合っている。そこは神の友—彼に平安あれ—の町の行政区の中に入っている。バイト・アルマクデイスから我らが主人たる神の友〔アブラハム〕—彼に平安あれ—の町までの距離はおよそ 13 ミール<sup>1</sup>、あるいは 18 ミールである。神が最もよくご存じである。

## 第 1 章：バイト・アルマクデイスの名称と神聖性、参詣者に贈られる高貴なる贈り物

その名前については、数多く、その偉大なる事績を表すものである。その中には「アクサー・モスク **al-Masjid al-Aqṣā**」がある。これはそこが参詣される最も遠隔のモスクであり、それによってハラーム・モスクからの報いが求められるところであるからである。あるいはまた、そこがふさわしく理想的な程度に隔たっていることのゆえである。あるいはまたそこが現世の中心にあり、かつてアブド・アッラー・ブン・サラーム **'Abd Allāh b. Salām** が預言者ムハンマドから伝えたように、何も加えられず何も減じられないことのゆえである。

イーリヤーのモスク **Masjid Īliyā'**：〔イーリヤーの綴りは〕キブリヤー **kibriyā'** と同様であ

<sup>1</sup> ミール **mīl** はイスラーム地域における距離の単位であり、1 ミールは約 2km である。

る。バイト・アルマクデイス **Bayt al-Maqdis** : 神に仕える場所のような、すなわち「罪から清められた場所」ということである。これは「手桶 **al-qudus**」から派生した言葉であり、洗浄ということである。

バイト・アルムカダス **al-Bayt al-Muqaddas** : ダンマのミームにシャッダ付きのダールで。すなわち偶像や十字架から清められた場所、ということである。

クドス **al-Quds/ al-Qudus** : スクーンのダールかダンマで。動名詞。

バイト・アルマクドゥス **Bayt al-Maqdus/ Bayt al-Maqds** : ダンマのダールかスクーンで。

サリム **Sallim** : 点のないスィーンで。その意味は「天使たちの挨拶が数多くある平安の家」である。

イーリヤーの町／イーリヤー **Kūrat Īliyā'/ Īliyā'** : イーリヤーの意味は「神聖なる神の家」である。

アウシャリム **Awshalim** : ファタハのハムザにファタハのシーン、カスラのラーム。

ウーリサリム／ウーリシャリム **Ūrisalīm/Ūrishalīm**、あるいは点のあるシーンにシャッダつきでシャッラム **Shallam**、またはシュラム **Shulam**。

バイト・アーイル **Bayt Āyl** : すなわち「神の家」。

〔その他〕シオン **Ṣahyūn**、カスルース **Qaṣrūth**、バーブーシュ **Bābūsh**、クール・サッラー **Kūr Sallā**、アズィール **Azil**、サルーン **Ṣalūn** など。またバイト・アルマクデイスは「オリーブ **al-Zaytūn**」とも言われる。しかし「聖域 **al-Ḥaram**」とは呼ばれない。

そこ（バイト・アルマクデイス）の持つ神聖さや恩寵については、すでに神聖なるクルアーンの章句や、いと高くすべてを超越したスンナの中で明らかにされており、またそれに関するはっきりとした言い伝えや、真正で重みのある伝承も豊かにある。

クルアーンの章句については、至高なる方のお言葉、〈聖なる礼拝堂から、我らが周囲を祝福した遠隔の礼拝堂まで、夜の間はその僕を連れて旅し給うたお方に栄光あれ〉(Q17:1)がある。[3. b] そこにある恩寵についてはこの1句で十分であり、祝福が豊かに集まっているのである。というのも、その周囲が祝福されたとき、その祝福は2倍になったからである。そしてそこからミーラージュが行われたということは、その地の神聖さを示しており、それが完全に成し遂げられたことを注意しているのである。「我らが周囲を祝福した」とは、河川を流し果物を生やしたということである。「我らが周囲を祝福した」とは、パレスチナとヨルダン、すなわちシャリーア川のことである。あるいは「我らが周囲を祝福した」とは、シリアのことである。あるいは「我らが周囲を祝福した」とは、預言者たちの墓があるがゆえのことである。すなわちそこは、預言者たちの住まいであり墓であり、天使たちや啓示が下って来るがゆえに、またそこに人々が集められるところがあるがゆえに、「祝福された地」と呼ばれるのである。

ズフリー **al-Zuhri** はバイト・アルマクデイスにやって来て、ある人がバイト・アルマクデイスの恩寵についていろいろと語っているのを見た。ズフリーは彼に言った。「あなたはかの方

のお言葉、〈聖なる礼拝堂から、我らが周囲を祝福した遠隔の礼拝堂まで、夜の間はその僕を連れて旅し給うたお方に栄光あれ〉を言うまでは終われませんよ」

またその中には、至高なる方がイスラエルの民に言われたお言葉、〈この町に入り、好きなところで存分に食べよ。伏し拝みつつ門に入り、「お赦しを」と言え。そうすれば、我らはお前たちの罪を赦してやろう。また善行者にはさらに多く報いよう〉(Q2:58)がある。神はバイト・アルマクデイスを除いてはモスクを特別なものとはなさらず、〔バイト・アルマクデイスにおいては〕ただその特別性のゆえに、そこで跪拝することにより彼らの罪が赦されるのである。

またその中には、至高なる方のお言葉、〈我らは彼とロトを救って、万民のために我らが祝福した地に連れ出した〉(Q21:71)がある。また至高なる方のお言葉、〈また我らはマリアの子とその母をしるしとなし、安泰にして泉湧く丘に宿所を与えた〉(Q23:50)がある。また至高なる方のお言葉、〈神がお前たちのために定め給うた聖地に入れ〉(Q5:21)がある。また至高なる方のお言葉、〈彼らを取り急いで墓から出てくる〉(Q70:43)がある。これは、バイト・アルマクデイスの岩のもとに〔急ぎ来る〕であると言われている。また至高なる方のお言葉、〈我らはイスラエルの子らのために優れた居住地を備えてやった〉(Q10:93)がある。これはシャームのことであり、また特にバイト・アルマクデイスのことである。また至高なる方のお言葉、〈召還役が近い場所から呼びかける日〉(Q50:41)がある。これはすなわち、岩からである。

また至高なる方のお言葉、〈イチジクとオリーブにかけて〉(Q95:1)がある。ウクバ・ブン・アームル 'Uqba b. 'Āmir 曰く、「イチジクとはダマスカス、オリーブとはバイト・アルマクデイスのことである」またアブー・フライラ Abū Hurayra 曰く、「我らが主—その栄光よ高らかなれ—は、4つの山々にかけて誓われて、〈イチジクとオリーブにかけて、シナイ山にかけて、この平安の国にかけて〉と言われた。すなわちイチジクとは輝かしき角たるダマスカスのモスク、オリーブとはオリーブ山のことでバイト・アルマクデイスのモスク、シナイ山とは神がモーセ—彼に平安あれ—にお言葉をかけられた地、この平安の国とはメッカの山のことである」

またその中には、至高なる方のお言葉、〈彼らの間に壁が立てられ〉(Q57:13)がある。これはバイト・アルマクデイスの壁のことで、[4. a] その内側とはラフマ門（恩寵の門）Abwāb al-Rahma、外側とはワーディー・ジャハンナム（地獄の谷）Wadī Jahannam のことである。また至高なる方のお言葉、〈我らは詩編の中にも、訓戒の後で、「大地は、我が正しい僕たちがこれを継ぐ」と記しておいた〉(Q21:105)がある。ある解釈者は、「聖なる地はムハンマド—神よ彼に祝福と平安を与え給え—のウンマに継承される」と言っている。また至高なる方のお言葉、〈神の礼拝堂で御名が唱えられるのを妨げ、それを破壊しようと試みる者、こんな者より悪い輩がいるだろうか。このような者はもともと、恐る恐るそこに入ることしかできないのだ。彼らには現世の恥辱があり、来世の大いなる懲罰がある〉(Q2:114)がある。これは、ビザンツがムスリムたちにバイト・アルマクデイスの中に入ることを禁じたときに下ってきたも

のである。しかし神が彼らを追い出し給うたので、彼らは誰一人として、怯え、ジズヤと恥辱の衣を被って弱々しい状態でなければ、決してそこに入ることができないのである。

スンナについては、アブー・フライラが預言者ムハンマドより伝えて曰く、「ハラーム・モスク、アクサー・モスク、この私のモスクの3つのモスクに鞍を据えよ」またアブー・サイード・フドリ―**Abū Sa'id al-Khudrī** が預言者ムハンマドより伝えて曰く、「ハラーム・モスク、私のモスク、バイト・アルマクデイスのモスクの3つのモスク以外に向けて、鞍を据えてはならない」

アブー・ザッル **Abū Dharr** 曰く、「私が『神の使徒よ、大地に最初に置かれたモスクはどれですか？』と言うと、彼は『ハラーム・モスクである』と言った。私が『その次には？』と言うと、彼は『アクサー・モスクである』と言った。私が『それら2つの間はいかほどですか？』と言うと、彼は言った。『40年間である。しかし礼拝の時間になったらどこでも礼拝しなさい。そこがモスクである』『それら2つの間は40年間である』という彼の言葉は、それについての言及があるように、天使たちがカアバとバイト・アルマクデイスを建設した間のことか、あるいはアブラハムによるカアバ建設とヤコブによるバイト・アルマクデイス建設の間のことを表すものである。

イムラーン・ブン・フサイン **'Imrān b. Ḥuṣayn** 曰く、「私は言った。『神の使徒よ、メディナは何とすばらしいのでしょうか』すると彼は、『お前がバイト・アルマクデイスを見たことがあったなら』と言った。私が『そこのほうがすばらしいのですか？』と言うと、預言者―神よ彼に祝福と平安を与え給え―は言った。『どうしてそうではないことがあるのか。そこそこにあるすべてのものは、参詣を受けるものであって、参詣されるものではない。魂たちはそこへと導かれるのであって、バイト・アルマクデイスの魂が導かれるのではない。しかしながら神はメディナを、私のゆえに高貴なものとし美しいものとなさった。私がそこで生き、そこで死ぬがゆえに。そうでなければ、私はメッカからヒジュラなどしたであろうか。私は未だかつて、メッカにおいて見た月よりも美しい月を見たことがない』

カアブ〔・アルアフバール〕 **Ka'b al-Aḥbār** 曰く、「終末のときは、バイト・アルハラームがバイト・アルマクデイスのもとを訪れるまでは始まらない。それらは2つながら、中にその民を抱えたまま樂園に導かれる。整列と清算はバイト・アルマクデイスにて行われる」

イブン・イムラーン **Ibn 'Imrān** 曰く、「ハラームは7つの天においても、地上におけるのと同様に神聖な場所であり、バイト・アルマクデイスも7つの天においても、地上におけるのと同様に神聖な場所である」

カアブ曰く、「神は毎日2度、バイト・アルマクデイスをご覧になる」また曰く、「樂園の諸門のうち天から開かれた門があり、そこからは終末のときに至るまで毎朝、バイト・アルマクデイスの上にお恵みと恩寵が下って来る。神のもとで、大地のその他の地域の中にバイト・アルマクデイスのごときものはない。[4. b] そこは神にとって最も高き模範である。それはまる

で、多くの財物を持ち、その中に一番大切な財物を入れた宝箱を持っている王のようなものである。朝になれば、彼は自分の財産の中で真っ先に、彼のその宝箱に目を向けるであろう。同様に万世の主も、毎朝大地の中で真っ先にそこに目を向け給い、その上にお恵みと恩寵を与え給う。そしてその後、大地のその他の場所にそれを与え給うのである」

イブン・アッバース **Ibn 'Abbās** が預言者ムハンマドより伝えて曰く、「樂園の一部を見たいと思う者は、バイト・アルマクデイスを見よ」

アナス・ブン・マーリク **Anas b. Mālik** 曰く、「樂園はバイト・アルマクデイスを恋い求めている。というのもバイト・アルマクデイスはパラダイス **al-Fardūs** の園の一部であるからである。パラダイスとはシリア語で庭園という意味である」また曰く、「バイト・アルハラームにやって来た者は赦され、〔樂園での位階を〕8段上げられる。使徒のモスクにやって来た者は赦され、4段上げられる。バイト・アルマクデイスにて、信徒たちや女信徒たちのために毎日25回赦しを請うた者は、神が彼を守り給い、彼をバーディルたちの中に入れて下さる」

言い伝えや伝承については、ハーリド・ブン・マアダーン **Khālid b. Ma'dān** より次のようにある：バイト・アルマクデイスの正面には天から開かれた門がある。神は毎日7万人の天使たちを〔そこから〕下し給う。彼らは、バイト・アルマクデイスで礼拝することを切望する者のために赦しを請う。ある伝承では、「彼らは、バイト・アルマクデイスにやってきてそこで礼拝する者のために、神に赦しを請う」とある。

ワフブ・ブン・ムナッビフ **Wahb b. Munabbih** 曰く、「バイト・アルマクデイスの民は神の隣人である。まことに至高なる神は、その隣人を苦しめ給うことはない」

アター' **'Aṭā'** 曰く、「終末のときは、神がご自身の僕たちのうち最良の者たちをバイト・アルマクデイスへと行かせ、そこに住まわせ給うまでは始まらない」

アブド・アッラー・ブン・ウマル **'Abd Allāh b. 'Umar** 曰く、「バイト・アルマクデイスは預言者たちが建て、整備したところである。またそこには1シブル<sup>2</sup>たりとも、天使が跪拝したり立ったりしなかった場所はない」ヌウマーン・ブン・アター **Nu'mān b. 'Aṭā'** がある人に、「あなたはバイト・アルマクデイスについてどのように言われますか？」と聞かれた。彼は言った。「そこには1シブルたりとも、天使や預言者が跪拝しなかった場所はない。ゆえにおそらく〔あなたがバイト・アルマクデイスで跪拝するとき〕あなたの額は、天使や預言者の額と合わさることになるだろう」ムカーティル・ブン・スライマーン **Muqātil b. Sulaymān** 曰く、「そこには1シブルたりとも、かつて遣わされた預言者やお側に仕える天使が礼拝しなかった場所はない」

〔バイト・アルマクデイスには〕毎夜7万人の天使たちが下って来る。彼らは、「至高なる神の他に神なし」と言い、「神は偉大なるかな」と言い、「神に栄光あれ」と言い、「神に称賛あれ」と言い、「神は神聖なるかな」と言い、「神は偉大なるかな」と言いながら下ってきて、

<sup>2</sup> シブル **sibr** はイスラーム地域における長さの単位で、手のひら（手首から指先まで）の長さを表す。



終末のときに至るまで帰っていくことはない。

〔バイト・アルマクデイスについては〕数多くの奇跡、明らかで良く知られたしるしの数々がある。その中には次のようなものがある。そこは神が最初に祝福したところであり、主—その栄光よ偉大なれ—は復活の日に、そこをバイト・アルマクデイスの地のお立ち処となさる。神はそこに、すべての大地の中から選び出されたものを置き給うた。そこは、[5. a] 神が〈万民のために我らが祝福した地〉というお言葉によって述べられた地なのである。

至高なる神はモーセに、「バイト・アルマクデイスに向かえ。まことにそこには我が炎と我が光、我が釜がある」神はそこでモーセにお言葉をかけられ、またモーセはそこで、栄光あるいと高き彼の主の光を見た。神—その栄光の高らかならんことを—はそこで、山の前に顕現された。また神はそこでアダムやダビデ、ソロモンの悔悛を受け入れ給い、ソロモンの上に彼の王権と、鳥の言葉を理解する能力を戻し給うた。ソロモンはそこで神に、自分の後の何人にもふさわしくないような王権を求め、神は彼にそれを与え給うた。神はザカリヤにヨハネ〔誕生の〕福音を授け給うた。彼は幼少のころから知恵を授けられた。天使たちはダビデの上にミフラブを柔らかな褥とした。神は彼のために山々と鳥を従わせ、彼のために鉄を柔らかくし給うた。毎夜お側に仕える預言者たちが近づいてきて、天使たちが下って来る。彼らすべてに平安のあらんことを。神はイムラーンの妻の誓言を受け入れ給うた。マリア—彼に平安あれ—に、夏には冬の果物が、冬には夏の果物がもたらされた。ザカリヤが彼女を養育した。彼女のためにナツメヤシが植えられ、瑞々しく熟れた果実を実らせた。神はバイト・アルマクデイスにて、マリアにイエス—彼に平安あれ—〔誕生〕の福音を授け給うた。彼は幼少のとき、揺り籠の中から言葉を話した。彼の上に食卓が下された。彼は死人を生き返らせ、数々の奇跡を行った。聖霊が彼を助けた。彼は天へと上げられた。マリアは死に、世の中の女性たちに勝る恩寵を与えられた。

アブラハム—彼に平安あれ—は、クーサ **Kūthā** からバイト・アルマクデイスへとヒジュラした。バイト・アルマクデイスへのヒジュラは、預言者ムハンマドから「我がウンマのテントは、我がヒジュラの後にもバイト・アルマクデイスに向かってヒジュラする」と伝えられているように、終末のときにも行われる。アブラハムとイサクは、バイト・アルマクデイスに自身を埋葬するようにと遺言した。アダムもヒンドで死んだ際、そこに自身を埋葬するようにと遺言した。

そこにかの鎖が下って来て、またそこから上っていった。契約の箱とサキーナ **al-Sakina** も同様である。そこに向かってイスラーが行われ、そこからミーラージュが行われた。そこに預言者たちや天使たちが下って来て、ムハンマド—神よ彼に祝福と平安を与え給え—はそこで彼らのイマームとなって礼拝した。彼はそこで炎を持つ天使と庭園の乙女たちに会った。その方向に向かって、彼以前の預言者たちのキブラがあった。

そこは人々が集められ復活させられる地である。そこに〔最後の審判の際に人々が渡るとい

う〕細き道 **al-Ṣirāt** が立ち上り、天使たちが付き添う。そこから大地は折り畳まれ、人々は細き道に乗る。そこに向けて、神は雲の影と天使たちを下し給う。そこでは、人間とジン以外の者は土に還る。人々はそこから、樂園と地獄とに分けられる。バイト・アルマクデイスは鯨の背中に乗っており、その頭は太陽の昇るところ、その尾は太陽の沈むところである。その秘跡の中には次のようなものがある。樂園の庭園のうちのひとつを歩くのは、[5. b] バイト・アルマクデイスの岩を歩くことである。そこで礼拝する者は、天で礼拝するのと同様である。

大地はそこから広げられ、またそこから折り畳まれる。大洪水から最初に顔を出したのは、バイト・アルマクデイスの岩であった。箱舟は、カアバの周りを回った後、岩の周りを 1 週間回った。次のようにも言われている。箱舟は流れて、バイト・アルマクデイスにやってきた。そこで箱舟は止まり、神の許しを得て口をきいて言った。「ノアよ、ここが預言者たちの住むべきバイト・アルマクデイスのある場所です」ノアは箱舟から出た後 350 年生きた。ノアはカラクに埋葬された。

その中には次のようなものもある：神は両聖地同様、神の敵反キリストがそこに入ることを禁じられた。そこは荒廢においては最後の地となる。ゴグとマゴグは、両聖地とバイト・アルマクデイスを除く大地を打ち滅ぼす。そこには彼らの滅びがある。そこで〔天使〕イスラフイルが第 2 のラッパを吹くと、信徒たちの魂はその肉体に飛んでいく。至高なる神はバイト・アルマクデイスの岩に言われる。「我が偉大さと栄光にかけて、私は汝の上に我が玉座を据え、汝のもとに我が被造物を集める。私は汝の川を、乳の川、蜜の川、酒の川を流す。私はその日彼らの主となり、ダビデが彼らの王となる」

〔バイト・アルマクデイスへの〕参詣者が贈られる栄光の贈り物については、ナサーイー **al-Nasā'ī** がイブン・ウマルに由来するイスナードによって、預言者ムハンマドの伝承を伝えている：ダビデの子ソロモン―彼ら 2 人に平安あれ―はバイト・アルマクデイスの神殿<sup>3</sup>を建設したとき、至高なる神に 3 つの特性を求めた。彼は神に、神の知恵にも匹敵する知恵を求め、それを与えられた。また彼は神に、彼以降の何人にも相応しくないような王権を求め、それを与えられた。そして彼は神に、神殿の建設が完了したときに、そこに礼拝しにやってきた者が、母親から生まれた日のごとくにその罪から逃れられるように、と求めた。イブン・マージャ **Ibn Māja** はこの物語に、次のように付け加えている：預言者―神よ彼に祝福と平安を与え給え―は言った。「2 つについては、彼はすでにそれらを与えられた。私は、彼に 3 つ目のものも与えられていれば、と思う」ハーキム **al-Ḥakīm** は彼の『補遺』の中で、両シャイフによる伝承を取り上げている。

カアブ・アルアフバール曰く、「バイト・アルマクデイスが自身の荒廢について、その主に不満を言った。そこで神は啓示を下して言われた。『私は必ずや汝を、〔汝を〕耕す者や〔汝の

<sup>3</sup> 原語は「マスジド・バイト・アルマクデイス **masjid Bayt al-Maqdis**」。ここでは「マスジド」を「神殿」と訳す。

中で] 跪拝する者で満たす。汝のもとには、その巢に帰る鷺のはためきが飛び、その卵を愛し求める鳩が向かっていく』するとある人がカアブに、「神を畏れなさい、カアブよ。それ（バイト・アルマクデイス）に舌があるとでも？」と言った。カアブは、「そうだ、そしてあなた方ひとりひとりの心のような心もある」

アナスが預言者ムハンマドより伝えて曰く、「清算のためにバイト・アルマクデイスを参詣した者には、神が 1000 人の殉教者の報いを与えて下さる」また彼が預言者ムハンマドより伝えて曰く、「知識人のもとを訪れた者も、バイト・アルマクデイスを参詣した者と同様である。バイト・アルマクデイスに参詣した者は、神がその者の肉と体を地獄の炎から守って下さる」  
[6. a] また彼が預言者ムハンマドより伝えて曰く、「バイト・アルマクデイスにて礼拝した者の罪は、そのすべてが赦される」

マクフル・ブン・カアブ **Makḥūl b. Ka'ab** 曰く、「礼拝のみを望んでバイト・アルマクデイスへと出向き、そこでスブフ、ズフル、アスル、マグリブ、イシャーの 5 回の礼拝を行った者は、母親から生まれた日のごとくに、その罪から逃れられる」

アブー・ウマーマ・バーヒリー **Abū Umāma al-Bāhili** が預言者ムハンマドより伝えて曰く、「かの家にハッジし、ウムラを行い、バイト・アルマクデイスにて礼拝し、ジハードを行い、リバートに抛って戦った者は、すでに私のスンナのすべてを完遂している」

イマーム・アフマド **al-Imām Aḥmad** が彼の『ムスナド』の中で、アブー・ウマーマより預言者ムハンマドによる伝承を伝えている：「我がウンマの中のある一団は、正義によって勝利者であり続け、その敵に対して勝ち続けるであろう。神の命が訪れるまで、彼らに背く者も彼らに襲いかかる敵どもも、彼らを傷つけることはできない。彼らはこのようである」人々が「神の使徒よ、彼らはどこにいるのですか？」と言うと、彼は「バイト・アルマクデイスと、バイト・アルマクデイスの周辺である」と言った。

ムアーズ〔・ブン・ジャバル〕 **Mu'āz b. Jabal** が預言者ムハンマドより伝えて曰く、神は言われた。「シリアよ、汝は我が国々の中から、私が選び出したものである。私は汝のもとに、我が僕たちの中から私が選び出した者を向かわせる。汝のもとで生まれたのに、汝を嫌って汝以外のものを選ぶ者には罪と苦しみが、汝以外のところで生まれたが、汝を選んだ者には我が恩寵がある。シリアよ、〔母親の〕胎が子供のために十分な広さがあるように、私は汝の民に日々の糧を豊かに与える。私が月日を創造してからというもの、我が目は露と雨をもって汝のうえに注がれている。汝の中で財産に欠ける者であっても、良きことに欠けることはない。ウールシャリムよ、汝は我が光を持つ聖地であり、汝の中には人々が集められ復活させられる地がある。復活の日、私は汝を、その夫のもとに向かう花嫁のように向かわせる。汝の中にいる者は、油と小麦を豊かに与えられる」

カアブ曰く、神はバイト・アルマクデイスに言われた。「汝は我が樂園、我が聖地、我が国々の中で私が選び出したものである。汝のもとに住まう者には我が恩寵が、汝から出て行く者に

は我が怒りがある」

アブド・アッラー・ブン・マスウード **‘Abd Allāh b. Mas‘ūd** 曰く、「反キリストは、4つのモスクに4つの町、すなわちメッカ、メディナ、バイト・アルマクディス、シナイ山を除く大地のすべてに入ってくる」

あるときカアブは、バイト・アルマクディスにあるイーリヤーのモスクで礼拝しようと、ヒムス **Himṣ** から出てきた。彼はイーリヤーから1ミールのところに来ると、話すのを止め、クルアーンの読誦とズィクル以外には口を開かなかった。その後彼はアスパート門から入り、クドスに向かった後、5回の礼拝をまとめて行った。[そこから]1ミール離れたところに来ると、彼は仲間たちと口をきいた。人々が彼に、「アブー・イスハーク（カアブ）よ、どうしてあなたはそんなことをしたのですか？」と言うと、彼は言った。「私はある書物の中に、[6. b] このモスクの中では善行は2倍になり、悪行もまたそうなる、—あるいは彼は、「それと同様に」と言った—とあるのを見つけた。だから私は、[そこから] 離れるまで、善行のみを行いたかったのだ」

ジャリール・ブン・ウスマーン **Jarir b. ‘Uthmān** とサフワーン・ブン・ウマル **Ṣafwān b. ‘Umar** 曰く、「バイト・アルマクディスにおいては、善行は1000倍となり、悪行も1000倍となる」

アブー・ザッル曰く、「私は言った。『神の使徒よ、このあなたのモスクでの礼拝は、バイト・アルマクディスでの礼拝に勝るものなのですか？』彼は言った。『この私のモスクでの礼拝1回は、バイト・アルマクディスでの礼拝4回に勝る。しかしそこもまた、なんとすばらしい礼拝の場であることか。というのもそこは、いずれ人々の上にときが来たとき、人々が集められ復活させられる地だからである。バイト・アルマクディスにいる門番が見えるところから人間の弓が届く範囲は、礼拝に良い場所であり、現世のすべてよりも礼拝に適したところである』」

アナスが預言者ムハンマドより伝えて曰く、「人間が自分の家で行う礼拝は礼拝1回分、部族のモスクで行う礼拝は礼拝25回分、金曜モスクで行う礼拝は礼拝500回分、アクサー・モスクで行う礼拝は礼拝5万回分、カアバのモスクで行う礼拝は礼拝10万回分、この私のモスクで行う礼拝は礼拝5万回分である」ブハーリー **al-Bukhārī**、タバラーニー **al-Ṭabarānī**、イブン・マージャがこれを取り上げている。

アブー・アッダルダー **Abū al-Dardā’** が預言者ムハンマドより伝えて曰く、「ハラーム・モスクでの礼拝はその他の場所での礼拝に勝り、礼拝10万回分である。私のモスクでは礼拝1000回分、バイト・アルマクディスでは礼拝500回分である」イマーム・アフマドがこれを伝えている。

神の使徒—神よ彼に祝福と平安を与え給え—のマウラートであったマイムーナ・ビント・サアド **Maymūna bint Sa‘d** は言った。「神の使徒よ、私たちにバイト・アルマクディスについてご意見をください」彼は言った。「人々が集められ復活させられる地である。お前たちはそこに行き、そこで礼拝しなさい。なんとなればそこでの礼拝は、それぞれが礼拝1000回分とな

るからである」我々は言った。「神の使徒よ、そこに行くことができない者は？」〔彼は言った。〕  
「そのランプを灯すための油をそこに贈りなさい。そこに油を贈った者も、そこに行った者と同様である」

カアブ・アルアフバールが次のように伝えている：「バイト・アルマクディスにて 1 日断食した者には、神が地獄の炎から解放して下さる。バイト・アルマクディスにて、信徒たちと女信徒たちのために 3 度赦しを請うた者には、神がその者のために、信徒たちと女信徒たちの行った善行と同じだけのものを書き留めて下さり、あらゆる信徒や女信徒の上に、彼の祈願によって毎昼夜 70 の赦しがやってくる」

ジャービル **Jābir** が次のように伝えている：ある人が、「神の使徒よ、最初に樂園に入る被造物はどれですか？」と言った。彼は「預言者たちである」と言った。その人が「その次は誰ですか」と言うと、彼は「殉教者たちである」と言った。その人が「その次は誰ですか」と言うと、彼は「バイト・アルマクディスのムアッズィンたちである」と言った。その人が「その次は誰ですか」と言うと、彼は「ハラーム・モスクのムアッズィンたちである」と言った。その人が「その次は誰ですか」と言うと、彼は「私のモスクのムアッズィンたちである」と言った。〔7. a〕その人が「その次は誰ですか」と言うと、彼は「その他のモスクのムアッズィンたちである」と言った。

それらの中には次のようなものもある：バイト・アルマクディスの岩は現世の中心である。ある奴隷がその主人に、「我々をバイト・アルマクディスに連れて行って下さい」と言ったとき、神は言われる。「我が天使たちよ、私は彼ら 2 人が出発する前に、すでに彼らの罪を赦したことを証言せよ。彼らがそうしたならば、彼らは罪に近づくことはない」神はバイト・アルマクディスに住む者に日々の糧を与え給う。例え財産が彼から離れて行ったとしても。バイト・アルマクディスにて暮らし、敬虔な行いを積んで死んだ者は、天で死んだのと同様である。その周辺で死んだ者も、そこで死んだのと同様である。

ムアーズー神よ彼を嘉したまえーはバイト・アルマクディスに行き、断食と礼拝を行ってそこで 3 昼夜過ごした。彼がそこから出ていったとき、彼は高い地位にいたのだが、仲間たちの方に近づいて言った。「お前たちが今まで犯した罪を、神はすでにお赦しになった。お前たちが何かを成すものである限り、お前たちに残されている寿命を見よ。サマリア人を除くあらゆる集団が、バイト・アルマクディスを偉大なものと見なすことで意見の一致を見ている。一方彼らは、聖地はナーブルス山だと言って、このことについてあらゆるウンマに対立している」

かつてイスラエルの民の時代に、彼らに敵の脅威が降りかかったり、あるいは渇きに苦しんだりしたことがあった。〔そのとき〕彼らはクドスを作り、そこを神殿とした。また彼らはその諸門やミフラブを作り、そこで敵に立ち向かった。そこで神は敵を打ち破り給うた。また彼らはそこで、渇きに関して天に向かった。すると彼らの上に雨が降り、彼らは〔神殿が水没しないように〕神殿の丈を上げなければならぬほどであった。彼らは、彼らに降りかかるあ

らゆる重大事について、そのようにしていた。バイト・アルマクデイスは、サソリでいっぱい  
の黄金の杯であると言われている。あるいはライオンのいる茂みであるとも言われている。す  
なわち誰かがそこに入れば、あるいは無事であり、あるいは滅びが彼を捕えるのである。イス  
ラエルの民の時代については、このように言われている。

復活の日には、神に称賛あれ、そことそこの中庭にはただ、神の援助を受けたイスラームの  
集団がいるのみである。証としては、彼一神よ彼に祝福と平安を与え給え—の「我がウンマの  
中の最も優れた人々は、ヒジュラの後にもバイト・アルマクデイスにヒジュラするであろう」  
というお言葉で十分である。[そうでなければ] どうして彼一神よ彼に祝福と平安を与え給え  
—がアブー・ウバイダ・ブン・アルジャッラーフ **Abū 'Ubayda b. al-Jarrāḥ** 一神よ彼を嘉した  
まえ—に、「騒乱の起こるときは、バイト・アルマクデイスに避難せよ」と言ったであろうか。  
人々が、「神の使徒よ、私がバイト・アルマクデイスに辿りつけないときはどうすればよいの  
でしょうか？」と言うと、彼は言った。「お前の財産を惜しみなく使って、お前の宗教を守り  
なさい」同様にアリー—神よ彼を嘉したまえ—もサアサア **Ṣa'ṣa'** に言っている。「騒乱の起  
こるとき、バイト・アルマクデイスは何とすばらしい住まいであることか。そこに留まる者は、  
神の道においてジハードを行う者と同様である。必ずや人々の上にときが訪れ、[そのとき  
には] 彼らのひとりひとりが、「自分がバイト・アルマクデイスのレンガの中の藁であればよか  
ったのに」と言うであろう。シリアは神にとって好ましいところであり、[9. a] バイト・アル  
マクデイスは、それを愛する者は神にとって好ましい。かの岩は、大地の中で 40 年かけて最  
後に滅びるところであり、樂園の庭園のうちのひとつである」

## [7. b] 第 2 章：神聖なるクドスの町を整えた者とそこに住んだ者、そこが 2 度征服されたこ とについて短く簡潔に

そこを整えた最初の人、支配する者にして誠実なる者、すなわちノアの子セムであった。  
彼はバイト・アルマクデイスの地の山々にある洞窟に滞在し、そこで神に仕えた。[そうする  
うちに] 彼の行いが名高くなり、シリアの中のその近くの地、ソドムやその他のところにいた  
王たちの耳に届いた。彼らには 12 人の王がいて、彼らはセムのもとにやってきた。彼らはセ  
ムに会って彼の言葉を聞くと、彼を信じ、彼を非常に敬愛した。彼らはセムに、クドスの町を  
建設するための財産を差し出した。そこで彼はその町を整えて整備した。そこはルーシャリム  
**Rūshalim** と名付けられた。その意味はヘブライ語で「平安の館」というものである。その町  
の整備が終わると、その王たちは、セムに彼らの王となってくれるように一丸となって頼んだ。  
彼らはこぞって、セムがその町で亡くなるまで、彼に服従した。モスクのあった場所はその町  
の中央であり、そこはひとつの丘になっていた。かの神聖なる岩はその中央にあった。

最初にそこを建設した人については異論もあり、天使たちがバイト・ハラームを建設した後に、神の許しを得て建設したのだとも言われている。これは、後に述べるアブー・ザッルのハディースに見られるものである。またそれを建設したのはイスラフィールであるとも言われている。またそれを最初に建設したのは、アダムであるとも、セムであるとも、ヤコブであるとも、ダビデであるとも言われている。しかしながら、天使たちが最初にそれを建設し、それ以降は改築が行われたのだと言えなくはない。それぞれの建設者から最後までは間があるので、その間に改築が行われたのであろう。

アブー・ザッルが預言者―神よ彼に祝福と平安を与え給え―に、「大地に最初に置かれたモスクはどれですか？」と尋ねたときのハディースも伝えられている。「彼は『ハラーム・モスクである』と言った。私が『その次には？』と言うと、彼は『アクサー・モスクである』と言った。私が『それら 2 つの間はいかほどですか？』と言うと、彼は言った。『40 年間である』」このハディースは、アブラハムによるハラーム・モスク建設と、ヤコブによるアクサー・モスク建設の間に関するものである。

そこがアクサー・モスクと名付けられたのは、先に述べた通り、そことハラーム・モスクの間の距離が遠いことやその他の理由によるものである。それゆえに、〈召還役が近い場所から呼びかける日には、よく耳を傾けよ〉(Q50:41) という至高なる方のお言葉の解釈では、「召還役」とはイスラフィールのことで、彼が復活の行われる場所でバイト・アルマクディスの岩から、集まって来るように呼びかけるのである、とされているのである。その岩は現世の中心にあるのだから、バイト・アルマクディスも現世の中心にあることは明らかである。〔その日〕残りの天使たちは、あらゆる方向からそこを取り囲む。そこは南側からはヒジャーズ地域とイエメン地方、ヒンドの王国、その周辺地域と向かい合い、北側からはシリア地方とビザンツの王国、その周辺地域に向かい合い、[8. a] 西側からはエジプト地方と西方の王国、その周辺地域に向かい合う。

預言者たち―彼らに平安あれ―のうちで、そこ（バイト・アルマクディス）を最初に定住したのはヤコブ―彼に平安あれ―である。彼がそこに定住した理由は、彼の父イサーク―彼に祝福と平安のあらんことを―が彼にカナン人の女性を娶ることを禁じ、彼のおじの娘たちを娶るよると命じたためである。ヤコブがおじの娘を娶るためにおじのもとに向かったとき、ある道の途中で夜になったため、石を枕にして夜を明かした。彼は夢の中で、天の門に向かって梯子が伸びており、天使たちがそこを上っているのを見た。神は彼に啓示を下して言われた。「私は神である。私の他に神はいない。私は汝と、汝の後に来る汝の子孫たちに、この聖なる地を継がせる。私は汝がこの場所に戻って来るまで、汝とともにいて汝を守る。ここに私に仕えるための家を造りなさい」これがバイト・アルマクディスである。そして彼はそこに住んだ。その後彼の後に、ヤコブの子ユダの子孫である、エッサイの子ダビデ―彼らに平安あれ―がモスクを整えた。彼は自らの肩に石を乗せて運び、それを自らの手で据えた。

その建設の理由については異論もあり、次のようにも言われている：ダビデの時代、イスラエルの民は疫病に見舞われた。そこでダビデは人々を率いてバイト・アルマクデイスの場所に出向いた。人々は神に祈願し、彼らの上から災いが取り除かれるようにと求めた。神は彼らの祈願を聞き届け給うた。その後人々はその場所をモスクとして用いるようになった。

次のようにも言われている。神がダビデ―彼に平安あれ―の悔悛を受け入れ給うたとき、彼はすでに数多くの町々を建設しており、イスラエルの民の状況は十分なものであったのだが、彼はバイト・アルマクデイスを建設したいと思った。すなわちかの岩の上に、神がイーリヤーの中でそこを神聖なものとなさった場所に、ドームを建てたいと思った。そして彼はそれを建設した。

次のようにも言われている。神は彼にそれを建設するように命じ給い、剣を抜いた天使が見えるその場所を彼に見せ給うた。

いずれの伝承においても、次のように伝えられている。ダビデがそれに着手し、それが人の背丈ほどの高さになると、神が彼に啓示を下して言われた。「私は汝の手にそれを禁じる。私は汝の息子を、汝の後の王とする。彼の名はソロモンである。私は彼の手にその完成を委ねる」

次のようにも伝えられている。ダビデはそれを建設し、その上に壁を建てようとした。しかし壁を完成しても、それは3度崩れ落ちてしまった。彼が強大にして栄光ある神にそのことについて不満を言うと、神は彼に啓示を下して言われた。「汝は私のために家を建てるのにはふさわしくない」彼が「我が主よ、どうしてですか？」と言うと、神は「汝の両手が血に染まっているがゆえに」と言われた。彼が「我が主よ、それはあなたへの愛ゆえのことではありませんか」と言うと、神は「然り。しかしながら彼らもまた我が僕たちであったのであり、私は汝よりも彼らに恵みを向ける」そのことはダビデを嘆かせた。すると神は彼に啓示を下して言われた。「悲しむことはない。私は汝の息子ソロモンの手にその建設を委ねる」ダビデは死の前に、彼の息子ソロモン―彼に平安あれ―に王権を委ねると遺言し、また彼にバイト・アルマクデイスの建設を委ねると遺言した。[8. b] そしてそのために、大量の黄金を取めた数々の宝物庫を割り当てた。

ダビデが死ぬと、その息子ソロモンが王となり、12年間かけてそれを建設した。彼はバイト・アルマクデイスの建設を、王位についてから4年後に着手した。彼は人間の賢者たちやジン、大地の妖魔たちや偉大な悪魔たちを集め、彼らを建設する組、石や大理石の鉱脈から柱を切り出す組、海に潜ってそこから真珠や珊瑚を取って来る組、ルビーやエメラルドの鉱脈を切り出し、様々な宝石の鉱脈を持って来る組にした。そして悪魔たちを、大理石の鉱脈からモスクの壁まで一列に並べた。最初の者が大理石の塊を受け取ると、それをその隣にいる者に渡し、そのようにしてモスクに至るまで運んでいくのである。バイト・アルマクデイス建設に携わった彼らの数は3万人で、そのうち1万人は木を切り出す仕事に就いていた。石に関する仕事に就いていたのは7万人で、彼らを監督していた者の数は、ジンや悪魔の魔法使いを除いて300



人であった。

神はラフマ門の側に 2 本の木を生やし給うた。その片方には金が成り、もう片方には銀が成った。毎日そのそれぞれから、200 ラトル<sup>4</sup>の金銀が取れた。その建設がすばらしい形に完成したのは、彼が王位に就いてから 11 年目のことであった。彼は金銀や真珠、ルビー、珊瑚、様々の宝石を用いて、その天上や床、門や柱を、前例がないほどに飾り、果てはその床に金銀のタイルを敷き詰め、伽羅で天井を葺いた。彼はそこに 200 個の黄金の錠を付けた。その錠はそれぞれが 10 ラトルの重さがあった。彼はその中にモーセとアロンの契約の箱を安置した。

かの岩の高さは 12 ズィラーウ<sup>5</sup>であり、その上にあるドームの高さは 18 ミールであった。

ソロモンはその建設を完了すると、3000 頭の牛と 7000 匹の羊を屠った。それからアスバート門に隣接する、〔現在の〕ハラム・シャリーフ<sup>6</sup>後部にある場所—そこは「ソロモンの玉座 *Kursi Sulaymān*」と呼ばれているところである—to やってきて、言った。「おお神よ、罪を抱いてここにやってきた者を [9. a] 赦し給え。傷持つ者の傷を取り去り給え」そこにやって来て、我らが主人ソロモンの祈願に与らなかつた者は一人もいない。

ソロモンは 52 歳で死んだ。それはモーセ—彼に平安あれ—の死から 575 年のことであった。モーセの死は洪水から 1626 年のことであり、彼の死と神聖なるヒジュラまでの間は 2348 年である。

その後はソロモンの息子や孫が王位に就いたが、モーセ—彼に平安あれ—の死から 959 年たったときにネブカドネツアル *Bukht Naṣṣar* が進軍してきて、クドスを焼き、神殿を破壊し、そこから車 80 台分の金銀を持ちだしてローマ *Rūmiya* に投げ捨てた。彼はイスラエルの民を殺害して粉々に打ち砕いた。〔バイト・アルマクデイスは〕70 年の間荒廃したままであった。その後、神がイザヤー—彼に平安あれ—に遣わした啓示によって、〔ペルシア王〕キュロス *Kūrsh* がそこを建て直し、生き残っていたイスラエルの民をそこに住まわせた。彼らの長はエズラー—彼に平安あれ—であった。その後彼は死に、彼の死後は、アロンの子孫である誠実なるシメオン—彼に平安あれ—〔が長となった〕。その後そこにイエス—彼に平安あれ—が現れ、そこから昇天した。そこはその後 40 年栄えたが、ローマのティトゥスがそこを破壊した。その後そこには少しずつ繁栄が戻っていき、秩序を回復した。そこは繁栄し、そしてコンスタンティヌスの母ヘレナがクドスにやってきた。彼女はそこにごみ山〔の教会〕を建設し、ハラム・シャリーフにあった神殿を破壊して、かの岩をごみ溜めにしてしまった。その状態は、神が〔ヒジュラ暦〕15 年に、信徒の長ウマル・ブン・アルハッターブ *‘Umar b. al-Khaṭṭāb* —神よ彼を嘉したまえ—の手に平和裏にクドスを開き給うまで続いた。

〔バイト・アルマクデイス征服のとき〕アブー・ウバイダ・ブン・アルジャッラーフはヨル

<sup>4</sup> ラトル *raṭl* は重量の単位。シリア地域において、1 ラトルはおおよそ 1850kg に相当する。

<sup>5</sup> ズィラーウ *dhirā’* は長さの単位。人間の肘から手までの長さを指し、おおよそ 60cm に相当する。

<sup>6</sup> 原語は「マスジド *al-masjid*」。本論において、「マスジド」の語が現在のハラム・シャリーフ区域全体を指していることが明らかである場合は、「ハラム・シャリーフ」の訳語を当てる。

ダンに進軍して、そこに駐屯すると、イーリヤーの民と彼らの書記に対して使節を送った。しかし彼らは、彼のもとに来て彼と和平条約を結ぶことを拒んだ。そこで彼は彼らのもとに軍を進めて駐屯し、彼らを厳しく包囲したので、彼らは弱り果てた。彼らは和平を望み、信徒の長ウマル・ブン・アルハッターブが彼らと条約を結び、彼らのために安全条約を書いてくれるよう求めた。アブー・ウバイダは彼らとの間にそれについて条約を結び、ウマル・ブン・アルハッターブに次のような書簡を書き送った。「慈愛深く慈悲あまねき神の御名において。アブー・ウバイダ・アーミル・ブン・アルジャッラーフより、神の僕にして信徒の長たるウマル・ブン・アルハッターブへ。あなたの上に平安のあらんことを。私は、神の他に神はなき神に、あなたへの恩寵を求めます。さて、我々はイーリヤーの民と相対しています。彼らは増長して構えていましたが、彼らはますます締めつけられて痩せ衰え、骨と皮になりみじめな有様になっています。彼らはそうした有り様を見ると、信徒の長が彼らのもとにやって来て、彼らのために条約を結んでほしいと求めています。恐れながら信徒の長におかれましてはお出ましになり、この民が戻ってくるようになさってください。[9. b] あなたの進軍は一神があなたを正しき者となし給わんことを一恵みとなり恩寵となるでしょう。我々は彼らの上に、彼らの信仰によって確約された確かな制約を取りつけましたので、彼らは〔条約を〕受け入れてジズヤを納め、ズィンマの民が受け入れるべきことを受け入れるでしょう。彼らは、あなたがお出ましを考えたならそうするでしょう。ですからそうなさってください。あなたの進軍には報いと善があることでしょう。神があなたの正当さを長からしめ、あなたのなさることを楽になし給わんことを。あなたの上に平安と、神のお恵みと恩寵のあらんことを」

この書簡がウマル―神よ彼を嘉したまえ―のもとに届いたとき、ウマルはムスリムの長たちを呼び集めると、彼らにその書簡を読み聞かせて意見を求めた。彼らの意見は様々であった。ある者は、彼らは多くの苦勞を払わずには進軍はできない、信徒の長が出向かずとも彼ら（イーリヤーの民）は降伏するだろう、と意見した。またある者は、この機会を利用してことを長引かせないように進軍すべきである、と意見した。そこでウマルは軍を率いて進軍した。

シャームに近づいたところで、ムスリム軍が彼を出迎えた。アブー・ウバイダが、衣を着せられて毛織の手綱を付けられた若い雌のラクダに乗り、武器を身につけ弓を肩に担いでやって来た。彼はウマルを見ると、自分の雌ラクダを座らせた。ウマルも自分のラクダを座らせた。アブー・ウバイダは〔ラクダから〕下りてウマルの方に行くと、ウマルも彼の方に近づいた。ウマルがアブー・ウバイダの方に近づいていくと、アブー・ウバイダは握手をするために手をウマルの方に差し出した。ウマルもまた手を差し出した。アブー・ウバイダはその手を取り、皆の前で彼に敬意を示すために、その手に口づけしようとして体を屈めた。するとウマル―神よ彼を嘉したまえ―は、アブー・ウバイダの足に口づけしようとして体を屈めた。アブー・ウバイダは「お止めください、信徒の長よ」と言って後退ったが、ウマルは「いやいや、アブー・ウバイダよ」と言った。2人のシャイフは互いに抱擁した。それから彼らは騎乗し、並んで進んでい

った。人々は彼らの前を進軍した。

次のようにも言われている。ウマルに一頭の馬と白い服が差し出された。彼らはウマルに、敵があなたを見分けることができるように、この馬に乗ってください、我々の間ではそれがあなたに一層の威厳を与えるでしょう、と言って、彼にその服を着せ、さらに裏地に羊毛の付いた皮の上着を着せかけようとした。ウマルは断ったが、彼らが是非にと頼むので、彼は自らの上着と服を着たままでその馬に乗った。その馬はウマルを乗せてゆっくりと歩んだ。ウマルは自身の騎乗用の雌ラクダ〔の綱〕を手に持っていたが、そうするうちに〔馬から〕下り、自分のラクダに乗ると言った。「これでは私ではなくなってしまう。自分が驕り高ぶっているのではないかと恐れてしまい、そうした自分が嫌になる。ムスリムの民よ、お前たちは質素であらねばならない。強大にして栄光ある神がお前たちを偉大になさしめ給うたもの（イスラームの教え）に従わねばならない」

〔ウマルがシャームにやってきたとき〕彼の眼前に浅瀬が広がっていた。そこで彼はラクダを下りて靴を脱ぎ、それを手に提げて、ラクダを引いて水の中に入った。アブー・ウバイダは彼に言った。「あなたは今日、この土地の民に対して偉大なる行いをなさいました（清らかな川に靴のまま入って、それを汚すようなことをしなかった）」するとウマルは自分の胸を叩いて言った。「あなたがそのようなことを言うとは、アブー・ウバイダよ。あなた方は人々の中で最も卑しく、最も低く、最も小さい者であったのに、偉大なる神がイスラームをもってあなた方を偉大なものとなさしめ給うたのだ。あなた方がイスラーム以外のものでもって偉大になりたいなどと考えるならば、[10. a] 至高なる神はあなた方を卑しめられるだろう」

ウマルはバイト・アルマクデイスの東にある、オリーブ山に駐屯した。その地の大主教の使者が挨拶にやって来て言った。「我々はあなたのお出ましに際し、あなた以外の何人にも与えなかったようなものを差し上げます」ウマルは彼に、自分からの和平条約とジズヤを受け入れるように求め、そうするなら彼に、彼らの血と財産、教会に対する安全保障を与えようと言った。彼はそうした条件で了承した。その使者はさらに、彼の主人との間に和平を結び互いに書簡を交わして、安全保障を与えてくれるようにとウマルに求めた。ウマルは了承した。その地の大司教、すなわちその地の長が、一段を率いてウマルの方に向いてきた。ウマルは彼らとの間に和平条約を結び、彼らにそのことについて誓言させた。

アブド・アッラフマーン・ブン・ガナム *'Abd al-Rahmān b. Ghanam* 曰く、ウマル・ブン・アルハッターブー神よ彼を嘉したまえーがイーリヤーの民であるキリスト教徒たちと和平条約を結んだとき、以下のような内容が書かれた。「慈愛深く慈悲あまねき神の御名において。これは神の僕にして信徒の長たるウマル様に対する、しかじかの町のキリスト教徒からの書簡である。あなた方が我々のもとに来られたとき、我々はあなた方に、我々の身柄、子孫、財産、同胞たちに対する保護を求めました。我々は我々の身柄に対して、あなた方に以下の条件を提示します。我々の町、またその周辺において、修道院や教会、僧坊、僧侶の祈祷所を新しく作

りません。ムスリムの地所にあるそれらの施設が壊れても、新築したり修繕したりしません。夜であれ昼であれ、ムスリムのうち何人であっても、我々の教会に滞在することを妨げません。訪問者や旅行者に対し、教会の門を広く開けておきます。我々のもとを訪れたムスリムを3日間宿泊させます。我々の住居や教会にスパイを匿いません。ムスリムに対しいかなる隠し事もいたしません。我々の子供たちにクルアーンを教えません。多神教を広めず、何人にもそこに誘い込みません。我々と親戚関係にある人々がもしイスラームへの入信を望むならば、それを止めません。ムスリムには敬意を表し、彼らがもし〔我々と共に〕座ることを望むならば、我々の座の中で彼らに上座を提供します。彼らの服装に関すること、丸帽子やターバン、サンダル、髪を分けることに関して、彼らを真似ることはいたしません。彼らの言葉（イスラーム的な言い回しなど）を使って話しません。彼らのクンヤ（尊称）を使って名乗ることいたしません。鞍をつけた馬に乗りません。帯剣したり、武器を用いたりすることをいたしません。それらのものを携帯しません。我々の指輪にアラビア語を彫りません。酒を売りません。前髪を刈り上げます。以前と同じ服装を続けます。腰には帯を締めます。我々の教会に十字架を掲げません。我々の十字架や聖書を、ムスリムのようなやり方ではいかなる場所でも、スークでも、外に晒しません。我々の教会では、小さな音でなければ鐘を鳴らしません。我々の死者を悼む声を上げません。死者を送る火を、ムスリムのようなやり方ではいかなる場所でも灯しません。[10. b] 彼らが住居にいるとき、彼らの方を見ません」

ウマル・ブン・アルハッターブ神よ彼を嘉したまえ—のもとにこの書簡が届くと、ウマルはそこに次のように付け加えた：「ムスリムたちのうち何人をも殴りません。我々はあなた方にこれらのことを、我々自身と我々の信仰の民に対する条件とし、保護に同意します。我々が、あなた方に条件として提示し我々自身のための保障としたことに反した場合、我々には保護がないものとします。あなた方は我々に対し、不穏分子や敵対分子を取り締まることができます」バイハキー *al-Bayhaqī* その他の人々がこの話を伝えている。

ウマル・ブン・アルハッターブは彼らに、次のような書簡を書いた。「慈愛深く慈悲あまねき神の御名において。これは神の僕たる信徒の長ウマルが、イーリヤーの民に与える保護である。彼は彼らに、彼らの身柄、財産、教会、十字架、住居、町々、そこにあるあらゆる信仰に対する保護を与える。彼らの教会には人が住むことはなく、壊されることはなく、そこからは宝物であれ十字架であれ、その財産のうちのいかなるものも損なわれることはない。彼らは自らの宗教を捨てる必要はない。彼らのうちの何人も傷つけられることはない。イーリヤーには〔ユダヤ人は〕ひとりも住むことはない。イーリヤーの民には、他の町々の民の上に課せられているのと同じく、ジズヤが課せられる。彼らはビザンツ人や盗人たちを、そこから追放せねばならない。彼らのうちで外に出ていく者に対しては、彼らが安全な場所に辿り着くまでは、彼らの身柄や財産は安全である。彼らのうち町に留まる者もまた安全である。その者にはイーリヤーの民と同じジズヤが課せられる。イーリヤーの民のうち、我が身と財産を携えてビザン

ツ人と動向したいと思う者は、彼らが安全な場所に辿り着くまでは、その身柄、教会、十字架は安全である。そこにいた土地の者たちのうち、居住することを望む者には、イーリヤーの民と同じジズヤが課せられる。またビザンツ人と共に出ていきたい者、自身の土地に戻りたいと思う者に対しては、彼らが手元に金を用意できるようになるまでは、何も徴収されない。この文書の中にあるものについては、彼らが自らに課せられたジズヤを納めている限り、神の契約、神の保護、神の使徒一神よ彼に祝福と平安を与え給えーの保護、カリフたちの保護、信徒たちの保護となる」ハーリド・ブン・アルワリード Khālid b. al-Walid、アムル・ブン・アルアース Amr b. al-ʿĀṣ、アブド・アッラフマーン・ブン・アウフ Abd al-Raḥmān b. ʿAwf、ムアーウイヤ・ブン・アビー・スフヤーン Muʿāwiya b. Abi Sufyān がこれに証言を与えた。

ウマルは和平条約を締結し終わると、その地の大司教に「我々をダビデの神殿に案内せよ」と言った。大主教は「はい」と言った。ウマルは剣を帯び、4000人の同行者を連れて出かけた。彼らも剣を帯びて彼に随行した。そこにいた一団と大主教が、ウマルの前に立ち、バイト・アルマクデイスの町に入っていった。大主教はウマルを「ごみ山の教会 Kanisat al-Qumāma」と呼ばれる教会に連れて入り、「ここがダビデの神殿です」と言った。[11. a] しかしウマルはそこを見渡し、注意深く観察すると言った。「あなたは嘘をついている。かつて神の使徒一神よ彼に祝福と平安を与え給えーは私にダビデの神殿の様子を教えてくださいましたが、それはこのようではなかった」次に大主教は彼らを連れてシオン教会に行き、「ここがダビデの神殿です」と言った。しかしウマルは、「あなたは嘘をついている」と言った。次に大主教はウマルを連れてバイト・アルマクデイスのモスクに向かい、ムハンマド門 Bāb Muḥammad と呼ばれるその門にまで連れてきた。彼はそのモスクにあった、その門の階段やスークの上に積もっていたごみの山の方に下りていった。そこには多くのごみの山が積もっていて、モスクの天井に届かんばかりになっていた。大主教はウマルに「這ってでなければ中に入ることはできないでしょう」と言ったが、ウマルは「むしろ這って入りたいのだ」と言った。そこで大主教はウマルの前を這って入り、ウマルと彼とともにいた者たちはその後ろから這って入った。そして彼らはモスクの中庭に辿り着くと立ち上がった。ウマルは左右を見渡すと言った。「神は偉大なるかな。これぞ、ウマルの魂がその手のうちにある方にかけて、神の使徒一神よ彼に祝福と平安を与え給えーが我々に言われたところ、彼がイスラエリしたところのものだ」

その後ウマルはカアブに言った。「アブー・イスハークよ、お前は岩がある場所を知っているか」カアブは言った。「ワーディー・ジャハンナムに隣接するあの壁から何々ズィラーウのところを測り、穴を掘ってください。そうすれば岩を見つけられるでしょう」当時そこには、ビザンツ人がイスラエルの民を侮辱するために捨てたごみの山があった。彼らが掘ると、果たして彼らは見つけた。ウマルは自分の上着を広げて、そのごみを掃き集め始めた。ムスリムたちも彼と共に掃き集めた。そして彼はその前方を礼拝の場所とした。ウマルは、「ここに3回雨が降るまで、ここで礼拝してはならない」と言った。その後彼は、城塞のところにある町の

門の側にあるダビデのミフラブの方に、ムスリムたちと共に向かい、そこで礼拝した。すると間もなく太陽が昇った。ウマルはムアッズィンに〔アザーンを〕行うように命じ、そこに近づくと、人々の先頭に立って礼拝し、彼らに〔クルアーンの〕「サード」の章を読み、その中で跪拝した。それから彼は立って、人々の前で再び、イスラエルの民に関する部分を読んだ。それからラクアをし、〔そこから〕離れた。そしてマリア教会の近くで礼拝した。〔そのとき〕彼は 2 枚の服を着ていたのだが、そのうちの 1 枚に唾を吐いた。彼は、「その中に唾を吐けばよいではありませんか。そこは至高なる神が他のものと並べられた場所です」と言われた。しかし彼は、「そこでは神と他のものが並べられたのと同じように、神の御名が唱えられているのだ」と言った。さらに「もはやウマルは、ワーディー・ジャハンナムにて礼拝する必要はない」とも言った。

次のようにも伝えられている。信徒の長ウマルがバイト・アルマクディスを征服し、安全保障と和平の条約を結んだとき、人々は彼らの条約を受け入れ、安全を与えられた。人々は互いに〔町に〕入っていった。ウマルは数日〔バイト・アルマクディスに〕滞在した後、アブー・ウバイダに言った。「お前は他の軍団の長とは違って、私を自宅に招こうとはしないのだね」とするとアブー・ウバイダは言った。「信徒の長よ、私があなたをお招きすれば、我が家の中であなたが目を覆うようなことになるのではないかと恐れるのです」ウマルが「私を招いてごらん」と言うと、[11. b] 彼は「どうか私のところにお越し下さい」と言った。そこでウマルは彼の家を訪問した。そこには彼の馬に乗せるフェルトの布しかなかった。ときにそれは彼の敷物となり、ときには馬の鞍となり、ときには枕となった。彼の家のかまどには、ひからびたパンのかけらがあつた。アブー・ウバイダはそこに行ってそのパンを取ると、それをウマルの目の前の地面において、粗塩と水の入った器を持ってきた。ウマルはその様子を見て泣き、彼をしっかりと抱きしめて言った。「お前こそ我が兄弟だ。我が仲間たちの中に、お前ほど現世の苦しみに耐えている者があろうか」アブー・ウバイダは言った。「ですから私は、あなたが目を覆うようなことになるだろうと言ったのですよ」

それからウマルは人々の間に立ち、神を称賛し、神が可能にし給うたことについて神を讃え、預言者―神よ彼に祝福と平安を与え給え―に祝福を求めて言った。「イスラームの民よ、まことに神はお前たちとの約束を果たし給い、敵に対してお前たちに勝利を与え給い、お前たちにこの国々を継がせ給い、お前たちに大地を統べる力を与え給うた。お前たちが神にお返しできるものといえば、感謝の念しかありはしない。お前たちは不服従の行いには注意せよ。不服従の行いはまさしく忘恩である。神が人々にお恵みを与えて下さる限り、彼らは不信仰に陥るようなことはない。〔しかし一旦不信仰に陥れば〕彼らの力が奪い去られ、彼らの敵が彼らを支配することなくしては、彼らは悔悛に辿りつけなくなるのである」そして彼は〔壇より〕下りた。そのとき礼拝の時間となり、ウマルは言った。「ビラールよ、我々のためにアザーンを行え。神がお前にお恵みを与えて下さるだろう」ビラールは言った。「信徒の長よ、神かけて、

私は神の使徒—神よ彼に祝福と平安を与え給え—の後には、誰のためにもアザーンをしたくないと思っていました。しかしこの礼拝においてのみ、あなたが私に命じられるのでしたら、あなたに従いましょう」ビラルはアザーンを行い、教友たちは彼の声を聞いた。彼らは預言者—神よ彼に祝福と平安を与え給え—の名を唱え、激しく泣いた。そのときムスリムたちの中で、アブー・ウバイダとムアーズ・ブン・ジャバルよりも長く泣き続けた者はいなかった。ウマルは彼ら 2 人に、「神がお前たちの行いを数え、お前たちにお恵みを与え給うように」と言った。

礼拝を行うと、信徒の長はメディナへと戻っていった。彼は彼が目指していたイスラームのシャリーアとムスリムたちに関する事、神に道におけるジハードの実施に真摯に取り組み、殉教者として亡くなるまでそのようであった。至高なる神が彼を嘉し給い、彼のゆえに我々に益を与え給い、我々と彼との間〔にあるもの〕を、彼の高貴なる館に集め給わんことを。まことに彼こそは善行の助け手であり、その恩寵と高貴さをもって悪行を赦される方である<sup>7</sup>。

---

<sup>7</sup> B 写本では、この後に以下の内容が追加されている。

「ムスリムたちがそのモスクを救い出した後、モスクに次のような詩が書きつけられているのが見つかった。

教会を見守る人々よ、もしも事件の手が汝らを弄んだなら、  
あるいは状況が変わったなら  
いかに助祭たちが汝らのために跪拝したところで意味はない、  
かつては彼らも鼻高々の、獅子のごとき勇者のごとき人々であったが  
今ではこの災禍に耐えるのみ、それというのも、  
1日1日は違うもの、戦いはかわるがわるに勝ったり負けたりするものなのだから

私（著者）は次のように言う。私は、権威ある兄たるサイイド、ムハンマド・アッサイド **Muḥammad al-Sa'īd** に、これらの詩句を、その初めの部分と後半の部分の、2つの部分に分割してくれと求めた。すると彼はそれらの詩句をこの神への讃美によって清め、それらを最後まで言ってくれた。それらは、人を勇気づけるという範疇から求められたものであった。彼は次のように言った。

クドス征服の日には血が逆流した、  
ウマルによるその征服において、そして言われるようになった  
教会を見守る人々よ、  
もしも刃りをうろつく選ばれし者の仲間たちの力が汝らを弄んだならば  
あるいはもしも事件の手が汝らの馬の鞍布を置き換えてしまったなら、  
あるいは状況が変わったなら  
いかに助祭たちが汝らのために跪拝したところで意味はない、

かの岩の上に最初にドームを建てたのは、アブド・アルマリク・ブン・マルワーン‘Abd al-Malik b. Marwān である。彼は自身の行政区から工人たちを集め、その整備のためにエジプトの7年分のハラージュを用意した。彼はそれをハラム・シャリーフの東側のドームに、すなわちオリーブ山の方角に据えた。その整備や資金に関することは、ウマル・ブン・アブド・アルアズィーズ‘Umar b. ‘Abd al-‘Azīz の座の学識あるウラマーのひとりであったラジャー・ブン・ハイワ Rajā’ b. Ḥaywa と、アブド・アルマリクのマウラーのひとりであったアブー・アッサラーム・マクディスイーAbū al-Salām al-Maqdisī と呼ばれる人に委ねられた。彼と彼の2人の息子によって、そのドームの様子や姿形が描写されている。彼らは彼のために、[12. a] 岩の東側に鎖のドームをも建設した。その姿形は彼を驚嘆させた。彼ら2人（ラジャーとアブー・アッサラーム）は資金を使ってそれに携わるように、また〔その建設のために〕財産を使い尽すように、と命じられた。

彼らは建設と整備に取り掛かり、それを立派に行った。そして彼らはダマスカスにいるアブド・アルマリクに、次のような書簡を書き送った。「神は、信徒の長がお命じになったバイト・アルマクディスの岩〔のドーム〕とアクサー・モスクの建設を完遂させ給いました。それについて語る者は、一言も批判じみたことを言うことはできません。しかし信徒の長がお命じになった費用のうち、建設が完璧に完了した後にもなお、10万ディーナールが残っております。信徒の長におかれましては、これをお好きなことのためにお使いいただきますように」信徒の長は彼ら2人に書簡を書き送った。「私はお前たち2人に、お前たちがかの神聖なる家の建設を委任されたことに対するほうびとして、そのディーナールを充てるよう命じている」とすると2人は彼に、次のように書き送った。「我々は、自身の財産に加え、妻女たちの装身具までも〔ドーム建設の費用として〕加えるべきであると存じますのに。どうぞあなたのお好きなことにこの金をお使いください」そこでアブド・アルマリクは彼ら2人に書き送った。「それらの金を鑄つぶして〔板に加工し〕、ドームの上に貼るように」そこでそれらの金は鑄つぶされ、ドームの上に貼られた。〔その黄金の屋根のまぶしさに、〕誰もそのドームの上にある黄金を凝視することはできなかつた。また彼らはそのドームに覆いを用意し、冬の間、雨や風や雪のときにそれでドームを覆った。

ラジャー・ブン・ハイワとヤズィード・ブン・サラームは、石を欄干で囲み、その欄干の後

---

かつては彼らの帽子も黒く、髪の毛もばさばさと高く立っていたが

今日騎士たちは汝らの頭を引き抜いた、

かつては彼らも鼻高々の、獅子のごとき勇者のごとき人々であったが

この災いが最高潮となった後に、

というのもそれは浄化されても卑しく邪悪であるから

汝らは誘惑され、そして卑しくなった

1日1日は違うもの、戦いはかわるがわるに勝ったり負けたりするものなのだから」



ろから柱の間に絹のカーテンを掛けた。そこには月曜日と金曜日しか開かなかった。岩にはサフラン香が撒き散らされ、竜涎香や沈香の香炉が焚かれる。その後カーテンが巻き上げられ、乳香はそのほとんどが香りを発散させて出ていき、スークの先にまで届く。その後呼びかけ役が「やあ、岩は人々のために開かれた。そこで礼拝したい者よ来たれ」と呼ばわり、人々は急いで岩のドームで礼拝をしにくる。礼拝する者の大部分は 2 回のラクアをし、少数のものは 4 回行う。その後人々は出ていくが、その香りをかいだ者は、「これは岩のドームの中のものだ」と言う。〔人々の礼拝の後〕諸門は閉められる。各々の門には 10 人の門番がいて、月曜日と金曜日以外には人が入ることはできない。また〔月曜日と金曜日にも〕奴隷だけがそこに入ることができる。そこではメディナ産のワサビノキやラサース産のユリの香煙とともに、ランプが灯されていた。

そのドームの中央には、ヤティーマ真珠 *durra yatīma*、アブラハムの雄羊の 2 本の角、ペルシア王の王冠 *tāj kisrā* が吊り下げられていた。後にハーシム家がカリフ位を獲得すると、それらはカアバー至高なる神がそこを守り給わんことを一に移された。

その建設が完了したのは 73 年のことであった。その様子については、イブン・アサーキル *Ibn'Asākir* 一神よ彼を憐れみたまえーが、アブー・アルマアーリー・マクディスィー *Abū al-Ma'ālī al-Maqdisī* に由来するイスナードによって伝えている通りである。ウクバ曰く、「当時は柱に使った木材は別として、屋根を葺くための木材が 6000 本あった。またそこには門が 50 門、大理石の柱が 600 本、ミフラブが 7 つ、〔12. b〕ランプを吊り下げのための鎖が 400 本に 15 足らずあった。そのうちの 230 本はモスクに、残りは岩のドームにあった。またそれらの鎖の長さは 4000 ズイラーウ、重さは 43 ラトル・シャーミーであった。またそこにはランプが 5000 個あった。それらのランプに加えて、各金曜日、シャアバーン月とラジャブ月、ラマダーン月の中日の夜、2 つのイードの夜には、2000 本の蠟燭が灯された。またそこには、岩のドームを除いて 15 のドームがあった。モスクの屋根の上には 7700 枚の鉛の板金が貼られており、その板金の重さは、岩のドームに貼られているものを別にして 70 ラトルであった。それらのことは全て、アブド・アルマリクの御代に行われた。またモスクには、そこを管理する奴隷が 300 人、宝物庫の 5 分の 1 の金額で購入され、配置された。彼らの中から死者が出ると、その者の息子か孫、あるいは彼の一族の者がその地位に就いた。それらの職務は、彼らが子々孫々続いていく限り彼らの上にあった。またそこには 14 個の大きな水がめがあった。またそこには 4 つのミナレットがあり、そのうちの 3 つは一列になっており、1 つ〔の端〕はモスクの西側に、また 1 つ〔の端〕はアスバート門のもとにあった。そのモスクにはユダヤ人の奴隷が 10 人おり、彼らからはジズヤが徴収されることはなかった。彼らの一族は大きくなったため、その数はのちに 20 人になった。〔彼らの職務は〕人々が祭りの際、冬にも夏にも出したごみの清掃、金曜モスクの周りにある手洗いの清掃であった。またそこにはキリスト教徒の奴隷も、1 つの家の者から 10 人おり、彼らはその業務を代々相続していた。〔その業務とい

うのは] ごぎを作ること、モスクのごぎの清掃、貯水槽に流れ込む水路の清掃、水路そのものの清掃その他であった。またそこには別のユダヤ人奴隷の一团もいて、彼らはランプや杯、ランプの裏についている反射鏡に使うガラス、その他彼らが必要だと言うものを作っていた。彼らからもジズヤは徴収されなかった。同様に、ランプの芯に使う藁を作っていた人たちからも徴収されなかった。アブド・アルマリク・ブン・マルワーンの時代から現在に至るまで、[これらの業務は] 彼らの子々孫々続いていく限り、永久に彼らと彼らの子孫の上にあった。カリフ位がワリード・ブン・アブド・アルマリクに移ったとき、モスクの東側が倒壊した。そこで彼はドームの上にあるものを取り、それを整備に充てるように命じた」

アブド・アッラフマーン・ブン・サービト **'Abd al-Raḥmān b. Thābit** が、彼の父より、さらに彼の祖父より次のように伝えた。カリフ = [ワリード]・ブン・アブド・アルマリク・ブン・マルワーンの時代には、モスクの諸門はすべて金銀の板で覆われていた。[13. a] アブー・ジャアファル・マンスール・アッパースィー **Abū Ja'far al-Manṣūr al-'Abbāsī** が [バイト・アルマクディスに] やってきたとき、モスクの東部と西部は 130 年の地震に際し崩れ落ちていた。そこで人々が彼に言った。「どうぞあなた様が我々に、このモスクの建設と整備をお命じくださいますように」彼は言った。「私には金がないのだ」そこで彼は、門の上にある金銀の板を剥がすよう命じた。それらからディーナールとディルハムが作られた。彼はそれを使い、モスクを完成させた。その後 2 回目の地震があつて、アブー・ジャアファルの命じた建物は崩れ落ちてしまった。その後マフディー **al-Maḥdī** がやってきたときには、そこは廢墟となっていた。彼はこのことを進言され、モスクの建設を命じた。彼は言った。「このモスクは幅が狭く、縦に長い。それに工人たちも足りない。このモスクの縦の長さを短くし、横幅を増やすように」そして彼の在位中に、建設は完成した。452 年には、バイト・アルマクディスのドームの内天井が落下した。そこには 500 個のランプがあつた。そこに住んでいたムスリムたちはこれを不吉な兆候と見なし、きっとイスラームにたいへんなことが起るに違いないと言った。

バイト・アルマクディスは、ウマル・ブン・アルハッターブー神よ彼を嘉したまえー [の征服] から 491 年まで、ムスリムたちの手にあつた。その年、ファランジュ (十字軍) が何百万もの大軍でそこに進軍してきた。彼らは 40 数日間そこに駐屯し、その年のシャバーン月に 7 日残る金曜日の午前中にそこを占領した。彼らは 1 週間の間、そこで数多くのムスリムたちを殺した。アクサー・モスクでも、7 万人を越えるサイドたちや神に仕える人々、ザーヒドたちが殺された。また彼らは岩 [のドーム] から、数え切れないほどの金銀の器を略奪した。このために、その他の地域のムスリムたちも混乱の極みに陥った。バグダードの民は金曜モスクに集まり、助けを求めて泣き、彼らの上で起こったことの大きさに打ちのめされた。バグダードのカリフは、ファキーフたちにその地域に出向いて行き、そこの諸王にジハードを奨励するようにと言った。そこでイマーム・アブー・アルワファー・ブン・ウカイル・ハンバリー **al-Imām Abū al-Wafā' b. 'Uqayl b. al-Ḥanbalī** が、高名なファキーフたちを連れて出向いて行った。彼

らは人々と共に旅をした。しかし彼らはどうすることもできず、〈主にめぐり合い、主のお側に帰った〉(Q2:46) ファランジュは海岸地域と、そこにある城や城塞を占領し、そこやそこに隣接する地域や行政区、領地などで苛立たしい振舞いをし、その町のサルフの木 sarḥ<sup>8</sup> の中で若木 dhakwān を痛めつけた。〈サタンが彼らに自分たちの所業を立派なものと思わせ〉(Q6:43)、彼らを惑わせてしまった。彼らはその暴力的な所業において惑い続けた。

バイト・アルマクデイスその他の場所がムスリムたちから奪われたとき、ムザッファル・アビーワルディー Muzaffar al-Abiwardī はそれについて次のような詩を詠んだ。

我らは血を、流れ出る血と混ぜた  
我々にはもはや競争相手の的となるものは残っていない  
人の武器という災いは涙を流す  
戦争が勃発すれば、その炎はびくともしない強さを持つ  
されば、おおイスラームの民よ、汝らの後ろには  
その頂きを靴底に結び付ける事実がある  
いかにして汝の目は眠るというのか  
その臉はあらゆる眠れる者を目覚めさせる過ちの上にあるというのに  
シリアにいる汝らの兄弟たちは戦死者を犠牲に捧げている  
盛りの馬たちの背中、あるいはライオンたちの腹  
かの恥ずべきビザンツどもは彼らを虐げている  
汝らが安楽のしっぽを揺らして安穩とした振舞いをしている間に  
いったいこれまでにどれほどの血が撒き散らされたのか、また私の血からも  
その美しさを恥じらう思いは、手首によって自らを隠した  
刺撃や殴打の機会を捕える間には戦いがあり  
そのために幼子たちの羽の先は白くなったままである  
それは、平穩のために戦いの浮き沈みから逃れた者の戦争である  
その戦いの後には後悔に襲われるというのに  
我らは多神教徒どもの手によって、剣の切っ先を引き抜いた  
いずれそれらは彼らの首や頭蓋骨に振り下ろされよう  
それらのために、自らを親切心で包んだ者が  
声を張り上げて叫ばんばかりにしている、「ハーシム家の人々よ  
私は見ている、我がウンマの民は彼らの槍を敵に向けておらず  
宗教の支えは脆弱であることを

---

<sup>8</sup> 木の種類。丈が高く、オリーブに似た黄色い果実をつける。なおザクワーンは、サルフの小さいものを言う。

彼らは被害を恐れて炎を避け  
この恥辱を避けがたき一撃だとは思っていない  
私はこの被害に際してアラブの勇者たちを探し求めている  
異民族どもの弱々しい脛の肉を見下ろすことができるような  
彼らが宗教への熱情を手放すことがないようせよ  
彼らは聖域への激情を出し惜しみしている  
彼らが報酬を棄ててしまったなら、また騒乱を棄ててしまったなら  
どうして彼らが戦利品を求めてそこに向かわぬことがあるのか」

バイト・アルマクディスや海岸地域、その他の場所は、90 数年間に渡ってその見捨てられしファランジュどもの手にあったが、ついに神はその時を明らかにされ、ふたつとなきしるしを示し給うたのであった。我々はそれを最大のしるしと呼んでいる。[14. a] 長く続いた夜は夜明けを迎え、数々の罪の萌芽の中にあるこの現世は、それを完全に明らかにすることになり、数々のものが結び付いているそのひとつがもたらされた。それらを支配する者にとっては、天が天幕、流星の尾が綱、大地が絨毯、山々が杭、太陽が金貨、月が銀貨、惑星が召使、星々が子供たちであった。彼はスルタンにして偉大なる王、美德の保全者、強き見解に拠って立つ者、考えられるあらゆることを神に委ねる者、スルタン＝マリク・ナーシル・サラーフ・アッドゥンヤー・ワッディーン・アブー・アルムザッファル・ユースフ・ブン・アイユーブ **al-Malik al-Nāṣir Ṣalāḥ al-Dunyā' wa al-Dīn Abū al-Muẓaffar Yūsuf b. Ayyūb** である。神は彼の時代に、恩寵と恩顧を持って水を注ぎ給い、彼を広々とした庭園に住ませ給うた。神は様々な征服を彼の手に容易いものとし給い、彼の側に天使たちと聖霊たちを下し給うた。それは、我らがマウラーたるイマーム・ナーシル・リディーン・アッラー、信徒の長たるアブー・アフマド・アッバースィー **al-Nāṣir li-Dīn Allāh Abū Aḥmad al-'Abbāsī** がバグダードにいる時代のことであった。スルタン＝マリク・ナーシル・サラーフ・アッディーンは彼の教宣の助け手であり、彼の助けを教宣する者であった。ゆえに彼（カリフ＝ナーシル）はサラーフ・アッディーンに、この明らかなる征服を任じたのである。これはイスラームにとって 2 度目のヒジュラであり、三位一体の民にとっては、不信仰を望んだことゆえの 2 度目のバイアであった。

彼は多くのものを集めては、多くのものをばらばらにした。彼は様々な良きものを贈られ、様々な贈り物を良く扱った。彼は様々な贈り物を求め、様々な望みを与えられた。彼は 583 年の神聖なるムハッラム月の始めに出陣したが、彼が望む勝利はすでに確かなものであった。神とその使徒は、イスラームを助けることを約束なさっていたからである。彼はそれらの地域の方々に、ジハードのために集まることを求める書簡を書き送った。彼は熱情に燃え、栄光にかき立てられて進軍し、数多くの軍勢と強力な軍団を率いて前進した。彼は、それらの地域において不信仰者どもの手にあった様々な城や城塞、領地のすべてを占領した後、バイト・アル

マクデイスを目指した。それらの地からは幸運をもって不幸の足跡が拭い去られ、アザーンの栄光が立ちあがった。強大にして栄光ある神は、彼がアスカラーンの征服を終えるまで、彼を助け給うた。

そしてスルタンは、アスカラーンからバイト・アルマクデイスを求めて、栄光ある助けに付き添われて入った。彼はクドスという花嫁に求婚し、彼女のための婚資金として魂を捧げたのであった。神聖なるクドスには、高位の持ち主であるスルタンがやってくるという知らせがもたらされた。そこにいた者の心は飛び跳ね、浮き立った。ファランジュはそれらの知らせが広まったとき、彼らはそれがやってこないようにと願った。ファランジュは悲しみに絶望し、生命の代わりとなるものを集めて言った。[14. b]「これは我々のがらくただが、この中に我々の復活がある。そこでキリストは十字架にかけられ、犠牲の獣が捧げられ、光が下り、闇が払われたのだから」彼らは自分たちの過った行いや、彼らを導きの道から逸らせたものにしがみついていた。彼らの僧侶たちは彼らを煽り立て、彼らの長たちは彼らを好きなようにさせた。ゆえに彼らは、勝利の軍団が神の助けを得た軍勢として、剣の切り跡も鮮やかに、大軍団を展開して近づいてくるのに気付かなかったのである。すでに低地はその袖によって揺さぶられ、旗はその旗の中で揺れ動いていた。

スルタンはその力を尽くして、勇敢なる勇者たち、象のごとき彼の子供たちや兄弟たち、若きライオンのごときマムルークたちやグラームたちを率いて接近してきた。遠くからでも、彼の進路が近く、彼の軍団の輝かしいことが口にされるようになった。彼は言った。「もし神が我々をお助け下さるのであれば、神の一団がともにあるだろう。もしお助け下さらないのであれば、一体どんな支えが我々を支えてくれるというのか」そしてスルタンは、バイト・アルマクデイスとアクサー・モスクの特別さの中の、数え上げることも量ることも、まとめることもできない数々の美点を語った。そして彼は預言者の足跡の場所に参加するまではそれを止めない、と誓った。彼は、神が自身の誓い果たさせて下さるよう望んで、そうしたことを決意したのであった。

彼はラジャブ月 15 日日曜日にクドスの西に駐屯し、不信仰をそうあるべきように転覆させた。その日クドスには、ファランジュ全軍の中に 7 万人を越える槍や弓を持った戦士たちがいた。彼らは戦い、死の中に突っ込み、あるいは戦いから逃げながら、その町に留まっていた。彼らは激しく戦い、戦闘に突入した。魂という水に渴いたガゼルに水を与えるための。戦いは続き、突撃や襲撃が何度も繰り返された。

ラジャブ月の 20 日に、スルタンは北側に移動するとそこに天幕を張り、ファランジュの通行を妨害した。彼は攻城機を立ちあげ、地平線から矢筈を据えた。それは壁となっていた土手を低くし、集められていたそこからそれ自身を引き剥がした。その体制が崩壊した後、敵との条約が戻って来て、それは征服という地平線より光となって現れた。彼はラジャブ月 27 日金曜日に、彼らが定めた条件と彼らが課した事案と財産で、安全条約をもってその町を占領した。

彼らはスルタンのために、選び出された条件でそれらを実行した。その時金庫には、およそ10万ディーナールがあった。

私は、この征服についての喜ばしき知らせのうち、あたりに広がる芳しき香りや、このスルタンの命によって、彼の敬虔さを伝えるものを生き生きとさせるものを書き留めた。[15. a] 私はハラーム・モスクに、アクサー・モスクの解放という喜ばしき知らせを伝えた。私はムハンマドの宗教において、汝らに定められたものが与えられた、と言った。黒い石は白い岩を、啓示が下る場所はイスラーの場所を、使徒たちの主人にして預言者たちの封印である方の住まいは、神のお側近くに仕える使徒たちと預言者たちの住まいを、完全なる方アブラハムのマカームは、選ばれし方ムハンマドの足の置かれた場所を恋しがった。この高貴なる勝利と偉大なる征服は、人々の間で広く知れ渡った。彼らはあらゆる場所から参詣に訪れ、あらゆる道を通してそこにやってきた。彼らはバイト・アルマクディスからかの古の家（カアバ）に向けてのイフラムを行い、この優美なる地において、その高貴なる花々を満喫した。

スルタンはそこを占領すると、ミフラーブという花嫁からヴェールを取り去って、その前にあった建築物を破壊するように命じた。また彼は、その周囲の空間もきれいにするように命じた。彼らはその空間に、美しい絨毯を敷いた。ランプが吊るされ、啓示に関するクルアーンの章句が読誦され、跪拝や神への奉仕が列になって行われた。礼拝や祈願が行われ、祝福が現れ、嘆きは取り払われた。ミンバルが立てられ、清められたミフラーブが備えられた。

シャアバーン月4日金曜日になり、人々はスルタンが〔然るべきことを〕割り当て、金曜モスクが〔人で〕満たされることを求めるようになった。というのも集まりのための場所がばらばらで、人々の目や耳は孤独であったからである。濡れる心を慰めるために涙が注がれ、〔人々の〕目はじっと見つめ、〔人々の〕意見は分かれた。彼らは誰がフトバを行うべきか、誰がその高き位に就くべきかについて語り、それについて協議し、その任命を長引かせた。彼らは〔候補者について〕率直に、またほのめかしをもって語った。旗が立てられ、ミンバルは飾られ磨かれた。人々の声が上がり、群衆は集まり、軍勢はひしめき合い、〔人々のざわめきという〕波は砕けた。知識人たちは、ハッジのアラファートにおけるどよめきのようにどよめいた。そうするうちに正午になった。節度は失われ、呼びかける者が定められ、使い走りの者は急ぎ立てられた。スルタンは自身の言葉によってハティーブを選出し、自ら試した後にその選択を公表した。彼は、イブン・アッザキー・ウスマーニー・クラシー *Ibn al-Zakī al-'Usmānī al-Qurashī* として知られる、カーディーのムフイー・アッディーン・アブー・アルマアーリー・ムハンマド・ブン・アルハサン・アリー・ブン・ムハンマド・ブン・ヤフヤー・アリー・ブン・アブド・アルアズィーズ・アリー・ブン・アルフサイン・ブン・ムハンマド・ブン・アブド・アッラフマーン・ブン・アルカーシム・ブン・アルワリード・ブン・ムハンマド・ブン・アブド・アッラフマーン・ブン・ウスマーン・ブン・アッファーン *Muḥyī al-Dīn Abū al-Ma'ālī Muḥammad b. Abī al-Ḥasan 'Alī b. Muḥammad b. Yaḥyā' 'Alī b. 'Abd al-Azīz 'Alī b. al-Ḥusayn b.*

Muḥammad b. 'Aba al-Raḥmān b. al-Qāsim b. al-Walīd b. Muḥammad b. 'Abd al-Raḥmān b. 'Uthmān b. 'Affān 一神よ彼を嘉したまえ一を指名した。スルタンは彼に、[15. b] 前に進んでその階段を上るように指示した。そして彼はこの木の上に上り、幸運に浴した。ミンバルの胴体は揺れ動き、会衆は端々まで誇りを感じた。彼がフトバを行えば彼らは耳を傾け、彼が言葉を述べれば彼らは手をこすり合わせた。彼は明瞭に、正しいアラビア語で話し、初めて聞くような驚嘆すべき様子で語った。彼はバイト・アルマクディスの美点と、そこを汚された後に神聖で清らかな状態にすること、すなわち教会の鐘を鳴らさないようにし、僧侶たちを追放することをはっきりと述べた。

彼は座った状態から立ち上がった後、彼のフトバにおいて次のように始めた。彼は〔クルアーンの〕「開巻」の章をその終りまで唱えることでもって始め、続いて〈こうして不義を行った民は根絶やしにされた。万有の主なる神を讃えよ〉(Q6:45)と言った。続いて彼は、「家畜」の章の最初の部分を、〈それなのに、信仰に背く者どもは、主に同位の者を併置している〉(Q6:1)まで唱え、続いて「栄光あれ」〔という語で始まる「夜の旅」の〕章の、〈言ってやれ、「神を讃えよ。神は子供を持ち給うこともなく…〉〉の部分、〈神の偉大さを讃美せよ〉(Q17:111)まで唱え、続いて「洞穴」の章の、〈神を讃えよ、神は僕に…〉(Q18:1)以下の3節を唱え、続いて「蟻」の章の最初の部分の、〈天地にあるものすべてを所有し給う神にこそ栄光あれ〉(Q34:1)以下の句<sup>9</sup>を唱えた。彼は、本当はクルアーンの讃美の章句をすべて述べたかったのだが、長くなることを避けたのであった。

そして彼は言った。「神に讃えあれ。神はそこご助力によりイスラームに栄光をお与えになり、その圧倒的なお力により多神教徒どもを低め給う方。その命により諸々の事々を転じ給い、その御褒美により恩恵を永続させ給う方。その抜け目のなさによって不信仰者どもを破滅に導き給い、その正義によって日々を定め給い、その恩寵によって神を畏れる者たちに結果をお与えになる方。僕たちの上にその庇護を惜しみなく注ぎ給い、あらゆる信仰の上にご自身の信仰の勝利を示し給うた方。その僕たちの上に立つこの勝利者には刃向かうことなどできず、その代理人の上にお立ちになるこの征服者とは争うことなどできない。神が望み給うた指揮官は更迭されることはなく、神が欲し給うた支配者は抵抗を受けることはない。神を讃えよ。勝利を授け給い、物事を明らかにし給い、その友を強め給い、その信奉者を助け給い、その聖なる家を偶像崇拜という汚点や汚れの中から清め給うたことのゆえに。その榮譽に気づいた者が、そのみ心のなかにある神秘、そのジハードの明らかなることを讃えんことを。

「私は『神ただおひとりの他に神なし、神に並ぶ者なし、神は唯一にして永遠なる方、生む

<sup>9</sup> ここで挙げられている〈天地にあるものすべてを…〉の句は、クルアーン第27章「蟻」の章ではなく、第34章「サバ」の章の冒頭部分である。本書の他にムフイー・アッディーンによるフトバを引用している著作を参照すると、ムフイー・アッディーンは第18章「洞穴」の章の後に、第27章「蟻」の章の第59節〈言え、「神に栄光あれ、選ばれし神の僕に平安あれ」〉を唱えた後に、第34章「サバ」の章の冒頭部分を唱えた、となっている。ここではその引用に混乱が起きている[IA i, 263-264; UJ i, 478; MQ ii, 219-220]。

ことも生まれることもなく、彼に並ぶ者も誰一人としてなし』と証言する。これはタウヒードによって心を清めし者のシャハーダであり、彼はこれによってその主を満足させるのである。また私は、『ムハンマドは神の僕にして神の使徒なり』と証言する。彼は偶像崇拜から離れて、誤りを証明した方。彼はある夜ハラーム・モスクからこのアクサー・モスクへとイスラーさせられ、そこから高き天へとミーラージュさせられた方。〈人知の極まるどころのシドラの木のそばのことであった。その木のそばには、住まいとなるべき楽園があった〉(Q35:14-15) 神よ彼に祝福を与えたまえ。[16. a] また彼の代理人にして信仰に先んじた者アブー・バクル・スイディークと、信徒の長にして、この聖なる家から最初に十字架のしるしを取り除いたウマル・ブン・アルハッターブ、信徒の長にして 2 つの光の所有者、クルアーン編纂者ウスマーン・ブン・アッファーン、信徒の長にして、多神教をぐらつかせ偶像を打ち砕いた者アリー・ブン・アビー・ターリブ、そして彼（ムハンマド）の一族と教友の方々、善行でもって彼らの後に続いたタービウンたちにも祝福を与え給え。

「人々よ、弥終の境にして至高なる階段である神の恩寵を喜ぶがよい。神に感謝をいたせ。神はこの長く望まれたものを取り戻すことを汝らの手に易しきこととなさり、そこが丸 100 年も多神教徒どもの手にあって痛んでしまった後に、イスラームのなかのあるべき場所にそれをお戻しになり、神がその中で神の御名を高らかに唱え挙げることをお赦しになったこの家を清め給い、偶像崇拜の帳がその家の上に広がっていた後に、その信仰から偶像崇拜を取り除き給うた。そこには偶像崇拜の痕跡が残っていたが、神を称賛することによってその基盤は引き抜かれた。この家はまさしくその称賛の上に建てられ、その建物は讚美によって築かれた。この家はまさしくその前後にある敬虔さの上に基礎を敷いたものである。この家は汝らの父祖アブラハムの故国にして、汝らの預言者ムハンマド—神よ彼に最上の祝福と平安を与え給え—のミーラージュの地、イスラームの始めに汝らが向かっていたキブラである。この家は預言者たちの住まい、聖者たちの目指すところ、使徒たちの墓地、神のお告げの下るところ、神の命と禁止の下るところである。この家は〔復活の日に〕人々が集められる地、人々が復活させられる丘にある。この家は、神がその明らかなる啓典の中で言及し給うたところの聖なる地にある。この家は、万世の主の使徒が預言者たちや使徒たち、お側仕えの天使たちの先頭に立って礼拝したところのモスク、この家は、神がその僕にして使徒たる方と、マリアに授け給うた言葉と、神が使徒性をもって高貴な者となし、預言者性をもって神聖なる者となし給うたが、僕としての立場を変え給うことのなかったところの、神の魂イエスを遣わし給うた地である」

そして彼は言った。「〈例えメシアであっても、神の僕であることに不服はないはず。お側近くの天使たちにしても同様である〉(Q4:172) [イエスを] 神と等しい者と見なす者たちは正しくないことを言っており、遠くに迷い去っている。〈神は子を設け給わなかった。また、共に並ぶいかなる神もない。もしそうなら、どの神もめいめいの造った者を擁して、互いを制することであろう。彼らの述べるところを超越し給う神に栄光あれ。見えないものも見えるもの



も、すべて知り給うお方である。神は彼らが併置する者を超越して、高きにいまし給う) (Q23:91-92)、[16. b] 〈「神はすなわち、マリアの子メシアである」などと言う者は、すでに信仰に背いている〉 (Q5:17) — 「食卓」の章の中のこの句を最後まで一。

「この家は第 1 のキブラにして第 2 のモスク、第 3 の聖地である。かの 2 つのモスクを除いては、そこ以外に鞍を据えてはならない。かの 2 つの故国を除いては、そこ以外に重きを置いてはならない。万一にも汝らが、神がその僕たちの中から選び給い、諸国の住人たちの間から選出し給うた存在ではなかったとしたら、神は、それについて誰も汝らの隣に立つことなく誰も汝らと競い合うことのないところのこの美点でもって、汝らを特別な存在となさることはなかったであろう。汝らに祝福あれ。汝らの手には、預言者の奇跡とバドルの戦い、スィッディークの決意、ウマルの征服、ウスマーンの軍団、アリーの殺害があった。汝らはイスラームのために、カーディスィーヤとヤルムークの戦い、ハイバルの戦い、ハーリドの攻撃が行われた時代が再び蘇らせられた。神は汝らの預言者ムハンマドを通じ、汝らに最上の報いをお与えくださった。神は、汝らが捧げた、敵との戦いに対する汝らの魂に感謝を示し給い、汝らがそれをもって敵に近づいたところの流血を汝らより受け入れ給い、その報いとして汝らに樂園を与え給うた。樂園こそは幸福の館である。されば汝らは、神が汝らを憐れみ給わんことを、神が定め給うたこの恩恵の価値を思い知り、神に対しその恩恵の義務を果たすがよい。まことに至高なる方は、汝らをこの恩恵でもって特別な存在となし、その奉仕によって汝らを選び抜き給うたことで、汝らの上にお恵みをもたらし給うたのである。これこそは、天の諸門を開かせ、その光で暗闇の面を輝かせ、お側仕えの天使たちを喜ばせ、預言者や使徒の方々に喜びを見出させるところの征服である。この恩恵の中で汝らの上にあるものと言え、汝らが、信仰の御旗がその剣によって、預言者性のうちのわずかな間の後に立つことになるような軍隊となるよう定められているということである。きっと神は汝らの手の上にその規範を開き給い、祝福は大地の民に対する以上に、天空の民に対して多くなることであろう。

「これこそは、神がかつてその啓典の中で言及なさり、ご自身のお言葉において語り給い、それによって汝らにお恵みとお力を与え給うたところの家である。至高なる神は言われた。〈聖なる礼拝堂から、我らがしるしを示すために周囲を祝福した遠隔の礼拝堂まで、夜の間はその僕を連れて旅し給うたお方に栄光あれ〉 (Q17:1) これこそは、天使たちによって強められ、使徒たちによって褒め称えられ、強大にして栄光ある神のもとから下ってきた 4 つの啓典がその中で唱えられるところの家である。この家のために、かつてヤアラブの子ヌンの子であるヨシュア Yūsh' b. Nūn b. Ya'rab の上に太陽が [引き戻された]。神は彼がそこを楽に征服し近づいて行けるように、太陽を留め給うたのであった。この家はまさしく、かつて強大にして栄光ある神がモーセとその民に、そこを救うようにお命じになったが、2 人の人を除いて彼らがそうしなかったために、神がそのことで彼らにお怒りになり、その反抗に対する罰として、彼らを荒野に打ち捨て給うたところの家である。

[17. a] 「神を讃えよ。神は、かつて世界のあらゆる民族に勝っていたイスラエルの民が神に反抗した後に、汝らのことを取り決め給い、汝らに先立つウンマが神との縁を立ち切った後に、かつてばらばらになっていた汝らの言葉を汝らのために集め給い、「～であった **kāna**」といった〔言葉による〕すでに果たされたものをもって、「きっと **sawfa**」とか「そうするうちには **hattā**」といった〔言葉で表される未来の〕ことから、汝らを救い給うた。神はすでに汝らに、その側にいた者について述べ給い、汝らが奈落の軍隊となった後、汝らをその軍隊となし給うた。天からこの家に下ってくる天使たちは、タウヒードの芳しさと、〔この家の〕讚美が広く行われたことのゆえに、汝らに感謝した。汝らは、偶像崇拜や三位一体説、邪悪なる放蕩者の信条を行う者のやり方には乗らなかった。ゆえに今や、諸天の天使たちが汝らのために赦しを請い、汝らのために恵み深き祝福を請うているのである。

「されば汝ら、神が汝らを憐れみ給わんことを、汝らのもとにあるこの施し物のことをよく覚えておき、神に対する敬虔さによって汝らの側にあるこの恩寵に目を向けよ。その敬虔さをしっかりと持った者は心安らかになり、その取手をしっかりと掴んだ者は安全に守られるのである。熱情に従って滅びを受け入れ、過去に戻り、敵から顔を背けることのないように注意せよ。機会をしっかりと捕え、苦しみを取り除くようにせよ。神のために、そのジハードという正義に努めよ。汝らは、神が汝らを憐れみ給わんことを、汝ら自身をジハードの喜びのために売らねばならない。神が汝らを良き僕となさったのであるから。しかし気を付けよ、サタンが汝らを躓かせ、圧政に引きずり込もうとしている。サタンは汝らに、この勝利が汝らの鋭い剣と優駿と、戦場における汝らの〔華々しい〕戦いによるものであると思ひこませようとしている。そうではない、偉大なる神にかけて、強大にして叡智ある神によらずしては、この勝利はあり得なかったのである。神の僕らよ、神はこの栄光ある征服と溢れんばかりの施しによって汝らを高め給い、輝かしい勝利によって汝らを特別に引き立て給うたのだということに注意せよ。神が禁じ給うた事ごとを多く犯し、神に堂々と反抗することのないようにせよ。汝らは、〈紡いだ糸をいったん固く撚り合わせた後で、ほどいてすじ糸に戻してしまう女のように〉(Q16:92)、あるいはまた〈我らからしるしを授かりながら、それを脱ぎ捨て、そのためにサタンに追いつかれて、惑わされてしまった人〉(Q7:175) になってしまわぬように。

「ジハードにジハードを重ねよ。それこそが汝らの奉仕の中で最高のもの、汝らの慣習の中で最も神聖なるものなのであるから。神をお助け申せ、さすれば神も汝らを助けて下さろう。神の名を唱えよ、さすれば神も汝らを思い出して下さろう。神に感謝を捧げよ、さすれば神も汝らに報いを返し、感謝して下さろう。病を終わらせ、敵を根絶やしにすることに努めよ。神とその使徒を怒らせた、この地に残るこの不浄のものを清め、不信仰の枝葉を切り落とし [17. b] その根を引き抜け。時代はすでに、イスラームという豊かな雨をもたらす雲、ムハンマドの宗教が沸き起こったことで揺れ動いているのだ。神は偉大なるかな。神は征服し勝利を与え給い、打ち破り制覇し給い、不信仰者どもを卑しめ給うた。汝らは知るがよい、神が汝らを憐

れみ給わんことを、この機会を捕え、獲物と戦い、戦利品を手になせよ。割り当てを求めて汝らの努めを出し、それを引き出し、それに向かって汝らの取り決めた部隊を出撃させ、それを用意せよ。さすれば幸運はそのしるしによって、得物はその内なる性質によって得られよう。神はすでに汝らに、これらの打ち破られた敵に対する勝利をお与えくださった。彼らは汝らと同数か、あるいはそれ以上いたにもかかわらず。いかにして汝らのうちの 20 人の者が、敵の面前に現れたのか。至高なる神はかつて言われた。〈もし汝らの中で耐え忍ぶ者が 20 人いるならば、200 人に勝てるであろう〉(Q8:65)、〈もし汝らの中に 1000 人いるならば、神のお許しにより 2000 人に勝てるであろう〉(Q8:66) 神よ我々を支え給え。汝らは神の命に従い、神が制限されるものから離れねばならない。神は我々ムスリムたちを、そのお側にいる者を助け給うことによって支え給うた。〈もし神が助け給うならば、汝らに勝つ者は誰もいない。しかしもし神が見捨て給うならば、その後誰が汝らを助けるだろうか〉(Q3:160) ある場所で唱えられた発言が高々と上がり、激しい言葉を貫き通す矢が放たれ、ある発言が終われば、その発言によって知性が彩られるものである。〔これは〕唯一にしてまたとなき、偉大にしてよく知り給う方のお言葉である」

そして彼（ムフイー・アッディーン）は神に救いを求め、「慈愛深く慈悲あまねき神の御名において」と唱えてから、「召集」の章の冒頭部分を唱えた。それから彼は、カリフにして信徒の長たるナースィル・リディーン・アッラーとスルタンのために祈願して言った。「おお神よ、汝の僕たるスルタン、汝の威光の前に身を卑しめ、汝の恩恵に感謝を捧げる者、汝より贈られし、汝の鋭き剣と輝く炎を授けられし者、汝の宗教を守護し推し進める者、反乱の起こった汝の聖域を守る者、栄光に満ち神の助けを受けし主人にして王、信仰の言葉を集めし者、十字架の信仰者を制圧する者、現世と来世の善、イスラームとムスリムたちのスルタン、バイト・アルマクデイスを多神教徒どもの手より清めし者、アブー・アルムザッファル・ユースフ・サラーフ・アッディーン・ブン・アイユーブ、信徒の長の王国を栄えさせる者を、永続させ給わんことを。

「おお神よ、彼の広き王国によって彼が栄えんことを。汝の天使たちを彼の旗でもって取り巻かせ給え。真実なる宗教によって彼への報いを美しく飾り、ムハンマドの宗教によって、彼の偉大さと機敏さを讃え給え。おお神よ、イスラームのために彼の魂を留め置き、信仰のために彼が保有しているものを保ち給え。東においても西においても、彼の教宣を広げ給え。おお神よ、[18. a] 疑いが持たれた後で汝が彼の手の上にバイト・アルマクデイスを征服させ給うたように、彼の手はこの大地の遠きも近きも征服させ給え。彼をして大地のつま先から額までを支配せしめ給え。さすれば彼は、彼のうち部隊ならぬ〔単なる〕切れ端に、集団ならぬ〔単なる〕はぐれ者に、軍団ならぬ〔単なる〕先に行った者にくっついて来た者に相對することになろう。おお神よ、我らが主人ムハンマドによって彼の歩みを讃え、東においても西においても、彼の命じたことや禁じたことが浸透するようにせしめ給え。おお神よ、彼をして諸国の中

心と周辺を、宗教の中心と側面を正しくせしめ給え。おお神よ、彼をして異教徒どもの鼻を低くせしめ、放蕩者どもの鼻を抑えつけさせ給え。軍営都市の上で彼の王権を支え給え。おお神よ、その王権が彼と彼の子孫の中で確かなものとならんことを。その王権を彼の誇り高き幸運なる一族の中に守り、彼らの遺すものによってその力を強め給え。アーメン」

そして彼は、〈神は公正と善行を命じ・・・〉(Q16:90) という至高なる方のお言葉でもって〔彼のフトバを〕結んだ。彼は〔ミンバルから〕下り、ミンバルの中で礼拝した。彼は「神の御名において」と始め、クルアーンを朗読し、このウンマの先頭に立って礼拝した。恩寵は余すところなく下ってきた。礼拝が行われると、人々はあちこちに広がり、友好的な空気が生まれ、イジュマーウが結ばれ、キヤースが行われた。状況は滞りなく進み、続いて喜びが起こった。スルタンは岩のドームで礼拝し、その広い中庭の上では人々が列になって続いた。ウンマは至高なる神に向かい、スルタン＝マリク・ナーシルの勝利の永続を求めた。人々の手は掲げられ、彼のための祈願が聞かれた。

驚嘆すべきことはまだあった。マリク・ナーシル・サラーフ・アッディーン・ユースフがサファル月にアレppoを征服したとき、ダマスカスのカーディーであったムフィー・アッディーン・ザキーは、彼を讃えて次のようなカスィーダを詠んだ。

汝らはサファル月に剣でもってアレppoを征服した  
ラジャブ月にクドスを征服するという喜びの予兆として

果たしてことはその年、彼が予兆した通りとなったのである。

また次のように伝えられている。スルタンは〔シリアの〕海岸地域を数多く征服していたが、バイト・アルマクデイスの征服には踏み切っていなかった。そこには多くの兵や勇敢な軍団がおり、またそこにはキリスト教の主教座があったからである。そこでは、あるダマスカスの民が捕虜となっていたのだが、彼はスルタンに、バイト・アルマクデイスの口に託した次のような詩を送った。

おお、十字架のしるしを引き抜いた王よ  
バイト・アルマクデイスからもたらされた紙片が汝のもとに届いた  
あらゆるモスクは清められたというのに、私は我が神聖なる地位の上に汚されている

[18. b] これこそが、征服を求める声であった。スルタンはその若者の中に適性を見出し、後に彼をアクサー・モスクのハティーフに任じたと言われている。

それから、スルタンは〔ハラムの〕業務を司る者たちを揃え、モスクにクルアーンとそれを収める箱を運び、その整備とアクサー・モスクのミフラーブを大理石貼りにすることを命じ、

そうしたことを熱心に行った。スルタンはクドスにしばらくの間滞在し、584年シャアバーン月25日の金曜日にそこを出立した。彼は〔引き続き〕シリアの地にある残りの地域の征服に着手し、呪うべき不信仰者たるファランジュと戦った。彼と彼らとの間には、この書の元となった2冊の書に書かれ描写されている、有名な数々の戦いが起こった。そして彼は、589年サファル月27日に死の使いに呼び寄せられ、拒むことはできなかった。彼の死は非常な悲しみとなった。彼の代わりとなれるようなもの、彼の後を継げるような者などはいなかった。アミールたちは彼を悼んで泣き、詩人たちは彼を悼む詩を作った。〔サラーフ・アッディーンに捧げられた〕優れた追悼詩の中には、書記のイマード〔・アッディーン〕の追悼詩がある。イマード〔・アッディーン〕は232行のカスィーダによって彼を追悼した。以下がその一部である。

導きと王権の結合は、彼の年月を取り巻いていた  
しかし時は無情にして、彼の善行は断ち切られた  
神かけて、このような王権の勝利者がどこにいたであろうか  
その意志は神に忠実で清冽であった  
敵どもの首を繋いだ鎖が彼の剣  
人々の馬の首に巻いた紐が彼の力であった  
鋭い剣の切っ先も、嘶く馬たちも泣いた  
それを引き抜きそれに跨る者の戦いが過ぎ去ってしまったときに  
かの寛大なる精神は埋葬され、もはや蘇らない  
私は復活の日に至るまで、彼の死を語り伝えよう

〔サラーフ・アッディーンの死後〕アイユーブ朝の諸王は、彼らの前に集められたもの、バイト・アルマクデイスにある遺跡を明らかにすることにおいて、立派にまた金をかけて互いに競い合った。その後王権がマリク・ムアッザム・イーサー・ブン・マリク・アーディル・アビー・バクル・ブン・アイユーブ al-Malik al-Mu‘azzam ‘Īsā b. al-Malik al-‘Ādil Abī Bakr b. Ayyūbのものとなったとき、ファランジュは〔再び〕その地を支配するようになっており、ムスリムたちの力が弱くなっていたのだが、彼は616年にバイト・アルマクデイスの城壁を破壊するように命じた。それはファランジュがバイト・アルマクデイスに向かったときに、敵どもを食い止めることができないことを恐れたためであった。そのためそこからは多くの人々が移住していき、彼らは四方に散り散りになってしまった。

626年にはアイユーブ朝の諸王が争い、彼らは弱体化した。一方ファランジュは強力になり、増大した。スルタン＝カーミル al-Kāmil はそうした反目を解決する手段を見つけないことができず、ムスリムたちはそこに滞在を続けるという条件で、クドスをファランジュに割譲した。

[19. a] 両者のそれぞれが自身の宗教のしるしを立ててもよいということになり、ファランジュは城壁を再建せず、岩〔のドーム〕やアクサー・モスクには手をつけず、農村部はムスリムの支配者に返すという条件で両者は合意した。それは信徒たちにとってはたいへんなことであった。それによって、宗教は非常に弱められた。スィフト・ブン・アルジャウズィー **Sibt b. al-Jarzi** はダマスカスにて説教の集まりを開き、その中で神聖なるクドスの美德や、ムスリムたちの上に起きたこの恐るべきことについて述べた。彼は絶望的なカスィーダを詠んだが、その中には次のような一句があった。

クルアーンの章句を教授する学院では朗誦がなくなった  
住宅は庭が空っぽだと囁いている

彼は多くの人々の心と目を嘆かせた。この長い説教のために、人々は運命を知った。いと高き偉大なる神によらずして、いかなる力もないのである。

その後マリク・アルカーミルは死に、彼の死後マリク・ナーシル・ダーウード・ブン・マリク・アーディル **al-Malik al-Nāṣir Dāwūd b. al-Malik al-ʿĀdil** が継いだ。637年に、彼の幸いなる思考と峻厳なる意志が、来世での報いを望んで、恥知らずどもの集団からバイト・アルマクディスを救い出し、そこを彼らの汚れから清めることとなった。彼は少なからぬ数多くの勇敢な者たちが集め、ファランジュの大きな祭りの日、すなわち彼らが十字架を掲げて、神に禁じられたもの（酒）を飲む日に、突然に彼らに向かって突撃した。彼は朝になる前に彼らの前に現れ、彼らの中に剣と槍をもたらした。ムスリムたちは勝ち誇って進軍し、熱心に戦い、〔ファランジュを〕殺し、捕虜にし、力で強奪した。日が高くなり太陽が現れたときには、不信仰者どもの痕跡はことごとく過去のものとなった。ムスリムたちの力は強力なものとなり、神は信徒たちの上にそのお恵みを満たし給うた。そうしたことについて、様々な地域にこれらの喜ばしき知らせが書き送られた。彼は〔バイト・アルマクディスで〕、彼の伯父サラーフ・アッディーンが行ったような儀式を行った。

この征服は、善行の書物のページの中の、マリク・ナーシル・ダーウードによる1行である。そして〔その書物の中には〕残りの時間にも、善なる祈りをもって様々な言葉が続いた。しかし641年に入ると、マリク・ナーシル・ダーウードは彼の善行を悪行に置き換え、ファランジュにクドスを、そこにある参詣のための場所ごと割譲した。それゆえ神は彼に復讐し給い、彼から彼の王権や財産、数々の城を奪い給うた。彼は様々な苦難を与えられ、それらの苦難によって、〔それまでに彼の善行の書物の中に〕書かれていたものは落とされてしまった。

マリク・サーリヒー・ナーシル・ナジュム・アッディーン・ブン・マリク・カーミル **al-Malik al-Ṣāriḥī al-Nāṣir Najm al-Dīn b. al-Malik al-Kāmil** が死ぬと、〔ムスリムの手によって〕ガザが占領され、海岸地域が支配され、神聖なるクドスも征服された。それはそのために、この上

なく神聖に行われた。[19. b] これがその地の最後の征服であった。以来そこは我々の時代に至るまでムスリムたちの手にある。願わくは神の寛大さが、神の忠実なる友ムハンマドと、すべての預言者たちや使徒たちの榮譽をもって、復活の日に至るまでそこをそのままにし続けることを。まことにそこは、求める者たちの祈願が聞き届けられる場所である。

### 第3章：アクサー・モスクと岩〔のドーム〕の様子、詳しく述べられることのない偉業

まず初めに知っておくべきは、今人々によく知られているように、アクサー・モスクとはモスク区の中央に示された金曜モスクのことであるが、実際にはアクサー・モスクというのは、壁で囲まれたところすべての名前なのである、ということである。ハラム・シャリーフの中央にある建物の中にはかの岩があり、その屋根覆いは新しいものである。かくのごとく知れ。天の下にそれと並ぶものは存在せず、ハラム・シャリーフの中にそれほど広くそれほどの姿をしたものは建てられてはいない。初期の時代においても、そこは驚嘆すべき様子をしており、またとない特徴を備えていた。

我々の時代、すなわち 1144 年におけるその様子については、そこは金曜礼拝が行われるドームをその中央に備えた金曜モスクであり、今ではアクサー・モスクとして知られている。そこにある偉大な建物の上には、大理石の支柱と柱の上に建てられたドームがある。その支柱は 45 本であり、そのうちの 33 本は大理石製、12 本は石製である。また柱は 40 本である。その中央にある大きなミフラブは、東側のミンバルの側にあり、ダビデー彼に平安あれーのミフラブと呼ばれている。このモスクの南北の長さは 100 ズィラーウ、幅は東の門から西の門まで、ウマルのモスクを含めて 77 ズィラーウである。

そこには数多くのミフラブがあるが、ウマルのミフラブというのは、征服の日には彼がそこで礼拝したダビデのミフラブのことである。ウマルのモスクの北側近くには優美なイーワーンがあり、そこにはザカリヤー彼に平安あれーのミフラブがある。東門の近くの神聖なるミンバルの側には、ムアーウィヤー神よ彼を嘉したまえーのミフラブと呼ばれる優美なミフラブがある。モスク内部の西側には、大きな石を組んで作った大きな集会所がある。これは東西に伸びた 2 つの部屋で、10 のアーチが 9 本の柱の上に乗っている。そこは「婦人の金曜モスク *Jāmi' al-Nisā'*」と名付けられている。モスク中央のドームの後方には、ザーウィヤ・フンサニーヤ *al-Zāwiya al-Khunthaniya* があり、その中には鉄製で、ミンバルの付いたマクスーラがある。ザーウィヤ・フンサニーヤの側にはハティーブたちの館があり、[20. a] その中央には、ムアッズィンの壇の向かい側に、大理石の柱の上にこの上なく美しいミンバルがある。

このモスクには、ハラム・シャリーフの中庭からそこに入るための門が 10 ある。そのうち

の7つは北側についており、それらの表には、7つのアーチの上に屋根覆いがついている。すなわちそれぞれの門に1つのアーチがついており、そのアーチには14本の大理石の柱がある。東側にある1つの門は、イエスの揺り籠の方向〔に向いており〕、西側にも1つ門がある。そして10番目〔の門〕は、婦人の金曜モスクへと向かうものである。

このモスクの内部には、左手側に「葉の井戸 **Bi'r al-Waraqā**」がある。そのハディースは、アティヤ・ブン・カイス **ʿAṭīya b. Qays** が伝えた通りである。神の使徒―神よ彼に祝福と平安を与え給え―曰く、「我がウンマの中のある者は、生きているときに彼の両の足で歩いて、樂園に入ることになるだろう」さてウマル・ブン・アルハッターブ―神よ彼を嘉したまえ―の在位中のこと、ある一団が、バイト・アルマクディスで礼拝するためにそこにやってきた。タミーム族のシャリーク・ブン・フッバーシャ **Sharik b. Ḥubbāsha** という人が、仲間のために水を汲みに行ったが、彼の手桶が井戸の中に落ちてしまった。そこで彼はそれを拾いに下りて行ったのだが、その井戸の中である庭園に繋がる門を見つけた。彼はその門から歩いてその庭園の中に入って行き、その木から1枚の葉を取った。彼はそれを自分の耳の後ろに挟んで、その井戸から出た。そして彼はバイト・アルマクディスの統治者のもとに行き、自分がその庭園で見たことと、そこにいったことを知らせた。シャリークとともに人々がその井戸に派遣され、人々は彼とともに下りていったが、彼らは門を見つけることができず、そこは庭園になど繋がっていなかった。そのことがウマルに書き送られた。するとウマルは、「このウンマの中のある者は、生きているときに彼の両の足で歩いて、樂園に入ることになる」というこの話を信じる旨を書き送った。ウマルは、「その葉をよく見よ。それが枯れて変色していれば、それは樂園のものではない。というのも樂園にあるものは、いつまでも変わらないからである」そしてこの話では、その葉は変色していなかったと伝えられている。また別の伝承では、その葉は桃の葉に似ており、手の平のような形で先が尖っていたとなっている。それは〔シャリークが死んだときに〕彼の経帷子と胸の間に置かれた。それが、この葉について知られている最後である。

このモスクの東側近くには、石を組んで作った大きな墓があり、「大工仕事 **al-Nijāra**」と呼ばれている。そこにはモスクの道具類が収められている。またそこには、葉の井戸の第2の口がある。モスクの外、ハラムの中庭の、南の壁の東側のイエスの揺り籠の近くには、ダビデ―彼に平安あれ―のミフラブと名付けられた大きなミフラブがある。そこでの祈願は聞き届けられ、そうしたことはすでに試されて〔証明されて〕いる。

モスクの東側の端の、ダビデのミフラブと隣り合うところには、「スーク・アルマァリフ **Sūq al-Maʿarifa**」と名付けられたミフラブがある。[20. b] そこはイスラエルの民のタウバ門 **Bāb al-Ṭawba** があったところであると言われている。というのも、彼らのある者が罪を犯すと、その者の家の戸に〔そのしるしが〕書かれた。すると彼はその場所に行き、自らを卑しめて悔悛し、彼に〔何らかの神のしるしが〕もたらされるまでそこを動かなかった。彼の罪



が赦されれば、彼の家の戸に書かれたものは消えるのであった。この場所は、古くからハンバル派の礼拝所であった。ダマスカスの主マリク・ムアッザム・イーサーが、彼らのためにそこを定めたのである。

スーク・アルマアリファの下には、イエスー彼に平安あれーの揺り籠がある。そこにはマリアー彼女に平安あれーのミフラーブがあるが、そこは彼女が神に仕えた場所である。そこは人々に親しまれた場所であり、そこでの祈願は聞き届けられる。そこで礼拝する者は、ウマル・ブン・アルハッターブがダビデー彼に平安あれーのミフラーブで礼拝したときに「サード」の章を読んだように、「マリア」の章を読んで跪拝するのが望ましい。そして揺り籠のところで、イエスー彼に平安あれーがオリーブ山から神によって昇天させられた際に唱えた祈願を唱える。それは次のようなものである。「おお神よ、あなたはあなたのいと高き高みにおいても高遠なる低みにおいても、あなたの被造物のなにものよりも近いところにおられる方です。あなたはご自身のご行為をあなたの被造物の中に落とされ、あなたを〔直接〕見るのがなくとも、幻視によって明らかになし、ご自身以外のことをお心に懸け給うお方です。光の中に浮かぶ東雲があなたを讃えたまわんことを。あなたはのみ光によって闇を払われ、祝福を与えたまうお方です。おお神よ、そのお力によって世界を創造なし給うた方、そのお知恵によって物事を支配され、その栄光によって新たに創造なさり、その知識によってあらゆるものを統べ給うお方よ。あなたのお言葉によって7つとなり、あなたに喜んで従うものとなった〔天の〕階層を、あなたはそのお力によって高き所と名付け給いました。〔それらの天は〕あなたの上に煙のようにあってあなたに答え、あなたの命に従うものとなりました。その中には天使たちがいてあなたを讃え、聖なるかなと讃美しております。あなたはその中に闇を払う光と、太陽の光を置かれ、また地や海の闇を導き、サタンたちに対しては石を投げて追い払う灯明を置かれました。おお神よ、あなたは諸天にいる被造物たちを祝福され、大地を水の上に広げられました。あなたは大地のためにその表にあった水を低くされました。水はあなたに服従し、あなたの命に服従しました。海の波もあなたのお力に従いました。あなたは大地に、海の後には川を、皮の後には豊かに水を湛える泉と湧水を流され、その後そこから果実を実らせた木々を生やさされ、大地の表に杭として、山々を置かれました。高々と聳える山々もあなたに従いました。おお神よ、あなたはあなたのご性質を祝福されました。一体誰があなたのお力に辿り着けるというのか、誰があなたのご様子を書き表すことができるというのか。あなたは災いを下しながら厚き雲を湧き起こされ、人の頭を砕きながら正義を司られています。〔21. a〕あなたこそは善悪を最もよく分ちたもうお方、あなたの他に神はありません。あなたを畏れる僕こそ知恵ある優れた者。私はあなたが新しく作り出された神などではなく、あなたに並び立つ主などいないと存じております。我々はそのことを唱えます。あなたには、物事をあなたと共に司る配偶者などおりません。〔そんなものがいたら〕我々は〔今頃〕あなたの名を呼びながら、それらをも呼んでいられることでしょう。またあなたには、あなたの創造物に関してあなたを助けることのできる

者などおりません。〔そんなものがいたら〕我々は〔今頃〕それを証言していることでしょう。私はあなたが永遠にして唯一なるもの、生みもせず生まれもせぬ方、等しきものを持たぬ方、配偶者も子どもも必要とはされぬ方であると証言します。どうか私に喜びと、〔困難からの〕脱出口をお与えください」

このモスクの外、ハラムの中庭の西側には、「マガーリバ・モスク *Jāmi' al-Maghāriba*」として知られているアーチのついた場所がある。そこは人々によく知られた、人の心をかき立てるような場所である。そこではマーリク派の礼拝が行われている。

神聖なる岩〔のドーム〕については、そこはハラム・シャリーフの中央にあり、ハラム・シャリーフの地面に盛り上がった広大な中庭の上にある。岩の上には善美を極めたドームがあり、それは中庭から 51 ズィラーウの高さに立っている。岩の高さは南側で 7 ズィラーウであり、ドームの高さは 58 ズィラーウということになる。それは 12 本の大理石の支柱と 4 本の柱の上に、この上なく完璧な形で立っている。かの神聖なる岩はこのドームの下にあり、木製の欄干に囲まれている。またドームを支える支柱と柱によって囲まれた、鉄の欄干もある。モスクの外側には、黄金の張られた木製の丸屋根が、16 本の大理石の支柱と 8 本の柱の上に立っている。ドームの床と壁は、内側も外側も大理石で建てられており、色とりどりの留め具が嵌められている。ドームの周りにある建物の〔大きさを〕見積もるなら、その周囲は内側が 224 ズィラーウ、外側が 240 ズィラーウである。

かの神聖なる〔預言者ムハンマドの〕足跡は、この岩から離れた石の中にある。それは南側から見たとき西側の端で岩と向かい合っており、大理石の柱の側にある。

かの岩の下には洞窟があり、そこには南側から石の階段がついている。その階段の中央には、東側でその階段に繋がっている石の長椅子があり、その上で参詣者が「岩の舌 *Lisān al-Ṣakhra*」に参詣するために立ち止まる。そこには大理石の支柱があり、その一番下の部分でその長椅子の南側の端と繋がり、その洞窟の南の壁についている。その一番上の部分は岩の端についており、まるで岩が南側に傾くのを防いでいるかのようである。[21. b] ここは人々によく知られた場所のひとつであり、そこには尊厳と荘重さがある。

かの岩は、大地における神の奇跡のひとつである。それはハラム・シャリーフの中央にある岩であり、あらゆる方角から見て〔地面から〕離れている。天を掴むことのできる方（神）のみがそれを掴むことができる。それは神のお許しによって、大地の上に下りてきた。それは南側に傾いており、その 2 方向には天使たちの指の跡がついている。それは預言者一神よ彼に祝福と平安を与え給えーがその岩の上から〔天馬〕ブラクに乗ったとき、天使たちがそれをつかんだために岩が傾いたときのものである。

岩の美德については様々なハディースが伝えられている。その中には、アリー・ブン・アビー・ターリブが預言者ムハンマドより伝えたものがある。「聖地の主人はバイト・アルマクデイス、岩々の主人はバイト・アルマクデイスの岩である」

イブン・アッバースが預言者ムハンマドより伝えて曰く、「バイト・アルマクデイスの岩は、楽園の岩のうちのひとつである」

カアブ曰く、「天にある楽園はかの岩の向かいにある。そこから石が落ちれば、岩の上に落ちることになる」

ウバーダ・ブン・アッサーミト **‘Ubāda b. al-Ṣāmit** とラーフィウ・ブン・フダイフ **Rāfi‘ b. Khudayḥ** 曰く、「強大にして栄光ある神は天に上り給うときに、バイト・アルマクデイスの岩に言われた。『これこそ我が立ち処、復活の日に我が玉座の置かれるところ、我が僕たちの集められるところ。これこそ、その右側に我が楽園が、その左側に我が地獄が置かれるところ。この岩の前に、私は我が天秤を据える。私は神、復活の日の裁き手である』そして神は天へと上り給うた」

ワフブが預言者ムハンマドより伝えたものを、ズフリーが伝えて曰く、「至高なる神はバイト・アルマクデイスの岩に言われた。『汝の中には我が楽園と我が地獄があり、汝の中には我が報いと我が懲罰がある。汝のもとを訪れる者に祝福あれ』あるいは神は、「汝を見る者に祝福あれ」と言われた。

アブー・フライラが預言者ムハンマドより伝えて曰く、「甘き水と実りをもたらす風は、バイト・アルマクデイスの岩の下から出てくる。岩は1本のナツメヤシの木の側にある。そのナツメヤシの木は、楽園の河川のうちのひとつの側にある。そのナツメヤシの下にはファラオの妻アースィヤとイムラーンの娘マリアがいて、彼女たちは復活の日に至るまで、楽園の民の首飾りを編んでいる」

イブン・アッバースが預言者ムハンマドより伝えて曰く、「川にはサイハーン **Sayḥān**、ジャイハーン **Jayḥān**、ユーフラテス **al-Furāt**、ナイル **al-Nīl** の4つがある。サイハーンとはバルフの川、ジャイハーンとはティグリス、ナイルとはエジプトのナイル、ユーフラテスとはクーファのユーフラテスである。アダムの子孫たちが飲むものはみなこの4つから来たもので、岩の下から出たものである」

カアブ曰く、「甘き泉から出るものはみな、バイト・アルマクデイスの岩の下から出ている」

マクフル曰く、「バイト・アルマクデイスに行つて、岩の左右で礼拝し、鎖の場所で祈願し、多少なりともサダカを行った者は、その者の祈願は聞き届けられ、神が彼の悲しみを取り除いて下さる。[22. a] 彼は母親から生まれた日のごとくに、その罪から逃れられる」

そのドームには、四方に4つの門がついている。南門は、前述のアクサー・モスクとして知られる金曜モスクに向かっている。その入口の右側には、大理石の柱の上に立っているムアッズィンの壇と向かい合ったところに、ミフラーブがある。東門はブラークの階段に向かっており、鎖のドームの向かいにある。そこは「イスラーフィール門 **Bāb Isrāfil**」と呼ばれている。北門は「楽園の門 **Bāb al-Janna**」として知られており、かの黒いタイル **al-Balāṭa al-Sawdā’** の側にある。西門は綿商人の門 **Bāb al-Qaṭṭānīn** と向かい合っている。4つのそれぞれの門の表

には腕木と大理石の柱、屋根がついている。

岩のドームに入りたいと思う者は、次のようにすることが望ましい。まず「おお神よ、我が罪を赦し給え、我が前にあなたの恩寵の門を開き給え」と唱えながら、右足から入る。なお〔そこから〕出ていくときは、神に預言者一神よ彼に祝福と平安を与え給え一への祝福を請い、おお神よ、我が罪を赦し給え、我が前にあなたの恩恵の門を開き給え」と言うこと。〔中に入ったら〕岩が右手側に来るようにし、真摯に悔悛に努めてその岩の上に手を置く。しかし岩に口づけしてはならない。また岩の後ろでの礼拝は忌避される。その岩の下に降りたら、作法を守り謙虚な態度を保ち、礼拝する。そしてソロモン一彼に平安あれ一の祈願を唱える。「おお神よ、ここにやってきた罪人の罪を赦し給え。傷持つ者の傷を癒し給え。おお神よ、私はあなたの光によって導かれ、あなたの恩恵をもって豊かに富み、あなたの恩恵でもって朝夕を迎えます。私の罪はこの両手にあります。私はあなたに赦しを求め、あなたの前に悔い改めます。おお情け深き方、恵み深き方よ」

また預言者のスナナの中には、〔次のような預言者の祈願も〕伝えられている：「おお神よ、私はあなたに、あなたにこそ称賛はあり、あなたの他に神なし〔という言葉〕にかけて求めます。慈しみ深き方、天地の開闢者よ、栄光と寛大さを有する方よ」「あなたは唯一にして永遠に在る神、産みもせず産まれもせず、何者もあなたに並び立つことのない方〔という御名〕にかけて、私はあなたに求めます」「おお神よ、隠されたものを見通すあなたの知識によって、被造物の上に及ぼすあなたの力によって、あなたが良いと思われる限り私を生かし、あなたが良いと思われるときに私の命を召し上げ給え。私はあなたに、隠されたものと証のことであなたを畏れる気持ちを、怒りと満足について理の言葉を、貧しさと豊かさについて目的を求めます。私はあなたに、途切れぬ安らぎ、途絶えることのない冷たき泉、死後の涼やかな生活を求めます。私は、傷つけられた苦しみも、信仰の道から外れて背くこともなく、あなたのお顔を見てあなたに会いたいと熱望します。おお神よ、信仰という飾りで我々を飾り、我々を導かれし者たちの導き手となし給え」

岩の下〔にある洞窟〕では作法を守り謙虚な態度を保ち、[22. b] 悔悛に向かい、礼拝し、祈願に努めることが望ましい。至高なる神がお望みになるならば、そこは祈願が必ず叶う場所である。

黒いタイル *al-Balāṭā al-Sawdā'* は楽園の門の側にある。それは〔実際には〕緑色であるが、それを黒と言っているのだからである。というのも緑〔という色の概念は〕黒の後に出てきたものだからである。ワフブより、「それは楽園の諸門のうちのひとつの上にあったものである」と伝えられている。それはソロモンの墓の上にあるとも言われている。ヒドルがそこで礼拝しているとも伝えられている。その上では礼拝し、アナスが伝えているところの祈願を行うのが望ましい。かつて預言者一神よ彼に祝福と平安を与え給え一は教友方を先導して礼拝する際、人々の方に近づいて言った。「おお神よ、私はあなたに、私を悲しませるものからの保護を求

めます。おお神よ、私はあなたに、私を惑わせる富からの保護を求めます。おお神よ、私はあなたに、私を忘れさせる欠乏から保護を求めます」

鎖のドーム *Qubbat al-Silsila* は、岩のドームの姿のように、この上なく優雅なドームであり、ミフラブの 2 本の柱を除いて 17 本の大理石の柱の上に立っている。この場所で、彼（預言者ムハンマド）—彼に祝福と平安とあらんことを—はイスラーの夜、天女たち *al-Hūr al-'Ayn* に会ったのだと言われている。この鎖は、ダビデー彼に平安あれ—に与えられたしるしのひとつだと言われている。彼は至高なる神に、イスラエルの民のうちの 2 人の人間の間を裁くとき、誠実なる者と嘘つきとを見分ける証を与えて下さいと求めた。そこで神は彼の上に、〔天から〕この場所に、すなわち現在鎖のドームのある場所に繋がった光の鎖を下し給うた。彼が裁きを行うときには、彼は争い合う 2 人をその鎖のもとに送った。誠実な者はそれに触れることができるが、嘘つきはそれに触れることができなかった。そうするうちに人々の間にずるい行いが起こるようになり、それは〔天に〕上って行ってしまった。〔この鎖については〕次のような詩がある：

正しき時代の公正は過ぎ去った                      かの鎖の時代に啓示は上っていった

それが〔天に〕上ってしまった理由をまとめると、次のようなものである。あるユダヤ人に、別の人が 100 ディーナールを預けたことがあった。しかしその人が自分の預けたものを要求したとき、そのユダヤ人はそんなものは預かっていないと言った。2 人は鎖の前で裁きをする事になった。そのときそのユダヤ人がずるい行いをした。彼はそのディナールを溶かし、杖に穴を開けて、その中に流し込んだ。彼は鎖のもとにやってくると、ディナールの持ち主にその杖を持たせてから、鎖を掴み、「私はすでに彼にディナールを渡しました」と神に宣誓した後に、その杖を手にした。ディナールの持ち主の持ち主も〔鎖に〕近づいて、自分はまだ彼からそれを受け取っていない、と神に宣誓した。彼らの両方ともが、鎖に触ることができたので、人々は驚いた。その日より、鎖は〔天に〕上がって行ってしまったのである。以上。

岩のドームを取り巻く中庭は長方形をしている。[23. a] その長さは南北に 235 ズィラーウ、幅は東西に 89 ズィラーウである。この中庭に向かつては、ハラム・シャリーフの中庭にある様々な場所から、それぞれ石造りの階段で繋がっている。その階段の上には、柱の上に建てられたアーチがついている。そうしたもののうち、南側からは 2 つの階段がある。そのうちの 1 つはモスクの門に向かつており、その上には大理石のミンバルがある。そのミンバルの側には、祭りや雨乞いの際に礼拝が行われるミフラブがある。2 つ目の階段は巻物のドーム *Qubbat Tūmār* に繋がっており、このドームは岩〔のドーム〕の中庭の、オリーブの木の側の端にある。東側には「ブラークの階段 *Daraj al-Burāq*」として知られている階段がある。北側にも 2 つの階段があり、そのうちの 1 つはヒッタ門 *Bāb Ḥiṭṭa* に向かい合い、2 つ目はダーウーディ

ーヤ門 **Bāb al-Dāwūdīya** に向かい合っている。西側には 3 つの門があり、そのうちの 1 つはナズィル〔門〕 **al-Nāẓir** に向かい合い、2 つ目は綿商人の門に向かい合い、3 つ目は鎖の門 **Bāb al-Silsila** に向かい合っている。

神聖なる岩〔のドーム〕の右側、すなわち西側には昇天のドーム **Qubbat al-Mi'rāj** があり、そこは有名で参詣の目的地となっている。昇天のドームの側には、赤い大理石で地面に円形に、岩〔のドーム〕のタイルの形に描かれた優美なミフラーブがある。そこは預言者一神よ彼に祝福と平安を与え給えーがイスラーの夜、預言者たちや天使たちとともに立ったところである。次のように伝えられている。カアブは預言者一神よ彼に祝福と平安を与え給えーの妻サフィーヤ **Ṣafiya** に言った。「信徒の母よ、ここで礼拝して下さい。というのも預言者一神よ彼に祝福と平安を与え給えーは天にイスラーしたとき、〔ここで〕預言者たちを先導して礼拝したからです」次のようにも伝えられている：現世と来世における何らかの要望を持ってこのドームにやって来て、2 回または 4 回のラクアを行った者は、その者の願いは速やかに聞き届けられる。

昇天のドームと預言者一神よ彼に祝福と平安を与え給えーのマカーム **Maqām al-Nabī** では、礼拝し、祈願に努めることが望ましい。というのもその 2 つは、祈願が聞き届けられるとして人々の意見が一致している場所だからである。その祈願とは次のようなものである。「おお神よ、あなたへの畏れのゆえに、我々とあなたに逆らう者どもとの間にあるものを、我々に約束し給え。あなたへの服従のゆえに、あなたが我々をあなたの恩寵へと運んでいくものを約束し給え。確かさのゆえに、あなたが我々の現世における災いを軽くしてくださるものを約束し給え。我々の耳と目で我々を楽しませ給え。我々のうちから、かの後継者を定め給え。我々を虐げる者から、我々を遠ざけ給え。この現世において、我々に災いを定め給うな。現世を苦しみ多き場所、我らの知識が極まる場所とはし給うな。我々を憐れまない者に、我々を支配させ給うな」

[23. b] 岩〔のドーム〕の中庭の下部には、鉄の門 **Bāb al-Ḥadīd** と向かい合って、階段の側に小屋がある。そこは古くは「ヒドルのマカーム **Maqām al-Khidr**」として知られていた。そこには「バフバフ **Bakhbakh**」と名付けられた岩があり、ヒドルがその上で礼拝し、祈願していると聞かれている。そこは人々によく知られた場所である。岩〔のドーム〕の中庭にあるこの場所の上部には、「魂の洞窟 **Maghārat al-Arwāḥ**」として知られるミフラーブがあり、人々が参詣に訪れている。

北側のモスク後部には数多くの岩が見えており、それらはダビデー彼に平安あれーの時代より存在すると言われている。というのもそれらの岩は地面にしっかりとくっついており、まったく変わっていないからである。

その方角には、ダワーダリーヤ門 **Bāb al-Dawādāriya** から西に行ったところにソロモンー彼に平安あれーのドーム **Qubbat Sulayman** が、硬い岩にしっかりと建てられている。ここは、彼がモスクの建設を終えたときに立って、「おお神よ、ここにやってきた罪人の罪を赦し給え。

傷持つ者の傷を癒し給え」と祈願したところである。ここにやって来た者はみな、ソロモン―彼に平安あれ―の祈願を受けているのである。

鎖の門に向かい合うところには、「ムーミーのドーム **Qubbat Mūmi**」として知られるドームがある。そこは古くは「木のドーム **Qubbat al-Shajara**」として知られていた。またモスクの西側には、堅固に建てられ、南側から北側へと伸びる回廊がある。その始まりはマガーリバ門 **Bāb al-Maghāriba** のところで、その終わりは<sup>10</sup>ナーズィル門のところである。その上はガワーニマ門 **Bāb al-Ghawānima** の近くに繋がっている。モスクの中庭の西側には、その回廊と岩〔のドーム〕の中庭の間には数々のミフラブが、礼拝のために建てられた石の長椅子の上にある。また多くの木々もある。その回廊の北側は、アスバート門 **Bāb al-Asbāt** から、県知事の館として知られるマドラサ・ジャーワリーヤ **al-Madrasa al-Jāwaliya** の方へと伸びている。

モスクの東側には、岩〔のドーム〕の中庭と東の城壁との間に、ビザンツ時代からの数多くのオリーブの木がある。岩〔のドーム〕の中庭の南側の端で、東側に隣り合うところには、巻物のドームがある。そしてその側には、「カーシャーニーヤ **al-Qāshāniya**」として知られる小部屋がある。岩〔のドーム〕の中庭の東側の下部には、オリーブの木の側にザーウィヤト・アルバスターミーヤ **Zāwiyat al-Bastāmiya** があり、人々によく知られた場所である。そこはバスターミーヤの貧者たちが集まる場所であるが、その門は閉ざされている。その北側の側には、ザーウィヤト・アルイマーディーヤ **Zāwiyat al-'Imādiya** があるが、その門もバスターミーヤ同様閉ざされている。

ハラム・シャリーフには、冬場の水を集めるための 34 の井戸がある。それらのうち岩〔のドーム〕の中庭には 7 つがあり、その残りは岩〔のドーム〕の中庭の四方にある。それらの中には、口が 2 つあるものもあれば 3 つあるものもあって、それらの口の総数は 40 いくつである。井戸の中には、崩れていて口が閉ざされているものもある<sup>11</sup>。

ハラム・シャリーフの大きさは、南北の長さが、ダビデのミフラブの側にある南の壁から、アスバート門の側にある北回廊の中央まで 660 ズィラーウ、東西の幅が、ラフマ門の墓地を見下ろす東の壁から、マドラサ・タンキズィーヤ **al-Madrasa al-Tankiziya** の下にある西回廊の中央までが 406 ズィラーウである。

ハラム・シャリーフにはミフラブその他の数多くの場所があり、それらすべてを述べていくと長くなってしまふ。このモスクの様子はまことに偉大なもので、実際に見た者でなければ、それを言い表すことなどできない。それはただおおよそのところと、その偉大なる美しさを述べることができるだけである。人間がその中のいかなる場所に座ろうとも、その者はその場所

<sup>10</sup> この部分は底本（C 写本）では「その始まりは **wa-awwalu-hā**」となっているが、B 写本では「その終わりは **wa-ākharu-hā**」となっている。ここでは底本を誤字として B 写本に従う。

<sup>11</sup> B 写本にはこの後に、「私は次のように言う。アクサー・モスクの門の近く、岩〔のドーム〕の階段の正面には、「杯 **al-Ka's**」と名付けられた大きな池がある。その水はベツレヘムから来ている。その周囲には木々が植えられている。そこは人々によく知られた場所であり、それを見ることで魂たちが安らぐ場所である」という文章が追加されている。

が最も美しく、最も輝かしい場所であると思うであろう。これゆえに、至高なる神はそこに美の目を向け、ハラーム・モスクに栄光の目を向け、同様に預言者のモスクには寛大さの目を向け給うた、と言われているのである。ゆえに、汝はこのモスクにこの上ない華々しさと広さ、美しい眺めを見出すであろう。一方ハラーム・モスクには、この上ない栄誉と荘重さ、威厳を見出すであろう。

ハラーム・シャリーフの南側のすそには、屋根つきの柱のある広い場所があって、そこは「古の阿克サー *al-Aqṣā al-Qadīm*」と名付けられている。これはおそらくソロモンの遺跡のひとつである。この場所近くのモスクのすそ、オリーブの木々の下には、「ソロモンの馬小屋 *Iṣṭabl Sulaymān*」と呼ばれる広い場所がある。

ミンバルについては4つある。1つ目は南側のハラーム・シャリーフ前方、マドラサ・ファフリヤ *al-Madrasa al-Fakhriya* の側にある。2つ目は北側のもので、鎖の門の西にある。3つ目は北側のハラーム・シャリーフ後部の、西側に繋がる場所にあり、「ガワーニマのミナレット *Mu'adhhanat al-Ghawānima*」と名付けられている。4つ目はハラーム・シャリーフの北側の、アスバート門とヒッタ門の間にあり、最も形が優美である。

〔ハラーム・シャリーフの〕諸門については、東壁に2つの連結した門がある。これは至高なる神が、〈彼らの間には壁が立てられ、その壁の内側には慈悲が、[24. b] 外側には懲罰が待っている〉(Q57:13)と言われたところの門である。この門の後ろにある谷がワーディー・ジャハンナムである。この2つは壁の内側にあり、モスク区に繋がっている。そのうちの1つがラフマ門、2つ目がタウバ門である。ズィヤード・ブン・アビー・サウダ *Ziyād b. Abī Sawda* 曰く、「ウバーダ・ブン・アッサーミト—至高なる神よ彼を嘉したまえ—は、バイト・アルマクデイスの壁の側に立って泣いていた。ある人が彼に、『なぜ泣いているのですか、アブー・アルワリードよ』と言ったところ、彼は『ここで、神の使徒—神よ彼に祝福と平安を与え給え—はジャハンナムを見たと言えられたのだ』と言った」ある伝承では、「彼は織火のような石をひっくり返している天使を見た」とある。イブン・アッバース—神よ彼ら両名を嘉したまえ—曰く、「彼はバイト・アルマクデイスの東の壁の側に立って、『ここから細き道が立ち上る』と言った」

この2つは壁の内側にあり、ハラーム・シャリーフに繋がっている。そのうちの1つがラフマ門、2つ目がタウバ門である。これら2つは、今は使用されていない。これら2つの側の壁の内側にところには、ソロモンの建物とアーチでつながった場所がある。ハラーム・シャリーフの中には、この場所の他にもソロモンの建物が残っている。そこは人々が参詣に向かう場所であり、そこには栄誉と荘重さがある。ウマル・ブン・アルハッターブ—神よ彼を嘉したまえ—がその2つの門を閉ざしたと言われている。それらはマリアの子イエス—彼に平安あれ—が下って来る時まで開かない。これらの門が閉ざされているのは、ハラーム・シャリーフとこの町が、目を赤く腫らした敵に襲われることを恐れていたことである。これら2つの門は荒野に向かって



いるので、そこを開いても大きな益はないのである。東壁には前述の 2 つの門の南側に優美な門があるが、これも建物で封じられている。これはブラークの階段の正面にあり、「狼の門 **Bāb al-Dhi'b**」と名付けられている。預言者—神よ彼に祝福と平安を与え給え—はイスラーの夜、ここから〔町の中に〕入った。またそこは古くは、葬儀がそこから出ていくゆえに、「葬儀の門 **Bāb al-Janā'iz**」とも名付けられている。

そこから入ることが認められている門は、マドラサやリバートや宿泊所からハラム・シャリーフに繋がっている 3 つの門を除いて、11 の門がある。北側には、イスラエルの民の部族に由来するアスバート門があり、これはハラム・シャリーフの後方にある。東側には、ラフマ門の近くにヒッタ門がある。これはかつてイスラエルの民が〈伏し拝みつつ門に入り、「お赦しを **hiṭṭa**」と言え。そうすれば、我らはお前たちの罪を赦してやろう〉(Q2:58)と言われたところの門である。[25. a] しかし彼らはそうする代わりに尻で入り、「髪の毛 1 本に麦 1 粒 **ḥabba fī sha'ra**」と言った。預言者たちの尊厳の門 **Bāb Sharaf al-Anbyā'** は、おそらくウマルが征服の日に入った門である。そこは今日では「ダーワイダール門 **Bāb al-Dāwaydār**」として知られている。西側には 8 つの門がある。ガワーニマ門は、ガワーニマのミナレットから西にあり、そこはバヌー・ガーニムの地区へと繋がっている。そこは古くはヘブロン門 **Bāb al-Khalil** として知られていた。ナーズィル門は、古くはミカエル門 **Bāb Mikā'il** として知られていた。そこは、イスラーの夜に〔天使〕ガブリエルがブラークを繋いだところだと言われている。鉄の門は、優美ながらしっかりと造られた門である。綿商人の門は、そこが彼らのスークに通じているゆえに〔その名がつけられた〕。アズィーム門 **Bāb 'Aẓīm** は、その造りがこの上なく完全である。この門の近くには、洗い場の門 **Bāb al-Mutawaḍḍā'** がある。そこからはモスクの洗い場に通じている。鎖の門とサキーナ門 **Bāb al-Sakīna** はひとつながりになっていて、そこからは、我らが主人ダビデー彼に平安あれ—の通りとしてしられる大通りに通じている。ガワーニマ門は、ガワーニマ地区に通じているために〔その名がつけられた〕のであるが、預言者—神よ彼に祝福と平安を与え給え—の門としても知られている。ミーラージュのハディースで、彼が「太陽と月が傾く門」からモスクに入った、とされているところである。このような形をした門はこれ以外には存在しない。

ハラム・シャリーフ〔全体〕について見れば、その南東の方角は荒野に通じている。また南の方角は、シロアムの泉 **'Ayn Silwān** その他を見下ろしており、東の方角はオリーブ山 **Ṭūr Zaytā** とワーディー・ジャハンナムその他を見下ろしている。居住区は、ただ北側と西側から取り巻いている。しかし先人たちの時代には、そこは四方を取り巻かれた町であった。

そこに任命されたイマームたちについては、まず初めにマーリク派のイマームで、彼はマガーリバ・モスクで礼拝を行っている。次にシャーフイー派のイマームで、アクサー・モスクにいる。次にハナフィー派のイマームで、神聖なる岩のドームにいる。次にハンバル派のイマームで、マドラサ・スルタン・マリク・アシュラフ **Madrasat al-Sulṭān al-Malik al-Ashraf** に

いる。

バイト・アルマクデイスとその近くのラムラやガザ、またそれに隣接する海岸地域の民のキブラは、カアバの雨樋とイシュマエルの石の方角である。

そこ（ハラム・シャリーフ）にあるマドラサについて言えば、その中にはアクサー・モスクの内部、葉の井戸の近くに、マダーリス・ファーリスィーヤ **al-Madāris al-Fārisiyya** がある。**[25. b]** 岩〔のドーム〕の中庭の南側の端から西に向かうところには、マドラサ・ナフウィーヤ **al-Madrassa al-Naḥwiyya** がある。マドラサ・ナスィリーヤ **al-Madrassa al-Nāṣiriyya** はラフマ門の塔の側にあったが、忘れ去られてしまった。

ハラム・シャリーフの周囲にあるマドラサやザーウィヤについて言えば、〔ハラム・シャリーフの〕壁の西側に隣接するマドラサやリバートは 13 ある。まず初めにハーンカー・ファフリーヤ **al-Khānqāh al-Fakhrīyya** が、マガーリバ・モスクの西側に隣接している。そこは壁の内側にある。マドラサ・タンキズィーヤは偉大なマドラサで、マドラサの中にこれ以上に完璧なものはない。これは鎖の門の通りにある。マドラサ・アシュラフィーヤ **al-Madrassa al-Ashrafiyya** は、ハンバル派の礼拝所となっているところである。マドラサ・ウスマーニーヤ **al-Madrassa al-‘Uthmāniyya** は洗い場の門のところにあり、リバート・アルザマニー **al-Ribāṭ al-Zamanī** は洗い場の門のところに、マドラサ・ウスマーニーヤの向かいにある。マドラサ・ハートウニーヤ **al-Madrassa al-Khātūniyya** とマドラサ・アルグーニーヤ **al-Madrassa al-Arghūniyya**、マドラサ・ジャウハリーヤ **al-Madrassa al-Jawhariyya** の 3 つは、鉄の門のところにある。リバート・クルド **Ribāṭ Kurd** も鉄の門の壁に近いところに、マドラサ・アルグーニーヤとマドラサ・ジャウハリーヤの向かいにある。ザーウィヤ・ワファーイーヤ **al-Zāwiyya al-Wafā’iyya** はナーズィル門のところに、〔同じく〕ナーズィル門のところにあるマドラサ・マンジャキーヤ **al-Madrassa al-Manjakiyya** の向かいにある。

〔ハラム・シャリーフの壁の〕北側には 14 ある。まずマドラサ・ジャーワリーヤがあり、この中にはシャイフ・ディルバース・クルディー **Shaykh Dirbās al-Kurdi** の墓地がある。彼は正しい人であった。マドラサ・スルビーヤ **al-Madrassa al-Ṣulbiyya** とマドラサ・アスアルディーヤ **al-Madrassa al-As‘ardiyya** とマドラサ・マリキーヤ **al-Madrassa al-Malikiyya** は、アクサー・モスクの北回廊の上にある。マドラサ・ファーリスィーヤとザーウィヤ・アミーニーヤ **al-Zāwiyya al-Amīniyya** は、預言者たちの尊厳の門 **Bāb Sharaf al-Anbiyā’** のところにあり、マドラサ・ダワイダーリーヤは、〔ダワイダーリーヤ門として知られる預言者たちの尊厳の門のもとにあり、〕「預言者たちの尊厳の門」というのはこのマドラサにちなんで名づけられた。そこは古くは「義人たちの館 **Dār al-Ṣāliḥīn**」として知られており、人々によく知られている場所であった。マドラサ・バースィティーヤ **al-Madrassa al-Bāsiṭiyya** は、その一部がマドラサ・ダワイダーリーヤとアウハディーヤ墓地 **al-Turba al-Auḥadiyya** に接しており、ヒッタ門のところにあり、マドラサ・カリーミーヤ **al-Madrassa al-Karīmiyya** もヒッタ門のところにあり、マ

ドラサ・カーディリーヤ *al-Madrasa al-Qādirīya* はハラム・シャリーフの内側にある。マドラサ・トゥールーニーヤ *al-Madrasa al-Ṭūlūniya* もハラム・シャリーフの内側の北回廊のところにある。マドラサ・アトリーヤ *al-Madrasa al-'Atriya* は、トゥールーニーヤの東側の向かいにある。マドラサ・フサイニーヤ *al-Madrasa al-Ḥusayniya* はアスバート門の側にあり、これが最後のマドラサである。

ハラム・シャリーフと繋がっており、ハラム・シャリーフの出口となる門を備えている場所について言えば、[26. a] その中にはザーウィヤ・ハンサニーヤ、ハティーブの館、ファフリヤー、タンキズィーヤ、バラディーヤ *al-Baladiya*、リバート・アルザマニー、ハートウーニーヤ、アルグーニーヤ、ワファーイーヤ、マンジャキーヤ、我らが父祖のひとりであるハラムのシャイフ、シャイフ・ジャマール・アッディーン・ブン・ガーニム—彼らのうち 20 人を超えるハラムのシャイフたちが亡くなっている—の館、ガワーニマのミナレットに隣接するバヌー・ジャマーアの館 *Dār Banū Jamā'a*、マドラサ・ジャーワリーヤ、スルビーヤ、アスアルディーヤ、マーリキーヤ、アミーニーヤ、バースィティイーヤ、カリーミーヤ、アトリーヤがある。

これ以外の市内にあるマドラサについては、次章にて扱う。まことに神は報いを与え給うお方である。

#### 第 4 章：クドスの町の様子とそこにあるマシュハド、その周辺にある場所

我々のこの時代におけるそこ（町）の様子は、山地と谷間の間にある、偉大で建物の立ち並ぶ町といったものである。町の西側の北側には壁が建てられており、そこは「スレイマーンの城壁 *al-Sūr al-Sulaymānī*」と名付けられており、オスマン家の王たちのうちのスルタンによるものである。その城壁には町の門がついており、あるものは高地に聳えており、またあるものは谷間に低くなっている。高い場所に建っている建物の大部分は、低い場所にあるものを見下ろす形になっている。町にある通りは、あるものは滑らかであるものはでこぼこしている。またそこには数多くの水を集めるための井戸がある。というのもその水は、雨水を集めているからである。

そのスークについては、その中にはハラム・シャリーフの門の西側に隣接する綿商人のスーク *Sūq al-Qaṭṭānīn* がある。そこは非常に名高いスークで、諸国のいろいろなところでも、そのようなところは見つからない。同様に、ヘブロン門として知られているミフラーブの門の近くには、3つのスークがある。そこはビザンツ時代のものであり、南北に展開していて、ひとつからひとつへと通路がついている。その1つ目のものは香料商人のスーク *Sūq al-'Aṭṭārīn* で、それに続く真ん中のものが野菜を売るところ、その東側に衣服を売るところがある。旅行者たちは、これら3つのスークのようなものはいかなる国の建物の中でも見たことがない、と言っている。そこはバイト・アルマクディスの魅力のうちのひとつである。

[26. b] 町の通りについては、その中にはダビデ通り *Khayṭ Dāwūd* がある。これが最も大き

な通りであり、その始まりは鎖の門で、ヘブロン門として知られているミフラブの門まで伸びている。この通りには様々な区分がある。そこが「ダビデ通り」と名付けられた理由は次のようなものである。我々が主人ダビデー彼に平安あれーは、鎖の門からダビデのミフラブとして知られている城塞に至るまで、地面の下に地下室を持っており、そこに居住していた。この地下室があるとき発見され、その一部が発掘され、それが石組みの地下室だということが明らかになった。マルズバーン通り **Khaff Marzbān** には、香料商人のスークその他がある。ワーディー・アッタワーヒーン通り **Khaff Wādī al-Ṭawāḥīn** には数々の良く知られた通りがあるが、述べるまでもないであろう。

町の中にあるマドラサで、ハラム・シャリーフ周辺にあり、その壁と接してはいないがその近くにあるものについては、北側にはアスバート門のところにマドラサ・サラヒーヤ **al-Madrasa al-Ṣalāḥīya** がある。そこは古くはハンナの墓として知られており、その中にマリアの母の墓があると言われている。マリク・サラーフ・アッディーン・ユースフが、クドスを征服したときにそこを興し、シャーフイー派のサイドたちのワクフとして定めた。そのマドラサの隣には、ジンがソロモンのために建てたという浴場があり、これは最初に建設された浴場である。ザーウィヤ・シャイフーニーヤ **al-Zāwiya al-Shaykhūniya** は、ヒッタ門の小市場の側にある。マドラサ・カーミリーヤ **al-Madrasa al-Kāmiliya** は、ヒッタ門のところにあり<sup>12</sup>。マドラサ・ムアッザミーヤ **al-Madrasa al-Mu'aẓẓamiya** は、アウハディーヤ墓地の近くにある。ザーウィヤ・マフマーズィーヤ **al-Zāwiya al-Mahmāziya** はムアッザミーヤの西側近くにあり、マドラサ・ウジューヒーヤ **al-Madrasa al-Wujūhiya** はダラジュ・アルマウラー通り **Khaff Daraj al-Mawlā** にあり、マドラサ・ムハッディスイーヤ **al-Madrasa al-Muḥaddithiya** はウジューヒーヤとガワーニマ門の近く、すなわちハラム・シャリーフの西側近くにある。リバート・マンスーリー **al-Ribāṭ al-Manṣūrī** はナーズィル門のところにあり、リバート・アラー・アッディーン・バスィール **Ribāṭ 'Alā' al-Dīn al-Baṣīr** はリバート・マンスーリーの向かいにある。マドラサ・フサイニーヤはナーズィル門のところ、リバード・アラー・アッディーンの側にある。このマドラサの向かいには目立つ墓地があり、そこはサイイダ・ファーティマ・ピント・ムアーウィヤ **al-Sayyda Fāṭima bint Mu'āwiya** —神よ彼ら両名を嘉したまえーの墓であると言われている。マドラサ・クシュタムリーヤ **al-Madrasa al-Qushtamuriya** はナーズィル門のところの、フサイニーヤの近くにある。マドラサ・サフリーヤ **al-Madrasa al-Safriya** はナーズィル門のところにあり、スイット・サフリー・ピント・シャラフ・アッディーン・バーダルディー **al-Sitt Safri bint Sharaf al-Dīn al-Bāḍardi** がそこをワクフとした。[27. a] また [マ

<sup>12</sup> B 写本ではここに、「北側にはまた、ヒッタ門のところのカーミリーヤの向かい、アウハディーヤ墓地の隣に、リバート・アルマールディーニー **Ribāṭ al-Mārdīnī** がある。マドラサ・アズィーマ **al-Madrasa al-'Azīma** は預言者たちの尊嚴[の門]の向かいにあり、マドラサ・サラミーヤ **al-Madrasa al-Salāmiya** は預言者たちの尊嚴の門のところの、[マドラサ・] ムアッザミーヤ **al-Mu'aẓẓamiya** の向かいにある」という一文が追加されている。

ドラサ・] バーダルディーヤ **al-Bāḍardiya** も、クシュタムリーヤの近くにある。バーダルディーヤの側には、ザーウィヤ・ムハンマディーヤ **al-Zāwiya al-Muḥammadiya** がある。

西側には、ザーウィヤ・ユニスィーヤ **al-Zāwiya al-Yūnisiya** がある。バーダルディーヤの向かいにはジハールカスィーのギリシア人の貧者たち **al-fuqarā' al-Yūnāniya al-Jihārkaṣiya** に由来する場所があり、それはユニスィーヤの隣にある。それら 2 つはもとはビザンツ人の建てた教会で、2 つに分割されたものである。マドラサ・ハンバリーヤ **al-Madrasa al-Ḥanbaliya** は鉄の門のところであり、サアディーヤ墓地 **al-Turba al-Sa'diya** は鎖の門のところの、マドラサ・タンキズィーヤの門の向かいにある。鎖の門のところにある「泉の階段 **Daraj al-'Ayn**」にはジャーリキーヤ墓地 **al-Turba al-Jāliqiya** がある。ジャーリキーヤ墓地の隣にはハディースの館 **Dār al-Ḥadīth** がある。

西側にはまたハディースの館の向かいに、平安なるクルアーン **Dār al-Qur'ān al-Salāmiya** の館がある。マドラサ・ターズィーヤ **al-Madrasa al-Ṭāziya** は、ダビデ通りの鎖に門に近いところにある。マリク・フサム・アッディーン・ブルカ・ハーン墓地 **Turbat al-Malik Ḥusān al-Dīn Burkat Khān** は、マドラサ・ターズィーヤの向かいにある。カイラーニーヤ墓地 **al-Turba al-Kaylāniya** はターズィーヤの隣にある。

西側にはまた、カイラーニーヤの近くにマドラサ・クシュタムリーヤがある。ザーウィヤ・ターワシーヤ **Zāwiyat al-Ṭawāshiya** は、古くはクルド人地区 **Ḥārat al-Akrād** として知られていた東地区にある。ザーウィヤ・マガーリバ **al-Zāwiya al-Maghāribā** は彼らの地区にある。マドラサ・アフダリーヤ **al-Madrasa al-Afḍariya** は、古くはドームがあったことで知られており、マガーリバ地区にある。

神聖なるクドスにあるマドラサやザーウィヤのうち、ハラム・シャリーフの近くでないものについては、ザーウィヤト・アルバラスィー **Zāwiyat al-Balāsi** が神聖なるクドスの南側の外にある。そこはシャイフ・アフマド・バラスィー **al-Shaykh Aḥmad al-Balāsi** がそこに埋葬されていることに由来するものである。彼は正しい人々のひとりであり、彼の墓は有名で、参詣者たちが訪れる場所となっている。ザーウィヤト・アルアズラク **Zāwiyat al-Azraq** も神聖なるクドスの南側の外、ザーウィヤト・アルバラスィーの東にある。そこにはある一団の墓があり、彼らの中にはシャイフ・イスハーク・ブン・シャイフ・イブラーヒーム・アルアズラク **al-Shaykh Ishāq b. al-Shaykh Ibrāhīm al-Azraq** がいる。マドラサ・ルウルウイーヤ **al-Madrasa al-Lu'lu'iya** はマルズバーン通りの、アラー・アッディーン・バスィールの浴場の隣にある。

北側にはマドラサ・バドリーヤ **al-Madrasa al-Badriya** が、マルズバーン通りのルウルウイーヤに近いところにある。ザーウィヤト・アッダルクート **Zāwiyat al-Darkāt** はサラーヒー病院 **al-Bīmāristān al-Ṣalāhī** の隣にある。ザーウィヤト・アッシャイフ・ヤアクーブ・アルアジャミー **Zāwiyat al-Shaykh Ya'qūb al-'Ajamī** は城塞の近くにある。そこはビザンツ人の建てた

もののうちのひとつであるが、[27. a] イブン・シャイフ・アブド・アッラー・バグダーディー—Ibn al-Shaykh ‘Abd Allāh al-Baghdādī がそこに住んだことのゆえに、ザーウィヤ・イブン・シャイフ・アブド・アッラー・バグダーディーとして有名である。ハイヤート・モスク **Masjid al-Ḥayyāt** は蛇のお守り **Ṭilasm al-Ḥayyāt** があるところである。バイト・アルマクディスの中で蛇に咬まれた者は、360 日間その町から出ずに過ごせばよい。もしその日数を満たす前にそこから出れば、その者は死んでしまう。そこはごみ山〔の教会〕の近くにあり、ウマルの 3 つのモスクの中のひとつである。ハーンカー・サラヒーヤ **al-Khānqāh al-Ṣalāḥiyya** はごみ山の教会の側にある。ザーウィヤ・ハムラー **al-Zāwiya al-Ḥamrā’** はサラヒーヤの近くにあり、古くは〔ザーウイヤ・〕ラグリーヤ **al-Raghliyya** として知られていた。ザーウィヤ・ルウルウィーヤは、町の門のひとつであるアムード門 **Bāb al-‘Amūd** のところにある。ザーウィヤ・ビスターミーヤ **al-Zāwiya al-Biṣṭāmiyya** は、ムシャーラファ地区 **Ḥārat al-Mushārafa** にある。マドラサ・マイムニーヤ **al-Madrasa al-Maymūniyya** は、サーヒラ門 **Bāb al-Sāhira** の側にある。そこはもとは教会であったが、今では見捨てられた女性たちがやってくる場所である。ザーウィヤト・アルフヌード **Zāwiyat al-Hunūd** はアスバート門の外にある。そこは古い場所で、ラファーイーヤの貧者たち **al-fuqarā’ al-Rafā’iyya** のための場所である。そこはフヌードの一団が滞在していたために、彼らの名によって知られている。〔ザーウィヤ・〕ジャラーヒーヤ **al-Jarāḥiyya** はクドスの北側の外にあるザーウィヤである。その南側にはカイマルのジハード戦士 **al-jihādīn al-Qaymariyya** たちの一団の墓があり、しっかりした作りのドームがある。クドスの北側の外の、西側に繋がるところには、神の道のためにジハードを戦った殉教者たちの一団の墓がある。またその外側にも、同様にジハード戦士たちの墓がある。

クドスにあるミナレットについて言えば、ハラム・シャリーフには前述のように 4 つある。ハラム・シャリーフの外には、マドラサ・ムアッザミーヤの側にミナレットがある。またハーンカー・サラヒーヤの側と、ごみ山〔の教会〕の側の警察の牢屋のところ、ザーウィヤト・アッダルカートの側、南部のユダヤ教徒の教会に接するモスクにも〔それぞれ〕ミナレットがある。

神聖なるクドスには、ビザンツ時代の教会や修道院が数多く存在し、およそ 20 か所ある。またキリスト教徒地区もある。その中にはごみ山の教会がある。そこには、彼らがいろいろと言いがかりをつけて巡礼にやって来る。またその近くには、ファランジュどもが特別視していたシオン教会 **Kanīsat Ṣahyūn** がある。[28. a] またクドスの外には、クージュ **al-Kūj** の一団が特別視していた磔刑の教会 **Kanīsat al-Muṣallaba** がある。

町の諸門については 10 ある。南側にはマガーリバ地区の門、今日はユダヤ人地区の門として知られるシオン門がある。また西側にはアルメニア人の館に接する小門と、今日はヘブロン門として知られているミフラブの門—これはイエス—彼に平安あれ—が反キリストを殺すところであり、それゆえリッド門 **Bāb Lidd** とも名付けられている—、ラフマ門がある。北側

にはダイル・アッサラブ門 **Bāb Dayr al-Sarab** とアムード門、バヌー・ザイド地区に繋がるダーイーヤ門 **Bāb al-Dā'iya**、サーヒラ門がある。東側にはアスバート門がある。〔この他〕町には2つの門があり、そのうちのひとつはザーウィヤト・アッシャイフ・ヤアクーブ・アルアジャミーの側にあり、〔もうひとつは〕タウリーヤ地区 **Ḥārat al-Ṭawriya** の門である。これら2つの門は閉鎖されている。〔町の〕西側には城塞がある。それは偉大な建築の城塞であり、町の外にある。そこは古くはダビデー彼に平安あれーの住まいであった。この城塞にはダビデの塔があるが、それはそのすべてがソロモンの建設物である。

バイト・アルマクディスにある建設物はこの上なく完璧なもので、それを遠くより眺めると輝くばかりで、なんとも美しい光景である。とりわけオリーブ山の上からの眺めはすばらしい。南側からの眺めも同様である。西側と北側は、遠くから見ると山に隠されてほとんど見えない。バイト・アルマクディスは我らが主人神の友〔アブラハム〕—彼に平安あれーの町である。山は岩だらけであり、そこを旅するのは骨が折れ、その距離は遠い。この町を取り巻いている山々の大きさは、縦におよそ3日〔行程〕、横にも同程度である。これらの町に到着した者は、様々な光を見て、それゆえに親しみや栄光、幸運を得て、自身が抱えていた苦勞を忘れてしまう。ハーフィズ・イブン・ハジャル・アスカラーニー **al-Ḥāfiẓ Ibn Ḥajar al-'Asqalānī** がクドスに参詣に来た際、〔28. b〕そのような趣旨の詩を詠んでいる。

バイト・アルマクディスに我らはやってきた  
寛大なる主の赦しを求めて  
汝らへの愛に、我らは山道を踏み越えた  
そして山道の後には安らぎがあった

町の周辺にある場所について言えば、その中には谷の南側にあるシロアムの泉がある。

ウンム・ウバイダ・ピント・ハーリド・ブン・マアダーンが彼女の父より伝えて曰く、「ザムザムとバイト・アルマクディスにあるシロアムの泉は、樂園の泉の一部である」

ハーリド・ブン・マアダーン曰く、「バイト・アルマクディスに来た者は、神聖なるダビデのミフラブに行きそこで礼拝し、シロアムの泉で泳ぐがよい。なんとなればそこは樂園の一部だからである。しかし教会に入ってはならず、その中でもものを買ってはならない。そこでの過ちは1000の過ちに等しく、そこでの善行は1000の善行に等しいなる」

シロアムの泉の近くにはヨブの井戸 **Bi'r Ayyūb** がある。これは神がその預言者であるヨブに、〈お前の足で地を打て。これが涼しい洗い場と飲み水だ〉(Q38:42)と言われたときのことに由来するものである。この井戸は毎年冬の寒く雨が深い時には、流れる川のように水が湧き出しており、その水は遠くまで流れている。このような状況は何日も続き、驚嘆すべきことである。

バイト・アルマクディスには、イスラエル族の王の一人であったヒゼキヤが造った池が、市内に3つ、市外に3つある。市内にあるものについては、まずイスラエル族の池 **Birkat Banī Isrā'il** がある。これはアクサー・モスクの北にあるもので、アスバート門とヒッタ門の間にある壁に接している。その眺めは様々な奇跡の中でも恐るべきものである。ソロモン池 **Birkat Sulaymān** とイヤード池 **Birkat 'Ināḍ** の2つはマルズバーン通りのキリスト教徒地区にあり、バスィールの浴場はここから水を取っている。

市外にある池については、マーマラー池 **Birkat Māmālā** がある。これはマーマラー墓地 **Maqbarat Māmālā** の中央にある。またマルジーウ池 **Birkat al-Marjī'** もあり、これら2つの池はアルタース村 **Qaryat Artās** の近くにある。その2つの池には膨大な量の水があり、水路を通して神聖なるクドスにまで通じているが、その水路のクドスからの長さは半バリード<sup>13</sup>である。神聖なるクドスの外には[29. a] あらゆる方角に果樹園があり、そこではブドウやイチジク、リンゴ、杏その他の様々な種類の果物がある。〔そこは〕この大地の最も美しい場所である。

クドスの外の西から南にかけては、城塞や、行楽や楽しみのためのしっかりとした建物がある<sup>14</sup>。バイト・アルマクディスの東にはオリーブ山がある。そこはアクサー・モスクを見下ろす偉大な山である。アブー・フライラー至高なる神よ彼を嘉したまえ一日く、「お前の主はイチジクとオリーブにかけて誓われた。イチジクすなわちダマスカスのモスクと、オリーブすなわちオリーブ山である」また曰く、「我々の主は4つの山々にかけて誓われた。すなわちイチジク<sup>15</sup>、オリーブ、シナイ山、この平安の国に。イチジクとはダマスカスのモスク、オリーブとはオリーブ山すなわちバイト・アルマクディスのモスク、シナイ山とは神がモーセにお言葉をかけられたところ、この平安の国とはメッカである」

預言者一神よ彼に祝福と平安を与え給え一の妻サフィーヤはバイト・アルマクディスに行き、そこで礼拝し、オリーブ山に上ってそこでも礼拝した。彼女はその山の裾に立ち、「ここから復活の日、人々は樂園と地獄とに分かれていくのです」と言った。

この山は、イエス一彼に平安あれ一の昇天した山裾の上にある。そこには、「イエス一彼に平安あれ一昇天の地 **Maṣ'ad 'Īsā**」と呼ばれるドームがある。またオリーブ山にはイナゴマメの木があり、その側にはある洞窟の下に優美なモスクがある。その洞窟は人々によく知られており、参詣の目的地となっているのだが、「友誼のイナゴマメ **Khrūbat al-'Ishra**」と名付けられている。またオリーブ山には「ゲッセマネ **al-Jasmāniya**」と名付けられた教会があるのだが、それはアスバート門の外にある。その教会にはマリア一彼女に平安あれ一の墓があり、ムスリ

<sup>13</sup> バリード **barīd** はイスラーム地域における距離の単位。1バリードはおおよそ12マイル。

<sup>14</sup> B 写本ではここで、「私は言うが、それらの城塞はすでに崩れており、〔そこでは〕楽しみのための敷物が広げられている」という文章が追加されている。

<sup>15</sup> ここは底本(C写本)、B写本共に「山 **al-ṭūr**」となっているが、おそらく「イチジク **al-tīn**」の誤りである。



ムとキリスト教徒〔両方の〕参詣の目的地となっている。かつてウマル・ブン・アルハッターブはそこに入り、そこで2回のラクアを行ったが、後に預言者ムハンマド―神よ彼に祝福と平安を与え給え―の「この谷はワーディー・ジャハンナムのひとつである」という言葉のゆえに後悔した。それからウマルは、「ウマルがワーディー・ジャハンナムにて礼拝することには何の益もなかった」と言った。カアブ・アルアフバール曰く、「お前たちはマリア教会や、その山にある洗礼者たちの教会に行ってはならない。それら2つは偶像崇拜〔の場所〕である。それらに行った者の行いは墮落する」

マリアの墓の近くにはビザンツ人が建てたドームがあり、[29. b] 彼らはそれを「ファラオの帽子 **Ṭurtūr Fir'awn**」と名付けている。その近くの山裾にはもうひとつのドームがあり、そこは「ファラオの妻のクーフィーヤ **Kūfiya Zawjat Fir'awn**」と呼ばれている。最初のもはザカリヤの墓で、2つ目の者はヨハネの墓であると言われている。彼ら兩名に平安あれ。この言は、「ザカリヤとヨハネはバイト・アルマクデイスのこの山裾にある預言者たちの墓地に埋葬された」というあるウラマーの言によって裏付けられている。また彼ら2人の墓は、ナーブルスの地にあるサブサタ村 **Qaryat Sabsaṭa** にあるとも、ダマスカスの金曜モスクにあるとも言われている。

この山の西側には、サーヒラと呼ばれる場所がある。イブン・イムラーンのハディースには、人々が集められる地はターヒラ **al-Ṭāhira** と名付けられており、それはこの町の外にある、とある。北側にはムスリムたちが埋葬されている墓地があり、そこには正しき人々の一団がいる。その墓地は山の高いところにある。この山の低いところには、様々な奇跡の起こる洞窟がある。そこは山の地下内部にあるザーウィヤで、「アドハミーヤ **al-Adhamiya**」と名付けられた巨大な岩の中にある。〔その洞窟は〕「麻の洞窟 **Maghārat al-Kattān**」と名付けられている。この洞窟の側にはサーヒラの墓地がある。その下を掘れば死者たちがいて、彼らはガズワを行うであろう。そこは「死者たちの下の生者たち **Aḥyā' Taḥta Amwāt**」と呼ばれている。そのザーウィヤには正しい人々の一団の墓があり、そこには親しみと尊厳がある。またサーヒラの南向かいの、町の北壁の下には、長く伸びた大きな洞窟があり、そこもまた「麻の洞窟」と名付けられている。そこはかの岩の下に繋がっていると言われている。その中にある人々の集団が入ったが、彼らはそこについて様々な恐ろしいことを伝えている。バイト・アルマクデイスの外にあるシオン教会には、ダビデ―彼に平安あれ―の墓がある。そこは人々によく知られた、参詣の目的地となる場所である。そこにはその側に、ソロモン―彼に平安あれ―の墓があるとも言われている。またソロモンの墓は、岩〔のドーム〕の北門の内側にある茶色いタイルの下にあるとも言われている。

市外にあるムスリムたちの墓地について言えば、まずモスク区の東壁近く、ワーディー・ジャハンナムの上にある、ラフマ門の墓地がある。そこは人々によく知られたところで、町に最も近い墓地である。サーヒラの墓地については前述の通りである。殉教者たちの墓地は、サー

ヒラの墓地の東側の近くにある。[30. a] マーマラー墓地は市外の西側にあり、そこがこの町最大の墓地である。そこには数々の著名人、ウラマー、義人たち、殉教者たちがいる。彼らの中のある者についての話は第 7 章にて述べられよう。そこはもとは神の安息所であったとも、神の門であったとも、信仰のオリーブの木 *Zaytūnat al-Milla* であったとも言われている。ハサン曰く、「バイト・アルマクデイスの信仰のオリーブの木に埋葬された者は、現世の天に埋葬されたのと同様である」この墓地の中央には、カンダリーヤ *al-Qandariya* と名付けられたザーウィヤがある。そこには立派な建物があるが、それはもとは「アフマル修道院 *al-Dayr al-Aḥmar*」として知られたところであった。また前述の墓地にはしっかりした造りのドームがあり、688 年に〔そこに〕埋葬されたアミール・アラー・アッディーン・カブキー *al-Amīr ‘Alā’ al-Dīn al-Kabkī* にちなんで、そこはカブキーヤ *al-Kabkiya* と名付けられている。

バイト・アルマクデイスの外には数々の場所や、参詣の目的地となるマシュハドがあり、それらを〔すべて〕述べると長くなってしまふ。カアブ・アルアフバルは、「バイト・アルマクデイスには、預言者たちの墓地のうち 1000 がある」と伝えている。また『熱情をかき立てるもの *Muthīr al-Gharām*』の著者（シハーブ・アッディーン・マクデイスィー）もそのようなことを言っている。まことに〔そこには〕その跡が見られる多くの墓や場所があり、その数は誰にもわからない。以前は調べられていたが、長年ファランジュ〔による占領〕という苦難があったために消えてしまったのである。ここで述べることはこれで十分であろう。神が我々に良きものを積んで下さるように。まことに神はすばらしき支配者である。

## 第 5 章：ヘブロンの町とそのモスク、神の友〔アブラハム〕の物語と、彼のマシュハドに参詣することの美德

その町については、名をヘブロン *Ḥibrūn* といい、バイト・アルマクデイスの南にある。その眺めはこの上なく美しく光に満ちている。その町はモスクの周囲に四方に丸く展開しており、その建物は、はるか昔のソロモンの城壁の他は新しいものである。その周囲に初めて建物を建てたのは、救世主イエス―彼に平安あれ―を捕えたイスラエル族の、ユースフ・ラーイー *Yūsuf al-Rā’ī* という名の男であった。その後少しずつ建物ができていき、町となったのである。

モスクは町の中央にあり、そのモスクの形は、壁の内部に組まれた建物の、南側から北側にかけての半分ほどを含んで、3つの窯のようなもので、その中央の部分がその他の 2 つよりも高くなっている。その天井は、しっかりした造りの 4 本の柱の上に建っている。最も高い窯〔状の部分〕の下にはミフラーブがあり、その側にはミンバルがある。そうしたものにムアズィンたちの休息所が、[30. b] この上なく美しい大理石の柱の上に乗って向かい合っている。その大理石は、モスクの壁を四方から丸く取り巻いている。

かの神聖なる墓は、壁の内部、前述の建物の下の、神の友アブラハム―彼に平安あれ―がエフロン王から購入した洞窟の中にある。そうしたことは、サラが死んだときに、アブラハムが一族の死者を埋葬するための場所をエフロンから買おうとしたときのものである。エフロンはアブラハムに「私の土地からお好きなところをお取り下さい」と言ったが、アブラハムは「私は代価をお支払いしたいのです」と言った。アブラハムが彼からその洞窟を求めたのは、アブラハムが牛を屠ろうとしたときに、その牛が彼のもとからヘブロン洞窟にまで来て入り込んでしまったためであった。そのときアブラハムは、「汝の父アダムの骨に挨拶せよ」と呼びかけられた。彼の身にそうしたことが起こった後、彼はその牛を屠り、それを客人たちに供した。このことは、神がその書物の中で示されておられることである。アブラハムが代価を支払わずにそこを得ることを拒むと、エフロンは彼に言った。「私はあなたにそこを 400 ディルハムでお売りしましょう。ただし 1 ディルハムがそれぞれ 5 ディルハムの重さであり、それぞれが天使によって鑄造されたものであること」エフロンはそうしたことを彼に厳しく求めた。するとガブリエルがそれを持ってきたので、アブラハムはそれをエフロンのもとに持って行った。エフロンが彼に、「あなたはどこでこのディルハムを手に入れたのですか？」と言ったので、彼は「我が神、我が創造主、私に糧を与えて下さる方のみもとからです」そこでエフロンは彼からそれを受け取った。

その洞窟に最初に埋葬されたのはサラ―彼女に平安あれ―である。その後アブラハム―彼に平安あれ―も亡くなり、彼女の側に埋葬された。その後イサクの妻リベカが亡くなり、その洞窟に埋葬された。その後イサク―彼に平安あれ―が亡くなり、彼の妻の側に埋葬された。その後ヤコブ―彼に平安あれ―が亡くなり、その洞窟の門の側に埋葬された。その後彼の妻のレアが亡くなり、彼の側に埋葬された。ヤコブの子供たちとエサウ、彼の弟たちが集まった。彼らは言った。「我々はこの洞窟の門を開けたままにしておこう。そうすれば我々の中で死んだ者を皆、ここに埋葬することができる」しかし彼らは〔そのことについて〕言い争った。そしてエサウの弟たちのひとり―ヤコブの子供たちのひとりであるとも言われている―が手を振り上げてエサウを打った。彼の頭はその洞窟の中に転がり落ちた。彼らはエサウの体を運び、頭を除いて埋葬した。彼の頭はその洞窟の中に残った。彼らはその洞窟に壁を立て、その上のそれぞれのところに墓地のしるしをつけた。我々が主人イサクの墓は[31. a] ミンバルの側にある柱の近くにあり、それと向かい合って彼の妻リベカ〔の墓〕が、東の柱の近くにある。

そのモスクには 3 つの門があり、それらはモスクの中庭に通じている。そのうちの中央にある 1 つは、神の友〔アブラハム〕の神聖なる御前のもとに通じている。それらにはアーチがついており、大理石がその四方の壁を丸く取り巻いている。〔1 つ目の門は〕西向きに開いており、神聖なる小部屋に向いている。その門の東向かいには彼の妻サラの墓がある。2 つ目の門は東側のソロモンの城壁のもとに、サラの墓の後ろにある。3 つ目の門は西側に、アブラハム―彼に平安あれ―の墓の後ろにある。

ソロモンの城壁の内部にあるモスク内部の広間の終わりには、北側に我らが主人ヤコブー彼に平安あれーの墓廟があり、その東向かいには彼の妻レアの墓がある。かつてムハンマド・ブン・アルハティーブ **Muḥammad b. al-Khaṭīb** は、アブラハムー彼に平安あれーのモスクにて次のようなことを語った。ムハンマド・ブン・イスハーク・ナフウィー **Muḥammad b. Ishāq al-Naḥwī** 曰く、「私は、イサクー彼に平安あれーの妻リベカの墓の向かいにある石碑を、カーディー・イブン・ウマル **al-Qāḍī Ibn 'Umar** とウスマーン・ブン・シャーザーン・ナフウィー **'Uthmān b. Shādhān al-Naḥwī**、アラブたちの前で写し取った。というのもそれは、古代ギリシア語だったのである。そこには次のようにあった。『我が神、勝利者にして強大な力を持ちし玉座の神の御名において。この向かいにあるしるしは、イサクの妻リベカの墓なり。その隣にあるしるしは、イサクの墓なり。その隣にある偉大なるしるしは、神の友アブラハムー神よ彼に祝福と平安を与え給えーの墓なり。その東向かいにあるしるしは、彼の妻サラの墓なり。神の友アブラハムの墓に離れて並んでいるしるしは、ヤコブの墓なり。その東隣りにあるしるしは、ヤコブの妻レアの墓なり。彼らの上に神に祝福と平安のあらんことを。エサウがこれを自身の手跡で書いた』

ハーフィズ・イブン・アサーキル曰く、「私はハディースの徒の書物の中で読み、そこから引用した」曰く、ムハンマド・ブン・アビー・バクル・ブン・ムハンマド・アルハティーブは、アブラハムー彼に平安あれーのモスクのハティーブであり、[アッバース朝カリフ] ラーディー・ビッラー **al-Rāḍī bi-Allāh** 時代の 320 何年とそれ以降にラムラのカーディーであったのだが、彼はこのハディースに関する話を持っていた。彼はある集団から聞き、また彼よりある知識人の集団が聞き伝えた。彼曰く、ムハンマド・ブン・アフマド・ブン・アリー・ブン・ジャアファル・アンバーリー **Muḥammad b. Aḥmad b. 'Alī b. Ja'far al-Anbārī** は言った。[31. b] アブー・バクル・アスカフィー **Abū Bakr al-Askāfī** は言った。「以下のことは私が経験した事実である。アブラハムー彼に平安あれーの墓は、今も同じところにある。私はそれを見て確かめると、強大にして栄光ある神の報酬を願って、その門番とその場所に対し 4000 ディーナールほどの多くのワクフ財を差し出した。私はそうしたことの正しさを知りたくて、門番たちにいろいろと好意的に接し、親切に振舞って、彼らの歓心を買った。私はそうすることで、私の胸の中で正当化され編み上げられていたことに辿りつこうとしたのである。そしてある日、私は彼ら全員を私の周りに集めて言った。『あなたがたが、私が預言者たちー彼らに神の祝福と平安のあらんことを一のもとに下りていけるように、私をこの洞窟の門に連れて行ってくれるとよいのですが』彼らは言った。『我々にはあなたの望みにお応えします。我々にはあなたにそうしなければならない理由がありますから。ですが今この時は、我々には多くの往来がありますから不可能です。冬になるまで我慢なさい』

「2 月 **Kānūn al-Thānī** になると、私は彼らのもとに出かけて言った。彼らは、『雪が降るまで、我々のもとにいらっしやい』と言った。そこで私は、雪が降って人の往来が途絶えるまで、

彼らのもとに滞在した。そして彼らは、神の友アブラハムとイサクの墓の間—彼ら 2 人に平安あれ—の間にある場所にやってきて、そこにあった床石を剥がした。彼らのうちのスールーク **Šu'lūk** という人が〔その中に〕下りて行った。彼は正しい人で、善良さと敬虔さを備えていた。私は彼とともに下りて行き、彼の後ろを歩いて行った。我々は 72 段の階段を下りて行った。すると私の右側に、黒い石でできた大きな壇があった。その壇の上には、まばらな頬髯と長い顎鬚を生やした老人が、仰向けに横たわっていた。彼は緑色の服を着ていた。するとスールークが私に、『この方がイサク—彼に平安あれ—です』と言った。それから我々が少し進むと、そこには先ほどのものよりも大きな壇があり、その上には白髪の老人が仰向けに横たわっていた。私は彼の両肩の間にある、白い頭や髭、両の眉、両の臉を見た。その白髪の下彼の体は、緑の服で覆われていた<sup>16</sup>。そこには 40 人の殉教者たちがいるといわれており、そこは人々に良く知られた参詣の対象となる場所である。

泉については、宦官の泉が [32. a] モスクの北門の側にある。ここには最もおいしい水がある。ダブルハーナ門 **Bāb al-Tablkhāna** の側にもモスクの泉がある。サラの泉 **'Ayn Sāra** は町の外の、果樹園の中にある。またサムイーヤの泉 **'Ayn al-Sam'iya** もある。浴場の泉 **'Ayn al-Ḥammām** は、それが湧き出るところはリンゴの谷 **Wādī al-Tuffāḥ** である。ジャラーの泉 **'Ayn Jarā** はスフラー墓地 **al-Maqbara al-Suflā** の側にある。

町の外にはムスリムたちの墓地がある。スフラー墓地は町の西にあり、トゥルバ・アッラーズ墓地 **Maqbarat Turbat al-Ra's** は東側にある。バキーウ墓地 **Maqbarat al-Baqī'** はシャイフ・アリー・アルバカー地区にあり、そこにはそこに埋葬されている人のザーウィヤがある。彼はその善と神への奉仕、そこにやってきた人々や参詣者たちに食事を供したことで有名である。そこには様々な奇跡が起こっている。

果樹園については、町の外をあらゆる方向から取り巻いている。そこには様々な果物があるが、その大部分は、バイト・アルマクデイスの果樹園と同様にブドウである。果樹園の多くはしっかりとした造りの城塞になっていて、そこの人々は、夏場には何か月もそこで過ごす。そこは、預言者—神よ彼に祝福と平安を与え給え—がタミーム・ダーリーに定めたイクターの一部である。それはタミームと彼の兄弟たちが、9 年に預言者—神よ彼に祝福と平安を与え給え—のもとにやって来て挨拶し、シリアの土地の一部を彼らのイクターとしてくれるようにと彼に求めたときのことである。そこで預言者は彼らにヘブロンとその周辺をイクターとして定め、彼らのためにそうしたものを永久的なイクターにするということを、信徒の長アリー・ブン・アビー・ターリーブ—至高なる神が彼と彼の姿を嘉し給わんことを—の肩書で書いた。「慈愛深く慈悲あまねき神の御名において。これは神の使徒たるムハンマドが、タミーム・ダーリーと彼の兄弟たちに与えたものである。すなわちヘブロン、マルトゥーム **al-Marṭūm**、バイト・ア

<sup>16</sup> B 写本ではこの後に、アブー・バクル・アスカフィーがアブラハム一族の墓を訪れた際の逸話の続きと、ヘブロンにあるマドラサやザーウィヤの名称が挙げられた部分が続いている。この部分の訳注については本訳注の末尾に付す。

イヌーン Bayt 'Aynūn、バイト・イブラーヒーム Bayt Ibrāhīm と、それらの中にあるものは、彼らに与えられる。私はそれらのことを選び出して、彼らと彼らの子孫に譲り渡す。彼らに仇なす者を神が仇なし給い、彼らに仇なす者を神が呪い給わんことを」以上のことを、アティーク・ブン・アビー・クハーファ、ウマル・ブン・アルハッターブ、ウスマーン・ブン・アッファーンが証言し、アリー・ブン・アビー・ターリーブ―神よ彼を嘉したまえ―が書き記して証言した。[32. b] このイクターは今日に至るまでタミームの子孫の手にあり、彼らはそこ〔からの収益〕で食べている。彼らは、我らが主人神の友〔アブラハム〕―神よ彼に祝福と平安を与え給え―の町に住んでいる。

神の友〔アブラハム〕の話と彼のマシュハドに参詣すること功德については、神がその恩寵によって彼の栄光を高らかなものとなし給い、彼のゆえにアダムの子らは他の被造物に勝る栄光を授けられたのだと知れ。神―その栄光の高らかならんことを―は、〈すでに我らはアダムの子らを貴び…〉(Q17:70)と言われたのである。神はその後彼らをいくつかの集団に分け、彼らのある者を別の者の数段階上に上げ給うた。そして神は預言者方をあらゆる被造物に勝るものとなし、さらに一部の預言者方には、使徒性によって神聖さを増し給うた。彼らは使徒性によって預言者より優れた存在となったのである。さらに神は恩寵によって、使徒方の中でもとりわけご意志にふさわしい方を特別の存在となさした。神は彼らをシャリーアと啓典の民となし、この美点によって彼らを特別な者の中でも特別な者となし、その神的なご配慮によって彼らを高め給うた。第1段階ではあまねき高貴さ、第2段階では預言者性と勇敢さ、第3段階では使徒性、第4段階では彼らをご意志にふさわしい者とすることによって。使徒のうちこの段階に達した方々は、彼らがあらかじめ備えていたしるしをもって、またそうしたことのゆえにその地位を受け入れたことによって、彼らの主より完全性を得たのである。シャリーアの徒たる、ご意志に最もふさわしい方5名とは、ノア、アブラハム、モーセ、イエス、そしてムハンマドである。彼と彼らの上に最上の祝福と平安のあらんことを。栄光ある至高なる神は彼らのおひとりおひとりに、至高なる神が高貴なものとなさした特殊性を与え給うた。彼らの中には神がその栄光やお言葉、その他輝かしい奇跡やはっきりとした特殊性によって高貴な者となさした者がいるが、神は彼の愛する者ムハンマド―神よ彼に祝福と平安を与え給え―には、そのすべての価値と啓示を受けた民の様々な秘跡をまとめて与え給うた。それゆえに彼は唯一にしてまったき者、他にない高き者となったのである。

それから神はムハンマドの次に、栄光ある主人にして預言者たちの父たる、神の友アブラハムに誉れを与え給い、彼を完全なる主人、優れた父となし給うた。栄光ある至高なる神は[33. a] その明らかなる啓典の数々の理性に満ちた章句において、彼の優れていることと神聖なることを、神の使徒―神よ彼に祝福と平安を与え給え―を讃えることによって注意せしめ給うた。そこに出てくるあらゆる栄光や偉大さは、すべての預言者たちに知られているものではあるが、それらはとりわけ、我らが主人たる神の友アブラハムに与えられた美点なのである。我らが預

言者〔ムハンマド〕と彼、すべての預言者と使徒の方々に、最上の祝福と最良の平安のあらんことを。彼は彼らのうちで最も栄光ある段階におり、彼らのうちで最も偉大な地位にいるのである。

彼一神よ彼に祝福と平安を与え給え—の美点については、私は次のように言う：栄光ある至高なる神はその偉大なる啓典の中で、彼を遣わしたこと、彼らを選択し選び出したこと、彼らの位階の偉大さや彼らの場所の神聖さなど描写を越えたものについて語っておられる。そしておそらく神は彼らの優越性や神聖性をまとめ給い、〈神はアブラハムを友となし給うた〉(Q4:125) という至高なる方のお言葉によって、主人たる神の友—彼に平安あれ—に誉れを与え給うたのと同じように、彼らのひとりひとりの特別な性質を語り給うたのであろう。この句の他にも、神が彼について下し給うた特別な章句は、30 は下らない。この裁定に鑑みて、〔預言者や使徒たちの〕すべてを偉大視し讃えることの中でも、とりわけ彼らの父でありイマームである方—神よ彼に祝福と平安を与え給え—を讃えなければならないのである。彼を偉大視すべきだということははっきりしている。というのも彼を偉大視することは、彼によって信仰を増すことなのであり、彼によって信仰を増すことは、至高なる神によって信仰を増すための鍵だからである。結果として彼を偉大視することを〔重要なことと〕信じる者には、3つのことが起こる。その中には宗教的義務 **fard**、嘆き悲しむこと **nadb**、望ましいこと **mustahabb** がある。宗教的義務とは、彼によって信仰を増すことであり、彼の美点と神聖さ、彼を偉大視し讃えること、彼の神聖なる位を様々な場所の中心に置いてそれらを讃えることを〔重要なことと〕信じることである。

〔アブラハムの死を悼んで〕嘆き悲しむことについて言えば、〔彼の墓の前に〕いる場合でもいない場合でも、良い行いである。彼の名前を聞いたり彼の物語を語り伝えたりするときには謙虚になり、彼のもとに参詣するときには身を低くし、彼の墓では声を低め、シャリーアに許されていないことを遠ざけねばならない。というのも彼一神よ彼に祝福と平安を与え給え—は、その者のあらゆる行いについてその者を見ているからである。すなわち、彼の命は彼の墓の中にあるのである。まさしく預言者たちは彼らの墓の中で生きている。預言者たちが生きているということは、愚か者以外は皆知っていることであり、そうした者のために最後の邪悪が来ることを恐れる。至高なる神が彼から〔我々を〕守り給わんことを。

[33. b]〔アブラハムに関して〕望ましいことについて言えば、神聖なる彼の御前に出る者は、次のようにすることが望ましい。毎日1度は彼のもとに参詣することを志し、彼のようになり、この高貴なる預言者にして慈悲深き父の美点のうち、至高なる神が彼に定め給うたもの、神が彼によって特別なものとし彼以外の者によってあまねきものとなさったもの、すなわち預言者性と使徒性、信仰、導き、キブラ、召命、イマーム性、代理人としての権威、父祖性、友愛、若々しさ、善性、優しさ、穏やかさ、知識、正統性、忠誠心、澄明さ、内気さ、寛大さ、選り抜かれ選び出されたこと、清らかな心、高貴な性質、宗教の順守、〔神の教えに〕満足し身を

委ねていること、完璧な言葉と性質、かの人が大勢出入りする家を取り計らい、それを7つの天に上げたこと、寛大で恵み深き子孫、バイト・ハラームの建設、啓典、樂園の雄羊、祖先たちを敬い、後代の人々には信頼に足る言葉を残したこと、食布や地下庫やランプ〔に關すること〕、輝く銀髪になったことなど、神に与えられ、彼以外の者とシャリーアを高め導くものとされ、彼の後の人々の作法とされた、彼の数々の美点を信じて、彼によって執り成しを行うのである。彼は初めてそれらをはっきりと示し、行った人であった。至高なる神がそれらの美点をもって、彼の導きという祝福に益を与え給わんことを。彼にはこうしたことに關し、2つの美点がある。それらを身につけ実行するという美德と、人々をその真っ直ぐな行いへと導いたという報いである。

かくのごとく知れ。栄光ある至高なる神は彼の友〔アブラハム〕を、彼の栄光ある位階を示す驚嘆すべき奇跡の数々と、彼の偉大なる美点、彼の高き段階によって嘉し給うた。そうしたものの中には、次のようなものがある。彼は彼の父親の腰にいたニムロドをその城から引きずり出し、彼の母親の腹にいた偶像たちを引きずり倒した。彼が生まれる前には星が昇った。彼のお産は軽く、彼を取り上げることは容易かった。彼が自分の手指を吸えば、乳と蜜が出てきた。獣も動物も、彼の前ではおとなしくなった。彼は生まれる前にその使徒性をもって牛に犁を付けさせ、[34. a] その預言者性をもって獣を落ち着かせた。馬 **al-ḥajl** が<sup>17</sup>、彼が遣わされたことを知らせた。乳母がその行いの正しさを証言した。熱意ある純粋な敬虔さによって、名士たちを砂の中から引き出した。バイト・ハラームをハッジした際に、神を求める彼の代理人のために、彼の名を呼ぶ者の声を聞いた。というのも彼は、神の知識と神の意思の中の、聖靈の知識に通じていたからである。彼は毎年、東の果てからでも西の端からでも、祈願が聞き届けられることを求めてかの古の家にハッジにやってきた。彼は、彼と彼の一族、彼に挨拶をしたあらゆる礼拝者の上に祝福を行うことを課した。ゆえに僕による礼拝は、彼の神聖なる名を唱え、彼の神聖なる姿を口にした後でなくては完全なものとはならないのである。これが、彼に特別に与えられた性質のうち最も偉大なものであり、彼に与えられた祝福のうち最も栄光あるものである。神よ彼と彼の一族、彼の同胞、彼の子孫に祝福を与え給え。我々はその祝福をもって、この2つの世界（現世と来世）において彼のもとに参詣するという榮譽を与えられ、来世においては、至高なる神がお望みになるならば、彼の仲間の中に集められるのである。

アナス・ブン・マーリク—神よ彼を嘉したまえ—曰く、「ある人が預言者〔ムハンマド〕—神よ彼に祝福と平安を与え給え—に『最も優れた人よ』と言ったとき、彼は『それは我が父アブラハム—彼に平安あれ—のことである』と言った」ムスリムの言では、「ある人が預言者—神よ彼に祝福と平安を与え給え—に『最も優れた創造物よ』と言ったとき、彼は『それは我が父アブラハム—彼に平安あれ—のことである』と言った」

彼のもとに参詣することの功德については様々な伝承が伝えられているが、その中には彼

<sup>17</sup>馬の足首部分が白くなること **ḥujjila** より。ここでは馬の隠喩 [IA ii, 61, 脚注 2]。



(預言者ムハンマド) —神よ彼に祝福と平安を与え給え—がイスラーの夜、ガブリエルに「ここで2回のラクアをせよ。なんとなればここは、アブラハム—彼に平安あれ—の墓だからである」と言われたときに、アブラハム—彼に平安あれ—の墓の側で2回のラクアを行った、というものがある。また彼—彼に祝福と平安のあらんことを—曰く、「私のもとに参詣できない者は、神の友アブラハム—彼に平安あれ—のもとに参詣するがよい」

カアブ曰く、「バイト・アルマクデイスに参詣し、アブラハム—彼に平安あれ—の墓に礼拝のために向かい、そこで5回の礼拝を行った後に、強大にして栄光ある神になんらかのものを求めた者は、神が彼にそれをお与えになり、彼の罪をすべてお赦しになる」

カアブ曰く、「自身と神の使徒—神よ彼に祝福と平安を与え給え—の墓への参詣との間に差し障りがある者は、アブラハム—彼に平安あれ—の墓に行き、彼もとで礼拝し、[34. b] 彼のもとで多くの祈願を行うがよい。そうすれば〔その祈願は〕叶えられる。彼のゆえに、皆が神—その栄光よ高らかなれ—のもとに辿り着くことができ、〔祈願が〕直ちに聞き届けられるようになるだろう」

『栄光の喜び *Al-Uns al-Jalil*』の著者(ウライミー)は次のように言っている。「私は言う。これは疑いようのないことである。私は我が身に起こった現世の事ごとについて、それを試してみたのである。私は〔そのとき〕滅びに直面しており、旅をせねばならない必要に迫られて、バイト・アルマクデイスから我らが主人たる神の友—彼に平安あれ—の町に向かっていた。私は彼—神よ彼に祝福と平安を与え給え—のモスクに入ると、アブラハムの墓として知られている墓廟に向かっいき、彼の幕に取り縋って至高なる神に祈願した。すると神はすかさず私の悲しみを取り除いて、私を慰めて下さり、私を悩ませていたあらゆるものを私から取り去って下さったのである。まことに彼には功德がある。神に栄光あれ」<sup>18</sup>

我らが主人、神の友アブラハム—彼に平安あれ—のもとに参詣しようと思う者は、次のようにせねばならない。参詣者は罪から遠ざかり心を清らかにし、また外面も洗いうドゥーを行って清めてから、彼のもとへ参詣することを心に思い描く。強い意志と望みをもってそこに向かい、その途上では預言者〔ムハンマド〕—神よ彼に祝福と平安を与え給え—やその他の預言者たち、使徒たちへの祝福を数多く願う。そのモスクにやってきましたらその左側に立つ。モスクに入る際には右足から進み、望みの祈願を唱える。モスクに入る際には、「慈愛深く慈悲あまねき神の御名において。おお神よ、ムハンマドの上に祝福を与え給え。我が前にあなたの恩寵の諸門を開き給え」と言うこと。それからモスクへの挨拶として、2回のラクアを行う。それから神の友—彼に平安あれ—の墓に向かい、彼の部屋の門の前で頭を下げ立ち止まる。そして神に赦しを請い、預言者ムハンマド—神よ彼に祝福と平安を与え給え—の上に祝福を求めて、次のように言う。「あなたの上に平安のあらんことを、預言者よ。神の恩寵と祝福のあらんことを。私は、神おひとりの他に神なし、神に並ぶ者なし、あなたは神の僕にして神の使徒なり

<sup>18</sup> UJ i, 140.

と証言します。まことにあなたは神の僕にして神の使徒、神の友であります。神が我々からあなたに良きものを与え給わんことを」そして次のように言う。「敬虔にして慈愛深き神、お側に仕える天使たち、預言者たちと使徒たち、天地の民のうち誠実なる人々、殉教者たち、義しき人々の祝福があなたの上にあらんことを、預言者たちの父、神の友よ。またあなたの子孫たる[35. a] 完全なる主人、開く者にして閉じる者、先代の人々と後代の人々の主人、万世の主たる神に愛されし者ムハンマドの上にも〔祝福のあらんことを〕またあなた方おふたりのご家族とお仲間方の上にも。人々があなた方の御名を唱えようとも、あるいはあなた方の御名を唱えることを失念しようとも」これも同じく 70 回行えば完璧である。これには実に偉大な効果がある。最低でも 3 回は行って、現世と来世の良きことのうち望むことを祈願する。

それから女主人たるサラのもとに向かい、次のように言う。「あなた方に平安あれ、預言者の家のご家族、使徒性の源よ。神の恩寵と祝福のあらんことを。神はあなた方を汚れから遠ざけ、あなた方を清らかに清めることを望んでおられます」それから主人たるイサク―彼に平安あれ―の墓に向かい、次のように言う。「あなたの上に平安のあらんことを、預言者よ。神の恩寵と祝福のあらんことを。神の預言者よ、私はあなたによって、私が必要としていることについてあなたの主の御前に向かっております」そして彼のもとで祈願する。次に彼の左側に向かい、栄光ある女主人、我が主人イサクの妻リベカに祈願し、あるいは挨拶して、次のように言う。「あなた方に平安あれ、預言者性と使徒性の家のご家族よ。神の恩寵と祝福のあらんことを」次に礼儀作法に則り心静かに、栄光ある主人、神の預言者ヤコブ―彼に平安あれ―のもとに向い、そこでも彼の父イサクのもとで行ったように行う。彼の妻、女主人レアのもとでもそのようにする。次に神の預言者ヨセフ―彼に平安あれ―のもとに向かい、彼の父ヤコブ―彼ら 2 人に平安あれ―のもとで行ったのと同じようにする。次にヤコブ〔の墓〕の向かいにある、神の友アブラハム―彼に平安あれ―の格子窓のもとに向かい、その近くで立ち止まる。それから挨拶し、至高なる神に望むことを祈願する。まことにそこでの祈願は聞き届けられる。それからすべての預言者たち、とりわけ先代の人々と後代の人々の主人〔たるムハンマド〕にかけて、神の御前に向かう。そしてその表面を撫でてから、幸福に、また神が望み給うならば受け入れられて進む。アーメン。

ヘブロン町の近く 1 ファルサフ<sup>19</sup>ほどのところにある、ロトの墓がある場所だと言われている湖を見下ろす小さな山には、ヤキーン・モスク **Masjid al-Yaqin** がある。そこは、ロトの民が減んだときにアブラハムがいたところである。彼は天の鶏の鳴き声を聞いて、「私は、これこそ確かにそうであると証言する **Ashhad anna hādhā la-huwa al-haqq al-yaqīn**」と言ったために、その名がつけられた。そこには彼の寝台があるのだが、それは石の中に 1 ズイラーウほど沈んでいる。モスクの外には洞窟があり、そこにはファーティマ・ビント・フサイン・ブン・アリー・ブン・アビー・ターリブ―神よ彼らを嘉したまえ―の墓がある。神の友のモスク

<sup>19</sup> ファルサフ **farsakh** は、イスラーム地域における距離の単位。1 ファルサングは約 6km。

から 1 ファルサフほどのところにあるカファル・バリーク村 **Qaryat Kafar Barīk** には、ロト—彼に平安あれ—の墓がある。私は言う：今ではそこはバヌー・ヌアイム村 **Qaryat Banī Nu'aym** と名付けられている。次のように伝えられている。西のモスクの下にある西の洞窟には 60 人の預言者たちがおり、彼らのうちの 20 人は使徒である。ヘブロン町の近くにあるサイール村 **Qaryat Sa'ir** にはエサウ—彼に平安あれ—の墓が、そのモスクの内部にある。そこにはアブラハムの寝台があるのだが、それは石の中に 1 ズイラーウほど沈んでいる。神の友—彼に平安あれ—の町からほど近いところの、クドスへの道沿いにあるジャルジュラー村 **Qaryat Jaljūlā** には、ヨナ—彼に平安あれ—の墓があり、その上はモスクになっている。そこから近くのバイト・アンマル村 **Qaryat Bayt Ammar** にはマタイの墓がある。彼は正しい人で、預言者の家の民のひとりである。

## 第 6 章：バイト・アルマクディスの周囲にある高貴な偉業のある村々

その中には神の友—彼に平安あれ—の町（ヘブロン）がある。それについての言葉はすでに出てきている。

クドスからおおよそ 4 分の 1 バリードのところには、ベツレヘム **Bayt Lahm** の村がある。そこはイスラーのハディースであった通り、イエス—彼に平安あれ—の生まれた場所であり、その住民の大部分はキリスト教徒である。そこにはしっかりと造りの教会があつて、そこには 3 つのミフラーブがある。1 つ目は神聖なるキブラの方角（南）に向かって立っており、2 つ目は東向きに、3 つ目は神聖なる岩の方角に向かっている。その教会の屋根は木であり、丈夫な黄色の大理石の柱 5 本の上に建っている。柱以外は石で作られている。その床は大理石で覆われている。その屋根の表面には、この上なく完全な形に鉛が塗られている。この教会はヘレナによって建てられたもののひとつである。この教会の中にイエス—彼に平安あれ—の生まれた場所が、3 つのミフラーブの間にこの上なく完全な形の洞窟の中にある。

ベツレヘムとバイト・ジャーラー **Bayt Jālā** の間の道の側には、ヨセフ—彼に平安あれ—の母ラケルの墓が、かの岩に向かって立つドームの中にある。それは有名で、参詣される場所である。バイト・アルマクディスの東におおよそ 4 分の 1 バリードのところにあるラーマ村 **Qaryat Rāma** には、預言者サムエル—彼に平安あれ—の墓がある。ア—ズィリーヤ村 **Qaryat al-'Ādhiriya** には主人たるエズラの墓があるのだが、[36. a] おそらくこれはアロンの子エルアザル—彼ら 2 人に平安あれ—のことであろう。そこは参詣の目的地となるマシュハドの外にある。エズラとは、救世主が生き返らせた人であるとも言われている。

最初のものについて言えば、それはナーブルス地区にあるアウルター村 **Qaryat 'Awrtā** であ

る。

イエリコの近くの、バイト・アルマクディスの東 1 日行程のところにあるガウル al-Ghawr に、神の代弁者モーセー彼に平安あれーの墓が、石組みのドームのついたモスクの中にある。そこには優美なミナレットがある。この場所では様々な奇跡が現れている。そうした奇跡の中には次のようなものがある。ドームの内部にある墓廟の側では、様々な色をした幽霊が見られている。彼らの中には騎馬姿の者もおれば徒歩の者もあり、肩に槍を担いでいる者もいる。白い服を着ている者もいれば緑の服を着ている者もいる。彼らは互いに挨拶し合う。その他にも、人々はそうしたことについて様々なことを言っている。彼らは天使たちであるとも、義人たちであるとも言われている。すべての人々が彼らを目撃しているが、彼らの誰をも恐れてはいない。そのモスクに月経中の、あるいは不貞を犯した女性が入ったときや、誰かがモスクの周囲でなにか不敬な振る舞いに及んだときには、これらの幽霊たちはそうした人々に対して激しく怒り、人は自分の隣にいる者も見ることができなくなり、天幕は引き抜かれる。そこにはこの他にも、様々な輝かしい奇跡が目撃されている。まことに彼（モーセ）はこの場所に埋葬されているのである。神よ彼に祝福と平安を与え給え。

またそうした村々の中には、アブー・サウル村 **Qaryat Abi Thawr** がある。それはクドスの近くの、ヘブロン<sup>1</sup>の門の側にある村である。彼（アブー・サウルという人物）は、シャイフにしてザーヒド、神に仕える僕にしてムジャーヒド戦士のシハブ・アッディーン・アフマド・クドスィー **Shihāb al-Dīn Aḥmad al-Qudṣī** といい、アブー・サウルとして知られていた。というのも彼は雄牛 **thawr** に乗ってバイト・アルマクディス征服に加わり、その背でガズワを行ったからであり、そのためにそのように名づけられたのである。マリク・アズィーズ・ウスマーン・ブン・サラーフ・アッディーン・ユースフが彼にこの村を捧げ、そこに埋葬された。彼の墓は明らかになっており、数々の奇跡のゆえに参詣者が訪れる場所となっている。あるとき彼（アブー・サウル）がクドスから何かが必要になったときがあり、彼は〔それを〕紙に書いて雄牛の首に括りつけた。すると雄牛はそれを〔嫌がって〕興奮した。雄牛はクドスまで行き、シャイフの用を聞いている人の酒屋まで行った。雄牛は彼の側で止まった。そこでその人は紙を取り外し、シャイフが必要としているものを用意すると、それらを雄牛に背負わせた。そしてその雄牛はシャイフのもとまで、必要な品物を持って帰っていくのであった。[36. b] このことも奇跡のひとつである。

神聖なるクドスの西側の外には、およそ 3 バリードのところ<sup>2</sup>にワーディー・アッシャヌール **Wādī al-Shanūr** があり、〔そこには〕我が主人、バドル・アッディーン・ブン・ムハンマド・フサイニー **Badr al-Dīn b. Muḥammad al-Ḥusaynī** のザーウィヤがある。彼は知識を持った有力な要人であった。彼の前には当時の優れた人々が辞を低くしていた。彼の前には貴顕平民が急ぎ来て、彼のもとに参詣していた。動物や獣たちまでが彼のもとに参詣しては、前述のザーウィヤにある彼の墓の側でその顔のほこりを払っていた。また神聖なるクドスの外にあるシャ

ラファート村 **Qaryat Sharafāt** の墓地に埋葬されている、彼の子孫たちのもとにも繰り返し参詣していた。その墓はひとつに集められており、そこには彼らの数多くがいて、彼らの良き事績についてはとても数え切れるものではない。神が彼らをして、我々を益し給わんことを。

またその中にはラムラの町がある。そことバイト・アルマクディスとの間は 18 ミールで、砂漠や低地がある。そこには木々やナツメヤシや果物の豊富な平野にあり、美しい眺めである。そこは海にも近く、ヤーファー **Yāfā** の方角におよそ 1 バリードである。そこにはアブヤド・モスク **al-Jāmi' al-Abyaḍ** がある。それは広々としていて、その中庭の美しいことで知られている。その地下には驚くべき洞窟があり、そこには預言者サーリフー彼に平安あれーの墓がある。またそこには参詣の目的地となるマシュハドがあり、そこには神の使徒一神よ彼に祝福と平安を与え給えーの〔父方の〕従弟であるアッバースの息子のファドル **al-Faḍl b. al-'Abbās** の墓がある。またそこ（ラムラ）にはウバーダ・ブン・アッサーミトの墓があるとも言われているが、それはファランジュがこの地域を占領したために消えてしまった。またそこには、イマームにしてハディース伝承者であり、慈悲深き教友イマーム・アフマドとして知られるアブー・サイードの墓がある。またそこには、アブヤド・モスクの外に囲いがあって、その囲いはモスクの東壁と接しており、そこにはイマーム・ハーフィズ・ナサーイーの墓があると言われている。ヤーサカル地区 **Ḥārat al-Yāsaqar** には、シャイフ・アブー・ムハンマド・バターイー **al-Shaykh Abū Muḥammad al-Baṭā'ī** の墓があり、そこには知名度と尊厳がある。彼のもとでの祈願は、すでに試みられているように聞き届けられる。イナーヤ地区には、シャイフ・ムハンマド・アダウィー **al-Shaykh Muḥammad al-'Adawī** の墓があり、そこには様々な奇跡がある。果物市場にあるマシュハドには、シャイフ・アフマド・アシュムーニー・クッビー **al-Shaykh Aḥmad al-Ashmūnī al-Qubbī** の墓がある。

ラムラには数多くの聖人やウラマー、義人たちがおり、彼らのことを〔ひとりひとり〕語っていくと長くなってしまふ。ラムラ市外西側の、海に近いところには、ヤコブの子ルベン **Rūbil b. Ya'qūb** 一彼ら 2 人に平安あれーの墓があると言われている。そこは参詣の目的地となる場所である。またそこには毎年マウシムの時期に、[37. a] この地域やその他の土地の人々が集まってくる。ラムラ行政区のハルファンド村 **Qaryat Ḥarfand** には、ルクマーン・ハキーム **Luqmān al-Ḥakīm** 一神よ彼を嘉したまえーの墓がある。

またそこにはリッドの町が、ラムラの外の東側のほど近くにある。そこには美しい眺めと目につく美しさがある。そこには人々によく知られた金曜モスクがある。市外の東側には、アブド・アッラフマーン・ブン・アウフー神よ彼を嘉したまえーの墓と言われているマシュハドのある場所がある。そうしたことはこれらの地域では有名である。海岸、すなわちヤーファーの向かいのアルスーク海岸 **Sāḥil Arsūq** には、我が主人アリー・ブン・アリアル **'Alī b. 'Alīl** の墓廟がある。そこには明らかな奇跡がある。彼の血筋は、最終的には信徒の長ウマル・ブン・アルハッターブー神よ彼を嘉したまえーに連なっている。その地域の民は、彼の保護と彼の秘

跡の加護の中でそこを治めている。彼の徳のゆえに、ファランジュも彼の正しさをよく知っており、彼らが彼の墓に近づくときには被り物を脱ぐのである。そこには毎年夏のマウシムの時期には、遠近の国々から大勢の人々が集まってくる。

またそこにはアスカラーンの町がある。そこは最も優れた町のひとつである。マリク・サラーフ・アッディーン・ユースフがそこを破壊したのは、そうしたことに関してムスリムたちに利便があることを知っていたためである。今日そこには、ファーティマ朝の者たちがフサイン・ブン・アリーの首があると主張していたマシュハドがある。またその町には、海岸沿いに参詣の目的地となる数々の場所がある。

またその中にはガザの町がある。そこはバイト・アルマクデイスの近隣の町の中で最も優れた町のひとつである。そこには多くの木々やナツメヤシがあり、その周囲にも多くの植物が植わっている。そこには数々の義人たちがいる。またそこにはソロモン―彼に平安あれ―の生誕地がある。またそこには、イマーム・シャーフィイーの生誕地として知られている、参詣の目的地となる場所もある。例えそこにある栄光が、我らが主人ソロモンとイマーム・シャーフィイーの生誕地であるということのみであったとしても、それで十分である。ガザ近くのバルバル村 **Qaryat Barbar** には、「赤硫黄 **al-Kibrīt al-Aḥmar**」というラカブを持つサイイド・アフマドの弟子のひとりである知識あるシャイフ、アブー・アルマハースィン・ユースフ・バルバラウィー **Abū al-Maḥāsin Yūsuf al-Barbarāwī** の墓がある。

バイト・アルマクデイスの東、ヨルダン川の近くにあるイエリコの町は、巨人たちの町であり、〈聖なる地に入れ〉(Q5:21) という至高なる神のお言葉によって示され、ヌンの子ヨシュア―彼に平安あれ―によって征服された町である。そこでは、彼がそこを征服するまで、彼のために太陽が留まった。[37. b] そこで起こった奇跡の中には次のようなものもある。イスラエルの民の時代には、その住人は巨人たちであったが、イスラームの時代には、そこはとりわけ警察の管理が行き届いている。

またその中にはナーブルスの町もある。そこはバイト・アルマクデイスの北向かいにあって、バイト・アルマクデイスからの距離は、荷を持った旅でおよそ 2 日〔行程〕である。そこからは多くのウラマーや重要な人物が出ている。またそこには数多くの泉や木々、果物があり、その郊外にある木々の大部分はオリーブである。ナーブルスの近くには、我らが主人ヨセフ―彼に平安あれ―の墓があると言われている。またナーブルスの町には、ヤコブ―彼に平安あれ―の子供たちのマシュハドがあると言われている。またその近郊には、預言者や教友に縁のある数多くのマシュハドがある。その中には、サービヤ村 **Qaryat Sābiya** に我らが主人ベニヤミン―彼に平安あれ―〔のマシュハド〕が、アウルター村にはエズラ〔のマシュハド〕があり、カファル・ハーリス村 **Qaryat Kafar Ḥārith** にはズー・アルカフル **Dhū al-Kafl** の墓とヨシュア―彼ら 2 人に平安あれ―の墓がある。彼ら 2 人の場所は、サブターラ **Sabṭāra** の近くにある 2 つのドームにあると言われている。またヨシュアの墓はマアツラ **al-Ma'arra** にあるとも言わ

れている。サファド行政区 **A'māl Şafad** のハッティーン村 **Qaryat Ḥaṭṭīn** には、シュアイブー  
彼に平安あれーの墓がある。バイト・アルマクデイスの村の大部分には、時が経つうちに消え  
てしまったものを除いて、預言者たちの墓に溢れている。

ナーブルスの町の南側の向かいにはバーイラート山 **Jabal Bā'ilāt** があり、そこは人々によ  
く知られた場所である。そこには我らが高貴なる父祖、ガーニム・マクディスイーの墓がある。  
彼の血統はバイト・アルマクデイスにあるガワーニマ地区の一族に連なっており、私の血統は  
彼に繋がっている。[この私] ムスタファー・アスアド・ルカイミー・ディムヤーティーは、  
学識深きムハンマド・アンブースイー **Muḥammad al-'Anbūsī** の孫であり、彼は 10 世紀末エジ  
プトのムフティーであった、マワーリー・アブー・アルハサン・ヌール・アッディーン・アリ  
ー・ブン・ムハンマド・ブン・ムハンマド・ブン・アリー・ブン・ハリール・ブン・ムハンマ  
ド・ブン・ムハンマド・ブン・イブラーヒーム・ブン・ムーサー・ブン・ガーニム・マクディ  
スイー・ブン・アリー・ブン・アルハサン・ブン・イブラーヒーム・ブン・アブド・アルアズ  
ィーズ・ブン・サイード・ブン・サアド・ブン・ウバーダ・ハズラジー・アンサーリー **al-Mawālī**  
**Abū al-Ḥasan Nūr al-Dīn 'Alī b. Muḥammad b. Muḥammad b. 'Alī b. Khalīl b. Muḥammad b.**  
**Muḥammad b. Muḥammad b. Ibrāhīm b. Mūsā b. Ghānim al-Maqdisī b. 'Alī b. al-Ḥasan b.**  
**Ibrāhīm b. 'Abd al-'Azīz b. Sa'id b. Şa'd b. 'Ubāda al-Khazrajī al-Anṣārī** 一神よ彼を嘉したま  
えーの息子たる、学識深きアブド・アッラフマーン **'Abd al-Raḥmān** の孫なのである。彼（サ  
アド・ブン・ウバーダ・ハズラジー）は、この書の最後にある結びにその伝記が上げられてい  
る通り、ダマスカス行政区のムニーハ村 **Qaryat al-Muniḥa** に埋葬されている。

**第 7 章：[38. a] 預言者たち、教友たち、著名な人々のうち、バイト・アルマクデイスに入  
った人、または知識人のうちでそこで死に埋葬された人**

預言者たちについて言えば、彼らの最初の者は**アダム**—彼に平安あれーである。イブン・ア  
ッバース曰く、「アダムが大地に墮ちたとき、彼の頭は天にあった」彼はヒンドに墮ち、バイ  
ト・アルマクデイスの岩のもとで跪拝したとも言われている。彼の墓は、バイト・アルマクデ  
イスとアブラハムのモスクの間にある洞窟にある。彼の両足は岩のもとにあり、彼の頭はアブ  
ラハム—彼ら兩名に平安あれーモスクのもとにあって、それら 2 つの間は 20 マイルである。

**ノア**—彼に平安あれー：箱舟はバイト・アルハラームに 1 週間おり、その後バイト・アルマ  
クデイスの周囲を 1 週間漂った後に、ジュディー山に乗り上げたと言われている。

**慈愛深き方の友アブラハム**—彼に平安あれー：歴史家たちは次のように言っている：アブラ

ハム―彼に平安あれ―はエジプトからやってきて、ラムラとイーリヤーの間に滞在した。またはパレスチナであるとも言われている。アブラハム―彼に平安あれ―は、シャームの地にイサクが遣わされ、ヤコブがカナンの地に、イシュマエルがジュルハムに、ロトがソドムに遣わされるまでは死ななかった。彼らはアブラハム―彼に平安あれ―の契約によって預言者となったのである。カアブやその他の人々が、犠牲の物語はシャームのバイト・アルマクディスの岩の上で行われた、としている。

**ヤコブ―彼に平安あれ―**：彼は神のイスラエルである。イブン・アッバース曰く、「預言者たちは、10名を除き全員がイスラエル族の出身である。すなわちノア、フード、サーリフ、ロト、シュアイブ、アブラハム、イシュマエル、イサク、ヤコブ、ムハンマド以外には。神よ彼らすべてに祝福と平安を与え給え」

彼はバイト・アルマクディスを最初に建設した人物であると言われているが、前述の通り、その場所は燃えてしまった。

ワフブ・ブン・ムナッピフ曰く、「ヤコブに死が訪れたとき、彼は息子や孫たちを集めると、彼らに遺言し遺産を割り当てた。彼はヨセフ―彼に平安あれ―に、自身の遺体を運んで、聖なる地にいる父祖アブラハムとイサクとともに埋葬するようにと遺言した。そこでヨセフは彼の遺体を車に乗せてエジプトの地から運び出し、聖なる地に運び込むと、それを命じられた場所に安置した。その後彼はエジプトの地に戻った」彼（ワフブ）曰く、「彼と彼の兄のエサウは同じ日に死んだ。[38. b] ヤコブとエサウの寿命は147年であった」

**誠実なるヨセフ―彼に平安あれ―**：カタールダが〈彼を野井戸の底に投げ込め〉(Q12:10)という至高なる方のお言葉について、「[野井戸とは] バイト・アルマクディスのある場所にある井戸のことである」と伝えている。

**イムラーンの子モーセ―彼ら兩名に平安あれ―**：彼はヤコブ―彼に平安あれ―の子孫のひとりである。彼のキブラはかの岩であった。ズフリー曰く、「神は彼（アダム）―彼に平安あれ―を大地に墮天させられて以来というもの、預言者のキブラをバイト・アルマクディスの岩に定めずしては、預言者をお遣わしになることはなかった。預言者―神よ彼に祝福と平安を与え給え―は、赤い砂丘にある彼（モーセ）の墓を通りがかったときに礼拝した」

両『サヒーフ』の言では、「モーセ―彼に平安あれ―は強大にして栄光ある神に、石を投げれば届くほどの距離に、自分を聖なる地に近づけて下さいと求めた。モーセはそのことを、そこにいる預言者たちや聖者たちとともに埋葬されるために、ただその地域にいたいと思って求めたのである」モーセは127歳まで生きた。



ヌンの子ヨシュア—彼に平安あれ—:アブー・フライラが預言者ムハンマドより伝えて曰く、「人類の上に太陽が留まったのは、ヨシュアがバイト・アルマクディスに進軍した夜のこのみである」

ダビデ—彼に平安あれ—:彼はバイト・アルマクディスにおり、そこには彼の王宮があった。前述のように、彼はその建設に着手したが、それを完成させることはできなかった。しかし彼には数々の正しい行いと、詩編を読んだことに伴う役立つ教訓があり、それらは様々な大著の中に何行にも渡って書かれている。彼の墓はシオン教会にある。

アブー・アッダルダーが預言者ムハンマドより伝えて曰く、「ダビデ—彼に平安あれ—は言った。『我が主よ、私はあなたにあなたの愛と、あなたを愛する者の愛、あなたの愛を私に届ける行いを求めます。我が主よ、あなたの愛が、私自身よりも、私の家族よりも、私の財産よりも冷たき水よりも、私にとって好ましいものとなるようになし給え』」

アブドラー・ブン・アルハーリス曰く、「至高なる神はダビデ—彼に平安あれ—に啓示を下して言われた。『我が名を唱え、私と私の愛する者を愛し、我が僕たちに私を愛するようにさせよ』彼は言った。『我が主よ、いかにすればあなたの僕たちにあなたを愛させることができるでしょうか?』神は言われた。『彼らと共に我が名を唱えよ。彼らは私から良きことのみを唱えるであろう』」

イブン・アッバース—神よ彼を嘉したまえ—曰く、[39. a]「至高なる神はダビデ—彼に平安あれ—に啓示を下して言われた。『暴虐なる者どもに、我が名を唱えるなど言え。まことに私は、我が名を唱える者の名を唱える。私が彼らの名を唱えるときとは、彼らを呪うときである』それゆえに私は、『神が暴虐なる者どもを呪い給わんことを』というのである」

ソロモン—彼に平安あれ—:前述の通り、彼が神殿の建設を完了したとき、彼は神に3つの特質を求めた。彼は〔現在の〕ハラム・シャリーフ後部のアスパート門に続くところにある岩々の上で祈願したとも言われている。彼—彼に平安あれ—はバイト・アルマクディスに入るとき、彼は大地の王であったのだが、座るところを探し、貧者たちや病人たち、癩者たちに近づくと人々を遠ざけ、身を低めて頭を天に上げることなく彼らと共に座り、「貧者は貧者たちとともに」と言った。

シュアイブ—彼に平安あれ—:彼はイエスとムハンマド—神よ彼に祝福と平安を与え給え—の〔到来の〕福音を伝えた人物である。イスラエルの民が彼を殺したとき、神は彼らの上に敵を遣わされ、彼らを追い散らして滅ぼし給うた。

シリアは70年間荒廃したままであり、そこにはサマリア人とバビロンの民の王以外の者は

いなかった。神は**エレミヤ**—彼に平安あれ—をイスラエルの民にお遣わしになったが、彼らは悔悛を拒み、彼を打って捕えた。そこで神は彼らの上に**ネブカドネツアル**をお遣わしになった。彼は彼らを殺し、焼き払い、子供たちを捕虜に死、**バイト・アルマクディス**を破壊した。エレミヤはエジプトに逃げ、そこに滞在していたが、その後神は彼に**イーリヤ**に戻るようにとお命じになった。彼が滅んだ**バイト・アルマクディス**を眺めたとき、彼は〈いったん死んだものを、神はどうして生かし給うのであろうか〉(Q2:259)と言った。すると神は彼を100年の間死なせ給うてから、**バイト・アルマクディス**が復興した後に生き返らせ給うた。

〈町を通りかかった男〉とは、**エズラ**のことであるとも言われている。彼は預言者ではなく、**ネブカドネツアル**に捕囚された人々のうちのひとりである。エズラが**バイト・アルマクディス**に帰還したとき、**トーラー**が焼かれていたので、彼はイスラエルの民のために彼が記憶していた**トーラー**を編集した。彼は**ウラマー**のうちのひとりであった。

**ザカリヤ**—彼に平安あれ—：**イムラーン**が死んだとき、**ザカリヤ**は**マリア**を養育した。彼は**マリア**の〔母方の〕おばと結婚していたおり、彼女が彼に**ヨハネ**—彼に平安あれ—を産んだ。**マリア**は**ヨハネ**〔誕生〕の3年後に**イエス**を産んだ。6か月後であるとも言われている。するとイスラエルの民は、**マリア**のことで**ザカリヤ**を疑った。彼は人々から逃れ、[39. b] 1本の木の洞に入りこんだ。しかしその木にのこぎりが振り下ろされ、それは2つに切断された。のこぎりが彼の背中に振り下ろされたとき、栄光ある至高なる神は彼に啓示を下して言われた。「嘆くのは止めよ。私は大地とその上にいる者を転覆させよう」そしてのこぎりは、〔彼の体を〕2つに切り刻んだ。

**ザカリヤの子ヨハネ**—彼に平安あれ—：彼は**イエス**の〔母方の〕おばの子である。至高なる神は彼の正しさについて、〈神のみ言葉の確証者となり、指導者、思慮ある者〉(Q3:39)と言われている。というのも、彼は3歳のときに**イエス**を確証した最初の人であったからである。「思慮深き者 **al-Ḥaṣūir**」というのは、彼は能力があるにもかかわらず、女性に近づかなかったからである。彼は性的不能であったとも言われている。**アムル・ブン・アルアース**が預言者**ムハンマド**より伝えて曰く、『あらゆる**アダム**の子孫は復活の日に罪を持って行くが、**ザカリヤ**の子**ヨハネ**だけはそうではない』それから使徒は地面から小さな木切れを拾い、『彼の男性の持ち物は、この木切れのようなものしかなかった。それゆえに彼は「指導者」「思慮ある者」と呼ばれるのである』と言った」

**アブド・アッラー・ブン・ウマル**曰く、「**ザカリヤ**の子**ヨハネ**は、8歳のときに**バイト・アルマクディス**に入った。彼は**バイト・アルマクディス**の民が毛織や羊毛の衣服を着ているのを目にし、また彼らが〔苦行に〕努めているのを目にした。そこに彼の両親がやってきたので、彼は自分にも毛織の服を着せてくれるように求めた。両親がそうすると、彼は**バイト・アルマ**

クデイスに戻って来た。彼はそこで、昼は神への奉仕を行い、夜は神を讃え礼拝を行った。そうして 25 年が過ぎた。彼がヨルダン川の側に来て座っているということが聞かれるようになった。彼は渇きで死にそうになりながら、〔ヨルダン川の〕水に両足を浸していた。彼は至高なる神に、『あなたの栄光にかけて、私は私の行き先が樂園であるか地獄であるかを知るまでは、この冷たい水を味わいません』と言った。〔その様子を見た〕彼の両親は泣き、彼らが持ってきた大麦のパンを食べ、その水を飲んでくれと頼んだ。彼は両親に優しくし、言う通りにして、自分の誓いを破ってしまった。しかし神は優しく彼に語りかけ、両親に従うようにと言われた。両親は彼をバイト・アルマクデイスに連れ戻した。彼が礼拝している間、彼の嘆きのために〔父親の〕ザカリヤも泣き、気を失ってしまうほどであった。2 人の嘆きのゆえに、彼の家の者たちや僕たちも 2 人の周りで泣いた。こうしたことが続き、彼の両頬は涙で焼け爛れてしまった。〔40. a〕そこで彼の母親は、フェルトのきれを 2 枚取って、それを彼の両頬に押し当てて、彼の涙を吸い取った。彼がそのきれに涙をこぼすと、母親が立ってそれを絞るのであった。ヨハネは、自分の涙が母親の両腕に流れるのを見て言った。「これが我が涙、これは我が母である。〔神よ〕私はあなたの僕、あなたは最も恩寵深きお方です」

次のようにも言われている。彼は、ある父親の妻が息子と結婚することは許されない、という見解を述べた。するとその女性は、そのために彼の首を打ち落とす。彼の頭は切り落とされた後も、「あなたには彼女は許されない、彼女はあなたには許されない」と言い続けていた。

次のようにも伝えられている。天は、ザカリヤの子ヨハネとフサイン・ブン・アリー—彼ら 2 人に平安あれ—の上を除いては、誰の上にも嘆くことはない。天が赤くなるのは、天が泣いているのである。またイブン・アッバース曰く、「強大にして栄光ある神はムハンマド—神よ彼に祝福と平安を与え給え—に啓示を下して言われた。『私はザカリヤの子ヨハネにかけて 7 万人を殺した。私は汝の娘の子にかけて 7 万人を殺す者である』」

イエス—彼に平安あれ—：ミーラージュのハディースの中に、預言者—神よ彼に祝福と平安を与え給え—はかの夜、イエスの生まれた地で礼拝した、とある。ムジャーヒド曰く、マリア—彼女に平安あれ—は言った。「私は、自分たちだけでいるときには、イエスが私に話をし、私が彼に話をしました。私が他の人と一緒にいるときには、私は体の内に彼のタスビーフを聞きました」

アブド・アッラー・ブン・アルアースは、イエス—彼に平安あれ—の生誕地であるベツレヘムに、ランプを灯すための油を送っていた。

イエスは生後 8 日目に、モーセ—彼に平安あれ—のスナナに従って割礼した。彼の母親は彼を連れてエジプトに逃げ、彼はそこで 12 年間暮らした後シャームに戻った。彼が 30 歳になったとき、彼に啓示が下った。彼はカドルの夜に、バイト・アルマクデイスの山から昇天した。

マールーフ・カルヒー—Ma'rūf al-Karkhī—曰く、「ユダヤ教徒は、マリアの子イエス—彼に平

安あれ—を殺害することで一致した。すると神はイエスの上にガブリエルを下した。その翼には、次のように書かれていた。『おお神よ、私は唯一にして最も偉大なるあなたのもとに保護を求めます。おお神よ、私は唯一にして永遠なるあなたの御名によって、あなたに祈願します。おお神よ、私は偉大にして2つとなきあなたの御名によって、あなたに祈願します。おお神よ、私は強大にしていと高き、存在する者すべての支配者であらせられるあなたの御名によって、あなたに祈願します。私から、私が昼夜をその中で過ごしたものの過ちを取り除いて下さい』神はガブリエルに、『我が僕を我がもとに昇天させよ』と言われた。預言者一神よ彼に祝福と平安を与え給え—は教友たちに言った。[40. b] 「お前たちはこの祈願を唱えるように。そうすればお前たちは、返答を待たされることはない。まことにそれは、神のみもとで良き者、信仰ある者たちのために、いつまでも残るものである。信仰ある者は主に委ねなければならない」

彼の訓戒。彼曰く、「知識の徒に知識を禁じてはならない。そうすれば罪を避けられる。知識の徒以外の側で知識をひけらかすな。そうすれば無知でいられる。益があるとわかっているところで薬を出す、親切な医者となれ」また曰く、「信徒であるということを真実喜んでいる者は、顎の下に肉が付くことはない。というのもその者は、自分に報酬がないような状況であっても、希望をもって何かを集める者であるからだ。彼は美德をもって数えられ、彼の骨折りが彼以外の者をそっくり食べてしまうであろう」また曰く、「至高なる神の御名を唱える他に、口数を多くするな。そんなことになれば、かつては柔らかかったはずの心も、硬いものになってしまう。硬い心というものは、至高なる神からは遠く隔たっているものであるが、お前たちはそのことを知らない。主人たちの集団のごとき人々の罪を調べ上げてはならない。僕たちの集団のごときお前たち自身の罪を調べ上げよ。人は試練を受け、また救われるのである。救いに際して神を讃え、試練に際して恩寵を求めよ」また彼は弟子たちに行った。「神殿を住まいとし、家を居留地とせよ。荒野の雌牛から食べ、平穩に現世から逃れよ」また彼は言った。「イスラエルの民よ、お前たちは神の神殿を家とし、お前たちの家を弱者のための居留地とせよ。お前たちが1つの道を渡る者たちでないのなら、この世界にお前たちの居留地は存在しない」また彼はその弟子たちに言った。「お前たちにはっきり言うておくが、現世を愛することは、あらゆる罪の最たるものである。注意せよ、心に欲望を育てることも、罪と呼ぶのに十分である」

ヒドル—彼に平安あれ—：彼は預言者であり、生きている。彼についての言葉は後に出てくるであろう。

誠実なるマリア—彼女に平安あれ—：彼女が神に仕えた場所は、バイト・アルマクデイスのモスクにある、[イエスの] 揺り籠として知られているところである。彼女の墓は、ゲッセマネとして知られる教会にある。

ムハンマド一神よ彼に祝福と平安を与え給え一は前述の通り、イスラーの夜そこ（バイト・アルマクディス）に入り、そこで預言者たちを先導して礼拝し、そこで天女たちに会った。

終末のときに現れるマフディー：アブー・サイード・フドリーが預言者ムハンマドより伝えて曰く、「終末のとき我がウンマの中に、人々の力も及ばぬ、彼らが未だかつて聞いたこともないような厳しい苦難が下されるであろう。広大なはずの大地は人々の前に狭くなり、[41. a] 大地は不義不正で満たされるようになる。しかし神はひとりの男をお遣わしになり、その者は、かつて大地が不義不正で満たされていたように、大地を正義と公正で満たすであろう。天と地に住む者は彼に満足するであろう。大地が生み出すものの他には大地は種を取り除けず、天は神が人々の上に流す雨雲の他には露を注ぎはしない。彼は人々の間で7年、あるいは8年、あるいは9年過ごす。死者たちは、神が大地の民のゆえにお創りになった良きものよりも、生きかえることを望むようになるであろう」

ムハンマド・ブン・ハナフィーヤ **Muḥammad b. al-Ḥanafīya** 曰く、「アッバース朝のために黒い旗が現れるであろう。もう1本の黒い旗も現れ、彼らの服は白い。彼らの先頭には、タミーム族のマウラーであるシュアイブ・ブン・サーリフ **Shu'ayb b. Ṣāliḥ** という名の男がいる。彼らはスフヤーニー **al-Sufyānī** の郎党を打ち負かし、バイト・アルマクディスに居留する。その地のスルタンはマフディーの前に裸足で歩いてきて、シリアから彼のもとにやってくる。彼の出現から、彼がことを平穩に収めるまでの間は、73か月である」

スライマーン・ブン・イーサー曰く、「私は次のように聞いている。マフディーの御前に、ティベリアス湖 **Buḥayrat Ṭabariya** よりサキーナの箱が現れる。彼は〔それを〕運んで、バイト・アルマクディスにてその御前に安置する。ユダヤ人はそれを見ると、少数の者を除いて改宗する。その後マフディーは死ぬであろう」

教友たち一神よ彼らを嘉したまえ一について言えば、彼らの中には**ウマル・ブン・アルハッターブ**一神よ彼を嘉したまえ一がいる。前述の通り、彼は4度シリアにやって来て、バイト・アルマクディスに入城し、和平を結んだ。

**アブー・ウバイダ・ブン・アルジャッラーフ**一神よ彼を嘉したまえ一：前述の通り、彼は將軍として、ウマル・ブン・アルハッターブが彼に与えた軍団を率いて、バイト・アルマクディスに入城した。彼はウマルに書簡を書き送って、彼を和平のために呼び寄せた。そして彼はやってきて、和平でもってバイト・アルマクディスを征服したのである。

彼はアムワース **'Amwāṣ** で起きた疫病で死に、カファーリス **Qafāris** とアーディリーヤ **al-'Ādliya** の間にあるアルジューン山 **Jabal 'Aljūn** ふもとの、アムター村 **Qaryat 'Amtā** に埋

葬された。彼のザーウィヤは、西ガウルにあるアリー修道院 **Dayr ‘Alī** である。彼の墓のある場所はわかっており、参詣の目的地となっている。

**ムアーズ・ブン・ジャバル**—神よ彼を嘉したまえ—：第1章で述べた通り、彼はバイト・アルマクディスを訪れ、3日3晩礼拝や断食をして滞在した。アブー・ウバイダは死期が訪れたとき、彼を後継者として指名した。しかしムアーズはアブー・ウバイダの死後、ヨルダン地域で〔彼と同様に〕疫病で死んだ。彼の墓は、ガウルにある城塞にあることがわかっており、参詣の目的地となっている。

『親しき友の贈り物 *Ithāf al-Akhiṣā’*』の著者（ミンハージー）曰く、[41. b] 「私は自分の身になにか重大なことが起こったときに、何度か彼のもとに参詣したことがある。私はそこで、彼をして神に恩顧を求めたのだが、すると私はそこで、彼の恩寵と彼の友愛の恩寵によって、〔自分の願いが〕聞き届けられたというしるしを見たのであった。神よ彼を嘉し給え」<sup>20</sup>

**神の使徒**—神よ彼に祝福と平安を与え給え—の**ムアッズィン、ビラール・ブン・ラッバーフ Bilāl b. Rabbāḥ** —神よ彼を嘉したまえ—：彼はウマル・ブン・アルハッターブとともに、バイト・アルマクディスを経験した。彼は神の使徒—神よ彼に祝福と平安を与え給え—の死後、1度しかアザーンを行わなかったが、それは前述の通り、ウマルが征服後彼にアザーンを命じたときのことであった。彼はダマスカスで亡くなり、彼の墓はサギール門の側にある。

**アブー・ウバイダのおじ、アイヤード・ブン・ガーニム ‘Ayāḍ b. Ghānim b. ‘Amm Abī ‘Ubayda** —神よ彼を嘉したまえ—：彼はバイト・アルマクディスに入り、そこに天幕を立てた。彼は預言者—神よ彼に祝福と平安を与え給え—から伝承を伝えている。

**ハーリド・ブン・アルワリード Khālīd b. al-Walīd** —神よ彼を嘉したまえ—：彼はバイト・アルマクディスに入った。彼はダマスカス征服を経験した。彼はヒムスで亡くなった。彼はそこで亡くなっていて、彼の墓は同地にあることがわかっており、参詣の場所となっている。

**アブー・ザッル・ギファーリー Abū Dharr al-Ghifārī** —神よ彼を嘉したまえ—：彼はバイト・アルマクディスに入った。彼はラバザ al-Rabadha<sup>21</sup>で亡くなった。

イマーム・アフマドは彼の『ムスナド *Musnad*』の中で、アフナフ・ブン・カイス al-Aḥnaf b. Qays より、次のように伝えている。「私はバイト・アルマクディスに入ったとき、ある人がラクアやサジュドを繰り返し行っているのを見た。私は、それにはなにか訳があるのだろうと

<sup>20</sup> IA ii, 23.

<sup>21</sup> メディナ近郊の村 [MB iii, 24-25]。

思った。そのうちにその人はその場を離れたのだが、私は〔彼に〕言った。『あなたは〔ラクアやサジュドを〕偶数回行ってから去られたのですか、それとも奇数回でしたか？ 私にはわかりませんでした』〔すると彼は私に言った〕『我が愛するアブー・アルカーシム（預言者ムハンマド）―神よ彼に祝福と平安を与え給え―は我々に伝えた』そして彼は泣きだした。〔そして続けて言うには〕『神のためにサジュドを 1 回行う僕は皆、神が彼のために樂園での位階を 1 段上げて下さる。神は彼の悪事を 1 つ消し、彼のために善行を 1 つ書き留めて下さる』私が『あなたはどなたですか、教えて下さい』と言うと、彼は『神の使徒―神よ彼に祝福と平安を与え給え―の教友、アブー・ザッルです』と言った。〔それを聞いて〕私は非常に恐縮したのであった」

**アブー・アッダルダー・ウワイル Abū al-Dardā' 'Uwayr** ―至高なる神よ彼を嘉したまえ―：彼はバイト・アルマクディスを訪れた。彼はウスマーンのカリフ在位中に、ダマスカスにて亡くなった。

**ウバーダ・ブン・アッサーミト**―至高なる神よ彼を嘉したまえ―：ウマルが彼をカーディーとして、また教師として、シリアに向かわせた。彼はヒムスに滞在した後パレスチナに移り、そこで最初にカーディー職を務めた人物となった。彼はバイト・アルマクディスに住み、同地で亡くなった。彼はラムラで亡くなったとも言われている。現在彼の墓は、[42. a] この地域を以前ファランジュが占領していたために、拭い去られてしまって知られていない。

**スライマーン・ファーリスィー Sulaymān al-Fārisī** ―神よ彼を嘉したまえ―：彼はバイト・アルマクディスに入った。彼はウスマーンのカリフ在位中に、マダーイン al-Madā'in<sup>22</sup>にて没した。彼は 350 年生きたとも言われているが、〔もちろんこれは〕確かなものではない。これは、彼が 100 歳を越えていたという意味である。

**アブー・マスウード・バドリー Abū Mas'ūd al-Badrī** ―神よ彼を嘉したまえ―：彼はバドルに住んでいたが、バドルの戦いは経験していない。彼はバイト・アルマクディスに入った。人々も彼に従った。彼は言った。「神の使徒―神よ彼に祝福と平安を与え給え―曰く、『何者も並び立たず、禁じられし血に濡れることのない神に出会った僕は皆、望めば樂園のいかなる門からでも入ることができる』」

**タミーム・ダーリー**―神よ彼を嘉したまえ―：彼と彼の兄弟のヌアイム Nu'aym は、神の使徒―神よ彼に祝福と平安を与え給え―のもとを訪れてイスラームに入信し、彼の教友となり、

<sup>22</sup> バグダード南東の古都クテシフォンのこと [MB v, 74-75]。

彼とともにガズワを行った。タミームはメディナには滞在しなかった。彼はウスマーンの殺害後シリアに移住し、バイト・アルマクデイスのアミールとなった。前述の通り、神の使徒一神よ彼に祝福と平安を与え給えーが、ヘブロン<sup>23</sup>の地を彼にイクターとして与えたのである。イブン・マージャが伝えている通り、彼はそのモスクに最初にランプを灯した者となった。

彼は 40 年に亡くなった。彼の墓は、シリアにあるクスワ *al-Kuswa* という村の近くにある。

**アムル・ブン・アルアースー**—至高なる神よ彼を嘉したまえ—：彼はバイト・アルマクデイスに入った。

アブー・クバイダ・ブン・ジャービル *Abū Qubayda b. Jābir* 曰く、「私はウマル・ブン・アルハッターブと親しくしていたが、彼ほど神の啓典をよく読み、神の宗教に敵意を抱かず、人に追従しない者を見たことがない。また私はタルハ・ブン・アブド・アッラー *Ṭalḥa b. 'Abd Allāh* とも親しくしていたが、彼ほど心の広い者は見たことがない。また私はアムブ・ブン・アルアースとも親しくしていたが、彼ほど端々にまで意志が固く、仲間としては親しみやすく、秘密を持たずにおおっぴらである者は見たことがない。また私はムギーラ・ブン・シュウバ *al-Mughīra b. Shu'ba* とも親しくしていたが、例えば門が 8 つある町があったとして、彼が高貴さを持たずしてそこから出ていくことはないであろう。彼はそこの諸門のひとつひとつから出ていくであろう」

**アブド・アッラー・ブン・サラーム**—神よ彼を嘉したまえ—：彼は教友たちの中でもとりわけ優れた人物で、イマームであり、イスラエルの民のラビであり、彼のために樂園が約束された人であった。彼はバイト・アルマクデイス征服を経験した。彼は 43 年に亡くなった。

**サイード・ブン・ザイド** *Sa'id b. Zayd* —神よ彼を嘉したまえ—：彼は樂園を約束された 10 名のうちのひとりである。彼はバイト・アルマクデイスを訪れた。彼はアキーク *al-'Aqīq*<sup>23</sup> にて亡くなった。クーフアで亡くなったとも言われている。

**サアド・ブン・アビー・ワッカース** *Sa'd b. Abī Waqqāṣ* —至高なる神よ彼を嘉したまえ—：彼はバイト・アルマクデイスを訪れ、そこからウムラへのイフラームに入った。彼は次のように言ったと言われている。「私は生涯のうち 3 日しか泣いたことはない。神の使徒一神よ彼に祝福と平安を与え給えーが神に召された日と、ウスマーン・ブン・アッファーンが殺害された日、そして今日、私は真実を求めて、平安なる真実を求めて泣くのである」

彼はアキークで亡くなり、メディナに運ばれた。預言者一神よ彼に祝福と平安を与え給えー

<sup>23</sup> 水の流れる場所を表す言葉。ここではメディナにあるアキークのことを指す [MB iv, 138-141]。



の妻女たちが、彼女たちの部屋の中で彼のために祝福を請うた。彼はバキーウ al-Baqī' <sup>24</sup>に埋葬された。

**シャッタード・ブン・アウス・アヒー・ハッサーン・ブン・サービト Shaddād b. Awṣ b. Akhī Ḥassān b. Thābit** : 彼は知識と洞察力を持つ人物であった。次のように伝えられている。神の使徒—神よ彼に祝福と平安を与え給え—の死期が近づいたとき、彼は立っては座り、立っては座りしていた。神の使徒—神よ彼に祝福と平安を与え給え—が、「シャッタードよ、なぜそんなに落ち着かないのか」と言うと、彼は「神の使徒よ、私は〔あなたのことで〕目の前が暗くなる思いです」と言った。すると神の使徒—神よ彼に祝福と平安を与え給え—は言った。「神がお望みになるならば、お前の前にシリアは征服され、バイト・アルマクディスも征服されるであろう。そして至高なる神がお望みになるならば、お前とお前の後に現れるお前の子孫は、その地でイマームとなるであろう」はたして神の使徒—神よ彼に祝福と平安を与え給え—が彼に言った通りになったのである。

彼は熱心に神に奉仕し、ジハードに努める人であった。彼はパレスチナ地域に居留した。彼はバイト・アルマクディスにて亡くなった。彼の墓は、アクサー・モスクの壁の下にあるラフマ門の墓地にあることがわかっており、参詣の場所となっている。

**アブー・フライラ—神よ彼を嘉したまえ—** : 彼はバイト・アルマクディスを訪れており、その征服を経験している。彼はメディナで亡くなった。彼はガザの向かいにあるユブナー村 Qaryat Yubnā<sup>25</sup>に埋葬されているのではない。それは彼の子供のひとりのものである。

**ムアーウィヤ・ブン・アビー・スフヤーン—神よ彼を嘉したまえ—** : 彼はバイト・アルマクディスを訪れた。アムル・ブン・アルアースは彼の元を訪れ、ウスマーンの血を求めて彼にシリア全域に対するバイアをした。彼はアミールとして、20年間シャームを治めた。

彼は60年にダマスカスにて亡くなり、同地の墓地に埋葬された。

**アブド・アッラー・ブン・アムル・ブン・アルアース—至高なる神よ彼ら2人を嘉したまえ—** : [43. a] 彼は父親とともに、ムアーウィヤへのバイアを行う際にバイト・アルマクディスを訪れた。彼はベツレヘムにも入り、そこで礼拝し、そのランプを灯すためのオリーブ油を捧げるように命じた。彼はクルアーンとトーラーを読み、1日断食しては1日断食を解いた。

**アブド・アッラー・ブン・アッバース—神よ彼を嘉したまえ—** : 預言者—神よ彼に祝福と平

<sup>24</sup> メディナにある墓地の名前 [MB ii, 473-474]。

<sup>25</sup> ラムラの近くにある村の名前。アブー・フライラの墓があると伝えられている [MB v, 428]。

安を与え給え—は彼のために祈願して言った。「おお神よ、彼に宗教を説き、それを解き明かすスンナを教え給え」彼はその豊富な知識のゆえに、賢者と呼ばれていた。彼はバイト・アルマクデイスを訪れ、冬場にそこからイフラームを始めた。

彼はターイフ **al-Tā'if** にある、サッラーマ **al-Sallāma** という村で亡くなった。彼の墓はそこにあることがわかっている。

**アブド・アッラー・ブン・ウマル—**至高なる神よ彼ら 2 人を嘉したまえ—：彼は内乱の年にバイト・アルマクデイスに行った。彼はスブフ礼拝をした後、モスクに座って太陽が昇るのを待ち、それから同行の人々とともに立って数回のラクアの礼拝を行った。その後彼らは雌ラクダに座っ〔てバイト・アルマクデイスから旅立っ〕た。彼らは岩のほうには行かず、集団礼拝を待つこともしなかった。イブン・ウマルはウムラに際して、そこからイフラームを始めた。

**アウフ・ブン・マーリク・アシュジャイー'Awf b. Mālik al-Ashja'i** —神よ彼を嘉したまえ—：彼はバイト・アルマクデイス征服を経験した。彼はヒムスに居留していた。彼は、何者も並び立つことのない神に仕え、5 回の礼拝を守り、人々に何も尋ねないという条件で、神の使徒—神よ彼に祝福と平安を与え給え—にバイアを行った。

**アブー・ジャアファル・アンサーリーAbū Ja'far al-Anṣārī** —神よ彼を嘉したまえ—：彼はバイト・アルマクデイスで礼拝するために、そこを訪れた。彼はシャームで没した。

**ワースィラ・ブン・アルアシュファウ Wāthila b. al-Ashfa'** —神よ彼を嘉したまえ—：彼はサナアの民で、バスラに住んでいたが、その後シャームに〔移り住んだ〕。彼はマガーズィー戦士として、ダマスカスとヒムス〔征服戦〕を経験した。その後彼はバイト・アルマクデイスに移り住み、同地で没した。彼はダマスカスで没したとも言われている。

**アブー・アマーマ・バーヒリーAbū Umāma al-Bāhili** —至高なる神よ彼を嘉したまえ—：彼は別離の巡礼を経験している。彼はダマスカスとバイト・アルマクデイスに住んだ。彼はシリアで没した最後の教友である。

**マフムード・ブン・アッラービウ Maḥmūd b. al-Rābi'** —神よ彼を嘉したまえ—：彼がウバーダ・ブン・アッサーミトに割礼を施した。彼は預言者—神よ彼に祝福と平安を与え給え—が 56 歳のときに彼と出会っており、神の使徒—神よ彼に祝福と平安を与え給え—の顔に涎が垂れるのを見たなどと言っている。彼はバイト・アルマクデイスに居留し、そこからハッジやウムラに際してイフラームを始めた。

ヤズィード・ブン・スフヤーン **Yazid b. Sufyān** ー至高なる神よ彼を嘉したまえー：アブー・バクルー至高なる神よ彼を嘉したまえーが、彼をシリアに派遣した。彼は先行した軍の一団を率いた。[43. b] 彼が没すると、ウマルは前述の通り、その地位を彼の兄弟のムアーウィヤに任じた。

アブー・ライハーナ **Abū Rayḥāna** ー彼は神の使徒ー神よ彼に祝福と平安を与え給えーのマウラーであった。彼の娘のライハーナが神の使徒ー神よ彼に祝福と平安を与え給えーのもとにいた。彼はバイト・アルマクディスに住んでおり、同地で没した。彼はアクサー・モスクの説教師であった。

シュライド・ブン・アッシュライド **al-Shurayd b. al-Shurayd** ー神よ彼を嘉したまえー：彼はバイト・アルマクディスを訪れた。というのも彼は、もし神が神の使徒ー神よ彼に祝福と平安を与え給えーの上にメッカを開いて下さったならば、バイト・アルマクディスで礼拝します、という誓いを立てていたからである。彼は神の使徒にそうする許可を求め、神の使徒は彼にそれを許可した。

アブド・アッラー・ブン・アビー・アルジャドアー **'Abd Allāh b. Abī al-Jad'ā'** ー至高なる神よ彼を嘉したまえー：彼はそこ（バイト・アルマクディス）に住んでいた。彼の墓もそこにあると言われている。

アブド・アッラー・ブン・シャキーク **'Abd Allāh b. Shaqīq** 曰く、「私はある人々とともにエルサレムにいた。すると彼らのうちのひとりが言った。『私は神の使徒ー神よ彼に祝福と平安を与え給えーが、「我がウンマの中のある者の執り成しにより、タミーム族の大部分の者は樂園に入ることができる」と言うのを聞いたことがある。ある人が「神の使徒よ、それはあなた以外の人物〔の執り成しで〕ということですか?』と言うと、彼は「私以外の人物だ」と言った。彼がやってきたとき、私は〔彼に〕「それは誰のことなのですか?』と言った。すると彼は「イブン・アビー・アルジャドアーのことである」と言った』」ティルミズィーがこれを伝えている。

ファイルーズ・ダイラミー **Fayrūz al-Daylamī** ー神よ彼を嘉したまえー：彼は、ペルシア皇帝によってイエメンに派遣された者たちのひとりである。彼らはそこからエチオピアを奪い、そこを征服したのであった。

彼はバイト・アルマクディスに住んでいた。彼の墓もそこにあると言われている。

ズー・アルアサービウ・タミーミー **Dhū al-Aṣābi‘ al-Tamīmī** : 彼はバイト・アルマクディスに住んでいた。彼は、シリアのダマスカスに居留していた人々のひとりである。彼は同地で没した。

アブー・ムハンマド・バჯジャーリー **Abū Muḥammad al-Bajjārī** — [点のある] ジームで。至高なる神よ彼を嘉したまえ—：彼は〔礼拝のラクアの回数について〕奇数回行うのが義務であるなどと言っていた人物である。彼はウマルのカリフ在位中に没した。彼はアリー—神よ彼らを嘉したまえ—とともに、スィッフィーンの戦いを経験したとも言われている。彼はバイト・アルマクディスに住み、そこで没した。

アブー・ウバイイ・ブン・ウンム・ハラーム **Abū Ubayy b. Umm Ḥarām** —至高なる神よ彼を嘉したまえ—：彼はバイト・アルマクディスに住んでいた。彼は、ウバーダ・ブン・アッサーミトの養子であった。彼はバイト・アルマクディスにて没した最後の教友である。

ウサイフ・ブン・アルハーリス **‘Uṣayf b. al-Ḥārith** —至高なる神よ彼を嘉したまえ—：彼と彼の家族はバイト・アルマクディスを訪れ、そこで集団礼拝を行った。

信徒たちの母サフィーヤ・ビント・ハイイ **Umm al-Mu‘minīn Ṣafiya bint Ḥayy** —至高なる神よ彼女を嘉したまえ—：彼女はバイト・アルマクディスを訪れ、そこで礼拝した。また彼女はオリーブ山に上り、そこでも礼拝した。彼女はその山のふもとに立つと、[44. a] 「復活の日、人々はここから樂園と地獄とに分かれていくのです」と言った。

彼女はメディナで亡くなり、バキーウに埋葬された。

タービウーンについては、彼らの中にはウワイス・カルニー **Uways al-Qarnī** がいる。神の使徒—神よ彼に祝福と平安を与え給え—はウマルに、彼（ウワイス）が彼らのために神に赦しを請うことを頼むように命じた。ウマルはバイト・アルマクディスにて彼と面会したとも言われている。また 2 人はマウシムの時期に会ったとも言われている。すると彼はウマルに、「私はハッジとウムラを行い、また神の使徒—神よ彼に祝福と平安を与え給え—のモスクにて礼拝を行いました。〔この上は〕私はアクサー・モスクで礼拝したく思います」と言った。そこでウマルは彼の準備を整え、彼の持ち物に気を配ってやった。彼はアクサー・モスクを訪れ、そこで礼拝した。

その後彼はクーファを訪れた。〔そこから〕彼はガーズィーとしてアルメニア国境へと出陣した。彼は腹を負傷して、ハイマ **Khayma** の民のもとに逃げてきた。彼は彼らのもとので没した。彼は袋と弓を持っていた。ハイマの人々は、彼らのうちの 2 人の人に、「行って彼のため

に墓を掘ってあげなさい」と言った。彼らは「彼の袋の中を見てみよう」と言った。するとその中には2枚の服が入っていたが、それらはこの世の服ではなかった。例の2人の人々もやってきて、「私たちは岩に墓を掘りましたが、直後に手がそこから伸び上がってきました」人々が彼に経帷子を着せて埋葬し、顔を向けると、そこには何も見えなかった。

彼はスィフイーンの戦いの際にいなくなったとも言われている。また、彼はダマスカスで死に、そこに埋葬されたとも言われている。

**ウバイド‘Ubayd**：彼はバイト・アルマクディスにおけるウマルの工人であった。かつてバイト・アルマクディスで疫病が起こったとき、多くの棺が洗われだしたが、彼はそれらのために祝福を請うた。若者だけがそれらの棺を担いだ。

**ヤァラー・ブン・サアド Ya‘lā b. Sa‘d**：ウマル・ブン・アルハッターブがヒムスにて、彼に町の整備を頼んだ。

**ウマイル・ブン・シャッダード‘Umayr b. Shaddād**：彼はバイト・アルマクディスにいた。

**アブー・ヌアイム Abū Nu‘aym**：彼はムアッズィンで、バイト・アルマクディスにてアザーンを行った人物である。彼の後ろで、ウバーダ・ブン・アッサーミトがスブフ礼拝を行った。

**アブー・アズバイル Abū al-Zubayr**：バイト・アルマクディスのムアッズィン。彼曰く、「我々のもとにウマルがやってきて言った。『お前がアザーンをするときは、ゆっくりと行うように。行うときは確実に行うように』」また別の話では、[ウマルは]「注意するように」と言った。

**アブー・サラーム・ハバシー Abū Salām al-Ḥabashī**：彼はバイト・アルマクディスを訪れ、ウバーダ・ブン・アッサーミトのもとで学び、彼から伝承を聞き伝えていた。彼曰く、「私はバイト・アルマクディスを訪れると、ウバーダ・ブン・アッサーミトのもとに滞在していた。私がある日彼の住まいに行くと、彼は不在であった。そこで私はモスクに向かったのだが、[そこで]彼とカァブが座っているのを見つけた。60年のことであるが、[44. b] カァブは『財産を持っている者にはそれを集めさせ、妻を持っている者には彼女を離縁させ、独り身の者には結婚させるな。これより後に生まれた者に、良いことは起こらないのだから』」アブー・サラームはヒムスからダマスカスへと移住して、「ここでは祝福が2回2倍になった」と言った。

**アブー・ジャアファル・ジャラシー Abū Ja‘far al-Jarashī**：彼からは次のように伝えられて

いる。彼曰く、「私は、ウバーダ・ブン・アッサーミトとともにバイト・アルマクデイスのモスクに入った」すると彼は、ある人がサンダルを彼の右に、あるいは左に脱いで礼拝しているのを見た。そこで彼は言った。「あなたがあなたの主に秘密を告白しているのであれば、この杖を使って頭を高く掲げなさい。あなたはまるで啓典の民のようなことをしているではないか」

ハーリド・ブン・マアダーン・カライー **Khalid b. Ma'dān al-Kalā'i** : 彼は1日に4万回「神に栄光あれ **Subhāna Allāh**」の句を唱えていた。彼はバイト・アルマクデイスにやってきて、そこから6ミールのところに居留した。彼はそこで5回の礼拝は行わなかった。

ウムム・アッダルダー・フジャイマ **Umm al-Dardā' Hujayma** : 彼女曰く、「私は神への奉仕を行いたいと思いましたが、ウラマーと交際したり、彼らと暗唱の会を持ったりすること以上に健全なことはありませんでした」彼女は他の女性たちとともに、神に仕えていた。彼女たちはずっと立っていることができなかつたので、綱に寄りかかっていた。

彼女はダマスカスからバイト・アルマクデイスに行っていた。彼女が山地を通り過ぎるとき、彼女の案内人が「私はこの山々が、その主がそれらにお約束なされたところのものであると聞いております」そして彼は次の句を読んだ。〈人々は、山について汝に尋ねるであろう。言つてやれ、「主はそれらを粉碎し給うであろう。そして坦々たる平野にしておき給う。そこにはひずみも高低も見られない」〉(Q20:105-107) 〈我らが山々を引き抜く日、汝は大地がせり出すのを見るであろう。そして我らは人々すべてを呼び集め、そのうちの一人をも残すことはない〉(Q18:47)

彼女はバイト・アルマクデイスにて、貧者たちとともに座った。彼女はそこで1年の半分を過ごし、ダマスカスで1年の半分を過ごしていた。

アブー・アルアッワーム **Abū al-'Awwām** : 彼はバイト・アルマクデイスのムアッズインであった。アブド・アッラー・ブン・アムル・ブン・アルアースより伝えられているところでは、クルアーンの中で述べられているところの壁とは、バイト・アルマクデイスの壁のことである〔とアブー・アルアッワームは言った〕。

クバイダ・ブン・ズワイブ **Qubayḍa b. Dhūwayb**、アブド・アッラフマーン・ブン・ムハイリーズ **'Abd al-Raḥmān Muḥayriz**、ハーニー・ブン・クルスーム **Hānī b. Kulthūm** : 彼らは皆、アービドでありザーヒドであった。クバイダは神学者であった。

イブン・ムハイリーズはクライシュ族の出で、バイト・アルマクデイスに居留していた。ラジャー・ブン・ハイワ曰く、「メディナの民が我々に向かって、彼らのアービドであるイブン・

ウマルのことを自慢してきた。そこで我々は、我々がアービドであるイブン・ムハイリーズのことを自慢してやった。[45. a] と言っても私は、彼が大地の民を安んじる者として存在していることを述べただけであるが」

ハーニーについては、彼のもとにパレスチナのアミール位が下されたことがあったが、彼はそれを拒否して言った。「その 3 人が、ラムラからバイト・アルマクディスに向けての礼拝を制限しているのだ」

**ムハーリブ・ブン・ディサール Muḥārib b. Dithār** : 彼はカーディーであり、またウラマー、ザーヒドのひとりであった。彼のハディースは、様々なウラマーの書に引用されている。彼曰く、「私はカーシム・ブン・アブド・アッラフマーン **al-Qāsim b. 'Abd al-Raḥmān** とともに、バイト・アルマクディスへと向かった。そして我々は 3 つのことを達成した。夜を徹して勤行することと、[バイト・アルマクディスのために] 費用を潤沢に使うこと、そして人々から離れて勤行に努めることである」

**アブド・アルマリク・ブン・マルワーン** : 彼はバイト・アルマクディスの岩のドームを建設した者である。アブー・フライラより、次のように伝えられている。神の使徒―神よ彼に祝福と平安を与え給え―曰く、「ガズワを行わず、またはガーズィーとして努めもせず、家族の中に後継者を残すこともしない者には、神が破滅を下されるであろう」

彼は会えば優れた人物で、語れば優れた語り手であり、重みのない話であってもよく耳を傾けた。人に反目されるようなことがあっても、彼の理性と宗教を重んじようとしなない者を馬鹿にしたり、悪意をもって反論したり、自分にできることをべらべらとしゃべったりはしなかった。

彼はあるとき岩の側に、ウンム・アッダルダーとともに座っていた。そのときマグリブ礼拝の呼びかけがあった。すると彼女は彼に寄りかかって立ち上がり、彼は彼女を女性の礼拝所へと入らせた。彼は去り、人々の先頭に立って礼拝した。

**アブド・アッラー・ブン・ファイルーズ 'Abd Allāh b. Fayrūz** : 彼はバイト・アルマクディスの出であり、[伝承において] 信頼のおける人物であった。アブー・ダーワードやアンナサーイー、イブン・マージャが彼のハディースを引用している。

**ズィヤーダ・ブン・アビー・サウダ Ziyāda b. Abī Sawda** : ウバーダ・ブン・アッサーミトとアブー・フライラより、[伝承において] 彼は信頼のおける人物であったと伝えられている。

**アブー・アルハサン・ナフラワーニー・アングルスィー Abū al-Ḥasan al-Nahrawānī**

**al-Andalsi** : 彼はバイト・アルマクディスに住んでいた。ある人が彼に尋ねて、「アブー・バクルよ、夜の勤行をするべき人がそれを放棄して、その後再び戻ってきたとしたら、あなたはご思われますか？ 彼はそれに努めるべきでしょうか、それともそうはできないのでしょうか？」と言った。すると彼は次のような詩を言い出した。

お前たちは我々から離れて、我々以外の者と交際した  
我々がそうである限り、お前たちはハジャラーン **al-Hajarān** を知らしめた

**イブラーヒーム・ブン・ムハンマド Ibrāhim b. Muḥammad** : 彼はバイト・アルマクディスに居留していた。彼のハディースは、イブン・マージャの書に入っている。

**アブー・ウヤイナ・ハワース Abū 'Uyayna al-Khawāṣ** : 彼はバイト・アルマクディスを訪れた。彼は〔伝承の伝達において〕信頼できる人物であった。彼曰く、「私はバイト・アルマクディスにて、炎に包まれているかのようなシャイフに会った。彼は黒い鎧を着て、ずっと黙りこんでいた。彼は見るに堪えないような格好で、毛深く、ひどく悲しんでいた。[45. b] 私は彼に、「その服をお取り換えになったら、神もあなたを憐れんで下さるかもしれませんよ。白がいいことはご存じでしょう」と言った。すると彼は泣き、「これは不幸に見舞われた者の服と同じものなのだ。我々は現世において、嘆きの中にいるのだ。まるで我々が〔それを〕祈願したかのように」と言ってから気を失った。

バイト・アルマクディスの中のある村にいるアービド : その人はサウル・ブン・ヤズィード **Thawrb.Yazīd** とともに座っていた。彼は夜明けとともに自分の村から出てきて、バイト・アルマクディスにて 5 回の礼拝すべてを行い、最後のイシャー礼拝の後に自分の村に帰って行くのであった。

ハーリド・ブン・マァダーン・カラーイーは、預言者一神よ彼に祝福と平安を与え給え一の由来するハディースによって、彼のことを伝えている。曰く、「なにか恐ろしい、あるいは怯えるようなことを見た者は、『まことに神は比べるものとなき方、唯一にして全能の方なり』と唱えるがよい。それを唱えた者は、たとえ彼の目の前に鉄の壁があろうとも、神が彼の不安を取り除いて下さる」さてその人がある夜道を歩いていると、彼の目の前にライオンが現れ、進むことができなくなってしまった。そこで彼はハーリドのハディースを思い出し、それを唱えた。すると神が彼の不安を取り除いて下さった。さらに彼が行くと、ロバの前に猛獣が口を開いているところに行き当たった。猛獣の口からは炎が噴き出しており、ロバを食べようとしていた。彼はそこで例のハディースを思い出し、それを唱えた。そして彼は「お前も知っているように、神は雄牛を憐れみ給うことはないのだ」と言って、そのロバを自分のものとした。



アブド・アッラー・ブン・アーミル・アーミリー **‘Abd Allāh b. ‘Āmir al-‘Āmirī** : 彼曰く、「私はバイト・アルマクディスにてある修道士に尋ねて、『修道士よ、神への奉仕の中に最初に入るものとは何ですか?』と言った。彼は『飢えです』と言った。私が『その証拠はなんですか?』と言うと、彼は、『なぜなら体は土より創造され、魂は天の王国より創造されたからです。体は大地に伸びる柱には満足していても、その王国を恋い慕うことには満足しきってはいません』と言った。私が『なぜ飢えなのですか?』と言うと、彼は『ズィクルや謙遜に付随するものだからです』と言った」

アブー・アブド・アッラー・ブン・ハフイーフ **Abū ‘Abd Allāh b. Khafif** : 彼はシーラーズに出向き、[さらに] メッカに行った後、バイト・アルマクディスに行き、そしてシリアに入った。

カスム・ザーヒド **Qathm al-Zāhid** : 彼曰く、「私はバイト・アルマクディスの門のところで、ひとりの修道士を見かけた。彼は恍惚としている風であったが、涙を流してはいなかった。私は彼の様子を恐ろしく思って言った。『修道士殿、私に何か、あなたから伝えて記憶しておくべきご助言を頂けませんか』すると彼は言った。『獣や虫に追いかけているような人でありなさい。恐れや怯えを持ちながら、ぼんやりしていたら獣に食い殺され、不注意であれば獣に咬みつかれることを恐れる者のように。[46. a] そうすれば、目の眩んだ者たちが安寧を見出す夜も、彼にとっては怯えの夜となり、怠け者たちが楽しみを見出す昼も、彼にとっては悲しみの昼となる』そうして彼は向こうを向き、私に構わなくなった。私が『あなたが私に、ためになるようなことをもっとたくさん話して下さったなら』と言うと、彼は、『この渴いた者には、彼を豊かにしてくれる水で十分だろう』と言った。

ムハンマド・ハーティム・ターイー **Muḥammad Ḥāitm al-Ṭā’ī** : 彼は 2 聖地のファキーフを務めた。彼は誠実で善良であり、ファキーフでありスーフイーであった。彼はバイト・アルマクディスに入った。

アブー・ムハンマド・ブン・アルワリード **Abū Muḥammad b. al-Walid** : 彼はバイト・アルマクディスに入った。彼曰く、「アブー・ムハンマド・ブン・アビー・ヤズィード **Abū Muḥammad b. Abī Yazīd** が我々に次のように伝えた。善行の作法とその現れは、預言者一神よ彼に祝福と平安を与え給えーが言った 4 つのハディースの中に集められている。『神と終末の日を信じる者は、良いことのみを語るか、さもなくば黙っているがよい』、『人間がイスラームに入ることを良いことと思う者は、彼と関わりのないこととは離れねばならない』、『怒って

はならない』、『信徒はその兄弟のために、自分自身の望むものを望んでやれ』

イブン・アルワリードは、バイト・アルマクディスにて亡くなった。

**ジャアファル・ブン・ムハンマド・ニサーブリー Ja'far b. Muḥammad al-Nisābūrī** : 彼はバイト・アルマクディスを訪れた。ビラール・ブン・サアド **Bilāl b. Sa'd** に由来する彼のイスナードによって、次のように伝えられている。「罪の小さいことに目を向けるな。お前が逆らった者に目を向けよ」

**カアブ・アルアフバル** : 彼はシリアに住んでいた。彼がバイト・アルマクディスに入り、ウマルにキブラの場所を示したことについては前述した。彼はヒムスで没した。

**イブラーヒーム・ブン・アビー・アブラ・マクディスイー Ibrāhīm b. Abī 'Abla al-Maqdisī** : 彼はアブー・ウマーマとアナスより伝承を伝えている。またマーリクとイブン・アルムバーラクが、彼より伝承を伝えている。

**ジュバイル・ブン・ヌファイル・ハドラーミー Jubayr b. Nufayl al-Ḥaḍramī** : 彼は礼拝のために、バイト・アルマクディスにやってきた。ジュバイル曰く、「醜い性質には5つがある。スルタンが激しやすいこと、ウラマーが貪欲であること、シャイフが無慈悲であること、金持ちが吝嗇であること、高名な者が恥知らずであることである」

**アブド・アッラフマーン・ブン・ガナム** : 彼は預言者—神よ彼に祝福と平安を与え給え—の時代のムスリムであったが、預言者のもとを訪れてはいない。しかしながら彼は、神の使徒—神よ彼に祝福と平安を与え給え—がムアーズ〔・ブン・ジャバル〕をイエメンに派遣して、それからムアーズが死ぬまでの間、彼と交流があった。また彼は、ウマル・ブン・アルハッターブとも話をしている。

彼はバイト・アルマクディスを訪れた。彼はシリアのタービウーンのパキーフとなった人であった。

**ハーリド** : 彼はバイト・アルマクディスの岩〔のドーム〕にいたとき、ウマル・ブン・アブド・アルアズィーズがやってきて、手で彼を掴んで、「ハーリドよ、どうしたのか」と言った。[46. b] 彼は「あなた方には、神のよく聞こえる耳とよく見える目が必要です」と言った。するとウマルは至高なる神を恐れて身ぶるいし、その手を離した。するとハーリドは「この人は公正なイマームも同然だ」と言った。ハーリドは最後には自宅に引き籠るようになって、「人々の中には妬む者か、他人の不幸を喜ぶ者しか残ってはいない」と言った。

ハーリドは 90 年に亡くなった。

**公正なるイマーム、ウマル・ブン・アブド・アルアズィーズ**：彼が前述のハーリドと会話を交わしたことは前述した。イブン・スィーリーン **Ibn Sīrīn** —神よ彼を憐れみたまえ—曰く、「スライマーン・ブン・アブド・アルマリクはそのカリフ位をつつがなく始めた。彼は在位中のときどきに礼拝を行い、カリフ位をつつがなく終えた。そしてウマル・ブン・アブド・アルアズィーズを後継者として指名した。

**マーリク・ブン・ディーナール Mālik b. Dīnār**：彼はイマームであり権威ある人々のひとりである。彼とムハンマド・ブン・ワースィウ、アブド・アルワリード・ブン・ザイドは道中で行きあい、〔ともに〕 バイト・アルマクディスに向かった。

**ムハンマド・ブン・ワースィウ Muḥammad b. Wāsi'**：前述の人物であるが、彼からは次のようなことが伝えられている。彼は毎日、次のような祈願を行っていた。「おお神よ、あなたは敵をもって我々を支配せしめ、我々の恥をよく見通し、我々の弱さをよく知っておいでです。彼や彼のごとき者は、我々が彼らを見ることができない場所から、我々を見ています。おお神よ、あなたがあなたの恩寵を彼から引き離し給うたように、彼を我々から引き離し給え。あなたがあなたのお赦しから彼を失わせ給うたように、彼を我々から失わせ給え。あなたがあなたの楽園から彼を遠ざけ給うたように、彼を我々の間から遠ざけ給え」

次のようにも言われている。ある日彼の前に悪魔—神よ彼を呪い給え—が、老人の姿をとって現れた。悪魔は彼に、「イブン・ワースィウよ、あなたが毎日唱えているその祈願は何なのですか？ 私の前で繰り返してみてください」と言った。そこで彼は悪魔にそれを語った。彼が語り終えると、悪魔は彼に言った。「イブン・ワースィウよ、私はあなたに誓約を課すが、あなたはこの祈願を決して誰にも教えてはならない」するとムハンマド・ブン・ワースィウは悪魔に言った。「お前には神との誓約があるだろう。私が生きている限り、私は神の被造物の誰からもこれを隠さないという誓約が」

**ワリード・ブン・アブド・アルマリク**：彼はダマスカスのモスクとヒムスのモスクを建設し、バイト・アルマクディスを整備した。イブラーヒーム・ブン・アビー・アブラ曰く、「神がアルワリードを憐れみ給わんことを。ワリードのようなものがどこにいるだろうか。彼はダマスカスの教会を破壊して、その場所にモスクを建設した。彼は私に銀の杯を与え、それをバイト・アルマクディスのクルアーン読誦者の間で分けさせた」

**スライマーン・ブン・アブド・アルマリク**：彼はバイト・アルマクディスを訪れた、使節団

も、バイアのためにそこにやってきた。[47. a] 彼はバイト・アルマクデイスの中庭の、岩〔のドーム〕に繋がる場所に座り、ドームの前に絨毯を敷いて、その上にクッションと椅子を置いた。そして彼は〔そこに〕座り、人々のためにアザーンを行った。彼らはその椅子やクッションの上に座った。彼の隣には様々な財物とディーワーンの書があった。彼はかつてバイト・アルマクデイスに居住し、そこを住まいとして使うことを考えていた。彼はそこに財物と人々を集めた。彼は教友のアブー・ハーズィム **Abū Ḥāzim** と語り合い、彼に質問し、彼に忠告した。彼はズフリーとも語りあった。

**ウナム・アルハイル・ラーピア・アダウィーヤ Umm al-Khayr Rābi' al-'Adawiya** : 彼女はその時代の著名な人々のひとりであり、彼女の正しさや神への奉仕に関する様々な善行は有名である。彼女は神に語りかける中で、「我が神よ、あなたはあなたを愛する心を、炎で焼き尽くされます」と言っていた。するとあるとき、彼女に叫び声が聞こえた。「我々はそのようにはしない。そうすれば汝は我々のことを悪く思うこともないであろう」

彼女の箴言には、「あなたがたが自身の悪行を隠そうとするように、自身の善行を隠しなさい」というものがある。

スフラワルディー **al-Suhrawardī** は『知識の贈り物 **'Awārif al-Ma'ārif**』の中で、彼女について次のように引用している。

私はあなたを、心の中の我が語り手とした  
私は私を座らせてくれる人に、我が体を与える  
そして我が体はその友に親しむ  
我が心の恋人は、心の中の我が親しき友なり

彼女の墓はオリーブ山の、イエスー彼に平安あれー昇天の場所の南側近くのザーウィヤの中にあり、階段によって彼女の方に下っていける。そこは人々に良く知られている場所で、参詣の目的地となっている。

女性たちの中には、ターイア **Ṭā'ia** やルバーバ **Lubāba**、その他多くの名前のわからない、バイト・アルマクデイスで神に奉仕する者たちがいる。

**スライマーン・ブン・タルハーン Sulaymān b. Ṭarkhān** : 彼はある人が次のように言っているのを聞いた。「私がバイト・アルマクデイスに入ったとき、私の魂は、私が〔そこから〕出ていくまで、私と一緒に入ってはこなかった」

**ムカーティル・ブン・スライマーン** : 彼はクルアーン解釈家であった。彼はバイト・アルマ

クデイスを訪れ、そこで 5 回の礼拝を行い、岩〔のドーム〕の南門の側に座った。すると彼のもとに多くの人々が集まって来て、彼から話を聞いてそれを書き留めていた。するとそこにひとりのベドウィンが、石畳の上にサンダルを乱暴に踏み鳴らしながら近づいてきた。ムカーティルはそれを聞くと、周囲にいる人々に「前を開けて下さい」と言った。人々が彼の前を開けると、彼は手をその人の方に伸ばし、声を大きくして言った。「足を踏みならす者よ、自分自身を慎みなさい。ムカーティルの魂がその手のうちにある方にかけて、お前が踏み鳴らしているのは、樂園の囲いの上に他ならない」

シャーフィイー—神よ彼を嘉したまえ—曰く、[47. b]「人は 3 つのものに頼っている。クルアーン解釈においてはムカーティル・ブン・スライマーン、そしてあと 2 人の者の言<sup>26</sup>に」

**イブラーヒーム・クルバーニー Ibrāhim al-Qurbāni** : 彼はバイト・アルマクデイスに居留した。彼のハディースは、イブン・マージャの書の中に入っている。

**アブドッラフマーン・ブン・ウマル・アウザーイー 'Abd al-Raḥmān b. 'Umar al-Awzā'i** : 彼はシャームのファキーフであり、知識と神への奉仕における長であった。彼はバイト・アルマクデイスを訪れ、岩が彼の後ろに来るところで 8 回のラクアの礼拝を行った後、5 回の礼拝を行った。彼曰く、「ウマル・ブン・アブド・アルアズィーズが、かつてこのようにしていたのである」彼は〔その他の〕参詣場所には行かなかった。

私（著者）は言うが、彼はベイルートに埋葬された。彼はハンマームに入っているときに亡くなった。

**スフヤーン・サウリー** : 彼は公正なるイマームであり、尊厳と節度と敬虔さを併せ持っていた。彼は〔アクサー・〕モスクを訪れ、集団礼拝の場所で礼拝した。また同地で岩〔のドーム〕にも行き、そこでクルアーンを読み通した。彼はバナナを 1 ディルハムで買い、岩のドームの影でそれを食べた後に言った。「ロバが飼葉を存分に与えられるときには、ロバの仕事が増やされるのである」そして彼は立ち上がって、彼の後ろにいた人が彼を憐れむまでに〔熱心に〕礼拝したと伝えられている。彼はバスラにて亡くなった。

**イブラーヒーム・ブン・アドハム Ibrāim b. Adham** : 彼はバルフの王の子孫のひとりである。彼は〔伝承において〕信頼に足るタービウーンであり、ザーヒドのひとりでもあった。彼はバイト・アルマクデイスを訪れ、岩〔のドーム〕で眠った。彼はシリアに住んだ。彼はタラブルス行政区の中の、ジャバラ Jabala の町で没した。彼の墓は同地で有名である。彼はル

---

<sup>26</sup> あとの 2 人とは、詩におけるズハイル・ブン・アビー・スルマー Zuhayr b. Abī Sulmā と、言葉におけるアブー・ハニーファ Abū Ḥanīfa のことを指す[UJ i, 427, 脚注 10]。

ーム al-Rūm で死んだとも言われている。

**ライス・ブン・サアド al-Layth b. Sa'd** : 彼はエジプトのウラマーであり、知識においてはマーリクにも並ぶ者であった。彼はスンナに従って、そこ（バイト・アルマクデイス）に 8000 ディーナールを持ちこんだので、彼にはザカートの義務はなかった。彼がその豊かな寛大さと敬虔さからくるものを果たさずして、1年を過ごすことなどなかった。

彼はバイト・アルマクデイスを訪れた。ライス曰く、「私がカリフであるアブー・ジャアフアルとバイト・アルマクデイスで別れたとき、彼は言った。『私はあなたの知性のすごさを見て感嘆致した。我が臣民の中にあなたのごとき者を定め給うた神に称賛あれ』

彼はエジプトで没した。彼の墓はそこにあることが分かっており、そこは有名である。

**ワキーウ・ブン・アルジャッラーフ Waki' b. al-Jarrāh** : 彼はバイト・アルマクデイスを訪れ、そこからメッカに向けてイフラムを行った。彼はハッジから戻る途中クダイド Qudayd<sup>27</sup> で没し、そこに埋葬された。

偉大なるイマームにして高貴なる導師、ムハンマド・ブン・イドリース・シャーフィイー **al-Imām al-A'ẓam wa al-Ḥabr al-Akram Muḥammad b. Idrīs al-Shāfi'ī** : 彼はバイト・アルマクデイスを訪れ、そこで礼拝して言った。「あなたがたの望むことを私に質問しなさい。神の書と神の使徒一神よ彼に祝福と平安を与え給えーのスンナの中から、あなたがたに教えてあげよう」ある者が彼に、「ムハッラム月の間に蜂を殺した者をどう思われますか？」と聞いた。すると彼は、「至高なる神は〈使徒がお前たちに授けた物は受けよ〉(Q59:7) と言われている」と言った。

[48. a] イブン・ウヤイナが、アブド・アルマリク・ブン・ウマルから、[さらに] フザイファから伝えて我々に語ったところでは、「神の使徒一神よ彼に祝福と平安を与え給えーは、『お前たちは私の死後にいる者たち、すなわちアブー・バクルとウマルを規範とせよ』と聞いた」またイブン・ウヤイナがミスアル Mis'ar から、[さらに] カイス・ブン・ムスリム Qays b. Muslim から、[さらに] ターリク・ブン・シハーブ Ṭāriq b. Shihāb から伝えて我々に語ったところでは、「ウマルはムハッラム月に蜂を殺した」

彼は 240 年にエジプトで没した。彼の墓は小カラーファ al-Qarāfa al-Ṣuḡhrā にあり、参詣の場所となっている。神が彼をして我らに益を与え給わんことを。

『栄光の喜び *Al-Uns al-Jalīl*』の著者（ウライミー）曰く、「3人のイマームについては、彼らのひとりがバイト・アルマクデイスを訪れたという証拠を、私は示すことができない」<sup>28</sup>

<sup>27</sup> メッカ近くの地名 [MB iv, 313-314].

<sup>28</sup> UJ i, 430.

アブー・ジャアファル・マンスール：彼は〔アッバース朝〕カリフである。彼が1回目の地震の後にバイト・アルマクディスに入ったことは、〔本書の〕第2章においてすでに述べている。

マフディー・ブン・アルマンスール **al-Maḥdī b. al-Manṣūr**：彼は〔アッバース朝〕カリフである。ヒシャーム・ガッサーニー **Hishām al-Ghassānī** は次のように伝えている。彼がバイト・アルマクディスを目指してシャームにやってきたとき、彼はダマスカスのモスクに入った。彼の書記であったアブー・アブド・アッラー・アシュアリー **Abū 'Abd Allāh al-Ash'arī** が、彼の側にいた。彼は言った。「アブド・アッラーよ、ウマイヤ家は3つのことで我々に先んじている。〔1つ目は〕この家、すなわちダマスカスのモスクだ。私は地上にこのようなものを知らない。〔2つ目は〕その高貴なるマワーリーだ。彼らが持っていたようなマワーリーのごとき人々は、我々にはいない。〔3つ目は〕ウマル・ブン・アブド・アルアズィーズだ。我々の中には、神かけて、彼のごとき者は決して存在しない」その後彼はバイト・アルマクディスを訪れ、岩〔のドーム〕に入ると言った。「アブド・アッラーよ、これが4つ目だ」

ムアンミル・ブン・イスマーイール・バスリー **al-Mu'ammil b. Ismā'il al-Baṣrī**：彼はバイト・アルマクディスを訪れ、人々が様々な場所で彼を取り囲む中で、彼らにもものを与えた。彼は非常な高齢であった。

ビシュル・ハーフィー **Bishr al-Ḥāfī**：彼は神の道を歩む者のひとりであった。ある人が彼に、「なぜ正しき人々はバイト・アルマクディスを喜ぶのでしょうか？」と言ったとき、彼は言った。「それはそこが彼らの方に向かっていくからであって、魂がそこで高く上っていくからではない」また彼は、「私にとって現世の喜びと言え、天の下でバイト・アルマクディスの金曜モスクにこの身を投げ出すことがあるばかりである」

ズー・アンヌーン・ミスリー **Dhū al-Nūn al-Miṣrī**：彼は善良で、高名な人である。彼はバイト・アルマクディスを訪れて言った。「私はバイト・アルマクディスの岩のもとで、あらゆる孤独な反抗する者と、あらゆる従順な従う者と、あらゆる恐れ逃げまどう者と、あらゆる望み求める者と、あらゆる満たされた豊かな者と、あらゆる愛情深く謙遜な者を見た」また曰く、「私はこれらの言葉が、神がその被造物を僕として従えることの源なのであると思う」

サリー・サカフィー **Sarri al-Saqafi**：彼はバイト・アルマクディスを訪れた。彼曰く、「私はラムラからバイト・アルマクディスへと出立したのだが、〔48. b〕途中ある丘に、水が流れ

植物の茂っているところを通りがかった。そこで私は座って、その植物を食べ水を飲んだ。私は独り言を言った。『私が現世で飲み食いすることを許されたものとは、まさしくこれであろうよ』するとそのとき私はある大きな声を聞いた。『サッリーよ、この値はどこから、ここにいるお前のもとにもたらされたものだと思っているのか』

**ムハンマド・ブン・カッラーム Muḥammad b. Karrām** : 彼は神学者であり、高貴な人々の集団が彼の血縁である。彼はバイト・アルマクディスに居住していた。彼はイエスの揺り籠の側にある柱のもとで、説教を行うために座っていた。彼のもとには多くの人々が集まった。その後彼は人々に言った。「信仰とは言葉を話すことである。ゆえにバイト・アルマクディスの民はそれを棄てたのである」

彼はある夜に〔バイト・アルマクディスにて〕亡くなり、彼がそこにいて学問を行っていた、イエリコ門に埋葬された。

**サーリフ・ブン・ユースフ Ṣāliḥ b. Yūsuf** : 彼は 90 回ハッジを行い、バイト・アルマクディスの岩〔のドーム〕からイフラームして、それぞれのハッジに歩いて向かったと言われている。彼は俗世から離れ神にすべてを委ねた状態で、タブーク Tabūk の荒野に入った。

彼はラムラで亡くなった。彼の墓では雨乞いが行われており、またそこでの祈願は聞き届けられる〔と言われていた〕。しかし今日では、ファランジュがこの地を長期間占領したために、彼の墓〔の場所〕がわからなくなっている。

**バクル・ブン・サフル・ディムヤーティー Bakr b. Sahl al-Dimyāṭī** : 彼はハディース伝承家であった。彼はバイト・アルマクディスを訪れた。人々は彼のために 1000 ディーナールを集め、彼にクルアーン解釈を語ってもらった。

**アフマド・ブン・ヤフヤー・バグダーディー Aḥmad b. Yaḥyā al-Baghdādī** : 彼はメッカからバイト・アルマクディスに向かい、やってきたことを後悔したと言われている。彼は言った。「私はメッカにおける 10 万回分の礼拝を捨ててしまった。ここでは 2 万 5000 回分の礼拝だというのに。メッカでならば、タワーフを行い礼拝し居留する者のために 2 万の恩寵が下ってくるというのに」そして彼はメッカへと出立しようとした。すると彼は預言者一神よ彼に祝福と平安を与え給え—の姿を見た。預言者は彼に、彼の身に起こった〔バイト・アルマクディスの〕美点について語った。預言者一神よ彼に祝福と平安を与え給え—は彼に言った。「ここにも恩寵は下ってくるし、ここには恩寵が溢れているのだ。よしんばこの場所に偉大な箇所がひとつもなかったとしても、一彼はここで、ミーラージュのドームのところにあるイスラーの場所を手で指し示した—私はそこにイスラーしたのであるから」そこでその人(バグダーディー)



は死ぬまでクドスに滞在した。この話は 341 年のラジャブ月のことであった。

シャイフ・サッラーマ・ブン・イスマーイール **al-Shaykh Sallāma b. Ismā'il** : 彼はバイト・アルマクデイスの人々のひとりであった。彼は盲目で、作家でもあった。彼は、[49. a] 至高なる神が彼に特別にお授けになった心の在り家や澄明な精神、豊かな記憶力のゆえに、彼の時代においてまたとなき人物であった。

シャイフ・アルイスラーム・アブド・アルワーヒド・ブン・ムハンマド・シーラーズィー **Shaykh al-Islām 'Abd al-Wāḥid b. Muḥammad al-Shirāzi** : 彼は当時のシリアのシャイフであった。彼はシャームを訪れた後、バイト・アルマクデイスに住んだ。彼は 2 度、ヒドルと面会した。彼らは互いに心のままに語り合った。

イブン・アルカズウィーニー **Ibn al-Qazwini** : 彼はザーヒドであった。彼には多数の著作がある。彼は 480 年にダマスカスで没し、サギール門の墓地に埋葬された。

アブー・アルファトフ・ナスル・マクデイスィー・シャーフィイー **Abū al-Faṭḥ Naṣr al-Maqdisī al-Shāf'i** : 彼はシリアにおけるこの学派のシャイフであり、隠遁と神への奉仕を行う傍ら、様々な著作を著している。彼はクドスに長い間居住していた。彼はラフマ門の側にあるザーウィヤに居住していたが、そこは彼がそこに居留していたがゆえに、ナースィリーヤという名で知られていた。そこは後に、ガザーリーがそこに居留したことのゆえに、ガザーリーヤという名で知られるようになった。彼は後にダマスカスを訪れてそこに住み、そこで名声を得た。ガザーリーがシリアにやってきたとき、ガザーリーは彼のもとに集い、彼に教を請うた。

彼は 490 年にダマスカスで没し、サギール門に埋葬された。

ファキーフ・アブー・アルファドル・アター **al-Faqīh Abū al-Faḍl 'Aṭā'** : 彼は法学と知識において、神聖なるクドスにおけるシャーフィイー派のシャイフであり、タリーカにおいてはスーフィーのシャイフであった。

イマーム・アブー・アルマアーリー・ムシャッラフ・ブン・アルムラჯジャー **al-Imām Abū al-Ma'ālī al-Musharraf b. al-Murajjā** : 彼はバイト・アルマクデイスのウラマーのひとりであった。彼にはバイト・アルマクデイスとかの岩のファダーイルと、そうしたものに関する様々な物語や伝承、モスクやシリアのファダーイルについての書があるが、それは有益な書である。

マッキー・ブン・アブド・アッサッラーム・アンサーリー・ラムリー・シャーフィイー **Makki b. 'Abd al-Sallām al-Anṣārī al-Ramlī al-Shāfi'ī** : 彼はハーフィズでもあった。彼のもとにはエジプトやシリア、その他の地域からも、ファトワーの要請が来ていた。彼は世界を広く旅しており、多くの苦労や苦難、眠れぬ夜を経験している。また彼は神を畏れる人であった。

492年にファランジュがバイト・アルマクディスを奪ったとき、彼らは彼を捕虜として捕えて町に送り、彼の身代金として1000ディーナールを要求した。しかし彼らは、彼らがムスリムのウラマーであり、誰も彼の身代金の支払いを申し出ないとわかると、アンターキーヤ門のところで彼を石打ちにして殺した。彼らはバイト・アルマクディスで彼を殺害したとも言われている。神が彼を憐れみ給わんことを。

アブド・アルジャッバール・アブー・アルカースィム・ラーズィー・シャーフィイー **'Abd al-Jabbār Abū ak-Qāsim al-Rāzī al-Shāfi'ī** : 彼はイスファハーンのジュナイド **al-Junayd** のもとで法学を学んだ後、[49. b] バグダードを祖国とした。後にバイト・アルマクディスに移住し、至高なる神への忠誠と隠遁の道に入った。彼はファランジュが492年にクドスを奪った際、彼らの手にかかって殉教した。神が彼らを呪い給わんことを。

イマームにしてイスラームの証、ザイン・アッディーン・アブー・ハーミド・ガザーリー **Zayn al-Dīn Abū Ḥāmid al-Ghazārī** : 彼の時代の終わりには、シャーフィイー派の人々の中に彼のような人物はいなかった。彼はその業績をトゥース **Ṭūs**<sup>29</sup> で始めた。その後彼はニーシャープールを訪れ、前述したその地の権威ある人々の一員となった。彼はある期間ダマスカスに滞在し、その後バイト・アルマクディスに移住して、神への奉仕と、マシュハドや偉大なる各所への参詣に努めた。彼はバイト・アルマクディスにて、数々の著名な著作を著した。彼はクドスにて、『宗教諸学の再興 *Ihyā' 'Ulūm al-Dīn*』を著したとも言われている。彼は前述の通り、ラフマ門の側にあったザーウイヤに居住した。そのザーウイヤは〔今日では〕すでに忘れ去られている。彼はその後トゥースに戻り、505年にそこで亡くなった。

イマーム・ハーフィズ・アブー・ファドル・ムハンマド・ブン・ターヒル・カイラワーニー **al-Imām al-Ḥāfiẓ Abū al-Faḍl Muḥammad b. Ṭāhir al-Qayrawānī** : 彼は世界を広く旅した人物であり、聡明さと記憶力、優れた著作、美しい筆跡を併せ持っていた。彼はバイト・アルマクディスで生まれた。彼にはハディースその他に関する様々な著作や編纂物があり、それらは彼の知識の豊かさの証明となっている。彼はバグダードに旅した後、バイト・アルマクディスに戻ってきた。彼はメッカに向けてそこからイフラームを行い、その後バグダードに戻った。彼はそこで没し、その西側にあるアティーカ墓地 **al-Maqbara al-'Atīqa** に埋葬された。彼の息

<sup>29</sup> ホラーサーン地域にある町[MB iv, 49-50]。

子であるアブー・ザルア・ターヒル **Abū Zar'a Ṭāhir** は、高貴なイスナードと多くの伝承を聞いていることで有名な人々のひとりである。

**アブー・アルガナーイム・ムハンマド・ブン・アリー・ブン・マイムーン・クラシー** **Abū al-Ghanā'im Muḥammad b. 'Alī b. Maymūn al-Qurashī** : 彼は敬虔にして善良で、信頼に足る人物であった。彼はシリアに旅をして、バイト・アルマクデイスにてハディースを収集した。彼はフッラ **al-Ḥulla** で亡くなり、クーファに埋葬された。

**タルスースィー・ムハンマド・アンダルスィー** **al-Ṭarsūsī Muḥammad al-Andalsī** : 彼はバイト・アルマクデイスを訪れ、[そこから] ハッジした。彼はイマームであり、ウラマーであり、ザーヒドでもあった。彼はシリアに住んだ。

**アブー・アブド・アッラー・ムハンマド・ダイバージー** **Abū 'Abd Allāh Muḥammad al-Daybāji** : 彼は、ウスマーン・ブン・アッファーンの子孫のひとりであったダイバージーの子孫である。彼（ダイバージー）の母親は、ファーティマ・ビント・アルハサン・ブン・アリー・ブン・アビー・ターリブである。彼はその美しさのゆえに「ダイバージー」と名付けられた。というのも、[50. a] 彼の顔はダイバージャ（錦）のように [美しく]、神の使徒一神よ彼に祝福と平安を与え給えーの顔に似ていたからである。

彼（ダイバージー）はメッカの出であるが、バイト・アルマクデイスを訪れ、そこに居住した。その後彼はバグダードに住んだ。彼は優れた法学者であり、預言者の言行に詳しく、真実を語る者であった。彼はムスタファー、あるいは「彼に似たる者」とも名付けられたと言われている。

**アブー・アルハサン・アリー・ラバイー・マクデイスィー** **Abū al-Ḥasan 'Alī al-Raba'ī al-Maqdisī al-Shāfi'i** : 彼はシャイフ・ナスル・トゥースィー **al-Shaykh Naṣr al-Ṭūsī** や、アブー・バクル・ハティーブ **Abū Bakr al-Khaṭīb** からハディースを聞いた。その後彼は西方地域に入り、荒野に住んだ。

**イマーム・アブー・バクル・ブン・アルアラビー** **al-Imām Abū Bakr b. al-'Arabī** : 彼は有名なハーフィズであった。彼は父親とともに東方地域に入り、バイト・アルマクデイスを訪れた。彼は [そこで] 多くのウラマーと会った。

**アブー・バクル・ジュルジャーニー** **Abū Bakr al-Jurjānī** : 彼とアブー・サイード・サムアーニーは、彼らそれぞれの国からバイト・アルマクデイス参詣を志した。彼らは [ともに] 出

立し、イラクに戻るまで離れなかった。

彼は正しきシャイフであり、神の啓典を実行する人であった。彼は常にズィクルを唱えており、またよく悲しみに耽って泣いていた。イブン・サイード・サムアーニーが彼の正しさについて言っているところでは、「彼はなんとすばらしい同行者であったことか。彼は何年もメッカの近くに滞在し、偉大なるシャイフたちに仕えた」

**アブー・サイード・サムアーニー Abū Sa'id al-Sam'ānī** : 前述の人物である。彼はシャーフイー派であったと言われている。彼には数多くの著作がある。その中には、『旅人の贈り物 *Tuḥfat al-Musāfir*』や『孤高により *'An al-'Uzla*』がある。

**シャイフ・ザーヒド・アブー・アブド・アッラー・クラシー al-Shaykh al-Zāhid Abū 'Abd Allāh al-Qurashī** : 彼は様々な目に見える形での奇跡や、栄光ある輝かしき偉業の持ち主である。エジプトの民は、彼に関する尋常ならざる事ごとを語っている。

彼はバイト・アルマクデイスを訪れ、死ぬまでそこに滞在した。彼の墓は、マーマラー墓地にあることが分かっており、そこは参詣の場所となっている。

彼の〔墓の〕隣には、シャイフ・シハブ・アッディーン・ブン・ルスラーン **al-Shaykh Shihāb al-Dīn b. Ruslān** の墓がある。彼ら兩名の墓の間で行った祈願は聞き届けられるということが確かめられている。また彼らの〔墓の〕近くには、シャイフにして学識あるザーヒド、アブー・イスハーク・イブラーヒーム・ブン・ジャマーア・シャーフイー **Abū Ishāq Ibrāhīm b. Jamā'a al-Shāfi'i** の墓がある。

またマーマラー墓地には、イマーム・ウマル・ブン・イブラーヒーム・ワースィティ **al-Imām 'Umar b. Ibrāhīm al-Wāsiṭī** の墓が、カブキーヤ **al-Kabkiya**<sup>30</sup> の南側にある道の側にある。彼の〔墓の〕近くにはある人物の墓があるが、我々はその墓の主の名前や経歴を知らない。ある人が馬に乗ってその墓の側を通り過ぎたとき、〈彼らは自分の行ったことを目の当たりに見出すであろう。主は誰一人として不当に扱い給うことはない〉(Q18:49)を読んだ。するとその墓の方から「我々は見出した、我々は見出した」という返事があって、その人もその声を聞いた。ある人が語り伝えているとことでは、[50. b] その人はその墓の上にあった石を取り、それを別の場所に持って行った。次の日になると、彼はそれらの石が元通りにその墓の上にあるのを見た。〔そこには〕そうした奇跡が数多くあった。またそこ（マーマラー墓地）には、ビスターミーヤのシャイフでありファキールであった、シャイフ・アリー・ビスターミー **al-Shaykh 'Alī al-Biṣṭāmī** の墓がある。

<sup>30</sup> マーマラー墓地にあるドームを備えたザーウィヤ。アミール・アラー・アッディーン・アミール・アイドゥグディー・ブン・アブド・アッラー **al-Amīr 'Alā' al-Dīn Amīr Aūdughdī b. 'Abd Allāh** (d. 688/1289) という人物に由来する [UJ ii, 123]。

ラフマ門の墓地には多数の聖者たちや正しき人々〔の墓〕があり、彼ら〔全員〕のことを述べていると長くなってしまふ。神が彼らをして我々に益を与え給い、彼らを助けることで我々を助け給い、〔復活の日に〕彼らとともに我々を集め給わんことを。アーメン。

## 第8章：ヒドルー彼に平安あれーの物語と、バイト・アルマクディスにある彼の位高き住まい

多くのウラマーが、彼は預言者であり生きていて、との結論に達している。彼は毎週金曜日には、ハラーム・モスク、メディナのモスク、クバー・モスク **Masjid Qubā**、バイト・アルマクディスのモスク、トゥール・モスク **Masjid al-Ṭūr** の5つのモスクで礼拝している。また彼は、毎週金曜日にはきのこセロリでできた食事を取り、あるときはザムザムの水を飲み、またあるときはバイト・アルマクディスにあるソロモンの井戸の水を飲んでいる。また彼は、シロアムの泉で沐浴している。

イブン・アビー・ダーウード曰く、ヒドルとイルヤースは、ラマダーン月にはバイト・アルマクディスで断食し、毎年マウシムの時期には姿を見せる。

彼（イブン・アビー・ダーウード）が、彼の〔父方の〕おじであるハーフィズ・アブー・アルカースィム、さらにはアリー・ブン・アビー・ターリブに由来するイスナードによって曰く、「私がカアバの周りを歩いていると、ある男が『耳から耳へと伝わることに煩わされていない者よ、問題に浸かっていない者よ、必要なことを求めるために、鎧を着込んだ者たちを急ぎ送りこむ必要のない者よ。あなたの赦しの涼やかさとあなたの恩寵の甘さを私に与えたまえ』と言いながら、カアバの幕に縋りついていていた」アリー—神よ彼を嘉したまえ—が、「その言葉をもう一度言って下さい、神の僕よ」と言うと、その男は「それらを聞いていたのですか？」と言った。アリーが「はい」と言うと、彼は「ヒドルの魂がその手のうちにある方にかけて」と言ったが、彼こそはヒドルー彼に平安あれーであった。いかなる僕も、定められた礼拝それぞれの最後にそれらの言葉唱えれば、その罪が赦される。たとえそれがアーリジュの砂地 **Raml 'Ārij** や、海の泡、木の葉のごとき〔数え切れないほど多くの〕ものであったとしても。

アブー・フライラが預言者ムハンマドより伝えて曰く、「ヒドルが『ヒドル（緑）』と名付けられたのは、彼が白い皮〔の敷物〕の上に座っていたとき、それが彼の〔体の〕下で揺れ動いて緑になったからである」ブハーリーもこれを伝えている。

[51. a] アブー・ハフス・ヒムスィー **Abū Ḥafṣ al-Ḥimṣī** 曰く、「私はバイト・アルマクディスで礼拝するために、夜半少し前にそこに入った。するとそこに、時にひそやかになる声が聞こえてきた。その声は、『我が主よ、私は貧しきものです。私は隠れ家を求めて怯える者です。我が主よ、我が名を取り変え給うな。我が体を変え給うな。我が試練を苦しめ給うな』と言っ

ていた。私は怯えながら〔そこから〕出た。すると私はモスクの門のところで、人々に行き当たった。彼らが『どうかしたのですか、アブド・アッラーよ』と言うので、私は今見たことを彼らに話した。すると彼らは言った。『恐れることはありません。それはヒドルー彼に平安あれ—です。今は彼の礼拝の時間なのですよ』

正しきシャイフ、アブー・ナスル・バンディージー **Abū Naṣr al-Bandījī** 曰く、「私はヒドルに、『あなたはどこで礼拝しているのですか？』と尋ねた。すると彼は、『[カアバにある] ヤマーニーの柱 **al-Rukn al-Yamānī** の側である。私は、神が私に定め給うた通りにその後しばらく〔そこで〕過ごし、それからメディナにてズフルの礼拝をする。それから私は、神が私に定め給うた通りにその後しばらく〔そこで〕過ごしてから、バイト・アルマクディスにてアスルの礼拝を行う』

正しきファキーフ、アブー・アルムザッファル・アブド・アッラー・ブン・ムハンマド・ジヤイヤーム・ハルビー・サマルカンディー **Abū al-Maẓaffar ‘Abd Allāh b. Muḥammad al-Jayyām al-Ḥarbī al-Samarqandī** 曰く、「ある日私はある洞窟に入り、道に迷った。するとそこにヒドルが現れ、行くべき方向を教えてくれた。そこで私は彼と一緒に歩いた。私が『あなたは何と言うお名前なのですか』と言うと、彼は『アブー・アルアッパースといいます』とやった。私は彼にひとりの連れがいることに気づき、『あなたは何と言うお名前なのですか』とやった。彼は『セムの子イルヤース **Ilyās b. Sām** といいます』とやった。私は言った。『至高なる神があなた方おふたりを憐れみ給わんことを。あなた方はムハンマド—神よ彼に祝福と平安を与え給え—にはお会いになったのですか』彼らはいとやった。そこで私は言った。『至高なる神の栄光とお力にかけて、何か私が伝えるべきことをお聞かせ下さい』すると彼らは言った。『我々は神の使徒—神よ彼に祝福と平安を与え給え—が次のように言うのを聞いた。「信徒の中で、神よムハンマドに祝福を垂れ給えと言う者には、神がその者の心や光に気づいて下さる』』

彼は様々な伝承を語って言った。「また私は、彼ら 2 人が次のように言うのを聞いた。『かつてイスラエルの民の中にサミュエルという預言者がおり、神は彼の敵に対して彼に助けを与えておられた。あるとき彼が敵の軍の中に出て行くと、彼らは言った。「こいつは魔術師で、我々の目を眩ませ我々の軍隊をだめにしようとしているのだ。こいつを海に放り込もう」すると彼（サミュエル）は仲間たちに言った。「我々はどうすべきだろうか。神よムハンマドに祝福を垂れ給え、と言って攻撃せよ」彼らがそのように言いながら突撃すると、彼らの敵は海に落ち、皆溺れてしまった』ヒドルとイルヤース—彼ら兩名に平安あれ—は言った。『そうしたことは我々の目の前で起こったのである』

曰く、「また私は、彼ら 2 人が次のように言うのを聞いた。『我々は神の使徒—神よ彼に祝福と平安を与え給え—が次のように言うのを聞いた。「神よムハンマドに祝福と平安を与え給えと言う者の心は、ものが水で清められるように、不浄から清められる」また神の使徒—神よ彼

に祝福と平安を与え給え—はミンバルの上で言った。「神よムハンマドに祝福を垂れ給えと言う者には、神が彼のために 70 の恩寵の門を開いて下さる」』

曰く、「また私は、彼ら 2 人が次のように言うのを聞いた。『預言者—神よ彼に祝福と平安を与え給え—は言った。「信徒たちのうち、神よムハンマドに祝福と平安を与え給えと 7 回言う者は、神に愛される」しかしもし彼のことを嫌うならば、神に愛されることもない。栄光ある神は、彼を愛しておられるからである』

曰く、「また彼ら 2 人は、預言者—神よ彼に祝福と平安を与え給え—のもとにやってきたある男のことを言った。『その男は言った。「神の使徒よ、私の父は偉大なシャイフであります、あなたに会いたがっております」彼が「父上を私のもとに連れてきなさい」と言うと、彼は「父は目が見えないのです」と言った。すると彼は言った。「父上に、7 週間神よムハンマドに祝福と平安を与え給え、と唱えるように言いなさい。そうすれば夢の中で私に会うことができ、私からハディースを伝えることができるだろう」はたして彼がそのようにすると、彼は夢の中で神の使徒に会い、ハディースを伝え聞いた』

曰く、「また私は、彼ら 2 人が次のように言うのを聞いた。『我々は神の使徒—神よ彼に祝福と平安を与え給え—が次のように言うのを聞いた。「お前たちが座に座っているとき、慈愛深く慈悲あまねき神の御名において、神よムハンマドに祝福を与えたまえ、と言うなら、神はお前たちに天使をお付け下さり、災いを遠ざけて下さるので、お前たちは復活するときも災いに苦しむことはなくなるだろう。またお前たちが立ち上がるときに、慈愛深く慈悲あまねき神の御名において、神よムハンマドに祝福を与えたまえ、と言うなら、人々がお前たちを苦しめることもなくなり、その天使がそうしたことからお前たちを遠ざけてくれるであろう』

彼（ヒドル）の居場所については、高貴なるアクサー・モスクにそのマカームがある。[『ファダーイル・バイト・アルマクデイス』の著者である] ムシャッラフが「バフバフと名付けられた岩に関する章、それは預言者—神よ彼に祝福と平安を与え給え—のドームの隣にある西のマカームのことであり、そこがヒドルの場所である。彼ら兩名に平安あれ」の章において、次のように述べている：「この場所で行われた祈願は聞き届けられる。そこや、モスクのその他のところで行われた祈願は聞き届けられる」<sup>31</sup>

『栄光の喜び *al-Uns al-Jalil*』の著者（ウライミー）曰く、「この場所は祝福されており、モスクの一部である。そこは岩〔のドーム〕の下の方にあり、鉄門に向かい合っている。そこからは、岩〔のドーム〕の中庭に続く階段が付けられている。そこは人々によく知られている場所である。この場所の後方には、モスクの中庭に描かれたミフラブがあり、そこは「魂の洞窟」として知られており、[52. a] 参詣の目的地となっている」以上<sup>32</sup>。

私は言うが、私はかつて夢でヒドル—彼に平安あれ—に会ったことがある。彼は私のために、

<sup>31</sup> FBM-IM 193-194.

<sup>32</sup> UJ ii, 59.

数々の祈願を行ってくれた。私はそれらが叶えばよいと思う。また私の身に起きた奇跡の中には、次のようなものがある。私はイブン・シャーヒーブン **Ibn Shāhin** にその夢の解釈をしてもらおうと思った。彼は啓典を開き、「ヒドルー彼に平安あれーを見た者は、何不自由なく安全に遠くに旅することができーあるいはハッジできー、長生きすることができる」という彼の言葉に注意した。私は神がこの夢の解釈を、バイト・アルマクデイス参詣に際して、その後はハッジに際してお与え下さるように、またかの3つのモスクのうちのひとつにて死ぬるようにと望む。アーメン。

### 結び：シリアの物語、その美德と偉大さ、その場所の神聖さ

先人たちは、シリアを5つの部分に分けている。1つ目はパレスチナであり、その地域の中心はラムラである。2つ目はハウラーン **Hawran** であり、その最も大きな都市はティベリアスである。3つ目はグーダ **al-Ghūṭa** で、その最も大きな都市はダマスカスである。4つ目はヒムスで、この行政区の中にはサラミーヤの町がある。5つ目はキンナスリーン **Qinnasrīn** で、その最も大きな都市はアレppoである。ウラマーは、シリアはメッカとメディナに次いで優れた地域であるということに一致している。

クルアーンの章句に見られるそこの美点について言えば、至高なる方のお言葉、〈そして我らは、弱いと見られていたこの民に、我らが祝福した土地を東西に渡って継がせた〉(Q7:137)がある。すなわち、シャームの東西ということである。また〈我らはイスラエルの子らのために、優れた居住地を備えてやった〉(Q10:93)というのも、シリアのことである。

スンナの中には次のようなものがある。イブン・ウマルが預言者ムハンマドより伝えて曰く、「良きものが10あれば、10分の9はシリアにあり、〔後の〕1つが残りの地域にある。シリアの民が腐敗してしまえば、お前たちの中に良き者はいなくなる」

タバラーニーが彼の『大ハディース集 **al-Muʿjam al-Kabīr**』の中で、アブドッラー・ブン・マスウードが教友より伝えたものを伝えている。「神は良きものを10に分け給い、10分の9をシリアに、残りのものを大地のその他のところに定め給うた。また神は悪しきものを10に分け給い、そのうちの1つをシリアに、残りのものを大地のその他のところに定め給うた」

神の使徒一神よ彼に祝福と平安を与え給えー曰く、「お前たちはシリア、イエメン、イラクのジュンドに住むことになるだろう。お前たちはシリアに行くがよい。そしてそれを拒む者はイエメンに行かせ、彼を裏切る者と戦わせるがよい。まことに神は私に、シリアとその民のことを保証して下さった」

アリーが預言者ムハンマドより伝えて曰く、「アブダール **al-Abdāl** はシリアにいる。彼らは40人であり、〔その中の〕ひとりが死ぬごとに、神はその地位を別の者に置き換え給う **abdala**。



彼らのゆえに雨乞いがなされ、彼らのゆえに敵どもに対する勝利が与えられ、彼らのゆえにシリアは苦しみから遠ざけられている」アフマドがこれを、彼の『ムスナド』の中で伝えている。

イブン・アッバースが預言者ムハンマドより伝えて曰く、「メッカは神聖さのしるし、メディナは宗教の源泉、クーファはイスラームの天幕、クーファ<sup>33</sup>は神に仕える者たちの夜明け、シリアは敬虔なる人々の故郷、エジプトは悪魔の巢にしてその洞窟、その座である」以下、例のハディース。

イブン・ジャッワラ・アズディー *Ibn Jawwāla al-Azdī* 曰く、「私は言った。『神の使徒よ、存在すべき国を私のために選んで下さい。もしあなたが私の前に生き残って下さるのでしたら、私はあなたのお側以外を選びはしないのですが』すると彼は『お前はシリアに行くがよい』と言った。さらに彼は、私がシリアを嫌がっている風なのを見ると言った。『お前は、神がシリアにおっしゃっていることを伝え聞いていないのか？ 神はシリアに、「シリアよ、汝は我が大地、我が諸国の中から私が選び出したものである。私は汝の中に、我が被造物の中の優れたものたちを入れる」とおっしゃっているのだ。まことに神は私に、シリアとその民のことを保証して下さい』これは神の使徒—神よ彼に祝福と平安を与え給え—が、シリアを他に勝るものとして選び出し、そこに居住することを選び、その住人となるために選び出したという証である」『シリアに住むことに対するイスラームの民の熱望 *Targhīb Ahl al-Islām fī Suknā al-Shām*』の著者曰く、「我々は、こうしたことがこの証の通りであるということを見ている。シリアの民と、彼らのそれ以外の者との繋がりを見た者は、彼らの間に、彼らがより分けられ選び出されたものであるということを示す違いを見出すのである」

アター・フラーサーニー曰く、「私が移住することを考えていたとき、私はメッカ、メディナ、クーファ、バスラ、ホラーサーンに住む啓典の民に助言を請うて、『私は家族を連れてどこに居留するべきでしょうか』と言った。すると彼らは皆、『あなたはシリアに住むべきだ』と言った」

カアブ・アルアフバールが次のように伝えている。「トラーの第 1 巻には、『ムハンマドは選び出された我が僕なり。彼には荒さや粗暴さはなく、市場の中で叫び声を上げることも、悪い行いを犯すこともない。彼は罪を赦されている。彼はメッカにて誕生し、タイバ（メディナ）にヒジュラし、シリアを支配する』とある」イブン・アブド・アッサラーム曰く、「カアブ・アルアフバールの語ったことは、実際に見聞されたことに一致している。ゆえに、まさしくイスラームの王の力と彼の軍隊の大部分はシリアにいるのである」

カアブ・アルアフバール曰く、「栄光ある至高なる神は、ユーフラテスからアリーシュに至るシリアを祝福し給うた」カアブは、祝福はシリアにあると指摘している。「至高なる方の〈我らが周囲を祝福した〉(Q17:1) というお言葉は、〔抽象論として〕神がある場所を別の場所以

<sup>33</sup> 底本（C写本）、B写本ともにこの部分も「クーファ *al-Kūfa*」となっているが、IA等に引用されているの同一のハディースでは「バスラ *al-Baṣra*」となっている [IA ii, 137]。

上に特別なものとされたということではなく、シリアの境界全域を含んでいるのである。シリアとその民が、神のみもとでこの位置とこの地位におり、神の守護と庇護の中にいるとき、ダマスカスはバイト・アルマクディスの次にシリアの諸地域の中で良いところであるという様々な証明がなされている」またそこはノアの館であり、そこでは釜が煮立っていると言われている。

かくのごとく知れ。ダマスカスとその周辺には、様々な優れた場所がある。その中には、その偉大なるモスクがある。また至高なる神からは、次のように伝えられている。神はカシオン山 **Jabal Qāsiyūn** に向かって言われた。「私は汝の城塞の中に一すなわち汝の中央に一、神に仕えるための家を建てよう」

カターダより、至高なる方の〈イチジク〉(Q95:1) というお言葉について、これはダマスカスの金曜モスクのことであると伝えられている。クルトゥビー曰く、「〈イチジク〉とはダマスカスのモスクのことである。そこはかつてフードー彼に平安あれーの果樹園であり、そこにイチジクがあったからである」

ウスマーン・ブン・アビー・アーティカ **‘Uthmān b. Abī ‘Ātika** 曰く、「ダマスカスのモスクのキブラは、預言者フードー彼に平安あれーの墓であったが、もとは教会であった。ムスリムたちがダマスカスを征服したとき、彼らはキリスト教徒と、その半分をムスリムたちのモスクとし、もう半分をキリスト教徒の教会とすることで合意した。そこは、カリフ＝ワリード・ブン・アブド・アルマリクの頃までそのようであったが、彼はその残りの部分をキリスト教徒より取り上げ、その全域をモスクとして美しく建設し直した。そのようなところは以前にはないものであった。彼はその整備に、1つに2万8000ディーナール入っている箱を400箱費やした。カリフはダマスカスの民に言った。『ダマスカスの民よ、お前たちは、お前たち以外の者に対し4つのものを誇っている。すなわちお前たちの気候と水、果物、ハンマームのことである。そして私は、お前たちに5つ目のものを付け加えてやろう。それがこの金曜モスクである。しからば神を称賛し、このモスクを讃え、感謝を捧げ祈願する者として〔これに〕向かうがよい』」

[53. b] ファラズダク **al-Farazdaq** 曰く、「ダマスカスの民はその国の中に、楽園の城のうちのひとつを持っている。すなわち、ウマイヤ・モスク **Jāmi‘ al-Umawī** のことである」

アフマド・ブン・アルジャウズィー曰く、「シリアの民は、彼らが見ているモスクの美しさのために、楽園を熱望する気持ちが強い」

そこ（ダマスカスのモスク）での礼拝と美德については、スフヤーン・サウリー曰く、「ダマスカスのモスクでの礼拝は、3万回分に相当する」

次のように伝えられている。ワースィラ・ブン・アルアスカゥは、ジャイルーン **Jayrūn**<sup>34</sup> へ

<sup>34</sup> ダマスカスにある土地の名前。ダマスカスのモスクの東門はジャイルーン門とも呼ばれる [MB ii, 199]。

と通じるモスクの門より出て行った。すると彼はカアブ・アルアフバールに出会った。カアブは彼に、「どちらに行かれるのか」と言った。彼が「私は礼拝するためにバイト・アルマクデイスに行きたいのです」と言うと、カアブは言った。「いらっしやい、私があなたに、このモスクの中にある場所で、そこで礼拝した者はバイト・アルマクデイスで礼拝したのと同様になる場所を教えてあげよう」そして彼はアスガル門の間にある突き出た部分、すなわち西側のアーチにつながっている部分にやってきて言った。「この 2 つの間で礼拝する者は、バイト・アルマクデイスにて礼拝するのと同様である」ワースィラ曰く、「神かけて、そこはまさしく私の座であり、我が民の座であった」

そのモスクの中にある参詣すべき場所の中には、ザカリヤの子ヨハネ―彼に平安あれ―の首がある。ワリード・ブン・ムスリムより次のように伝えられている。ある人が彼に尋ねた。「アブー・アルアッバースよ、あなたは、ザカリヤの子ヨハネの首はこのモスクのどこにあるとお聞き及びですか」彼は「私は、それはあそこにあると聞いている」と言って、東の角にある 4 番目の滴の滴る柱を手で指し示した。

カシオン山と、そこにある祝福されたマシュハドやその周囲にある遺跡、祈願が聞き届けられ慣習が破られると言われている場所について。カシオン山の西側では、アブラハム―彼に平安あれ―が生まれた。またそこでは、至高なる神がマリアの子イエスとその母に避難所を与え、彼らをユダヤ人から逃れさせ給うた。神の息吹イエスの砦に行き、沐浴して礼拝し祈願する者には、神は失望をお与えになることはない。イルヤースは彼の民の王から逃れてそこに隠れた。アブラハム、ロト、モーセ、イエス、ヨブもそこで礼拝した。彼らに祝福と平安のあらんことを。

ハッサーン・ブン・アティヤ曰く、「この山の王がロト―彼に平安あれ―を攻撃し、彼とその家族を捕虜にした。そこでアブラハム―彼に平安あれ―は彼を取り戻すため、数多くのバドルの民を率いて向かって行った。彼らはサフル・アルクウッド *Ṣakhr al-Qu'ūd* で相対した。[54. a] アブラハムは〔自軍を〕右翼、左翼、中央に編成した。彼はそうしたことを最初に行った人であった。彼らは互いに戦い、アブラハムが彼を打ち負かした。彼はロトとその家族を救出すると、ブルザ *Burza* にあるかの場所に行き、そこで礼拝し、そこをモスクとした。

ズフリー曰く、「アブラハムのモスクは、ブルザという村にある。そこで 4 回のラクアの礼拝を行った者は、母親から生まれた日のごとくに、その罪から逃れられる。〔そこで〕至高なる神に求めたことはなんでも、空しくなることはない」そこ（カシオン山）には、カインがアベルを殺したという「血の洞窟 *Maghārat al-Damm*」があり、祈願が聞き届けられる場所として知られている。ズフリー曰く、「もしも人々が血の洞窟の中にある美德を知っていたならば、彼らはもはやそこにいること以外、飲食を楽しむこともなくなるであろう」

アフマド・ブン・クサイル曰く、「私はカシオン山にあるアダムの子の血の場所に上って行き、強大にして栄光ある神にハッジを求めた。すると私はハッジできた。また私がジハードを

求めると、私はジハードでき、リバートに拠って戦うことを求めればそうできた。またバイト・アルマクディスで礼拝することを求めれば、私はそこで礼拝でき、売買で豊かになることを求めれば、それによって日々の糧を得ることができた。[あるとき] 私は夢の中で、自分がその場所に立って礼拝しているのを見た。そこには預言者〔ムハンマド〕一神よ彼に祝福と平安を与え給えーとアブー・バクル、ウマル、アベルがいた。私は〔アベルに〕言った。『唯一にして永遠なる方の正義にかけて、またあなたの父アダムの正義にかけて、またこちらの預言者の正義にかけて、私はあなたにお尋ねしますが、これはあなたの血なのですか？』すると彼は言った。『アダムと我が母イヴ、選ばれし人ムハンマド一彼らに神の祝福のあらんことを一の主よ、神は我が血を、あらゆる預言者た誠実なる者が助けを求めるところとなさった。神はそのみもとで祈願する者に応え給い、願い事をする者にはその願うものを与え給う。至高なる神は応え給い、この山を避難所、助けの得られる場所となさった。その後至高なる神はここにひとりの天使を任じ給い、その天使とともにその他の天使たちを、数々の星々をつけて置き、そこを守らせ給うた。この場所で礼拝することのみを求めてここにやってくる者は、受け入れられる』そのとき神の使徒一神よ彼に祝福と平安を与え給えーが私に言った。『すでに神はそうしたことを、寛大さと恩寵をもって行われた。私と私の 2 人の教友、そしてアベルは、毎週木曜日にここを訪れ、ここで礼拝している』』

この山の麓には、洞窟のある場所がある。[54. b] ある信頼に足る人々が次のように伝えている。彼らはその洞窟に入り、大きなタイルを引き剥がした。すると彼らは〔その下に〕洞窟を見つけた。その広さは 5 ズィラーウかそれ以上あった。その洞窟の北側にはイーワーンがあり、そこには 7 人の背の高い、経帷子に包まれたアラブ風の人々がいた。彼らはその人々に近づくことを恐れ、そのタイルを元通りに戻して帰っていった。

またそこには〔クルアーンで言及されているところの〕丘 al-rabwa もある。信頼に足る人々が伝えているところでは、〈安泰にして泉湧く丘〉(Q23:50) に行きたいと思う者は、かの 2 本の川のある上ナイラブ al-Nayrab al-A'lā<sup>35</sup> に行くがよい。つまるところ、ダマスカスの町はアブダールが最も多い町であり、人々や財産、ザーヒド、神に仕える者、モスクが最も多い町である。そこは人々のための砦である。

シリアの地にある、その特別さによって美德が伝えられている場所。その中にはパレスチナがある。あるハディースに、次のように伝えられている。「この大地の中で減らされるものも、シリアにあっては増やされる。シリアの中で減らされるものも、パレスチナにあっては増やされる」

カアブ・アルアフバールがある人に会い、彼に言った。その話を要約すると次のようになる。「あなたはおそらく、神が毎日 2 度目を向け給う軍管区の出身なのでしょう」その人が「その人々はどこの人々なのですか？」と言うと、彼は「パレスチナです」と言った。その人は〔そ

<sup>35</sup> ダマスカスにある村[MB v, 330]。

うです] と言った。

アブド・アルマリク・ジャザリー曰く、「シャームは祝福されたところであり、パレスチナは聖なるところである、バイト・アルマクデイスは聖なる聖地である」

アブー・フライラが預言者ムハンマドより伝えて曰く、「お前たちはラムラに一すなわちパレスチナに一留まれ。なんとなればそこは、至高なる神が〈我らは彼らに、安泰にして泉湧く丘を宿所として与えた〉(Q23:50) と言われたところの丘だからである」この話とこの伝承については、第7章で述べている。

またシリアにはリッドがある。ムスリムの『サヒーフ』には次のようにある。預言者一神よ彼に祝福と平安を与え給え—はそこについて言った。「反キリストは、リッドの門でマリアの子に殺される」

またそこにはアスカラーンとガザがある。イブン・アズバイルが預言者ムハンマドより伝えて曰く、「2人の花嫁〔たるアスカラーンとガザ〕に住む者に祝福あれ」

またそこにはベツレヘムがある。それについての言葉はすでに出た。

またそこにはヒムスがある。カターダ曰く、「そこには 500 人の教友が居留していた」そこには蛇やサソリが入ってこないとも言われている。そこには、ハーリド・ブン・[55. a] アルワリードとカアブ・アルアフバールの墓がある。

またそこにはキンナスリーンがある。ブハーリーが彼の『歴史 *Tārikh*』の中で、ジャリール・ブン・アブド・アッラーより伝えた。預言者一神よ彼に祝福と平安を与え給え—は言った。「〔神は〕啓示を下して言われた。『これらの 3 つに私は下りてきた。すなわち汝のヒジュラの館であるメディナ、あるいはバハレーン、あるいはキンナスリーンに』」

またシリアにはアンティオキアがある。そこにはハビーブ・ナッジャール Ḥabīb al-Najjār の墓がある。イスラエル 12 部族のヨセフは、死に際にその妻に言った。「私が死んだら、お前はアンティオキアに行きなさい。そこがお前の墓となるように」

実際シリアの地のほとんどには、預言者たちや教友たちの墓があるのである。預言者たちについて言えば、カアブ・アルアフバール曰く、「タルスースには、預言者たちの墓が 1000 ある。マシーサ *al-Maṣīṣa* には 5 つが、シリアの海岸地域にあるスグール *al-Thughūr* には、預言者たちの墓が 1000 ある。アンティオキアには、ハビーブ・ナッジャールの墓がある。ヒムスには 30 の墓が、ダマスカスには 500 の墓が、ヨルダンの地にはそれと同数、パレスチナにもそれと同数ある。バイト・アルマクデイスには 1000 の墓が、アリーシュには 10 がある。またモーセの墓はダマスカスにある」[モーセの墓のある場所について]『親しき友の贈り物 *Ithāf al-Akhiṣṣā'*』の著者（ミンハージー）は、「多くの人々がそれには反対している。モーセ—彼に平安あれ—の墓は、ガウルにあるイエリコ付近にある」と言っている<sup>36</sup>。

教友たちについても多数がいた。彼らの中には、ビラール・ブン・ラッバーフ、アブー・ア

---

<sup>36</sup> IA ii, 168.

ッダルダー、ワースィラ・ブン・アルアスカウ、ファダーラ・ブン・ウバイド Faḍāla b. 'Ubayd、ウサーマ・ブン・ザイド、ハフサ・ビント・ウマル Ḥafṣa bint 'Umar、その他多くの名前や墓〔の場所〕が知られていない人々がいる。アシュアス・ブン・スライマーン al-Ash'ath b. Sulaymān 曰く、「シリアには、預言者一神よ彼に祝福と平安を与え給えーを見た 1 万の目がある」

『親しき友の贈り物 *Ithāf al-Akhiṣṣā'*』と『栄光の喜び *al-Uns al-Jalīl*』からの要約は以上である。万世の主たる神に称賛あれ。

私は言う。シリアに埋葬されている人々の中には、我らがいと高き父祖たるサアド・ブン・ウバーダ・アンサーリー・ハズラジーがいる。我々はこの要約〔の書〕を、彼と彼の徳の話、アンサールの美德の一部の話で終えよう。

私は次のように言う。信徒の長はかのハディースの中で次のように言った。シハーブ〔・アッディーン〕・アフマド・ブン・ハジャル・アスカラーニー Shihāb al-Dīn Aḥmad b. Ḥajar al-'Asqalānī が、『教友方に関する知識の的 *al-Iṣāba fī Ma'rifat al-Ṣaḥāba*』の書の中で次のように言っている。〔彼は〕サアド・ブン・ウバーダ・ブン・ドゥライム・[55. b] ブン・ハーリサ・ブン・ハラーム・ブン・フザイマ・ブン・サアラバ・ブン・タリーフ・ブン・アルハズラジュ・ブン・サーイダ・ブン・カアブ・ブン・アルハズラジュ・アンサーリー Sa'd b. 'Ubāda b. Dulaym b. Ḥāritha b. Ḥarām b. Khzayma b. Tha'laba b. Ṭarīf b. al-Khazraj b. Sā'ida b. Ka'b b. al-Khazraj al-Anṣārī であり、ハズラジュの長である。彼のクンヤはアブー・サービト Abū Thābit、あるいはアブー・カイス Abū Qays であった。彼の母親はウマラ・ビント・マスウード 'Umara bint Mas'ūd であり、彼女も預言者ムハンマドとの面識があった。彼女は預言者一神よ彼に祝福と平安を与え給えーの時代の 5 年に没した。彼はアカバの誓いを経験している。また彼は貴顕たちのひとりであった。彼がバドルの戦いを経験しているかどうかについては議論があるが、ブハーリーはあるとしている。イブン・サアド曰く、「彼は出撃の準備をして、待ち望んで立っていた。すると預言者一神よ彼に祝福と平安を与え給えーは、『彼はそれを熱望しているな』と言った」

イブン・サアド曰く、「彼はアラビア語を書き、また泳ぎと弓を射ることがうまかったので、『完全なる者 *al-Kāmil*』と言われた。彼と彼の子供たち、彼の祖父と父親は、寛大さをもって知られていた。彼らは砦をもっていて、その上からは毎日、『肉と脂が欲しい者は、ドゥライム・ブン・ハーリサの砦に来たれ』と呼びかけられていた。サアドの鉢は預言者一神よ彼に祝福と平安を与え給えーとともに、彼の妻たちの家で回された。ヤクサム Yaqsam がイブン・アッバースより伝えて曰く、「神の使徒の旗はあらゆる祖国にあり、ムジャーヒド戦士たちの旗はアリーとともに、アンサールたちの旗はサアド・ブン・ウバーダとともにある」

アフマドが、ムハンマド・ブン・アブド・アッラフマーン・ブン・アスアド・ブン・ザラー

ラ **Muḥammad b. 'Abd al-Raḥmān b. As'ad Zarāra**、さらにカイス・ブン・サアド **Qays b. Sa'd** より次のように伝えている。「預言者一神よ彼に祝福と平安を与え給えーが、我々の住まいに訪れて言った。『あなた方に平安と、神の恩寵のあらんことを』…」以下のハディース。その中には次のようにある「そして彼は両手を掲げて、『おお神よ、あなたの祝福と恩寵を、サアド・ブン・ウバーダの一族に与え給え』と行った」

アブー・ヤアラーがジャービルのハディースより伝えて曰く、「神の使徒一神よ彼に祝福と平安を与え給えーは言った。『神はアンサールに祝福を与え給うた。とりわけアブド・アッラー・ブン・アムル・ブン・ハラームとサアド・ブン・ウバーダに』」

イブン・アビー・アッドウンヤー曰く、「スッフアの民 **Ahl al-Ṣuffa**(家を持たない貧しい人々)は夕方になると、ある人はもうひとりのひとを、またある人は 2 人を、またある人はもっと多くの人々を連れてやってきたが、サアド・ブン・ウバーダは 80 人の人々を連れてやってきた」

ダーラクタニー **al-Dāraqṭanī** が『寛大なる人々 **al-Askhayā**』の書の中で、ヒシャーム・ブン・ウルワ **Hishām b. 'Urwa**、さらに彼の父より次のように伝えている。「サアドの呼び役が砦の上より、『肉と脂が欲しい者は、サアドの砦に来たれ』と呼びかけていた。[56. a] そのときサアドは言った。『おお神よ、我に栄光を与え給え。おお神よ、私を正してくれるものはほとんどなく、私はそれにすら値しないのです』」

ムハンマド・ブン・スィーリーン曰く、「サアド・ブン・ウバーダは、每晚 80 人の家のない人々とともに夕食を取っていた。彼がアブー・バクルにバイアを行わなかった話は有名である。彼はシリアに行き、15 年にハウラーンで没した。16 年であるとも言われている」

彼曰く、「彼の息子はカイスとサイードとイスハーク、彼の孫はシャルハビール・ブン・サイード **Sharḥabīl b. Sa'id** である」

彼曰く、「教友たちの中にはまた、イブン・アッパース、アブー・ウマーマ・ブン・サフルがいた。またハサン・ブン・イーサー・ブン・ファーイドも彼に書簡を送っている」

アブー・ダーワードが、カイス・ブン・サアドのハディースより次のように伝えている。「預言者一神よ彼に祝福と平安を与え給えーは言った。『おお神よ、あなたの祝福と恩寵を、サアド・ブン・ウバーダの一族に与え給え』」彼はあるハディースの中でこれを取り上げている。彼の墓は、グータにあるダマスカスの村、ムニーハにあるとも言われている。

サイード・ブン・アブド・アルアズィーズ曰く、「彼はブスラーで死んだ。そこはシリアで最初に征服された町であった」

『接近の果て **Nihāyat al-Taqrīb**』では、サアドの血統を述べた後に、彼は次のように言っている。サアド・ブン・ウバーダとムンズィル・ブン・ウムラ **al-Mundhir b. 'Umra** とアブー・ダッジャーナ **Abū Dajjāna** はイスラームに入信したとき、バヌー・サーイダ **Banū Ṣā'ida** の偶像を打ち壊した。サアドは 70 人のアンサールとともに、アカバの戦いを経験した。彼らの話は、全部で次のようなものである。彼は 12 人の首長たちのうちのひとりであった。彼はアン

サールをバドルの戦いに出陣するように推進し、はりきって準備を進めていた。神の使徒一神よ彼に祝福と平安を与え給えーは彼のために彼の弓を射て、またそれを引き抜いた。彼が個人で塹壕の戦いを経験しているかどうかは定かではないが、彼はヒジュラ暦 5 年ラビーウ・アルアッワル月のドゥーマト・アルジャンダル遠征では、様々の場面を神の使徒一神よ彼に祝福と平安を与え給えーと共にした<sup>37</sup>。サアド・ブン・ウバーダもその遠征に参加していた。神の使徒一神よ彼に祝福と平安を与え給えーは〔メディナに〕やってくると、彼女（サアドの母親）の墓に行って、彼女のために祝福を請うた。

神の使徒一神よ彼に祝福と平安を与え給えーは、アブー・スフヤーンの接近を耳にしたとき、「我々に助言してくれ」と言った。「お望みのままになさって下さい、神の使徒よ。あなたが我々に、それを海に放り込めと言われるのであれば、我々はそうします。あなたが我々に、その肝臓を剣の鞘で殴れと言われるのであれば、我々はそのようにいたします」〔この他にも〕彼の優れた行いや美德は実に多くある。

[56. b] イブン・アビー・ウルーバ *Ibn Abī 'Urūba* 曰く、「私はムハンマド・ブン・スィーリーンより、次のような話を聞いた。サアド・ブン・ウバーダが立って小便をしていた。彼は戻ってくると、彼の仲間たちに『私はトカゲを見つけたのだ』と言って死んだ」

ウマル・ブン・アブド・アルバッル曰く、「サアドはアブー・バクルにバイアを行うことなく、メディナを出た。彼はそこに戻ってくることなく、カリフ＝ウマルの治世の 2 年半目に、シリアの地にあるハウラーンで没した。それは 15 年のことであった」

それは 14 年のことであったとも言われている。また、サアド・ブン・ウバーダは、アブー・バクルのカリフ在位中の 11 年に死んだとも言われている。いずれにせよ人々は死体を見つけ、彼の体は運ばれた。彼らは彼の死に気づかず、彼らの見知らぬ者が「我々はハズラジュの長サアド・ブン・ウバーダを殺した。我々は 2 本の矢で彼を射た」と言っているのを聞いた。彼はジンに殺されたのだとも言われている。そうしたことは、両『サヒーフ』の中では言われていないが、〔6 書のうち残りの〕4 書では伝えている。かいつまんで言うと以上である。

学識ある者シハーブ〔・アッディーン〕アフマド・ブン・ハジャル・ハイサミー *Shihāb al-Dīn Aḥmad b. Ḥajar al-Haythamī* による『稻妻 *al-Ṣawā'iq*』では、次のようにある。「アフマドは次のように引用している。アブー・バクルがサキーフアの日 *Yawm al-Saqīfa*<sup>38</sup> にフトバを行ったとき、彼はアンサールに関することをなにひとつ取り落とすことはなく、かつて神の使徒一神よ彼に祝福と平安を与え給えーがアンサールの女性たちの間で話したことを話した。アブー・バクルは言った。『あなた方はかつて神の使徒が、「人々が谷にはまり込み、アンサールも

<sup>37</sup> B 写本では、この部分は以下のような内容になっている。「彼の母親であるウマラはバイアを行った女性たちのひとりであった。彼女はメディナにて、預言者一神よ彼に祝福と平安を与え給えーがヒジュラ暦 5 年のラビーウ・アルアッワル月のドゥーマト・アルジャンダル遠征で不在の際に亡くなった」

<sup>38</sup> メディナにある「サキーフアト・バニー・サーイダ *Saqīfat Banī Sā'ida*」と呼ばれる建物の影になった場所で、サアド・ブン・ウバーダの祖先のサーイダ・ブン・カアブ・ブン・アルハズラジュの一族に由来している。ここでアブー・バクルに対するバイアが行われた [MB iii, 228-229]。



谷にはまり込んだとしたら、私はアンサーの谷にはまるであろう」と言ったことを知っているだろう。あなたも知っているだろう、サアドよ、神の使徒一神よ彼に祝福と平安を与え給え一はかつて、「お前は、この問題を治める者たちであるクライシュのもとに座す者である。敬虔なる人々は彼らのうちの敬虔なる者に従い、嘘つきたちは彼らのうちの嘘つきに従った」と言われたことを』するとサアドは、『私は、我々がワズィールであり、あなた方がアミールであるということ信じます』と言った。ここからは、イブン・アブド・アルバッル Ibn ‘Abd al-Barr が、『サアドはアブー・バクルにバイアすることを拒んだまま、神に会った』と語ったことが脆弱なものであるということがわかる」以上。

ムスリムが彼の『サヒーフ』の中で、アブー・フライラより伝えられたものを取り上げている。「サアド・ブン・ウバーダが、『もし私の妻が他の男と一緒にいるところを見つけたなら、その男が4人の証人を連れて来るまでは、私は彼に何もしてはいけないということなのでしょうか？』神の使徒一神よ彼に祝福と平安を与え給え一は、『その通りだ』と言った。するとサアドは言った。『そんなことはありえない。正義を遣わし給うた方にかけて、もし私がそんなことになったなら、その前に私は剣を持ってその男のもとに押し掛けるでしょう』神の使徒一神よ彼に祝福と平安を与え給え一は言った。『お前たちはお前たちの長が言ったことを聞いたか。彼は嫉妬深い者である。しかし私は彼以上に嫉妬深く、神は私よりも嫉妬深いのだ』

また彼は、ムギーラ・ブン・シュウバより伝えられたものを取り上げている。「サアド・ブン・ウバーダは、『もし私の妻が他の男と一緒にいるところを見つけたなら、私はその男が鎧を着けていなかろうとも、剣で突き刺してやるところだ』と言った。神の使徒一神よ彼に祝福と平安を与え給え一は、それを耳にすると聞いた。『お前たちはサアドの嫉妬に驚いたか。しかししかし私は彼以上に嫉妬深く、神は私よりも嫉妬深いのだ。神の嫉妬を重く見る者は、いかなる不貞も犯しはすまい。神よりも嫉妬深い者はおらず、神よりも称賛するにふさわしい者はいない。そうしたことを重く見る者には、良き知らせや警告を伝えてくれる使徒たちが遣わされるだろう。まことに神よりも称賛にふさわしい者はいない。そうしたことを重く見る者には、神が樂園を約束して下さるだろう』

[アブー・ハーミド・ガザーリー Abū Hāmid al-Ghazāri による] 『再興 *al-Iḥyā’*』の中には、ガザーリーがジャービルより伝えたものがある。「神の使徒一神よ彼に祝福と平安を与え給え一は分遣隊を遣わし、カイス・ブン・サアド・ブン・ウバーダが彼らの司令官となるように命じた。彼らは懸命に戦い、カイスは彼らのために9頭の騎乗用のラクダを屠った。彼らはこのことを神の使徒一神よ彼に祝福と平安を与え給え一に話した。すると神の使徒一神よ彼に祝福と平安を与え給え一は彼らに、『それはこの家の民の持つ寛大さである』と言った」

私は次のように言う。我々が学識あるシャイフ、アブド・アッラー・ブン・サーリム・バズリー ‘Abd Allāh b. Sālim al-Baṣrī 曰く、「カイスは体毛の薄い人であった。そこで彼の家族は、『我々の財産の半分を使っても、彼のために顎鬚を手に入れたいものだ』と言った。サアドは

処女としか結婚しなかった。彼が妻を離婚したとき、彼の嫉妬深さと高貴さのゆえに、誰もあえて彼の後で彼女と再婚しようとはしなかった。

シャーフィイー派のイマームであったムハンマド・ブン・イドリース様による『貴重なる勝利 *al-Intṣār al-Nafis*』の書の中にも、アンサールの美德について少し書かれている。

両シャイフ、またその他の人々は次のようなことを取り上げている。「アンサールを愛するのは信徒のみであり、彼らを嫌うのは偽善者のみである。彼らを愛する者を神は愛し、彼らを嫌う者を神は嫌う」

この話では、次のようなことが真正である。アンサールのこれらの人々を愛することは信仰であり、彼らを嫌うことは偽善である。彼らを愛する者を神は愛し、彼らを嫌う者を神は嫌う。人々が上着であるならば、アンサールは下着である。人々が山道に踏み入り、アンサールも山道に踏み入ったとすれば、私はアンサールの山道に踏み入るであろう。彼らの良き行いは数えることもできず、彼らに関する言い伝えはまとめることもできない。そしてこれは預言者一神よ彼に祝福と平安を与え給え—の時代のアンサールに限られたことではないのである。しかしアンサールの子孫たちの中でも彼らほど、とりわけメッカにいた人々ほど、その存在に美德があった者はいない。

アフマドがアナスより、次のように伝えている。[57. b]「アンサールが集まって、私に言った。『我々はいつこれらの井戸の水を飲めるのだろう。預言者一神よ彼に祝福と平安を与え給え—のもとに行こうか』そこで我々は彼に、我々のために神に祈願してくれるように頼んだ。そうすれば神は我々のために、この山々から泉を掘り出して下さるだろうから。彼らは集団で彼一神よ彼に祝福と平安を与え給え—のもとに出かけて行った。彼は『ようこそ。あなた方は我々のもとに、何かご要望を持ち込まれたのですね』と言った。彼らは『ええ、神かけて、神の使徒よ』と言った。彼は『もしあなた方が私に、私があなた方にしてあげられること以外のことをを求めたとしても、私は、神が私にお与え下さるものの他は、一切神に求めませんよ』そこで彼らは互いに近づき、『お前たちは現世を望んでいる、来世を求めよう』そして彼らはともに、『神の使徒よ、神に我々を赦して下さるよう祈願して下さい』と言った。彼は言った。『おお神よ、アンサールとアンサールの子供たち、アンサールの孫たちを赦し給え』すると彼らは、『我々以外の我々の子孫たち〔皆のために〕』と言った。彼一神よ彼に祝福と平安を与え給え—は、『あなた方以外のあなた方の子孫たちにも』と言った。彼らはまた、『神の使徒よ、我々のマウラーにも』と言った。彼は『アンサールのマウラーにも』と言った。このことは、復活の日に至るまで、彼らの子孫たちのすべてに及んでいる」

こうしたことは、タバラーニーが『大全 *al-Kabīr*』の中で伝えた、ムアーズ・ブン・リファア *Mu'ādh b. Rifā'a*、さらに彼の父から伝えられたハディースでも確かめられている。「預言者一神よ彼に祝福と平安を与え給え—は言った。『おお神よ、アンサールとアンサールの子供たち、彼らの子孫たちと隣人たちを赦し給え』」

またその中には、イブン・アッバースが預言者ムハンマドより伝えたハディースもある。「神と終末の日を信じる者は、アンサールを嫌ってはならない」

イブン・ジャッバーン **Ibn Jabbān** [の書] の中には次のようにある。「[神の使徒曰く]『お神よ、アンサールと彼らの子孫たち、彼らの子孫たちの子孫たち、アンサールのマウラーと隣人たちを赦し給え』ゆえにこの祈願は、それらの中に含まれている〔すべての〕子孫たち、また例え娘側の子孫であっても、復活の日に至るまで及んでいるのである。至高なる方の〈彼（アブラハム）の子孫としてはダビデ…〉（Q6:84）から、彼の民とイエスに至るまでのお言葉もこれを補強している。というのもイエスは、女主人マリアの息子という点で彼の子孫であって、彼は娘側の子孫なのである。〔またこの章句のなかには〕ノアの時代の子供も、イエスの時代の子供も〔含まれている〕。ゆえにこの中には、彼一神よ彼に祝福と平安を与え給えーの祈願には、復活の日に至るまでのアンサールの子孫たち、また彼らの子孫たち〔のすべて〕が含まれていることの証なのである。そして彼の祈願は、『あらゆる預言者〔の祈願〕は聞き届けられる』という預言者ムハンマドより伝えられる伝承のゆえに、聞き届けられ反駁できないものなのである」以上。

我々をこの偉大なる契約の中に引き入れ、高貴なる預言者の祈願によって我々を嘉し、彼の清廉なる血筋と輝かしき性質を我々に贈り給うた神に称賛あれ。神は我々のために、そうしたことを期限に遅れることなく宝物となし給うた。まことに神は寛大にして恩寵篤き方、お心広き方である。まことにこれこそが、我々がこの場において最後に望むことである。神は称賛と祝福を持って、始めと終わりとを良きものとなし給うであろう。神が我々に来世での報いを与え給わんことを。神はなんとすばらしき主人であることか。いと高く偉大なる神によらずして、いかなる力もなし。

本書の筆写は、1161年の神聖なるムハッラム月13日の祝福されし月曜日に、卑しき者フサイン・イラーキー **Ḥusayn al-‘Irāqī** の手によって完了した。神が彼を赦し給わんことを。

#### 註 14 (B 写本 38. a–39. b)

[B: 38. a] 風が彼の白髪を右に左に弄っていた。するとスールークが私に、『この方が神の友アブラハム一神よ彼に祝福と平安を与え給えーです』と言った。私は顔を地に伏せ、至高なる神に私が抱いていた祈願を行った。それから我々が進むと、そこには小さな壇があり、その上には、肌が粗く髭の汚れた人がいた。その人の両肩の下は、緑色の服で覆われていた。するとスールークが私に、『こちらが預言者ヤコブ一神よ彼に祝福と平安を与え給えーです』と言った。それから我々は左側にあるハラムに目を向けた」

「アブー・バクルは、その話を最後まで語ると誓った。私は、彼が私に語っている間彼の側において、そしてアブラハム―彼に平安あれ―のモスクのほうに出て行った。モスクに着くと、私はスウルークがどこにいるか尋ねた。するとある人が私に、『彼は 1 時間でやってきますよ』と言った。彼がやってくると、私は彼のもとに立って行き、彼の側に座って、彼と少し話をした。彼は私から聞いた話を、知らなかったというような目で私を見た。[B: 38. b] 私は、あなたはすでに罪や過ちから救われているのだというふうに彼にやさしく頷くと、彼に言った。『アブー・バクル・アスカフィーは私のおじですが、そのとき彼は私と打ち解けて話をしました』さらに私は彼に言った。『スウルークよ、神にかけて、あなた方がハラムの方に向いたとき、そこでなにかあったのですか？』彼は、『アブー・バクルはあなたに話さなかったのですか？』と言ったが、私は彼に、『私はそのことをあなたからも聞きたいのです』と言った。すると彼は言った。『我々はハラムのほうから、「禁じられた場所から離れよ。神が汝らを憐れみ給わんことを」という大きな声を聞き、我々は気を失いました。しばらくしてから我々は目覚め、立ち上がりました。我々はもう生きてはいられません。皆我々の生を諦めています』そのシャイフは私に言った。「アブー・バクル・アスカフィーは、私に話をした後数日間生き、〔その後〕死んだ。スウルークも同様であった。至高なる神が彼ら 2 人を憐れみ給わんことを」

ハサン・ブン・アブド・アルワーヒド・ブン・リズク・ラーズィー **Ḥasan b. ‘Abd al-Wāḥid b. Rizq al-Razī** より、次のように伝えられている。「パレスチナのカーディーであったアブー・ザルアがアブラハム―彼に平安あれ―のモスクにやってきた。そこで私は彼に挨拶しに行った。彼はサラ―彼女に平安あれ―の墓の側に、礼拝の時間に座っていた。するとそこにひとりのシャイフが入って来たので、アブー・ザルアは彼を呼んで言った。『シャイフよ、これらのうちのどれがアブラハムの墓なのですか？』するとそのシャイフは、彼にアブラハム―彼に平安あれ―の墓を指し示して去っていった。するとそこに一人の若者がやってきた。そこでアブー・ザルアは彼を呼び、彼に同様のことを言った。するとその若者は彼に〔アブラハムの墓を〕指し示した。アブー・ザルアは言った。『私はこれこそがアブラハムの墓であると証言する。これには疑いがない』後代の者たちは先人たちから伝えているのである。アナス・ブン・マーリク―至高なる神よ彼を嘉したまえ―が、『後代の者たちは先人たちから、より真正なハディースを伝えている』と言っているように」以上。

イシュマエル―彼に平安あれ―の墓は、メッカの石の中に、彼の母ハガルの側にある。以上。

モスクの中庭は空の下に〔屋根なしで〕、神の友とヤコブ―彼ら 2 人に平安あれ―のマカームの間にある。また誠実なる主人（ヨセフ）―彼に平安あれ―のマカームは、ソロモンの城壁からそこに繋がっている。

その城壁内にあるモスクの大きさは、南北の長さが、ミンバルの側にあるミフラーブの中央から我々が主人ヤコブ―彼に平安あれ―の墓廟までがおよそ 80 ズィラーウ、東西の幅は、入口の門から主人たるヨセフ―彼に平安あれ―の墓廟の網までが、[B: 39. a] およそ 41 と半ズ

イラーウである。また城壁の屋根はどの方向からも 3 ズイラーウであり、地面からの建物の高さは 16 ズイラーウである。それぞれのズイラーウはズイラーウ・アルアマル *dhirā' al-'amal* である。これはソロモンの建てたものであり、ビザンツのものではない。

城壁には 2 つのミナレットがある。そのうちのひとつは南東の角にあり、2 つ目は北西の角にある。ソロモンの城壁の外の東側には、ジャーウィリーヤ *al-Jāwiliya* と名付けられたモスクがある。そこは 730 年に神聖なる両聖地の知事であったアブー・サイード・ジャーウィリー *Abū Sa'id al-Jāwili* にちなんだものである。そのモスクは驚嘆すべきもののひとつで、ジューマト・アルジャーウィリー山 *Jabal Jūmat al-Jāwili* から切り出されている。そのモスクの上には屋根とドームが建てられており、この上なく美しいものである。このモスクとソロモンの城壁との間には、アーチつきの真っ直ぐに伸びた回廊があり、そこは驚嘆すべきもののひとつであり威厳と荘重さを備えている。そこは 12 の柱の上に建っており、その床にも壁にも柱にも大理石が貼られている。その南北の長さは 43 ズイラーウ、東西の幅は 25 ズイラーウである。

ヘブロンにあるマドラサやザーウィヤについて言えば、その最も美しいものは、クルド人地区にあるザーウィヤト・アッシャイフ・ウマル・アルムジャッラド *Zāwiyat al-Shaykh 'Umar al-Mujarrad* である。マドラサ・ヤクフリーヤ *al-Madrassa al-Yaqḥuriya* は、モスクの北門の側にある。ザーウィヤト・アルマガーリバ *Zāwiyat al-Maghārība* は宦官の泉 *'Ayn al-Ṭawāshī* の隣にある。城塞はビザンツ人の要塞のひとつであり、モスクの西側に接している。マリク・ナーシル・ハサン *al-Malik al-Nāṣir Ḥasan* が、そこをマドラサとしてワクフにした。そこには誠実なる主人（ヨハネ）の墓廟があるが、今日では町の人々の住まいとなっている。ザーウィヤト・アッシャイフ・アリー・アルバカー *Zāwiyat al-Shaykh 'Alī al-Bakā'* は彼の地区にある。ザーウィヤト・アルカワースィミーヤ *Zāwiyat al-Qawāsīmīya* は、そこに埋葬されたシャイフ・アフマド・カースィミー・ジャーニーディー *al-Shaykh Aḥmad al-Qāsimī al-Janidī* にちなんでいる。イブン・ウスマーン・モスク *Masjid Ibn 'Uthmān* には、ミナレットとモスク、またシャイフ・ユースフ・ナッジャール *al-Shaykh Yūsuf al-Najjār* のマシュハドがある。マドラサ・ファフリーヤ *al-Madsara al-Fakhriya* には、捨てられた女性たちが訪れている。リバート・マンスーリー *al-Ribāṭ al-Manṣūrī* は城塞の向かいにある。

〔その他にも〕 ザーウィヤト・アッシャイフ・イブラーヒーム・アルマズズィー *Zāwiyat al-Shaykh Ibrāhīm al-Mazzī*、ザーウィヤト・アッシャイフ・アブド・アッラフマーン・アルアズディー *Zāwiyat al-Shaykh 'Abd al-Raḥmān al-Azdi*、ザーウィヤ・[B: 39. b] ビスターミーヤ、ザーウィヤ・サマーキーヤ *al-Zāwiya al-Samāqiya*、シャイフ・バハー・アッディーン・ワファーイー・モスク *Masjid al-Shaykh Bahā' al-Dīn al-Wafāyī*、ザーウィヤト・アビー・ウカーカ *Zāwiyat Abī 'Uqāqa*、リバート・アッタワーシー *Ribāṭ al-Ṭawāshī*、ザーウィヤト・シャイフーン *Zāwiyat Shaykhūn*、リバート・マッキー *Ribāṭ Makkī*、ザーウィヤト・アッラーイー *Zāwiyat al-Rā'i*、ザーウィヤト・アッシャイフ・アリー・アルアドハミー *Zāwiyat al-Shaykh*

‘Alī al-Adhamī、マスウード・モスク *Masjid Mas‘ūd*、ザーウィヤト・アッシャイフ・アルバイダ *Zāwiyat al-Shaykh al-Bayḍa*、ザーウィヤト・アルマウキィ *Zāwiyat al-Mawqī‘*、ザーウィヤト・アッシャイフ・イブラーヒーム・アルハナフィー *Zāwiyat al-Shaykh Ibrāhīm al-Ḥanafī*、ザーウィヤト・アルハドラミー *Zāwiyat al-Ḥadramī*、ザーウィヤト・アルアアヤド *Zāwiyat al-A‘yaḍ*、ザーウィヤト・アルカーディリーヤ *Zāwiyat al-Qādiriya* —そこにはザーヒドがいる—、アルバイーン・モスク *Masjid al-Arba‘īn* —これは町の西にある山の頂にあり、そこは40人の殉教者たちがいたと言われており、人々によく知られた、参詣の目的地となっている場所である— [がある]。



## 参考文献とその略号

### 1. アラビア語・ペルシア語史料

#### a. FBM

- BN: Ibrāhīm b. al-Firkāh al-Fazārī, *Bā'ith al-Nufūs ilā Ziyārat al-Quds al-Mahrūs*, eds. Aḥmad 'Abd al-Bāsiṭ Ḥāmid and Aḥmad 'Abd al-Sitār 'Abd al-Ḥalīm, Cairo, 2009 (2<sup>nd</sup> ed.).
- FBM-D: Muḥammad b. 'Abd al-Wāhid al-Maqdisī, Ḍiyā' al-Dīn, *Faḍā'il al-Bayt al-Maqdis*, ed. Muḥammad Muṭī' al-Ḥāfiẓ, Damascus, 1988.
- FBM-IM: Musharraf b. al-Murajjā al-Maqdisī, *Faḍā'il al-Bayt al-Muqaddas wa al-Khalīl wa Faḍā'il al-Shām*, ed. Amīn Naṣr al-Dīn al-Azharī, Beirut, 2002.
- FBM-K: Muḥammad b. Muḥammad al-Kanjī, *Faḍā'il Bayt al-Maqdis wa Faḍā'il al-Shām*, Universität Tübingen, MS. Wetzstein 62.
- FBM-M: Ibrāhīm b. Yaḥyā al-Miknāsī al-Tilimsānī, *Faḍā'il Bayt al-Maqdis wa Faḍā'il al-Shām*, Universität Tübingen, MS. Wetzstein 26.
- FBM-W: Muḥammad b. Aḥmad al-Wāsiṭī, *Faḍā'il al-Bayt al-Muqaddas*, ed. Issac Hasson, Jerusalem, 1979.
- FQ: 'Abd al-Raḥmān b. al-Jawzī, *Faḍā'il al-Quds*, ed. Jibrā'il Sulaymān Jabbūr, Beirut, 1980 (2<sup>nd</sup> ed.).
- HI: Muḥammad b. Muḥammad al-Tāfilātī al-Azharī al-Khalwatī, *Ḥusn al-Istiḡā' li-mā Ṣaḥḥa wa Thabata fī al-Masjid al-Aqṣā*, Princeton University Library, MS. Islamic Manuscripts, Garrett 515Y.
- IA: Muḥammad b. Aḥmad al-Minhājī al-Suyūṭī, *Ithāf al-Akhiṣṣā' bi-Faḍā'il al-Masjid al-Aqṣā*, ed. Aḥmad Ramaḍān Aḥmad, 2 vols., Cairo, 1982.
- LUJ(B): Muṣṭafā b. As'ad al-Luqaymī al-Dimyāṭī, *Laṭā'if Uns al-Jalīl fī Taḥā'if al-Quds wa al-Khalīl*, Staatsbibliothek zu Berlin, Wetzstein II 1104.
- LUJ(C): Muṣṭafā b. As'ad al-Luqaymī al-Dimyāṭī, *Laṭā'if Uns al-Jalīl fī Taḥā'if al-Quds wa al-Khalīl*, Cambridge University Library, Qq. 127.
- LUJ(H): Muṣṭafā b. As'ad al-Luqaymī al-Dimyāṭī, *Laṭā'if Uns al-Jalīl fī Taḥā'if al-Quds wa al-Khalīl*, ed. Khālid 'Abd al-Karīm al-Hamsharī, Nablus, 2000.
- MG-M: Aḥmad b. Muḥammad al-Maqdisī, Shihāb al-Dīn, *Muthīr al-Gharām ilā Ziyārat al-Quds wa al-Shām*, ed. Aḥmad al-Khaṭīmī, Beirut, 1994.
- MM: 'Abd al-Raḥīm b. 'Alī al-Qurashī al-Isnā'ī, *Miftāḥ al-Maqāṣid wa Miṣbāḥ al-Marāṣid fī Ziyārat Bayt al-Maqdis*, Dār al-Kutub al-Miṣriya, MS. Majāmī' 514.
- Mustaqṣā: Muḥammad b. Muḥammad al-'Alamī al-Maqdisī, *al-Mustaqṣā fī Faḍā'il al-Masjid*



*al-Aqsā*, Maktabat 'Ārif Hikmat al-Sharīf, MS. 900/205.

Risāla: Muḥammad b. Muḥammad al-Khalilī, *Risāra fī Ta'mīr 'Ayn Bayt al-Maqdis*, Staatsbibliothek zu Berlin, Petermann I 344.

RM(B): 'Abd al-Wahhāb b. 'Alī al-Ḥusaynī al-Dimashqī, *al-Rawḍ al-Mugharras fī Faḍā'il Bayt al-Maqdis*, Staatsbibliothek zu Berlin, Wetzstein II 1816.

RM(M): 'Abd al-Wahhāb b. 'Alī al-Ḥusaynī al-Dimashqī, *al-Rawḍ al-Mugharras fī Faḍā'il Bayt al-Maqdis*, Maktabat 'Ārif Hikmat al-Shārīf, MS. 900/114.

TU: 'Abd Allāh b. Hishām al-Anṣārī, *Taḥṣīl al-Uns li-Zā'ir al-Quds*, Ma'had al-Makhṭūṭāt al-'Arabīya, MS. Tārīkh 144.

UJ: 'Abd al-Raḥmān b. Muḥammad al-'Ulaymī, Mujīr al-Dīn, *al-Uns al-Jalīl bi-Tārīkh al-Quds wa al-Khalīl*, 2 vols., ed. Maḥmūd 'Alī 'Aṭā Allāh, Nablus, 1999.

#### b. その他のアラビア語・ペルシア語史料

AA: Khalīl b. Aybak al-Ṣafadī, *A'yān al-'Aṣr wa A'wān al-Naṣr*, 3 vols., ed. Faut Sezgin, Frankfurt am Main, 1990.

A'lām: Khayr al-Dīn al-Ziriklī, *al-A'lām*, 8 vols., Beirut, 2007 (17<sup>th</sup> ed.).

AT: Muḥammad b. Aḥmad b. Abī Bakr al-Muqaddasī, *Aḥsan al-Taqaṣīm fī Ma'rifat al-Aqālīm*, ed. M. J. De Goeje, Leiden, 1906 (2<sup>nd</sup> ed.).

DL: Muḥammad b. 'Abd al-Raḥmān al-Sakhāwī, *al-Ḍaw' al-Lāmi' li-Ahl al-Qarn al-Tāsi'*, 12 vols., Beirut, 1996.

Fath: Muḥammad b. Muḥammad al-Iṣfahānī, 'Imād al-Dīn, *al-Fath al-Qussī fī al-Fath al-Qudsī*, ed. Muḥammad Maḥmūd Ṣubḥ, Cairo, 2003.

FS-M: Muḥammad b. Aḥmad b. 'Abd al-Hādī al-Maqdisī, *Faḍā'il al-Shām*, ed. Majdī Fathī al-Sayyid, Tanta, 1988.

FS-R: 'Alī b. Muḥammad al-Raba'ī, *Faḍā'il al-Shām wa Faḍl Dimashq*, ed. Abū 'Abd al-Raḥmān 'Ādil b. Sa'd, Beirut, 2001.

'Ibar: Muḥammad b. Aḥmad al-Dhahabī, *al-'Ibar fī Khabar Man Ghabara*, 5 vols., ed. Ṣalāḥ al-Dīn al-Munjid, Kuwait, 1983 (2<sup>nd</sup> ed.).

IS: Muḥammad b. 'Abd Allāh al-Zarkashī, *I'lām al-Sājīd bi-Aḥkām al-Masājīd*, ed. Abū al-Wafā' Muṣṭafā al-Murāghī, Cairo, 2007 (3<sup>rd</sup> ed.).

Ishārāt: 'Alī b. Abī Bakr al-Harawī, *Ishārāt ilā Ma'rifat al-Ziyārāt*, ed. J. Sourdell-Thomine, Damascus, 1953.

KW: Khalīl b. Aybak al-Ṣafadī, *Kitāb al-Wāfi bi-al-Wafayāt (Das Biographische Lexikon des Ṣalāḥaddīn Ḥalīl Ibn Aibek aṣ-Ṣafadī)*, Bibliotheca Islamica, Bd. 6a-6zd, 29 vols., Beirut,

1962-1997.

- MB: Yāqūt b. ‘Abd Allāh al-Ḥamawī al-Rūmī, *Mu‘jam al-Buldān*, 7 vols., Beirut, 1995.
- MG-T: Ishāq b. Ibrāhīm al-Tadmurī, *Muthīr al-Gharām fī Faḍl al-Khalīl*, Dār al-Kutub al-Miṣriya, Cairo, MS. Tārīkh 1517.
- Mu‘jam: ‘Umar Riḍā Kaḥḥāla, *Mu‘jam al-Mu‘allifīn*, 4 vols., Beirut, 1993.
- Qā‘ida: Aḥmad b. ‘Abd al-Ḥalīm Ibn Taymiya al-Ḥarrānī, *Qā‘ida fī Ziyārat Bayt al-Maqdis*, ed. C. D. Matthews, “A Muslim Iconoclast (Ibn Taymiyyeh) on the "Merits" of Jerusalem and Palestine”, *Journal of the American Oriental Society* 56, 1963, pp. 1-21.
- SA: Muḥammad b. Aḥmad al-Dhababī, *Siyar A‘lām al-Nubalā’*, 25 vols., Beirut, 1981-1988.
- SN: Nāṣir-i Khusraw, *Safarnāmah*, ed. Muḥammad Dabīr Siyāqī, Teheran, 1935.
- Tārīkh: Muḥammad b. Muḥammad al-Khalīlī, *Tārīkh al-Quds wa al-Khalīl*, ed. Muḥammad ‘Adnān al-Bakhīt and Nūfan Rajā’ al-Sawāriya, London, 2004.
- TS: ‘Abd al-Wahhāb b. ‘Alī al-Subkī, *Ṭabaqāt al-Shāfi‘īya al-Kubrā*, 10 vols., ed. ‘Abd al-Qattākh Muḥammad al-Ḥulw and Maḥmūd Muḥammad al-Ṭanāḥī, Giza, 1992 (2<sup>nd</sup>).
- WA: Aḥmad b. Muḥammad b. Khallikān al-Barmakī, *Wafayāt al-A‘yān wa Anbā’ Abnā’ al-Zamān*, 8 vols., Beirut, 1994.

藤本勝次，池田修，梅田輝世（訳注）（1987）ウサーマ・ブヌ・ムンキズ著『回想録』関西大学出版部。

藤本勝次，伴康哉，池田修（訳）（2002）『コーラン I・II』中央公論新社。

森本一夫（監訳），北海道大学ペルシア語史料研究会（訳）（2003）「ナースィレ・フスラウ著『旅行記 (Safarnāmah)』訳注 (2)」『史朋』36, pp. 24-47.

## 2. 先行研究

- Ahlwardt, W., (1887-1899) *Verzeichnis der arabischen Handschriften*, Bd. 1-10, Berlin.
- Anabsi, G., (2008) “Popular Beliefs as Reflected in ‘Merits of Palestine and Syria’ (Faḍā’il al-Shām) Literature: Pilgrimage Ceremonies and Customs in the Mamluk and Ottoman Periods”, *Journal of Islamic Studies*, 19-1, pp. 59-70.
- al-‘Ārif, ‘Ārif, (1961) *Mufaṣṣal fī Tārīkh al-Quds*, Beirut.
- al-‘Asalī, Kāmil Jamīl, (1984) *Makḥṭūṭāt Faḍā’il Bayt al-Maqdis*, Amman.
- al-‘Asalī, Kāmil Jamīl, (1991) *Bayt al-Maqdis fī Kutub al-Riḥlāt*, Amman.
- Ashtor, E., (1981) “Muslim and Christian Literature in Praise of Jerusalem”, L. I. Levine ed., *The Jerusalem Cathedral*, 1, Jerusalem, pp. 187-189.
- Ashtor, E., (1991) “MAKĀYIL”, *Encyclopaedia of Islam*, 2<sup>nd</sup> edition, vol. 6, Leiden.

- Bloom, J. M., (1996) "Jerusalem in Medieval Islamic Literature", N. Rasovsky ed., *City of the Great King: Jerusalem from David to the Present*, Cambridge, pp. 205-217.
- Brockelmann, C., (1943-1949) *Geschichte der Arabischen Litteratur*, 5 vols., Leiden.
- Browne, E. G., (1900) *A Hand-list of the Muhammadan Manuscripts*, Cambridge.
- Busse, H., (1968) "The Sanctity of Jerusalem in Islam", *Judaism: a Quarterly Journal of Jewish Life and Thought*, 17, pp. 441-468.
- Cobb, P. M., (2002) "Virtual Sacrality: Making Muslim Syria Sacred before the Crusades", *Medieval Encounters*, 8, pp. 35-55.
- Duri, Abdel Aziz, (1981) "Bayt al-Maqdis in Islam", *Hamdard Islamicus*, 4-1, pp. 23-35.
- Duri, Abdel Aziz, (1983) *The Rise of Historical Writing among the Arabs*, L. I. Conrad tr., Princeton.
- Elad, A., (1991) "The History and Topography of Jerusalem during the Early Islamic Period: the Historical Value of Faḍā'il al-Quds Literature: a Reconsideration", *Jerusalem Studies in Arabic and Islam*, 14, pp. 41-70.
- Elad, A., (1996) "Pilgrims and Pilgrimage to Hebron (al-Khalīl) during the Early Muslim Period (638?-1099)", B. F. Le Beau & M. Mor eds., *Pilgrims and Travelers to the Holy Land*, Nebraska, pp. 21-62.
- Elad, A., (1999a) "Pilgrims and Pilgrimage to Jerusalem during the Early Muslim Period", L. I. Levine ed., *Jerusalem: Its Sanctity and Centrality to Judaism, Christianity and Islam*, New York, pp. 300-314.
- Elad, A., (1999b) *Medieval Jerusalem and Islamic Worship: Holy Place, Ceremonies, Pilgrimage*, Leiden.
- al-Fāsī, Muḥammad al-'Ābid, (1979-1989) *Fihris Makḥṭūṭāt Khizānat al-Qarawiyīn, Dār al-Bayḍā'*.
- Frenkel, Y., (1996) "Muslim Pilgrimage to Jerusalem in the Mamluk Period", B. F. Le Beau and M. Mor eds., *Pilgrims and Travelers to the Holy Land*, Nebraska, pp. 63-87.
- Frenkel, Y., (1999) "Political and Social Aspects of Islamic Religious Endowments (awqāf): Saladis in Cairo (1169-73) and Jerusalem (1187-93)", *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, 62-1, pp. 1-20.
- Frenkel, Y., (2005) "The Chain of Traditions, or Transmitting Knowledge in Medieval Damascus, Based on Samā'āt Ibn al-'Asākir", U. Vermeulen and J. van Steenberghe eds., *Egypt and Syria in the Fatimid, Ayyubid and Mamluk Eras*, 4, Leuven, pp. 165-184.
- Goitein, S. G., (1966) "The Sanctity of Jerusalem and Palestine in Early Islam", S. D. Goitein ed., *Studies in Islamic History and Institutions*, Leiden, pp. 135-148.

- Grabar, O., (1959) "The Umayyad Dome of the Rock in Jerusalem", *Ars Oriental*, 3, pp. 33-62.
- Grabar, O., (1986) "AL-ḲUDS", *Encyclopaedia of Islam*, 2<sup>nd</sup> edition, vol. 5, Leiden.
- Gruber, E. A., (1975) *Verdienst und Rang: die Faḍā'il als Literarisches und Gesellschaftliches Problem im Islam*, Freiburg im Breisgau.
- Hasson, Izhak, (1981) "Muslim Literature in Praise of Jerusalem: Faḍā'il Bayt al-Maqdis", L. I. Levine ed., *The Jerusalem Cathedra*, 1, Jerusalem, pp. 168-184.
- Hasson, Izhak, (1996) "The Muslim View of Jerusalem: the Qur'ān and Ḥadīth", J. Prower and H. Ben-Shamai eds., *The History of Jerusalem: the Early Muslim Period 638-1099*, Jerusalem, pp. 349-385.
- Hirschler, K., (2012) *The Written Word in the Medieval Arabic Lands*, Edinburgh.
- Horowitz, J. (1960) "‘ABD ALLĀH B. SALĀM", *Encyclopaedia of Islam*, 2<sup>nd</sup> edition, vol. 1, Leiden.
- Ibrāhīm, Maḥmūd, (1985) *Faḍā'il Bayt al-Maqdis fī Makḥṭūṭāt 'Arabiya Qadīma*, Kuwait.
- Juynboll, G. H. A., (1983) *Muslim Tradition*, Cambridge.
- al-Khatib, Abdallah, (2001) "Jerusalem in the Qur'ān", *British Journal of Eastern Studies*, 28-1, pp. 25-53.
- Khoury, R. G., (2002) "WAHB B. MUNABBIH", *Encyclopaedia of Islam*, 2<sup>nd</sup> edition, vol. 11, Leiden.
- al-Kilānī, Shamsuddīn, (2001) "The Muslim Fascination with Jerusalem: the Case of the Sufis", *Islamic Studies*, 40-3/4, pp. 601-619.
- Kister, M., (1981) "A Comment on the Antiquity of Traditions Praising Jerusalem", L. I. Levine ed., *The Jerusalem Cathedra*, 1, Jerusalem, pp. 185-186.
- Korn, L., (2004) "The Structure of Architectural Patronage in Ayyubid Jerusalem", J. Pahlitzsch and L. Korn eds., *Governing the Holy City*, Wisbaden, pp. 71-89.
- Kratchkovski, I., (1963-65) *Tārīkh al-Adab al-Jughrāfī*, 2 vols., Ṣalāḥ al-Dīn 'Uthmān Hāshim tr., Cairo.
- Lazarus-Yafeh, H., (1999) "Jerusalem and Mecca", L. I. Levine ed., *Jerusalem: Its Sanctity and Centrality to Judaism, Christianity and Islam*, New York, pp. 287-299.
- Le Strange, G., (1887) "Description of the Noble Sanctuary at Jerusalem in 1470 A. D. by Kamāl (Shams) ad-Dīn as-Suyūṭī, Extract Re-translated", *Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland, New Series*, 19, pp. 247-305.
- Le Strange, G., (1890) *Palestine under the Moslems*, Cambridge.
- Le Strange, G., (1893) "Palestine According to the Arab Geographers and Travellers", F.

- Sezgin ed., *Text and Studies on the Historical Geography and Topography of Palestine (Collected and Reprinted)*, 1, pp. 137-145.
- Little, D. P., (1995) "Mujir al-Din al-'Ulaymī's Vision of Jerusalem in the Ninth/Fifteenth Century", *Journal of the American Oriental Society*, 115-2, pp. 237-247.
- Livne-Kafri, O., (1991) "A Note on Some Traditions of Faḍā'il al-Quds", *Jerusalem Studies in Arabic and Islam*, 14, pp. 71-83.
- Livne-Kafri, O., (1998) "The Muslim Traditions in Praise of Jerusalem (Faḍā'il al-Quds): Diversity and Complexity", *Annali: Istituto Universitario Orientale*, 58, pp. 165-192.
- Livne-Kafri, O., (1999) "Some Notes on the Muslim Apocalyptic Tradition", *Quaderni di Studi Arabi*, 17, pp. 71-94.
- Livne-Kafri, O., (2001) "Faḍā'il Bayt al-Maqdis ('the Merits of Jerusalem') Two Additional Notes", *Quaderni di Studi Arabi*, 19, pp. 61-70.
- Livne-Kafri, O., (2004) "Christian Attitudes Reflected in the Muslim Literature in Praise of Jerusalem", *Proche-Orient Chrétien*, 54, pp. 347-375.
- Livne-Kafri, O., (2005) "On Muslim Jerusalem in the Period of its Formation", *Liber Annuus*, 55, pp. 203-216.
- Livne-Kafri, O., (2006) "Jerusalem in Early Islam: the Eschatological Aspect", *Arabica*, 53-3, pp. 382-403.
- Livne-Kafri, O., (2007) "Jerusalem: the Navel of the Earth in Muslim Tradition", *Der Islam*, 84-1, pp. 46-72.
- Matthews, C. D., (1935) "The Kitāb Bā'itu-n-Nufūs of Ibnu-Firkāh", *Journal of the Palestine Oriental Studies*, 15, pp. 1-37, repr. 1993 in F. Sezgin ed., *Text and Studies on the Historical Geography and Topography of Palestine (Collected and Reprinted)*, 2, pp. 284-331.
- Matthews, C. D., (1936) "A Muslim Iconoclast (Ibn Taymiyyeh) on the "Merits" of Jerusalem and Palestine", *Journal of the American Oriental Society*, 56, pp. 1-21.
- Matthews, C. D., (1937) "The Mutir al-Gharām of Abu-l-Fidā' of Hebron", *Journal of the Palestine Oriental Studies*, 17, pp. 108-137, repr. 1993 in F. Sezgin ed., *Text and Studies on the Historical Geography and Topography of Palestine (Collected and Reprinted)*, 2, pp. 332-361.
- Meri, J. W., (2002) *The Cult of Saints among Muslims and Jews in Medieval Syria*, New York.
- Meri, J. W., (2004) *A Lonely Wayfarer's Guide to Pilgrimage: 'Alī ibn Abī Bakr al-Harawī's Kitāb al-Ishārāt ilā Ma'rifat al-Ziyārāt*, Princeton.

- Miura, Toru, (1995) "The Şālihiyya Quarter in the Suburbs of Damascus: Its Formation, Structure, and Transformation in the Ayyūbid and Mamlūk Periods", *Bulletin d'Etudes Orientales*, 47, pp. 129-181.
- Mourad, Suleiman Ali, (1996) "A Note on Origin of Faḍā'il Bayt al-Maqdis Compilations", *al-Abḥāth: the Quarterly Journal of the American University*, 44, pp. 31-48.
- Mourad, Suleiman Ali, (2008) "The Symbolism of Jerusalem in Early Islam", T. Mayer and S. A. Mourad eds., *Jerusalem: Idea and Reality*, New York, pp. 86-102.
- Munt, Harry, (2012) "Writing the History of an Arabian Holy City: Ibn Zabāla and the First Local History of Medina", *Arabica*, 59, pp. 1-34.
- Petersen, A., (2001) "The Tomb of Benjamin and Other Old Testament Figures in Mamluk Palestine", U. Vermeulen and J. Van Steenbergen eds., *Egypt and Syria in the Fatimid, Ayyubid and Mamluk Eras*, 3, Leuven, pp. 359-381.
- Rabbat, N., (1993) "The Dome of the Rock Revisited: Some Remarks on al-Wasiti's Accounts", *Muqarnas*, 10, pp. 66-75.
- Rafeq, Abdul-Karim, (1999) "Relations between the Syrian 'Ulamā' and the Ottoman State in the Eighteenth Century", *Oriente Moderno*, Nuova serie, 18-1, pp. 67-95.
- Rafeq, Abdul-Karim, (2000) "The 'Ulama' of Ottoman Jerusalem (16<sup>th</sup>-18<sup>th</sup> Centuries)", S. Auld and R. Hillenbrand eds., *Ottoman Jerusalem: the Living City: 1517-1917*, vol. 2, London, pp. 45-51.
- Richter-Bernburg, L., (2010) "Between Marvel and Trial: al-Harawī and Ibn Jubayr on Architecture", U. Vermeulen and K. D'hulster eds., *Egypt and Syria in the Fatimid, Ayyubid and Mamluk Eras*, 6, Leuven, pp. 115-145.
- Rosen-Ayalon, M., (1999) "Three Perspectives on Jerusalem: Jewish, Christian, and Muslim Pilgrims in the Twelfth Century", L. I. Levine ed., *Jerusalem: Its Sanctity and Centrality to Judaism, Christianity and Islam*, New York, pp. 326-346.
- Rubin, U., (1999) *Between Bible and Qur'ān*, Princeton.
- Schmitz, M., (1978) "KA'B AL-AḤBĀR", *Encyclopaedia of Islam*, 2<sup>nd</sup> edition, vol. 4, Leiden.
- Sellheim, R., (1965) "FAḌĪLA", *Encyclopaedia of Islam*, 2<sup>nd</sup> edition, vol. 2, Leiden.
- Sharon, M., (1992) "The "Praises of Jerusalem" as a Source for the Early History of Islam", *Bibliotheca Orientalis*, 49, pp. 56-67.
- Sivan, E., (1971) "The Beginnings of the "Faḍā'il al-Quds" Literature", *Der Islam*, 48, pp. 100-110.
- Taylor, C. S., (1998) "Saints, Ziyāra, Qiṣṣa, and the Social Construction of Moral Imagination in Late Medieval Egypt", *Studia Islamica*, 88, pp. 103-120.

Tibawi, Abdul Latif, (1965) “Al-Ghazālī’s Sojourn in Damascus and Jerusalem”, *The Islamic Quarterly*, 9-4, pp. 62-122.

Tibawi, Abdul Latif, (1968) “Jerusalem: Its Place in Islam and Arab History”, *The Islamic Quarterly*, 12, pp. 185-218.

Wensinck, A. J. (1971) “IḤRĀM”, *Encyclopaedia of Islam*, 2<sup>nd</sup> edition, vol. 3, Leiden.

五十嵐大介 (1999) 「マムルーク朝末期のシリア統治政策—財政政策とシリアの支配層の動向を中心に—」『東洋学報』40-4, pp. 030-058.

大稔哲也 (1993) 「エジプト死者の街における聖墓参詣—12-15世紀の参詣慣行と参詣者の意識—」『史学雑誌』102-10, pp. 1-49.

大稔哲也 (1994) 「十二—十五世紀エジプトにおける死者の街」『東洋学報』75-3/4, pp. 161-202.

大稔哲也 (1999) 「オスマン朝期カイロの一参詣写本—シュアイビーの *Kitāb yashtamil ‘alā Dhikr man dufina bi-Miṣr wa-al-Qāhira min al-Muḥaddithin wa-al-Awliyā’ wa-al-Rijāl wa-al-Nisā’* をめぐって—」『史淵』136, pp. 1-23.

大稔哲也 (2001) 「参詣書と死者の街からみたコプトとムスリム」『史淵』138, pp. 1-31.

岡本恵 (2013) 「マムルーク朝におけるファダーイル・バイト・アルマクデイス編纂」『東洋学報』94-4, pp. 01-026.

東長靖 (2013) 『イスラームとスーフイズム』名古屋大学出版会.

三浦徹 (2004) 「中世エルサレムにおける救貧」長谷部史彦編著『中世環地中海圏都市の救貧』慶應義塾大学出版会, pp. 127-181.

吉村武典 (2008) 「マムルーク時代の「ナイル地理書」—史料としてのファダーイルの書について—」『史滴』30, pp. 239-256.